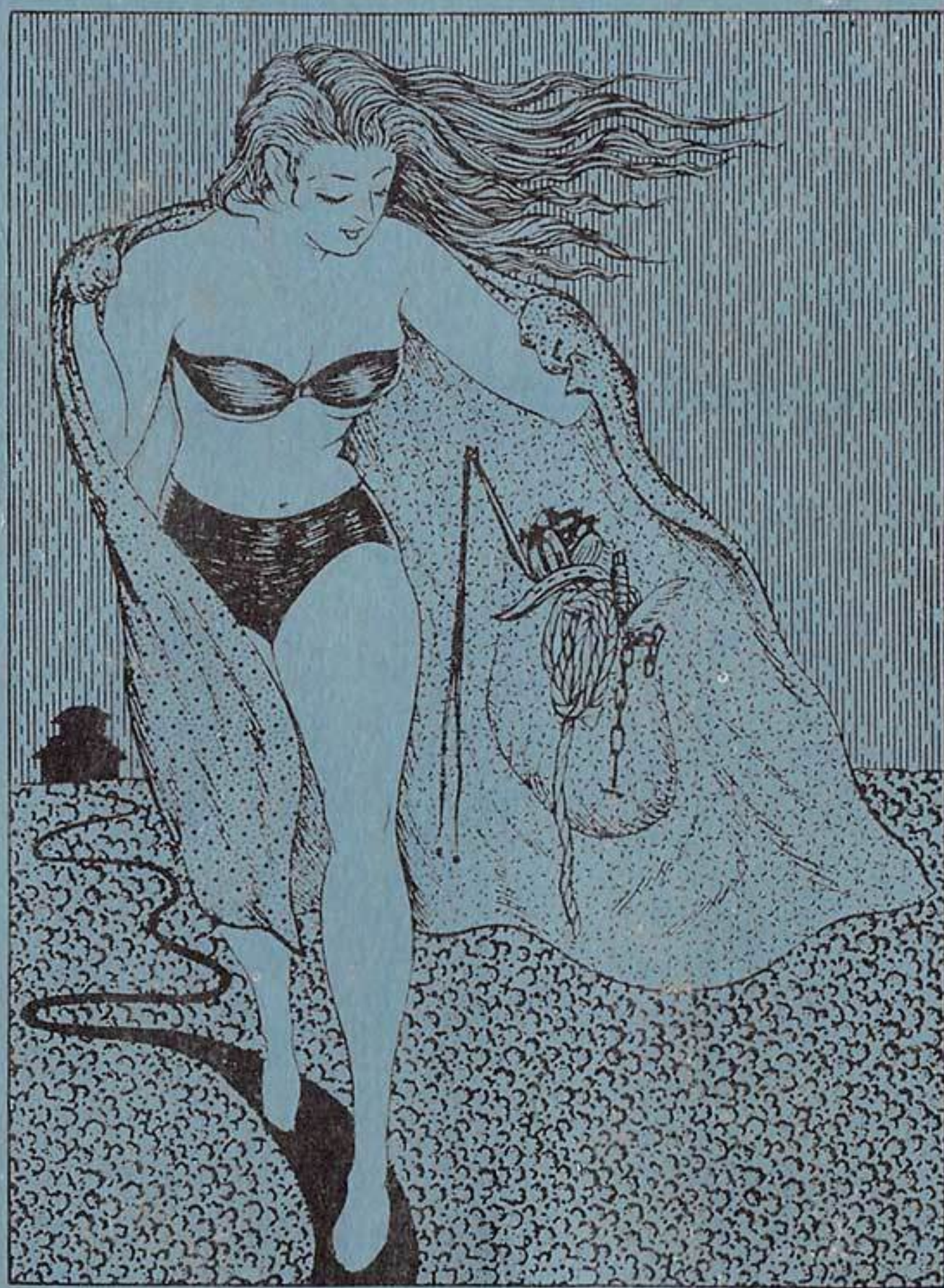


アラスカ譚奇

12月号



新しい風俗文献誌

1973. 12

昭和四十八年十月二十日印刷 昭和四十八年十一月一日発行 土曜号 (第二十七巻第1号) 毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

昭和四十二年四月二十一日国鉄大島等別荘水産雑誌第二〇号

作 鬼 団



決 定 版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 客号「花決定版」 ● 定価一、〇〇〇円（送200円）

／＼内容主要見出し一覧／＼

第一章 発端 第二章 恐ろしい探偵 第三章 美人の脱走 第四章 華麗な来客 第五章 救済の失敗 第六章 餓魔の地獄 第七章 恐怖の地獄 第八章 淫蛇の執念 第九章 美姉妹の危険 第十章 色事子の受難 第十一章 美津子の受難 第十二章 落花の秘密 第十三章 密室の秘密 第十四章 華やかな宴 第十五章 地獄屋敷へ 第十六章 翻弄されるカップル 第十七章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の泣き 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。 558 暁出版株式会社宛

本誌愛読の女性の方々へ

曉出版株式會社 編集部

百萬円懸賞原稿募集

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

▽規
定△

一、形式は、小説、創作、読物などのフィク
ション、インクでも、告白、結構、手記のよう
なシ、フ、ク、レ、ポ、ト、ル、タ、ジ、見聞記、
実見談やレポ、写真、画、参考資料などがあ
る歓迎致します。布下されば幸い、参考資料に
限り返
戻の求めに、応じ、ます。手紙、随筆、論説、意見、戯曲
など、如何なる形式のものでも最も得意とさ
れるものを選んで御執筆下さい。最も得意とさ
く、模倣とかな流は絶対的に排して下さい。あ
作家の輩出させ、新作に限りません。野心的な
者の方は、登竜門として、試みて下さい。読

一、本誌は昭和二十二年創刊以來、終始同じ奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、この間に三百号の多きを数えるに至りました。その間に、風俗雑誌のバイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かき御支援によって、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一、本誌は異色ある風俗文獻誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による数多くの傑作や力作が春の花のように咲き乱れ、S M 文獻誌としての本誌の真価がいやが上にも高められて参りました。ここに三百号発刊を記念して、更に一層の内容の充実に清新化を計りたく、皆様の作品に期待して、原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのような傾向のものでも結構です。が、一例を挙げれば、傾向のズムに關連したもの、各種フエツムに關連したもの、同性愛、切腹嗜好、妊娠嗜好、女斗美、女相撲、変装、生首、狂色風俗、特異風俗、変態風俗、奇習珍奇異テクニツクなど、下さい。問わず異色文獻に属するものを取。

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限
ります。応募作品は、必ず二百字詰又は四百字詰原
稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上
一、入選作品は出来るだけ早く誌上に掲載し
入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚
掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を
削除することもあります。返戻は申上げません
ます。原稿は原則として返戻は申上げません
故、原稿御入用の方は前もってコピーをと
って懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿
一、と区別するため、第一頁に「懸賞」と書き
下さい。ペンネーム、匿名は自由ですが、
住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。
応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなど
は絶対に致しません故、御安心下さい。永続
性のある奇くに作品を発表して、貴方の力量
と手腕を、どうか發揮して下さい。
一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書
箱第四十一号、暁出版株式会社編集部宛、必
ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問
並に持込みは固くお断わり致します。

奇譚クラブ

昭和四十八年十二月二十日印刷 昭和四十八年十一月一日発行十二月号(第二十七卷第十二号) 毎月一回 一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日 国鉄大島特別郵便承認第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan

250

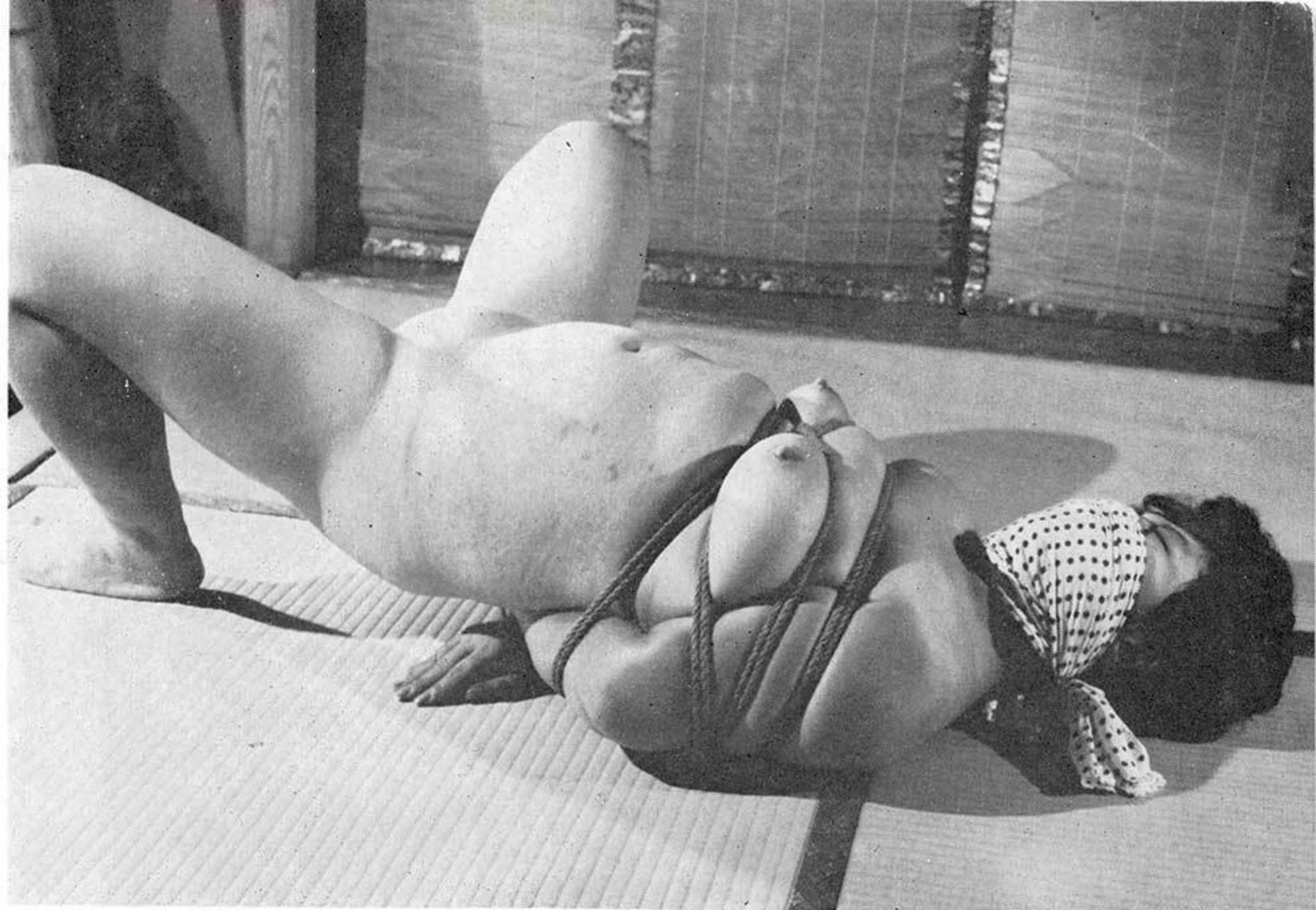


獣(けもの)になりたい女の調教

〈塚本鉄三・撮影〉



苗木陽子



昭和四十八年 十二月号目次 第二十七卷第十二号
通刊第三一〇号

フォト「素朴なマゾの妙味」	△西条紀代	……	畠山 君太	(21)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ	△苗木陽子の巻	……		
『畜化願望の女』	(白豚Ⅱ調教・飼育・虐待Ⅱの記)	……	塚本 鉄三	(22)
楽しきかな便秘癖「浣腸日記」	……	……	南原 赤秋	(64)
懸賞告白『夕梨という女』	△帰らざる鼻戯回想	……	梶 啓志	(70)
連載・時代S小説 紫蘭の門	(28)	……	風流極道軒	(80)
告白「痴人の戯れ言」	……	……	鈴木 緑人	(94)
Mストーリー『猷(けんしん)身』	……	……	沖 圭介	(96)
告白『SM複婚への誘い』	……	……	瞳 耀太郎	(113)
連載小説『大噴火』	△第六十二回	……	千葉 青鬼	(118)
須坂旭氏のイメー	梨花のゆくえ	……	城 章夫	(126)
創作『SM企業』	△第三話・奴隷三号の誕生	……	秋津新次郎	(128)
真知子論「新しきサディズムへの出発」	……	……	小沢 準一	(138)
敗戦秘話『奇妙な綱引きと淫虐な賞品』	……	……	鈴鹿 晶子	(142)
下着フェチ「白と赤のバラード」	……	……	穂積 元司	(158)
毬子の手記より「愛しの風船妊婦」	……	……	高原 薫	(162)
連載・M派交友録(45)『グラマーな猛女』	……	……	鬼山 絢作	(172)
「耽奇房」我楽多控(9)『筐底秘戯』	……	……	辻村 隆	(186)
S小説「夜の静寂に動くもの」	……	……	吾妻 竜一	(209)
告白「愛妻エミの飼育過程報告書」	……	……	山本 春夫	(218)

獣(けもの)になりたい女の	苗木 陽子
調教・白豚訓練の成果	笠井奈保子
惑溺のプレイへ・開脚縛り	前田真知子
海老縛りに耐える・足の指	川路むら子
縄と責めの交流点	鈴木千鶴子
抜群のプロポーション	長野 良子
暴かれた検身の末	松本 たえ
責めに没入するもの	高村 浩子
豊胸への忍苦	関谷富佐子
ムチを期待するポーズ	福井 桃子
責めを楽しむ一瞬	西条 紀代
こんなポーズはいや・さあ	南 加津子
どうでもして	座間 明子
臨月妊婦の被虐哀歓	荒尾 慶子
うとまじき縄に諦観	左近 麻里子
清らかな愛の責苦	深田 菊子
哀愁を帯びた受苦	谷山 久美子
一直線に伸びた両脚	三浦 純子
マゾに全裸を賭ける人	安井喜久子
悦虐にむせび泣く人	梨花悠紀子
剃毛の白肌を晒して	中河 恵子
羞恥責めの序曲	
柱のかげの羞らい	

イメージギャラリーⅡ「いたぶり人形」四馬孝(75)・「愛
縄の名残り」岡たかし(84)・「洞窟へようこそ」マエダ
ヒオミ(88)・「最高の歓待」岡たかし(102)・「洗濯日
和」原由貴子(107)・「熱涙」須坂旭(132)・「ある夜の
正夢」マエダヒオミ(135)・「只今熱愛中」岡たかし(147)
・「たばこをどうぞ」四馬孝(150)・「近づく足音」南部
紅(153)・「顔見世タイム」志羽利也(166)・「動力付玉
座」岡たかし(180)・「動くと落ちるよ」小川茂正(214)
・「静かに遊ぼうよね」名古屋S生(220)・「ダイヤでも
呑んだ？」四馬孝(227)・「幻夢は秘願の凝結？」岡たか
し(231)

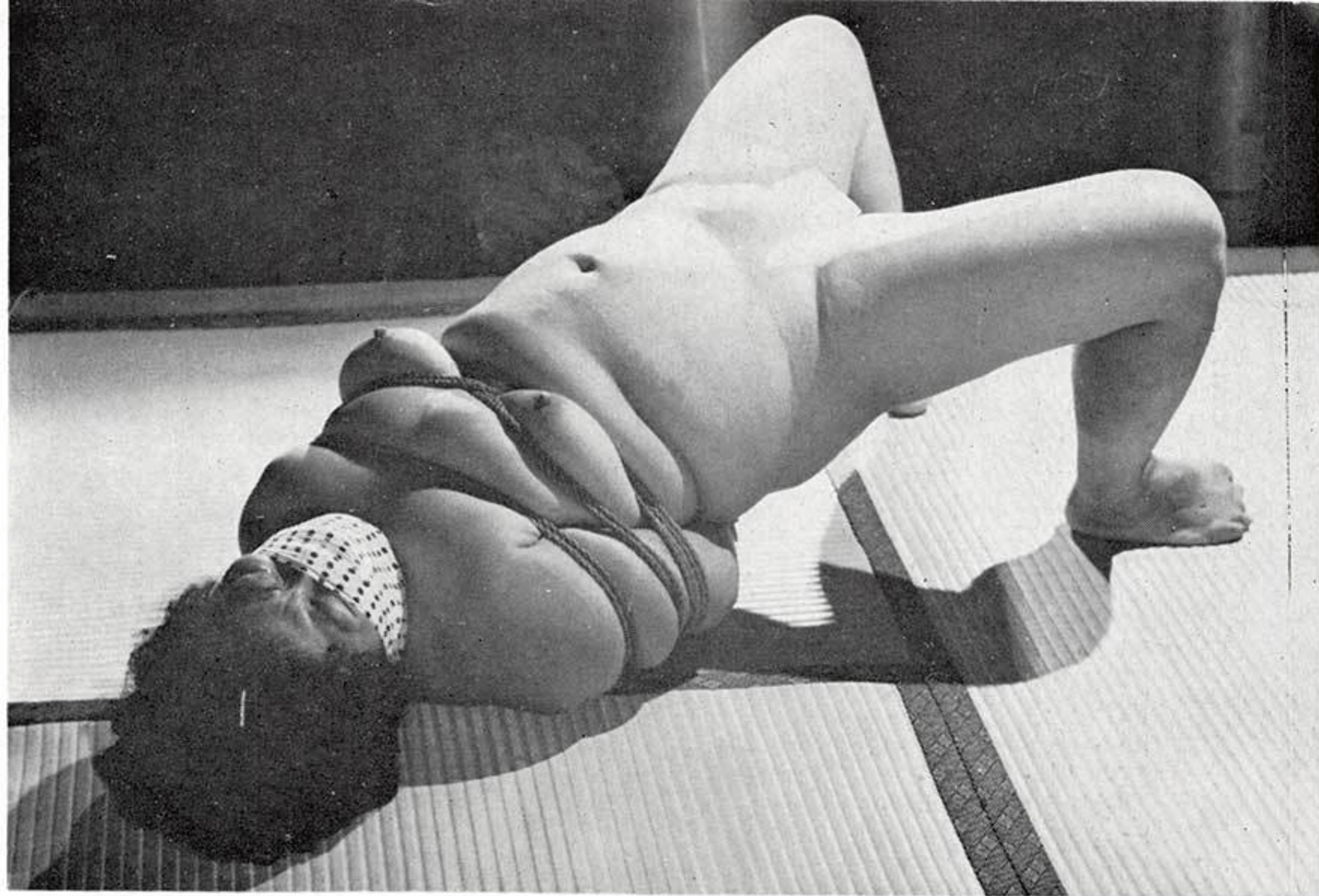
目次フォト……………苗木陽子・福井桃子

砂登子抄(前)『深き水の底に沈んで』……………久留木 栄……………(222)
読者通信……………編集部選……………(266)

奇クサロン (237)

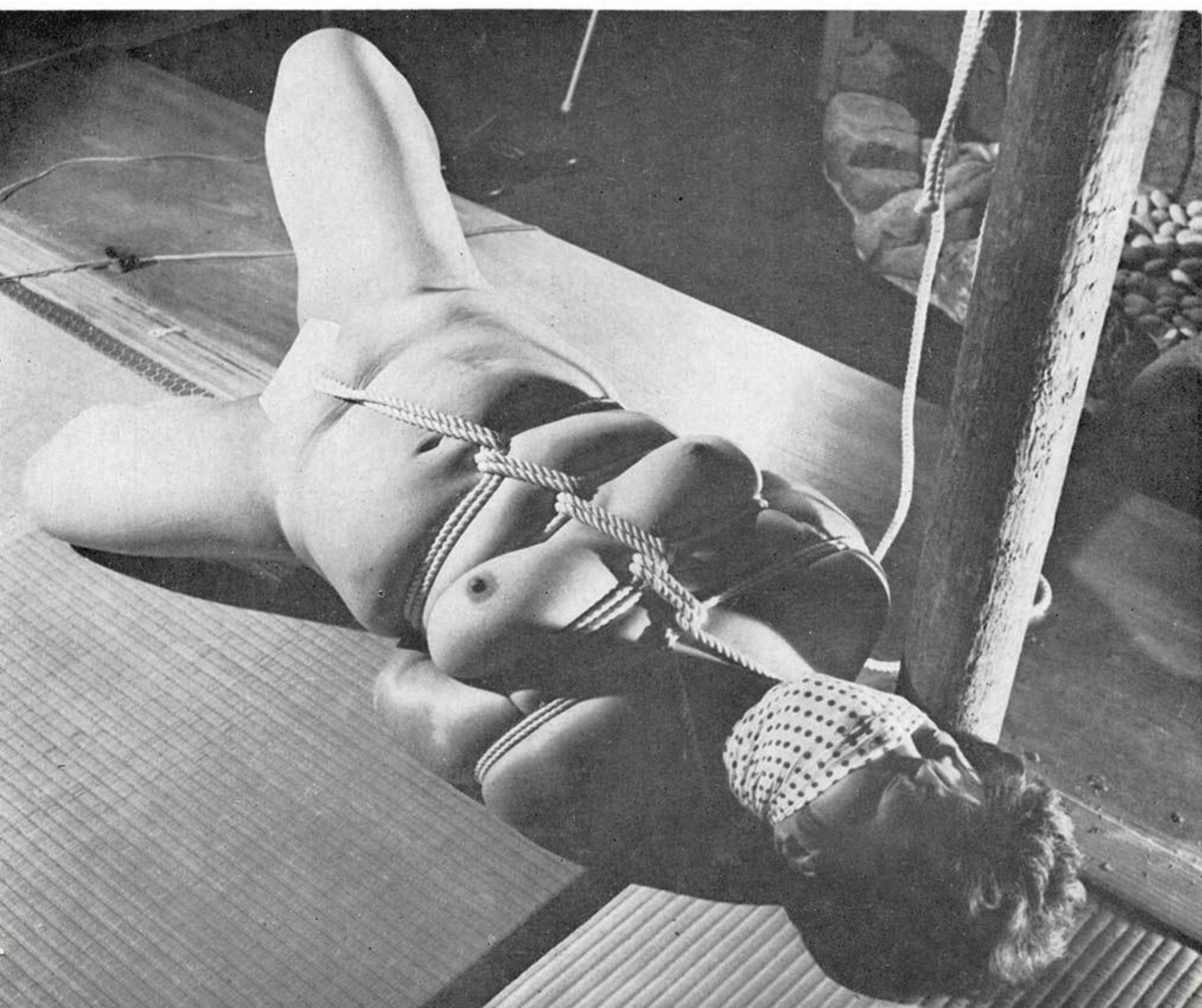
SMプレイ体験談	須田 寛美
深田菊子礼讃と吾が習作	文山 潔
木村洋子さんという女	野村 文華
〔SM研究会〕の提唱	塚本 鉄三
自らの中の残酷性を見た浜辺	
「猫のような女」	都々美佳礼
『大噴火』書評	日比谷 栄
切抜帳「雑誌記事から」	数 近作
独身の理由はオムツ	岩手 信夫
イメージ画「眠ったふり」	原 由貴子
「アゲラタムの花」	
の君と共に	秋村 恭一
腋香とひとみと私	南原 赤秋
告白「蛇と棲む私」	永田 嬰子
SM都々逸	
「ピアスイヤリング」	益原 俊夫
と私のSM	
あるM男性の手紙	
隷属と虐待への希求	夏目 清吉
西村真の雑文「帰国記」	西村 真
編集部だより	編集部
女はこうすると美しくなる	前田 実
浣腸とオムツプレイ雑感	押目 好夫
惑溺する遊び(プレイ)	瀬沼 八郎
菱縄マニア「静かな縛り」	早木 夢二
ズロースの夢	
「欲しいフォト」	博多 弘
南加津子の妊婦礼讃	菅原 通夫



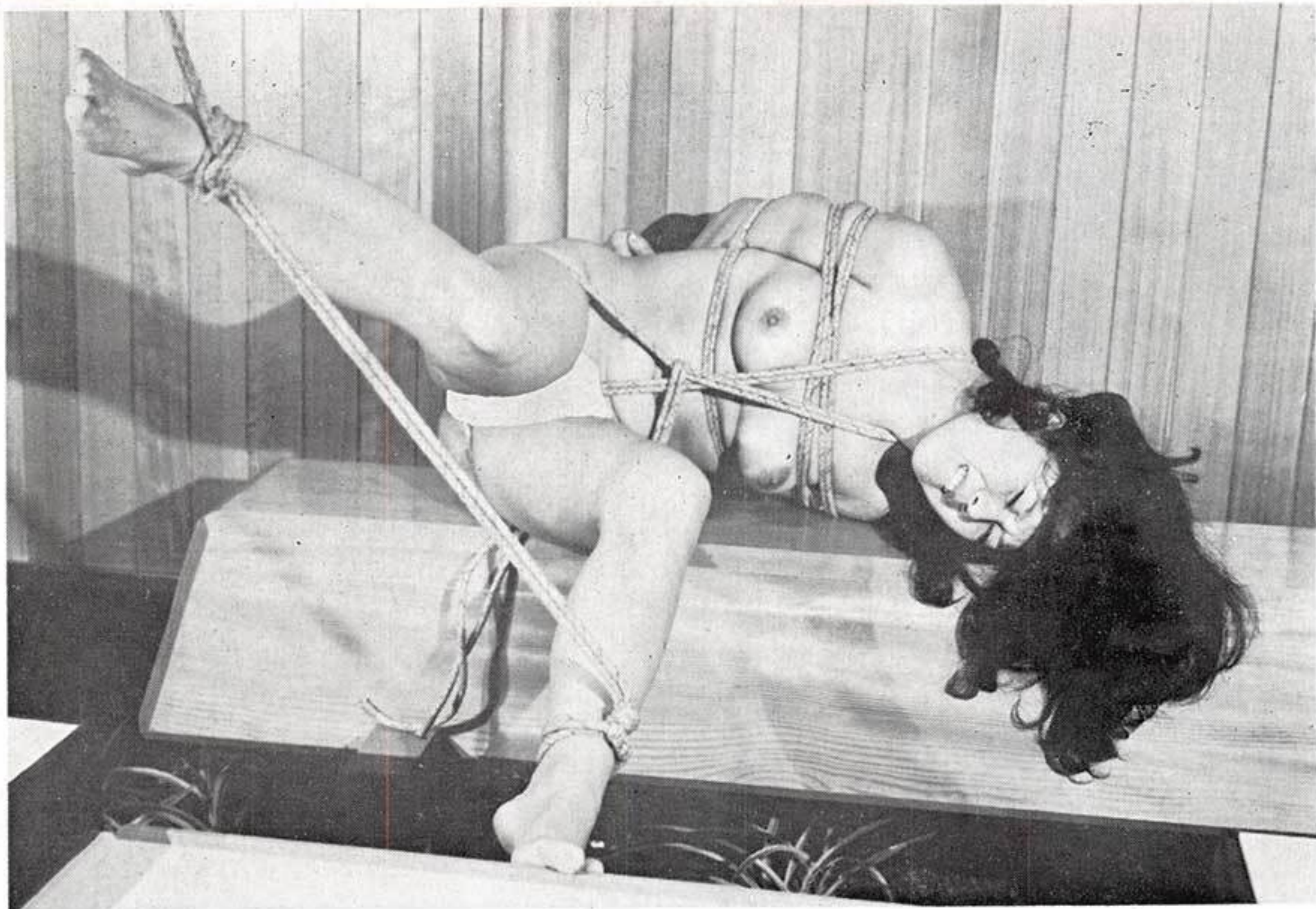


白豚訓練の成果

＜苗木陽子＞

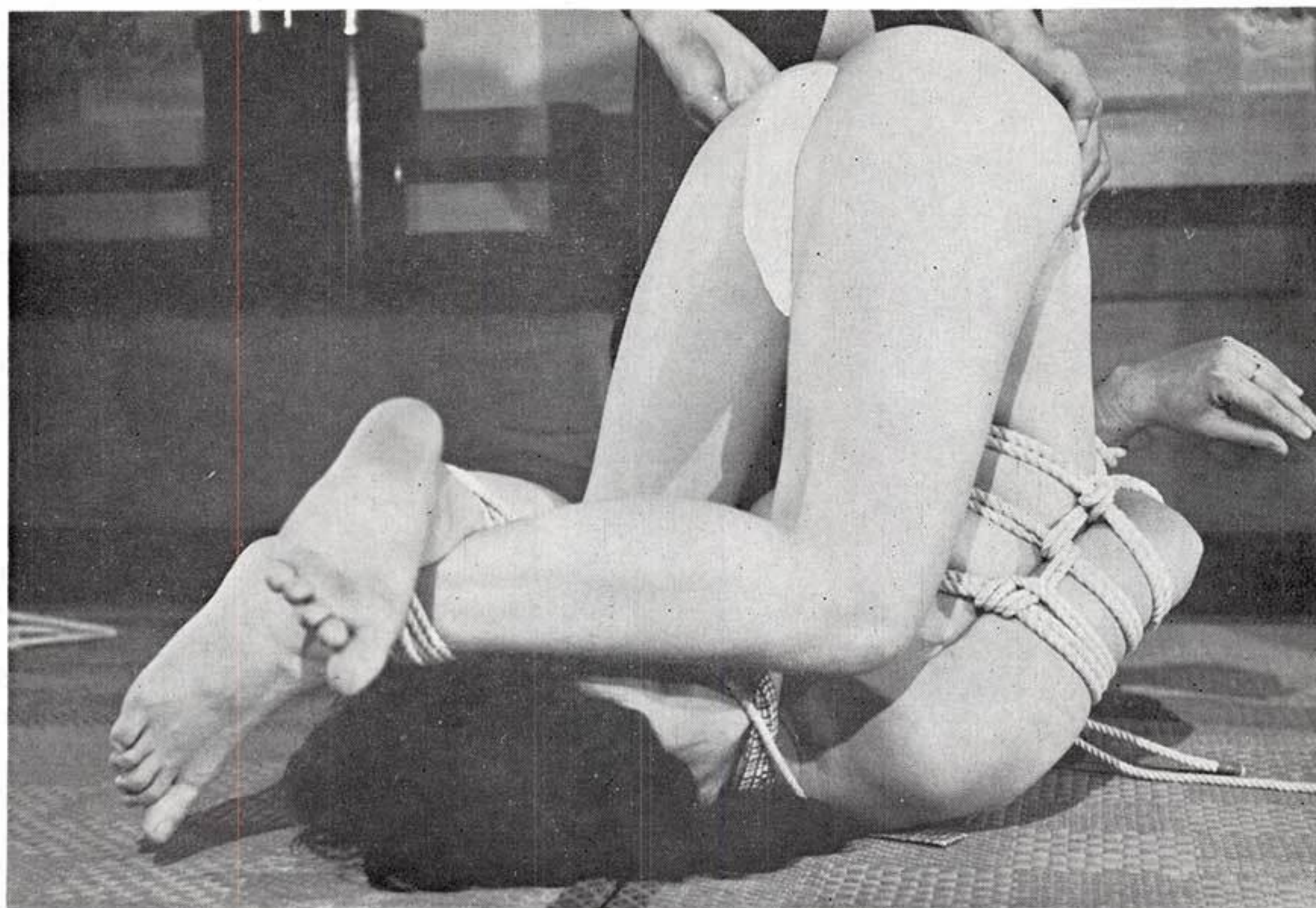


△笠井奈保子▽

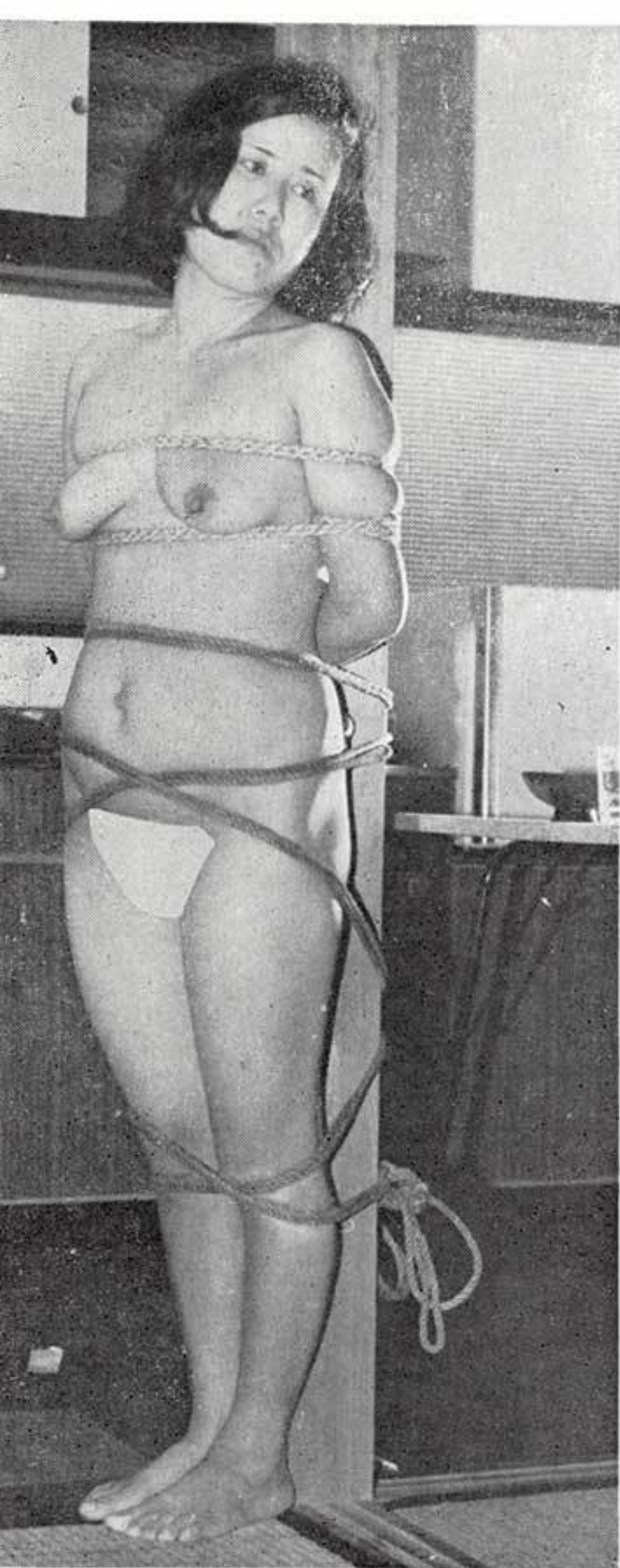


へいプレイの溺惑

るえるに縛り老海

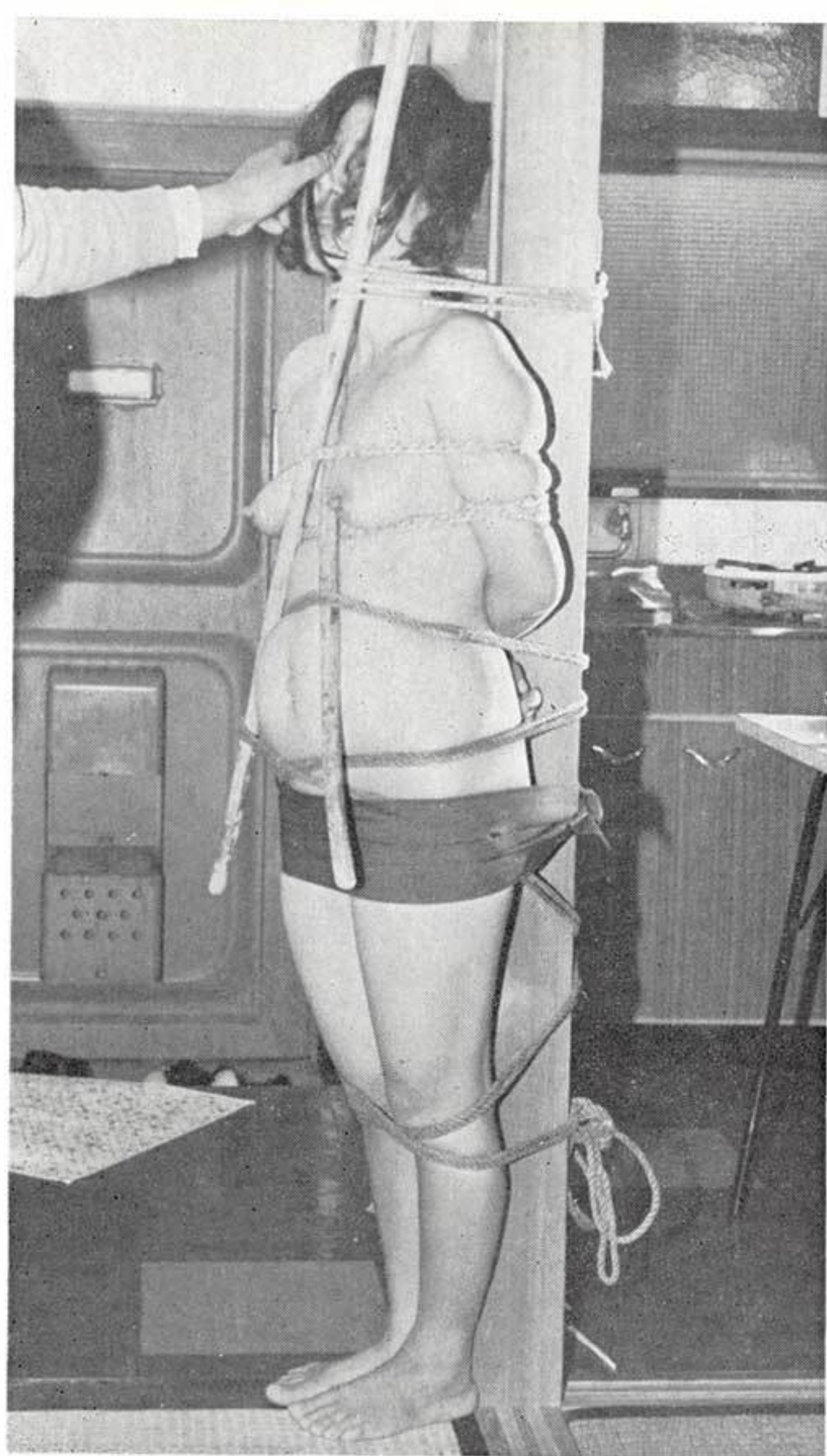


△前田真知子▽



縄と責めの交流点

△川路むら子▽



抜群のプロポーション

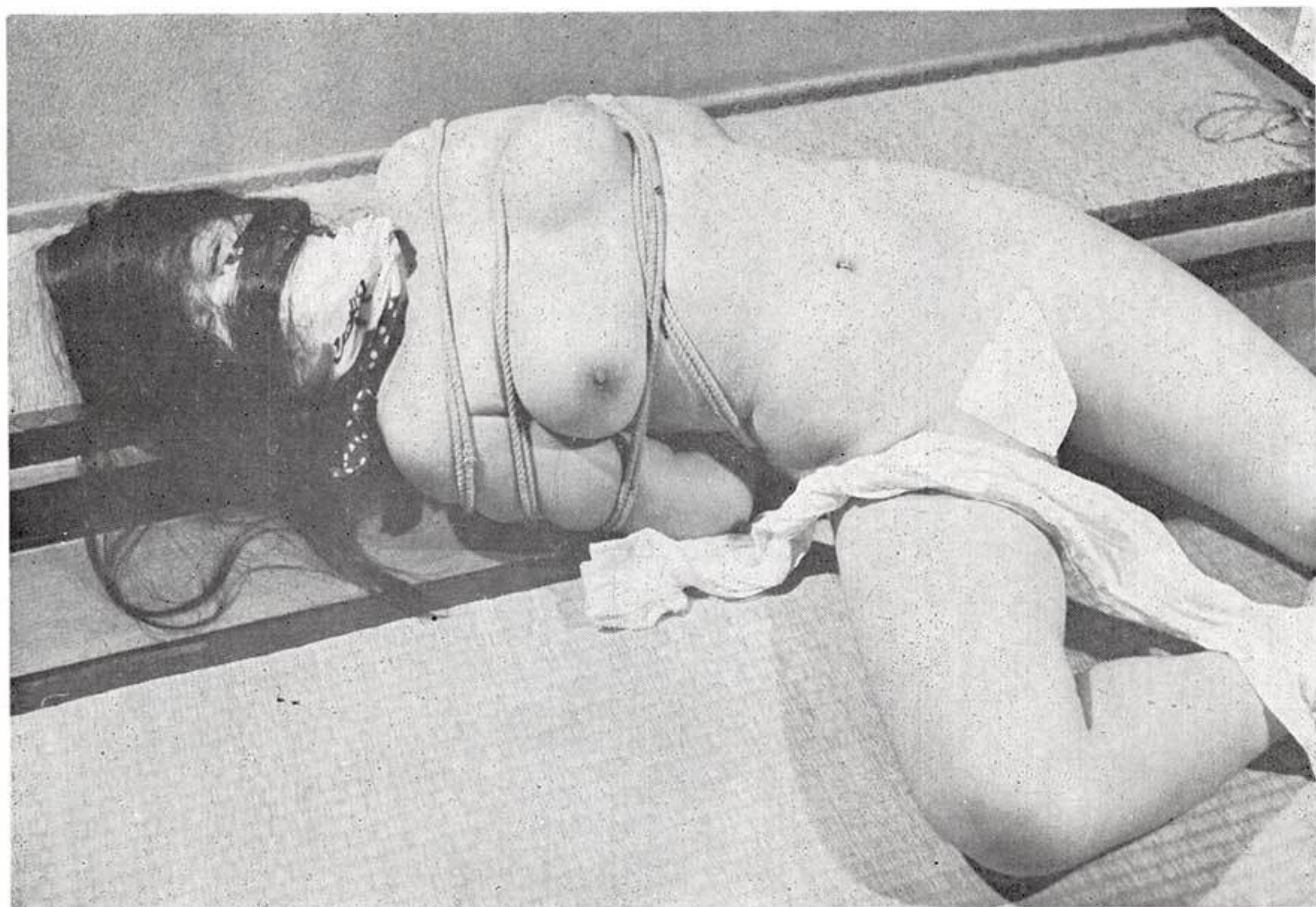
△鈴木三鳥△



暴かれた検身の末



△長野良子▽





開脚縛りの白縄

<笠井奈保子>

責めに没入するもの

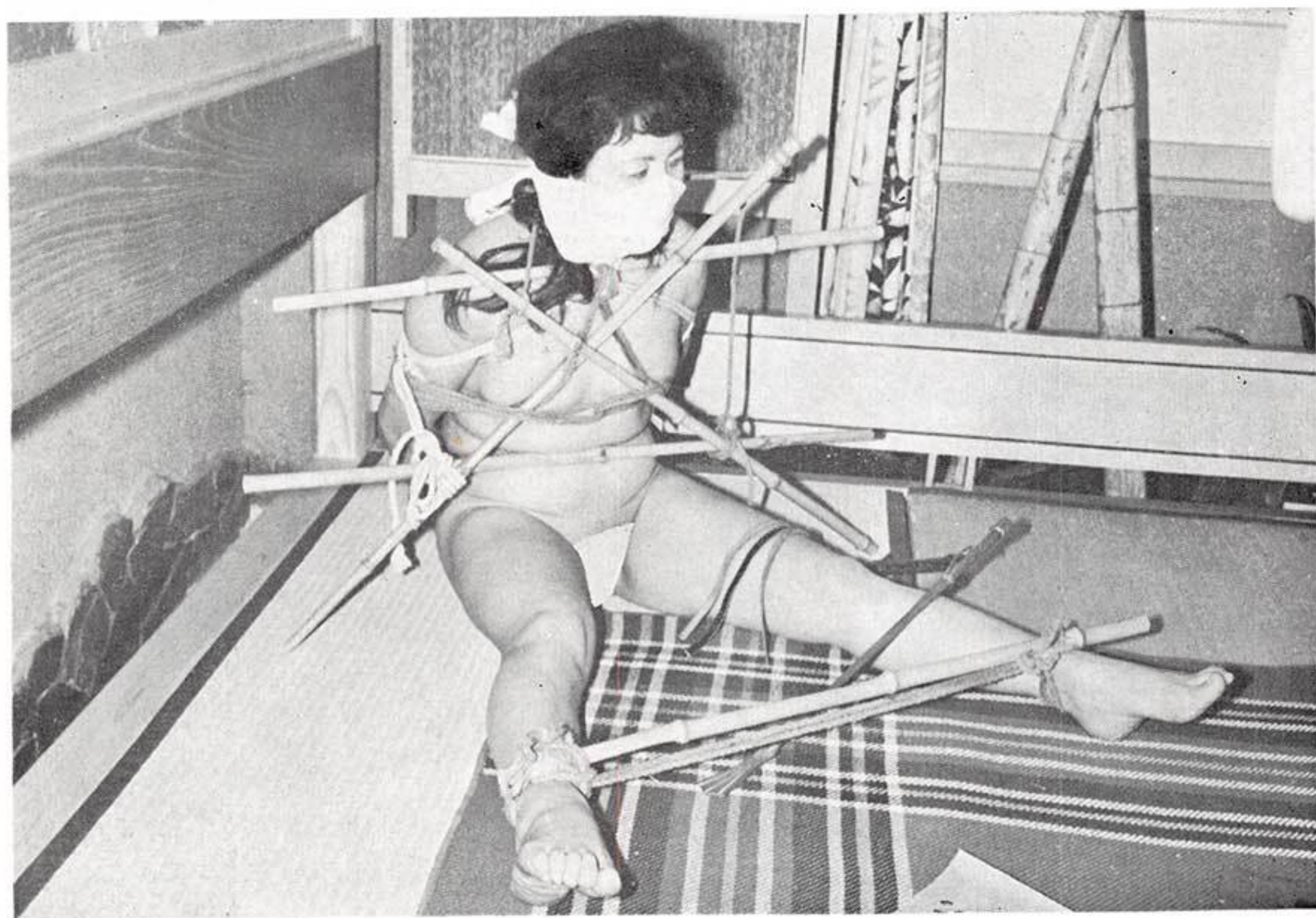
△松本たえ▽





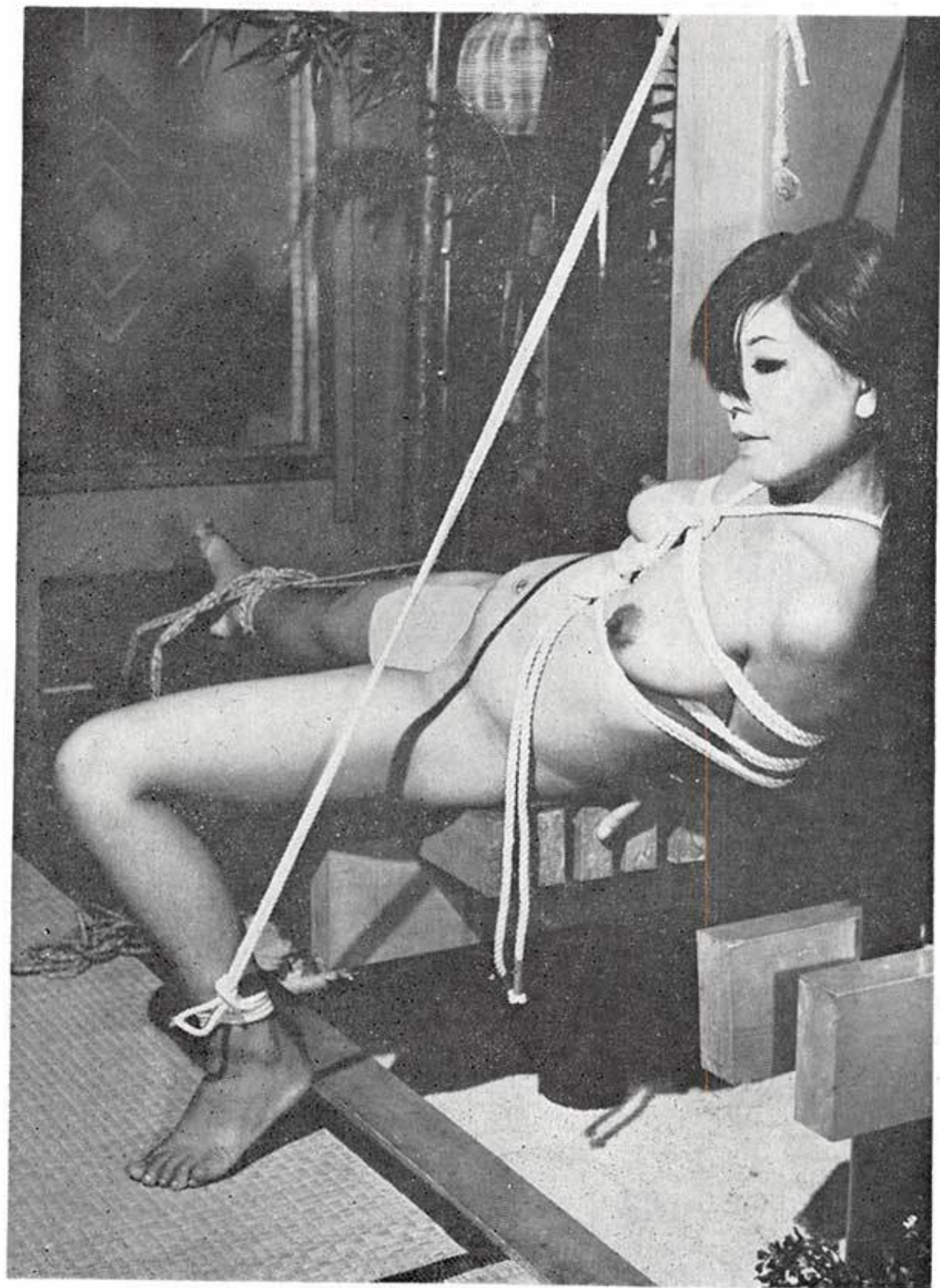
△高村浩子▽

豊胸への忍苦



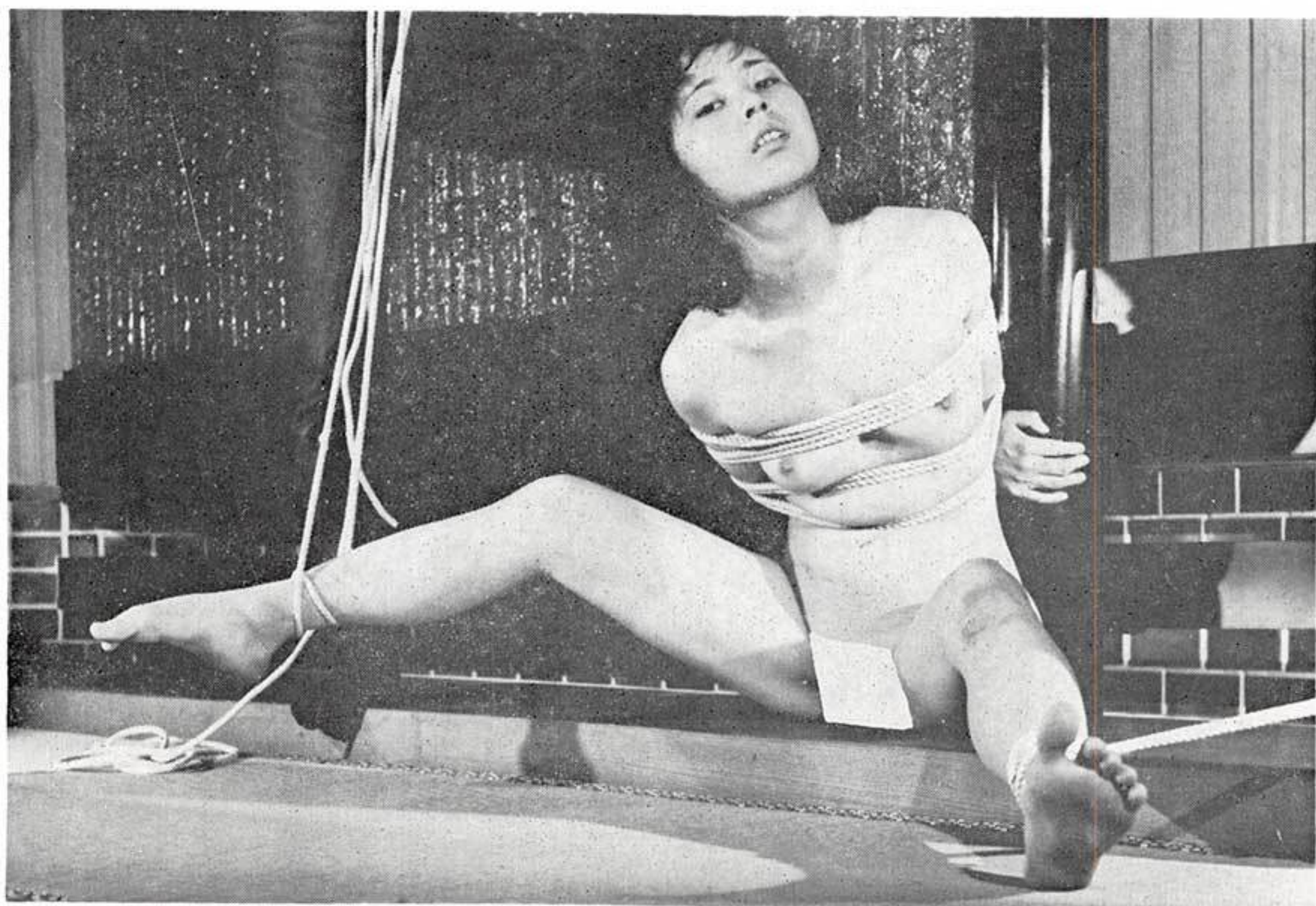
ムチを期待するポーズ

＜関谷富佐子＞



責めを楽しむ一瞬

△福井桃子▽



足の指に力をこめて

△前田真知子▽

△西条紀代▽



“こんなポーズはいや”

臨月妊婦の被虐哀歓

△南加津子▽



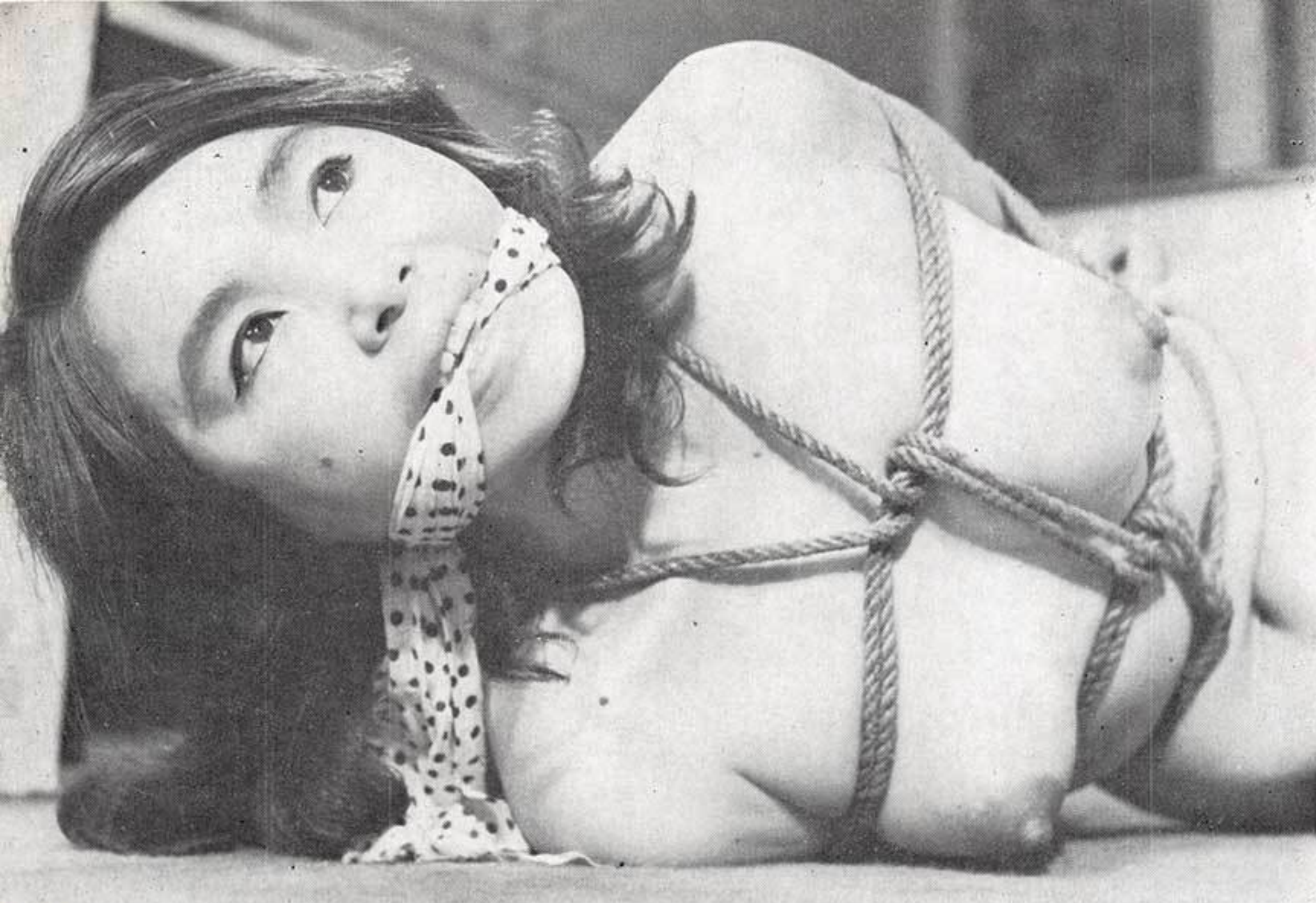
うとましき縄に諦観

△座間明子▽



清らかな愛の責苦

＜荒尾慶子＞



△左 近 麻 里 子▽

哀 愁 を 帯 び た 受 苦

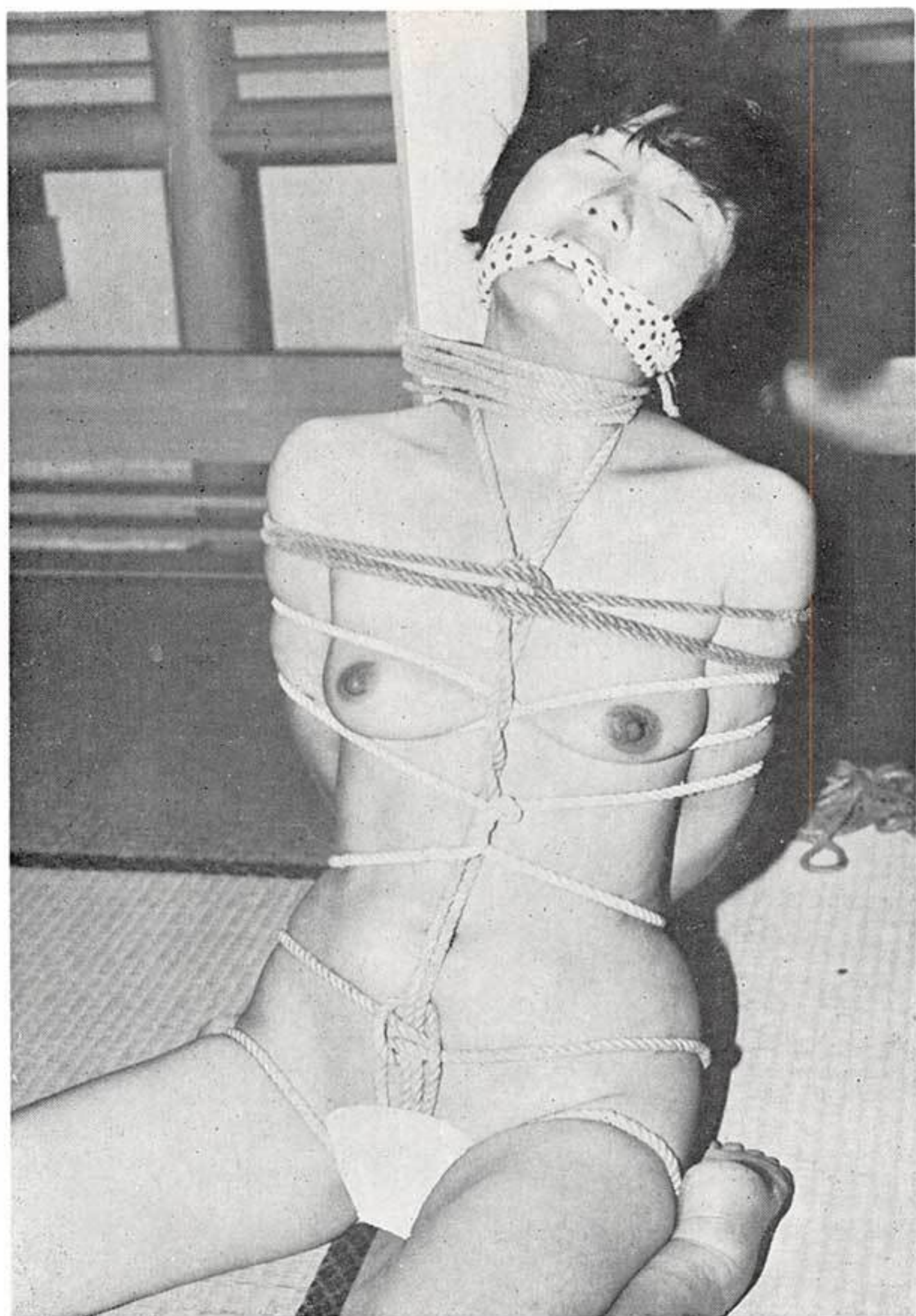


△深 田 菊 子▽

一 直 線 に 伸 び た 両 脚



△谷山久美子▽



△三浦純子▽

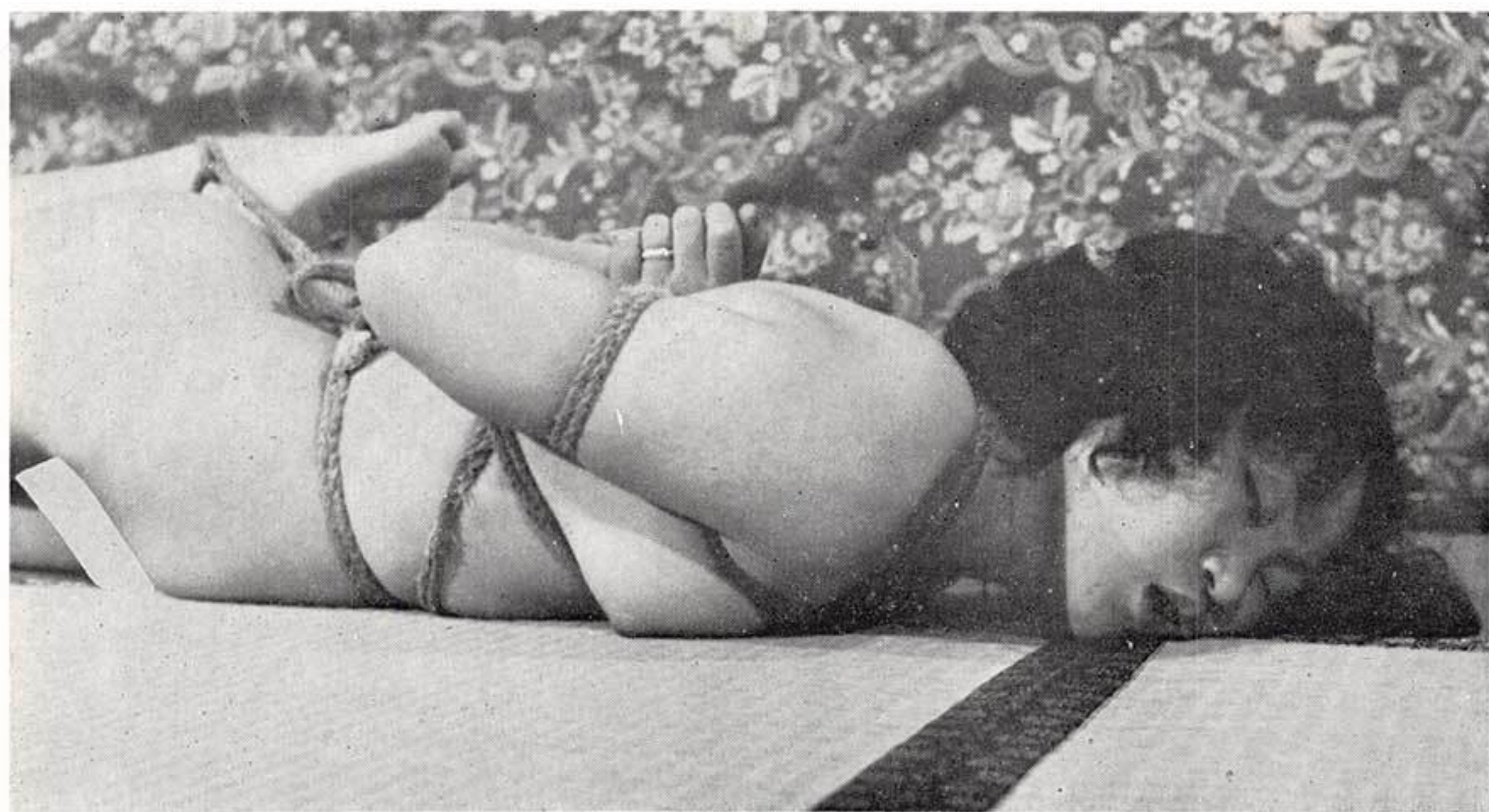
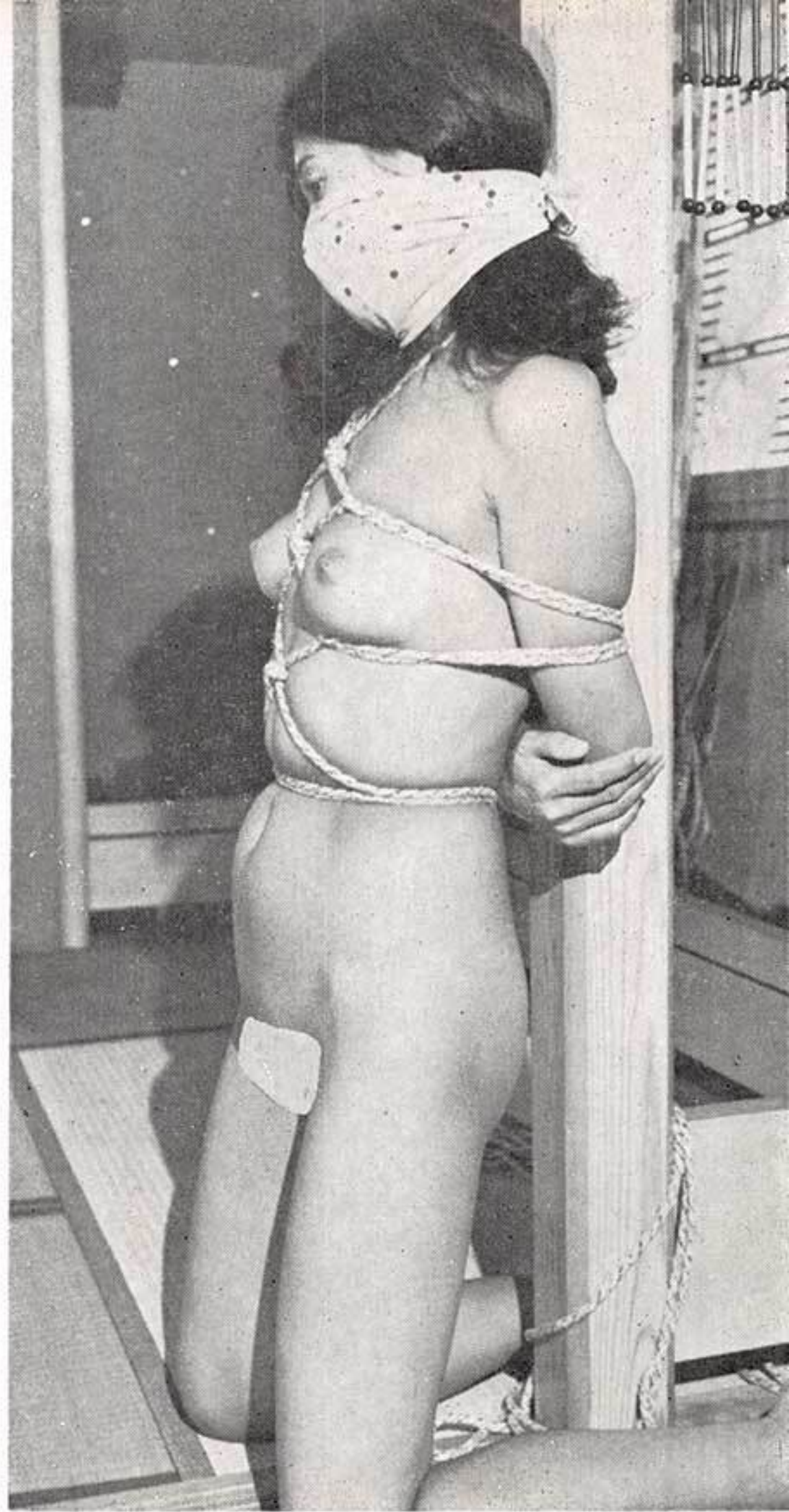
悦虐にむせび泣く人

マゾに全裸を賭ける人



剃毛の白肌を晒して
△架花 悠紀子▽

羞恥責めの序曲
△安井 喜久子▽

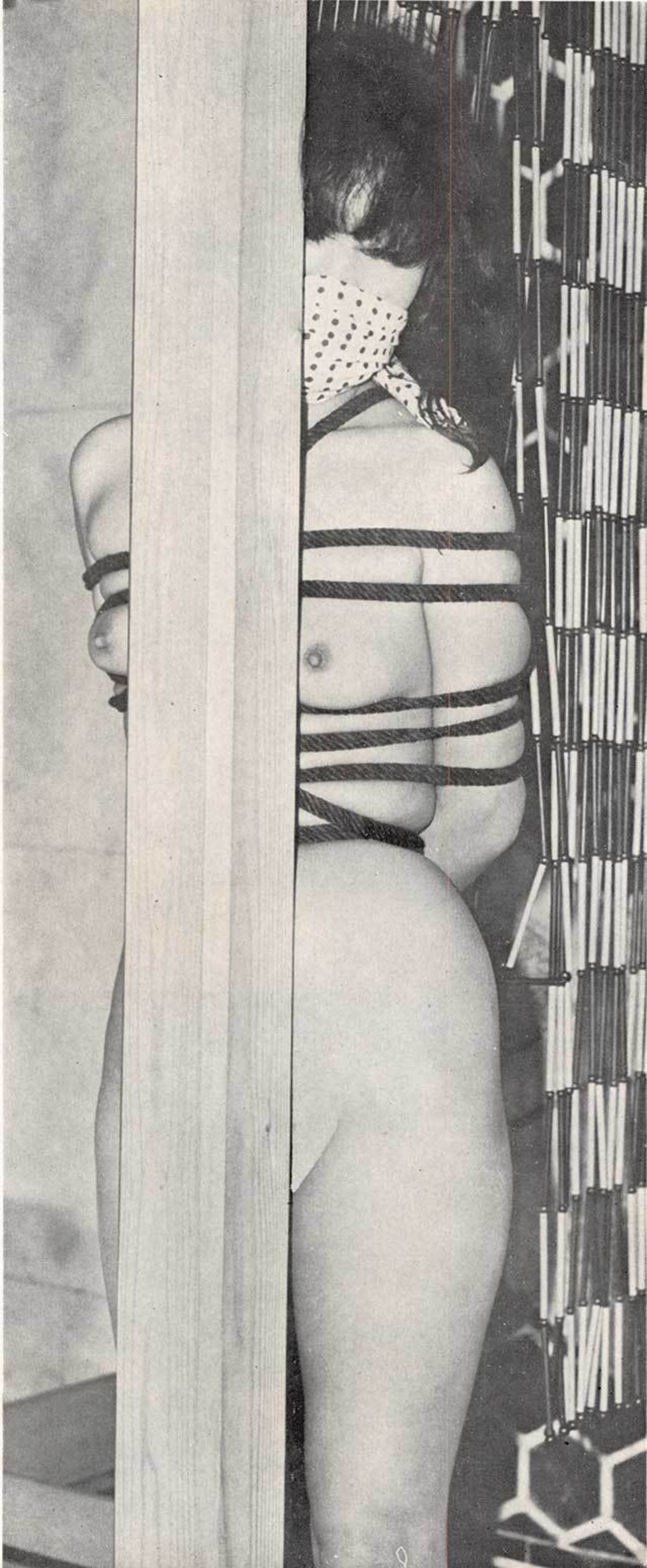


「さあ、どうでもして！」

＜西条 紀代＞

柱のかげの羞らい

△中河恵子▽



奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年 十二月号

第二十七卷 第十二号
通刊 第三一〇号



素朴なマゾの妙味

モデル……西条紀代……

紀代さん、貴女は飛驒の田舎から都会へ出てきて、まだ都会の水になじんでいないということですが、貴女の責められている裸身のふしぶしに、そうした幼さや稚さが、痛いほど受けとれます。それでいて、むごたらしい麻縄が、貴女の幼さのまだ取れていない柔肌に喰い込んでいるのを見ると、不思議な興奮を覚えるのです。後手首が背中中で交差したようにがっちり縛られているのを見ると、私は、紀代さんに限りなく魅せられてしまうのです。貴女のような女性こそ、本当のマゾヒストというのではないのでしょうか。

(畠山君太・記)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

「苗木陽子の巻」

畜^{ちっ}化^か願^{がん}望^{ぼう}の女^{おんな}

塚^{つか}

本^{もと}

鉄^{てつ}

三^{ぞう}

「白豚―調教、飼育、虐待―記」

私は、その初対面の女に対して、いみじくも「白豚」という呼名をつけた。それは、彼女の自尊心をいたく傷つけ、精神的には土足で顔を踏みにじるようなものであったが、その後で行った私の彼女に対する狂暴的なまでの凌辱から比べれば、まだまだ、生やさしいものであった。

初対面の女

初対面の美しい女だった。

新幹線の岡山駅を四時五分に発ったという彼女を、新大阪駅に迎えたのが午後五時三十分になった。

目印といっても、ただ、彼女が着物を着ているということだけ。それでも、私は目ざとく雑踏の中で彼女を見つけていた。

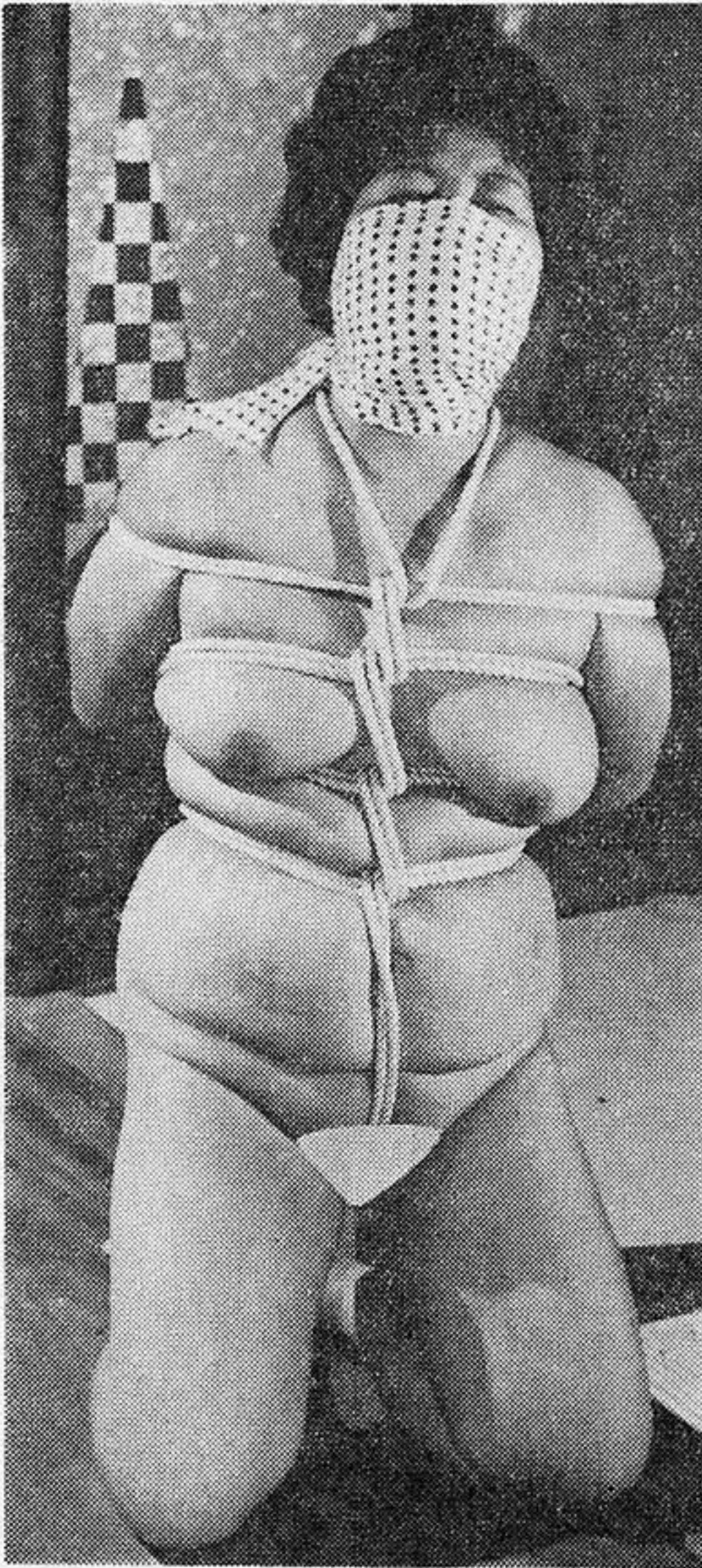
上品な物腰、丁寧な言葉づかい。

私の尋ねたことだけは、はっきりと答えるが、決して自ら饒舌になろうとはしない、至って控え目な態度に好感が持てた。

この女がマゾなのだろうか――。

私は不思議に思った。

どこから見ても、そんな風には、少しも見



えないからだ。

SMポライターとしての私に初めて逢って、あのように激しい反応を示した南加津子なんかから比べると、この苗木陽子という女性性は、至って平静なのだ。

私は一刻も早く、彼女の着物を剥いでしまつて、白い肉体をむきだしにしたかった。

外に出しているのは、顔と手首だけで、あとは、着物ですっかり掩われているからだ。

私は舌なめずりするような思いで、着物に包まれた彼女の全身を貪婪な視線で舐めまわして、これから、さて、どのようにして、この女を責めてやろうかと考えていた。

だが、そんな私の心の中の意馬心猿の思いとは、うらはらに、彼女との会話は至って、ありふれた世間並みのものだった。

岡山まで開通している新幹線が、早く九州まで伸びたらいいということ。今朝、九時四十八分博多発の列車に乗って、今、やっと新大阪駅に着いたということなど。

レストランで食事をすませて外へ出ると、すでに黒い帳が一面に降りてネオンが、またたいていた。車窓にネオンが赤青黄と、色とりどりに瞬くのを見ると、なんとなく、心が浮き浮きとしてくるのだった。今宵一夜の彼

女とのSMプレイを思うと、尚更、口笛でも吹きたくなるような陽気な気分になった。

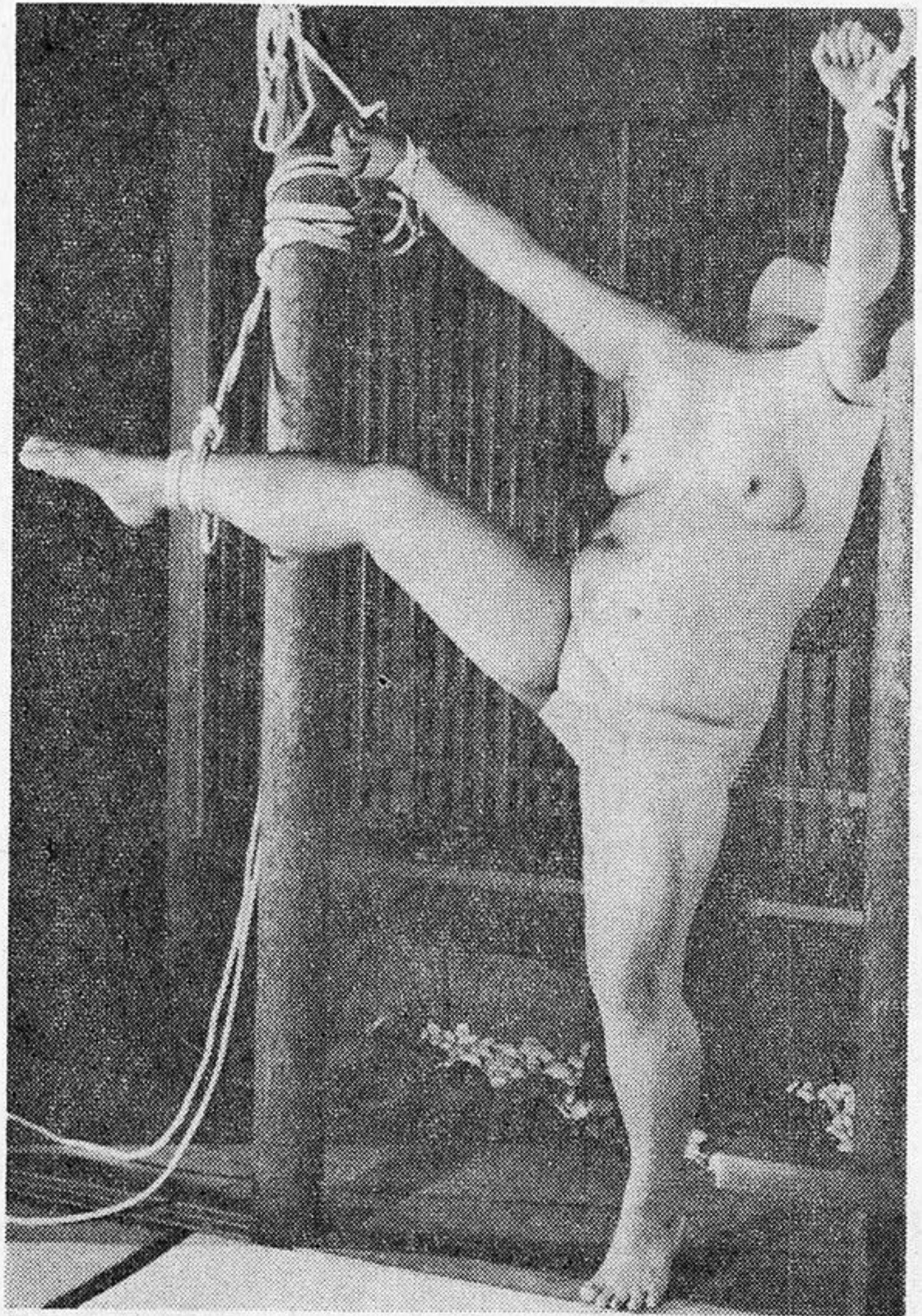
彼女と初対面であるのは勿論、ホテルの方も行き当りばったりだった。土地不案内のためラッシュアワーの車の渦に巻き込まれて、高速道路を行ったり来たり、一時間ばかり走り回って、とあるホテル街に着いた。とにかく

く一番広い部屋へと注文したものの、入ってみる迄は、どんな処か不安だった。

飼育の訊問

部屋へ入るなり、着ているものを全部脱ぎすてて、部屋の隅で膝を揃えて、きちんと坐っている彼女を尻目に浴室へ飛び込んだ。





浴槽が滅法広いので、湯と水の栓を全開にしてあったが、湯が僅かに10センチばかり溜っているだけだった。それを洗面器で汲んで五六杯、肩から掛けただけで上がってきた。下着は一切つけず、浴衣だけを羽織って女の前に立った。

「さあ、着物を脱ぎなさい」

「脱がなきゃいけませんの。妾、ふとっているから、裸になるの、恥かしいんです」

「見たところ、そう、ふとっているようには見えないが、目方は、いくらあるんです？」

「六十キロとちょっとあります。妾、着痩せするたちなので着物を着ていると、あんまり目立たないんですけど、裸になったら、それ

は、ふとってますのよ」

「そのむくむくと肥えたハダカを早く見たいもんだな。とにかく、お風呂へ入ってきなさい。そして浴衣一枚でくるんだな」

私は、そう言いおいてバッグからカメラ三台を取りだしてフィルムを装填する。

目の前に黒木の床柱が一メートルぐらいの間隔で二本立っている。よし、先ず、これを利用してやろうと考える。始めて訪れるホテルの初めての部屋だから、どんな広さで、どんな仕組みになっているか、来てみるまではさっぱりわからない。部屋の広さがわからないから、レンズは標準の外に広角と短焦点のワイドを万一のために準備してきていた。

脱衣室から浴衣をきちんと着て胸高に腰紐を締めた彼女が出てくるなり、私は手招きして、柱のところへ呼び寄せた。

「あの、裸にならなきゃ、いけませんの。出来ましたら、妾、この浴衣のまま、お願いしたいんですけど……」

「ああ、いいですよ。最初はね、小手調べ程度に、痛くないように軽く縛るだけですから心配しなくても、いいですよ」

私は努めて優しく言ってから、彼女の左手を浴衣の肩口から抜いて手首に縄を巻き、そ

の縄尻を柱の頭の高さに縛りつけた。袖口を胸のところで結んでおいて、右手も同じように右側の柱に手首を縛りつけた。

左右の手を万才のような格好に、それぞれ柱に縛りつけられているとはいっても、足は自由だし、別に苦痛を伴うような個所は、どこにもなかった。両肩は肌脱ぎになってはいくものの、浴衣の両方の袖口は胸のところで合わせて結んでいるのだから、彼女の望んだ通りの浴衣を着た縛りというわけだ。

私はライトの配置を終わってからスツールを持ちだして、彼女の前に腰を下ろした。

「どうだね、痛いところはないかね」

「はい、どこも痛いところはありません」

「名前は、なんと言うんだ」

「はい、苗木陽子なえきようこと申します」

「苗木陽子だな。年はいくつだ？」

「三十一才になります」

「三十一才か、脂ののりきったところだな。それで、主人は？」

「主人はごいません。三年前に亡くなりました。今は一人で暮しています」

「という、未亡人なんだな。子供は？」

「子供はごいません」

「それで、職業は？」

「それで、職業は？」

「化粧品セールのセールスをしておったこともありましたが、今はやめております」

「それでは、どうして食べているんだ」

「はい、亡くなった主人の遺産が、少しばかりございますものですから……」

「それは結構な御身分だな。それで奇譚クラブは、いつ頃から読みはじめたんだ？」

「五年ぐらい前からです。主人の本棚にありましたのを、チラリと見たときが始めてなんです。それから、時々読んでいました」

「ふーん、それでSMプレイの経験は？」

「SMプレイは、したいと思っていたいましたけれど、実際には、今まで一回もしたこ

とがないんです」

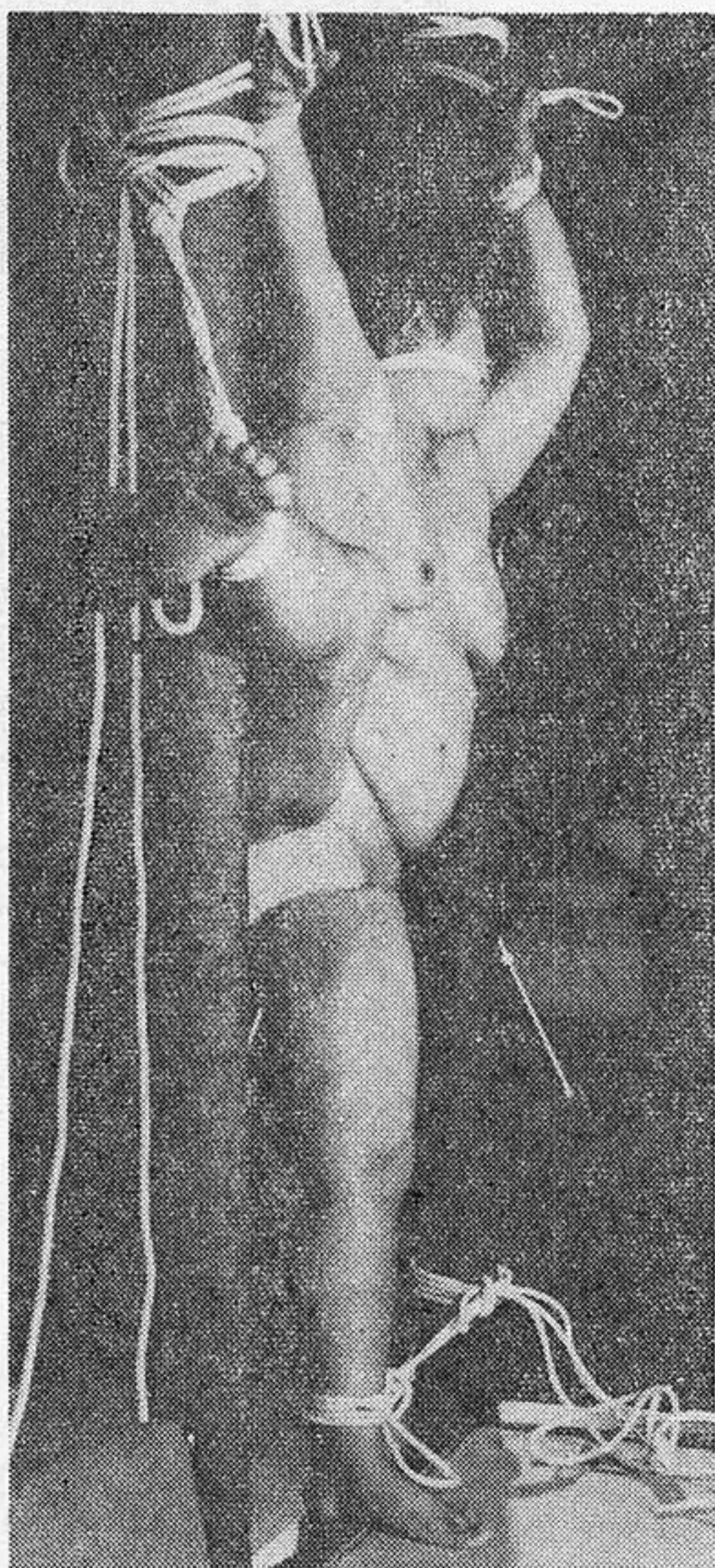
「すると、亡くなった主人とも、SMプレイは一回もやったことがないというんだな。かくしだてすると為にならないよ」

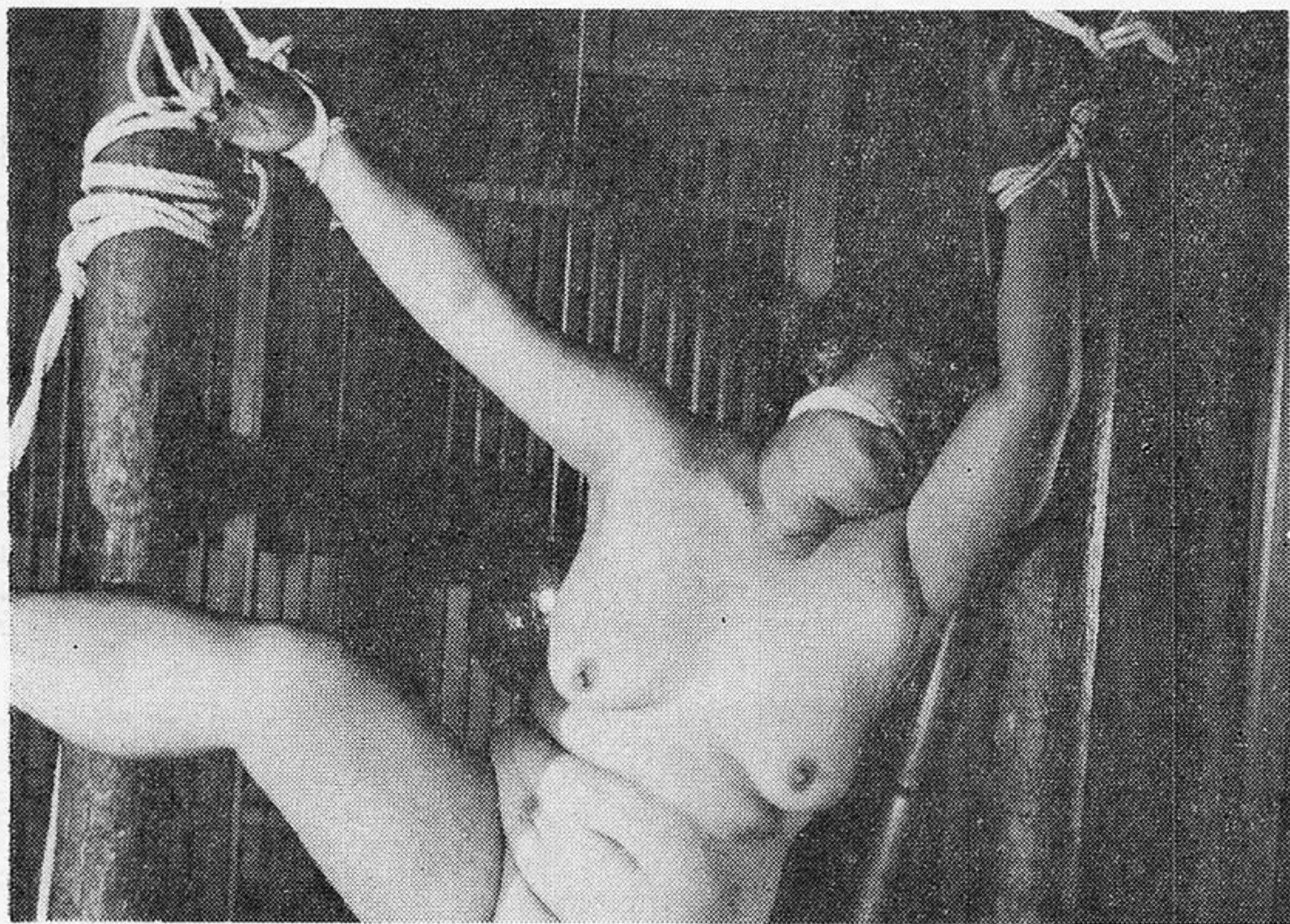
「本当なんです。お互いに、そのことについて、何も口にしませんでしたし、それに、主人は余り丈夫じゃございませんでしたし、その方は至って淡泊でしたわ」

「それで、この、ぶくぶくと肥えた身体が、よく辛抱できたもんだな、どうだ」

私は立って、胸に巻いていた袖口を、ぱっとほどいた。豊かで白い乳房があらわれる。

「ああ、だから、奇譚クラブの小説なんか





を読んで……。ああ、許して……」

「奇譚クラブを読んで満足してたと言っただな。独りで、どんなことをしたんだ？」

「そ、そんなこと……」

「言えんと言うのか？」

私は乳房を驚づかみにした。上半身は裸、それが妖しく身ぶるいした。

「ああ、なにも、なにも、

しては、ありません。只、

只、読んだり、見たりするだけでした。その他のことは、一切、なにも……」

「何もしなかったと言っただな。それで、主人が亡くなってからはどうなんだ」

「それも、それも……」

「どうなんだ。正直に言わないと、素裸にひん剥いてしまうぞ。いいな」

私はスツールを引き寄せ、彼女の真前に坐ると、

浴衣の腰紐を、するりと解いた。浴衣が足もとに落ちて、白いズロースを一枚つけただけの裸身があらわれる。

「正直に何でも言いますから、それを取るのだけは勘忍して下さい」

「それだったら、未亡人になってからのことを正直に喋ってごらん。女盛りのこんな見事な身体を持っていて、とても、一人では辛抱できない筈だ。どうなんだ？」

「は、はい。彼が一人あります」

「彼が？ 彼があるというんか。どんな彼なんだ？ S Mプレイは、やったろう」

「いいえ、そんなことは、少しも……」

「かくしだてをするな。すっかり何もかも、言ってしまうんだッ」

私はズロースを下へずりさげた。足をバタバタさせて、彼女は、それを必死に防ごうとしたが、逆に、それが私の作業をし易くして足もとへ、その白い布片は落ちた。

「なんだ。腋の下が薄いから、こちらも薄いと思っていたら、案外房々しているナ。これだったら、剃り甲斐があると言っもんだ」

「ええッ、剃るって？」

「そうさ、綺麗さっぱり尼さんにしてしまうっていうわけさ。どうだ、うれしいだろう」

「いや、いやッ、そんなことをしたら、彼に逢えなくなってしまうすわ」

「それも、こっちの計算ずみだよ。もう二度と、他の男と浮気なんか、出来ないようにしてやるんだ。そのために、一本の毛も生えないよう、つるつるにしてやるからな」

「ああ、それだけは、やめて、お願い！」

彼女は両手を左右に拡げて吊られたまま、白い裸身をくねらす。六十キロを越すというだけあって見事な肉づきである。如何にも皮下脂肪の厚そうな腹部から臀部にかけて、むくむくと肉が盛り上がっている。

如何にも美味しそうな真白い肉の塊。それが、私の目の前で、うねうねと蛇行しているのだ。責め甲斐のありそうな女体に、私は涎を垂らしながら視線を釘づけにされる。

見ているだけでは物足りなくなって、食指を腋の下から乳房の脇、そして、お腹のまわりへと這わしてゆく。

「いい、いや、くすぐらないで。くすぐられたら、妾、たまらないもの」

「どうだ、こうすれば、擦ったいか」

「はあーい、とっても、くすぐったいです」

「彼にも、こんなこと、されるんだろう？」

「いいえ、彼は、そんなこと、なにもしませ

ん。ただ普通の……」

「ただ普通の、なんだ？」

「いえ、いえ、ただ、なにもしません」

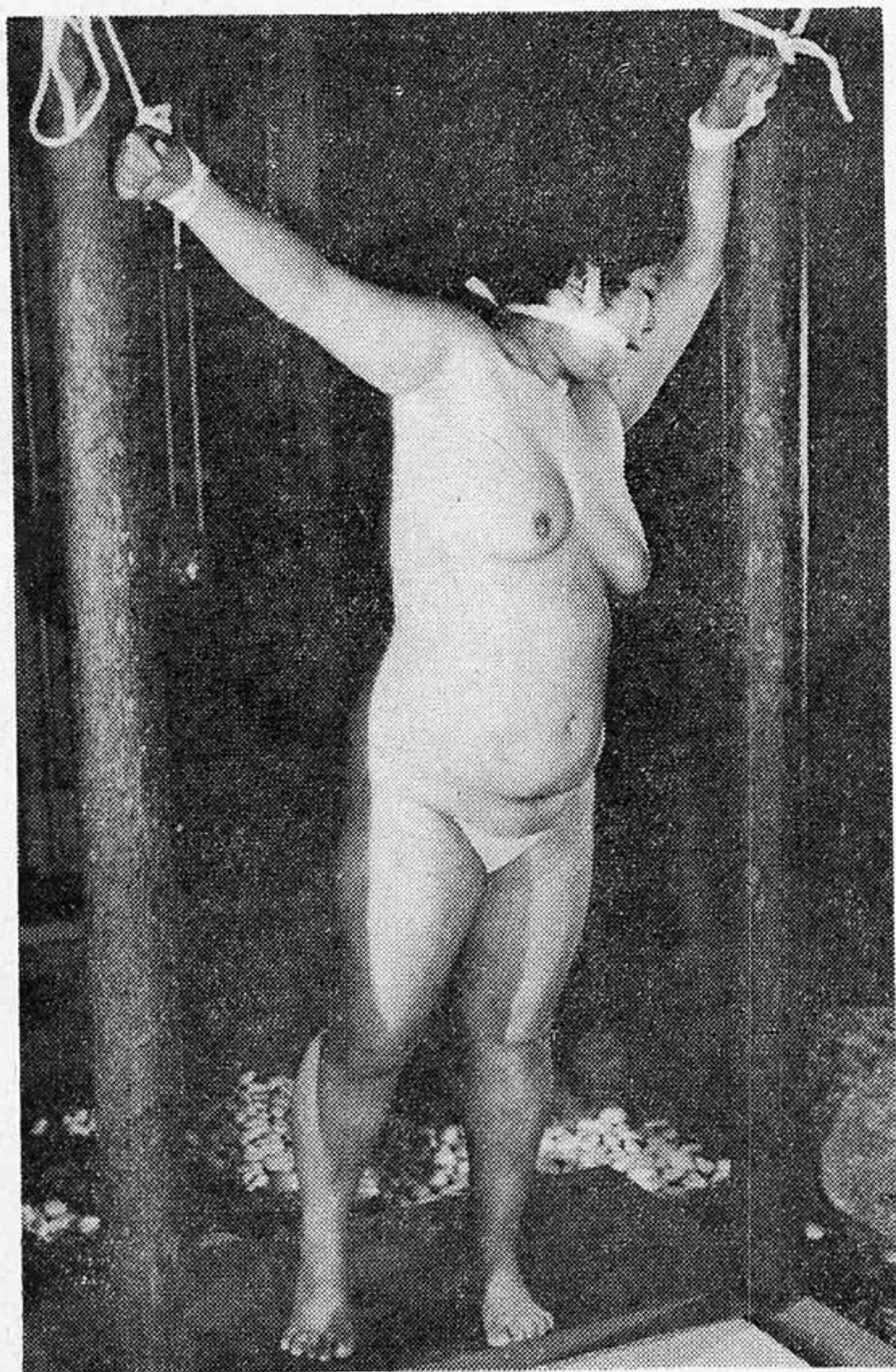
「言わないナ、こいつ奴」

私は彼女の上半身を両手で抱きしめた。むちむちと弾力性を帯びた肉塊である。見た目よりも実際に触れてみると、女の爛熟したという感じが、じかに肌身に迫ってくる。

私は浴衣の前をはだけて、ぴたっと肌と肌とを密着させた。温かくて、すべすべとした得も言えぬ生身の女の感触である。

私は、思わず、ぞくぞくとした。

彼女は何をカン違いしたのか、胸をつきだし、下半身をすり寄せ、右足を私の足に巻きつけてきた。だが私は、そんなことぐらいではゴマ化されなかった。ぱっとつき放すと、



ようやく上気しだした彼女の全身を、ゆっくりと観察した。水蜜桃のような乳房が、ぶるんぶるんと揺れていた。

剃毛の儀式

私は充電式の電気カミソリを、秘かに持ちだしてキャップをとった。

真白だった彼女の肌は、ほんのりとピンク色に色づき、飼育の効果も大分あらわれてきたようだ。私の露骨な視線を全身に感ずると恥らいに身をすくませる。

「彼との浮気は、一週間に一回ぐらいか？」

「はい、そのくらいです」

「すると、ここを剃られたら、もう彼とは浮気できなくなるわけだな」

「はあーい、ですから、そこを、お剃りになるのだけは、おやめになって……」

「そうか、それじゃ、私の訊ねることに、はっきり答えたら剃るのだけは勘忍してやる。」

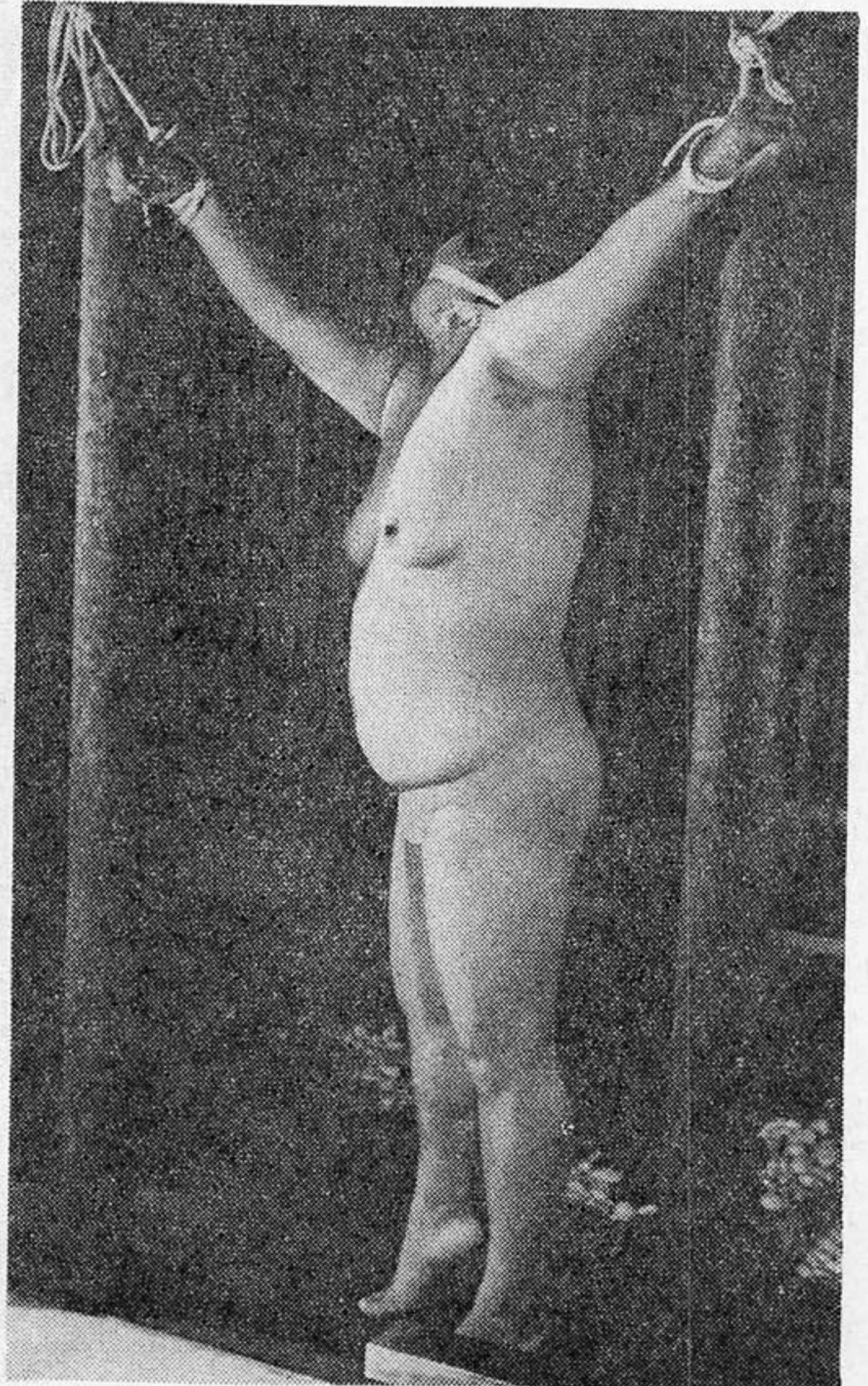
「ここは、何と呼ぶんだ？」

「そこは毛です」

「毛はわかってる。その奥の方の呼び名を聞いているんだ。言ってみなさい」

「ああ、それは、それは……」

「それは、なんと言うんだッ」



「いや、いや、そんなこと……」

「言わないナ、それじゃ、こうしてやる」

私は、かくし持った電気カミソリを、さつと当てた。周囲がバリカン式になっている、

このカミソリは、スイッチを入れるなり、ヒューという軽快な金属音と共に、纖毛がピチピチと、はねとんだ。

「ああ、やめて、やめて……」

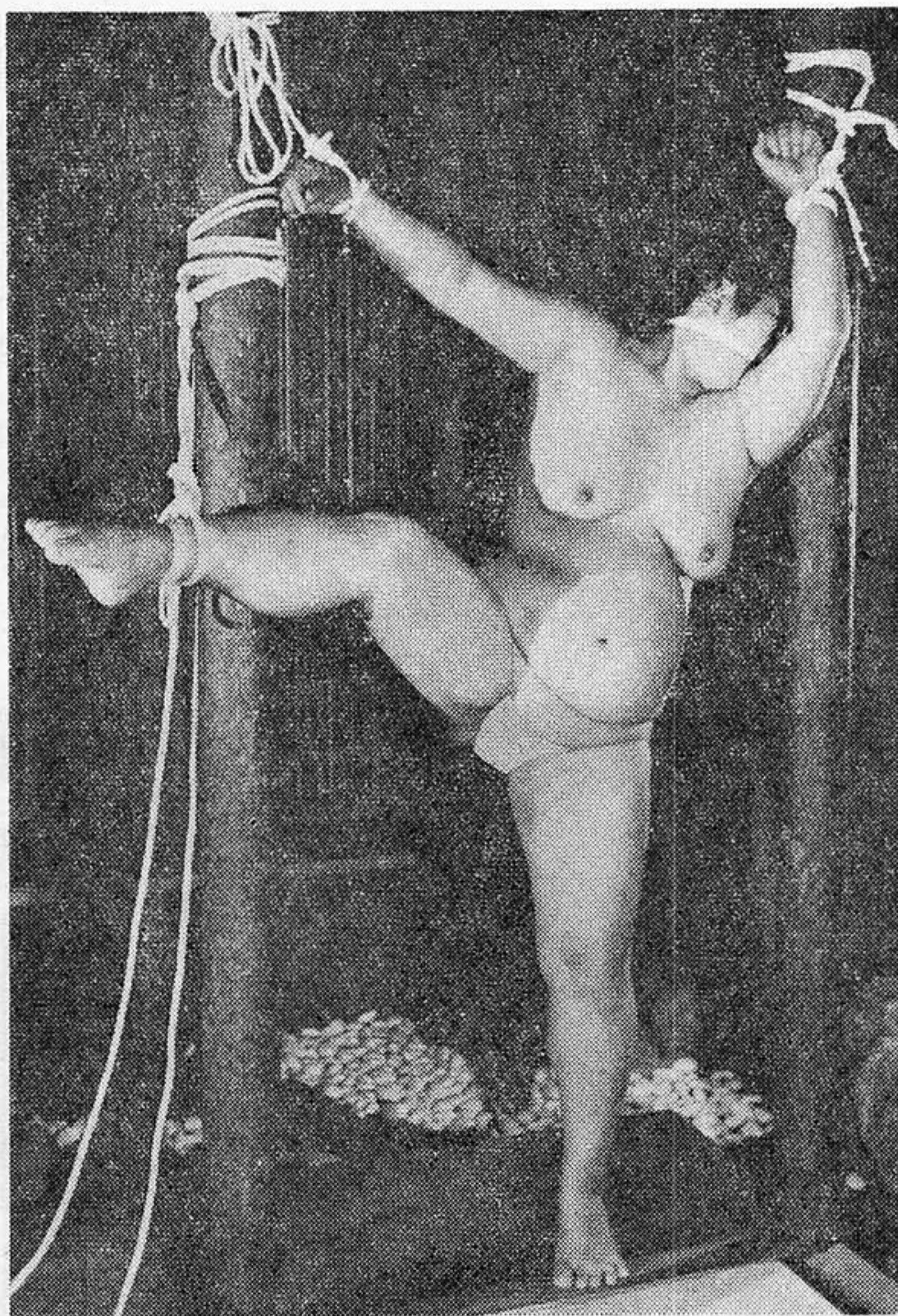
彼女は腰を引いて鋒先を避けようとするが

私は、がっかりと左手を、むっちりと肉のついたお尻にまわして引きつけているから、もう、どうすることも出来ない。

「いや、いや、いやッ」

彼女は、左右に開いた両手を振り、腰をもじもじさせて、もがくが、電気カミソリの威力はすさまじく、忽ちのうちに、密林の殆どの樹木を、なぎ倒してしまった。

さて、いよいよ、微妙な佳境へと侵入して



仕上げにかかろうとした時だった。

「う、ううう、うーむ、うーん」

突然、大きく、のけぞったかと思うと、左右にある柱に縛った縄を、きゅ、きゅつ、きゅつ——と、きしませて、両手を激しく振った。全身が、波のように大揺れに揺れ、がちりと抱えていた筈の臀部が、私の左手から

逸脱して舞うように躍りまくった。

私は、余りのことに、カミソリを離して畳の上に置くなり、まだ狂いまわっている彼女の上半身を、がちりと抱きしめた。

「うう、うー、うーむ」

彼女の顔は、完全にのけぞってしまっている。私の両腕の中の彼女の上半身は、ぶるぶ

ると、オコリのように激しくふるえている。

余りのことに、私の方が驚いた。

両手首に全体重をかけて、のけぞっているので、勢い、私が彼女の重さを支えてやるような格好になった。しばらく抱えていると、彼女の身体ふるえも止まったので、私は手を放してスツールに腰をおろす。

彼女も、やっと両足に力が入ったらしく、立ち直って、陶醉の一瞬からさめた、きょんとした目で私の方を顧り、私と視線が合うと、あわてて瞳を伏せてしまった。

前から見れば、もう完全に、つるつるの尼さんである。仕上げの時、何故、突如としてあのようなショック症状を起したのか、彼女の心の中は、私には推測できなかった。

「どうしたんだね。びっくりしたよ」

「あの、とっても、気持がよくなって。ごめんなさい。取り乱してしまっ……」

「剃られることが、そんなにまで、気持よかったのかい？ 身体中が、ひっくり返るような暴れようだったものな、驚いたよ。S Mプレイは一回もしたことがないと言っていたがプレイの経験はあるんだろう？」

「いいえ、今日が初めてなんです。こんなことされるなんて、生れて初めてですわ。両手

が、こんなに縛られていて、剃られるなんて
 気持がよくて、気持がよくて、気が狂いそう
 でしたわ」

私は、彼女の真白い肌を眺めていた。肥満
 体の脂ぎった女盛りの女体というのも、まこ
 とに魅力的である。私は、このポリウレームの
 ある肉塊をムチ打ってみたくなった。

「どんな責めが好きなんだ。言ってごらん」

「はい、一度もされたことはございませんけ
 ど、アヌスなんか、責められたらと雑誌なん
 か読んでいて思いました」

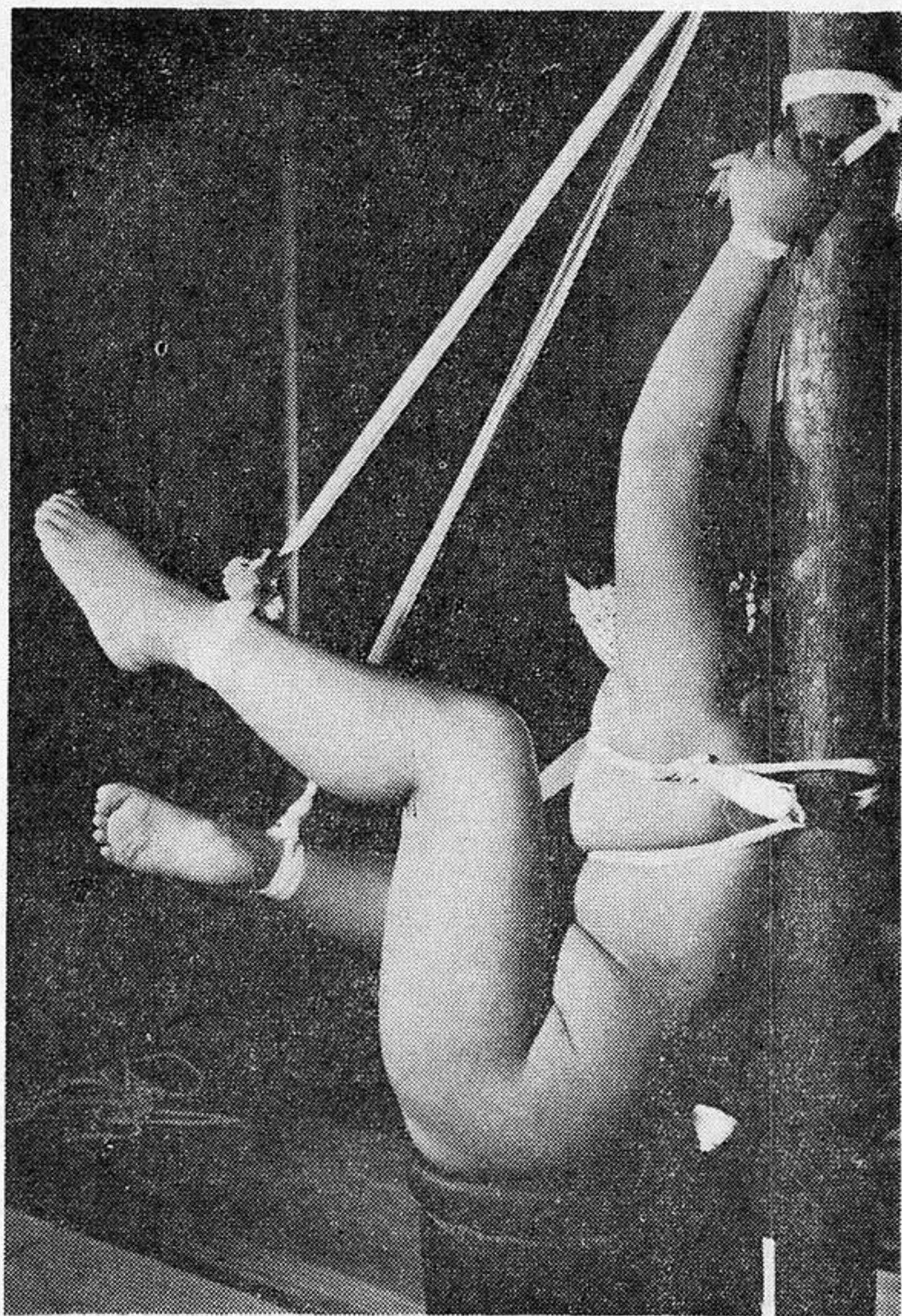
「それは、このポーズじゃ無理だから、あと
 でやるとして、ムチ打ちなんか、どうだ？」

「はあーい、されてみとうございます」

彼女の返事する「はあーい」は、一種独特
 の甘いトーンを持っていた。それは、もう、
 どんなことでも無条件で肯定するといった捨
 身の境地を、その言葉一つに集中したという
 響きで、私に迫ってきた。女の欲望を満足さ
 せたときに見せる、その後の媚態にも似てい
 た。飼育が次第に成功してきたようだ。

ムチの洗礼

足は自由だったが、両手を左右の柱に開い
 て縛られているのだから、全身それこそ無防



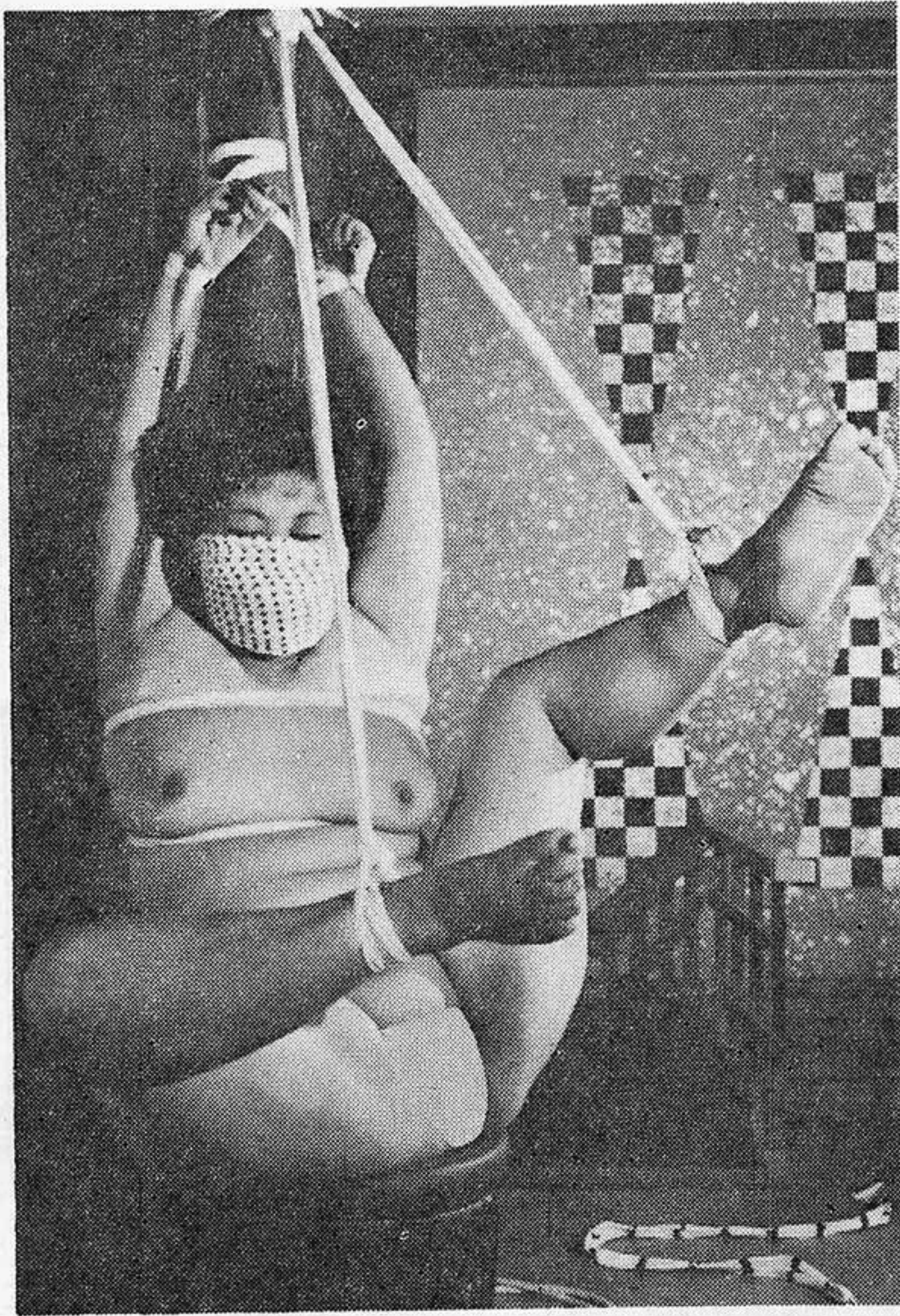
備で、前も後も晒しているのだから、ムチ打
 ちには絶好のポーズであった。

私は彼女の背後へまわると、お尻の山の少
 し上の方へ、心持ち軽く手加減して一撃を与
 えた。ピシッという小気味のよい音がしたか
 と思うと、「あッ」と口から悲鳴が洩れて、
 全身がビクッと、激しくふるえた。

予想した以上に凄い反応だ。

嘗て、関谷富佐子に対するムチ打ちによっ
 て、その素晴しさを味わった私であったが、
 それに劣らぬ反応の仕方であった。

ほんの軽い一撃が、これほどまでに、彼女
 に刺戟を与えるのだろうか。今まで未だ一回
 もSMプレイをやったことがないという彼女



にとっては、私には予想外の反応だった。

私は第二撃を丘陵の頂点めがけて、発止と打ちすえた。先が十数本に分かれた皮ムチが弾けるような手応えを手元に伝えてきて、真白い肉塊に吸いつくように喰い入った。

「あ、あ、あああ……」

左右の柱の縄目が、きゅっ、きゅっと泣い

た。白い花びらが散るように全身が悶える。

私は続けさまに鞭を揮って、臀部中心にムチの乱打を浴びせる。

「ああ、気持がいい、気持がいい、ああ」

彼女の、のけぞった口から、甘く切ない吐息が洩れる。私は齒を喰いしばってムチを揮い続けた。こたえられない悶えようだ。ズン

胴型の、あの肥満体が、まるで十六、七の娘の身体のように身軽に、右に左に狂いまわっているのである。

勢いを得て、私は、ムチの先を臀部ばかりでなく、背中、太股、腹部——へと、場所を変え、次第に力をこめていった。

「気持がいい、凄く気持がいいの。もっと、もっと、強くぶって。ああ、気持がいい」

狂ったように、もがきまわる彼女。

私は前面にまわって、太股から脇腹へかけて、万遍なく、ムチのしなやかな先を這わしてゆく。身体を左右に揺すって、悶える彼女のリズムに合わせて、時には強く、時には緩く、場所を変え、タイミングをはずして、ムチをポリリウムのある肌に、ぶち当てた。

本来、女は全身が性感帯だ。だから、身体の中の、どこへムチを当てようとも、それなりの反応はあるのだが、人によって、やはり場所によっての感度に個性はあるものだ。

私は彼女の顔だけを避けて、全身隈なくムチの洗礼を浴びせる。背後へまわって肩口から腕、太股から膝。しかし、なんといってもムチの一番の好目標は、やはり小丘のようにむくむくと肥えた臀部だ。

思いきって、力いっぱい打つことが出来る

し、手元に返ってくる手ごたえも、ズンと掌の中で躍るように素晴らしい。何の懸念もなく打ち据えられるのは、ここが第一番だ。

それに、彼女の反応も凄いものだ。

鞭撻は、尻に始まって、尻に終る——か。

肉づきのよい、お尻の筋肉がブルブルとふるえている。表面がピンク色に色づいて、淫らな臀部だ。こうして見てみると、臀部というものは、なんとエロチックなんだろう。

私は、その淫らな臀部に対して、これでもか、これでもかと、力いっぱい、ムチを揮った。臀部と太腿との境界線あたりにムチの先が当たると、一番反応が激しい。

思いつきり伸ばした両腕が激しく上下に揺すられたかと思うと、脚がくの字に曲って、両手の縄に体重が、ぐぐっとかかる。

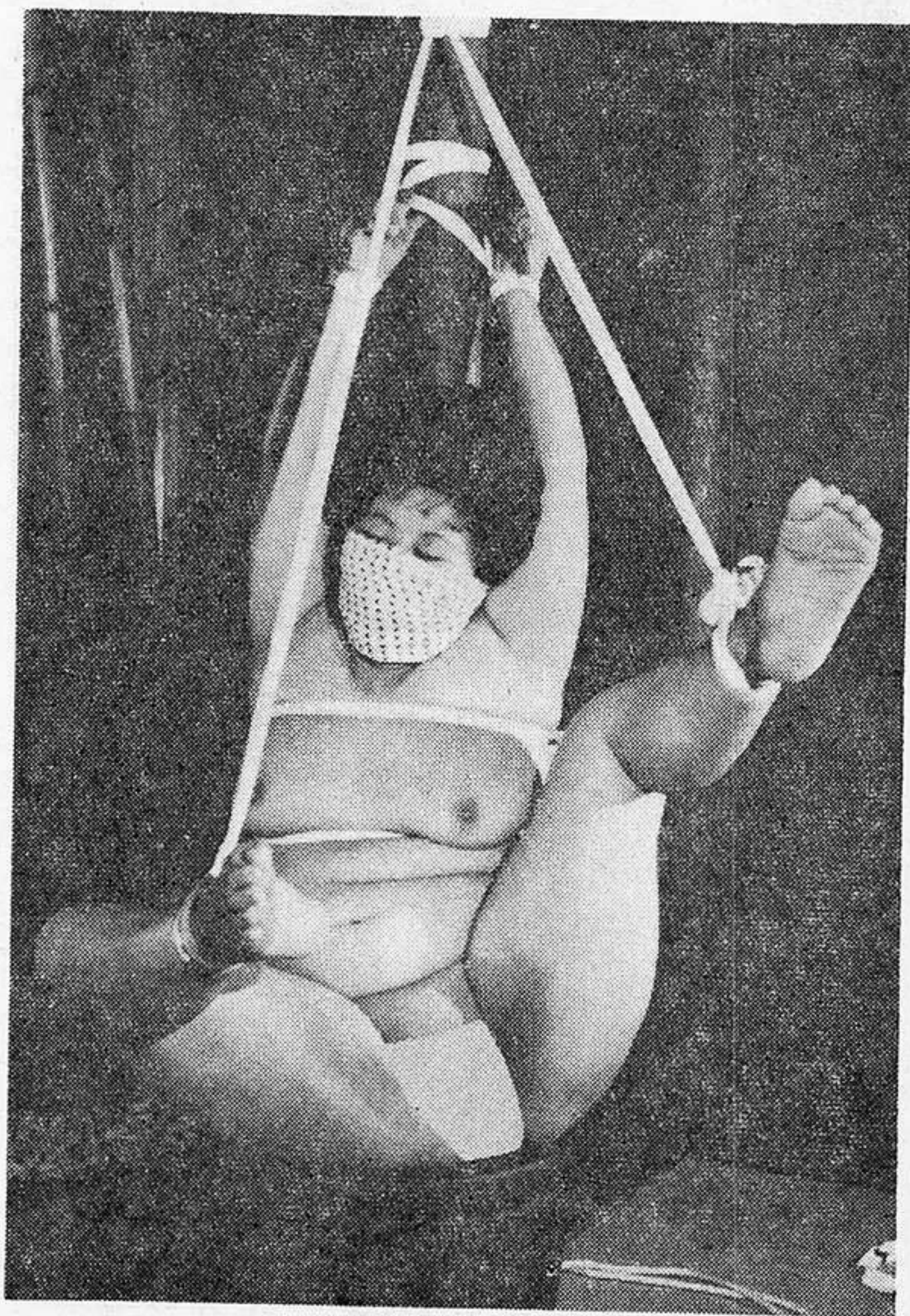
ピシッ、ピシッ、ピシッ——

力いっぱいムチがはじける。お尻の筋肉がブルブルふるえているのが、よくわかる。

「ああ、気持がいい。もっとよ、もっとよ。

ムチ打たれると、なんで、こんなに気持がいいんでしょう。気持がいいわ。身体中がとろけそうよ。もっとぶって、ぶって……。気持がいい、気持がいい。あああ、ああ」

私は、打って、打って、打ちまくった。



お尻にだけは、もう手加減しなかった。ピンク色の肌は、真赤に染まっていたが、ぶ厚い皮下脂肪に保護されて、その淫らな臀部は一層、淫らに微笑しているようだった。

「ああ、気持がいい、ムチ打たれると気持がいいの。とてもよ、とてもよ。あああ、もっとムチ打って。力いっぱい打って、打って。」

気持がいい、気持がいい。あッ、あーあッ」首を振り、両手の縄をきしませながら、いや、いやをするように、全身を揺すっていた彼女の脚が突然、もつれだした。とみる間に足が全体重を支える力を失ったかと思うと、がっくりと首を垂れてしまった。

「どうしたんだ、どうしたんだ」

私はムチを投げすてて、彼女の裸身を抱えあげる。ズシリとした重量感である。

肌は冷たい。

私は、あわてて両手の縄を解いて、抱えたまま、そこへ横にさせる。

「ムチ打たれるの、物凄く、気持よかった。こんな気持って、妾、生まれて始めて……」

彼女は私の腕の中で呟くように言って眼を閉じた。

失神のドラマ

冷房がよく効いているせいか、彼女の肌は冷たかった。

しばらく抱きしめていると、次第に生^{せい}気が

蘇ってきた。ポリウムのある肉体は抱き甲斐があり、すべすべとした濡れた石鹸のような肌は、たまらない感触であった。

胸を寄せ合っていると、彼女の心臓の鼓動が、私に伝ってきて、さっきの激しいムチ打ちプレイの余韻が、生々しく思い起される。

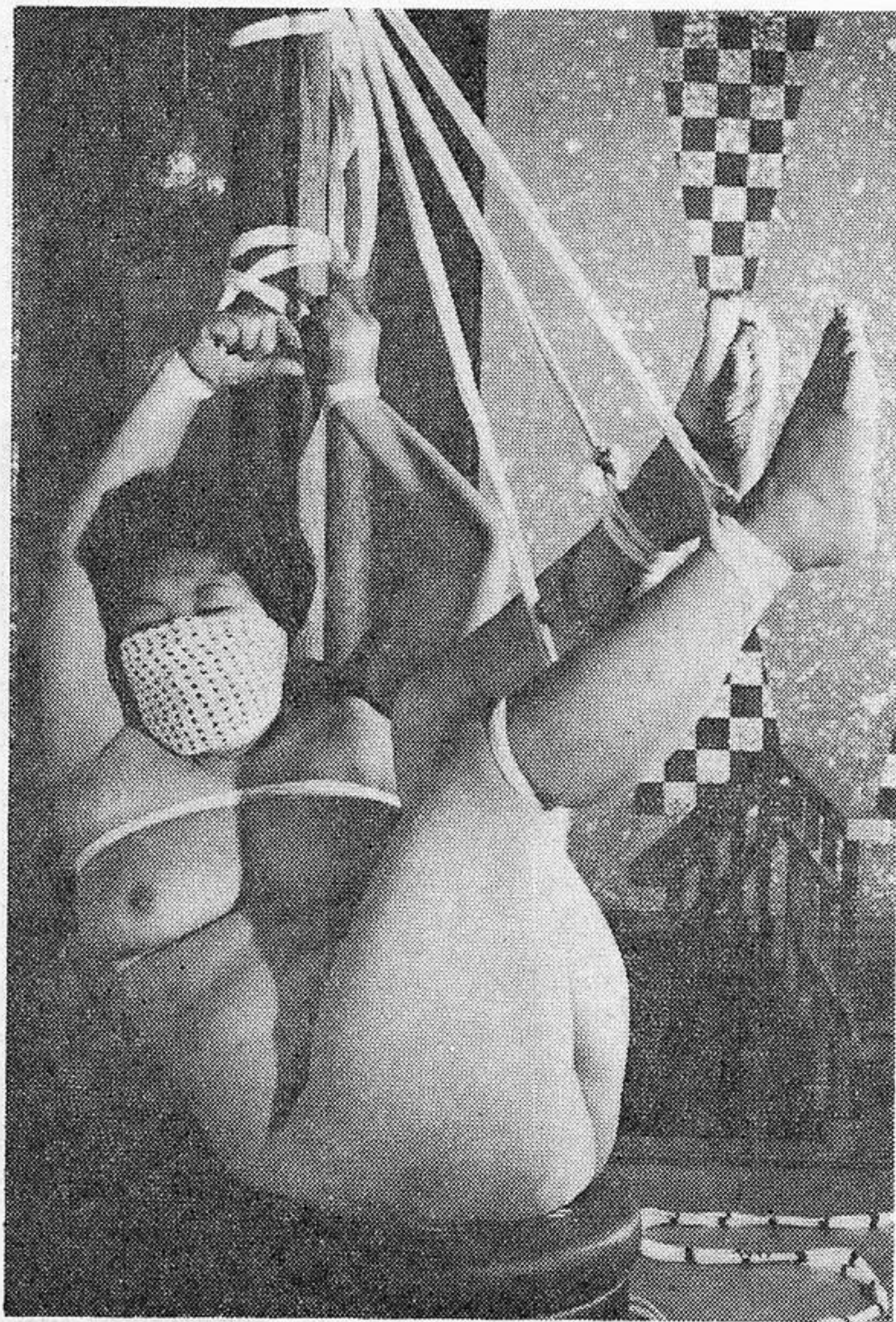
彼女は一体、強烈な縛りが好きなのか、それとも、身の置きどころのない羞恥責めが好きなのか。私は、そのいずれも、今すぐにでもやってみたかった。

しばしの抱擁。肌と肌とを、ぴったりと密着させていると、準備態勢の完全に整った彼女は、全身をすり寄せて、下半身をからませてくる。唇と唇を合わせながら、私は、次の責めのアイデアに思いをめぐらしていた。明日の朝まで、まだまだ時間は長い。一晩中、ゆっくり、ネチネチと責める楽しみが、あとあとまで、たっぷり残っているのだ。

「妾、トイレへ行きたくなったの」

私が積極に出ないので、身を起してトイレへ消えた。私は柱の附近の縄をとり片付けてから、柱の前にスツールを置いた。

こんなにブクブクと肥^こえて肉のついた肥満体の女を、柱に宙縛りに出来るとは思わなかったが、うまくゆけば、スツールを取りはず



して、結構面白いポーズが出来そうに思ったのだ。そのため、特に縛るのも、よく締まる割に、肌を痛めない晒木綿の紐を用いた。

トイレから戻ってきた彼女の浴衣を剥いでスツールの上に立たせ、両手首に別々に紐を掛けておいて、上へ伸ばさせて柱に縛る。左右の手首を別々に括ったのは、今までの経験からしてこの方がぶら下がったときに手首を痛めないからである。

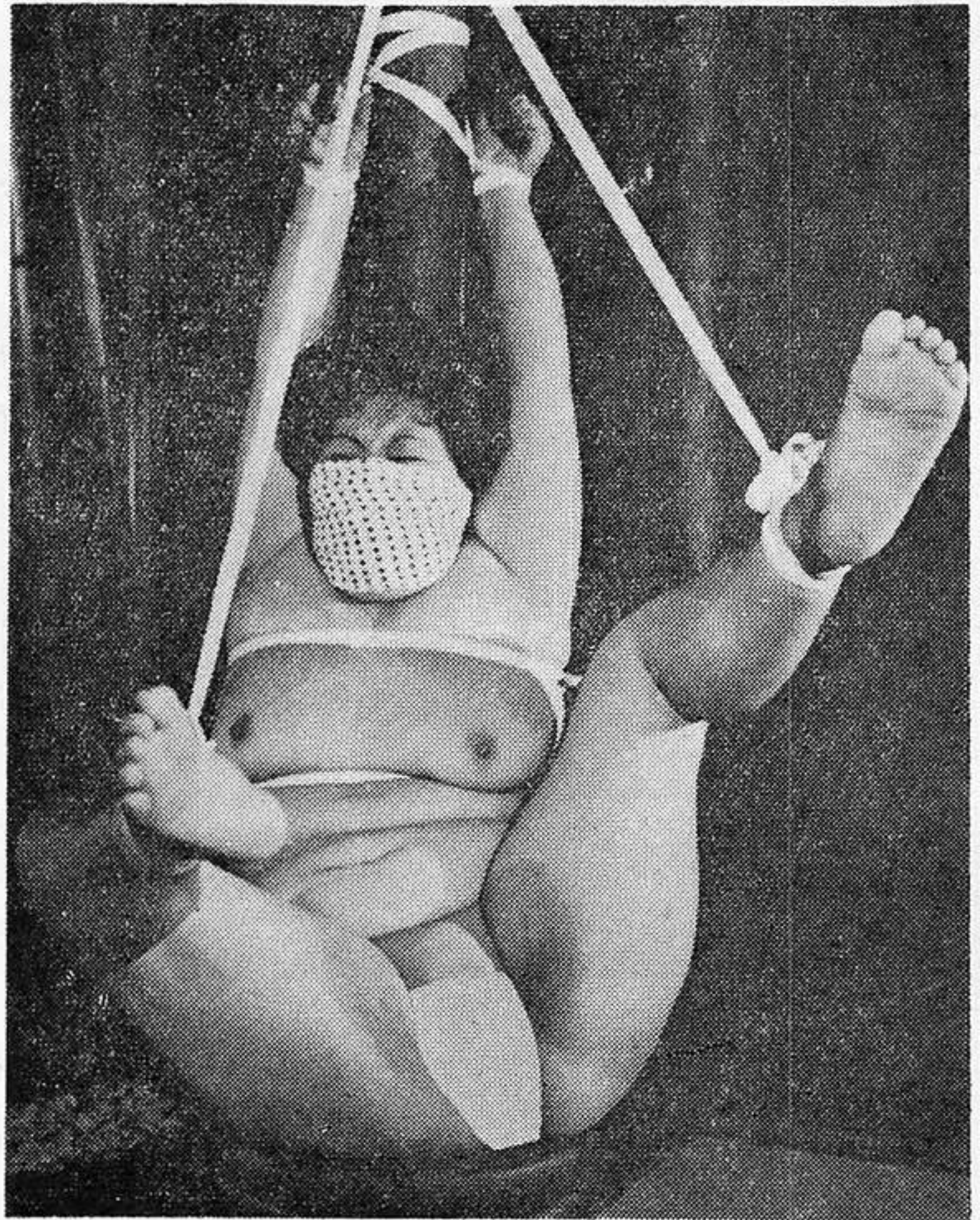
手首を柱に縛り終えろと次には胸を柱ごと縛った。

力を入れて、思いつき締めつけ、締めつけても、紐をはじき返すほどの豊かな肉づきの女体である。

「どうだ。縛られた感じは？」

「はあい、とても、気持ちいいです」

「そうか、真白い肌に、何の贅りもなく、本当に綺麗な眺めだぞ。これは、僕が一人で見ているのは勿体ないな。大勢の同好者に



見世物として見物させたいもんだな。このすべすべした白い丘陵なんか、よい眺めだぞ。みんなに、こうして、触わらしたらどうだ」

そう言って、私が晒木綿の紐を、彼女の腰へ回そうとしたときだった。

彼女の全体重を支えていた脚が、急にがっくりと力を失って、膝頭のところで、くくく

く、ときたかと思うと、突如として、全身がずるずるずる——と、柱を滑って、どしんとスツールに尻餅をついた。

それは、あっという瞬間の出来事だった。

何事が起ったのかと、私はハッとした。

私の永い女体緊縛プレイの経験でも、こんなことは始めてのことだった。

彼女の目は、とろんとして首が垂れている。

私は彼女の頬を、掌でペタペタと叩いた。

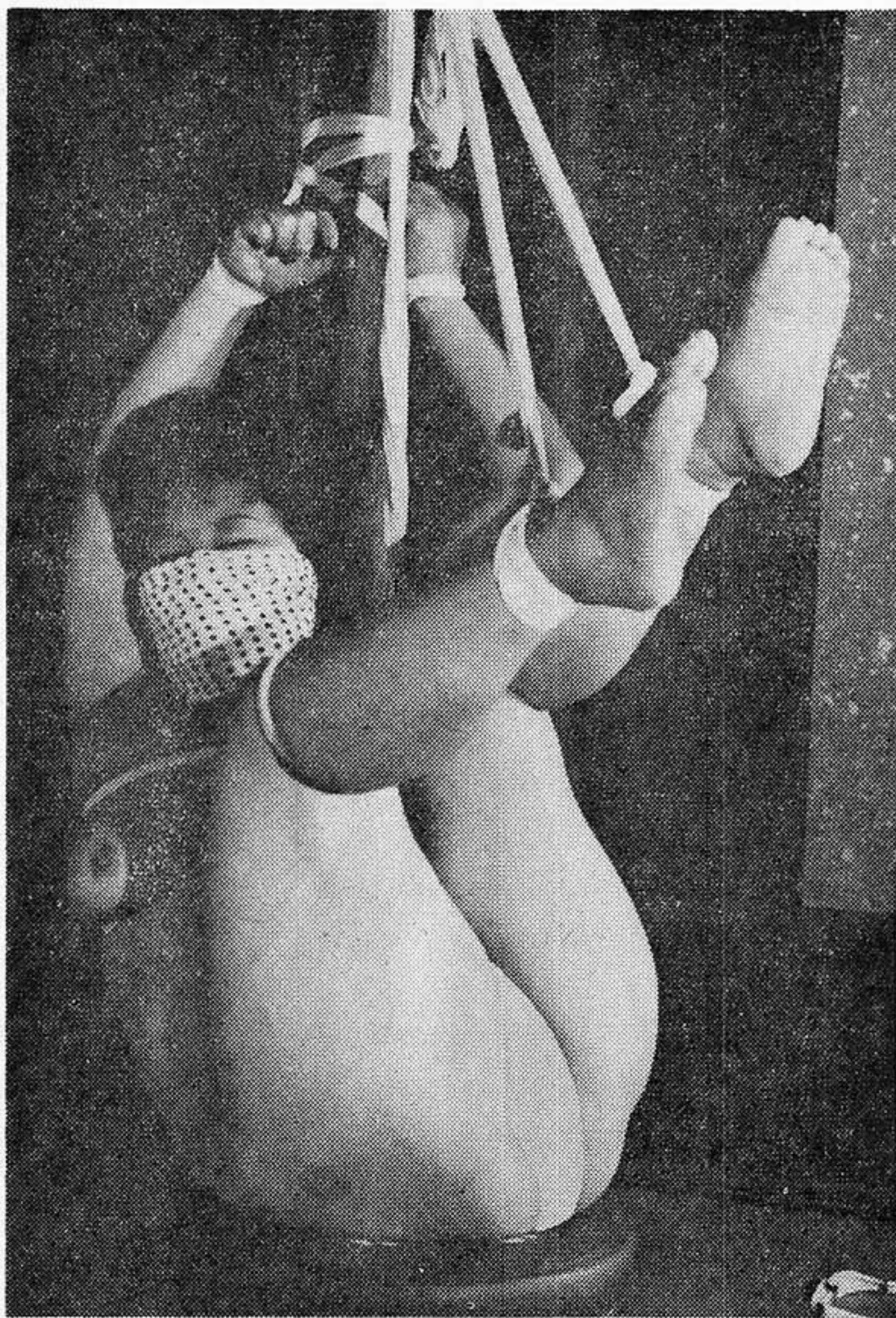
「おい、どうしたんだ、どうしたんだ」

やっと気がついて、キョトンとした目つきで、あたりを見まわしている。

「あら、妾、どうしたのかしら？」

「どうしたも、こうしたもないよ。びっくりするじゃないか。急に、ずるずると、柱を滑ってさ、尻餅をつくんだからね。何事が起ったかと思ったよ。一体、どうしたんだい」

「妾にも、何が何だか、さっぱりわからない



んです。夢からさめたみたいで……」

彼女の目は寝起きの目である。

私の問いに、やっと答えたものの、夢遊病者のように、うつろな目は中々定まらない。

それにしても、柱には堅く縛ったつもりだったのに、彼女の全体重を支えきれずに、丸い柱を伝って、よくも滑ったものだ。何とい

う木の柱か知らないが黒木のままの皮が、むくれてしまつて、柱の下や丸いスツールの上に、ちらばっている。

あんなに激しく、背中を柱でこすったのに痛くなかったのかと、私は案じたが、彼女はそんなことは一向に感じないらしく、両手を上へあげて柱に縛られた格好で、ぼんやりと

した顔つきで全身が弛緩しきっている。

そんな彼女を眺めていると、私の脳裡に、一つのアイデアが閃いた。

「よし、こうなったら、予定を変更して、活かつを入れるつもりで、一つ、思いっきり、羞恥責めにしてやるか。どんなことになるか、これは面白い見物みものだぞ」

彼女の胸を柱に縛るつもりで手にしていた紐を、足首に巻きつけて、ぐぐぐと引きあげると、紐の端を柱に括りつけた。

「いやーん、いやーん」

彼女の声が長く尾を引いたが、私は情容赦しなかった。太っている割に身体は柔軟なのか、さして力を加えなくても、足は易々と上へあがった。右の足が終ると、次は左の足である。

夢の国をさまよっていた彼女も、両方の足を高々と引き上げられると、始めて目がさめたように、全身をピンとさせた。

「ああ、どうするのよ。こんなにして……」

「どうもしないさ。お前の一番好きな縛り方にして、ゆっくりと見てやるのさ」

私の目は、当然のこととして、左右に一杯に開けきった、その中心点に熱く注がれた。

さきほどの剃毛によって丘陵地帯は、鳥取

砂丘のように、なだらかで美しいスロープを見せている。剃毛の効果というものは、こうしたときに、一番によくあらわれるものだ。道具立ては、彼女のこの立派な体格からすると、至って小作りで、それが左右対照的にシンメトリカルに、きちんと整っていて、とても数年の夫婦生活を経験した女の持物とは思えないのだ。

私は惚々として眺めていた。いつ眺めてもまた何度眺めても、見飽きない眺めだ。

「見ないで、見ないで、おネガ―イ」

「別に、わざわざ見ているわけじゃないんだよ。こんなポーズになったら、いやでも、見えるじゃないか。ねえ、そうだろう？」

「だって、だって、見られたら、恥かしいんですもの」

「大勢の人に、こうして見られたいのとは違うのか。僕が代表して、ゆっくりと眺めてやるからな。どうだ、言ってみるか？　ここは、なんと呼ぶんだ。さあ、言ってみろ」

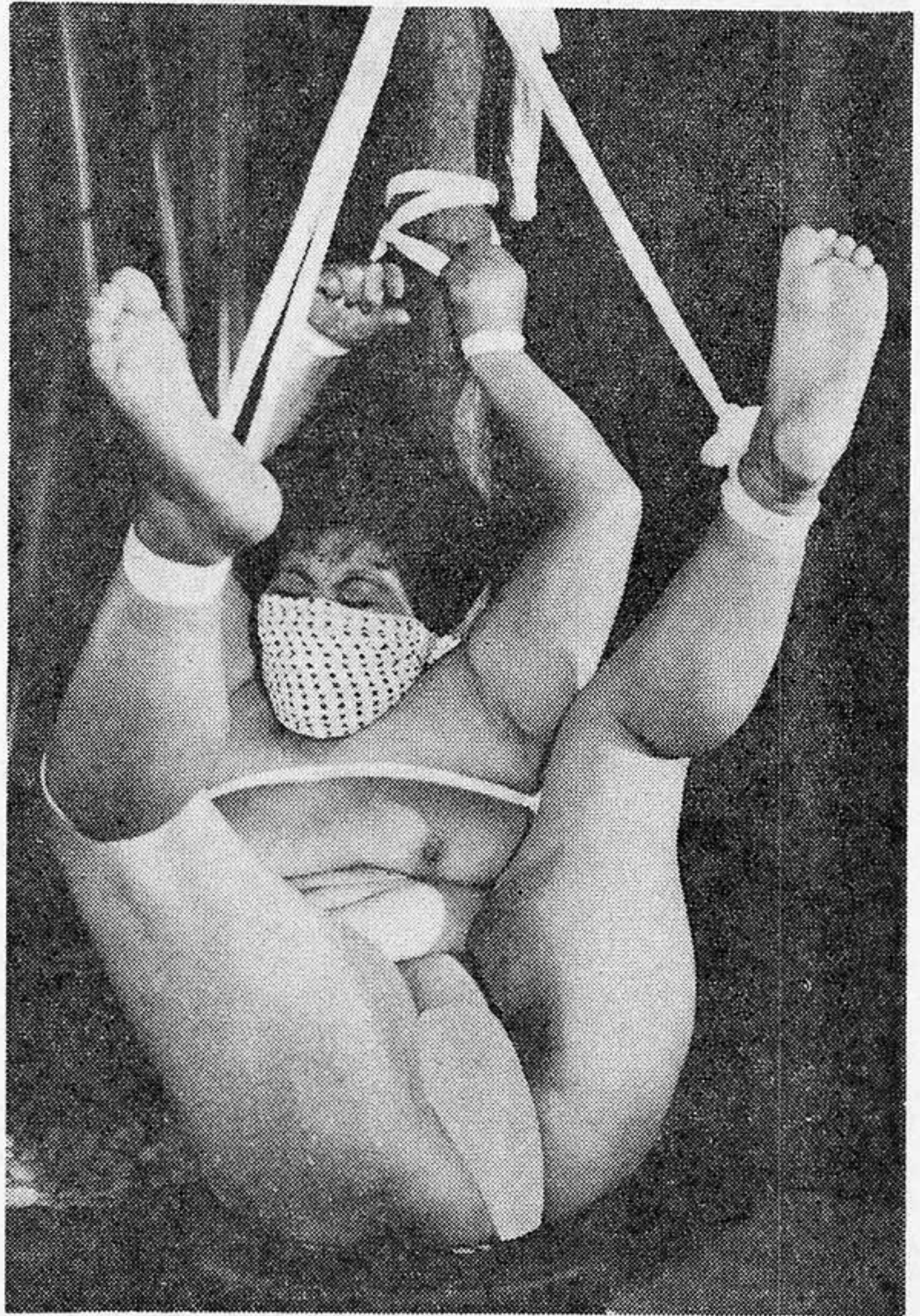
「そんなこと、そんなこと……」

「言えんと言うのか、どうだ、どうだ」

私はムチの柄で彼女の足の裏をこづく。

「イイイ、言います。言います」

「だったら、言ってみろ。言わないと、今度



は、このムチをお見舞いするぞ」

「ああ、言いますから、ぶたないで。ああ、気持がいい、縛られると気持がいい。縛られるのって、なんで、こんなに気持がいいんでしょう。ああ、気持がいい、気持がいい」

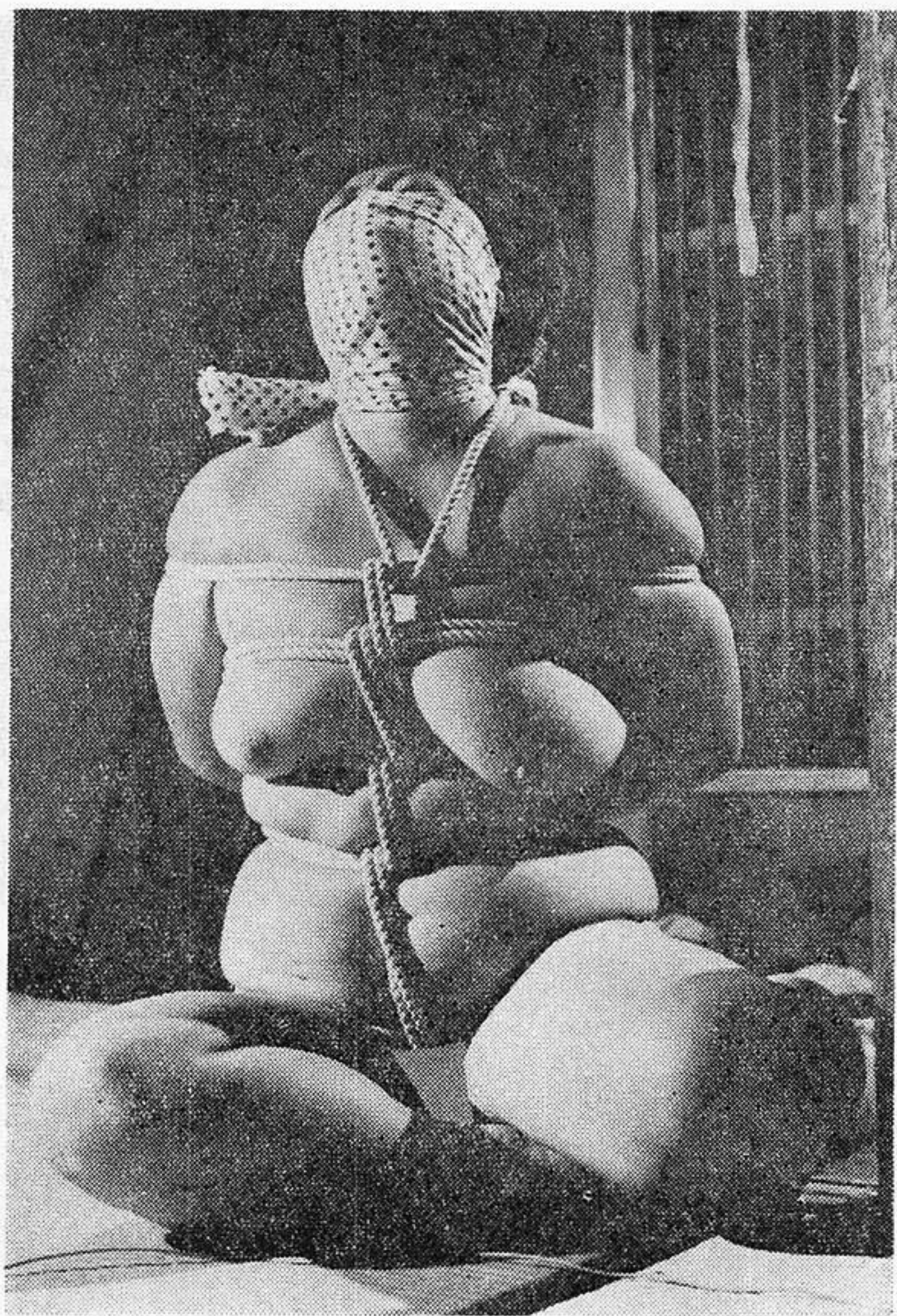
彼女の左右の脚は、私が何もしないのに大きく開いたり、すばめたりしている。

私は、ただ、じっと眺めていた。

どんな微細な彼女の身体の変化でも、一つでも見逃さないように、じっと眺めていた。

紐で引き上げられて宙ぶらりんになった彼女の白い足の裏が、右へ行ったり左へ行ったり、その動きが、次第次第に激しくなる。

「あああ、気持がいい。縛られていると、と



っても気持がいい。ああ、気持がいい」
彼女の声が、だんだんと大きくなる。

私は豆絞りの手拭を取りだして、猿ぐつわを噛ます。

「ううう、うーう」

手首と胸を括った紐が、ずるっと柱を滑って、お尻が更に前に突き出した格好になる。

ちんまりしたアヌスが、まる見えだ。

ここで私は、ゆっくりと落着いてカメラを構えた。あわてることはないのだ。まだ宵の口だ。明日の朝までプレイをやるとしたら、まだまだ、時間はたっぷりとある。

私は楽しみだった。

跪くと、私は視線を近づけていった。

十分に観察し終ってから、私はやおらバイブを手にしていた。

これは予定外の行動であったが、爛熟した未亡人である彼女を飼育し、馴化して、完全に自分の支配下に置くためには、必須の行動であった。いやバイブばかりではない、泣き喚き悶える女体に対して、私もまた野獣になっ

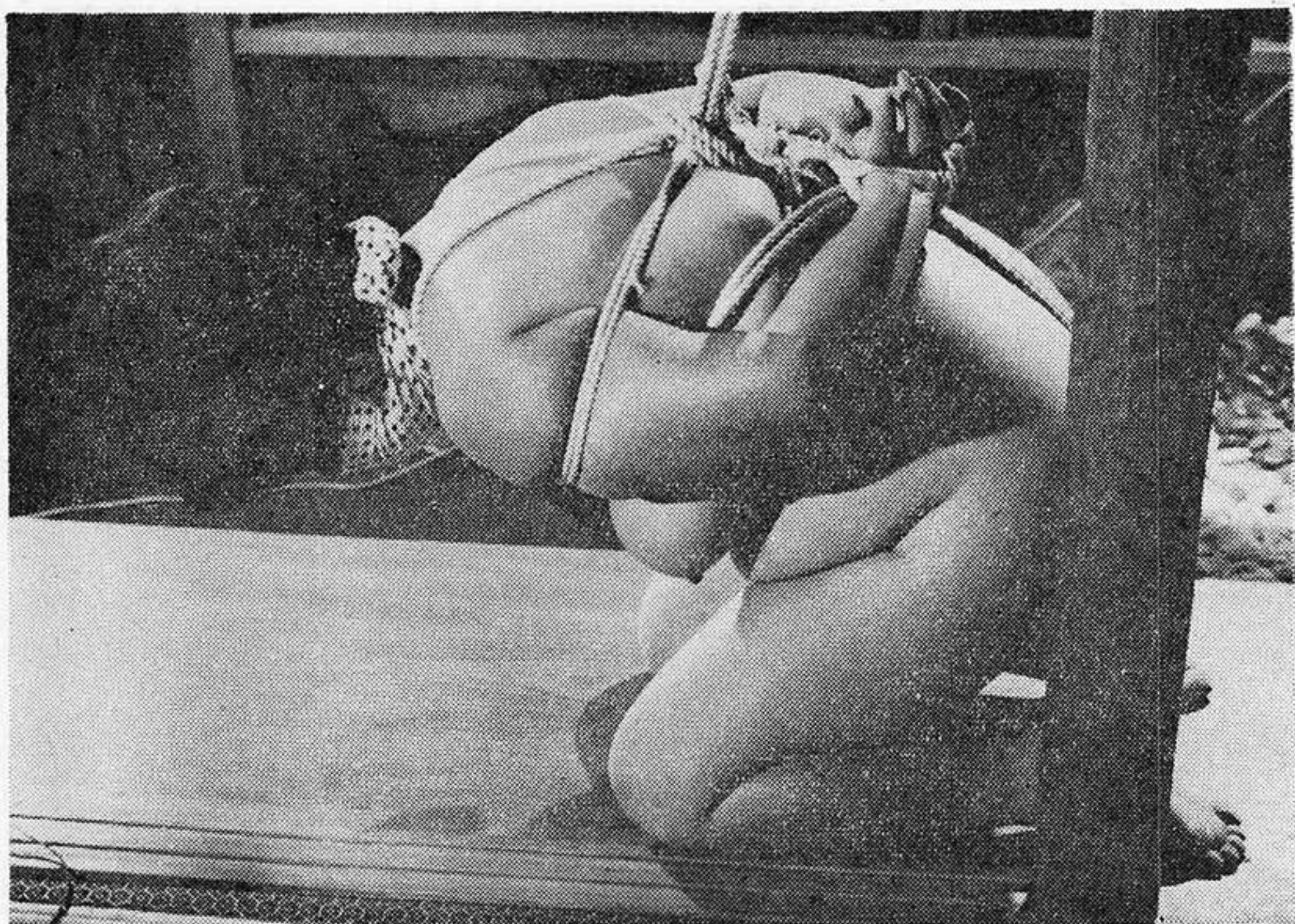
てしまっていた。
その詳述は避けたいが、私はここで、一つ感じたことがある。それはハモチ肌と名器Vの関連性である。べったりと吸いついて離れない彼女のようなモチ肌の女性は、例えば、くわえ込んだら絶対に放さないという名器の持主ということである。

一例を挙げると、普通、こうしたポーズでのバイブ責めは、禪式かT字帯式の股間縛りを施さないことには、外部へ飛びだしてしまうものである。それに彼女は、どんなに激しく暴れたって、絶対に、そんな懸念はなかった。これを見ても、彼女は如何に名器の持主か、わかるというものだ。

これを境に、二人は急速に親しくなった。

股間縛りの堅結び

ひと風呂浴びると、彼女は浴衣の襟をはだ



けたまま、私の横にべったりと座った。

「妾、縛られるのって、大好き。このまま、一晩中でも責めてほしいワ」

「フン、縛られるのが好きだって？ まだ、今まではほんの小手調べなんだよ。縛りらしい縛りって、まだやってないんだ。あんなのは、縛りのうちには入らないね」

「そうなの。だったら、これから、もっと変った方法で縛って下さる？ 妾って縛られるの、大好きだわ。縛られるって、こんなに素晴らしいものだとは今まで知らなかったわ。気持がよくって、気持がよくって、たまらないのよ。妾、どんなにされてもいいの。死ぬまで、こんなにして責めて頂戴」

彼女は肉づきのよい身体

を私にすり寄せ、ぐいぐいと、押しつけてくる。木石ならぬ身、いや、至って好色で助平な私は、たまらなくなつて、思わず彼女を抱きしめた。

「妾って、どこの誰だか、わからなければ、どんなことでもするわ。沢山の人の前で、見世物にされてもいいの。本当は、犯されるところを、みんなに見られたいの。実はネ、編集長へ、お出しした手紙の住所は、お友達のとこなのよ。あとで、貴男にだけ、私の住んでいる住所と電話番号、お知らせするわ。電話を下さったら、いつでも、どこへでも飛んで行きますから……」

彼女は熱い吐息を私の耳朶に吐きかける。

「それじゃ、ぼつぼつ縛ってみるか」

私は、やおら立ち上がった。

私の手にしたのは、白い綿ロープだった。このロープは肌に密着して、痛々しいくらいよく締まるのだが、また、それだけに、縄目の痛さも相当なものになる筈だ。

私は、ゆっくりと肥り肉の弾力性のある肌にロープを掛けていった。オーソドックスな高手小手縛りである。私が縄を白い肌に喰い込ませる度に彼女はふーッと熱い息を吐く。

「縛られるのって、とても、気持がいいもの

なのね。たまらないわ。もっと、もっと、きつく縛って頂戴！ 気持がいいのよ」

縄を捌いている私の方へ身をすり寄せて、倒れかかってくる。

「待て、待て。そう、あわてるな。これから息も止まるくらいの、凄い股間縛りをやってやるからな。楽しみにしてるんだ」

むっちりとした肉がついている割には、後手首が案外よく上がる。私は高手小手の縄止めをしておいてから、別の一本のロープを取り、二つに折って、さっと首に掛けると、二本を一本にまとめて胸の縄に通す。本当は、ここで堅結びにしたかったのだが、縄に対する彼女の余りの反応の素晴らしさに、ついつい、手の方が先に先に行ってしまったのだ。

その代り要点へ来たところで堅結びの団子を作って双丘をくぐらせ、背後の後手首の結び目へ連結させた。さて、この股間縛りが果して、どのような効果を発揮するだろうか。縛り終るなり、彼女はもう立ってはおれないように、くたくたと畳に膝をついた。

「あーあ、気持がいい。縛られると気持がいいわ。縛られるのって、なんで、こんなに気持ちがいいんでしょう。ああ、あーあ」

「おい、おい、プレイは、これからなんだか



らな。また失神するなよ。ちゃんとせんか」

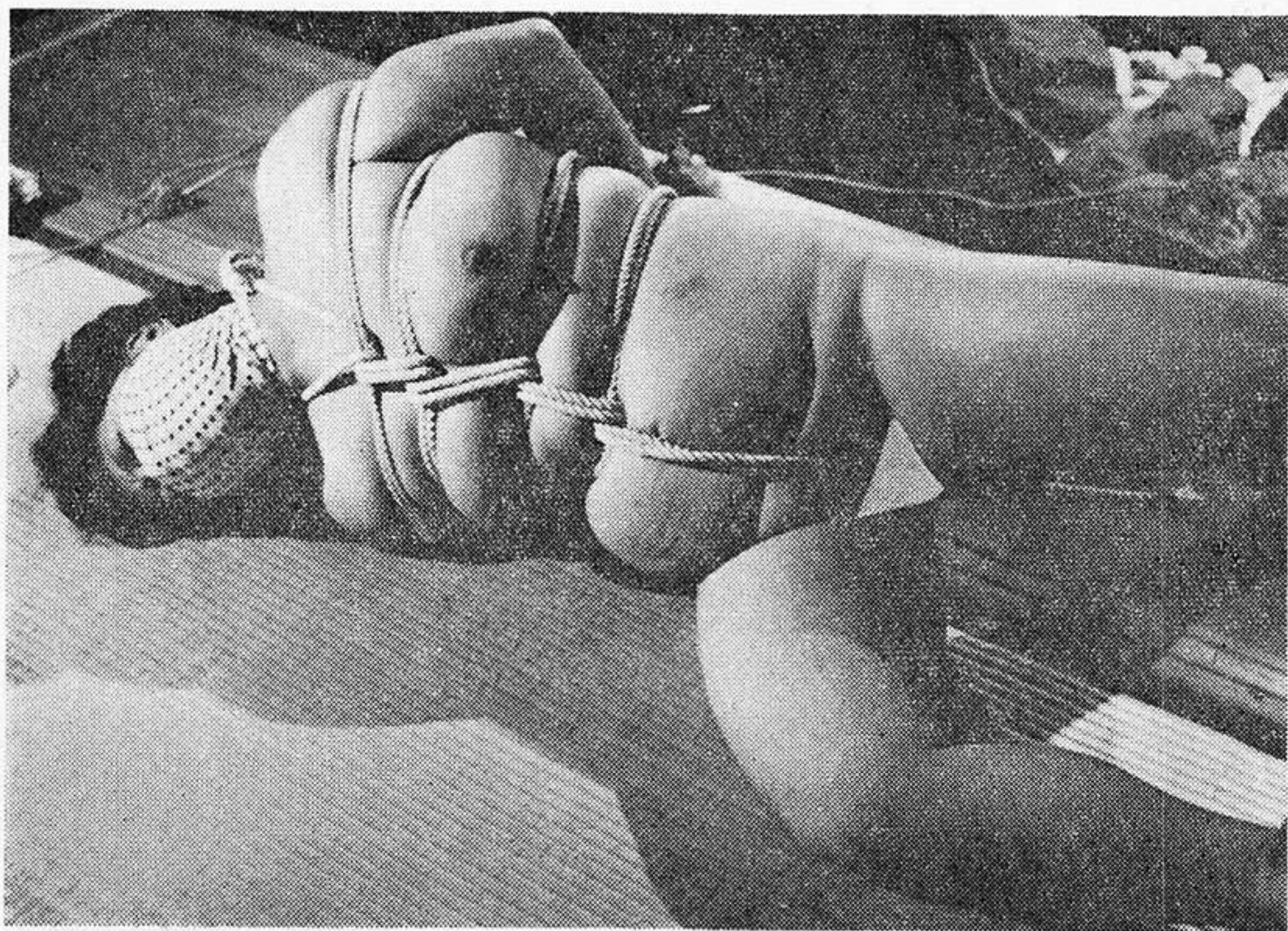
私は、ともすれば倒れそうになる彼女の裸身を支える。俵を縛ったように、乳房も、二の腕も腹部も、むっくりとくびれている。肌の色が白いので電光に映えて見事に美しい。

「うん、なかなか、よい眺めだぞ。お前も縛られると万更、捨てたもんじゃないな。マニアの人に見せたら、さぞ喜ぶだろうよ。肥満

体が好きな人も案外、多いもんだぜ」

「ああ、気持いい、気持がいいわ。縛られたら、とってもいいの。あああ、このままだったら、恥かしい言葉が出てきそう。早く、早く、猿ぐつわを噛ませて、お願い！」

「どんな露骨なことでもいいから、遠慮せずに言ってごらん。聞いてやるから、さあ、恥かしがらずに言っごらん」



「いや、いや。そんなこと
言えないわ。とっても気持
がいいのよ。縛られている
と、たまらなくて、気狂い
になりそう。早く、猿ぐつ
わをして。そうしたら、妾
に、どんなことをしてもい
いから、猿ぐつわだけして
お願い、ねえ、お願いよ」

彼女の目は真剣味を帯び
て、妖しくキラキラと光っ
ている。プレイとはいえ、
迫力のある願いだ。私は自
分の靴下をまるめて、彼女
の口の中へ押し込むと、そ
の上から豆絞りの手拭で、
しっかりと括った。

猿ぐつわを噛まずと同時
に、彼女の重量感のある裸
身は、どたりと仰向けに倒
れた。

「うう、ううう、うーむ」
ぎゅっと縦縄が締まって
思わず彼女は腰を浮かして
のけぞる。だが、そのまま

では少しも、じっとしていない。ごろごろと
横にころがったかと思うと、また、仰向けに
なって、のけぞる。

私は、じっと、そんな彼女を見ていた。

素晴らしい緊縛女体の、もがきようである。

私の胸の中に兆した熱い熱い塊りが、次第
に大きさを増してきたかと思うと次の行動を
促す。彼女の悶えは、いよいよ激しく、ころ
げまわって、とうとう縁から頭を落してしま
う。私は何もしないで、只、見ていただけな
のに、彼女の、この大袈裟なもがきようは、
一体、どうしたことだろう。

私は仰向けになって首を縁の外側へ垂れて
いる彼女を見た。背中の下になった後手首も
痛そうだし、必死になって腰を浮かしている
縦縄も、とても痛そうだ。首筋に手を差し入
れて、そっと起してやる。

「むむ、むーむ、むむむ」

猿ぐつわの下で彼女の声が洩れるが、何を
言っているのか、わからない。

縄目は豊かな肌に、よく喰い込んでいる。

私はあいた掌で、縄でくびれて、飛びだした
肌を静かに擦ってゆく。彼女の全身がビクビ
クと、ふるえているのが、よくわかる。

私の手が盛りあがった乳房の尖端に触れた

とき、彼女の呻き声が一番ひどかった。私は興にのって、彼女の全身を隈なく掌で擦すりまくり、その反応を楽しんだ。すべすべとした餅肌は、掌に吸いつくようで快い。

縁からころげ落ちそうな彼女を、柱の附近まで抱き起して、後手首の縄尻を柱に縛りつける。移動させるたびに、縄目が肌に恐ろしいほど喰い込んで、その度に、苦痛に耐えきれない呻き声が洩れる。

私は、そんな彼女の右足首に縄を結びつけると、ぐうーっと引きあげた。豊かな肉づきの太股が開いて、脚がくの字に曲り、たっぷり肉のついた全身が縄目にくびれながら、妖しい躍動を続ける。

見事にも美しい緊縛肢体である。

肥満体というスタイルの悪さが、全身に縄を掛けられることによって、これほどまでに美しく変身するものなのだろうか。

剃毛のあと爽やかに、股間縄が、その役目を完全に果たしているのを、私は自分の目でしかと確めながら、あまりの美しさに、うっとりとし、暫し眺めているのだった。

私の舐めるような視線を感じると、全身を芋虫のように、うごめかして、うねうねと、もがくが、後手首と足首との二筋の縄で固定

されているので、さっきのように、ごろごろと、ころがってゆくわけにはいかない。ただ、その場で微妙な全身運動をつづけている。全く美しい縛られた肢体である。

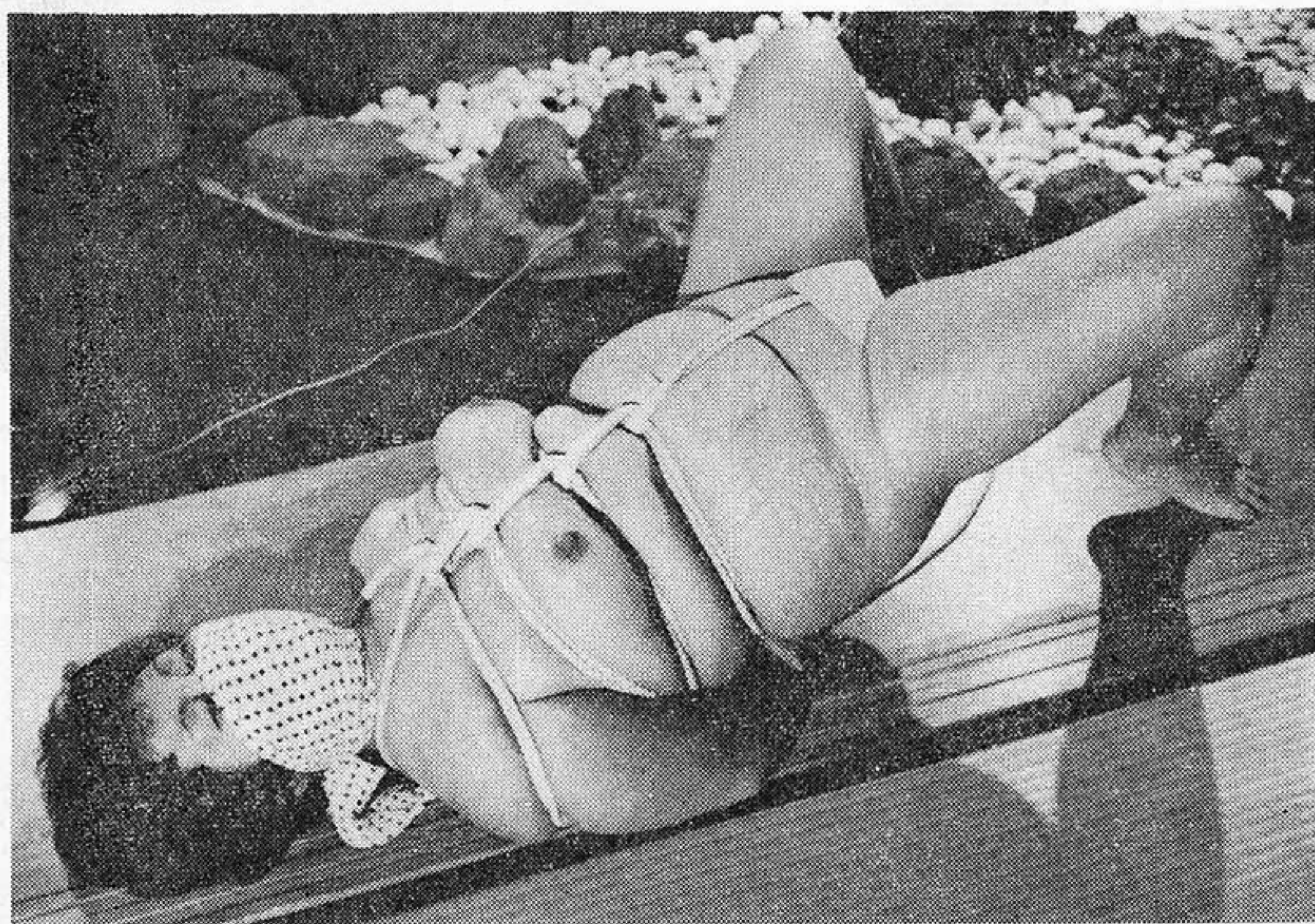
私は、いつまでも見惚れていた。

白豚命名式

この部屋へ入ってから、もう、どのくらいの時間が経ったろうか。私には時間的な感覚がさっぱりなかった。三日も四日も経ったような気もするし、また、来てすぐのような気もする。腕時計を見ると、十一時十五分を指していた。

疲れも感じないし、眠くもなかった。身体中が、かっかど燃えているような感じだ。

浴室から出てきた彼女を



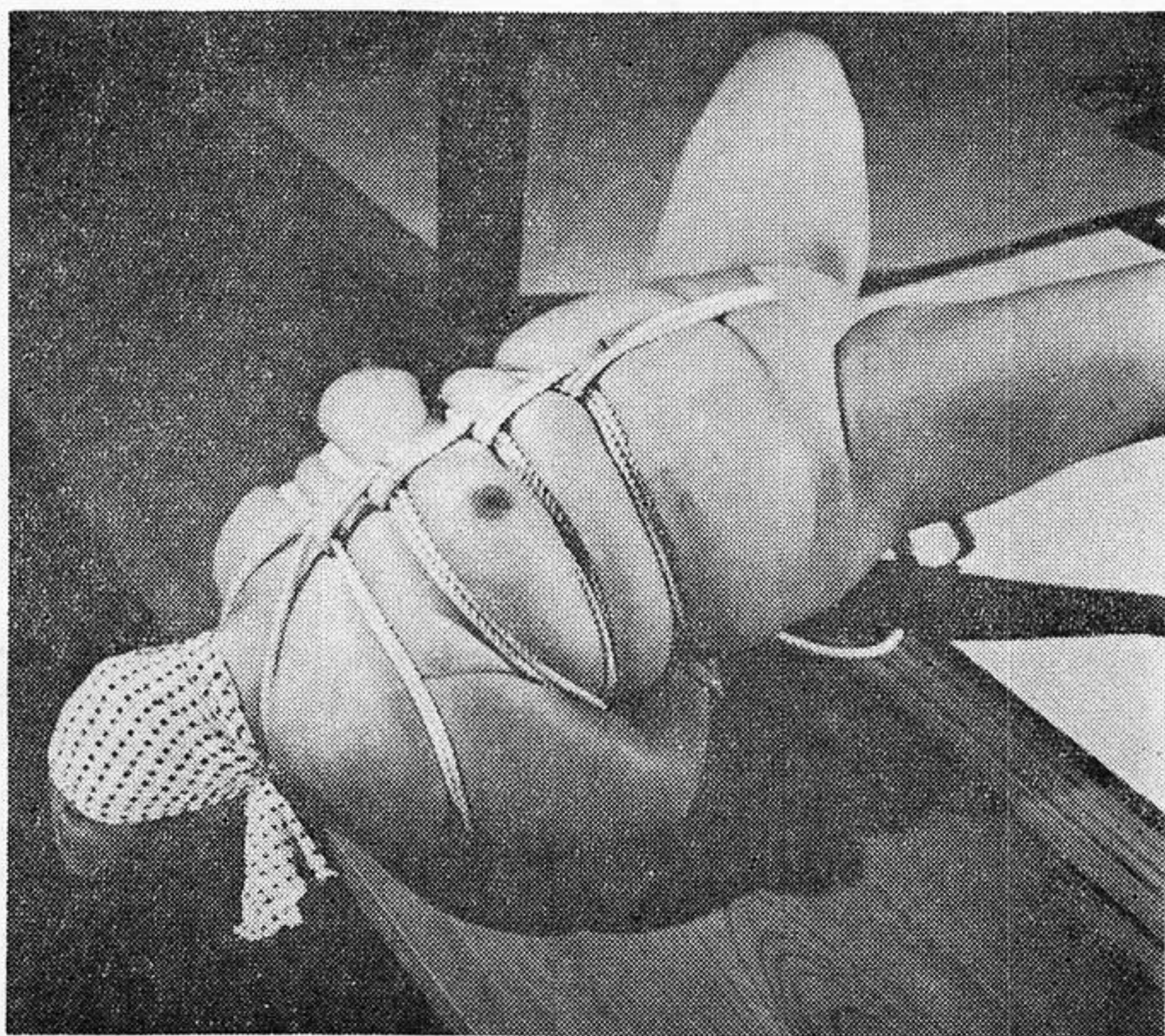
手招きして、呼び寄せる。縄から解放された彼女は、さっきのあの狂態とは、こと変り、乙女のような恥じらいを見せて、私のそばへ、いざり寄る。

乙女の恥じらいを見せてはいるものの、乙女と違うところは、爛熟した女の色香を、全身から、ぶんぶんと発散させて、次の責めを期待して身を投げだしてきていることだ。

風呂を浴びてくると、新しい女として生まれ変り、今までのゆきがかりは一切忘れて、次のプレイに没入できるというのか。今、私のそばにびたりと寄り添ってきた彼女は、至って新鮮に見えた。私もある時期、一風呂浴びさえすれば、直ちに、スタミナが回復して、新しくハッスルすることが出来た、自分を知っている。彼女もまた、よく風呂へ入る。その度に、新しい女として私の前にそのあくなき痴態を開陳して見せるのだ。

「どうだった？ さっきの縛りは？」

私は、彼女の腰紐をほどいて、浴衣の前を
はだけ、白い肌をあらわにしながら訊ねる。



乳房の上下や腹部には、赤味を帯びた縄目の痕が、くつきりと残っている。

「ええ、とっても気持がよくなって、
くって、たまりませんでしたわ。縛られるの

って、なぜ、あんなに気持がいいんでしょう」

「それはね、この豊かですべすべした貴女の肉体が素晴らしいからだよ」

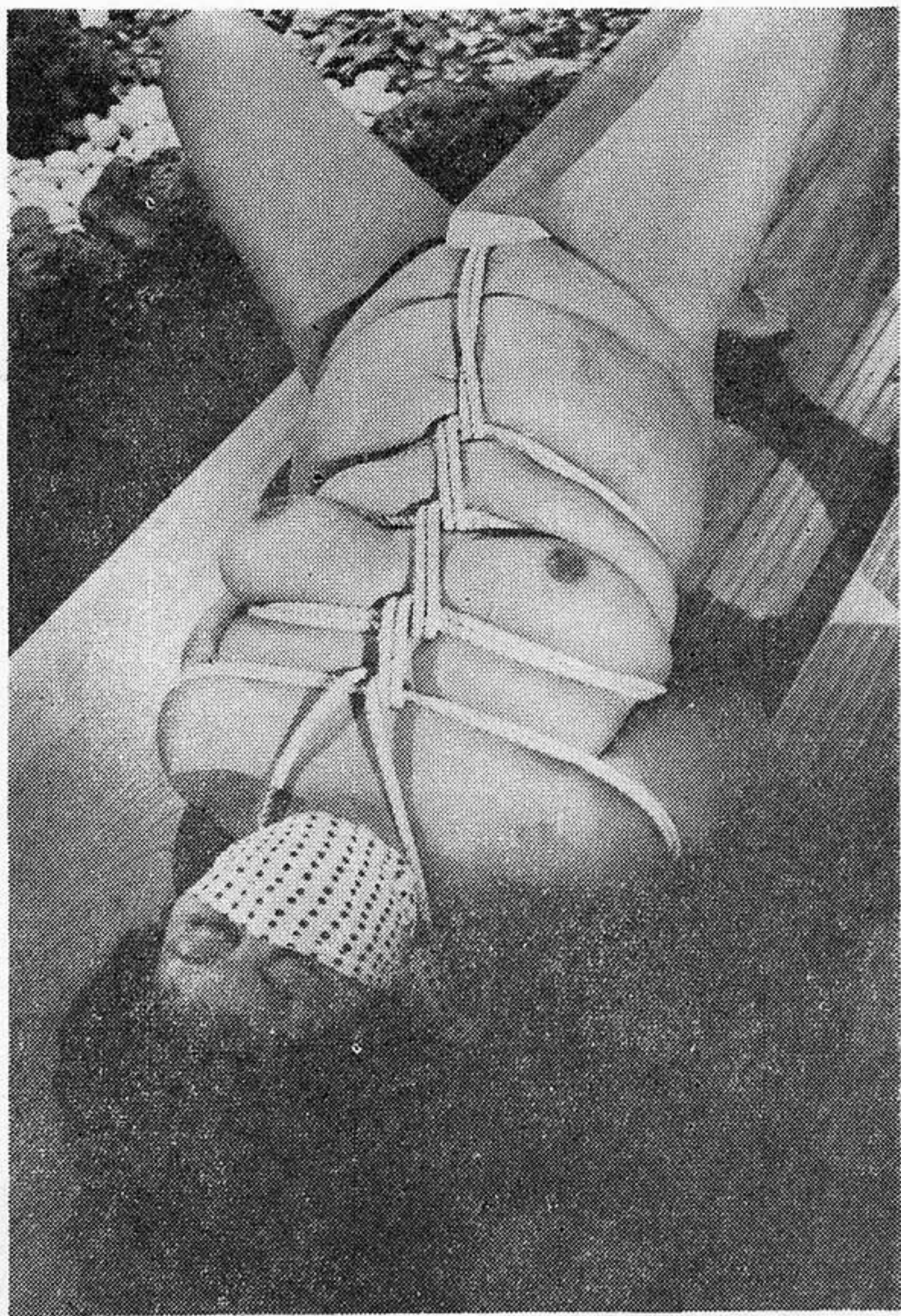
私は掌を縄目のついた胸や腹に這わせて、その感触を楽しんでから、パツと浴衣を剥ぐと彼女の裸身を抱き寄せた。二の腕と手首には窪んだようなむごい縄の痕が残っている。

「ほらこんなに凄い痕が残ったよ」

「いいんです。妾、着物ですから……」

「そうか、それだったら、安心して縄の痕でも、ムチの痕でもつけられるって、わけだな。さっきは、猿ぐつわをして、喋れなくしてしまったが、目からは涙が出ていたね」

「それは嬉し涙かも知れませんわ。妾、今度生まれて始めて縛られたんですけど、縛られるのが、こんなに気持がいいって、知りませんでしたわ。気持がよすぎて、ふっと気が遠くなってしまうの。そのあとで、はっと気がついて、眠っていて目がさめたようになるんですから、その間、自分がどんなことをして



いるか、どんなことを喋っているか、わからないので、恥かしくって……」

「そんなときは、私は出来るだけ、写真を撮ることにしてるんだが、テレコを持ってきたら、声も録音できて面白かったのになあ」

「まあ恥かしい。そんなこと嫌だわ」

口では嫌だわ——と、言っているが、万更

でもなさそうに、指先を私の手からませてくる。

「あの、妾、お願いがあるんだけど……」

「なんだい？ 言ってごらん」

「妾、ケモノにしてほしいんです」

「ケモノに？」

「はあーい、動物のケモノにしてほしいの」

「うん、それはいいな。ケモノとすれば、色が白くて、ぶくぶく肥えているから、さし当り、白豚って言うところだな。バークシャーじゃなくて、ヨークシャーだ。どうだ、この肉づきのよいこと。ぽちゃぽちゃだ。毛も剃ってしまったし、白豚そっくりだ。肉豚として屠殺するまで、思いきり弄んでやるか。よし、それじゃ、これから△白豚▽と命名してやる。さあ、白豚、足を舐めてみる」

風呂へ入ったとはいえ、今まで、さんざんそこら中を歩きまわった足だ。責め手の男の足の裏を喜んで舐めるようになったら、マゾ女の調教も相当高度に進捗したことになる。

私は足先を彼女の方へ差し出した。

彼女は両手でそれを受けると、足の拇指をすぽっと口に含み、ちゅっちゅっと、吸いだした。それは、如何にも美味しいものを口にしているといった吸いようだった。

私は、足の拇指の裏に微妙に動く彼女の舌先の擦ったさばかりでなく、一匹の白豚と化したアニマル女に対する優越感で、急激に全身が昂揚してきた。足をそのままにしていると、拇指から他の指へと口を這わしてゆき、舌を指と指との股へ、くぐらせてゆく。

私は、そんな彼女を冷ややかに見下ろしな

がら、暫く足をまかせていた。足を舐め終った彼女の口は、すぽっと指を抜くと脛へ吸いつくように、喰いついてきて唾液を出しては舌で、こねまわしてくる。

脛から太股へ、そして臀部へ。やがて、白豚である彼女の最も好む場所へと、口と舌との共同作業は移動してゆく。

人間の身体の中で、外部へ向って開孔している部分は幾個所がある。その殆どは粘膜と皮膚との境界線で、また感覚も鋭敏である。

白豚の開孔部の一つである口は、その舌という巧みに動く手兵をひき連れて、やはり、私の身体の開孔部を狙ってくるのである。

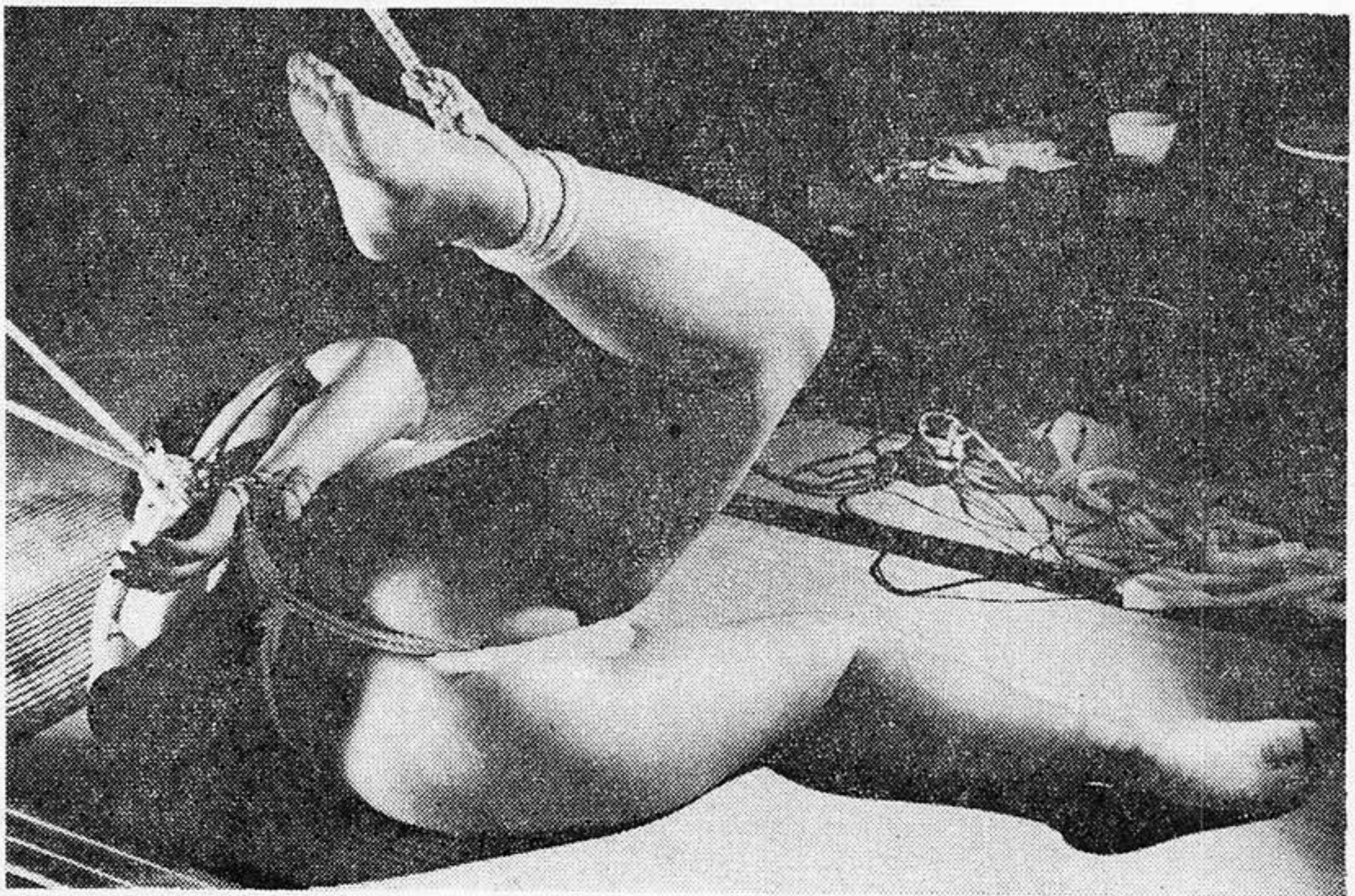
相手がケモノになりたければ、こちらもケモノになり下がるより仕方がない。

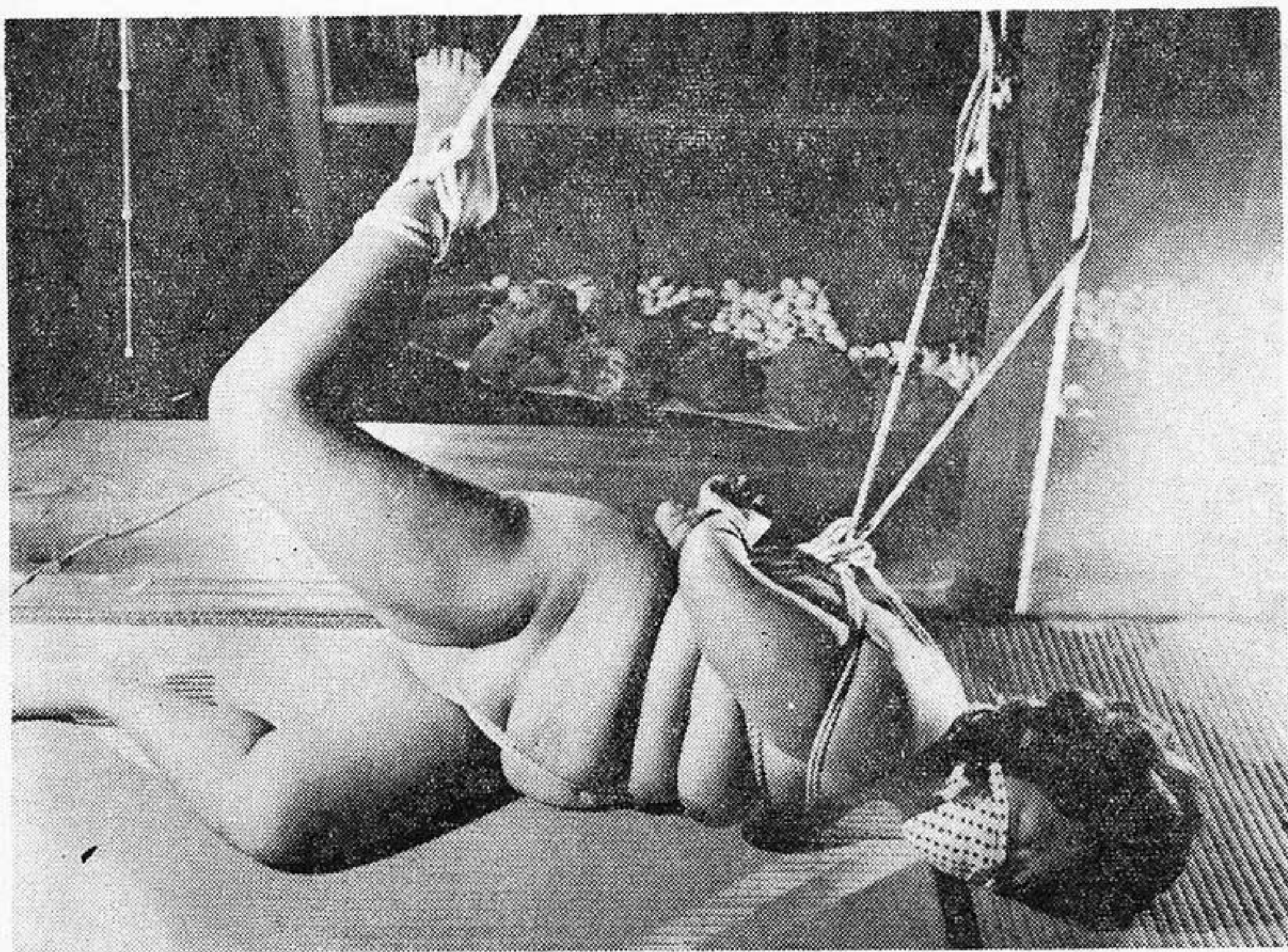
白豚が牝豚であれば、こちらは牡のイノシシにでもなるのが、この気狂いじみたプレイを成功させる早道かもしれない。差し当り、ハイノブタVという混血種でも作り出すのが関の山なのか。彼女の予想外の敏捷な攻撃によって、私の予定したコースが大きくはずれてしまい、一時期、私もまたケモノとしての途を歩まなければならなかったのも、余儀なき仕儀ではあった。

私は彼女から主導権を奪うべく、使い馴れ

た縄で、胸と後手首を簡単に縛った。簡単といっても、後手首は十分に背中にかけて胸へまわして、がっちり縛ってあるの
で、いくら、もがいても締まりこそすれ緩む心配はなかった。
「ああ、縛られると、気持がいい、気持がいいの。ケモノにして、ケモノのようにして、思いつきり、辱かしめてほしいの」
「白豚にしてやると言ったら。
白豚じゃ、いやなのか？」

「ああ、縛られるのって、なん
で、こんなに気持がいいんでしょ。気持がいい、気持がいい。
犬にして、犬のようにして、私の身体をおもちゃにして。犬のシッポを、犬のシッポを、妾につけて。そしたら、妾、犬になれるのよ。ああ犬になりたい」
「そういえば、彼女のポーズは膝を立てて正しいお尻をつき出し、額を畳につけて、いかにも犬の四つ這いのような格好である。」





もつとも、両手首を背

中で縛られているので、手を前につけないため、盛り上がるようなお尻が余計にむくむくと目立っていたが、そのポーズは完全に臀部背面を無防備に外部に晒している格好であった。

私は背後へまわって具に観察した。

普通、その位置について、世間一般に、いろいろの説がある。私は一見して、その二点が異常に接近しているのに気づいた。

△犬のようにして、いじめて——▽

ケモノになりたい彼女の願いは、またケモノになった私の願いでもあった。

「犬にして、犬になりたいの。犬のシッポをつけ

て。アヌスを責められたいのよ」

謔言のような彼女の世迷言が続く。

私は資生堂のバニシングクリームとメンソレータムを掌の上でこねまわしておいて、それを、べったりと彼女のお尻にぬりたくる。

私はムチの柄にコンドームをかぶせる。これが犬のシッポになるのだ。

「どうだ。アヌスを責めてほしいのか？」

「はあーい、アヌスは、まだ一度も責められたことがないんです。ですから、一度は責められたいと思っていますけど、今まで、誰にも、そんなこと言えなくて。でも、今はもう、妾、ケモノになってしまったんです。アヌスを、好きなように責めて下さい」

「よしよし、アヌスでも何でも、狂い死にするくらい、思いっきり責めてやるぞ。犬のシッポをブラブラさせて、部屋中、歩きまわるのも面白いじゃないか。今度、来たときは犬の首輪と鎖を持ってきてやるからナ」

ムチのシッポをぶらさげて部屋中を歩きまわる白豚の奇妙な姿を思って、私は独り微苦笑を禁じ得なかった。だが、今は後手に縛っているで這わすことは出来ない。そのかわり、突き出したお尻に跨がって、ネチネチといたぶりを加えていった。

メンソレとクリームのミックスしたものが微妙な効果をもたらして、お尻が、もぞもぞと擦ったそうに、うごめく。

こいつは、人間の顔をしていて人間の言葉を喋るが、実は白豚で犬なんだ。そう思うと、私の指先は、まるで情容赦ない暴虐の使者のように狂いまわった。

二本のバイブが、どのように淫らな光景を展開させたか。私は、口の中がカラカラに乾いて、幾度となく生ツバを飲み込んだ。

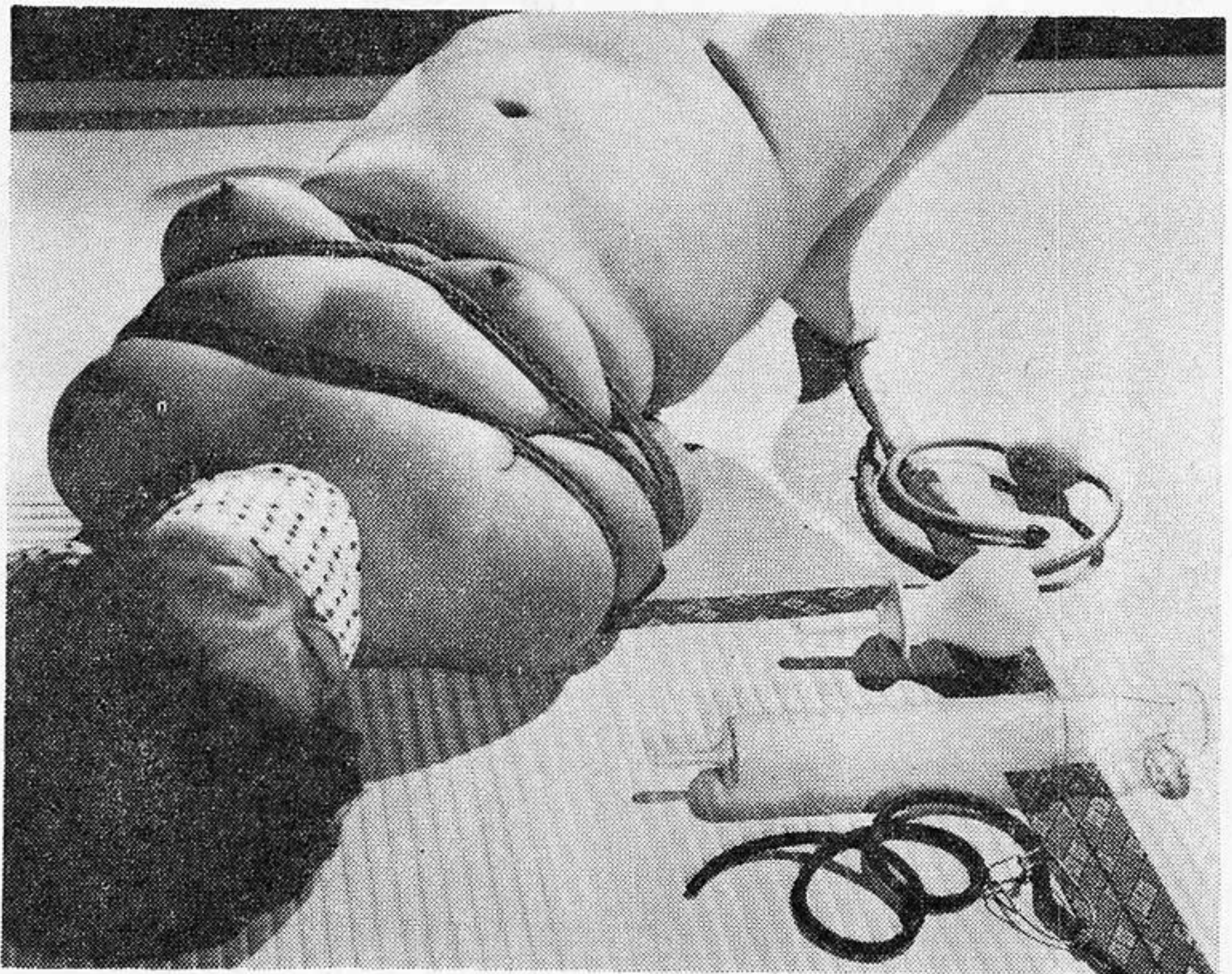
「ケモノにして——。妾をケモノにして、犯して頂戴。こんなに縛られたままで、妾はケモノになりたいのケモノにして、ケモノにして。お願い。ケモノにして……」

彼女の絶叫は続く。それだけ、私の責めもまた執拗きわまりないものだったのだ。

ケモノになりたいという女。

ケモノ——ケダモノ、獣、アニマル——。

動物の精力とスタミナ、そして野獣の奔放



というものが失われてしまっていて、そこに、赤裸々な本能だけが露呈してくるのだ。

責める側の立場に立ってみれば、責める相手は人間としての人格を持ち合わせていないアニマルだから、どのようなハレンチなことでも、臆せず、じゃんじゃんやれる。相手は、理性という制禦心や羞恥心を、かなぐりすてたケモノである。いわば、私のなぐさみ物だ。ペットなのだ。

「たしかに、顔や形は人間の女だ。それに人間の言葉を喋っている。しかし、お前は人間ではない。今からケモノだ。大人のおもちゃになる玩弄物なのだ。望み通りに、牝のケモノにしてやるぞ」

押さえに押さえていた私も、すでに爆発点に達していた。私自身もケモノ、いや牡犬になり下がっていたのだ。

「縛られると気持ちいいの。縛られると、身体がとろけるように、気持ちいいの

さを牝に変身したいと願う彼女。
ケモノに変身してしまったら、人間の理性

……」

彼女の絶叫は、いついつまでも尾を引くように続いていった。それは人間の女ではない、アニマル、野獣の咆哮にも似ていた。

ケモノのスタミナに私もいたく満足した。

浣腸の饗宴

狂乱のひととき、彼女は、縛られたままの

豊満な肉体を、縄もちぎればかりに、思いつきり、ころげまわり、暴れまわった。

二本のバイブの奏でる交響樂が、彼女の前と後を同時に責めたり、或は、その一本の代りを私自身が代役したりした先刻の激しいプレイの余韻が、まだ全身に残っているように縛られたまま、ぐったりとしている。

私は、わざと縄を解いてやらなかった。

官能の欲^{よろこ}びに身をまかせて気狂いじみたものがきょうを見せていた女の艶姿が、私の目に焼きついて離れようとはしない。

私は、そこに縛られたまま、ころがっている女の裸身に目をやった。

縄目にくびれた白い肌は、縄と縄との間から、むっくりと顔を出し、あれだけ、ころげまわったのに、縄は少しも緩まず、一層、きつく締めつけている。投げ出された太い足、小山のように淫らに盛り上がった臀部、ぶく

ぶくと肥えて肉のつきすぎた腹部。そのどれをとっても、エロチックでないものはない。

彼女自身が、自分で言っているように、たしかに好色な女だ。

少なくとも、初めて逢った女を、このように完全にアニマルに飼育できようとは、私も思ってもみないことだった。

私は写真撮影のためのアキシントに噛ましておいた猿ぐつわだけを除いてやった。

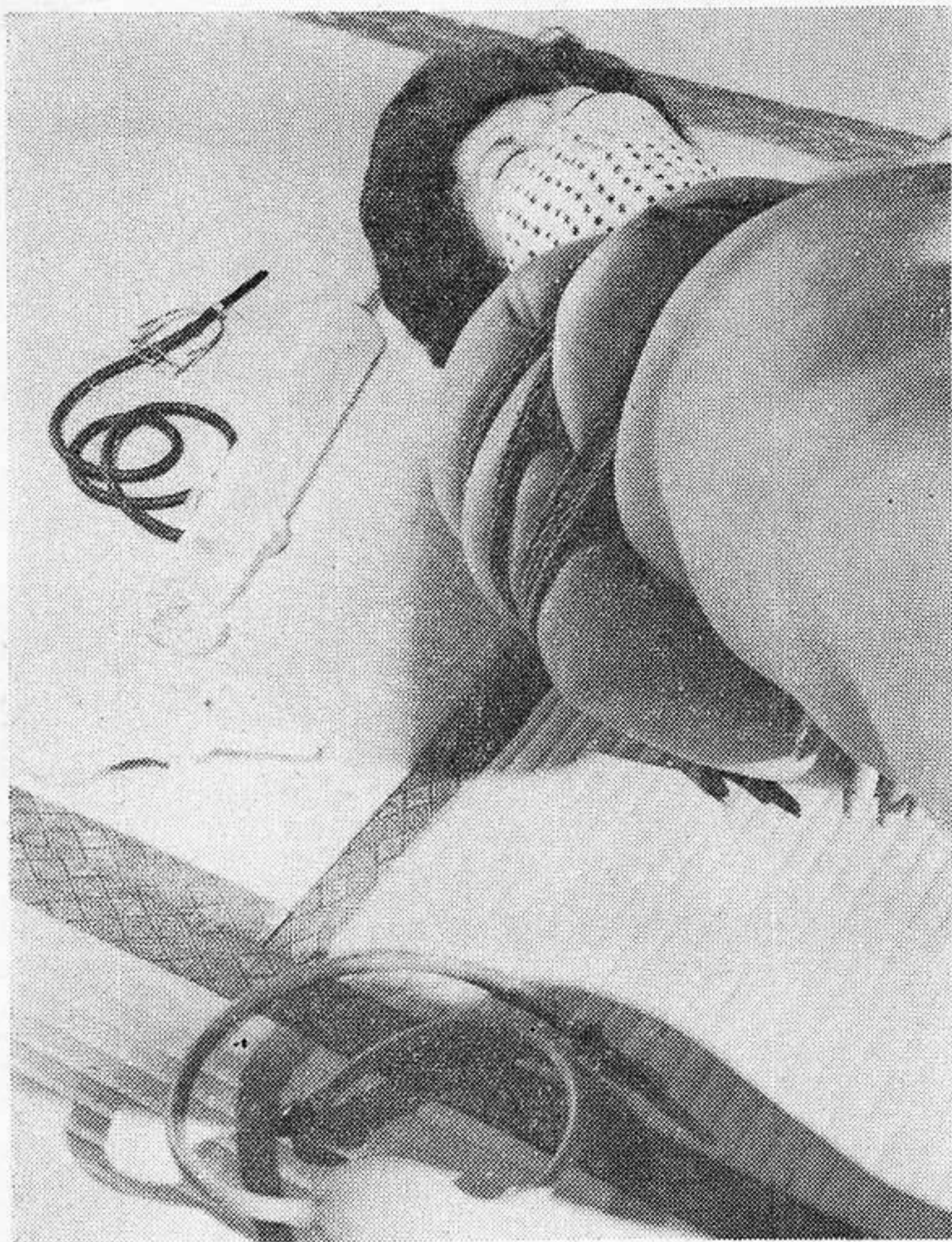
「どうだった？」

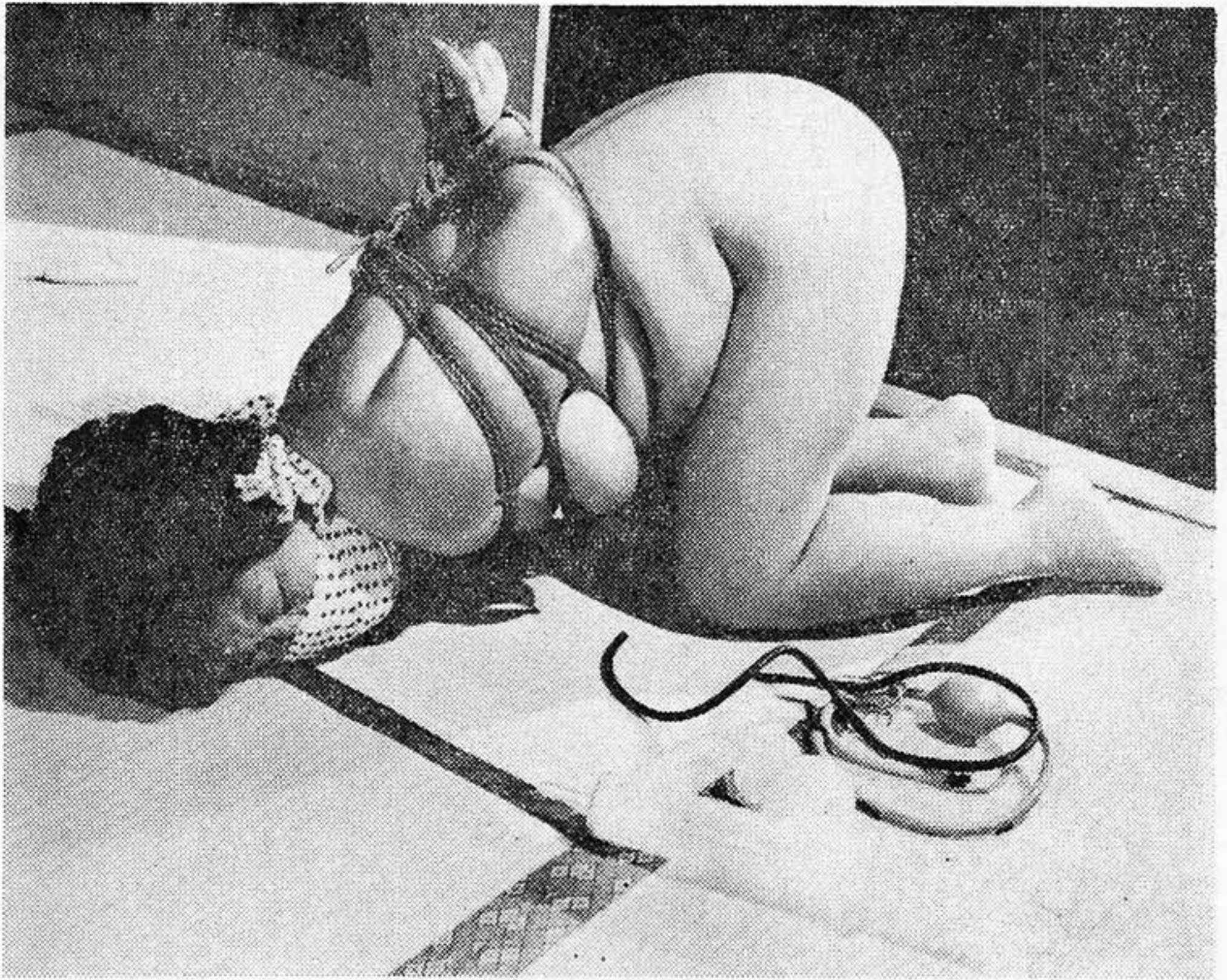
「ええ？ 何のこと？」

彼女の縛られた裸身は畳の上に、ながながと伸びていたが、顔だけを起して、目をパチクリとしている。

「アヌスを責めてくれる人がいないとか、なんとか言ってたな。それで、御希望通り、アヌスを、思いきり責めてやったが、その感想はどうだって、聞いてるんだ」

「ああ、あのこと。あれは





もう勘忍して。妾、もう、縛られることだけで、へとへとなの。その上、他を責められた

「もう、やめて、お願い！」
「どうしたんだ。気持でも悪いのか？」

ら気狂いになってしまわ。ねえ、お願い、この縄を解いたら、もう一遍ムチで責めて——」

「いや、そうはいかないな。まだ、アヌス責めと浣腸責めが残ってるからこの縄は解くわけにはいかないよ。さあ、お尻をうんと突き出すんだ。思いきり、うんとな」

「はあーい」

彼女は、いそいそと尻立ての姿勢をとる。

私は左手に例のメンソレとクリームのミックス液をたっぷりとすくって右手にはゴムの手袋をはめる。人差指が妖しく躍る。

「うーん、いやいやッ」
白い臀部が電光に映えて、ぴくぴく動く。

「いいえ、なんだか、出そうになってきたのよ。だから、お願い、やめて！」

「なにが出そうになってきたんだ。言ってごらん、はつきりと……」

「いや、いやん。そんなこと言えないわ」

「よし、言わないな。それだったら、この指を放さないぞ。それでも、いいか」

「だったら、言います、言います。トイレへ行きたくなったんです。こんなことされるんだったら、いっそのこと、浣腸をして……」

「さあ、いよいよ、本音を吐いたな。お望み通り、この大きなお腹が、ぽんぽんになるまで、石鹼水でも、グリセリン溶液でも、シューシューと注入してやろうかな。ニ〇〇CCの浣腸器でもエネマシリンジでも、イルリガートルでも、お好みの道具で入れてやるからな。なんでも注文してみるんだな」

「そんな、そんな。妾、浣腸って、まだ、人にされたことないんです。雑誌なんかを読んで、されてみたいなあって、思っているだけなんです。本当です。だから、最初から、余り、ひどいことはしないで……」

「ふふん、そうかな。菊の花は可愛いくて、綺麗で、小じんまりと、よく締まっているけど、僕の触診したところじゃ、相当の包容力

があるようだな。さしあたり、微温湯なんかを、たっぷり注ぎ込むのも楽しみだよ」

「そんなことしたら、妾、どうなってしまいか、わからないわよ。こんな大きなダブダブしたお腹で、白豚だなんて言われているのにこれ以上、お湯を、そんなに、お腹に入れられたりしたら、とんでもないことになるわ。ねえ、妾に恥をかかさないで……」

「それだったら、お化粧をしてやろうか。毛抜きで一本一本、ウブ毛まで抜毛したあとでルージュなんかを使って、お化粧をするんだよ。そしてね、柔らかい紙を、こんなに、ぺったりと当てて、拓本たくほんをとると面白いよ。拓本にとると、写真とは、また違った生々しい味があって、いいもんだよ」

「その、拓本っての、面白そうね。浣腸の前にして頂こうかしら」

私は彼女のお尻の方へ向って背中に跨がって毛抜きを手にする。電気カミソリによる剃毛は専ら丘陵地帯に限られているので、この秘境にまでは斧きんは及んでいない。

私は一本また一本と、丹念に、且つ念入りに抜毛を楽しむ。私にとって、楽しみであるばかりでなく、彼女にとっても、後手に縛られた、こんな格好での抜毛は、凄く悦楽であ

るに違いない。

魂消るような呻き声を洩らし、盛んに、お尻をもじもじさせるが、私は彼女の背中にどっかりと腰を下ろして、動かないように押さえつける。女体にポリウムがあるということは、こんなとき、至って坐り心地がよい。

すっかり抜毛し終るとその後、ルージュで綺麗に型どってゆく。彼女の唇を美しく彩る口紅が、上の口ならぬアヌスと、その周辺を、紅色に美しく化粧してゆくのだ。

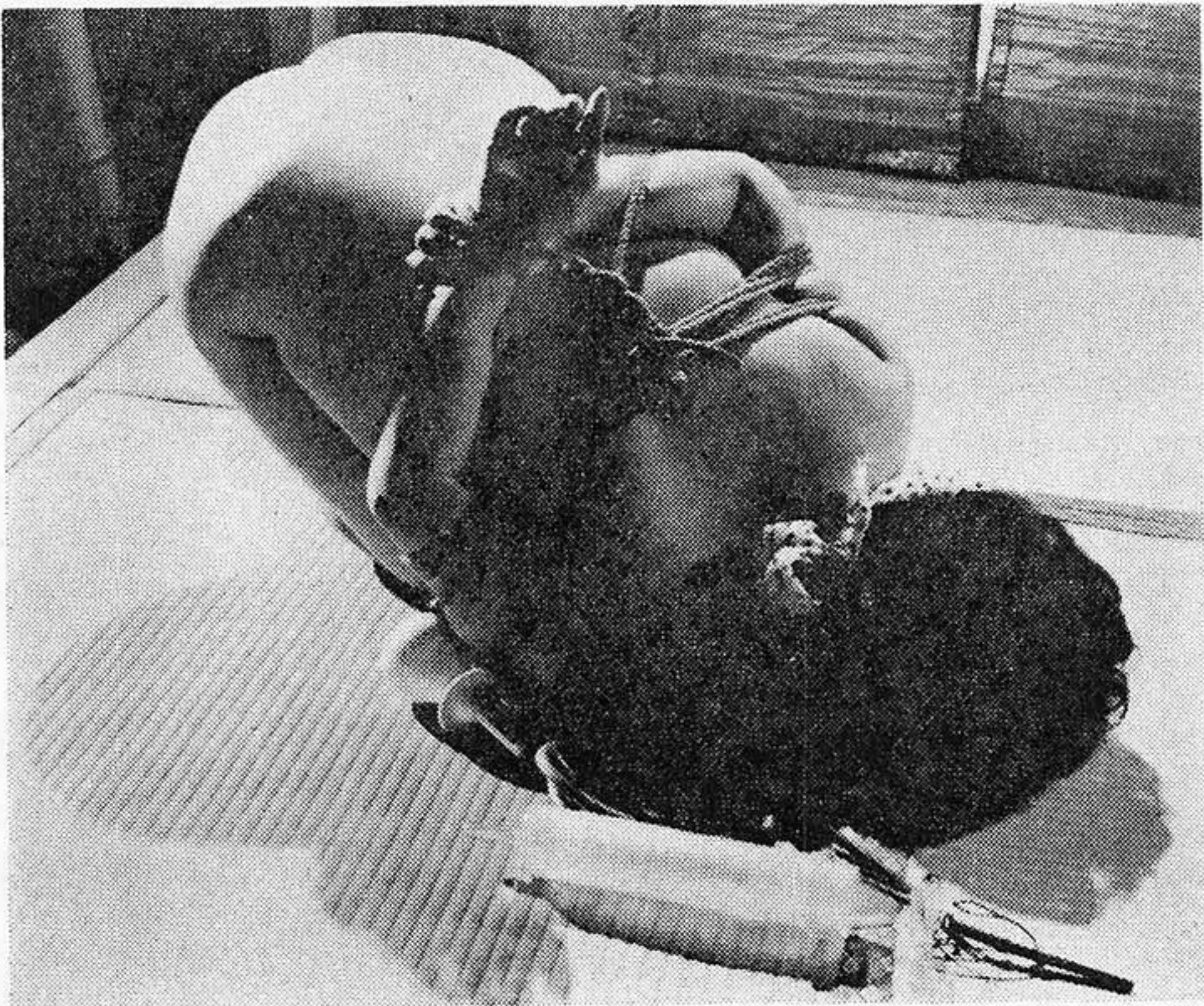
そこへ、白紙をべったりと当てて、掌で押さえつけて、パツとめくるとそこに奇妙な紋様の拓本が出来上っている。

「さあ、出来上ったぞ。これが白豚の持物だぞ。どうだ、綺麗だろう」

私は彼女の目の前に、

紅で彩られた奇妙な紋様の紙片を、さっと差し出す。

「あああ、ころげてしまう……」



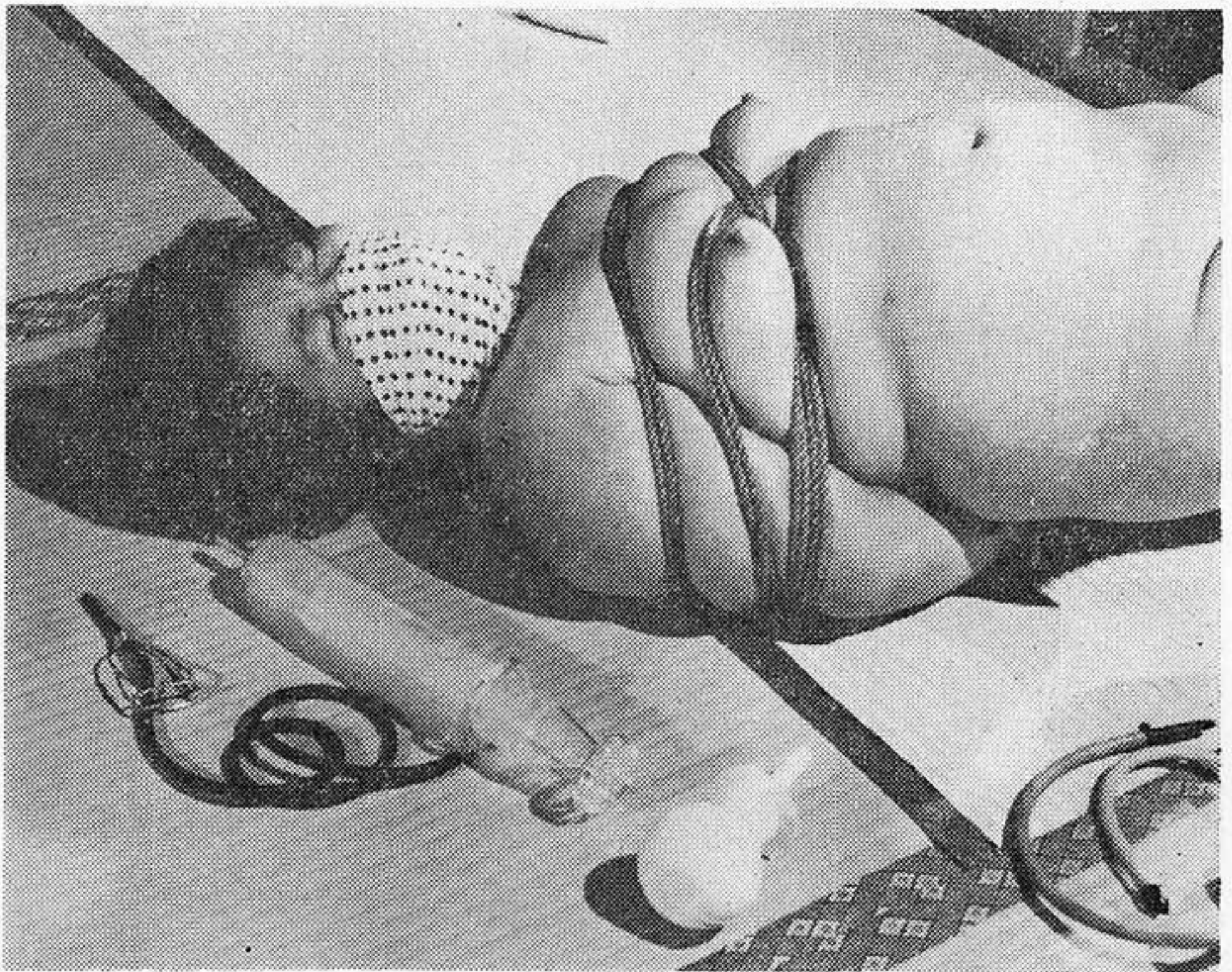
背に跨がられていた私の体重の重圧から逃れた彼女は、平均を失って、どたりと横倒しに、ころがってしまう。横倒しになっていても、大きなお尻だけは、その巨大さを失わずに、逞しい盛り上りを見せている。

そして、ルージュで彩られた部分だけが、まるで、そこが唯一の生き物のように、ピクピクと、いつまでも動いているのだった。私にとっては、全くまたと得難い目の保養であった。こんなチャンスは、そう度々あるものではない。私は跪いて顔を近寄せ、じっと目をすえて観察した。

次に、私が手にしたのは、二〇〇Cの硝子製浣腸器だった。浴室から汲んできた湯が、この際の浣腸液の代用だ。豊かな膨らみを見せた嘴管が、湯に濡れて、いかにも艶々しく光っている。今までに行った予備的な馴致で受入れ態勢は十二分に出来上っていた。

吸い込むように嘴管の姿が完全に消えるのを待って、ポンプの把手を急激に押し

ズブーッと温湯が腸内へ侵入してゆくとき



対して、彼女の、反応は目ざましかった。上になった脚が、ビクッビクッとふるえている。

私は寸秒を惜んで、第二回目の微温湯を、あわただしく吸入して、嘴管を濡れそぼった愛らしい菊花に挿入するなり、再び息もつかせず注ぎ込んだ。迸り出る水流の激しさが、さこそと窺われる彼女のもがきようだった。

「うーん、お腹が、とっても張ってきたわ。何だか、トイレへ行きたいみたい。こんなに縛られてちゃ、どうにもならないわ」

横臥のポーズから膝を巧みに使ってお尻を持ちあげ、起き上がろうとする縛られた真白い豊満な肌が私の目の前で妖しくも美しい動きを見せる。私は浣腸器を持ったまま、そんな彼女の肉体をじっと見つめているばかりで、手を、かそうともしなかった。

剃毛——鞭撻——抜毛——化粧——浣腸。

の快い手ごたえが、たまらない。

「あッ、あッ、あ、あ、あーあ」

二〇〇Cの液体が一気に噴出する圧力に

彼女に対する飼育は、こうしたコースで大分、進んだ。見ていると、膝を大きく開いてやっこのことで、お尻を畳からあげて下半身

を起したところだった。

背後にまわってみると、お尻が高々と突きだした格好で、太股の間から覗けるお腹のだぶついた筋肉が、呼吸をするたびに、波を打って起伏している。

「妾を、もう一度ケモノにして。ねえ、お願い。ケモノにして、ケモノになりたいのよ。」

ケモノにしておいて、浣腸してほしいわ」

この女を獣にすることは、自分もまた獣になることだ。ケモノと獣とのプレイの狂気じみた悦虐は、さっきで経験済みだ。

更に、その上、浣腸をしてほしいとは、なんとこの貪欲なマゾ精神であろうか。これが初めてSMプレイをするという女の吐く言葉

だろうか。飼育しているつもりの方、いつの間にか、彼女の企図する術策に、はまり込んでゆくような気がした。

それは、私にとって、強い誘惑だった。

さっきは、私の咄嗟のアイデアでパイプを併用したが、今度は浣腸器の併用か――。

「ケモノにして、ケモノにして。ケダモノになりたい。ケダモノになりたい――のよ。早く、ケダモノにして。妾、ケモノにしか、なれない女なのよ。ケモノにされたときが最高に幸せなの。お願い、ケモノにして……」

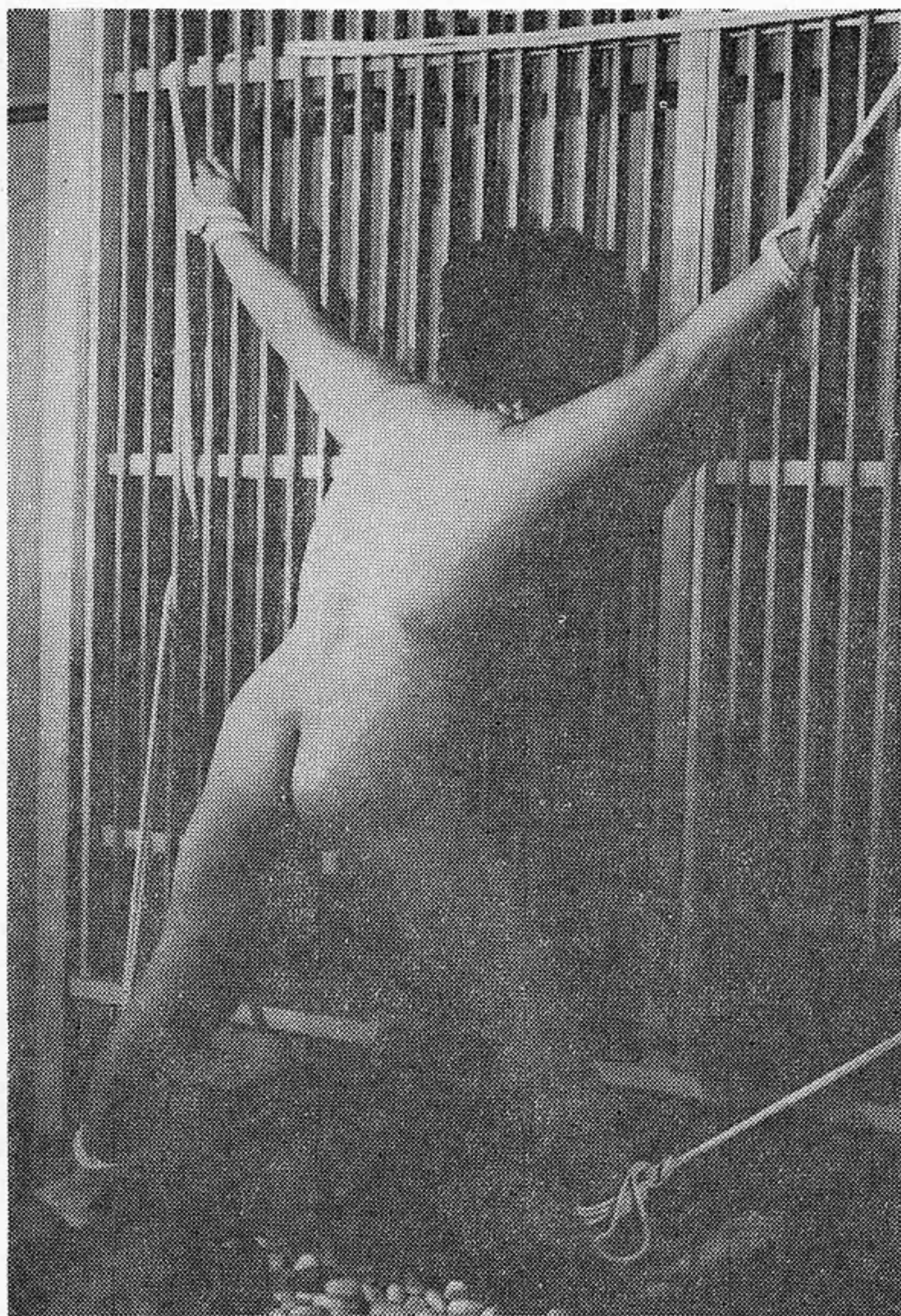
私の方へ、真白く脂ぎった肉のついた臀部を差し出したまま、彼女の口説は、つづく。

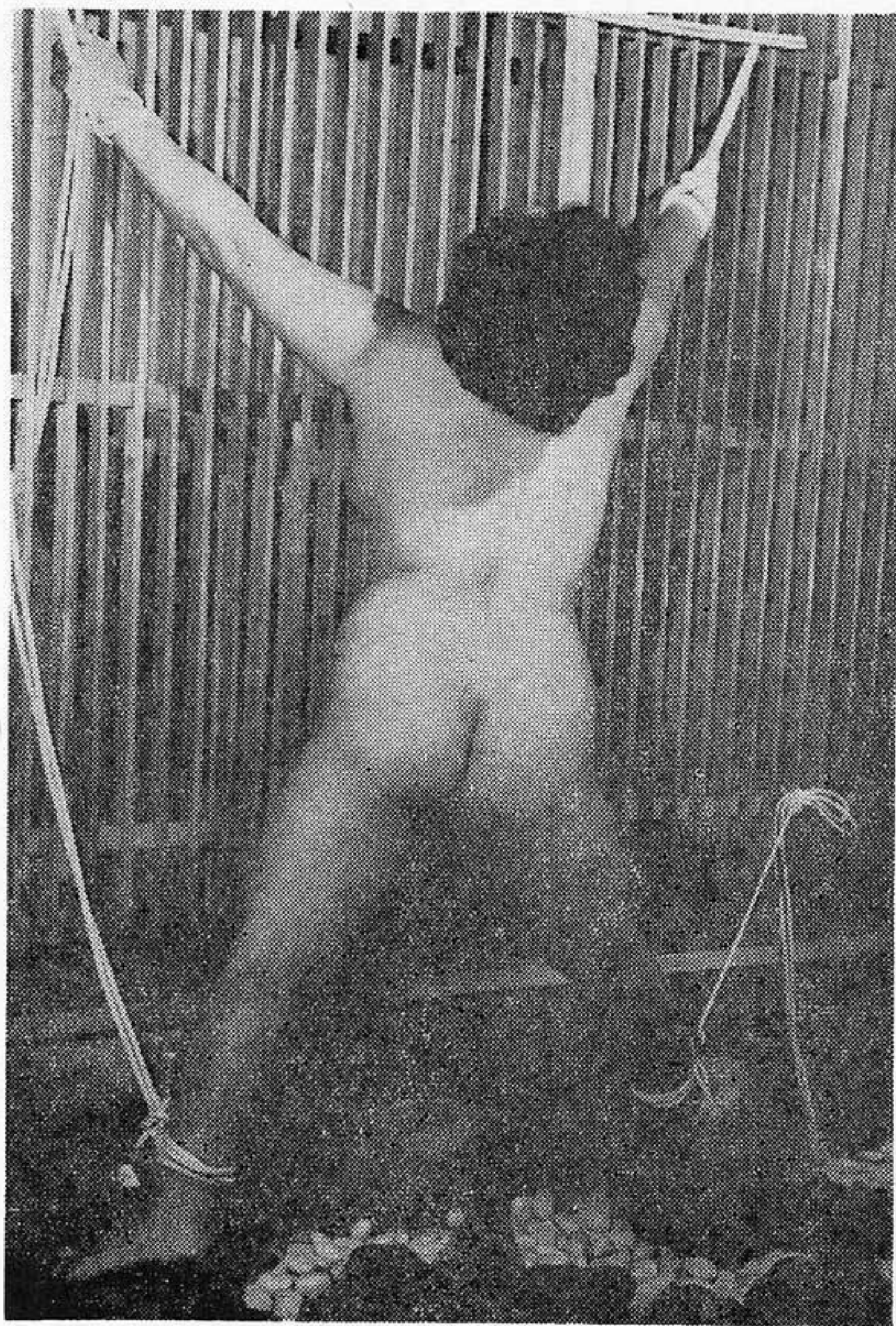
「よし、そんなにケモノになりたいければ、僕もケモノになってやろう。その上で、浣腸を施したら、彼女の名器が、どのようにして、すすり泣くだろうか。これは楽しみだぞ」

私は温湯を一杯に満たした二〇〇CC浣腸器を右手に持ったまま、ゆっくりと彼女の臀部へ背後から身を寄せていった。

この縄で、この縛り方にしてからでも、どのくらいの時間が経っているだろう。一時間は、ゆうに越している筈だ。

私の目の前で、両手首を背中にして高々と縛り上げられている拳が、固く握りしめられ





ているのが、なにか、彼女を畜化させている張本人のように思えた。

休みなしに、プレイにつぐプレイの連続。そして、このように縛られっぱなしでいる彼女の体内でドグマが、どのように噴騰し続けているか、私は自分の肌身に、じかに感じて、よくわかった。

二〇〇〇〇の浣腸器の嘴管が、その膨らみを、きらりと光らせて、アヌスへ消えると、私は、ゆるゆると、ポンプの把手を押して、今や完全にケモノと化した彼女の、浣腸による微妙な動きを噛みしめるように味わった。

みだらな鞭先

浴室で身体を洗って戻ってくると、彼女は新しい女に生まれ変わって、私のそばに寄り添ってきた。さっきの、あの気狂いじみた痴態は、どこの誰が演じたのか、という、そ知らぬ顔つきでいるのだ。

どうやら、お芝居は女の方が、うまい。

「ああ、さっぱりしましたわ。お腹にたまったもの、すっかり出てきましたの。それにお風呂に入って、身体を洗ってましたら、肌がすべすべしてしまって、とても気持がよかったですわ。こんなに肌がツルツルなんですもの。ウッフッフ、妾を、こんなにしてしまふなんて、お悪い方——」

上眼づかいに、私の顔を覗き込みながら、二の腕を軽く指先で掴ってみせる。

一風呂浴びる度に、変った女として、新鮮な姿を私の前に現わす彼女は、もう、何回、浴室へ足を運んだことだろう。

「妾、ケモノにして頂いて幸せでしたわ。あんなのって、生まれて初めての体験ですわ。何人もの男の方の前で、こんな目に合わされたら、それは、それは、たまらないでしょうね。妾、入れ替り立ち替り、みんなの人に、ケモノにしてほしいですわ」

「見世物にされるだけじゃ、物足りないって

いうんだね。そんな希望者だったら、沢山いるよ。七人ぐらいの同好者が集まって、プレイオンリーでやってみるか」

「ええ、お願いしますわ。妾を、どこの誰ともわからずにして下さるんだったら、どんなことでも致しますわ。妾って、こんな好色な女なんですわね。それから、さっき、お願いしましたでしょ。あの、ムチ打ちのこと。あれ、これから、お願い出来まして——」

「そうそう、そんなことを言ってたな。じゃあ、一つ、どのくらい激しいムチ打ちに耐えることが出来るか、テストをやってみるか。ケモノにムチは付き物だからな」

「妾、あのムチ打ち、忘れられないんです。犬か馬みたいに、いや白豚でも結構ですわ。ぶって、ぶって、ぶちまくって、欲しいんです。今度は、私の身体がどんなになるか、それを、もう一度、味わってみたいんです」

「そうか。しかし、今度は、さっきのようにすぐに失神することは許さんぞ。西部劇に出てくるように、大の字に縛っておいてから、ムチ打ってやる」

幸いにして、二米ばかりの格子戸がある。これに、手と足を思いきり開かせて、大の字に縛りつける。彼女は、私が手首、足首を左

右にひろげて格子戸の棧に括りつけるのを、し易いように、向うむきに棧にべったりと胸と腹とをくっつけて、体重をもたせかけておいて、素直に手足を委ねる。

それは処刑される女罪人が、仕置台に上るときのような光景だ。

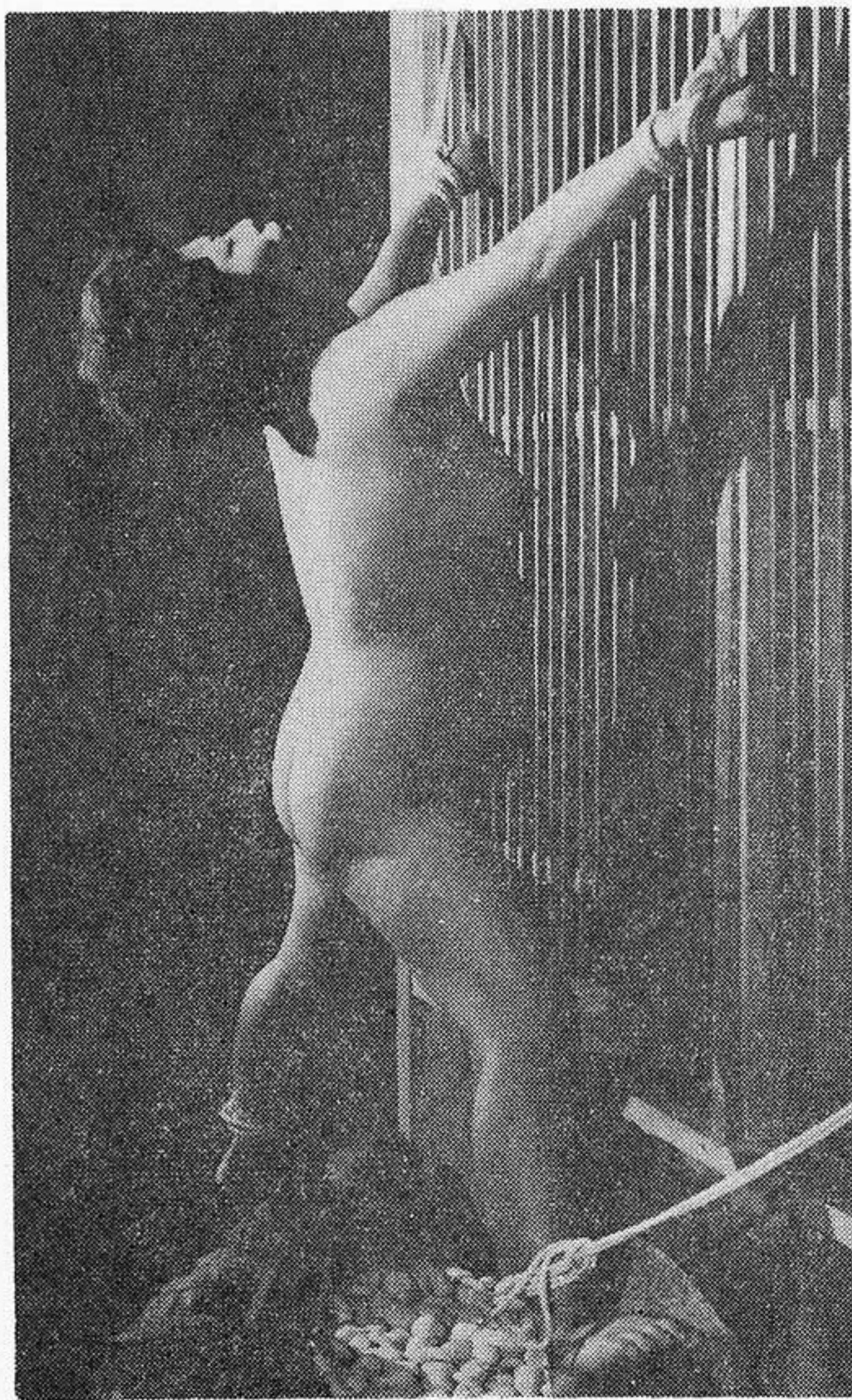
手と足を、左右に思いっきり広げた、このポーズだと、痩せた女だと一層、細く見えて痛々しいのだが、流石に、△白豚▽とアダ名

されるだけの肥満体だけあって、向うむきの二の腕、肩口、背中、脇腹、臀部、両股と、そのいずれをとっても、むちむちと肉が盛り上っていて、いかにも美味しそうだ。

「さあ、ゆくぞ、覚悟はいいな。今度こそ、手加減はしないぞ。それッ」

私は先ず、ムチ先を腰のところで極端に盛り上っている臀部へ力一杯、放つ。

ピチッ、



鋭い鞭音だ。

「あああッ」

ピシッ、ピシッ、ピシッ。

白い臀部に対しての集中打である。

「ああ、あーあ、気持がいい、気持がいい。

ムチでぶたれると気持がいい。あああ」

鞭を持つ私の手に更に力が加わる。肉のぶ
厚い臀部の手ごたえは素晴らしい。

ぎゅっ、ぎゅっ、格子戸の棧をゆさぶつ
て、彼女の上半身が藻のように揺れる。左右
に振っていた首が思いきりのけぞるが、両手
を縛っているので倒れることはない。

「この脂肪の塊のような淫らなお臀奴。これ
でもか、これでもか、これでもかッ——」

力いっぱい打ちまくるムチ。忽ちにして、
お尻の白い肌は真紅に染まった。

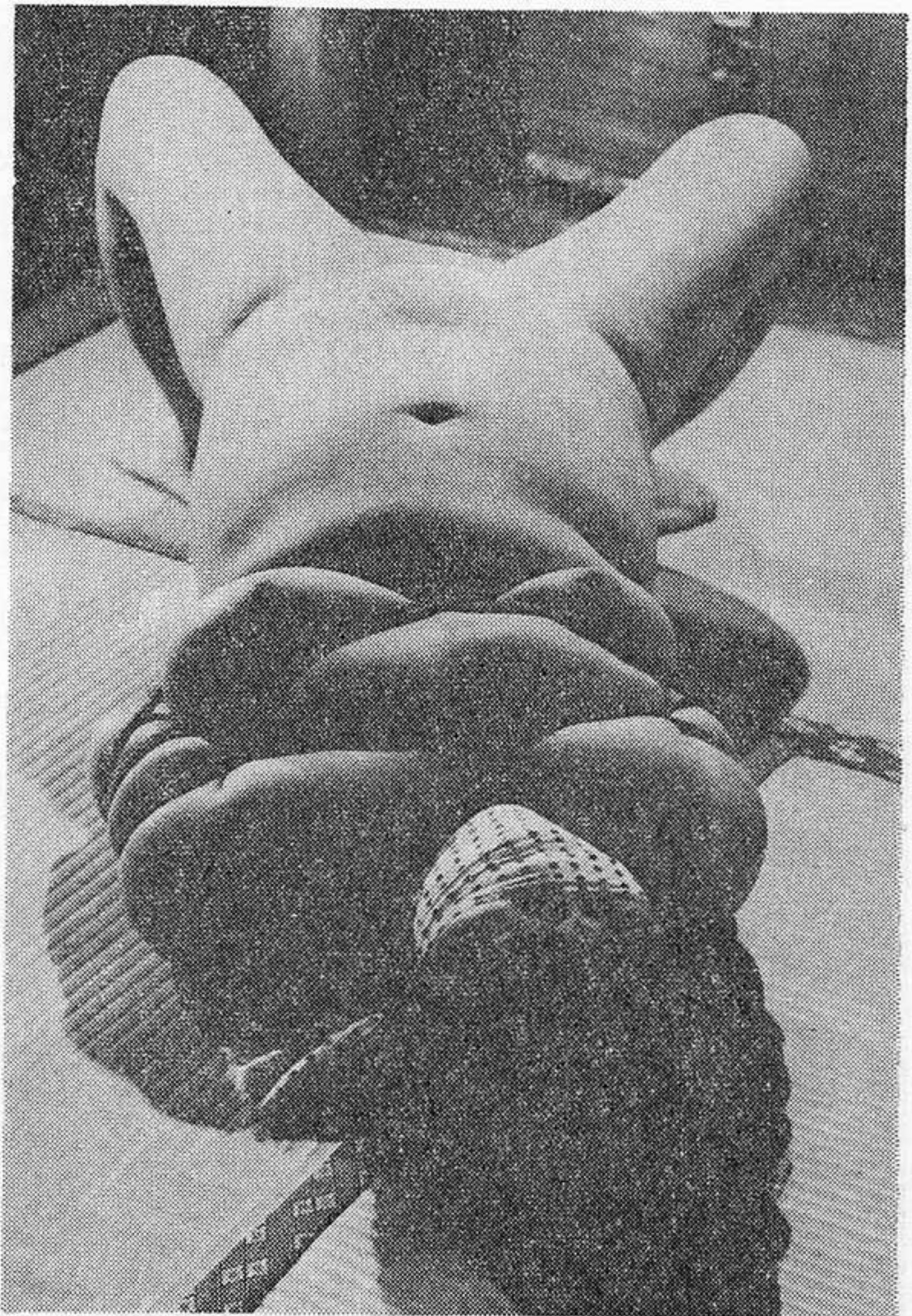
「うううう、うう、気持がいい。ムチでぶた
れるのは気持がいい。もっと、もっとよ。も

っと力いっぱい、ぶって頂戴」

上から、横から、私の手にしたムチは鋭く
臀部で炸裂する。次に私は真下から臀部を狙
う淫らなムチをお見舞いする。

「ヒィーッ、ヒィーッ」

白豚の泣き声が一きわ高くなる。豚を叩く
のに、何の手加減が必要であろう。それから



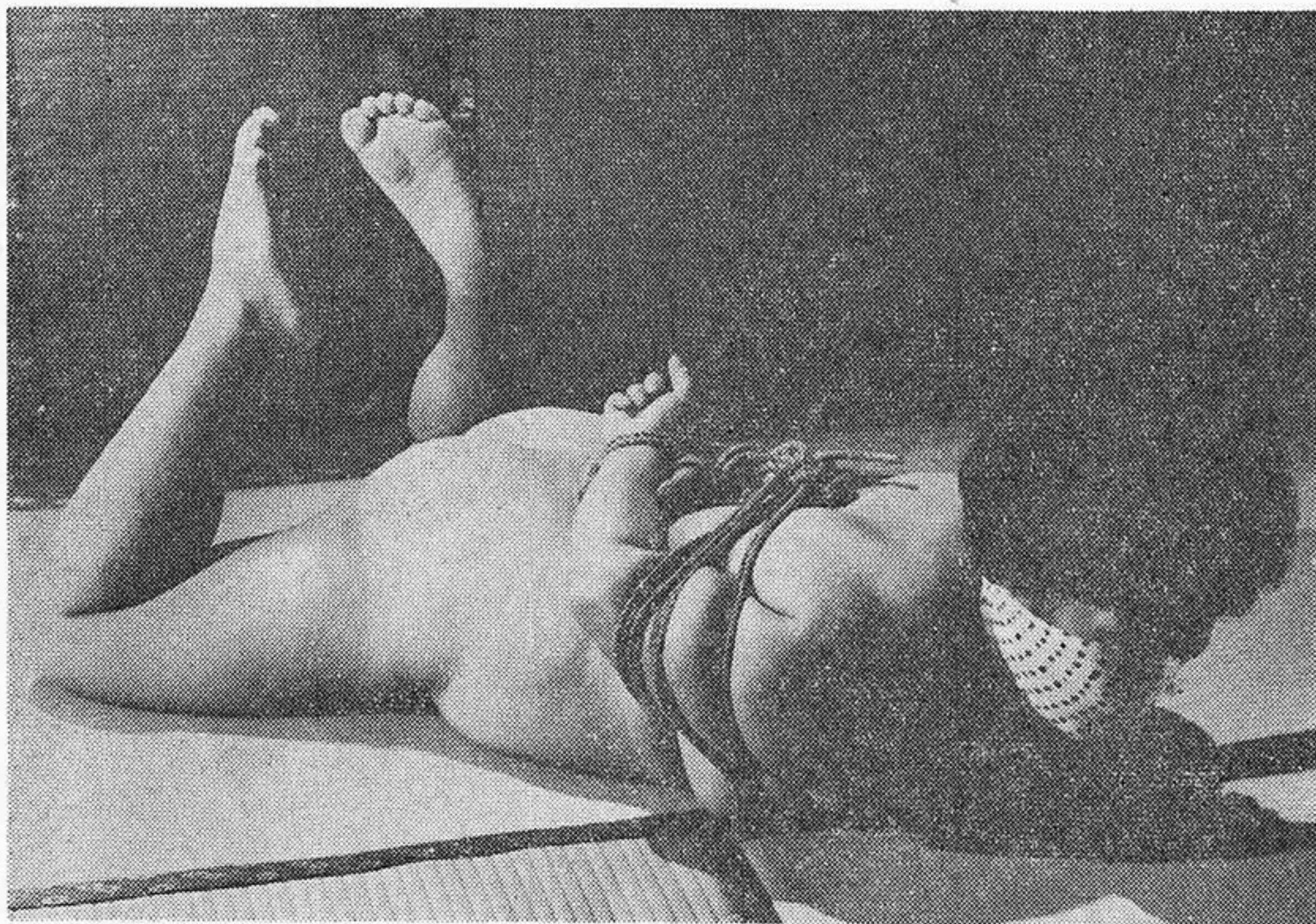
の私は、もう狂ったように、臀部ばかりでな
く太股や内股目がけて、力いっぱいムチを
振り降ろす。

「あああ、ムチでぶたれると気持がいい。あ
ああ、いたい、いたい。痛いけど、ムチでぶ
たれると気持がいいのよ。ああ、あーあ」

八の字に開いて足首を縛った脚が、足の裏

をにじるようにして、じりじりと左右へ開い
てゆく。駄々をこねるように、上半身が大き
く左右に揺れて筋肉が微妙にうごめく。

「気持がよかったら、いくらでもムチ打って
やるから、大きな声で泣いてみるんだッ。声
を思いっきり出してみろ。その方が気持がい
いんだぞ。泣け、喚け。そら、声を出せ。こ



こんなところを叩いてやるからな」

「ああ、痛い、痛い。痛いけど、とっても気持ちいいの。身体中がとろけそうなの。もっと、ぶって、ぶって。気持ちいい。ああ、たまらないのよぶってほしくて……」

私のムチは休まない。右手がくたびれてくると、左手に持ち換えて鞭打った。

「それ、お尻だ。今度は太股だ。よく振れてるぞ。凄いお尻の振り様だ。もっと振れ、もっと振れ。この淫らなお尻のヤツ奴」

ムチ打たれる度に、動く白い尻。揺れる、揺れる。いや彼女が自分で故意に、殊更、大きく振っているのだ。

凄い振り様だ。前後左右に激しく揺れる。

「ああ、あああ、あーあ」
彼女の口から大きな呻き声が洩れたかと思うと、がっく

りと肩口の力が抜けて、今まで敏捷に動いていた大きなお尻の動きが、ばたりと止まってしまった。縛られた両腕に全体重がかかって臀部が、たれ下る。

私は、はっとして、手にした鞭を投げ捨てると、あわてて彼女に近寄って背後から抱きかかえて顔をのぞき込む。

ぐったりと、全身に力がなくなって、完全に失神している。身体の前面は冷たくなっている。私は彼女の裸身を抱えたまま両手の縄を解き、次いで両足首の縄を、ほどく。

お尻だけが、かっかっかと、燃えるようになってくっているのに、ムチが当らなかった肌は不思議なほど、冷たいのだ。

私は、縄目から解放された彼女を抱いて、ベッドの上へ運んでくる。全裸の肢体を敷布団の上へ寝ころがしておいてから、その上に掛布団をかけてやる。私が、その傍へ、ずりりと身体をすべり込ませると、彼女は、うっすらと細目を開けた。

「妾って、やはり、縛られることと、ムチでぶたれることが、大好きなのね」

「大好きなのは、その二つだけじゃないだろう。ホラ、この方も、大好きなんじゃないかね。僕には、そう思えるがね」

私は、剃毛された丘へ、ぴたりと掌をのせた。生温い感触である。

「いややわ。そんなこと、おっしゃって。そりゃ、妾って、好色な女よ。でも、もう、SMのない生活なんていやッ。SMの味を知ってしまったら、忘れられないわ」

「そんなに、よかったのかい？」

「ええ、それはもう、天国へ登ったときのよ
うな気持なんですよ。それはそうと、今、何時ですか？」

「ふーん、腕時計は三時半を差しているな」

「まあ、もう、そんな時間でございますの。

眠くはございません？」

「眠いどころか、益々ハッスルしてきたな。

少しも疲れないのが不思議くらいだ」

「まあ、タフですこと。頼もしいですわ。まだまだ、いじめて下さるのですか？」

「そうさ。これから、いよいよ、今回の責めの総仕上げをやるんだ。そのためには、お前の身も心も、完全に俺の所有物だというしるしを、この身体に刻み込んでやる。いいな」

「それ、彫り物のこと、そんなの怖いわ」

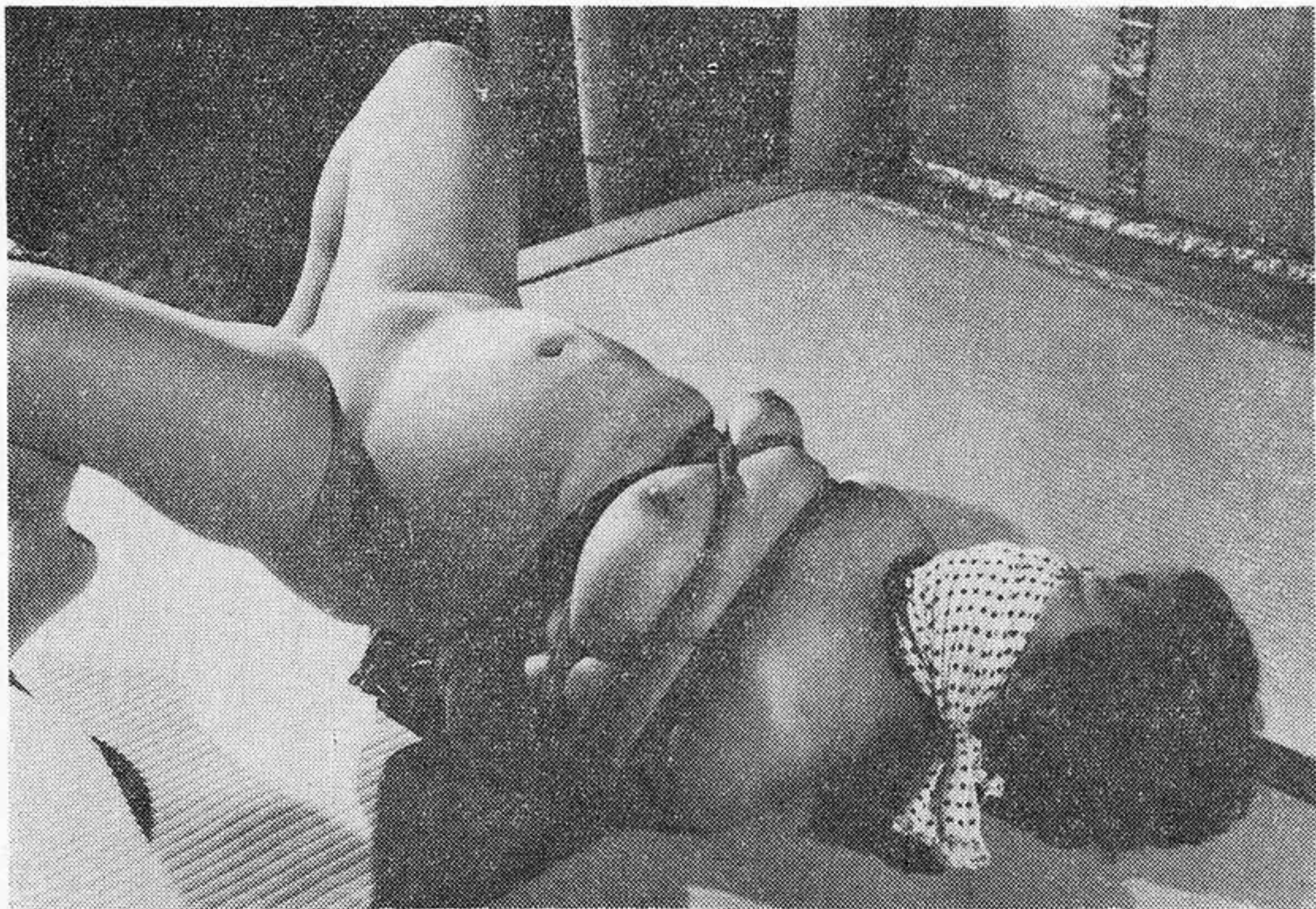
「奇譚クラブを読んでいるくらいだったら、よく、わかっているだろうが、剃毛と抜毛と化粧が済んだんだから、次は花電車の訓練と

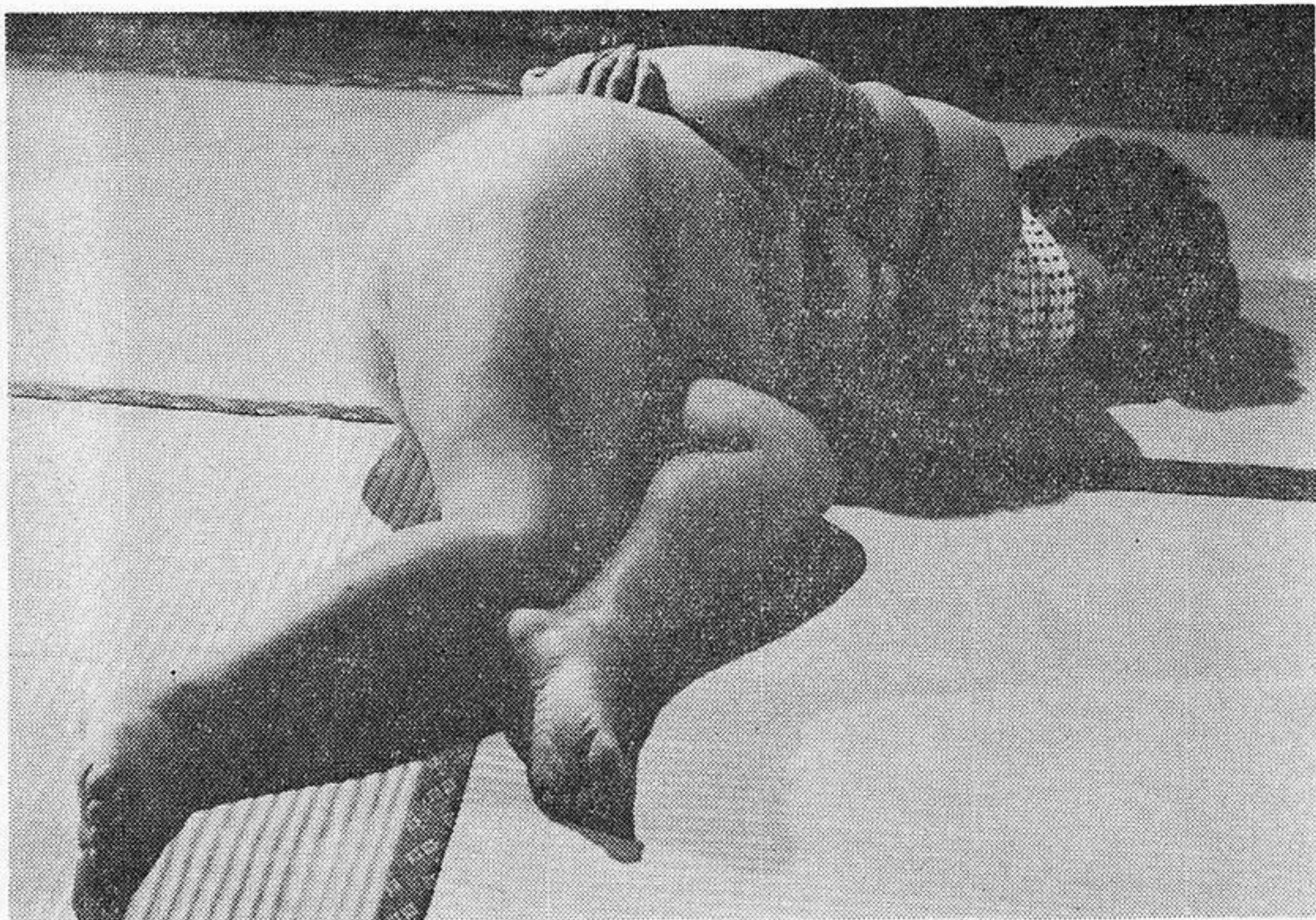
いうことになるな。お前のような名器の持主だったら、きっと、うまくやれるゾ」

「そうかしら。聞いているだけで、なんだか恥かしいような、全身がムズムズしたような気持になってきましたわ。思いつき、みじめなケモノのように扱われたいんです。花電車で見世物になるのなんか最高ですわ」

私は陽子のすべすべとした白い肌の感触を掌と指とで、さんざんに楽しんだ。元来、私は肥っている女が好きだ。殊に、この白豚のように色が白くて肉づきのよい肌の持主は、視覚的にも触覚的にも、まことに官能的だからだ。それに、人肥えた女には粗器が多いVという世の定説を破って、この女は至って名器の持主と起きているから尚更だ。

ただ、キングサイズのせい
か、抱きしめたときに、腕の





中で抱きつくめてしまえと
いった可憐さが味わえないの
が残念だが、その代りに、ク
ッションの良さは、まさに抜
群だ。

私はしばしば、羽化登仙の
境地を味わった。

女獣を遊ぶ

動物になりたいという女。
ケモノにして、思いつき
いじめて、辱かしてほしい
と願う女。

獣のように、泣き叫び、喚
き、咆哮することに、最高の
悦楽を求める女。

それは何か、ひどく異常な
もののように思えるが、しか
し、男と女の愛の営み——な
んていうものも、煎じつめれ
ば、至って動物的なものだ。
動物の行為そのものと言って
もよい。

動物は、生殖行為だって、
排泄行為だって人目をはばか

らず堂々とやる。(もっとも、動物にとって
憚かるのは、人目でなくて、同じ種類の動物
の目であろうが)

例えば、我々人間が、そうした行為を営ん
でいるとき、その場に、動物がいたり、小鳥
を飼っていたり、植木が置いてあったりして
も、何ら憚かることはない。

だから、相手の人間や、周囲の人間を、人
間とみないで、動物であるとみたときは、不
思議に羞恥心は起ってこない。

ケモノになりたいという女をケモノにして
しまったときは、自分もまた野獣のように、
自由にふるまうことが出来るのだ。

私は今まで、Mの男性とSの女性のプレイ
の場面を、写真撮影する機会が幾度となくあ
った。そんな際、女性によって全く、犬か馬
のように扱われている男性を見ると、い
つの間にやら、その人間が本当の畜生のよう
に思えてきた。そして、そのあとでSMプレ
イによって昂進した女性と私が、その場で意
見一致して一体となっても、人間に見られて
いるという気がしなかったものだ。

白豚——苗木陽子は、ケモノにして、いた
ぶり、弄び、犯されているところを見世物に
してほしいと願っているのだ。正直いって、

私もまた、その犯す方の役で、彼女と一緒に見世物になりたいものだと思う。

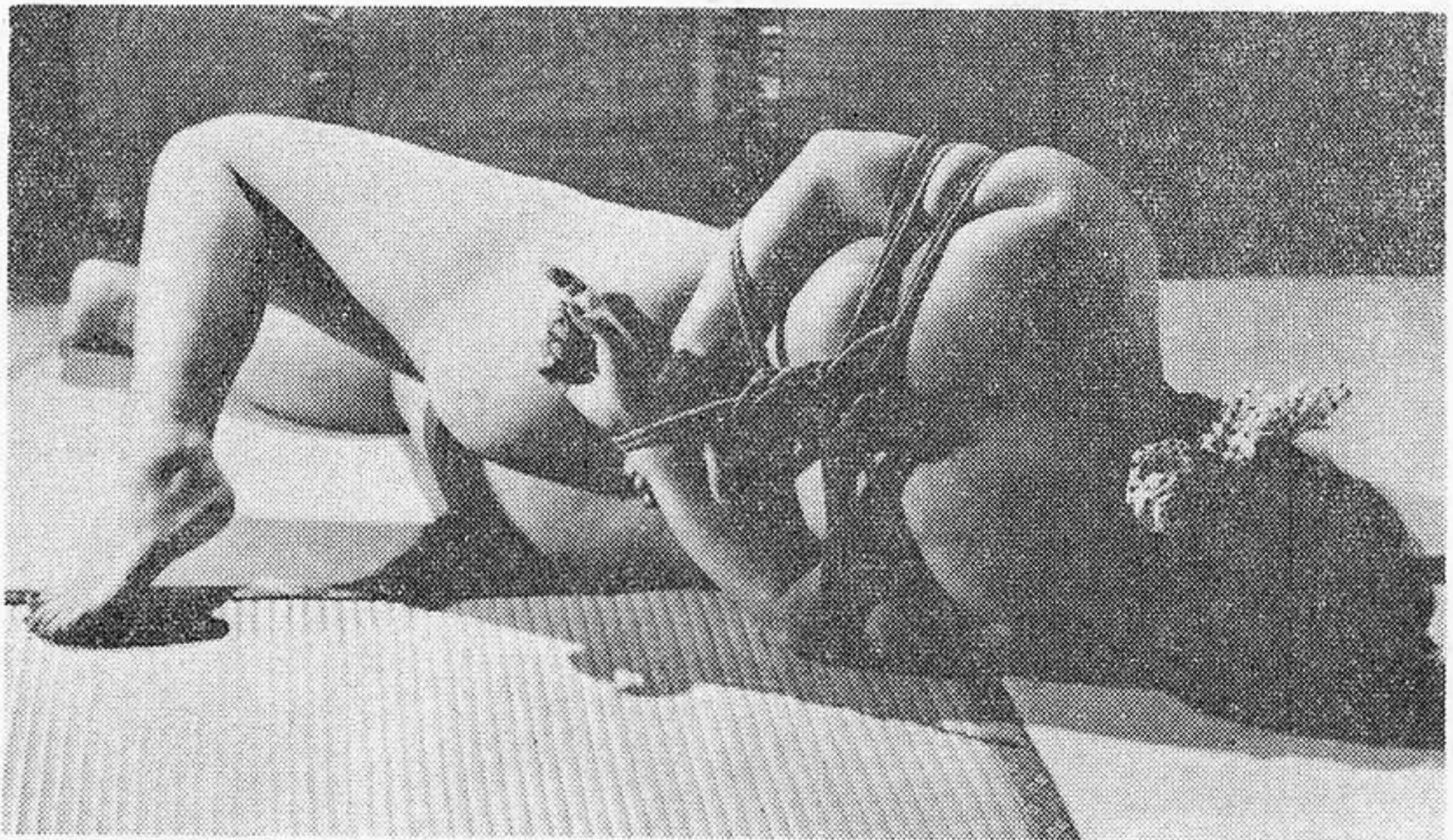
そうした性的な見世物やセックスショーを大金を出してでも見たいという人も、なかなか多いけれど、SMプレイを見てほしいと願う人間もまた、存在するのである。

私は、そんなショーマ的なプレイを展開すべく、全裸にした彼女を後手高手小手に縛り上げた。後手首を縄で締めつけて、背中へ高々と吊りあげると、痛さのために、五指が握ったり開いたりした。その指先の爪にはマニキュアがオパールのような輝いていた。

マニキュアといえば、足の爪にも、まるで宝石のように光るペディキュアをしている。開股縛りにするため、ぐいと脚をひろげさせたとき、足の爪先に、それを見て、私は、やはり自分は八人間の女Vを責めているのだなあ——という感を、ふと覚えたものだ。

ケモノになりたいと願う彼女。だが、しかし、私は、やはり、人間としての八女Vを責めたかったのだ。足の爪先のペディキュアを見て、私は、ほっと安堵した。

縛るのに、私はもう手加減などする必要はいささかもなかった。縄の痕がつくことなどを考えずに、思いつき、締めあげることが



出来た。女体を縛る快味に加えて、ぶるると、ふるえる女体の反応が嬉しかった。

「縛られた感じは、どうだ？」

「はあーい、凄く気持ちいいです」

「そうか、それじゃ、これからSMプレイのショーをやるからナ。ここが舞台で、お前が主役なんだぞ。ほら、そこに、三脚にすえたカメラが二台置いてあるだろう。あすこが、見物人の席だ。先ず、開股縛りで御開帳とゆくから、よく見て頂くんのだぞ」

「あああ、そんなこと、止めて……」

彼女は脚をすばめようとするが、所詮それは単なるゼスチュアに過ぎない。私が膝頭に掛かった縄を引き寄せると、何の造作もなく、ずるずると足が開いていった。

「そら、見世物になるんだぞ。見物人の方々に、とつくりと見て頂くんだッ。ほらほら、もっと脚を大きくひろげるんだッ」

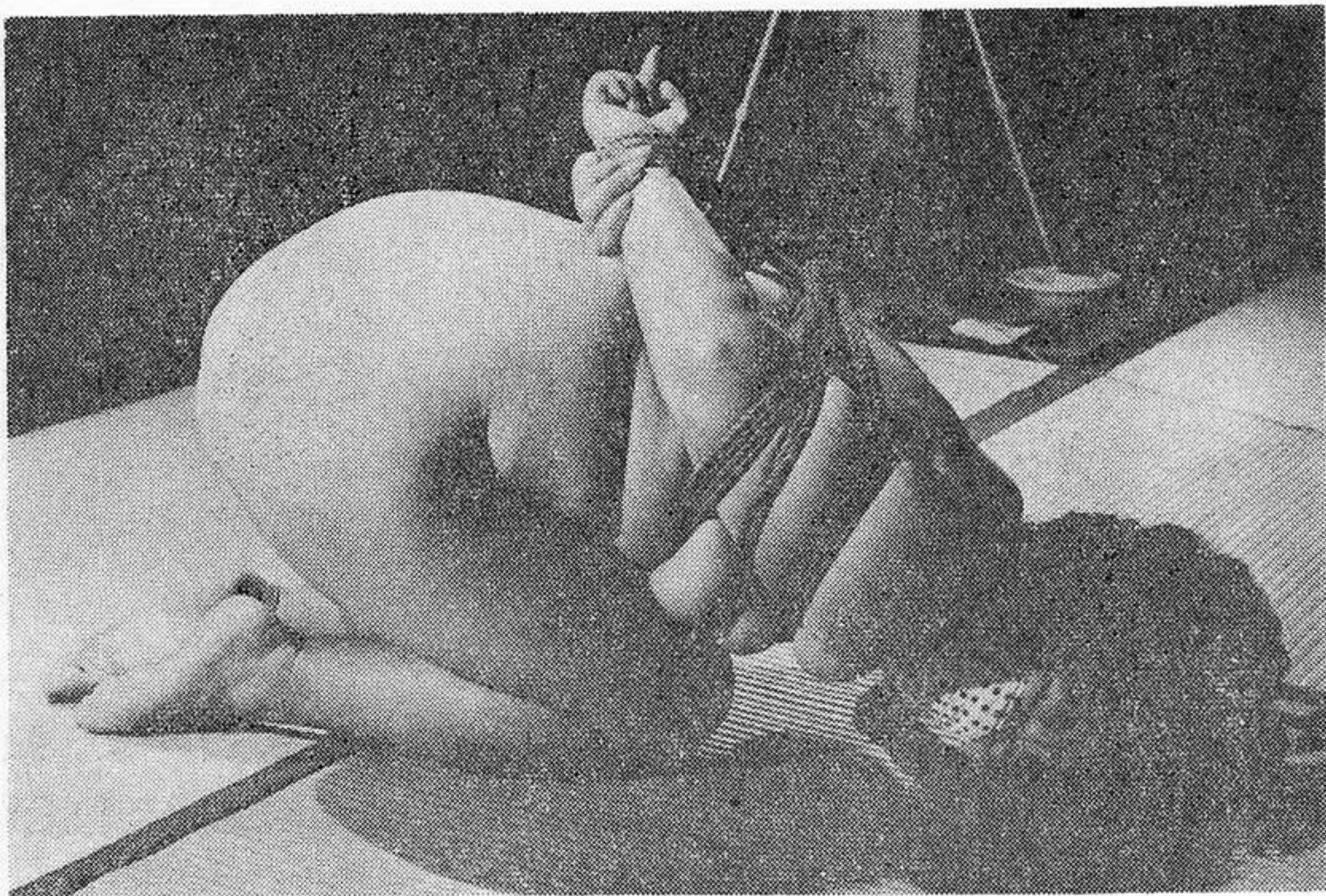
「ああ、こうですの。これでいいんですのねえ。ねえ、これでいいんですの？」

「まだだ、まだだ。もっと開け。もっと大きく開くんのだ。客席からは見えないゾ」

私はそこで、パッと舞台に点灯した。

「あっ、あああ、あーッ」

彼女は、自らの動揺で、身体を支えきれ



ずに見事に、仰向けに転倒していた。

背中の下敷きになった後手首が痛いのか、ぐーうと、お尻を持ち上げているので、剃毛された美しい丘陵が、まる見えだ。「うん、よしよし、いい眺めだぞ。これで、女陰の化粧と拓本取りをやろうかな。そのままでゆっくりと見て貰うんだな」「いい、い、痛いの、手首が、手首が。背中の下になって痛いのよ。起して、お願い。起して頂戴。痛くって痛くって……」「手首が痛かったら、もっと、お尻を持ちあげるんだ。そうだとその調子」

彼女は私に言われた通りに、身体を動かして臀部を突きだしてゆく。私はそんな彼女の姿を狙って、幾枚となくシャッターを切った。しかし、縛られた女体は、ひとときも、じっとはしていなかった。両足に力をこめて、じりじりと尻を持ち上げて

いたかと思うと、ころりと、横臥してしまった。これで、後手首の疼痛からは解放されたわけだ。

しかし、私が折角、開股縛りにと思って、両方の膝頭に縛りつけた縄は、全く用をなさなくなってしまうていた。縄が伸びきって、両股が、ぴったりと合わさっている。

「こら、上になった脚をあげないかッ。お客さんに見えないゾ」

「ああ、そんなこと、自分では、羞かしくって出来ませんわ。それだけは許して……」

「言うことをきかないと、これだぞ。さあ、どうだ。鞭の味を、もっと味わいたいかな」

無防備にさらけだしている好目標の膝部目がけて、私はムチを振り降ろしていた。

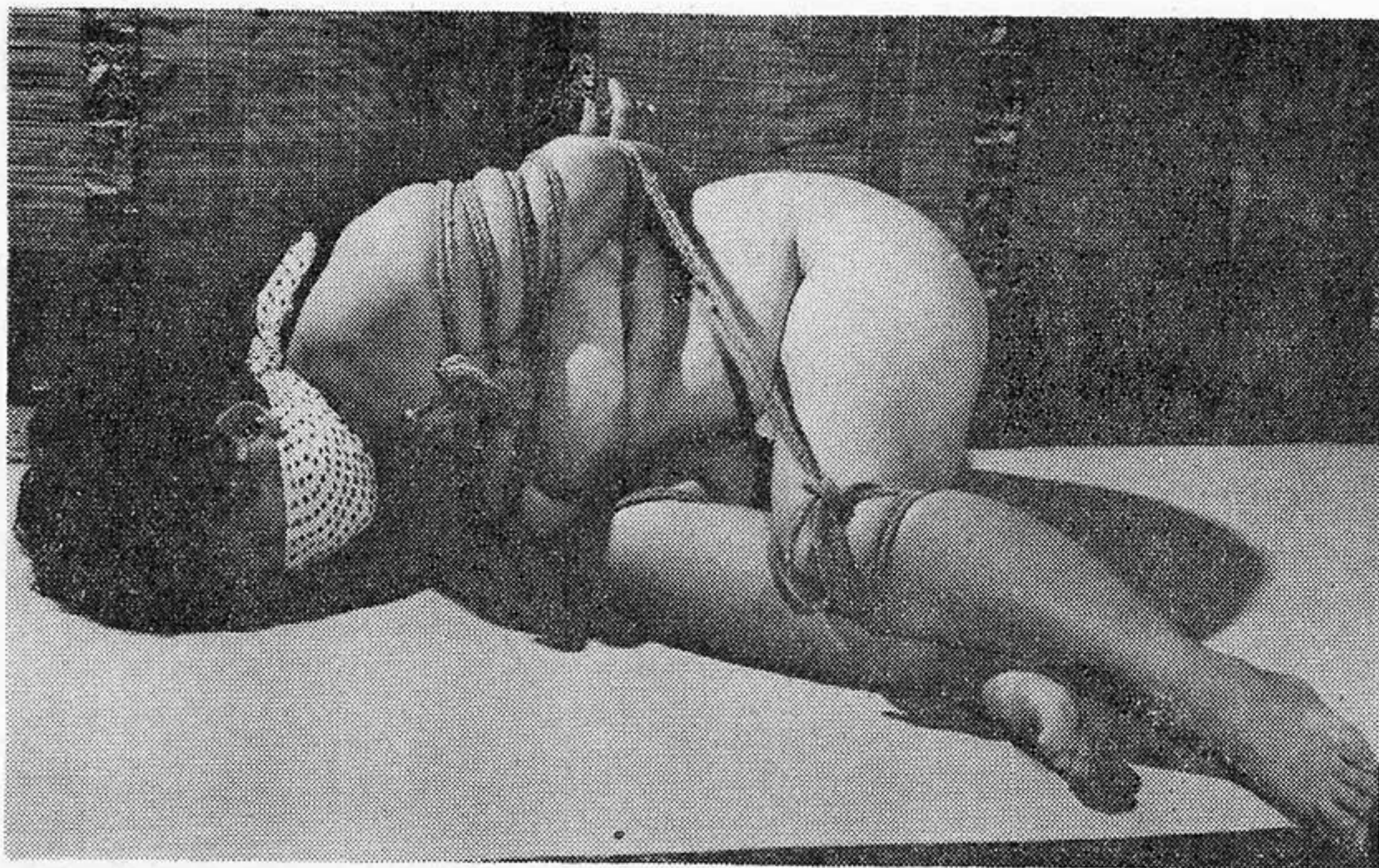
「ああ、挙げます、挙げますから、私をぶたないで、ぶたないで——」

「まだだ、まだだ。そんなことで、お客さんの方から見えると思ってるのか。もっと、もっと高く、左足を挙げるんだッ」

ピシッ、ピシッ、ピシッ——。

鞭は臀部から太股、そして挙げた左足の足裏を狙って、情容赦なく、そのしなやかな、なめし革を肌、に、からませてゆく。

「もっとだ、もっとだ。見物のお客さんに、



すっかり見えるように、脚を挙げるんだ」

鞭の雨は止むことがない。

左足が、もうこれ以上、挙らないというところまで開けると、彼女は身体をにじらせて、下側になった右脚をも、広げだしてきた。

「うん、よしよし、その調子。見物のお客さんが喜んで見ているぞ。もっと開け、もっと開くんのだ。さあどうだ。このムチの味はどうなんだ。これでもか、これでもか」

私の意地悪な意図は、ここで女体の最も鋭敏な個所への鞭撻を達成しようとしていた。それによって、畜化願望の女が、果して、どのような恥知らずの狂態を示すか、私には、それが楽しみだった。

「ああ、こんなに縛られて、その上ムチでぶたれるなんて、あああ、気持ちがいい、気持ちがいいの。もっと、ぶって、ぶって。気持ちがいいの。ぶたれたら、気持ちがいいのよ」

「そろそろ、よく見えた。もっと開け、もっと開くんのだぞ。見物のお

客さんに御開帳のサービスしなきゃ駄目じゃないか」

鞭で彼女の肌を叩きのめす度に、情景描写してやると、凄く欲ぶことに気がついた。殊に、人が見ているということを喋ると、一気に失神してしまいうくらいである。

「よし、よし。そのまま、ぐーうと、脚を挙げてるんだぞ。下ろしたりしたら、ひどいお仕置にされるんだから覚悟してるんだな」そうさせておいてから、私は鞭の底に忍ばせておいたクリップを取り出してきた。

書類や紙を挟むに用いる金属製のクリップであるが、これには大中小と大きさにも色々あり、形も丸型や角型とメーカーによって違ったものが販売されている。従って挟みつけるバネの力も、強弱さまざまである。

鼻責めのときに、この金属製のクリップを用いたことがあったが、これは、なかなか痛いもので、鼻の頭を挟むと、忽ちにして、目からポロポロと涙がこぼれた。それにクリップをとった後でも、鼻翼のところに、くつきりと赤い筋が残って困ったものだ。

さて、今回のクリップ責めは、ショーとして行う花電車飼育訓練の序幕としてやるのだから、勿論、場所は顔面じゃなくて、下の方

だ。その下の方の場所といえば、クリップを挟むポイントは、少なくとも三点はある。

三点というのは、象徴的な中心部と左右の両翼である。大中小、強弱さまざまな種類のクリップを、どのようにして受付けるだろうか。受付けたあとの状態は、どうだろうか。

これは好事家にとっては、極めて興味のあるデータであると思う。

今まで私が行ったクリップ責めの経験ではその耐久力に極端な差があった。ごく小型の弱いバネのクリップでも、飛び上って悲鳴を挙げて耐えることの出来ない女もあれば、超特大の強力なバネのクリップで挟みつけられ、びくともしない女丈夫もあった。

小型の弱いバネのものから漸次、大きなものへと変えてゆく過程や、三カ所の責めのポイントに対してのクリップの形や色を変えてカラフルな視覚を楽しむなど、もし、発表に制限を加えられないものならば、面白い話題に事欠かないのだが、責める場所が場所だけに、詳述できないのが残念である。

さて、この白豚（シロブタ）に対する花電車の訓練と飼育であるが、私は一見して、相当の耐久力ありと判断した。従って、使用のクリップも、持ってきた中から大きさもバネ

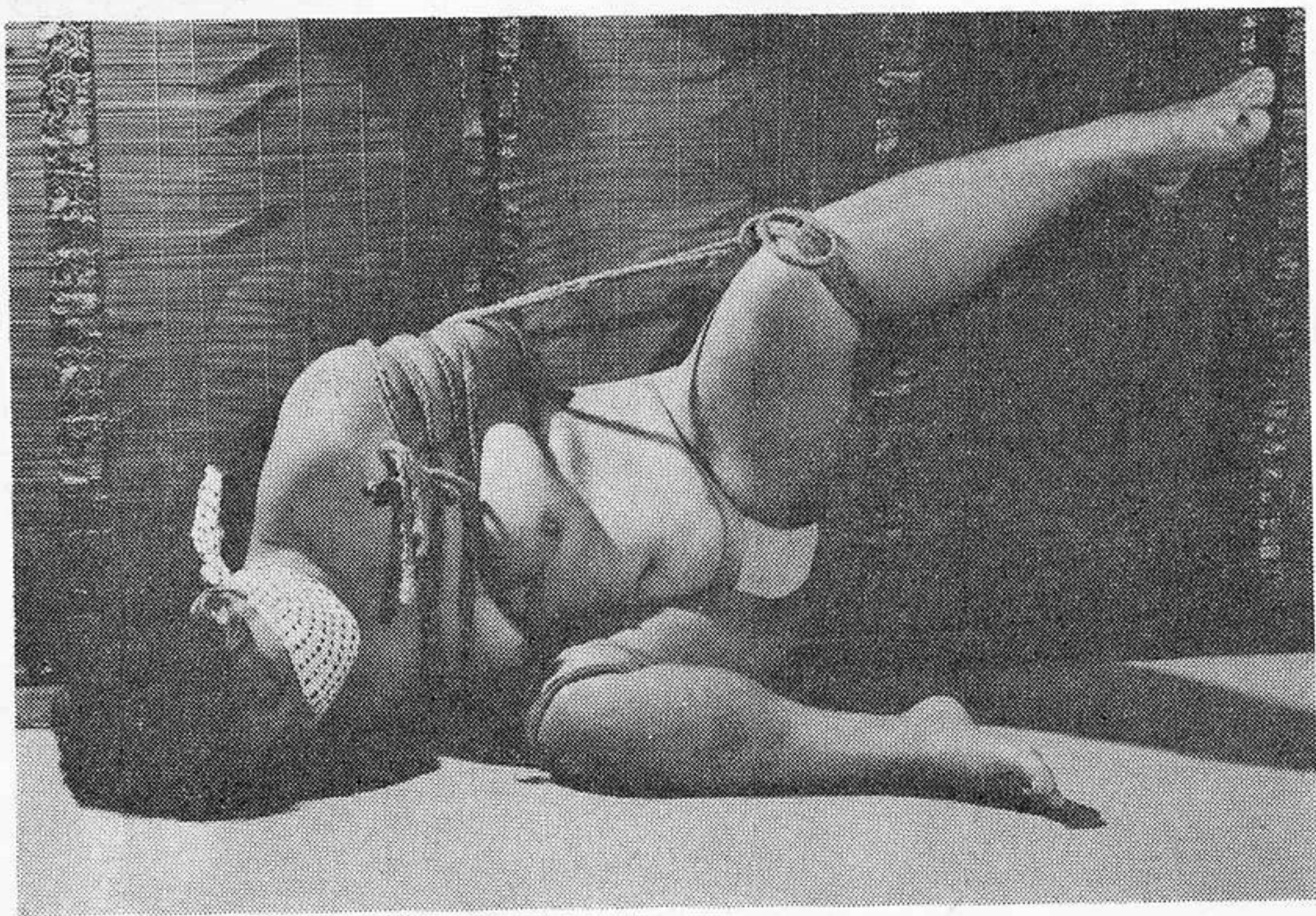
の強さも中位のを三個、選びだした。

こうしたクリップ責めの際には、剃毛しているということとは大変に好都合だ。

緊縛と鞭撻と、そして、見世物の誘導によって、完全に畜化してしまっている苗木陽子は、普通だったら、とても痛くって辛抱できない羞恥責めを、受入れる下地が出来ていた。いわば、受入れ態勢充分というところだ。

いくらマゾの素質を持っている女性だといっても、何らの準備行動をやらずに、直ちに激しい責めに移ったら辛抱できないだろう。

それと、クリップを挟むのにも、簡単なようだが、ちょっとコツがある。ゆっくりといつ挟んだのか、わからない位やんわりと、やることだ。なんといっても、女体の中で最も敏感でデリケートな場所



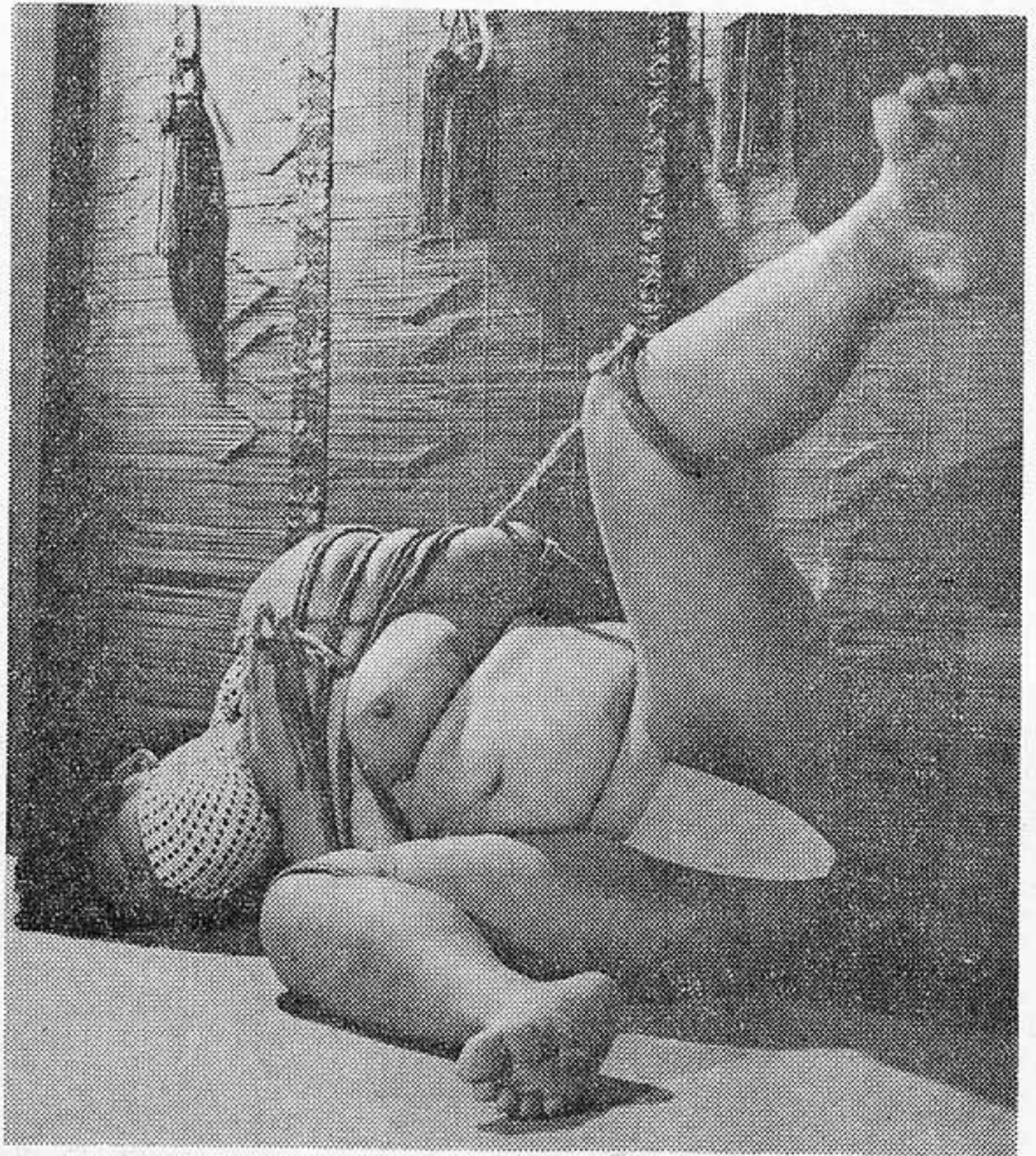
だ。しかし、一旦、挟んでしまったら、もう、こっちのものだ。

だが、責められる側の者にしたら挟まれるまでのスリルもさることながら、挟まれてしまってから時間が経つにつれてジリジリと締めつけてくるバネの力には、たまらない被虐感を味わうのではなからうか。

由来、豚は鈍感な動物だと言われている。牡豚を去勢しているところを見たことがあるが、睪丸を袋ごと左手で握りしめて皮膚にナイフで、さっと一筋、切り目をつけ、ぎゅっと握りしめる。玉が二つ、ぴょこんと飛び出してくると、それを、ぐるぐると回して、力いっぱい捻じきってしまうのだ。

豚さんはブーブーブーと鳴いているが、傷口には砂をなすりつけておいて、これで一丁上りというところだ。

この肥満体のシロブタは、思った通り鈍感そうだ。いや、被虐の心が燃えさかって、今や、疼痛や羞恥や淫虐や異常な行為なんかがすべて、強烈な快感にすり変る境地に達しているのかもしれない。



いつ見ても美しいものだ。そして、人の顔つきが人それぞれ違うように、その道具立ての色、形、大きさ、位置なんかが、みんな違っていた。だから、何回見ても見飽きないのだ。見るばかりではない。どんなにして、弄んだって、喜びこそすれ拒否はしないのだ。なんといっても、相手は、人間の女であっ

て、人間の形は、しているが、白豚なのだ。白豚を弄ぶのに、何の遠慮が、いるものか。

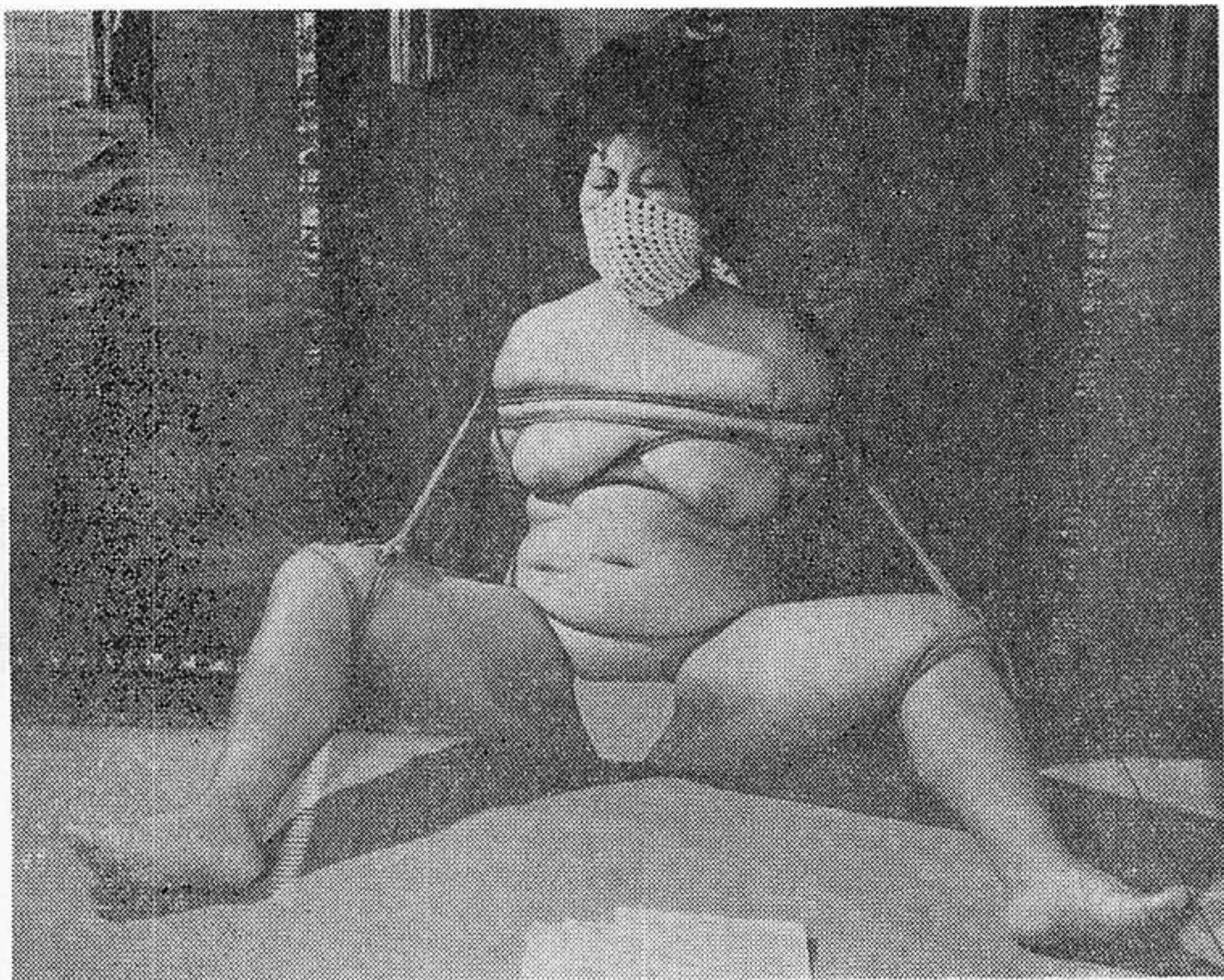
じいっと、穴の明くほど見つめられているだけでも、彼女は風に靡くスキのように、さっと動揺する。触れるか触れないくらいなのに、何をされるのかわからない彼女は自分の抱く期待に輪をかけて、激しい反応を見せるのだ。

そんな変化を見ているのは好きだった。

その色のvarietyよう、大きさの変化、その他、諸々の状態を私は見たままを、逐一、最も下品な言葉で、彼女に報告してやった。ショーの見物人の一人としての淫猥な感想を多分に混じえて、私は酔ったように喋った。

私は、自らの言葉に自分から興奮し、彼女は、私のお喋りによって、沢山の見物人の目を意識して、狂ったように燃えた。

クリップは、顔面でいえば鼻の部分に、しっかりと挟みついた。ここを制圧すれば、両



れた苗木陽子は、まさに
慟哭した。

長く尾を引く、彼女の
泣き声を耳にしながら、
私はベッドの上に仰向け
になった。

時計を見ると、すでに
四時半を少し過ぎていた
不思議に眠くなく、疲れ
もなかった。

「あなたあ、解いてよ。
痛くなったわあ」

それは人間の女の声だ
った。

白豚に变身していた、
△畜化の女△が、もとの
人間に戻ったのだ。

私は起き上ると、素早
く、しかし、至って優し
く縄を解いた。そして、
改めて、人間の女として
の苗木陽子を、かき抱い
た。

が、もう彼女は、今までの白豚ではない。れ
っきとした女性なのだ。

私は彼女をいたわりながら、ベッドの蒲団
の中へ招じ入れるのだった。

浴衣を着た彼女は、裸だったときの、あの
ボリニームが、まるで嘘のように、着痩せし
てみえた。これこそ、真正銘の、淑かな婦
人だ。あるときは豚になり、あるときは馬に
なり、あるときは犬になって、私に弄ばれ、
犯された、あの倅は、今はなくなっている。

「どうでした、御感想は？」

「とっても素晴しかったですわ。何度も何度
も、気が遠くなりそうで、それはそれは、気
持が、ようございましたわ。SMプレイって
考えていたよりも素晴らしいんですね。本当
に幸せでしたわ。でも、ちょっと、疲れたみ
たい。ウフフフ」

「そうですね、宵の口から、ぶっ続けの休み
なしでプレイをやったんですから、疲れるの
も無理ありませんね。じゃあ、これから一時
間か二時間、ぐっすり寝ましょうか」

私は彼女をケモノとしてではなく、人間の
女性として扱いたかった。それは、やはり正
常位しかない。私は、ゆっくりと彼女の腰紐
を解いていった。

(おわり)

翼の唇の部分は至って容易であった。

生れて初めて、こんな奇妙な責めを加えら

手首にも、二の腕にも、胸にも、背にも、
縄目の跡が、むごたらしく幾筋もついている

カット・マエダヒオミ



楽しきかな便秘癖

浣腸日記

南原赤秋

みる。

一、イチジク浣腸。特大を十個、用意してあって、自家製の液が入っている。

二、ガラス製三十CC浣腸器。

三、ガラス製五十CC浣腸器。

四、ガラス製百CC浣腸器。

五、エネマポンプ。

六、イルリガートル千CC。

七、十五号カテーテル。

八、水道ホース。便所の隅にあって、ガス用ゴムホースがつけてあり、先にはエ

ボナイトのノズルがついている。

浣腸液はグリセリン百八十CC、食塩百二十瓦、水八百CCを混ぜたものを主に十％食塩水、二％食塩水、石鹼水、水道水を使う。

その他、珠のれんを分解してこしらえた大小

いろいろの数珠。又それを竹串に通して、こしらえた棒等。最近ではドナンの味も覚えた。家業（電器商）のため、ほとんど終日、在宅。そのためプレイは、いつでも出来る。家庭は妻と小学生の子供一人。

×

八月一日 水 曇小雨

七時前、目覚める。早かつたので寝たままでイチジクを一本だけ、浣腸する。十分以上たったが、こらえにこらえて便所へ走る。昨夜、沢山出したので、ほとんど薬だけ。それでも寝起きの気分は爽やか。夕食後に久しぶりでグリセリン原液二十CCで浣腸。あのだろっとした液を見るだけでゾクゾクとする。ひどく感じる割に効果は薄く固型便が少々。ホースをアヌスへ直結、水道水、約千CCで

私の赤裸々な浣腸生活を、この一カ月間の日記に、まとめてみた。四十才に手の届く私が、小学生の頃から、愛し続けて来た浣腸。一日一日、深くなつてゆく、この楽しみを実際の記録として書き続けて、一カ月たつてみると、意外に興奮もなく、日常生活そのものとなつてゐるのに気がつく。

この日記に出てくる、愛用の道具を記して

洗う。

二日 木 曇

今日は業界の会合があつて有馬へ行く事になつてゐる。準備として昼前、妻に浣腸させる。こんな時は堂々と座敷へイルリを吊つて食塩水千CCを五分程かかつて入れる。妻は脱脂綿でアヌスを押えながら「こんなのが、どうしていいんでしょうね」と、不思議そうに云う。便器を当ててくれるかと、内心、待っていたが、十分もして「もういいでしょ。私、忙しいのよ」と、つつばねられる。排便は、かなり大量。有馬行にはプレイ用としてイチジクを三個。しかし適当な女が居らず、しかも二人部屋なので、あきらめる。

三日 金 晴

起きぬけにイチジクを三個。ベッドの中で頑張る。同室のY氏は、もう起きて新聞を読んでゐた。三コ目を浣腸した後の容器で、空気を二度、入れてあるので、きつとすごいガス音がするだろうと楽しみながら、且つ心配しながら便所へ入る。充分に我慢してあるので、案の定、ものすごいガスと共に排便。Y氏、おどろいたと思う。トイレの隅の異物入りにイチジクの空が三コ。メイドも、おどろくだろう。夕方、帰宅。

四日 土 晴

雑用に追いまわされ、終日、外出。夕食後に浣腸をと思ったが、来客で果せず。久しぶりで便を残したまま寝る。

五日 日 晴

妻が子供をつれ外出するというので、日曜一日を浣腸で楽しむ事にする。九時すぎまで朝寝を楽しみながら、今日一日どう楽しむかを思いめぐらせる。まず最初は百CCのガラス筒に液を、たっぷり入れ、カテーテルで直腸深く浣腸。綿を充分に当てて、運動用のサポーターを、はめる。大急ぎで洗面。みそ汁で朝食。途中で下半身が、ふるえ出す。頑張りに通して食事を終え便所へ。昨日の分がたまつていて、かなり大量の固型便。ついでイルリで石鹼液千CCを奥深く浣腸。サポーターで押えて、今度は百米程離れた店まで煙草を買いに行く。帰途のつらかった事。便所まで行けず、玄関の土間へ出してしまふ。何だか疲れて、後は終日ごろごろ。

六日 月 曇

猛暑。腋のにおいが興奮剤だ。イチジク浣腸二本。ランニングに汗をにじませてトイレで十分。健康便が、うず高く、もり上る。

七日 火 曇

昼食後、寝ころんでイチジク特大を一コ、浣腸する。随分、頑張つて便所へ入る。コロコロが少量。ホースで約千CC浣腸して、洗う。便が出ない。

八日 水 曇

昼すぎ。今日は趣向をかえて、三十CCのガラス筒を使う。十五号のカテーテルを根元まで入れて奥深く浣腸。どうした事か、すぐに便意。あわてて器具を洗い、片づけも、そこそこに便所へ入る。大きなガス音と共に、おびただしい量の排便。すぐにカテーテルをホースに繋いで、約五百CCの水を浣腸。きれいな水しか出ないので、もう一度。だめ。さらに、もう一度。軽い腹痛。やれやれ出るなと思つたら案の定、ものすごく大量の泥状便。三度ばかりで、すっかり出てしまったらしい。ホースをつないで約千CCの浣腸で身も心も軽々と終る。四十分程、かかった。三十度を越えるトイレでランニング一枚で汗にまみれる。クーラーのよくきいた座敷へ寝そべって、数珠で我がアヌスを苛めて楽しむ。はげしい身ぶるいと共に昇天。もう何日、妻を求めないのか。悪い夫だと思ふ。と同時に妻にアナルセックスが教え込めないのが残念

だ。

九日 木 曇

作新学院と柳川商との延長戦を寝そべって聞いていて、ふと浣腸したくなる。電力節約に協力ではないが、クーラーを止めてあるの、ランニング一枚だが、汗でじっとり。自分の腋の香に、うっとりとする。手軽にイチジク浣腸を使用。野球なんかどうなったのか分らぬ位、排便をこらえる。洩れそうになつて便所へ走る。すませて戻ってくると二対一で作新が勝っていた。

十日 金 曇

浣腸したい気分を、おさえにおさえていたが、昼前、辛抱しきれず五十CCのガラス筒にカテーテルをつけ、直腸の奥深くに届かせたところへ妻が、かけ込んでくる。「まあ、何してるの。お客様ですよ」という。このまま会ってみようかと思つたが、若しくじつたら大変なので、大急ぎで薬だけ出してしまつて来客に会う。十分位で終つたので、我慢すれば楽しかったのにと残念至極。そのまま忙しくして、夕方あらためて浣腸の、し直しとなる。面倒になつてイチジク浣腸一本で、すませる。夕食後、散歩に出る。若くて美しい娘さんの居る薬局をみつけたので、いつも

のくせで入ってゆく。お客にも一人、若い娘が立っている。見ていると包んでもらっているのが何とイチジク浣腸。しかもAという特別品。それも五函。私の目がそれを見ているのに気付いてパツと赤くなる。瞬間、この子も好きなんだと感じる。何か言ってみようかと思つたがやめて、そこにあった歯ミガキを大急ぎで買って今の娘さんの後を追う。急ぎ足なので、ついてゆくの、しんどい。随分、遠いなと思ひながら追つてゆく。だんだん私の家のある商店街の方へ来る。これじゃうちの近くじゃないかと思つてみると、何とすぐ近くのN内科医院へ入った。娘さんか看護婦かは知らぬが、これは明らかにプレイ用に違いない。何だかワクワクする様な気分で家に帰る。

十一日 土 薄晴

昨日の娘さんが気になる。一度、あの医院へ行つてみたい。便秘して浣腸して貰いに行くのが一番だと気付き、今日から、しばらく浣腸をやめる事にする。

十二日 日 晴

何だか、腹が張つて来た。しかし大きな希望があるので、じつとこらえる。浣腸がしたくて、たまらない。数珠で遊ぼうかと思うが

辛抱する。アヌスをさわるのが何だか、こわい。

十三日 月 曇

もう一日、頑張る。便意は全然、起らないが腹が張るのだけは、たまらない。今、食塩水の千CCも浣腸したら、すっきりするのだから。明日こそは楽しみだと思つて我慢する。

十四日 火 曇後雨

N医院へ行く。受付は彼女とちがつた。幸に誰も待合室に居ない。すぐに診察室に通される。先生は割合若くハンサムである。便通の無い事を言つて受診。ベッドに寝て腹をあちこち押えられる。「ああ、大分たまつてますな。どうしますか。下剤をあげますか、それとも浣腸しますか」と云われた時は、心の中で万才と叫んだ。「早い方がいいです」と云う。「村上君、ちょっと、そちらで浣腸してあげて」と云うと、隣の処置室で「ハイ、どんな浣腸をしますか」という女の声。「そうだな、どうせやるなら、先にグリセリンでやって、その後、食塩水を入れてあげて……じゃ隣の部屋へ行つて下さい。浣腸してあげますから」

カーテンを通して処置客へ入る。やっぱりこの間の娘さんだ。向うもパツと赤くなる。

しかし仕事は、あくまで事務的だ。「ベッドへ上って下さい。ああ、ズボンも皆ぬいで下さいよ。ワイシャツもぬいで下さいね」と強圧的だ。言われる通りにしてベッドへ上る。村上と云われた看護婦は私の顔を、じっと見ている。何か云いたそうだ。ガラスの浣腸器に百CCと思われる浣腸液を入れて、私の後側に立っている。なかなか、すぐには注入しようとしないう。やわらかい指をアヌスの辺りに感じる。指が当たると、私のアヌスはピク、ピクと絞っているに違いない。「じゃ浣腸しますからね」と、いやに大きな声。浣腸器が冷たい。グリセリンが入って来る。ああこの瞬間を、この四日間、どんなに待った事か。すっかり注入したらしいのに、浣腸器は動かない。しばらくしてようやく離れた。脱脂綿を当て、じっと押えてくれる。しばらくして「随分、我慢出来ますね」と云う。「もういいですか」と云って顔を見たたん、とてもこわい顔をして「だめです」と云うなり尻を思い切り、つねられた。思わず声を出しかけたが、ぐっとこらえる。ああ、この子はサドだなと感じる。五分もしたらN先生が入って来て「もういいでしょう。便所は廊下のつき当りですよ」というので、やむを得ず便所へ行く。まるで石のような便が五つ六つ、出た。もっと出そうかと思ったが後が楽しみ

なので、やめてもとの部屋へ戻る。ベッドはちゃんとビニールが敷いてあって、イルリガートルも吊ってある。用意、充分である。しかし、どうしてよいか判らぬように立っていると、さっきの村上さんが、「早く寝て下さい」と、つつけんどんな声をかける。あわててベッドへ寝る。「今、どうでしたか？ 沢山、出ましたか」と問う。「ええ、出ましたけど、石のようなのが少し」と答える。「じゃ、これから大きな浣腸をしてあげます。右を下にして、足をかかえるようにして」「どうですか」「じゃ、口をあけて、楽にして下さいよ。痛かったら言って下さい」と言いながら、もうワセリンをアヌスへ塗っている。アヌスの中心へ入りそうで入らない。あきらかに、いたずらをしている。顔を見合わすと今度はニコツと笑う。そしてカテーテルがグツときた。割合に細い。十二かな、十三かなと思う。浣腸が、はじまる。液が入るにつれどうも普通でないと気がつく。こりゃ随分、濃い食塩水だ。千CCも入れるような二%位のものじゃない。少なくとも十%近い濃い感じだ。二、三百CCも入ると、もうたまらない感じがしてくる。彼女は薄笑いをしながらカテーテルを押えている。小さな小さな声で「いいでしょ、よく効くでしょ」と云う。こちらもだまって「うん」と合図をする。苦し

い五分間。どうやら注入完了。彼女が耳もとで、ささやく。「好きなんでしょ。どこかでプレイしない？」全く我が耳をうたぐった。突然の事なので返事も出ない。あわてて便所へ走る。ものすごい量の排便。もう全く、ぐったりとして診察室へ、もどる。「どうですか、出ましたか？」「ええ、すっかり気分が良くなりました」「ちと野茶でも、うんと食べるのですな。お薬を、出しておきましょ」と型のごとく終る。全く、ほつとして待合室へ、もどる。

しばらくすると薬局から「南原さん、お薬です」と呼ぶ。村上さんである。袋を見ると隅に鉛筆で薄く（土曜夜、銀の城）と書いてある。ハツと思ったが、だまってうなずいて顔を見ると、ニコツを笑って声にならぬ声でハチジと云う。十八日夜八時京橋の銀の城という意味らしい。早々に支払を済ませ帰る。思ったより、すばらしい収獲。終日、うきうきして身も心も軽い。私の浣腸プレイにも、とうとう相手が出来た。こんな事で身近にすばらしいパートナーが見つかるとは思ってもやらぬ事である。正しく旱天の慈雨である。

十五日 水 雨

昨日の約束があるので、又、今日から浣腸を中止する。

十六日 木 曇

やはり浣腸がしたくなってくる。しかし楽しみは苦しみの後に来る。

十七日 金 曇後晴

明日まで頑張ろう。目の前にイチジク浣腸が、ちらついて困る。腹が張る。ガスが出てそのたびに浣腸と思い、ハッとしてやめる。

十八日 土 晴

待ちに待った夜。イチジク浣腸を六コとエネマポンプ、カテーテルと数珠球の串を持って行く。八時ちょうどに銀の城の前で待つ。五分も待った頃、彼女が小走りに、走って来た。すぐに部屋へ入る。彼女は五十CCの浣腸器とドナンを持って来た。ドナンは後でアヌスが痛いので好かないが、止むを得ない。彼女は、いきいきと準備する。彼女が素っ裸になって、私にもなれと云う。私の腋をにおって「あら、すてきね。私もよ」とニコリする。風呂へ入ろうかとすすめたが、香が消えるからいやと云う。ベッドへ入って、お互いに腋の香を楽しむ。そっと彼女の燃え具合をさぐろうとしたら「いやっ」と、怖い顔。さあ楽しみの浣腸プレイである。彼女、まずドナンを五十CC私のアヌスへ注ぎ込む。さ

すがにドナンは、きつい。二分もたてば、もう玉の汗である。苦しみもだえている私にフアックして来た。目もくらむ感じ。どうにもならなくなって彼女をつき飛ばす様にトイレへ走る。沢山貯めてあるので気持ちよく出る。アヌスが痛い。いよいよ、彼女の番だ。イチジク浣腸を三つ。もうどうにもならなくなつたのか、叫び声をあげていた彼女が泣き出した。ベッドに出されると困るのでトイレへ連れてゆく。泣き叫ぶのを無理に目の前で排便させる。どうもこの前感じた程のサドでもなさそう。単なる浣腸マニアらしい。風呂場でエネマポンプで、石鹼液約千CC浣腸してやる。今度は割合おとなしく、そのまま風呂場で排泄した。後、入浴して十時前、おとなしく別れる。又プレイしようねと、さそったがはつきりした返事をしない。経験が無いので驚いてしまった様子。何だか疲れ切った感じで帰宅。

十九日 日 晴

昨日の楽しかった思い出にひたった一日。夕食後グリセリンの濃いまま三十CC浣腸したが、さっぱり感じない。昨日のドナンの強烈なのが効いた為か。早速、買おうと思う。

二十日 月 晴

近くの商店街の薬局を三軒程、回ったがドナンを置いていない。注文して取り寄せますと云うが、今日、直ちにほしいと思っているのに間に合うわけがない。他も探したが、見当らない。どこも皆、こんな薬どうするのかと云うような変な顔をする。明日にでも道修町へでも行ってみよう。夜おとなしくイチジク浣腸で、すませる。さっぱり面白くない。

二十一日 火 晴

生野の方へ商用で外出したので薬局を二、三軒、回る。ドナンを入手。二本、買う。夕方、帰るなり早速、使ってみる。三十CC浣腸。やはり強烈である。直腸に火がついたような烈しさ。とても三分も頑張れない。後でアヌスが痛いのでホースを直結、水道水、約五百CCで浣腸。又かなりの便が出たので、さらに約千CC浣腸。今度は、もう何も出ない。

二十二日 水 晴

村上さんとのプレーがしてみたい。うまく連絡する方法が無い。夜、業界の会合の後で同業のF氏にさそわれ、北新地のクラブへ行く。そのえと云う女。小説の話を、いろいろする。突然「浣腸の話が小説によく出て来るけど、本当なのかしら」と云う。びっくりし

たが平然として「さあ、どうかな。君ならどう？」と、聞いてみる。「いやっ、不潔ネ」「しかし、気持がいいらしいよ」「ミーさんやってみたら？」「君とならネ」「知らない」というようなことで、ひょっとしたら可能性があるかもしれない。又、楽しみが出来た。

二十三日 木 曇

七時前、目が覚める。寝たままで、イチジク浣腸を一つ。ごろごろ、ころがり回って十分程、がまんする。洗面する間も頑張り通して排便。驚く程、沢山、出る。

二十四日 金 雨

遂に妻とのプレイ成功。彼女、「あまりいやがっていると、どこかの女の人とプレイするようにでもなったら大変だから、辛抱してあげる」と云う。この間の事を、みすかされているみたいで驚く。でも気の変らぬうちにまず、おとなしくイチジク浣腸を一コ浣腸する。気が狂いそうだと云ってトイレへ走る。私もイチジク浣腸一コ。

二十五日 土 曇

妻に昨夜の感想を聞く。何やかや云っていたが「あなたが好きなのが判るような気がする」という。これなら将来、大いに楽しみあり。

り。今夜も又プレイしようと言ったが、いやだと云うので、無理をしてもいけないと急がぬ事にする。その代り、妻に浣腸して貰う。ドナン三十CCをイチジク浣腸の空に入れて浣腸後、約五分ファックさせる。羽化登仙というのは、こんな気持を云うのではないかと思う。排便後、妻をだく。気持良く寝る。

二十六日 日 曇小雨

村上さん、そのえ、妻と、いろんな顔が目に浮かぶ。無理はいけなと我慢する。午後妻が子供と外出したので、座敷で便器を当てて、ドナン三十CC浣腸。寝たままの排便も又、楽しい。鏡を立てて排便の様子を見る。

二十七日 月 晴

近くのアパートへテレビの据付二箇所。アンテナの立て場所に苦労した。夜も、来客あり。ついに排便もせず、疲れて寝てしまう。

二十八日 火 曇

昨日、便秘しているので、朝から楽しみである。又、二、三日、頑張つてプレイしようかと思つたが、相手をみつける手数の方が面倒なので、遂に浣腸してしまふ。ドナンを二倍に薄めて百CC浣腸してしてみる。意外と効果がある。普通のグリセリン浣腸と同じ位の

感じ方。八分位、辛抱してトイレへ入る。アヌスも痛くない。夜が多いためか排便量は、ものすごく多量。ドナンとグリセリン、食塩水等いろいろ混ぜて実験してみたい。

二十九日 水 晴

そのえから電話。遊びに来てくれという。思い切つて、浣腸プレイしてみないかと、誘つてみる。意外と脈のありそうな返事。「面白いかも知れないけど、何だか、恥ずかしいな」と云う。近いうちに実行に移したい。おとなしくイチジク浣腸ですませて就寝。

三十日 木 雨後曇

エネマポンプで千CC近く空気を送り込んでから、イチジク浣腸をする。五分も頑張っているうちに腹痛が始まる。トイレへ行っても腹の張ったのが治らず、終日、不愉快。夜もう一度、浣腸したが、さっぱりしない。

三十一日 金 晴

夜、妻にドナン五十CC浣腸させる。「私もしてみようかな」と云う。とうとうプレイの味が判つたようだ。早速ドナン三十CCを浣腸。私がトイレへ入っている間、頑張らせる。ぶるぶる震えながらトイレへ飛び込む。どうやら浣腸の味を覚えたようだ。万才。



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

夕梨ゆうりという女おんな

帰らざる鼻戯回想

梶 啓 志

夕梨が事故で亡くなってから、すでに五年の歳月が流れました。しかし、私の心から女の鼻の魅惑が消えず、女の鼻に対する執着を取り払うことはできませんでした。グニャッと軟らかく手に伝わってくる女の鼻の感触。押し上げられ拡げられた女の鼻の美しさ。そのときの、うっとりとした女の表情。それらを忘れることができないのです。

すっかり夢中で、おぼれこんでいた二人の間の生活が、夕梨の突然の死によって終止したとき、私は余りの衝撃に、いいようのない悔恨に襲われたものでした。耐えがたい淋しさと夕梨への想いを断つために、酒と肉との惑溺の日々が続きました。歓楽の世界の中に

帰らざる夕梨との『鼻戯』のまぼろしを追い、私の女の鼻に対する欲望をうけ入れ、理解してくれる女を求めて歩きましたが、常に結果は失望的でした。すべてが過去の幻影であることを知らされたとき、私はただ、夕梨との『鼻戯』の回想を誰かに語りかけたいという心情に強く、かられていったのです。

☆

夕梨は薄幸な女でした。早く両親を失い、人手を転々として育ち上京してきて私と知り合ったときは、正に天涯孤独の女でした。二人の生活がはじまると、夕梨ははじめて自分のつかんだ仕合せを、ひたすら喜び、それを率直に表わしていました。

場末の Snackbar で働いていた夕梨を、最初に私の部屋へ連れてきたとき、両方の手を胸にあてながら、

「夕梨、こんなところに住んでもいいのかしら？」

と、まだ自分を信じられないような、まなざしでつぶやいたのを私は今でも憶えています。私たちの住いは、私が前から借りていた東京の下町にある、小さいマンションの五階で、六帖の和室と、それより稍、広いリビングルームの二部屋。ほかに簡単な台所と浴室がついていました。外の見晴しがよい上、何よりも周囲との、かわりがなく、全く二人だけの別天地でした。

「天国みたいだわ……」

と、いつまでも、くりくりした目を輝かせていました。

☆

夕梨には過去の暗いカゲは少しもみられず、とても無邪気な、可愛い女でした。二人の生活は、わずか半年足らずで、うたかたのように終わってしまいました。今でも私にとって夢の中の出来事にしか、思えないのです。私と夕梨の間には、二人が生活に入る以前、ひとときの男と女の『たわむれ』だけで終わってしまったように思うのです。あるいは天罰だったのかも知れない。その継続は許されなかったのかも知れない、と想ったりするのです。

夕梨は、いつも喜々として、何一つ、私に逆らうことなく、よく努めてくれました。あの頃の私は、夕梨のことばかり考えていて、つとめには全く身が入りませんでした。夕梨は私とは十以上も年が離れていて、私にとっては、まだ少女のようなものでした。よく動く大きな目をした顔立ちや表情にも、童女のような、あどけなさや妖精のような可愛さがありました。夕梨がきてから三十男の一人

住いは、乙女らしい、こまめな心づかいで、すっかり雰囲気が変わっていききました。夕梨は、女の子らしい飾りたてや、おしゃれの好きな女で、私の帰りが遅い夜でも、部屋の壁に何かをとりつけたり、ひとりで鏡の前に坐って、あれこれ化粧をしたりして楽しんでいました。別に私を意識してというのではなく、少女が、ちょっといたずらをして、自分の身を飾ってみているという感じでした。それでも私が、ほめてやったり、注文をすると、素直に喜んで、きつと次の次には、大胆に私のいうことを取り入れ楽しませてくれました。夕梨は何を身につけても、どんなに大胆で型やぶりの恰好にしても道化師の少女のように、あどけなく可憐なものに見えました。

☆

私と夕梨との二人っきりの『プレイ』がはじまったのは二カ月ほどたってからのことでした。いつも週末の夜は、私たちの、もっともくつろいだ楽しいひとときでした。夜の食卓で二人は、よく酒を飲みました。夕梨はアルコールには、かなり強い方で、酔うと一そう陽気になり、いつもより、甘えん坊になりました。その日は私がつとめ帰りに古本屋で、グラビアの入った古い『奇ク』を二、三冊買ってきていました。ほろ酔いの気分、その頁をくっていると、夕梨が私に寄りかかりながら、のぞきこんできました。夕梨は恐らく、はじめてみるそれらの写真に、ちょっとオドロキを、あらわしながら、意外に興味を示しました。その中で、数枚の縛られた女が『鼻責め』をうけている写真に目をとめ、

「アラ……」

と言いながら、甘えるように私の方へ顔を向けて、
「こんなふうにするの？」

「男」と言つて人差し指で、自分の鼻を軽く押し上げてみせました。その表情が、とても可憐で、私は思わず、かたわらの夕梨の体を抱きよせ、

「夕梨のその顔、とっても可愛いよ。ちょっと鏡でみてごらん」と言つと、素直に鏡のところへ、とんでいって、「ククク……」

と笑いながら「夕梨、子ブタみたいだわ」と上向けた自分の鼻を大きな、くりくりとよく動く目で、珍しそうに、みつめていました。

夕梨のそんなしぐさが、いじらしくて堪まらない気持でした。膝の上に乗って来た夕梨は、私の顔を下から見上げて、

「男の人って、こんなふうに女を縛ったりしてみたいものなの？」と、たずねました。

「夕梨が、とっても可愛いからね……」

私が、そんなふうに答えると、

「夕梨は、あなたのものだわ。何をなさっても、いいわ。でも、こんなに縛られたら、どんな気持するかしら？」

と、新しい好奇心が夕梨の頭に、もたげたようでした。私は黙つて夕梨を抱きながら、着ているものを一つ一つ、脱がせました。私は縄を持ち出してきて、全裸に剥いた夕梨の手を後ろにまわし、手

首を縛り上げ、腕から乳房の上下に、ぐるぐると縄をかけました。夕梨は縄が肌に触れたとき、ちょっと、その身体を固くし、頬を赤く染めながら、床の上に開かれた写真に目をやり、

「夕梨も、あんなふうに縛られるの？」

と、恥じらいとも期待感ともつかぬ表情で言いました。夕梨の心の中には、今までになかった悦びを、あるいは全身に感じていたの

かも知れません。縛り上げられた胸元に、夕梨の豊かな乳房がピョ

コンと、つき出るように盛り上がって、若々しい夕梨の肢体が、みずみずしいまでに美しく見えました。私は、すっかり興奮して、はげしい胸の高鳴りを覚えました。縛られた夕梨を、そのまま鏡の前に連れていって坐らせました。夕梨は映し出された自分の裸の姿に「恥ずかしいわ。夕梨、こんなに縛られてしまったの？」

と縛り合わされた後手を気にしながら、つぶやいていました。

私は夕梨の顔を鏡の正面に向けさせておいて、指で鼻のあたまをぐっと押し上げてやりました。軟らかい夕梨の鼻の感触が心地よく伝わり、形のよい夕梨の二つの鼻の穴は、縦に大きく広げられ、上唇が心持ち、つり上がりました。

「アーン、夕梨のお鼻、つぶれちゃうーん」

と鼻をならしながら、むしろ、うっとりした表情で、指先で剥きあげられ、自由にもてあそばれる鼻を、まかせていました。

☆

その夜から二人の間に新しい『プレイ』が生まれ、それは次第にエスカレートしてゆきました。私は行き帰りの電車の中でも、仕事中でも、もっぱら夕梨とのことばかり思いめぐらしていました。夕梨の方も、かなり積極的になってゆき、夜を待ちのぞんでいて、「ネエ、縛って……早く縛って、好きなようにしてちょうだい……」

と夕梨の方から求めてくることもあるくらいでした。私たちの、『プレイ』は誰からも妨げられないマンション五階の密室で、形を変え、趣向を変えて続けました。全く二人だけの世界でした。私たちの『プレイ』には必ず『鼻責め』を伴いました。伴うというよりは、縛り上げるのは手段で『鼻責め』が目的というべきでした。夕梨も、そのことをのぞんでいるようでした。

「夕梨のお鼻って変なのかしら？　そうやって、お鼻をなぶられると、何だか変な気持ちになってきちゃうんですもの……」

と私が夕梨の鼻をオモチャのように、いじりはじめると、鏡にうつる、ひしゃげた鼻をうらめしげに眺めながら、縛られた体を、くねくねと、くねらせました。私は、すっかり夕梨の鼻の発散する、不思議な魅力にとりつかれ、いたぶる悦びに、ひたりこんでいきました。

私たちの『プレイ』は、いつも入浴から、はじまりました。裸に剥いた夕梨の女体を、高手小手に縛り上げて浴室へ連れてゆき、私が全身を、すみずみまで洗ってやりました。特に鼻に対しては、蒸気で軟らかく、ふくらんだ、肉づきのよい夕梨の鼻を、指でめくり上げるようにして、細い棒の先につけた綿や指をつっ込んで、鼻の奥まで丁寧に掃除してやりました。形よく、やさしく拡がった鼻の穴は、私の指先でひねりまわされ、さまざまに変形しました。

風呂から上がると、今度は鏡の前で、湯上がりの、すべすべした全裸の肌に、改めて胸と手首を後手に縛り、お尻について足を大きく拡げた姿勢に坐らせ、足首を別々の縄で縛って鏡台の脚に結びつけました。

「いやだー。みんな映っちゃうわ」

といって、大きな鏡にうつる浅ましい姿に、顔を赤らめていました。夕梨は真正面をさらけ出していました。

それから私は、丹念に夕梨の化粧をはじめたのです。そのため私はいろいろな化粧品のほか、舞台用のドーランや絵具などを用意していました。はじめの頃は、なかなか、うまくいきませんでした。が、慣れるに従って、全く私好みに、眉やアイシャドー、アイラ

イン、口紅など大胆にほどこし、その上、小指に紅を、たっぷりつけて、夕梨の鼻の穴へ、さしこんで、中を赤くぬりこみ、鼻の上には絵具で真白い鼻筋を一本、太く引いたりしました。そんな夕梨には、田舎芝居の中で、捕われた少女が、いたずらされるときのような風情があり、若々しい乙女の肌の匂いが、ただよって、私はゾクゾクとした悦びに、さそわれました。

☆

ある、むし暑い夏の夜でしたが、私がいつものように、湯上がりの夕梨を縛り上げて坐らせ、思いきり鼻の穴を押し上げておいて、白いテープを、その上に鼻のあたから、おデコにかけてピッタリと貼りつけました。こうして夕梨の鼻を完全に上向きに吊り上げたまま固定してしまいました。そして、顔全体に少し濃い目に脂粉をぬり、鼻の上に貼りつけたテープが、その下にかくれるようにしました。アイラインや口紅をつけて仕上げると、顔の中央の鼻が一段と、しゃくり上がった女ができました。

すっかりイメージの変わった夕梨は、全裸で縛られた後手のまま、鏡をのぞきこんで、

「アラ……これ、夕梨のお顔？　お鼻が天井向いちゃってる——」

とアゴを、つき出すようにしながら、

「イヤーン、お鼻がムズムズするわ」

と言って私に、すりよってきました。私はそっと、その鼻のあたりに口づけしてやりました。正面を向いて引き伸ばされた二つの鼻の穴が、顔の真ん中に並び、口唇の間から白い歯をのぞかせて、鼻をひんむいた可愛い小悪魔のようなチャームングさを示していました。

それをみながら私は、ふっと次のいたずらを思いつき、
「夕梨、ちょっと散歩してこよう」
と言いました。

「いやあ、こんな顔で？ 恥ずかしいわ。人にみられちゃうもの」
と、このときは流石に激しく体をゆすってイヤイヤをしました。が私は知らん顔をして夕梨の縄をとき、裸の上にユカタ一枚だけを着せて、でかけることにしました。夕梨は不承不承、

「どこまでゆくのか？」

と聞きましたが、

「夕涼みだよ」

と答えただけで、さっさと、でかける用意をしました。私は、すれちがう人たちがチラッチラッと夕梨の鼻に視線をやる様子を想像し、また、夕梨が上向けられた鼻を人前に晒すことを考えて、ひとり、心がウキウキしていました。

外へ出ると、夕梨は動揺をかくしきれず、人目をさけるようにしていました。暗い夜道を十五分ばかり歩いて、神社のある方へ行くと、その夜は参道に夜店が並んでいて、あたりは夕涼み旁々出かけてきた人で、結構、賑わっていました。

「夕梨、困るわ。こんなところ……変に思われちゃうわ……」

自分の手で鼻のあたりをおさえたりして躊躇していましたが、私は聞えないように無視して歩いていました。夕梨の上向きに吊り上がって大きく開かれた二つの鼻の穴が、店の明かりに照らし出され行きあう人の中にはギョッとしたように夕梨の顔に目を向ける人。クスクス笑いながら、横目でささやき合って通りすぎる若い女性たちもありました。私は、そしらぬ顔で、まさかテープで女の鼻が吊

り上げられているとは気がつかないだろう。などと思いながら、ゆきかう人たちの反応と、夕梨の心理的な動揺を、ひそかに楽しんでいます。

帰りの暗い道に入ると、

「ひどい人ね。通る人がジロジロ夕梨のお鼻をみるんですもの」
と、すねていました。

私が用意してきた縄を、ふところから取り出すと、

「アラー、そんなものまで持ってきたの？ 人がきたら困るわ」

といってイヤイヤをしました。が、私は夕梨の手首を後手に十文字に縛り上げ、縄尻をとって夕梨の鼻を愛撫しました。夕梨は後手の縄をひかれながら、人気のない暗い道なので安心したのか、

「こんなに縛られて歩くなんて。夕梨、何か悪いことしたみたい」と無邪気に、私によりそうようにして歩いていました。夜風も気持ちよく、上向かされた夕梨の鼻をなぶって、吹きぬけてゆくようでした。

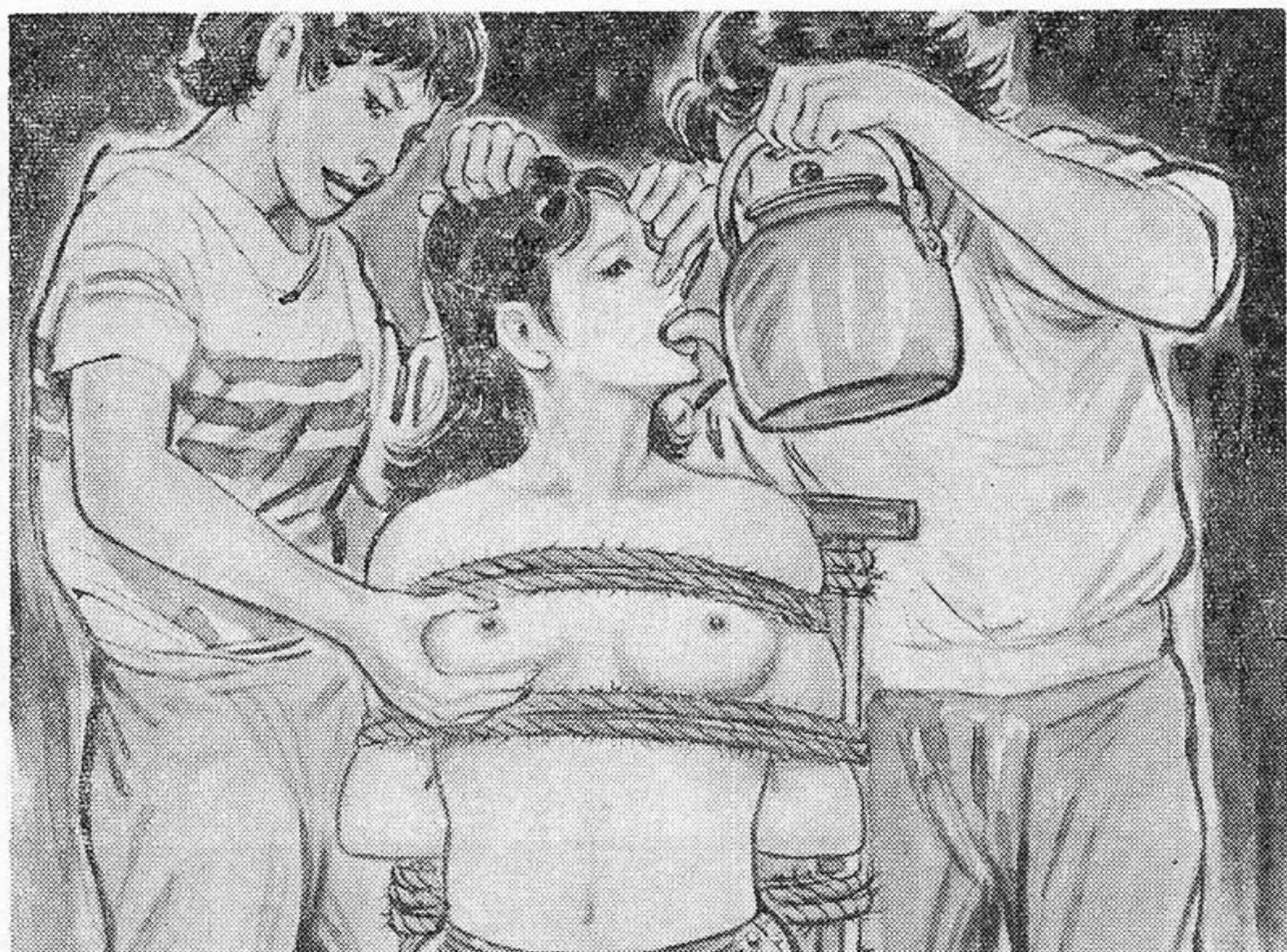
☆

夕梨は目を追って、鼻をいたぶられることに異常なほどの興味を示すようになっていきました。私たちは床に入るときも、夕梨は化粧もそのまま、体の方は全裸で、手首だけを前で縛っておくことが普通でした。私たちが『プレイ』のあと、寝室に向うとき、夕梨はいつも赤い帯紐をもってきて、

「ハイ、縛ってちょうだい」

と言って、前で二本の手を交差させるのです。私は、その夜の、『プレイ』が余りきびしかった夜などは夕梨のことを考えて、ちょっとためらうと、

イメージギャラリー 『いたぶり人形』 四馬 孝



「私だったら、いいの……夕梨は縛られていた方がいいわ」と言うのです。

枕許のあかりを消すと、夕梨は甘い声で、

「夕梨のお鼻、かわいがって……ネエー、オモチャにして……」と求めてくるのです。

私は、くらがりの中で、手さぐりで夕梨の鼻をつまみあげ、もみあげ、鼻のあたみを押し上げて、上下にゆりうごかして、いたぶりはじめると、夕梨の体は次第にもえてくるのです。さらに口唇や舌をつかって夕梨の鼻を愛撫し、二本の指を強く鼻孔の奥深く、さしこませていくと、夕梨は激しい息づかいをして、

「もっと強くして……」

と一そう強い刺激を求め、切なくうめき声をあげました。鼻の痛覚が夕梨の全身を燃えあがらせ、縛られた両手を夢中で、もがき悶えるのでした。一瞬、私の体は激しく、しびれるような感覚にとらわれるのでした。

そんなあと、夕梨はよく小さいあかりをつけて蒲団の上に坐りこみ、

「可哀そうな夕梨のお鼻、赤くなっちゃったでしょ？ 鼻が、もげてしまうかと思ったわあ……」

と言いながら、自分の鼻を愛しむように撫でていました。夕梨の白い鼻が朱を注いだように赤味をおびて、ふくらんでいました。

あるとき、寝床に全裸のまま横たわった夕梨の両手首を頭の上で一つに縛って、枕許の柱に結えつけ、テープを鼻のあたみに貼りつけて、思いきり鼻を吊り上げました。私はその夜、少々アルコールが入りすぎていたこともあって、ついそのまま、ぐっすりと眠りこ

んでしまいました。夕梨は、私がどうしても起きないので、ひとりでもがいて、紐をほどこうとしたり、蒲団に鼻をこすりつけて、鼻のテープをはずそうとしたそうですが、どうしても取れず、そのうちにあきらめて朝まで、ねてしまったそうです。私が目をさますと隣で夕梨が、

「お鼻が痛い……早くとって……」

というので、はじめて気がつきました。

夕梨の鼻の上には昨夜のテープが、べっとりと貼りついていて、グイと鼻孔が、めくり上がり開かれたまま、手首をつながれた体をもがいていました。あわててテープを、はがしてやったのですが、そのあとの鼻のあたみが赤くアザのようになっていました。

「夕梨のお鼻、上向いたままになっちゃったんじゃない？ ヒリヒリして痛いわ。ひどい人ネ。私をこんなままにして、先に寝ちゃうんですもの……」

と夕梨も、いささか、ふくれっ面をしていました。

「ほんとだ。夕梨の可愛いお鼻が上を向いちゃって、穴がこんなに拡がってしまってるぞ」

と、指で大きな輪をつくって、ひやかすと

「知らないわ。お鼻がはれて、ふくれちゃったのよオ」と横を向いてしまいました。

「薬をつけてあげよう。目をつむってごらんよ」

と言って、ハケで鼻のあたみに赤チンを真赤に、ぬってしまいました。

夕梨は鏡をみて、

「ウァーひどいよ、ひどいよオ。夕梨のお鼻こんなに真赤にしちゃ

って、とれないわよ。外へでられないじゃないの……」

と、ますます、すねてしまいました。

やがて忘れてしまったように、無心に歌をうたったりしながら、朝の準備に動いている夕梨の真赤な鼻をながめては、内心おかしさをこらえていました。

☆

夕梨が亡くなる一カ月ほど前の頃でした。私は、いよいよ夕梨への『鼻責め』のとりこになり、おぼれこんでいました。次第に単なる『プレイ』の域をこえて嗜虐的になっていきました。私は今までの繰り返しでは満足できず、より強い刺激を新しい趣向の中に追い求めました。夕梨に対する扱い方も乱暴になり、縛り方も縄をギリギリと幾重にも巻きつけ、きびしくなりました。そして、さまざまな鼻責め具も自作しはじめていました。

私はブロンドのかつらを買ってきて夕梨につけさせ、濃い紫色のアイシャドー、太いアイライン、真赤な口紅、その上に真白い鼻筋を引き、まるで舞台の上のヌードガールのように、けばけばしく化粧させました。その一糸まとわぬ夕梨を和室の柱の前に立たせ、首縄をかけ、股間からヒップに縄を、くいこませて後手首を縛り上げさらに別の縄で、乳房から腰、足首まで、ぐるぐる巻きに柱にくくりつけました。

「夕梨、こんなガンジガラメにされたの、はじめてだわ。これからどうするの？」

と全身に、まつわりついた縄でくびれた哀れな自分の体を、ちょっと不安げな表情で見回していました。

私は紐の先に取りつけた鉤を夕梨の二つの鼻の穴にひっかけ、紐

をピンと引っ張って、その端を柱の天井の近くに打ちこんだ太い釘に結びつけました。

「そんなに強く吊り上げないで……」

夕梨の白い鼻は完全に鉤によって引きつりあげられ、二つの鼻孔は長く引き伸ばされて小鼻のあたりをヒクヒクさせていました。そして、じっと目を閉じ、顔を向上けるようにして悶えるところを、さらにピンセットのようにV字形をしたバネを鼻の穴に、はめこみました。夕梨の縦に伸びた鼻孔は、その上にバネの力で、左右にもぐっと大きく拡げられました。

「ウワー、夕梨の鼻が随分、大きく拡がったぞー」

というと、夕梨は菱形のように歪んで一ぱいに開かれた鼻で、大きく息づき、あえぎながら、

「お鼻の穴が、ちぎれちゃうよ。とても我慢できないわ。はずして……」

と鼻のあたりに汗を光らせ悲鳴をあげました。私は懷中電灯を持ち出して、夕梨の剥き出された鼻の穴の奥を、のぞきこみました。

「そんなとこ、のぞかないで……痛いわ。もうやめて……」

身動きできない体をもがくようにして、切なそうに叫びました。

やっと、鼻にはめたものをはずしてやると、

「もう、痛くって、本当にお鼻がさけちゃうかと思ったわ。あんなのはめられたら、夕梨のお鼻の穴が大きくなってしまいうわ」

と余程こたえたらしく、涙をポロポロ流し涙で厚く塗られた化粧がくずれて、顔をくしゃくしゃにしていました。針金の鉤のあとが二本、夕梨の鼻の穴の上に赤い筋を残していました。

☆

私はこの頃、自分でつくった鼻輪を夕梨に常用するよう強いていました。直径二センチぐらいのリングを、小さいネジで鼻柱の両方から、鼻の穴の中のところで、はさみつけるようにして止める、しかけになっていました。私は、これを夕梨の鼻にぶら下げるように取りつけ、いろいろに利用しました。

私が、ちょっと煙草を買いに出かけたりするときなど、夕梨を裸のまま後手に縛り上げ、うつ伏せに四つん這いに、お尻を高くもちあげる姿勢にさせて、鼻輪に取りつけた鎖を柱に結えつけて出かけました。

「でかけないで……夕梨をこんな恰好にしてひとりでゆかないで」

と心細そうな声をあげましたが、動くところリングを取りつけられた鼻が、ぐっと引っ張られるので、不自然な恰好のまま、仕方なく顔を柱と平行にもちあげて、大人しく待っていました。

また、縛りあげた夕梨を牛のように鼻輪の鎖をとって、部屋の中を引き廻したり、縛った縄をいって手足を自由にしたときも、鼻輪の鎖だけは奴隷のように私の手から離さず、台所の仕事をさせたり食事をとらせたりもしました。

「鼻輪をさせていると、とってもみじめな気持ちになるの。もう、これ、かんにんして……」

と夕梨は、よく頼みましたが、私は、なかなか許可しませんでした。鼻先に、いつも大きなリングが、ぶら下がっていると、いやでも夕梨にとっては鼻を意識させられ、まして鼻輪の鎖をとられて、鼻づらを引きまわされると、その度に、鼻が引っ張られたり、吊り上げられたり、ひん曲げられたりして、全く相手の思うままになるより仕方がありません。それは私の加虐的な悦びを満足させ、楽し

ませるものでしたが、夕梨には、みじめで情ない思いをさせたに違いないありません。今から考えてみると、その頃の夕梨は、はじめの頃のように、二人の『プレイ』の進展に、ある種の期待や被虐の悦びをもって迎えるという状態から、ひたすら、はげしい『鼻責め』への執念に、のめりこんでいく私に、あるいは不安か、恐怖めいたものすら、感じていたのかも知れません。

しかし表面的には少しも変らず、ただ私の言うことに逆らったりはしませんでした。

「一度、夕梨を吊り責めにしてみたい……」

と言うと、

「でも夕梨、おもいから、旨く吊り上げられるかしら……？」
と素直に応じてきました。

私は早速、夕梨の両手両足を一まとめにして縛り、縄を鴨居に通して、力一ぱい、そのまま吊り上げました。一糸まとわず猪吊りにぶら下げられた夕梨の体は、私の目の前で、ぶらぶらゆれながら回転していました。私は、その見事に二つ折りになった若々しい裸身にみとれ、程よくふくらんだ、剥き出されたヒップのあたりを、なでまわしました。

「イヤー、そんなお尻の奥まで見ちゃイヤーン」

と夕梨は垂れ下がった長い髪を、はげしくゆすらせて、もがいていました。

私は踏み台の上ののって、鼻輪に取りつけた鎖を、縄を通した鴨居に結えつけました。夕梨の鼻は一本の鎖で、上に引きつられ、観念したように心持ち頭をもたげて、吊り上がって伸びきった鼻の痛みを耐えるようにして、ぶら下げられていました。

☆

私と夕梨との最後の『プレイ』は漸く秋の気配が感じられる週末の夜でした。私たちの部屋からは街の灯が、いつもより鮮かな夜景を展開していました。

夕梨と一緒に風呂に入ったあと、私は鏡の前の床の上に、大きなビニールを一枚敷き、その上に夕梨を立たせて、頭のうしろのところで手を組ませ、手首だけを縛りました。

「今夜は何をするの？」

夕梨は、すんなりした裸身を、正面の鏡にうつし出しながら、たずねました。

「ちょっと、夕梨の肌に絵をかいてみたいと思うんだ……」

といって、チューブに入った水彩画用の絵具や筆などを用意しました。

「ボディペイント？ そんなの、はじめてだわ。何だか恥かしいわ……くすぐったくないかしら？」

と目を、くりくりさせて、私のするのを眺めていました。

私は子供の頃から絵をかくことが好きで、大きくなってからは抽象的な絵に少々興味をもっていました。勿論、女体をカンバスにして描くのははじめてで、この試みを思いついた時から、もう心はワクワクしていました。

準備が終ると、私は数本のチューブを手にし、スベスベと輝いた柔らかい夕梨の肌の上に、ところかまわず勢いよく絵具を、しぼり出しました。

「冷たいわ……」

夕梨は筋肉の一部をケイレンさせ、体をくねらせました。

私は大胆に五本の指をつかって、胸や尻や太もものあたりに垂らした絵具を引きのばし塗りたくっていききました。ヌルツとした絵具の手ざわりと、夕梨の温かい肌の感触が私の心をかきたてました。つぎつぎと絵具をしぼり出しては、容赦なく夕梨の全身を、なでまわし、こねまわしていくと、

「アーン、イヤーン……」

と切なく、うめき声をあげ、身もだえしながら鏡の中で色どられ変化していく自分の姿を、うっとりした表情で見とれていました。

絵具で汚れた顔。乳房から腹。背中からヒップにかけても、複雑な色彩によって塗りこめられ、塗り重ねられて、絵具にまみれた夕梨の裸身は妖しく官能的な雰囲気をも、かもし出していました。

仕上げにとりかかった私は、絵筆をつかって、目や乳房のまわりや、下半身に銀粉を散らし、口唇には真赤な絵具で、少し大きく描き上げました。

「ウアー、夕梨、まるで魔女みたい……」

と大きい目を輝かせ、オドロキの声をあげました。

「よし、それでは、この魔女を拷問にかけることになろう」

といって夕梨を、そのまま和室へつれてゆき、柱の前に立たせました。手首を柱のうしろで縛り直し、乳房の上下と、足首のところを、きっちり縄で柱に結えつけました。

そして、あらかじめ用意しておいた革製のヘアバンドを夕梨のヒタイのところにつけさせ、その中央に取りつけられた鼻吊り用の鉤を、二つの鼻の穴へ、はめこみました。何色もの絵具にまみれた顔の中心にある鼻は、きびしくめくり上げられ、鼻の穴は剥き出しに真正面を向いたまま固定されていました。

私は、もとの部屋にもどって、小さい筆と瓶に入った蛍光染料をもって来て、夕梨の拡がった鼻の穴のまわりを丸くピンク色に描きだしました。部屋の灯りを消すと、暗やみの中で、夕梨の可愛い楕円形に伸びた鼻孔だけが、外の淡い光線に反映して、くっきりと浮かび上がっていました……。

私はつぎに稍、太めの二本のローソクを用意し、浮び上がった穴の中へ、グイッと、こじいれました。殆ど顔と垂直につき立ったローソクの芯に火をとますと、パツと小さい二つの炎があがり、夕梨の色どられた女体が、チラチラ燃える明かりに輝しだされ、下半身に散りばめられた銀粉が、キラキラと、かがやいていました。それは神秘的なまでに妖美な、幻想の世界を、かもし出していました。その光景に私は、ただ、ぼう然と我を忘れ、恍惚とした気持ちに襲われて、たたずんでいました。

夕梨は深い、うめき声をあげ、柱に縛りつけられた体を悶えるように、もがき、床に蟬涙を、したたらせて燃え続ける炎に、恐怖の表情を、あらわしながら、

「もう消してエ……夕梨のお鼻まで、こげてきちゃう……」

と大きな悲鳴をあげました。

私は、はげしく胸が高鳴り、残酷な美しさの極限の中に酔いしびれ、炎の燃えつきるまでその世界の継続を願うような衝動にかられていました。

夕梨のさけるような悲鳴に、私のフウーと深い溜息が炎を吹き消すと、静寂な暗やみの中に、強いローソクの匂いだけが、あたりにただよっていました……。

連載・S時代小説

紫

蘭

の

門

(28)

カット・マエダヒオミ



始 末

風 流 極 道 軒

九十九人に弄れし乙女子の、
 なおも君のみを慕うという。

——その言や良し。

されど君、信ずるや、否や。

なかった。

五尺余の黒髪が備後畳に長く尾をひき、貴子が呼吸をするたびに双の乳房が、おおきく波立つ。

日本橋の本宅でうけたいたぶりのうえに、ここ雑司ヶ谷の寮にくるまでの駕籠のなかで昭吉からうけた屈辱が、慣らされた被虐悦の一手手まえまで追いあげていた。

雑司ヶ谷の寮は、元禄屋の幾つかある別宅のひとつで、上土門に練堀をめぐらせた広大な敷地を持ち、ここに一棟、あちらに一棟と数寄屋造りの建物が点在していた。

駕籠からおろされた貴子は、打掛をまとったまま直ちにこの部屋に運ばれ、有無を云わ

結び灯台のあかりをうける貴子の姿は、無残であった。いや、妖美きわまりないというほうがよいかも知れぬ。

そのために特別に誂えられた長机を逆さにしたような黒塗りの台の上に俯向けに、はりつけられているのであるが、手首足首には南蛮錠が黒々と光り、無論、身には一糸もまわってはいなかった。

「お久しぶりじゃの、貴子姫」

正面、脇息によった水野出羽が、盃をあげながら声をかけたが、艶麗な裸身からの答は

さず昭吉たちに、いまの惨めな姿態にされてしまったのであった。

従って、乳首重ね縛りもそのままであつたし、ましてや蜘蛛の巣縛りから解放されてはいなかった。

「奇妙な縛り方をしたもののじゃの。金銀の糸で、獲物を捕える蜘蛛か。面白いのう、元禄屋。そちのやることは、いつもながら、通り一辺ではないわ」

ひと膝のり出した水野は、ちょうど自分のほうに向つて「ハ」の字に開かれている凝脂ののった太腿に、つと、「極楽筆」をつきだした。

極楽筆——その黒い穂先が、柔らかい女体の曲線のなかで、蜘蛛の巣のように張り渡されてある金糸に触れると、

「ア、アッ！」

せつなそうに貴子が喘いだ。

「どうやら緩んでいるようでございます。もそつと張りつめて括つておいたはずでございますするに」

不審そうに眉をひそめたものの、元禄屋にはすぐその原因がわかった。ニヤツと、唇をゆがめて、部屋のすみに控えている昭吉に、何もかもわかっていますよというふうな視線

をおくつたが、

「それに、この金銀の輝きの変わり具合も、ただごとではござりません。まだ春には日もあるというのにフッフッフ……。これというのも水野さまをお慰めしようというせいっぱいの貴子の用意でもありませんようか。ほれ、あのように……」

乾いていたはずの極楽筆の穂先を指さしながら元禄屋は、

「昭吉さんや。それ」

と、懷中から白い布をとり出して、むぞうさに投げあたえる。

「ハ、ハイ、旦那さま……」

恐縮しきつた顔ですすみ出た昭吉が布を拾いあげると、耳元で、

「始末くらいは、すませておくことじゃ」

という低い声が聞えて、昭吉の震える指先を、いっそう狼狽させるのであった。

やがて、昭吉の震える手から布をとりあげた元禄屋は、それを青蛇に渡し、

「これを狎さまにお嗅がせ申せ。嗅覚のすぐれたお犬さまじゃ。すぐにそれと察せられることじゃろうて」

この場にいるのは合せて六人。元禄屋の言葉をうけてニヤリツと笑ってたち上った青蛇

前号まで——天保四年正月を日本橋の本宅で迎えた元禄屋は、五夜のロザリオの謎のうち「宝をば我れは秘めなむ富士嶺の」とそこまでは読み解くことができた。残るは徳夜叉の手にある戌夜のロザリオひとつ。新玉の歳を祝つて雑司ヶ谷にある寮に老中筆頭水野出羽を招いて、菊亭貴子を酒肴に、宴をひらく。

に、水野出羽、それに昭吉、和吉……五人の男たちに囲まれてある菊亭貴子——。その貴子にこれから加えられる「狎騶り」とは、いったいどんな無惨な責苦であろうか。

狎 (ちん)

狎——ちよつとみただけでは、中国や欧米から渡来してきたように思われるが、そうではなく、れっきとした日本特産の犬で、古く奈良時代からその名が書物に散見している。

が、体重一貫にたりず体高一尺に満たないこのこまっしやくれた小犬が、一般に愛玩犬として飼われ始めたのは徳川時代以後のことである。獵犬にならず、番犬にもならず、かとして飢饉のにおりに食用にもならぬこの犬の、いったいどこに取得があつて世上に流行した

のであろうか。

考えてみると、この狎を飼っていたのが、一般庶民ではなくて、上層階級、別して公家武家豪商たちを問わず富裕な家庭の、しかも婦人たちの間に珍重されたということが、とりえの一端をうかがわせるものと云えよう。

つまり、この小犬は全身が美麗な毛で覆われており、抱くのに便利。しかも抱くと、とても気持ちがいいのである。云わば女の母性本能をくすぐる要素を備えているのである。

が、ただそれだけであらうか。どうもそれだけではないらしく、例えば次の川柳、

腰元のいたずら狎を富士額

これを単に、ひまにまかせて腰元が狎の額を富士額に剃りあげると解釈するのは読みが浅いのであって、「富士額」とは、つまり、「逆さ富士」の額の謂なのだ。さすれば、この川柳の意味するところは甚だ深長なものとなってくる。

しからは数多種類のある犬のなかでなぜに狎だけが、その光采に浴するのであろうか。秋田犬、土佐犬、ダックスフント、テリア、コリー、スピッツ、セント・バーナードではどうしてダメなのであろうか。

それはそれとして――

今、水野出羽の手が二度、鳴った。

と、「入ります」と青蛇のかしこまった声がして襖があき、両眼と鼻が一直線に並んでいる愛嬌のある顔で狎が五匹、しずしずと入ってきたが、水野の姿をみつけると甘えるように鳴き始めて、青蛇が手もとの鎖をはなすと、いっせいに、とびついていった。

「どうじゃ、可愛いじゃろう。女どもよりはるかにこれら小犬のほうが頼もしいぞ。のう、元禄屋」

「いかにも。女は、ときとして裏切りまするが、犬は忠実でござりまするからな」

「フッフッフ、嫉妬もいたさず、ぐちもこぼさず、うい奴、うい奴。沖の石、これ、赤貝や、毛虫めか。フッフッフ」

「どうやら狎の名まえらしく、「赤貝や」とよばれると、それらしい一匹が、しきりに吠えたてる。

「始めて拝見いたしますものには区別が、まったく、つきませぬの」

「そのはずじゃわ。これがお腋で、これが舌長じゃがの」

狎・顰りという言葉に耳にした貴子は、自分が狎に顰られるのではなからうかと想像し、まさか、犬などに――と否定してもみたのだ

が、いま現実には水野にまつわりつく犬たちを横目で眺めて、不安ともなんとも云いようなない気持ちになって、

「……旦那さま……」

と、ひきつったような声で主人を呼んだ。

「なんじゃな、貴子」

楽しそうな元禄屋の顔にのぞきこまれて、自分のあさましい姿に、カァーッと全身をほてらせながら、

「ま、まさか、こ、この狎……この狎に」

「狎がどうしたというのじゃ」

「狎に……妾の躰を……」

さすがにあとは言葉に困る貴子であった。

「ほほう、よく想像ができたものよな。そのとおり、そのとおりじゃ」

「いや、いや。いやでございまする！」

黒塗りの台の上で白い裸身が弓のように反った。

「それぞれ、はしたない。そんなに反り返ると、見せいでよいところまで御目にとまるではないか」

「お許しを、旦那さま。ほかのことなら、なにごとでも仰せに従いますに……お願いでござりまする。狎、狎にだけは！」

必死の訴えを耳にした水野の顔が、淫らに

ゆがんだ。

「聞き捨てならぬ言葉じゃの、元禄屋。いまの姫のものいいようは」

「いかにも、殊勝なことを申しましたものでございます」

「かまわぬかの、少しあとを尋ねてみても。なんと云ってもそちの女房殿じゃ。主人の許しを得ぬことにはのう」

「どうぞ、御存分になされませ。水野さまのお手並みを、とくと拝見いたしましょうぞ」
「フッフッフ、そちも恐い男よのう」

五匹の狎の頭を撫でて、ぴたりと静まらせた水野出羽は、

「さて、貴子姫。お聞きのとおり御主人の許しも、もううた。そこでじゃが」

小肥りした躰をのり出すと、

「いまきくところによると、狎騶り以外のことなら、なんでもきくと云われたが、まちがいないことかな」

「ハ、ハイ……」

「まことに何事でも余の申すことを瞬時のためらいもなく実行すると申さるるのじゃな」

念を押して、盃を口にふくむ水野の顔を、恥かしそうに見やったものの貴子は、ふっくらした、あごをたてに振ってみせた。

狎などに騶られるくらいなら……という観

念のほぞをかためたその表情に、

「解いてつかわせ、和吉とやら。姫の心底、とくと見定めてやりたい」

すすみよった和吉の手で鍵がきらめき、ガチャ、ガチャと金属的なひびきが部屋にひびくと、身をおこした貴子が、よろめくように備後畳に身を伏せた。

白蘭のような肌に文なす黒髪が映えて、昭吉がおもわず首をのばし、ゴクンと生唾をのみこむ。

「近う参れ」

黒髪のあいだからのぞいた顔に、サァーッとべにがさしこめたが、乳房を抱いたまま立ち上り、前にすすんだ。

「もそつと前へ」

「ハ、ハイ……」

いくら老中筆頭の水野の命令とは云え、主人である元禄屋や番頭たちのまえで、裸人形のように操られることに、云いようのない羞恥をおぼえながら貴子は、脇息によっている水野の一尺近くまですすんだ。

「足をひらけ」

貴子の顔がパァーッと紅くなる。が、足もとに、狎がじゃれついてくるのを知ると、し

っかりと臉をとぎして爪先を五寸六寸と開いていくほかはなかった。

「フッフッフ……」

その、羞恥にまみれながら屈辱の姿勢をとる裸女の風情は、水野ならずとも興奮しようというもので、昭吉、和吉、それに青蛇が、海亀のように首をのばす。

「お、お許し下さりませ……」

身震いした貴子は、天井の一角を振り仰いで、そばで眺めている元禄屋に、せつなそうに呼びかけたが、無論、返事はない。

「佳い香りじゃ。まことに日本に二人とない芳香よな」

やっと顔をあげた水野は、これだけの美女が、自分の言葉ひとつで動く快感に五体をゆりうごかしながら、

「まずは、その乳首を括っている糸を解くのじゃ。ただし切ってはならぬぞ」

「ハイ」

今度はなんのためらいもなく答えた貴子はわれと自らの乳房をみおろしながら金糸銀糸の縊糸をといっていくのであった。

双つの乳首を縛りあわされてからもう二刻ほどになろうか。

解きおえたときには、さすがにホォーッと

イメージギャラリー 『愛縄の名残り』 岡 たかし



なって、ふかぶかと肩で呼吸をしてみせた。

「次はじゃがの。この蜘蛛の巣のような糸もひとりでとってみなされ」

水野の右手の指が、従横に張り渡されている金色の糸を掴みあげた。

「……アッ……アレッ……」

掴みあげられると当然、忘れていた烈しい痛みを、よみがえらせる。

「ひとりでとってみなされ！」

もう一度、ひっぱられて「ハ、ハイ……」

と思わず答えたものの、さて、どのようにしてとりさればよいのか。

が――

舌長とはこの舐にちがいないと、はっきりわかる舌の長い一匹が、ふくらはぎのあたりに足をかけて、いまにも舐めようとするのを見てとると、ためらってはられない。

「お願いでございます。坐ることを……どうか、お許し下さいませ……それに、あ、あちらを向いて下さりませ」

女心のせつないまでの訴えであったが、それは即座に拒否された。

「ア……アウ……」

すすりあげるように喘いだ貴子は、「人」の字型の裸身をふかぶかと折ると、一瞬でも早くこの屈辱から逃げようとするかのように白魚のような十本の指を働かせはじめた。

しかし、興にまかせて従横に、文字通りの蜘蛛の巣状に張りめぐらされた細くて強い糸は、乳首のようにには簡単にほどけるものではない。

水野とは反対側に坐っている昭吉や和吉の目に、チラチラッと貴子の顔がみえる。みえると云っても、逆さになった顔がのぞかれるだけであったが、それはいまままで眺めたこと

のない凄艶きわまる表情を、うかべている。
(お手伝いすべきではないのか) という和吉の顔をよみとった昭吉が、

「和吉さん、じいっとしていること！ ね、立っちゃあいけない！」

「そ、そうなのよね、お内儀さまのなさるところですもの。黙って……」と、ここでゴクンと唾をのみこんだ和吉は「黙って、見守ってさしあげなくては……」

——キャン、キャン……

とないたのは、舌長であつた。つづいて毛虫も吠えた。

沈黙が破られて水野の声が、貴子の必死の作業をからかうように、投げられる。

「急げばことを仕損じるとか下世話に申すそうな。姫、ごゆるりとな」

「ハ、ハイ……」

やっこのことで、一条の金の糸をとりはずすことに成功した貴子は、血の気のまったく失せた顔を水野に見せると、次の糸と取り組んでいく。

京壁というのであろうか。数寄屋造りの部屋の片方の白い壁に、結び灯台のあかりをうけた女体の影が黒々とうつり、それが妖しいまでに揺れうごく。

部屋のなかには、もう麝香鹿の香りに、むんむんと、むせかえるようで、ふだんは表情をあまりかえたことのない青蛇までが、その病的なまでに青白い顔を紅潮させていた。

女にとって、このうえない屈辱の姿態を、どれほどの間、貴子はとりつづけねばならなかったであらうか。

やがて、やっとう五尺余の黒髪が、虚空に舞って、上半身が正常な地位にもどって、たちすくむ貴子の羞恥にうるんだ瞳を、もろに見すえた水野は、

「御苦労であつたの。これで身にまとうものとしては、まさしく一糸もなくなって、生れたままの赤裸というわけじゃな」

冷えた酒をグイッと、のみ干し、貴子の左手の指に、からまっている金糸銀糸の縊糸をとりあげて興味深く調べ、さらに鼻にあててその香りを楽しんだあと、突如、大きな声で「なんでも云いつけに従うと云ったはずじゃな。そうであらうが」と念を押し、

「右足を後に挙げい。そして上半身を前に倒して両手を真横に、さしのべい！」

なにを云われたのか、羞恥のために、はつきりと、しないのであらう。身をすくませてただ立っている貴子に、昭吉が、

「お内儀さま、右足を後に挙げるのです。そして……上半身を前に倒して……」

「ハ、ハイ……」

と頷いてみせたものの、右足を後に挙げるには、いったいどうすればよいのか、そんなことをすれば左脚だけで体重を支えなければならぬではないか——当惑しきった貴子の表情を、こきみよさそうに眺めた水野は、

「手伝ってつかわせ。そして余の云うとおりの姿にするのじゃ。名づけて、『白鳥縛り』と云う。フッフッフ……」

白鳥縛り

水野の声に応じて立ちあがった昭吉、和吉が、貴子にちかよった。

「右足を後にあげる。ほれ、お内儀さま」

「アッ、昭吉。と、とてもそのようなことで、できません」

「水野さまの御命令ですよ。おできにならないときは『狎騷り』」

怨めしそうに昭吉を睨んだが、「さあ、早く」とせかされると、おずおずと右足を後方にひいて、さらに上に挙げようとする。

が、なにさまやんごとなきお姫さま育ち、

無理な姿勢のとれようはずはない。

それでもどうにか昭吉に右足首を支えてもらい、和吉が上半身を前に倒す動作を手伝って、出来あがったかと見えたが、二人が手を離すと、またもとの姿勢にかえり、そのうえ畳に崩れおちてしまった。

「チイ！ もう一度！」

水野が舌打ちをすると、よろよろと立ちあがった貴子は、ひとりで云われた姿勢をとろうと努力したが、どうしても無理。

「縄を使え！ 三本あればよいはずじゃ！」

自分の思うとおりにならないと、すぐ癪癪をおこすのも老中筆頭という権力の座にあるせいであった。

「承知いたしました」

そんなことは百も承知の元禄屋は、ゆったりとたち上ると、部屋の隅にいき、垂れていく朱房をひいた。

ボタン、バタツバタツという不気味な音がして網代天井の一部が外れ、つづいてガラガラッというひびきとともに、幾つかの滑車が姿をあらわす。

「この部屋には、いくつもの、からくりがございましてな。女責めには、ことかきませぬて。さあ、水野さま。御存分に貴子を、あや

つってやって下さいませ」

水野の顔はそれで和んだが、かりにも夫である元禄屋のあまりの言葉に貴子はいい知れぬ淋しさのようなものを感じるのであった。

（旦那さまは、この妾を、いったい、なんだと思っていらっしゃるのだろうか……妾が、こんなに恥かしがっているというのに……）

貴子の疑念も当然で、元禄屋のやること為すことは、あまりに謎が多かった。優しいかと思えば峻厳。苛酷かと思うと野の花、小鳥にまで声をかけ、昨日、他人のために奔走していたかとみると、今日は「人はひとりよ」と嘯いている。

（ほんとにわからない、おかた……）

じいっと唇の端をかみしめる貴子の耳に、

「お内儀さま。さあ、おみ足を後へ」

と昭吉の声がして、右足首に縄が喰いこみガラ、ガラッという滑車の音とともに、それが上へと吊りあげられていく。

一方、和吉に背中を押されて傾いたまま真横にのびした両手首にも別の滑車から垂れた縄が搦まって、

「ア、アッ……」

瞬間、バランスが崩れそうになったが、どうやら今度は、水野の所望した姿勢をとるこ

とができた。

「ワッハッハッ……できた！ できたではないか。のう、元禄屋。これが『白鳥縛り』と余の名付けた、女体のもっとも美しい姿ぞ。どうじゃ、白鳥に似ておるであろうが」

この老中筆頭は、どうやらまことに単純な人物らしく、自分の意のままのポーズに貴子になったと知ると手を拍って喜んでいく。

このように単純なお方ゆえに幕閣の実権を領田下野守さまに奪われておいでなさる——と、元禄屋は、いささか失望はしたものの、そこはなんと云っても老中の筆頭、近い将来將軍家齊公の御目見得にあずかる日、なにかと役に立つこともあらうと思ひさだめて笑顔をつくり、『白鳥縛り』にされている貴子をみやるのであった。

その姿は、確かに美しいと云えた。元禄屋ほどの男でも、まだ女にとらしたことのないポーズであった。

現代風に説明すると——

それは女子器械体操のうち平均台競技の静止技に似ていた。平均台の競技は御存知のようにフォームとモーションから成り立っているが、そのフォームとモーションが、せまい台上で、ぴたりときまる瞬間がある。そのき

まっ・た瞬間こそ、この競技の最も大切なところであり、これを静止技（ポーズ）とよぶ。

いま貴子がとらされているポーズは、その静止技のうちで「体水平のバランス」とよばれるものであろうか。

左脚で体重を支え、右脚を後上方に挙げて上半身を前に倒し、両腕を両側に伸ばす——これを「スワン型のバランス」と呼び、女体が最も美しく見えるオーソドックスな型として平均台競技で最も重要視されているというが、まことにさもありなん——少しくらい身体のプロポーションの悪い女でも、このポーズになれば、男性をひきつけることは言をまたない。

ただし、男性たちの視線がどこに注がれるかは、各人各様というほかはない。所詮、近代スポーツ、体操競技、肉体の芸術などと誇称しても、走り中跳の場合、どこに男性諸賢の目がいくか、棒高跳に際して男たちの視線がどこに集まるか、段違い平行棒にしても床運動にしても同じであり、なかには、万が一ユニフォームが破れてくれないかと、はかない希望を抱くものが居ないとは限らない。東京オリンピックの花と謳われたチャスラフスカが平均台の上で開股したとたんユニフォー

ムが裂けたとしたならば、メキシコ・オリンピックの名華・コルブトのそれが、鉄棒競技の最中に破れたとしたならば……残念ながらジャージーのユニフォームは、そうカンタンに裂けることはございませぬ。

とまれ——

貴子の場合は、その優雅な裸身に一糸をもまとはいいなかった。

白蘭のような肌にはほんのりと桜色をうかべて「白鳥」のポーズをとりつづけている。

「姫、みごとですぞよ。姫の持つ美しい肢体の、これぞ極美と申せましょうぞ」

双臀に息を吐きかけながら云う水野の声が槍のように突きささってくるかと思うと、

「御内儀さま。ほんとうに美しい姿でございます。ほんとに、もう、たえようもないくらいのお麗わしさ……」

すぐ眼のまえで輝ひとつの昭吉が叫ぶ。

真横にのばされた腕のつけねがふるえ、額には玉のような汗が、にじんでいた。

と、水野の顔が淫らにゆがんだ。

「昭吉とか云ったのう」

「はい。さようでございまする」

「なかなか、はりきっているようじゃの」

水野の視線がどこに注がれているかを知っ

て、昭吉がガラにもなく顔を赤らめた。

「恥かしがらぬでもよい。フッフッフ、どうじゃな。この白鳥に餌を与えてやっては」

「餌と申されますと」

「それぞれ、お前のそれじゃよ」

木綿の越中褌を指さされて、

「これを、ここを、お内儀さまの餌に……」

「さようじゃ。かまわぬ、与えてみい」

と命じた水野は、

「よいですな、貴子姫。余が餌を与えてやるによって食べてみい。ただし、噛み破ったりしてはならぬ。ただ、舐めるだけ、味あうだけですぞ」

よろよろと立ち上ると、前に回って貴子の

あごに手をかけて、

「そう怨めしそうな顔をするでない」

「……お、お許し下さいませ。そればかりはどうかお許しを」

「ならぬ！ いいつけがきけぬと申すか」

うっすらと汗ばんだ貴子の肌が小刻みにふるえた。

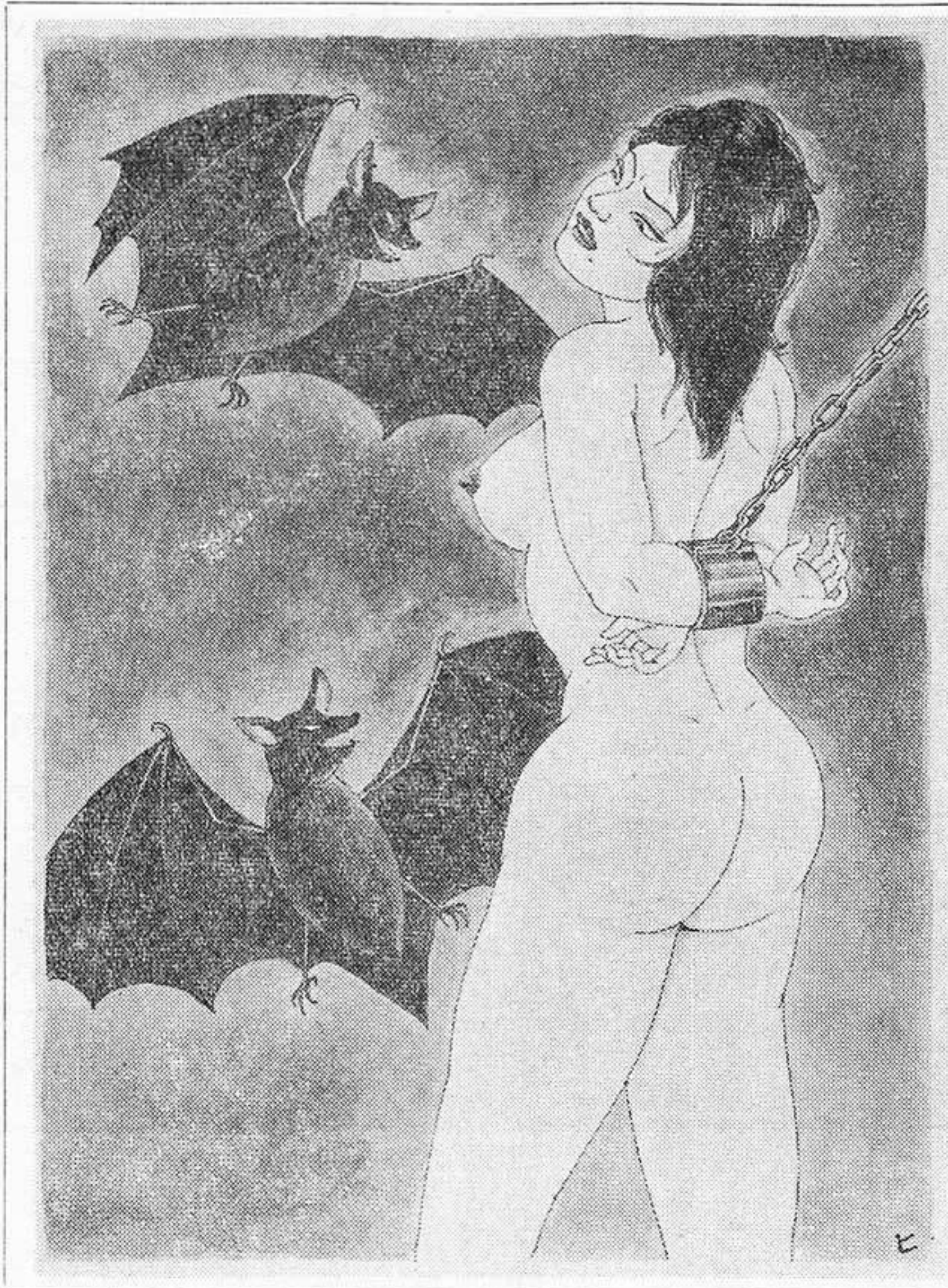
「お許しを……御老中さま……主人が、夫の元禄屋が見ております……それゆえ、それゆえ、どうか、お許しを……」

「元禄屋の許しは、すでにとってある。のう

イメージギャラリー

『洞窟へようこそ』

マエダ・ヒオミ



「そうであろうが」
自分の後方に坐っている夫・元禄屋の顔は
見えなかったが、返事のないところを見ると
夫も諒解したのであろうか。

「あ、あ、あなた！ 旦那さま……お願いで
ございます。そ、それだけは許して下さい
ませ……」
必死の願いをこめて訴えたが、返事はなか

った。

「ア、アアア……」

齒を鳴らして泣きじゃくりはじめた貴子に
水野は、

「いやなら狽騷りじゃ。それ、赤貝！」

どうやら呼ばれたことがわかるらしく赤貝
と名付けられた狽が、体重を支えている左脚
のふくらはぎに、とびついてくる。

「ア、アレッ！ お、お許しを旦那さまア」

そのとき、昭吉の禪がつき出された。

まるで青大將がとびつきでもしたようなお
ぞましさに、

「ヒヤヤヤア……」

貴子の悲鳴が、ほとばしった。

キャン、キャンと赤貝が吠え、お腋がこれ
に応じて、まわりをかけめぐり始めた。

「よいな。余のいいつけじゃぞ、姫」

ポタツと汗が一滴、備後畳を濡らす。

「お内儀さま、失、失礼いたします」

うわずった声とともに昭吉が一步、踏み出
した。

「いや！ いや！ だ、だめですったら！」

しっかりと齒を喰いしばって顔をうつむけ
る貴子を、水野と和吉が左右からあごに手を
かけてうわ向かせると、鼻孔を押えた。

よくとおった鼻筋が押しつぶされて奇妙な呻きがあがったが、それもつかのま、いやでもおうでも唇がひらく。

天井の滑車が、ギシ、ギシッと軋んだ。

穴沢流・三本足

場所は変って、麻布六本木の別邸。

老杉の梢洩る月の光が、幾棟もたち並ぶ土蔵の壁に、無心な光を投げかけていた。

と、

「どうでえ、少しはこたえたか。おい、何とか答えてみなよ、豊香！」

野太い声は黒縄の黒馬のものであろうか。

裸蠟燭の灯りが、しきりに、またたく。

のぞいてみると――、

四五人のやくざな男たちがスッ裸に剃きあげた女を囲んで酒盛りのまっ最中であつた。

羅卒の鞭兵衛、白豚、赤狐、斑猿と、それに、やっぱり、さきほどの声の主は黒馬で、

柱を背負わせて縛りあげた豊香の正面で、ニ

タ、ニタツと笑っていた。

このような光景は、なにも珍しいことではない。主人の元禄屋から、一切の差配をまかされている鞭兵衛は、気の向くままに女たち

を責め罵ることができた。

「豊香。おい、豊香姐さん。そんな苦しがつてばかりいないでさ、なんとか云ったらどうなんだい」

赤狐が、豊香の太股に遠慮会釈なく腕をのばすと、ひねりあげた。

「い、いたい！ いたいじゃあないの！」

伊勢白粉の匂いをただよわせながら豊香は身をくねらせた。

土間に敷かれた荒筵の上に、べったりと双臀をつけて縛られているのだが、両膝を立てたうえに、足と足を四、五尺もひらかさされているという惨めな姿であつた。

しかも――である。黒馬が、少しはこたえたか、何とか云ってみなよと罵っているのは柔肌を責めている青竹を、くるくると、こね廻しながらのことなのである。

径一寸五分はあろうか、どうやら中の節をとって筒抜けにしてあるらしいその青竹。

「ざまあねえぜ、豊香。フッフッ、見なつてことよ、これを」

右側から、にじりよった斑猿が、いまにも食べられるのを待っているかのように熟れきっている右の乳房をひねりあげると、

「豊香さん。俺にも触らせてくれよな」

間のびのした声は白豚で、左の乳房をずしりと掌にうけてその重さを楽しんでいる。

が、そんなことよりもいま豊香を苦しめているものは、なんといっても青竹であつた。

「黒、黒馬さん、ひ、ひどいじゃあないの。

やめておくれよう。い、いたいったら！」

「痛くはねえように尖端にカンナをかけておいたぜ。疼くのじゃあねえのか」

ぐいぐいっと錐でも揉みこむように青竹をあつかわれては、いくら爛熟した豊満の肌を誇る豊香でも音をあげるほかはない。

「許して、ね、お願いだから……ア、アッアア……ヒ、ヒアアア……」

その悲鳴が青竹によるものか、それとも赤狐の指先で抓りあげられたためのものかは、さだかでなかったが、ひとしきり身をもがかせた豊香は、ぐったりと首を折ってうなだれてしまった。

「チェッ、今夜はやけに早いじゃあないか、おい、豊香、狸寝入りも、いい加減にしな」

「狸寝入りじゃあねえよ、兄貴。一刻も早く兄貴に抱かれてえとの催促だよ、だから……」

チェ、何と云えばいいのかなあ……」

白豚が言葉を探している間に当の黒馬は、さっさと豊香の縄を、といていく。

いつもなら、白豚のいうとおり、これからお床入りとなることが多いのだが、今日はどうやら黒馬、いくらか荒れているらしく、「棒をかつがせてやるぜ、豊香。少しは骨身にこたえるようにな」

とり出したのは金魚屋や豆腐屋のつかう天秤棒であった。

ぐったりしている豊香の両腕をよこにのばして、棒に外側から、からませるように、ひとひねりすると、赤狐と二人で手首、肘、二の腕と、豊満な肌に縄を喰いこませていく。

「いったい、どうするんだい、兄貴」

「だから云っただろう、白豚。棒をかつがせてやると……」

「かつがせて、どうするのさ」

「こうしてやるのさ！」

天秤棒の中央をもってひきあげると豊香もそれに応じて、よろよろと立ち上る。

「ころぶんじゃあねえぜ、フッフッフ」

含み笑いをうかべた黒馬は、

「かまうこたあねえ、その青竹をつっかい棒にしてやんな。ただしな、あの紐をつかって外ずれねえように括りつけてしまふんだ」

「合点承知！」

立ちあがったはずみに、コトツと荒筵のう

えにおちた青竹を拾いあげた赤狐は、その尖端から一尺くらいのところ穿たれてある小孔に紐をとおすと、それを白豚に握らせ、

「いいかい豊香。たっぷりと味わいな」

黄金色の紐が、ただちに、豊香のゆたかな双臀に廻され、白豚の手で、二重三重に、むっちりと凝脂ののった肌に喰いこむ。

「これで、つっかい棒は出来やしたぜ、黒馬の兄貴」

赤狐のキンキンした声が部屋にひびき、

「フッフッフ、面白えかつこうだぜ。なんと云えばよいのか……見当もつかねえ」

白豚のいうとおり、それは、まったく珍妙なポーズであった。

天秤棒を担いだ女が青竹のつっかい棒で、

倒れもできずに佇んでいる。そしてその女を――

バシ、バシ……と、

鞭で双臀をたたいて追い廻すのである。

鞭を手にしているのは、いままでじいっと

酒をのみつづけていた親分の鞭兵衛である。

何の皮であろう。七、八尺もあろう、黒くてしなやかな鞭を左手に持って、からかうように振り廻し、ふりおろす。

さすがに鞭兵衛、利腕である右をつかうよな野暮なまねはしないが、それでも結構、

柔らかい肌に、淡い紅色のみみずがはしり、悲鳴をあげて豊香が逃げまどう。

「ほらほら、よいきた。そっちはダメだ、あっちへ行きな。今度は、こっちだ」

行手、行手に立ちふさがる子分たちは、大手を拡げて豊香をからかい、乳房を、なぶり太腿をつねりあげる。

「アッ、アッ……や、やめて、やめてよ。

ね、キャアア……ア、アレツ、許して下さいよう！」

伊勢白粉の匂いに代って、むんむんする女の甘ずっぱい体臭をまき散らしながら豊香はものの小半刻も、巨大な手毬のように土間のあちこちへと追いたてられ、ひきずりまわされるのであった。

自分の汗と、男たちの掌。それに荒筵から

舞いのぼった毛羽にまみれて豊香が、とうとう青竹をずらして蹲まってしまったのを眺め

た鞭兵衛は、

「どれ、ぼつぼつお鏡にでもするか。白豚、用意はできているだろうな」

「もちろんでさあ、親分。たっぷりと豊香さんに食べて頂くと思ひまして」

蹲った豊香の正面に白豚が供えるように置いたのは、風呂敷でおおいがされている直径

二尺あまりの大きな摺鉢であった。

お・鏡・に・し・よ・う・と・い・う・言・葉・、それに摺鉢をみた豊香は、自分がどうされるのか十分にさとしたらしく、

「許しておくれ、ねえ、鞭兵衛親分。お願いだから、そ、そんなものは、つかわないでおくれよう！」と身悶えたが、

「なにを云ってやがる。せんには結構、楽しみやがったくせに。フッフッ、ただな」

舌なめずりした鞭兵衛は、

「今日は、少しばかり趣向が違っちゃあいるが……。ほら立ちな、立ちなってこと。この世で極楽に往生させてやろうと云っているのだ。お礼の一言もいってもらいてえくれえのものだぜ」

わらわらと寄りたかってきた何本かの腕で先刻、立膝縛りにされていた角柱に、立ったままで縛りつけられ、両脚を「八」の字にひらかれて足首を左右それぞれ木杭に括りつけられてしまった豊香は、心の臓が凍りつく。「なにも始めてじゃあるめえし、そんなにイヤがるこたあねえだろうよ」

風呂敷のおおいがとられると摺鉢の中にはどろっとした白い液体が入っていた。それを柄杓ですくいあげ、持ちあげた青竹の尖端か

ら流しこもうとするので、つい、豊香が悲鳴をあげる。

「や、やめて、やめておくれよう！ ほ、ほんとに、あこぎなまねはしないで、ねえ！」

長さ四、五尺、径一寸五分。節は抜きとられて筒抜けになっている青竹のなかを、たまぎるような悲鳴にもかかわらず摺鉢の中味がながれて行く。

息をのんで見守る男たちの視線のなかで、触れなば落ちん——という、いまを盛りの女体が妖しく、くねった。そして数呼吸のち「アッ、アッ……」

白く悩ましい太股が、はやくもくねり、唇から喘ぎが洩れて、

「アッ、イヤ！ イヤだってバア！ アレッこ、こんなことはイヤだっていうのに！」
「どうやらご到着のようですぜ、親分。だがもう一杯、入れてみましょう」

黒馬が柄杓ですくいあげた液体を青竹の尖端から流しこむと、

「ヘッヘッヘッ、もう一杯」

よこから白豚が三杯目をも注ぎ入れて、さらに、もう一杯と柄杓を摺鉢に入れた。

「白豚。俺はもういいぜ。それ以上の必要はねえ」

鞭兵衛がとめると白豚が、

「いいえ、ね、親分」とブクブク肥えた軀をゆすってニヤッと笑い「あっしが、いただこうと思いますので」

「お前がか」

「へい。フッフッフッ……さぞうめえだろうと」

「お前の考えそうなことだ」

白豚のたくらみを鞭兵衛は、とめようとはしない。

その間に、ドロドロした液体は青竹のなかを滑り抜けてしまったらしく、荒筵に、したたった。

「おととととと、もったいない！」

あわてた白豚が、斜め上に持ちあげられていた青竹の口をあんぐりとくわえると、頬をふくらませて、

——フウ——ッ！

と息を吹きこんだ。

鞭兵衛たちが、ケタケタと笑ったのは、その動作が、消えかかった風呂の火を煽るために火吹竹で吹くのに、そっくりだったからであるが、豊香にしてみれば、笑うどころではなかった。

「ヒ、ヒャアアアッ……」

けたたましい金切声があがった。

二度、三度、頬をふくらませて、その叫びを楽しみ、かつ、青竹のなかの液体を十二分に吹き出した白豚は、もうよかろうとばかり中腰の姿勢を崩して、どっかと、あぐらをかいた。

必然的に、青竹は真横から斜め下へと傾斜が変わり、一度通過した液体が、それにつれて、高きから低きへと逆流して、白豚の口の中へ、注ぎこまれてくる。

ゴク、ゴクッ、ゴクッと、白豚の咽喉仏が上下し、ふだんは、どんよりと曇ったような白豚の眼が、いきいきとして輝いた。

周囲の男たちもじっとしてはいなかった。

「豊香。どうだい」

柄杓四杯分——白豚が、いまその大部分を吸い戻したようである。だが……。

額に皺をよせ、唇を開き、ハアハアと、あらい呼吸を繰り返している豊香の黒髪的一端を掴みあげる鞭兵衛。

「ア、アウ……」

豊香とて、公儀御用櫛師・春田和泉の妻である。豊太閤五夜のロザリオをめぐる暗闘にまきこまれさえしなければ、鞭兵衛ごときにこのようにされる、いわれはない。

ましてや赤裸に剥かれて痴態の限りを見せることなど考えられないことであった。

「う、うめえ。これはどうめえものはねえ」
やっとな青竹から口をはなした白豚が、唇の端を手で拭きながら立ち上る。

「親分。さあ、どうぞ」

白豚から青竹を手渡された鞭兵衛が、「フッフッフ……」含み笑いをうかべたとたん「ウ、ウウ！」

木杭に縛りつけられている豊香の足の指がグウウウとひらき、乳房がブルッと揺れた。ふらふらと、誘われるように赤狐が、その頂の乳首を、つまむ。

毛むくじゃらの手で柄杓をつかんで鞭兵衛が、摺鉢のなかの液体をすくいあげると大口をあけて、すすりこむ。

「あっしも準備しておくか」

と斑猿の長い手も、のびた。

その摺鉢の中のドロドロした液体は——。

別に珍しくも何ともない、どここの家にも

あるトロロ汁なのだ。

とろろ汁——つまりつくねいもの摺り汁なのだが、これは、徳川時代の春本「春情花朧夜」によっても補精薬兼房中秘薬として傑出したものとされており、

とろろ汁喰ったとたんに男立ち

とろろ汁あらぬところを女かき

などと川柳でも、もてはやされている。あらぬところとは、どこなのかは、ともかくとして、次の「かき」という動詞は、また、なんとものまめかしい情景が、ありありと、うかんでくる語であろうか。

いま、豊香は「かく」ことさえも許されぬ緊縛された身であった。さすればあとは「搔いてもらう」ほかはないであろう。

が、仇敵とも怨む男たちに、はたしてそのようにあられもないことが依頼できるであろうか。

「かゆいだろう、豊香。ハッハッハッ、どうだ、かいてやってもいいんだぜ。ちょっと云いさえすれば。フッフッフ」

豊香には、とうてい、それは発言できなかった。

かとして、狂おしいばかりの疼きにも耐えられない。

どんよりと焦点のあわぬ瞳で、天井の一角を仰ぎながら何度となく喘ぎつづけていたが鞭兵衛にあごをつかまれて、
「どうでえ、云ってみな。早く云うほうが身のためだと思っけどな」

と酒くさい呼吸を吐きかけられると、もう
精も魂もつきはてたように

「……お、お願い、親分……ど、どうにかし
て下さいまし……」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一二〇〇円 (送共)
半年分	6冊	二四〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四八〇〇円 (送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、
或は地方のため、入手することが出来ないとか、
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い
目に、手に入れたらという御要望をよく承り
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御
予約下さるようお願い致します。毎月製本完
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには
大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお
払込みの上、何年何月号より何力年分と御指
定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代など
は、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為
替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替
(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

「どうにかじゃあダメだ。はっきり云ってみ
な。どこをどうするのだ」

「どこを……女の身では、とても、とて
も……」

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法
です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代四〇
〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂
ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方
の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何力月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何
月号からとお書きにならないときは、重複や
欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切の判を捺印致します。から
継続お払込み願います。継続のお払込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
します。数日後その局で御受領願います。
局での留置期間は十日間。その間にお受取り
にならないときは、発送人に返戻されます。

「口には出せねえとでも、いうのかよう」
「……」

唇をわななかせながら、哀願をこめた瞳を
ひたと鞭兵衛に投げかける豊香。

「さあ、云ってみな、はっきりと……」

つかんだあごを揺り上げて、この美しい人
妻を屈伏せしめることが、楽しくてたまらぬ
という表情を露骨に浮かべている鞭兵衛。

「すなおに云わねえと……」

手むくじやらの腕が青竹にのびたかとみる
と、それがゆっくりと回転しはじめる。

「それでも、まだ云わねえというのかよ、こ
れでも!」

「ヒ、ヒアア……」

五人の男たちの輪のなかで、豊香は、火焙
りにされるような悩乱のなかで、やっとその
あわれみを願った。

そして、一度、口にすると、二度、三度と
なく、子分たちの尋ねるままに、それを口に
しなければならなくなったのであった。

裸蠟燭の光が、もつれ合う六人の姿をうつ
し出し、その輪のなかから嗚咽が、ひとときわ
高くほとばしったかと思うと、ドオツという
男たちの哄笑が湧きあがった。

——(つづく)——

カット・志羽利也



<告白>

痴人の戯れ言

鈴木 緑 人

僕ともう一人の女の子が、泥棒となつて縛られている所へ、中学生の男の子が通りかかり、一緒に遊ぼうと仲間に入りました。その子は、スカンポを取ってきて、僕と女の子のお尻に挿し込んで、首に縄をつけて犬のように四つ這いで歩かせたので

ているうちに、何か心地よいものを感じるようになりまして。そのため、勝てるようなときでも、わざと負けて、そのままプロレスごっこのようになるよう工夫したりしました。

中学生になつてしまうと、どちらからともなく、一緒に遊ぶのをやめてしまいました。中学、高校では、一般にそうであるように、一方では、女の子に強い関心を持ちながら、一方では、わざと避けるというような生活でした。一人で部屋に籠ると、雑誌の挿絵で女性の縛られている絵を探しだしてきては、それを自分で写し書いたりしました。

莫然と、縛られたいという気持はあつても縛ってみたいという気持が起つてきたのは、高校に入ってからでした。それは、書店で立ち読みした雑誌の口絵に、女の人の縛られている写真を見たことが、きっかけでした。

大学生活は家の都合で寮でおくりました。

す。

それは、今思ひ出しても決して嫌な思ひ出ではなく、むしろ懐かしくさえ思えます。

四年の時に父の転勤によって、その土地を離れ新しい町へ移りました。そこで一つ年下の愛子という女の子と友達になり、随分よく一緒に遊びました。雨の日などは彼女の家で相撲をとったりしました。

僕は体格も小柄で、ひ弱でしたので、余程頑張らないと彼女に負けてしまうのでした。でも、相撲に負けて何度か彼女に組み敷かれ

僕は子供の頃から、なぜか縛られることが好きで、よく、近所のいたずらっ子達と、泥棒ごっこをして遊んでいたことを思い出します。いつも、泥棒役になるのは僕で、つかまえられるばかりいました。

つかまえられると、後手に括られ、松の木に縛りつけられたり、或は両手両足を、一緒に縛られて、草むらにころがされたりしました。そんな遊びのうちで、特に強く記憶に残っているのは、僕が小学校二年生の時のことでした。

ここで僕は一人の親友と知り合いました。彼は色が白くて非常に繊細な感じで、一見して女性的なタイプでした。ある晩のこと、僕は数学の問題を解いてもらおうと、彼の部屋へ行きました。

木枯しの吹く寒い晩で、彼はもう既に、布団の中に入っていました。彼は寒いから一緒に布団の中へ入れと言って僕を誘い込みました。布団の中は、ほかほかと温かく、僕は彼に身を寄せました。すると、彼が急に僕の唇を吸いました。

ガラスのように繊細で清潔な感じの彼でしたので僕も拒みませんでした。それよりも、左手を彼の体に添って、少しずつ下におろしてゆきました。肩、胸、腹……。彼は僕のするがままになっていました。

僕と彼は互いに口唇を吸い合ったまま、やさしく愛撫し合いました。一体、僕に同性愛の傾向があったのでしょうか？ とにかく、二人は、それ以来、すっかり仲良くなってしまうました。彼が目の前にいないと淋しい気持ちになり、一緒にいると、なごやかな気持ちになるのです。彼のすることは、どんなことでも好ましく、一緒にいるだけで幸せでした。

暇があると二人で旅行しました。縄を持って行って、人のいない野原なんかがあると、縛ってもらいました。彼は、そういうことに

は、殆ど興味を持っていませんでしたが、優しい性質なので、僕が頼むと、素直に、なんでも聞いてくれました。ですから、ねだって縛ってもらうのです。

その頃から、僕は鼻を弄んでもらうことがとっても気持ち良いことに気づきました。縄で縛ってもらって、足で鼻を弄んでもらうのが僕にとっては最高でした。

彼は、どちらかといえば、お尻に興味を持っていました。それで、僕に頭を畳につけて、膝で立って、お尻を高くあげた格好をさせ、お尻を觀賞したりしました。それに彼のものを入れようとしたりしました。でも、僕は、とっても痛くて、止めてと頼むので、成功したことは一度もありませんでした。

それで、そんなときは、いつも僕の口を使うことにしていました。実際は、僕は、そんなことには興味はなかったのですが、好きな彼の喜ぶことなので積極的に協力してやりました。僕は今でも、本当に、肛門性交なんて可能なのだろうかという気がしています。

大学生時代に、アルバイトで家庭教師をしたことがありました。相手の子は小学校六年生の女の子で、成績は劣等に近いものでしたが、家庭は裕福のようでした。

その子は体格もよく、非常に性的なものに興味を持っていて早熟でした。勉強している

最中でも、向い合っている僕の足の間に、手や足を伸ばしてきたりしました。

その子は、小学校を卒業するまで一年近く教えました。教えに行くたびに、僕に挑発してきました。それで、僕もつい、それにのせられてしまつて、抱擁したり、キッスをしたりしましたが、それ以上の深い関係にはなりませんでした。

大学生時代に、異性とのSMプレイも一度だけ経験があるのですが、それは未だ、思い出とするには、余りにも生々しく、傷が大きいので、今、ここでは触れない事にしたいと思います。

今、僕の夢みていることは、セーラー服の女学生を縛って、鼻を弄ぶとか、あるいは、それを受ける立場になるということです。

その女学生も、やっとな乳房がふくらみ始めたぐらいの、子供供していた方がいいのです。なんとなくロリータ趣味が残っているようです。本誌には、ロリータ趣味的な作品は少ないようですが、他の読者の皆さんは、どうなのでしょう。

僕が家庭教師をしていた時の、あの教え子も、もう高校生になっている筈。縛られることが好きだと言っていたから、そのうち、連絡してみよう。

M ストーリー……隆志の人生目標

猷

(けんしん)

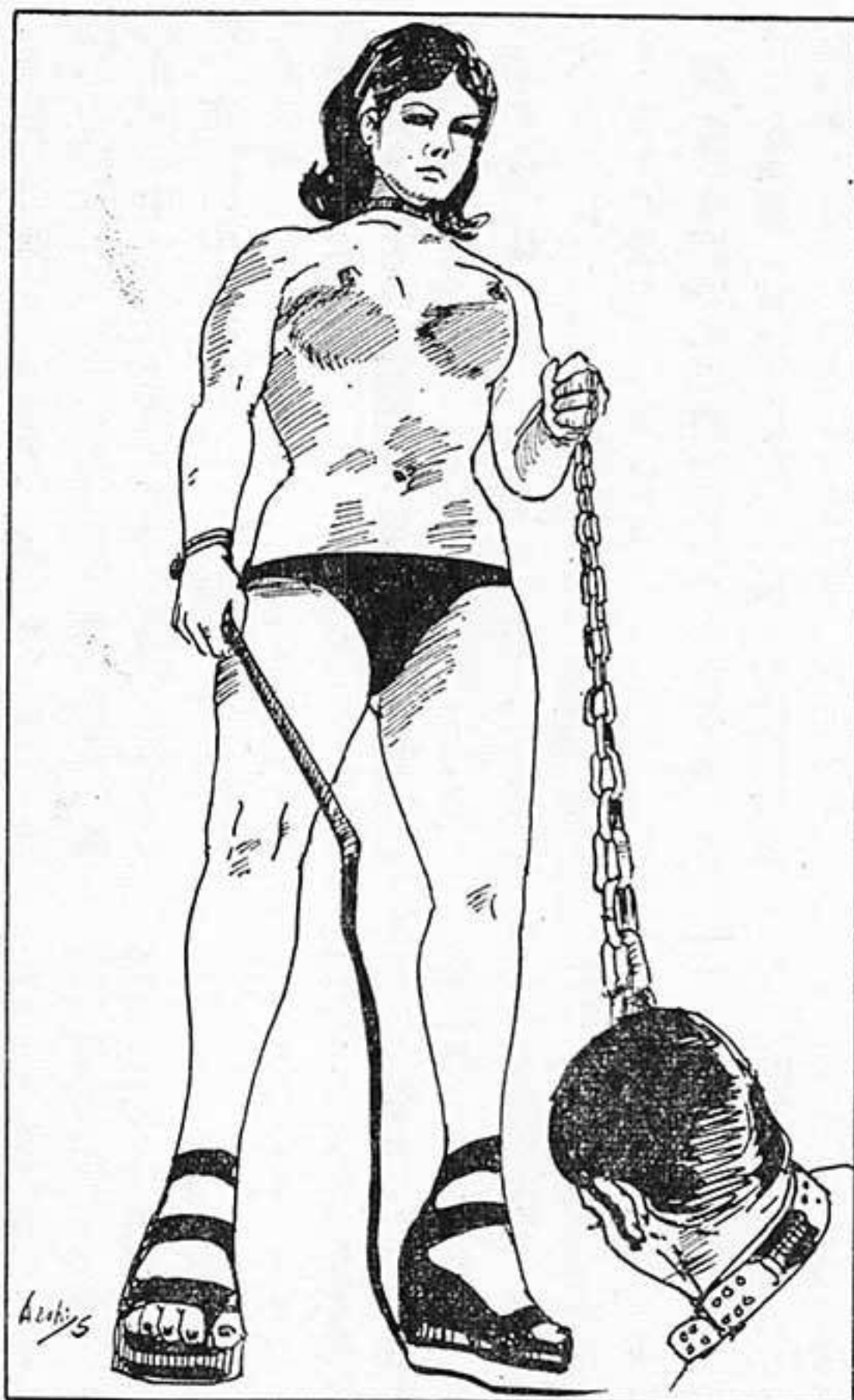
身

沖

圭

介

カット・須坂 旭



P町の郵便局が、Q市の方へ転送してくれた、彩子からの手紙を、幾度も繰返し読んだ隆志は、赤茶けた畳に寝ころぶと、嫂の移り香をむさぼるように、上質の便箋を顔の上に

会えるだろうと、隆志がQ市へ出てきてからでも一年近い日が過ぎていた。働きながら予備校へ通う苦しい生活のなかで、目標は勿論国立大学に合格することであったが、別れて

ひろげた。

兄の達也が交通事故で急逝してもう二年になるのだから、兄の妻だった彩子が隆志独りを残して去ってしまっ

てから二年近くなる。Q市で彩子に会ったという人の話を伝え聞くとも矢も楯もたまず、いつか嫂に

半年ほどたって、住所もしたためてない葉書が届いたきり音信不通の彩子に、いつか何処かで、きっと会える日がくるだろうことも、隆志の希いの一つだった。

——間もなく達也の三回忌だから、坊さんに詣ってもらおうと思うので、都合がつけば、つぎの日曜日に訪ねてきてほしい——彩子の手紙はそんな意味のことを書き連ねてあり、Q市内の彼女の現住所だけでなく、最寄りのバス停からそのマンションまでの略図も描き添えられていた。かたちだけでも亡夫の三回忌をと思いたったのも、殊勝さというより彩子らしい気紛れからなのかも知れないが、隆志を忘れず呼ぶ気になってくれたのが、嬉しかった。

達也が彩子と結婚したのは、隆志が高校三年のときだった。両親を早く亡くし、兄と二

人きりの生活が長かった隆志は、嫂という言葉に、恋い焦れながら指一本、触れることを許されぬ女——いつか、そんなイメージを抱くようになっていた。

家のなかに華やかさを撒きちらすかのような彩子は、彼の想像通りの女性であった。美しい脚を惜し気もなく、むき出しにした兄嫁のミニスカート姿に忽ち魅せられてしまった。いった。所在なげに、ぼんやりしているふうを装いながら、いつも彼女の姿を目で追っていたが、見まいとしても、いつか視線は嫂の脚に惹きつけられてゆき、その度に胸が熱くなるのを、おぼえさせられた。

ある日の夕方、隆志が学校から帰ってくる、何処かへ出かけていたのか、玄関に彩子の朱いハイヒールが脱ぎ棄ててあった。夕飯の支度に心急いで帰宅したらしく、ハイヒールの片方が横倒しになったままだった。

「ただいま」

家のなかに声をかけておいて、隆志は倒れたハイヒールを揃えかけたが、

「お帰りなさい。……いやだわ、もうそんな時間になってしまってるのね」

お勝手の方から気忙しい彩子の声が聞え、彼女が玄関へ出てくる気配のないのが察しら

れると、隆志は嫂のハイヒールを三和土へ置こうとしていた手を止めた。

一つ屋根の下で若い女性と一緒に住むことのなかった隆志にとって、家に婦人靴が在るようになってたのは彩子のものが最初でありましてハイヒールに手を触れるなど初めての経験であった。

胸の鼓動が昂くなるのを感じつつ、朱いハイヒールを握りしめると、ソツと顔を近づけていった。ついさきほどまで嫂の足に履かれていたのだと思うと、靴の内側を嗅いでみずには、いられなかった。

「隆志ちゃんって、変な子なこと。わたしのハイヒールをオモチャにして」

いつの間にかきていたのか、頭の上で、出し抜けて彩子の声がした。

卑しい行為を当の嫂に知られた恥ずかしさに、隆志はうなだれたまま顔が上げられなかった。

「悪いけど、ついだから、そのハイヒール片づけといて頂だいな」

別に咎めるふうもなく、彩子は勝手もとへ戻りかけたが、俯向いたままの隆志に呼び止められて、振り返った。

「お願いです。いまのこと、兄貴には内緒に

しておいて下さい」

「何も悪いことした訳じゃない、ただ、隆志ちゃんにはハイヒールが珍しかったというだけのことじゃないの。大丈夫よ、誰にも言ったりしないから」

彼の顎に手を添えて顔を起すと、しばらく隆志の目を覗きこむようにしていたが、
「隆志ちゃんって可愛い顔してるわね。わたしの家来にしましてやってやりたいみたい」
謎のような笑みを残して勝手もとへ去っていった。

その後、ときおり彩子は靴の出し入れを隆志に言いつけることがあった。それはいつも達也が不在のときに限られているようだ。隆志は彼女に声をかけられるのを心待ちにしていたが、嫂の靴に手を触れられる機会を与えてくれるのは、全くの気紛れとしか思いうるがなかった。

一度だけだが、こんなことがあった。

隆志が自分の部屋で仰向けに寝ころんで本を読んでいたところへ、取り入れた洗濯ものを持って、彩子が入ってきた。

隆志の頭の位置が丁度、箆筒の前であったために、抽斗を開ける彩子の、ミニスカートのなかを下から覗きこむかたちになってしま

った。スカートの丈が短いせいで、奥の方まで明るく見通せて、ほの白い太腿の上方に深紅のパンティがチラチラした。

日ごろから彼女は、パンティだけは義弟の目につかぬ場所に干すよう心がけていたらしいので、隆志も、全てに華美な彩子のことだから、きつと鮮やかな色彩のものを身に着けているだろうと想像しつつも、垣間見るのはそのときが初めてだった。

だが、ビキニとおぼしい嫂のパンティに瞳を奪われて息をのんだのも、ほんの一瞬だけのことであった。

「隆志ちゃんの目、いけない目なのね。懲らしめてやるわ」

顔の上で彩子の内股が開いたと思う間もなく、嫂の左足が隆志の両の目を被ってしまった。

「一寸、痛めつけてあげるから、我慢してくては駄目よ。いいこと？」

愉しげに声に出して笑うと、彩子は容赦なく隆志の顔を踏みつけながら、ゆっくり洗濯ものを箆笥の抽斗に、しまいはじめた。

本を胸に伏せると、両腕を畳に伸ばして、隆志は身じろぎもしなかった。

踏まれた瞬間は、ひんやりした感じだった

が、踏みひしがれているうちに、足の温もりが顔に伝わりはじめてきた。彩子の足の裏は信じられないまでに柔らかく、脂足なのか、じっとり汗ばんでいるようでさえあった。香ぐわしい嫂の足の匂いを心ゆくまで嗅ぐことが出来た。

兄の達也が交通事故に遭ったのは、それから間もなくだった。結婚一年余りで未亡人となった彩子は、ほどなく隆志の家を離れていた。

当時十九才で浪人一年目だった隆志には、どれほど嫂に惹かれてはいても、二十五才の彩子に、自分と結婚してほしいとは言い出せなかった。去ってゆく彼女の荷物の整理を手伝いながら、穿き古された嫂のストッキングを一足、こっそり抜き取っておくだけが精一杯であった。



手紙に指定されていた日曜日がくると、隆志は待ちかねたように彩子のマンションを訪ねていった。

彼女の住居がQ市内のマンションと知ったとき、何故ともなく彩子が誰かの囲い者になっっているような気がしてならなかった。日曜日を待たず、直ぐにも訪ねたかったのだが、

彩子の都合を考えると、そうもしかねたのである。取りあえず、指定の日を訪れることと自分もQ市内に住んでいるのを報せる、速達を出しておいた。

訪ね当てたそのマンションは一応、十階建の高層建築ではあったが、マンションと呼ぶよりアパートと言った方が相応しいような建物だった。彩子の住居は十階の端にあったが部屋番号だけで、表札は出ていなかった。それが一層、妾宅めいて感じられた。

チャイムを鳴らしても直ぐには応えがなく隆志は、しばらく待たされた。漸くドアの向う側に人の気配がして、やっとドアが細目に開けられると、なつかしい嫂の顔が隙間から覗き、早くなかへ入るよう目顔で促した。

半畳ほどの玄関の踏み込みに入って、隆志は驚いた。もう正午も、とっくにすぎているというのに、彩子は、まだネグリジェ姿のままだったのである。

挨拶するのも忘れて、いまにもお坊さんがきたらどうするのだろう、と隆志が心配している、

「遠慮なんかしないで、なかへ入って頂だいよ。散らかしてるけど、隆志ちゃんだからいいわね」

彼女は事もなげに言って、先に奥へ引こんでしまった。

洋間ばかりの二DKの間取りらしかったが彩子が南に面した窓のカーテンを開けると、部屋一杯に差しこむ午後の明るさのなかで、膜のように薄い黒色のネグリジェの下に、それも黒のビキニパンティを着けただけの彼女の裸身が透けて見えた。慌てて視線を逸らしたが、嫂の豊満な肢体は強く隆志の目に焼きついた。

彼の狼狽ぶりを見てとると、

「こんな恰好じゃ、落着いて話も出来ないわよね。洋服に着更えるから、一寸、待ってて頂だいね」

腰かけるよう、簡単な応接セットを差し示して、彩子は寢室へ入っていった。

透明に近いネグリジェ姿の嫂の艶めかしさに氣を取られて、それまで気づかなかったのだが、隆志が腰を降ろそうとした椅子の背に黒っぽい色をしたストッキングが掛かっていた。彼女に言ったものかどうか迷った末に、さりげないふうを装って、そっと頬を触れてみた。昨夜、脱ぎ棄てたままに違いないそのストッキングは、ほのかな香料の匂いを留めていた。隆志の知っている限り、彩子はいつ

も平凡な肌色のストッキングしか穿いたことがなかった。墨色をしたストッキングに包まれたときの嫂の脚の美しさを想像するだけでやるせなさに胸をかきむしられるような思いがした。寢室との境のドアが細目に開いているのを氣にかけつつ、隆志は怵えきれなくなつたように、足の裏の部分に顔を埋めた。

そのとき、まるで彼の混乱を見計らっていたかのような、彩子の声がした。

「その辺に、わたしのストッキングがなかったかしら」

「……黒っぽいのなら、ありますけど」

「そう。ならいいわ。——実はね、坊さんは頼まなかったの。だって、お仏壇はないし、お位牌も抽斗に入れたきりだもの、へんですよ。椅子に腰かけた坊さんにお経を上げてもらっても、しまらないわよ。それで今日は、隆志ちゃんと二人で一日を愉しくすごすことに決めちゃったの。かまわないわね」

隆志を担いだのではないらしいが、亡夫の三回忌を思いたったのは、やはり彼女の氣紛れにすぎなかったようだった。

「どうも、お待遠さま」

寢室から出てきた彩子を、ひと目見て隆志は、しばらくは声も出なかった。

彼女は、しなやかな黒の表皮で作ったミニのワンピースを着ていた。まるで全身を皮のホルセットで締めつけているかのような、身に合いすぎるほどの仕立てが、兄の妻だったころに較べて豊艶な厚味を増した、熟れきつた体の線を余すところなく黒皮の艶やかさに伝えていた。

「どう、似合うかしら？」

ファッションモデルのように、彩子が一寸氣取って歩いてみせる。隆志には、皮の光沢に包まれて、はちきれそうに揺れ動くヒップの豊満さが、ひとときわ、悩ましかった。

「今日、初めて着たのよ。隆志ちゃんに見てもらおうと思って」

ひとしきり歩きまわってから、漸く立ち止まった彩子は、

「悪いけど、ストッキングを穿かせてくれないう？ 仕立てがきつくって、俯向けないみたいなのよ」

テーブルに腰をかけると、隆志の顔のまえへ、美しい脚を伸ばしてみせるのだった。

「お嫂さんの脚に触ってもかまわないのですか……」

「いいわよ、そんなこと」

「じゃ、手を洗ってきます」

「お馬鹿さんね。まるで女王さまのおみあしに触るみたいに」

「……でも」

洗面所で手を洗つてくると、隆志は墨色のストッキングを短く手繰って、彩子のまえに片膝を突いた。立てている方の膝の上にスリッパを脱がせた彼女の片足を載せたが、美しい女性は足の爪まで、かたちよく生れついているのだろうか、紅く染められた嫂の足の爪の見事さに、魅せられてしまっていた。

「女王さまを待たせるなんて、下僕のくせして生意気よ」

愉しげに笑った彩子は、足の先で隆志の顔を押した。

「罰に、足の裏にキスをおし」

「……済みません。お嫂さんの足の爪が、あんまり美しいので、つい見惚れてしまつて」

土踏まずのあたりに口づけしてから、隆志は嫂の足を膝に置き直すと、手繰ったストッキングを足首まで穿かせた。両足とも同じようにしたところで、彩子に立ってもらい、片脚ずつ、ふくら脛から膝、そして太腿へと、丹念に脚を下から上へ撫で上げるようにストッキングを延ばしていった。

黒っぽいストッキングに包みこまれて、ま

るで薄墨を塗ったように見える嫂の脚は、これほど素晴らしいものが、この世にまたとあるうかと思われるほどの美しさであった。

「隆志ちゃんたら、サボってばかりいて、駄目じゃないの。それとも、足の裏にキスさせられたりして、馬鹿らしいのなら、もういいわよ」

「決して、そんな——」

「じゃ、早くおしよ。このままでは、ずるじやないのよ。ガータに吊ってくれなくちゃ」
「そんなことまでしても、かまわないのでしうか」

思わず彩子を見上げる隆志に、
「いいのよ。早くストッキングを穿かせてくれないと、なにも出来ないじゃないの」
彼女は氣にとめるふうもなかった。

隆志は手だけをワンピースの裾に入れて、手探りにストッキングをガータに止めようとしたが、上手くゆかず、

「お嫂さん、もう少し脚を開いて頂けませんか」
と頼んでみた。

「これでいいこと？」

彩子はワンピースの裾巾一ぱいまで両脚を開いてくれた。

頭から、すっぱりワンピースをかぶるようにして隆志は太腿の間に顔を差し入れたが、嫂の体臭と皮の匂いに、氣が遠くなつてしまひそうだった。彼が初めて盗み見た嫂のスカート奥は、深紅のパンティであったはずだったが、いまでは、ビキニパンティからスリッパまで全て黒づくめに変わっていた。

「妙な処に顔を突っこんで、いつまでも油を売ってるもんじゃないわよ」

股で頭を抑えつけられ、隆志は大急ぎに、それでも一分の緩みもないようにストッキングをガータに吊った。

名残り惜しげに、皮のワンピースの裾から上気した顔を出すと、

「隆志ちゃんって、わたしの言うことを、とってもよく聞くから、氣が向いたら、また、いつか呼んだげるわよ」

彩子は彼の心を見透すように、隆志が、うやうやしく捧げるスリッパに足を入れた。

「さっきから一寸、氣になってたんだけど、隆志ちゃん、ひどく痩せたんじゃない？ 何か体が悪いの？」

向きあって椅子に腰を降ろすなり、それまでとは打って変った生真面目な顔つきで、彼女は訊ねた。

隆志が、国立大学へ入るためにはと無理は覚悟の上の、働きつつ予備校へ通う生活ぶりを手短かに話すと、

「勉強と労働と両方じゃ、大変だわねえ」

煙草に火を点けた彩子は脚を組み直して、しばらく考えこんでいる様子だったが、

「そんなことしてたら、いつまでたっても大学に入れないのじゃないかしら。どお、思いきって此処でわたしと一緒に暮してみない？ 本当言うと、達也が亡くなったとき、隆志ちゃん独りを残してゆくのと、とっても辛かったわ。でもどうにもならなかった……。けど、いまなら、なんとかなるから」

彩子は誰かの二号ではなく、バーのホステスをしているのだそうだった。夫を亡くして以来、彼女の身の上にも色んな移り変わりがあったのだろう。

もう一度、嫂と一緒に生活が出来るなど隆志にとっては、まるで夢のような話だった。直ぐには口も利けない彼の表情を読み取ると「今年でもう三浪なんですよ。働くことでエネルギーを浪費してちゃ駄目よ」

彩子は同居が決定したように言った。

「でも、大変な迷惑をかけることになりますから……。それに、お嫂さんとは、もう他人

になってしまってるのですし」

喜びと躊躇のないまざった隆志に、

「お嫂さんお嫂さんって甘ったれるくせしてなによ、他人だなんて。隆志ちゃんのためなら、少しくらい迷惑だっていいの。だってわたしには、他に身寄りなんて一人も居ないのだもの。その代り、家事は受持ってね。どうしても気兼ねなら、住み込みの下男だと考えたらどうかしら？ 二十七才の若さで召使いを置くなんて、わたしも一寸したもののよね」

隆志の気持をほぐすつもりか、彩子は晴れやかに笑ってみせた。



月末まで働いた隆志は、掛買い、その他、滞っていた借りは自分の収入だけでどうにか済ませて、彩子のマンションへ移った。

流石にマンションを名乗るだけあって、水道もトイレも共同だった彼の古びた木造アパートと違い、彩子の処は浴室も附いていた。彼女に訊ねはしなかったが、同居人が出来れば部屋代も上るのではないか、ふとそんなことも気になった。

荷物というほどのものもなかったが、隆志の引っ越しの日には、彩子も午前中に起きて手伝ってくれた。

箆筒の抽斗を一つ空けて、其処へ彼の衣類を入れていた彩子が、

「なあに？ これ」

応接セットの横の壁際に置いた本棚のまえで書物の整理に余念のなかった隆志に声をかけた。

顔だけ寢室の彼女の方へ向けて、隆志はハッとした。汚ないものにでも触れるように、彩子は人差し指と拇指で古びたストッキングをつまみ上げていたのである。

「さも大切そうにしまいこんだりして、一体何処の誰のストッキングなのよ」

隆志の傍に突っ立った彼女の声は、気色ばんでさえいるようであった。

「……それは、あのう」

今更、後悔しても遅かったが、嫂と一緒に住めるようになれば、もう不要のものと思いつつ、やはり棄てかねたのだった。

「さあ、はっきり言うのよ」

問い詰められて、隆志は観念したように小声で答えた。

「お嫂さんのストッキングなのです。二年まえ、お嫂さんと離ればなれになることになったとき、悪いと知りながら、淋しくなったらせめてそのストッキングでお嫂さんを偲ぶつ

イメージギャラリー

『最高の歓待』

岡

たかし



「もりで、黙って貰っておいたのです」

「変に誤解されて怒りを買うくらいなら、恥

ずかしさに堪える方がよかった。」

「——わたしのストッキング？　こんな野暮

ったい色のを穿いてたのかしら」

「漸く彩子は顔色を柔らげてくれたが、

「そうだったの。じゃ、どんなにして、わたしを愚んでたの」

「……お嬢さんのまえで、同じことをして見せるのですか」

「そうよ。隆志ちゃんが、どんなふうにして

わたしを懐かしがってくれてたのか、是非、

見せてほしいわよ」

「古い肌色のストッキングを彼女から受取った隆志が、ためらっていると、

「二年まえのじゃ一寸、可哀想みたいな気もするし、破ったっていいから、これ、貸した

けてもいいわよ」

「彩子は薄墨色のストッキングに包まれた脚を、本棚のまえに坐りこんだままの彼の膝に載せた。諦めたように隆志がストッキングを脱がせると、早くやってみせるよう目顔で促した。」

「最も見られたくはない人の目のまえで浅ましい行為をしてみせなければならぬのは辛かったが、今の今まで、嫂の魅惑的な脚に穿かれていたストッキングを得られたことが、隆志を感動させた。」

「押し頂くようにしてから、まだ脚の温もりを留めているストッキングを頭からかぶって

いった。そして、足の裏の部分で顔を被うようにすると、犬のように鼻をクンクン鳴らして、嫂の足の残り香を嗅ぎ求めた。それはもう、彩子に観せるための仕種ではなかった。何日も穿き代えていないらしい、その墨色をしたストッキングには、隆志を陶醉させるに充分な芳香がこもっていた。彼は眺められてゐるのも忘れて、洋間の床の上を身をよじって転げまわった。

「馬鹿ね。そんなことばかりしてるから、ちっとも受験に合格出来ないのじゃなくって」

彩子は満足げに、ほほ笑みながら、丁度、転げてきた隆志の顔を素足の方で踏みつけて彼の動きを停めた。

「もういいから、ストッキングを返して頂だい」

椅子に腰を降ろすと、顔からストッキングを脱いだ隆志を足もとに正座させた。

「ときどきは望みを叶えさせてあげるから、勉強に身を入れなくちゃ駄目よ」

「はい」

面目なげに隆志は頭を垂れてしまったが、「でも、わたしの脚って、そんなに魅力的なのかしら。死んだ達也も、脚に触れることを許してやると、涙を流さんばかりにして喜ん

だわよ」

脚を組み交えるついでに、彩子は爪先で彼の額を押して顔を起した。

「兄貴も、そんなことしていいのですか」

隆志が意外そうに訊き返すと、

「そうよ。兄弟って、やっぱり血は争えないものなのね。死んだ夫を悪く言うのはいけないかも知れないけど、達也は、夫じゃなしに、わたしの奴隷だったのよ」

彼の深刻そうな表情を愉しむように、彩子は笑った。

夫婦なら、どんなことをしていようと仕方がないと思いつつも、隆志は亡くなった兄に激しい嫉妬を掻き立てられた。

「社用だとか言って、生意気にお酒を飲んで遅く帰ってきたりしたら、柱を抱くように手足を縛りつけて、鞭でお仕置きしてやるの。P町の家には湯殿がなかったでしょ。背中に跡が残って銭湯へゆけないから鞭打ちだけは勘弁して下さいって、わたしの足に額をこすりつけて謝ったわ」

彼女の話は、隆志にとって思いもかけぬことばかりだった。そんな兄夫婦にどうして気がつかなかったかと、不思議でさえあった。

「さ、今日は特別に、五つ数える間、足を舐

めさせたげるから、しっかり勉強するのよ」

ストッキングを穿いていない方の脚が目のまえに伸びてきて、隆志は嫂の足の裏に鼻と口を圧迫された。白い足を両手に捧げ持ち、恐るおそる土踏まずのあたりに舌を押し当てたが、ろくに舐めさせても貰えぬうちに、忽ち五つ数え終った彩子に、強い力で顔を蹴り離されてしまっていた。

足の裏のかすかな塩辛さだけが、隆志の感覚に残った。充たされぬ思いのなかで、嫂の脚への憧れが、ひときわ昇まってゆくようであった。



彩子の目覚めは、いつも正午近かった。彼女がベッドのなかで目を覚ましているのを確かめてから、隆志は下僕としての仕事に取りかかることにしていた。嫂が起きたあとのベッドの整頓から、炊事、洗濯、掃除と、夕方バーに勤める彩子と一緒に予備校へ出かけるまで、骨惜しみせず体を動かさせた。

「そんなにコマネズミみたいに働いたら、勉強に差支えるのじゃなくって？」

最初のうちこそ彼の働きぶりを気づかっていた彩子も、いつか家のなかのことは全て隆志に委せきるようになっていった。ただ、ど

ういう理由からか、パンティだけは洗濯も自分でし、特別の場合を除いては一切、手を触れることを許さなかった。

兄を奴隷と言いきったほどの彼女だから、夫婦二人きりの間ではどうであつたか判らないが、隆志の知っている限り、家事に関して決して自堕落な方ではなかったはずの彩子もベッドに寝そべったまま、あれこれ隆志に用事を足させるようになった。彼を呼ぶのにしても、いつの間にか、タカシ、と呼び棄てにするように変わっていった。

それでも、慣れるにしたがつて、隆志にも時間のゆとりは充分すぎるほど出来た。

彩子が帰ってくるのは、いつも午前一時から二時までの間だった。毎夜その時刻になると、受験勉強も、おのずとおろそかになり、隆志は廊下の靴音に耳を、そばだてた。

マンションには、彩子と同じ水商売の女が多く、一時から二時へかけて、ひとしきり廊下は彼女たちの帰宅で賑わった。酒場勤めの女たちのいずれもが多少とも酔っているせいで、嫂の靴音を聞き分けるのはむづかしかったが、やがて彼女とおぼしいそのなかの一つの足音が、廊下を建物の端まで歩んでくると隆志はチャイムが鳴らされるまゝに玄関まで

出迎えた。

ドアを開けたとき、酔客相手の勤めから解放されてホッとしているのだろう、彩子は疲れた表情のときが多かった。

「お帰りなさい」

隆志が玄関のマットの上に跪くと、造りつけのシューズロッカーに体をもたせかけるようにして、彩子はハイヒールの片足を彼の顔のまゝに差し延べた。

「お疲れでしょう」

靴を脱がせて、それまで窮屈なハイヒールに閉じこめられていた足を、隆志が揉みほぐすと、

「ああ、いい気持……」

こころよげに彼女は目を細めた。

左の掌で踵を支え、右手で足のあちこちを揉み続ける間、隆志は顔を伏せ気味にして、ストッキングに包まれた嫂の脚の美しさに瞳を惹き寄せられたままだった。酒量の多い夜は、足の匂いも強いようだった。そして、そんなときの方が、彩子はひととき心地よさそうでもあった。

客間にしている洋間へ入ると、彼に手伝わせて洋服を脱ぎ、スリッパ姿のまま、椅子に深々と腰を降ろして、彩子は先ず煙草に火を

点ける。美味しそうに煙草を喫っている彼女の足もとに正座してストッキングを脱がせるのも、隆志の役目の一つだった。

だが、ストッキングを脱がそうとしても、彩子は気尽に脚を組み変えたりするので簡単にはゆかず、脚の動きに従いてまわらなければならなかった。うっかりストッキングを伝線させでもしたら大変で、いやというほど顔を蹴りつけられて鼻血を出したこともある。ゆっくり煙草を喫っていてくれればよいが、いつ、灰皿に棄ててしまいか判らず、慎重にしかも手早くストッキングを脱がせるだけが精一杯で、嫂の脚に触れる悦びにひたる余裕など、まるでなかった。

煙草を喫い終ると、彩子はスリッパも脱ぎ棄て、黒のブラジャーとビキニパンティだけになり、

「早くシャワーを浴びたいんだから、グズグズしてないで」

未練げにストッキングを手放しかねている彼を急かたてて、先に浴室へ入ってしまうのだった。

慌ててパンツ一つになった隆志が、あとを追うようにして浴室へ入ると、

「さ、脚をお洗い」

待ちかねたように、彩子は自分でシャワーの湯をそそぎかけながら、洗い易いよう大きく脚を開いて立ちはだかった。

スポンジにたっぷり石鹼をつけると、隆志は膝立ちの姿勢で、黒いビキニパンティぎりの処から嫂の脚を洗いはじめてゆくのだが、彼が洗っている最中にも、彩子は幾度も湯をかけて石鹼の泡を流し落し、気の済むまで何度も洗い直させた。

湯の温みとスポンジの軽い摩擦が、抜けるように色白な太腿をみるうちに桜色に染め上げて、えも言われぬ美しさであった。忪えかねたように隆志が頬を触れかけたりすると、彼女は容赦なく頭からシャワーの湯を浴びせかけた。

狭い浴室のなかで、脚を開いて突っ立ったまま、彩子は自分からは決して動こうとはしてくれないので、脚のうしろ側を洗うときは、嫂の股の間を、くぐり抜けるしかなかった。気紛れに彼女が、まえを洗えとか、うしろを、もっと洗えとか命じるので、脚を洗っている間じゅう、何度、股をくぐらねばならないか判らなかった。

幾度、股くぐりをさせられても、隆志は嫂の脚の、うしろ側を洗うのを好んだ。

シワ一つないスベスベした膝裏から、ふくら脛へかけての蠱惑的なふくよかさが、何処で脹らみきったというでもなく細まりはじめるぶしの少し上のあたりでキュツと引緊められてゆく、妖しいばかりな美しさに、彼はいつも心を揺さぶられた。膝から下の妖艶さと対照的に、太腿の肉づきは眩しいまでに豊艶だった。そしてその豊艶さの頂点が、はちきれんばかりに盛り上ったヒップであった。一度でよいから豊満そのもののような嫂のヒップに顔を埋めてみたかったが、ビキニパンティから下を洗う以外には、勝手な行為は許されなかった。

浴室の床にかがみこんで、隆志が足首のあたりまで洗い降りると、彩子は浴槽のへりに腰をかけて、足を宙に浮かせ、くるぶしから下の部分を洗わせた。

足の裏を洗うとき隆志は、スポンジを使うまえに、踵や、ハイヒールを履くせいで硬くなっている処を、丹念に軽石でこすった。彩子は、こそばさを泳えきれなくなると、足台代りに彼の肩に載せている足で、かまわず隆志の顔を蹴り飛ばしたりしたが、その心づかいは褒めてくれた。

足指や指の股は、手に石鹼をつけ人差指と

拇指を使って丁寧に洗った。毎日、洗っているはずなのに、嫂の足が並みはずれて強い脂足のためか、足指の股は、いつもヌルヌルしていた。細かい砂のようなものが溜っていることもあった。

隆志が足をすっかり洗いたえて、石鹼も流し落してしまうと、彩子は足特有の臭気が残っていないか、足の裏や、指の股を一つ一つ彼に嗅いで確かめさせた。

それで役目は全て終り、そうそうに隆志は浴室の外へ追いやられるのだが、気が向くと彩子が労をねぎらってくれることもあった。

「タカシ、一寸、お待ち」

浴室を出てゆきかける隆志を呼び止めると彩子は彼をその場に正坐させ、顔を仰向けるよう命じた。

「目を堅くつぶって、口を大きくお開け。少しでも目を開けたりしたら、達也みたいに手足を縛って鞭で打つからね」

充分、脅しておいてから、直接シャワーの湯をかけてそしなかったが、それでもかなり濡れてしまっているビキニパンティを脱ぐと隆志の顔の上で強く絞った。僅かではあるがビキニパンティから絞り出された雫が彼の口へ、したたった。

嫂が終日、肌に密着させて、汗やその他のもので幾分、塩辛い水滴を、最初、隆志はそれと知らずに口にしていたのだが、正体を聞かされて狂喜した。ときおり彼女が悪戯半分に口以外の処へ雫を落とすと、玉の露を求めて目を閉じたまま隆志は顔を右往左往させた。

ひと雫すらも口に受けられなかった夜は、「齒を当てたりしたら、承知しないわよ」

彩子はビキニパンティを丸めて、彼の口のなかに押しこんでくれた。

パンティだけは洗濯もさせてもらえず、隆志が、嫂の尊い処に触れていたものを口の中に出来るのは、この機会だけであった。

いまや彼のなかで、嫂という言葉の持つイメージは、大きな変貌を示しはじめていた。完全な服従を以てお仕えする女王さまに等しい女性——。そんな思いが昂まりつつあるようだった。嫂への忠勤を励むことと、大学受験と、果して自分にとってどちらが重要なのか、それはもう隆志自身にも判りかねる問題であるようでさえあった。

ある夜、彩子一人だけではないらしい、それも、かなり乱れたハイヒールの音が、ドアの外で停まった。

同じバーのホステス仲間でも連れて帰ったのだろうか。他人のいるままで、いつもの通りの出迎え方をしてよいものかどうか戸惑いながら隆志がドアを開けると、待ちかねたように、嫂と同年輩とおぼしい見知らぬ女が、皮製のダークグリーンのスーツを着た彩子の体を抱きかかえて入ってきた。

「彩子ったら飲みすぎちゃったのよ。大変だろうけど、よろしくお願いね」

彩子から聞かされているのか、隆志の存在に不審を挟むふうもなく話す女の腕のなかで彩子はしばらく彼の顔を見据えていたが、どうやら隆志と判ったらしく、気怠るような仕種で片足をまえに突き出した。

「ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

ホステスふうの女に向かって不器用に頭を下げると、隆志は恥ずかしさを泳えて彩子の足もとに、しゃがみこんだ。

彩子の体を抱えたまま、慣れた手つきでハイヒールを脱がせる隆志の手もとを眺めていた女は、彼が嫂の足を揉みほぐすのを見ると「まあ、そんなことまでするの。いくら姉弟だからって、女のくせして男性にハイヒールを脱がさせるなんて、彩子も横着だわよ。酔って帰ったときは、いつもこうらしいわね」

どの程度まで聞き知っているのか、感心したように言っていたが、

「女の酔っぱらいだなんて、目も当てられないけど、よくしたげてね」

隆志の腕に彩子を委せると、あたふたと帰っていった。

隆志は彩子の体を抱き上げてベッドへ運んだ。豊満ではあっても肉づきに少しの弛みもない嫂は、予想外の重さだった。ベッドに降ろすと、取りあえず皮スーツの上衣だけ脱がせたが、玄関で彼の姿を見定めた瞬間から安心しきってしまったのか、彩子はまるで抵抗がなかった。俯伏せに寐返りを打つと、そのまま眠りに陥ちこんでゆくふうであった。

睡ってしまうにしてもスカートだけは除らないと寐苦しいだろうと、ファスナーを引き下げかけて、隆志は、ふと手を止めた。

横にスリットを入れなければならないほど思いきってタイトに仕立てられた表皮のスカーツに包みこまれたヒップが、彼女が呼吸するごとに、見事な盛り上りをみせるのに目を惹きつけられたのである。豊満なヒップの丸味が息づくたびに、ひとときわ皮の表面が脹りきり、光沢を増した。

「……お嫂さん」

イメージギャラリー 『洗濯日和』 原 由 貴 子



悩ましいヒップの動きに瞳を釘づけにされたまま、隆志は声を上ずらせて彩子の肩を揺すってみたが、彼女は、なんの反応も示さなかった。

なおもしばらく凝視め続けた末に、突き上げるような衝動に駆られて、隆志は皮スカートも脹り裂けそうな嫂のヒップに頬を押しつけていった。眠りを覚まさせてしまう配慮も忘れ果て目といわず鼻といわず、顔じゅうを、こすりつけた。

だが、嫂への飢えは、少しも癒やされぬばかりか、却って掻きたてられるようでさえあった。

嫂の内股の汗を舐め採った。火の点いた欲望には果てしがなく、震える手に皮スカートとストッキングを脱がせると、ストッキングの足裏の部分を鼻に押し当てて二、三度、深呼吸を繰返してから、シミ一つない脚を舐め降りていった。太腿から膝裏へかけては、汗の味を堪能出来たが、足首の方へ降るにつれて弱まってゆくばかりなのが物足りなかった。

そして漸く、隆志にとっての憧れの聖処ともいうべき、嫂の足の裏へ辿りついた。意識を失うほど泥酔しているせいで、少し顔を近づけただけでもそれと感じとれる、濃厚な足の匂いを、心ゆくまで嗅ぐと、両の足の裏をくまなく舌で舐めさすった。舌ざわりの快さに誘われて、よく鞣された皮のように柔軟な土踏まずを続けて舐めているうちに、彩子も身もだえて、足の指を反らせた。透き通るような白さの土踏まずに、キスマークが残るほど接吻すると、隆志は足指を一本ずつ口に含んでみた。指の股を舌の先で探ると、あのヌメヌメした足の脂を存分に舐め採れたし、充分に唾液でひたしてから舌を働かせれば、僅かではあるが、深紅に染めた嫂の足の爪の垢を口にすることも出来た。

足の脂や爪の垢を賞味する悦楽に陶然とな

りながらも、彩子が泥酔のあげくに眠りこんだのをよいことに、脚を舐めまわし、唾液で汚してしまったのが、漸く気になりだしてきた。湯を用意してくると、堅く絞ったタオルで嫂の脚を綺麗に拭いた。ベッドに密着したきりになっていた処も拭くつもりで、彼女の体を仰向きにしたときだった。寐返りさされて彩子が目を覚ました。

起き上った彩子は、ベッドのへりに腰をかけるのと、

「タカシの顔が見えたような気もしたんだけど、やっぱり家へ帰ってたのね」

伸びをしながら、小さくあくびを一つしたが、皮スーツもストッキングも脱がされてしまっているのに気がつくのと、

「タカシが脱がしたのね」

一寸、声を尖らせかけたが、

「なんだか苦しそうでしたし、それに汗もかいてられましたから、つい……。いまも、せめて脚だけでも拭いておこうと思ってたところですよ」

隆志が懸命に弁解すると、

「そうだったの。眠ってる間も、なんだか脚がべとつくようで、気持が悪かったわ」

隆志をドキリとさせるようなことを言いつ

つも、機嫌よくベッドから垂らしている両脚を彼の手に委せた。

「腕や背中も拭きましょか。湯を代えてきますから」

「そうね。じゃ、ついでに冷たいお水を頂だいな」

隆志が新しい湯と、氷を浮かせたコップの水を持ってくると、彩子は黒のブラジャーとビキニパンティだけになって、ベッドの上で胡坐を組んでいたが、彼の手からコップを引たくるようにして、ひと息に水を飲みほしてから、

「これを見てごらん」

胡坐の足を指差した。

「……?」

場所が場所だけに、首を伸ばすようにして隆志が恐るおそる顔を近づけると、

「土踏まずの処が赤くなってるのは、一体どういう訳なのよ。わたしが眠ってるのをいいことに、勝手な真似をしたわね」

言い終らぬうちに、腰を捻った彩子の右脚が宙に舞い、伸ばしきっていた頸を引っかけられた隆志は、彼女の腿の間へ仰向きに振じ伏せられ、喉の上に馬乗りになられてしまった。

「わたしの足に悪戯するヒマがあったら、どうして受験勉強に精を出そうとしないのよ」
酔っている体で急激な動きをしたからだろ
う、隆志の口が触れそうな近さで、黒のビキニパンティに包まれた彩子の下腹部が、大きく波打っていた。

「きつと勉強に励むと誓わせたげるから、しばらく苦しいめをするといいわ」

彼女の腰が浮き、喉もとの圧迫が除かれて息を吸いこんだ途端、位置をずらせた豊満な嫂のヒップに隆志は顔を押しひしがれた。彩子は正座するかたち、彼の顔を完全に尻の下に敷いてしまったのである。

「苦しがつたって容赦しないから、抵抗するならすばいいわ」

抵抗どころか、目も見えず呼吸さえ出来かねる状態であった。ビキニパンティに触れているのは、ほんの一部で、汗ばんだ嫂のヒップが、じかに顔じゅうに密着してしまっていた。少し感覚が馴れてくると、ビキニパンティも、すっかり濡れきっているようで、濡れ紙で口と鼻を塞がれているに等しかった。

それでも少しは加減してくれていたらしく「なかなか参らないようね。わたしのヒップの威力を思い知らせてやるわ」

彩子は正座の足を爪先き立てて体を反り身にし、体重の大半をお尻に移した。

嫂のヒップの圧力が増し、隆志は全く呼吸を止められてしまった。信じられないようなことだったが、臀部の厚い肉の層を隔てて骨の硬さが感じられ、それが顔に痛かった。だが痛いと感じたのも僅かの間で、お嫂さんのはちきれそうなおヒップを顔の上に頂いているのだという悦びと、窒息寸前の夢心地がないまざって、隆志はとろけるような悦楽のなかを、さまよいはじめていた。

「じれったいわね。もっと虐めてやりたくないじゃないのよ」

身動き一つせぬ彼に、猛りたったように彩子は尻で隆志の顔を揉みくちやにしだした。嫂のヒップに思いのままに顔を押しひしがれながらも、ときおりは呼吸が出来るようになった。

酔っている彩子に激しい動きが続くはずもなく、やがて彼の体の上で腕枕を組んで寐そべってしまった。隆志も鼻の先がヒップの下から外に出て、嫂にお尻の臭いを嗅がされるかたちで息が吸えた。体重が胸や腹に多くかかり、豊かなヒップの弾みを顔で満喫することが出来た。

「どう、一生懸命、勉強するって誓うわね」
太腿で彼の顔を挟みつけるようにして、彩子が問いかけてきたが、

「……はい」

口を塞いでいるヒップの丸味を指先で押さえて、隆志は虚にうろちていた。

人それぞれに生き方があり、勉学に励んで受験にパスし、一流大学から一流会社と、エリートコースを歩むのだけが人生ではないような気がしてきていたのである。

「なんだか煮えきらない返事じゃないのよ」

彼女の足が、踵で脳天を蹴りつけた。

美しい嫂のおみあしや、おヒップの下に蠢

きながら、いつまでも下僕として仕えたかった。たとえ、虫けらのようであろうと、そこにこそ最も充実した自分の人生が在るように思えるのだった。

頭を持上げると、隆志は嫂の太腿の間に、そっと顔を埋めた。汗の匂いにまじって強い嫂の香りが立ちこめていた。胸の奥深くまで染み亘るかのような嫂の強い芳香であった。「タカシの面倒をみてるからって、恩着せがましい気持から言ってるのじゃなくってよ」彼の長い沈黙に彩子は、ふと不安が掠めたようだった。

「そんなことは思ってません。お留守の間にうんと勉強しますから、家にいらっしゃるときは、もっと奴隷のようにコキ使ってほしいのです。でないと、とても居辛くて……」

ヒップの下から口を覗かせて、隆志は思いついて言ってみた。

「いまだって奴隷みたいなもんよ。顔の上にお尻を載せられちゃってさ。ま、それは冗談だけど、せいぜいコキ使ったげるから、きつと勉強するのよ」

含み笑いを漏らしつつ、彩子はまたヒップの下に彼の顔を敷きこんでしまった。



翌朝、といっても、もう正午を過ぎていたが、靴の手入れを思いついた隆志は、彩子の睡りを妨げぬよう夜具を抜け出すと、足音を忍ばせて玄関へ立っていった。

シューズロッカーから、昨日、彩子が履いていたグリーンのハイヒールを取り出すと、ドアを半開きにして真昼の明るさの下で眺めてみた。彩子の住居は廊下の端にあり、若い男がハイヒールを手に行っている奇妙な光景を覗かれる心配は、まずなかった。

彩子がバーへ通う途中に道路工事でもしている処があるのか、これでよく上手に歩ける

ものだと思ふくらい踵の高いグリーンの靴は手の触れた跡が残るほど、白い埃を、かぶっていた。彼女の足指の股に、細かい砂がついていたのが気がかりでならなかった隆志は、ハイヒールのなかへ手を入れてみた。指を延ばして爪先の方を探ると、半乾きの粘土のようなものが溜っているのが感じられ、爪を立てれば掻き取れそうだった。靴から手を出して爪の先についたものを験べてみたが、黒に近い焦茶色をしたその土状のものは、いつとはなしハイヒールのなかに入りこんだ塵埃が足の汗や脂で、練りかたまっていたらしかった。指を鼻のまえに持つてくると、嫂の足の匂いがした。

そのとき、寐室の方から彼を呼ぶ彩子の声が聞えてきた。

ドアを締め、大急ぎに手を洗った隆志が、小走りに寐室へゆくと、ネグリジェ姿のままの彩子がベッドの上に突っ立っていた。

「なにか、ご用でしょうか」

「馬鹿。立ったまま、ご主人さまに口を利く奴隷が何処にあるの」

叱りつけられて、彼が慌ててベッドのまえに跪くと、彩子は足を延ばして隆志の頭を踏みつけ、床に這いつくばらせた。

「今日から、わたしがベッドへ上り下りするときは、必ず踏み台を務めるのよ」

訳が判らぬまま身動きせずにいた隆志の背中を踏んで彩子はベッドから降りた。

背の高いベッドと思いつつも彼女に命じられるまで心づかぬことだった。献身的に嫂に仕えようと考えながら、ハイヒールのなかの汚れといい、今更の如くに隆志は自分の配慮の足りなさを思い知らされる心地であった。

客間へ立っていった彩子がテーブルの煙草を取り上げたのを目にすると、直ぐ駆け寄って、ライターの火を点けた。

「万事その調子を忘れないように心がけるといいわ。自分から奴隷志願したのだから」

テーブルに腰を降ろした彼女は満足げに、足もとに控えている隆志の顔に煙草のけむりを吹きかけた。

「昨夜は大部お疲れのようでしたから、おみあしでもお揉みしましょうか」

「そうね。揉ませてやってもいいわ」

片膝を立ててスリッパのまま彩子の足を載せると、ネグリジェの裾から手を入れて隆志は、ふくよかな素脚を揉みほぐしはじめた。

黒いネグリジェを透して眺める嫂の脚は、神秘的にさえ見えた。

「タカシには解らないだろうけどホステスという商売は脚がとっても疲れるものなのよ」

ふくら脛の下部から足首へかけての、脚の筋肉が引緊ってゆく箇所を揉むとき、彩子はひとときわ、こころよさそうな様子であった。

「足の裏も、お揉みするのですね」

「勿論よ」

「じゃ、一寸、姿勢を変えて頂けないでしょうか。拇指を充分に使おうと思うと、逆手になりますので」

みなまで言わぬうちに、隆志は顔を蹴りつけられた。

「奴隷の分際で女王さまに注文をつけられるとも思っているの。おみあしの裏を揉ませて頂けるように、お前がどんな無理な姿勢にでもなればいいじゃないのよ」

献身的とは、どういうことであるのか、隆志は、またしても彩子の調教を受ける思いだった。

仰向きに体を横たえると、嫂の足の下に顔を差し入れた。スリッパを脱がせ、足の裏を眺め上げたが、昨夜も彼女の酔いが治まってから丹精こめて洗ったせいで、うっとりするほど美しいのが嬉しかった。

「有難そうに、いつまで眺めているのよ。足

の裏をお前に拝ませてやるために、じっと腰かけてるのじゃないわよ」

じれったそうな彩子の足に、顔を踏みにじられた。

鼻を捻じ曲げている足に、恐る恐る手を触れると、隆志は懸命に足の裏を揉みだした。

拇指に力をこめて、踵と土踏まずの境のあたりを強く圧すと、

「そこ、そこがとってもいい気持。太腿までズキンと伝わってくるわよ」

もう彩子は機嫌を直してくれているようであった。

「それはそうと、さっき玄関で、なにをしたの？」

圧える箇所を隆志に指示しながら、そんなことを問いかけてきた。

最近、彩子の足指の股などに砂のようなものが挟まっていることがあり、昨夜もそうだったので、靴を脱いでいたことを説明すると「ふーん。ちっとも気づかなかったけど、道路工事をしてる処なんて通らないわよ。それで、どうだったの」

「うっかりしていて、本当に申し訳ないので、爪先の方にヘンなものが一寸、溜ってまして」

「じゃ、あとで一度、わたしにお見せ。お前のミスかどうか、裁いてやるから」

充分に足を揉ませると、彩子は隆志に着更えを手伝わせたが、それはもう手伝うというより、じっと立っているだけの彼女の周囲を動きまわって、隆志が着更えさせるようなものであった。

ネグリジェを脱がせると、黒のビキニパンティだけの豊麗な嫂の裸身にそれも黒のブラジャーを着け、次ぎにスリッパを手にしかけて、隆志は彩子に止められた。

「バーミューダパンツを穿くから、洋服箆箆からお出し」

洋服箆箆のなかを見るのは初めてであったが、扉を開けた途端に鼻に匂うほど皮製品が多く、バーミューダパンツも黒皮製だった。

正座した隆志が、うやうやしく捧げ持つバーミューダパンツに無難作に両脚を通した彩子は、それ以上は自分で、なにもしようとしな。叱りつけられるまえに気づいた隆志は、素早く彼女の腰に穿かせようとしたのだが、ファスナーは開いたままであるにもかかわらず、ヒップが豊満すぎて容易なことでは入りそうにもなかった。

「一寸、失礼します」

うしろに回ると、掌でヒップの盛り上りを抑えこみ、少しずつウエストの位置まで引き上げることが出来た。ファスナーを締めると黒皮のバーミューダパンツは、嫂のヒップと太腿にぴったり貼りついたように、もう何処を探してもシワ一つ留めないまでに張りきっていた。ビキニパンティのかたちが皮の表面に泛かんでいるのが、妙に煽情的であった。

皮に包まれて、ひととき弾みきって見えるヒップに、うっとりしてしまっている隆志を急かして、サーモンピンクのセーターを着せさせた彩子は、先に立って玄関へ出ると、「さあ、ハイヒールのなかに、どんなものが溜っているのか、取ってお見せ」

苛立たしげに命じた。

隆志が焦茶色をした粘土状のものを取り出してみせると、彩子は顔を近づけてきたが、悪臭に眉をしかめて、直ぐ顔を退いてしまった。その異物は、僅かずつではあるが、ほとんどの靴から出た。

「こんな汚れたハイヒールを、わたしのおみ・あしに履かせていたのは、重大な落度だわ。どんなお仕置きを受けるか、覚悟は出来てるのだろうね」

眉を吊り上げた彩子は、その場に平伏して

詫びる隆志を客間まで蹴り転がしてゆくと、なにを考えているのか、彼に応接セットのテーブルを裏返しにさせた。

「女王さまの召使いとして、本当に役に立つ奴隷になれるよう、調教してやるから、さっさとパンツ一つにおなり」

いつにない彼女の険しい表情に怯えきっている隆志を、裸のまま裏返したテーブルの上に四つん這いにさせると、四本のテーブルの脚に手足を革紐で縛りつけてしまった。

膝を伸ばしたまま脚を縛られたために、尻が持上った不恰好な四つん這いになっている隆志の上に、彩子はうしろ向きに馬乗りになったが、背中が傾斜しているので、彼の両腋を股に挟み、後頭部にドシンとバーミューダパンツのお尻を据えると、

「調教を受ける間、椅子の役目も忠実に果たさないで、鞭の数が殖えるわよ」

椅子の強度を試すように、尻で隆志の頭を揺さぶりながら、いつの間にか手にしていた鞭の先でパンツを小突き落してしまった。

「それだけは堪忍して下さい……」

パンツを脱がされた羞ずかしさに、後頭部を抑えつけてくる彩子の重みを頸で支えつつ隆志が哀願しかけたとき、むき出しの尻に最

初の鞭が鳴った。焼けつくような激痛が走り思わず頸の力が抜けかけたが、隆志は懸命に泳がえた。

あとはもう無我夢中であつた。尻といわず背中といわず鞭を受ける瞬間、頸すじに力を入れた。

はじめにも言われた通り、どれほど鞭打たれようと、尊い嫂のおヒップを頭の上に頂く光栄をおろそかには出来なかった。そして、嫂に折檻されるのなら、痛みが悦びに繋がりました。

「初めてだから、今日はこれくらいで勘弁してやることにするわ」

最後に力一杯、鞭をふるって、彩子は隆志の上から降りると、面白そうに鞭の跡を数えていたが、

「ふーん、九つか。丁度、十にしてやるから有難くお願い」

無傷で残っていた肩のあたりに、一度、鞭を打ち加えた。

嫂の体重を頸で支え抜き、疲れ果てたようにガックリ頭を垂れている隆志のまえに、椅子を引き寄せ、高々と脚を組んで腰を降ろした彩子は、

「最後まで泣きわめいたりしなかった褒美に

これを、手ずからじゃなしに、足ずから食べさせてやるわ」

ハイヒールのなかで彼女の足の脂と汗で練りかためられていた異物を、素足の爪先に載せて、隆志の顔に突きつけた。

「有難うございます」

手の自由を奪われたままの隆志は、犬のように、舌でその異物を頂戴して、口のなかに運んだ。

「お願いですから、残りのもみんな食べさせて下さい」

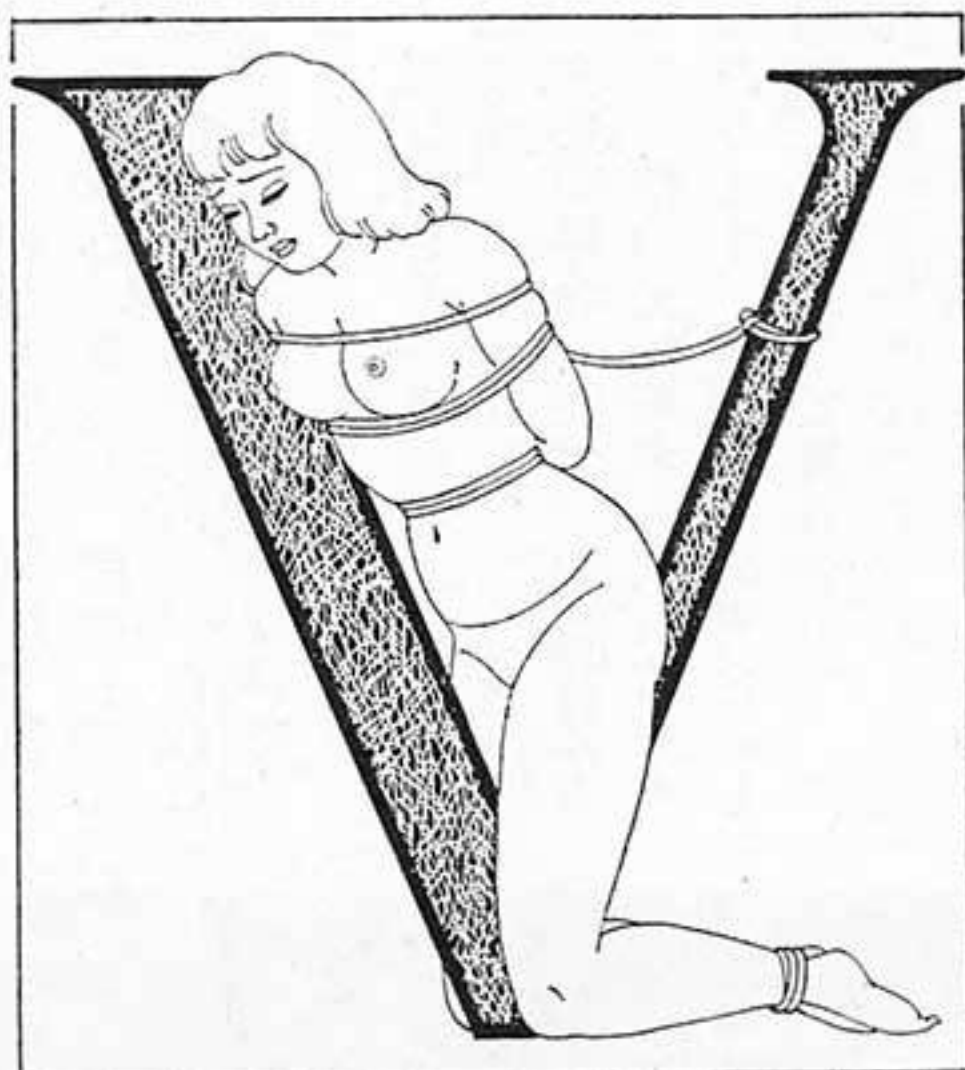
「こんな汚らしいものが、そんなに欲しいのかい」

「はい。お嫂さんのおみあしの脂や汗の結晶だと思つと、もったいなくて棄てたり出来ません」

「呆れた馬鹿ね。まったく犬以下だよ、お前は」

全部、食べ終ると、嫂の足の汚れを綺麗に舐め取りながら、隆志は、たとえ至難の業であるにしろ、身を粉にしても完全な嫂の下僕になりきろうと、決意を新たにしていた。エリートコースへの迷いを棄てた彼に、途は、ただ一すじであつた。

カット・マエダヒオミ



ふと捲くった頁の中から、私に呼びかける声を聞く。それは非常に楽しい。

私が年長者の故だろうか。控え目なペンネームに友情が感じられ、ほのぼのとした近親感が、身体の中へ拡がって行く。

世の中を美しく生き抜こうとする誌友の熱意に誘われて、この拙い告白を綴る。

職業的な執筆者もいられるだろうし、文学とは無縁の投稿者もおいでになる。それが、一つの大河の流れにも似て、さながら一巻の絵布の様に、巧拙がからみ合って、美しく、妖しく、一つ一つの草稿が、熱い息を吐いて私達の手許に冊子となって現われ、心の憩い処となっているところに、奇クの素晴しさが

〔告 白〕

S^{エス} M^{エム} 複^{ふつ} 婚^{こん} へ の 誘^{いざな} い

瞳

耀 太 郎

いきいきとしてくる。

一つの体験が郷愁を呼び、一つの郷愁が新しい歓喜へと連なり、相呼ぶ者の魂を鏡の様に映し出している。これこそ、平和だと言える様な気がしてくる。

静かに居室で一人瞑想しながら、このSMの世界の中へ耽溺する時、私は一つの安らぎを感じつつ、自分自身を曝け出して行く事によって、自分自身も救われ、また、誌友の心の拠り処となり得ると思います。

独身の誌友のもだえを聞き、妻帯者の同好の人々の告白を聞くことによって励まされ、新しい世界へと、歓喜を求めて進んでゆくのです。自己を偽らないで誌友と相対し、旅日

記の中から、私の好きな料理を出してみたいと思います。

恋妻を連れ、あなたの恋人と共に、先ずは△恋のディナー▽を一緒にとりましょう。

「クッキングカード」 その一

姦淫のすすめ

愛する者同士が、自分をぶっつけて、生まれたままの姿で縛り合ったりしたら、それも楽しい事です。然し、その楽しさを倍加させるのは、恋人同士の中に、妻と夫の間に、他の一人を介在させることによって、その楽しさは、更に倍加することは必至です。

一つの方法としては、こんなのは如何でし

よう。元来、女というものは、裸になってしまふまでは、ヌードはいやらしいの、ポルノがどうのと言いますけれども、一転して、裸になってしまふと、男性以上に好色になってしまふものです。

確かに、誰かに見られていると意識するとファイトが湧き上って、男性はタジタジとしなければならなくなります。

今まで奇クに登場したモデルさんの中で、一度に多くの男性に愛撫されたい、責められたり輪姦されて見たいという述懐をしている方が何人もあるのは、一つの複婚への希いではないのでしょうか。

男性に愛撫されたいと願っているながら、姦淫が悪いと何故、言うのでしょうか。責めも、愛撫も、元はといえば一つのもので、これこそ一番、手近な平和ではないでしょうか。

私はむしろ、姦淫をすすめたいのです。

夫婦の場合、先ず、夫は裸になって、他の男性を導き入れる必要があります。次に、その男性にも同じく裸になって貰うのです。お互いが、素裸になって、肌と肌とでつき合ってこそ、分け隔てのない親愛の情を表現することが出来

るのです。

「クッキングカード」 その二

旅立ちの鞆に花束を

カメラの一、二台。ストロボの二基ぐらいは欠かせないでしょう。小型テープレコーダーもあれば持参しましょう。

お互いのどちらかが、「ソロダンサー」となって歌を唄い、スネークダンス（淫蛇の踊り）、苦悶ダンスを踊らされているのを記録しないのは惜し過ぎます。

スポット刷毛、綿ロープ数本、浣腸道具一式は是非、用意したいものです。私は妻とプレイ旅行をする場合は、次のようなものを用意して行きます。

オリブオイル（小瓶）	一本。
香水またはコロソ	一本。
ボディローション	一本。
ボディパウダー	一箱。
マニキュアペイント	二本。
口紅（用途別に）	二本。
ヘアローション	一本。

コンドーム 数個。

バイブレーター（大小） 二本。

タオル 数枚。

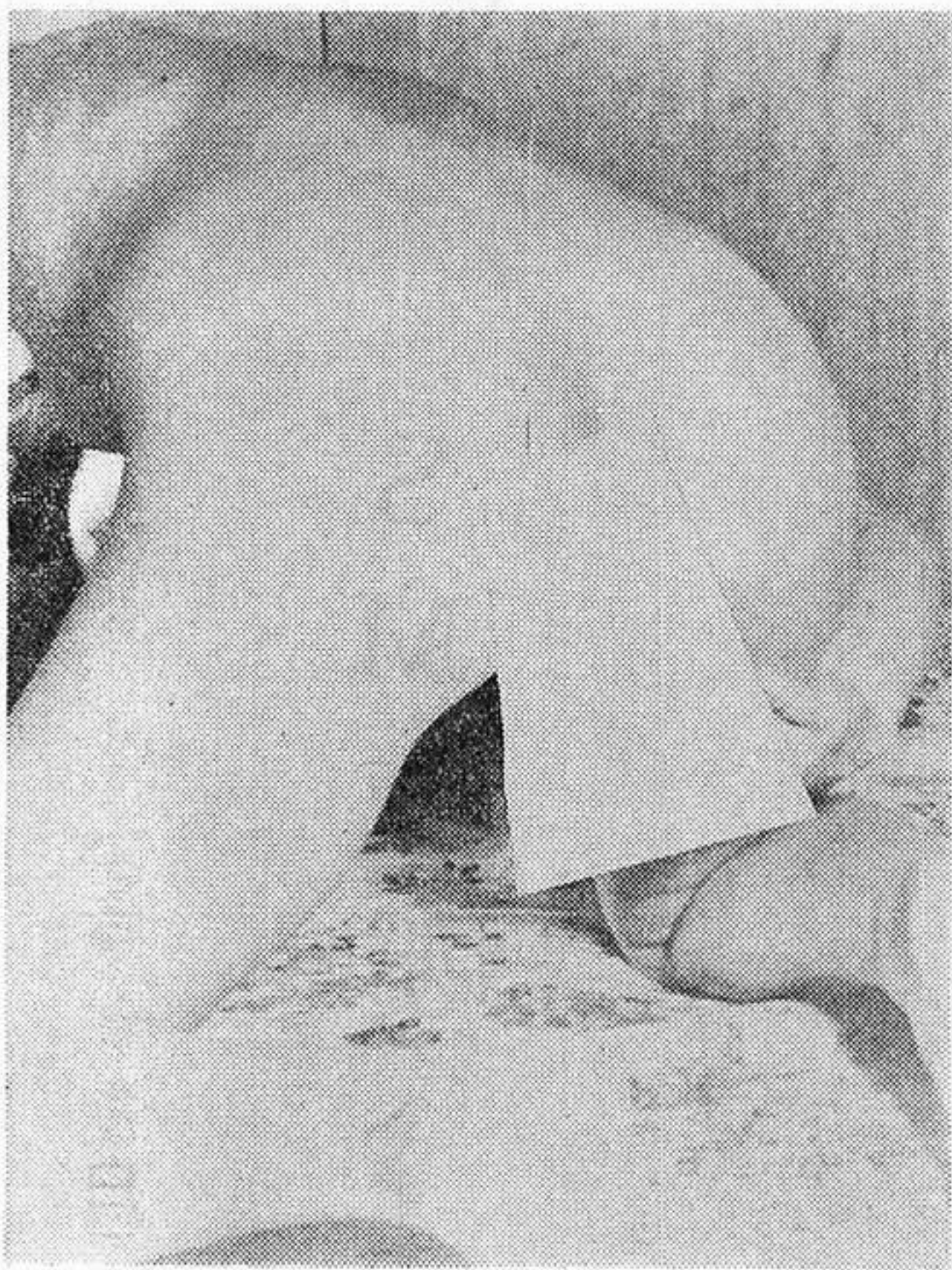
これだけあれば、旅先でも充分プレイが出来ると思います。

「クッキングカード」 その三

妻が彼の花嫁となる

宵のために

夫婦間で、緊縛プレイとか浣腸プレイが行われ、羞恥責めのさまざまな耽美の夜が持たれた時、それで終ることは先ずあり得ないでしょう。人妻の性は、それ程、単純なものとはいえないからです。乳房やその他に、異性の激しい



責めを受けたり、ペッティングを受けたとすれば、プレイ後の祭典として、その花嫁となる事を望みその人妻はプレイを通して結ばれた花嫁の夢を天下晴れて再現してみたくなるのは、当然のことでしょう。

男によって肌を染めた経験を持つ女性にとって、単純なるプレイだけに限定することの至難さは、男の場合よりも複雑です。それは女の性の叫声ともいえるからです。

娘を嫁入りさせる時、哀惜や動揺に包まれるのは女性よりも父親に多いと云われます。

本来、受動的な女性が能動的となり、受動的となって不安な精神傾斜や安定を欠くのはむしろ、送り出す側の父親にあります。妻にも増して、夫は心に多くのゆらぎを覚えるものなのです。

S Mに参加する夫が、誰よりもよく知っていて、且つ経験していることです。裸にされたからとて、妻の羞恥心が消えてしまう訳ではありませんが、S Mプレイの世界に於いてまた引き続き起り得るSEXの可能性の中で物事を帰納的に処理することが出来るのは、女性の特質ではないでしょうか。

△浮気▽とは云い切れない特殊な女の性の昂まりが、彼女を持ち上げてゆくのですから、夫としては、深い理解が必要です。夫婦間に招き入れた男女混合プレイには、妻を、その記念すべき宵の花嫁として送り出す愛の決断

が必要です。それを、そっと用意し準備してやる位のプレイマナーが欲しいものです。

独占することが、妻への愛であり、独占されることが愛していることの証しであった時代は過去の遺物であり、第三次元的世界の利口なエゴイズムであると思います。

プレイの前提は、男女が全裸となって官能の欲びの中に汗を流して声を放ち、あられない肢態を示し、秘泉にも旅人を迎え、全身至る処に、性的な陶醉を堪能することにあります。

愛人や夫婦以外に知らなかった官能の神秘を、ここで明らかにし、S Mの妙味を味覚し合った間柄には、血の流れよりも濃い関係となる訳です。

プレイ中のパートナーは、愛人や夫よりも深い情愛を分けあった離れ難い関係となって肉体を結びあうものですから、プレイメイトが、愛人や夫と同じ関係に入ったとしても、誰も非難すべきものでなく、豊かな人生経験を持ったことを、あなたは、欲び祝ってやらねばなりません。

それぞれが共有した妻の肉体に加えられるサジスチックなプレイに於いては、妻は今宵のヒロインであり、新しい花嫁なのです。

魅力ある新妻として生まれ替わる為のワンステップだと思えば、あなたは、胸が疼くような欲喜が身にしみるのを覚えませんか。

嬉しい様な、悲しい様な、妖しく慄える複雑な感情に襲われるでしょう。こうした微妙な心境に溺れてこそ、あなたは、その壁を越えた真実に満ちた△愛の夫▽なのです。

あなたの夫人が、花嫁から妻へと変身する欲びを共に分ちあえるのは、それは、あなたの特権です。良きパートナーを求めて、香り高い乳と蜜とを交換させましょう。

三人が三様の欲びの中に没入して、夢幻の悦楽の境を彷徨出来るでしょうし、あなたにとっても、今までに味わったことのない、痺れるような官能の疼きが、全身を狂わんばかりに悶えさせてくれるでしょう。

あなたも、あなたの夫人も、そして彼もがサジスチックな昂奮と、マゾの感覚とが、ダイナミックに交錯して揺れ動くのです。

第二と第三のカルテは、充分に目を通して置きましょう。さあ、準備が終ったなら、第四のカードを開いて、あなたの奥さんと呼び入れましょう。私達二人の花嫁であり、妻ともなるために登場して頂くのです。

「クッキングカード」 その四

花嫁、今は妻となりぬ

敢てプレイを△婚姻▽の式典になぞらえ、△懇淫▽の宵にたとえてみるのは、あなた自身を潔い決断に導き、その心の一隅を軽く擦らせる為です。

あなたは、あなたの妻が他の男性の前で、帯を解かれるとき、その肉体も心も、新妻が新夫に目見えると同じ様な状態にあるからです。血行は早くなり、鼻孔は開いて息は荒くなってゆくでしょう。姦淫のすすめ、懇淫の美しさを語るのは、この為でもあるのです。私達には、淫行は存在しないのです。献身的な愛があるだけです。

さて、プレイにのぞみ、あなたの夫人が、蠟人形の様に冷静で、無感動で、他の異性に最後のものを取り除かれ、肌を晒すとは思えないでしょう。きっと、妖しく血が騒ぎ燃え上っているに違いありません。頬には、ほんのりと血の気がのぼり、秘園には、しっとりとした湿いを帯び、人妻の肌が匂うのです。

あなたは昂ぶらないで下さい。あなたの世の中で一番大切な珠玉だからこそ、今、その珠玉が磨かれようとしているのです。磨かれる珠玉となる優しい心根の奥さんの、その純粹さを讃え励ましてあげて下さい。

あなたの手で、また彼の手によって、奥さんを、この世で最も美しい姿にしてあげましょう。それには、虚飾のしるしである衣服を彼の手によって、すべて取り除いて貰うのです。初めて妻になった日の様に、奥さんは、それを望んでいられるのですから。

それが終る頃、あなたは、あなたの奥さんの手を後手に縛って斜めに支え、奥さんの両

足を左右に大きく開かせ、彼に口うつしで、少々のビールを飲ませて貰います。これが誓いの儀式ともなるのです。ビールは催淫の効果と、これからの式典に必要な神酒を造り出す促進剤ともなるものなのです。



暫くして彼女が腰をくねらせ始めたら、神酒をグラスに満たさせます。この即席酒はSMの挙式には欠かせないものなのです。彼女の造った銘酒を飲んで交らぬ友情を誓い合ひましょう。

神酒での盃事が終わったら、あなたは縄一筋の花嫁衣裳をつけた素裸の奥さんを、彼の手にて委ねて、三十分、退室致しましょう。

あなたの妻は、大粒のダイヤにも勝る素晴らしい宝石です。彼が決して粗略にすることは無い筈です。これからのSMプレイの総ては一切、彼に任せましょう。

彼女もまた、安心して他人ではなくなる彼に、縛られた裸身を委ねた以上、もう、どのような羞かしい責めにあっても、耐えられるだけの覚悟は出来ている筈です。

あなたの心の中に、焦燥の焰が燃えさかっても、兎も角、三十分のタイムは彼に与えましょう。物音が聞え、どんな種類の奥さんの激しい泣き声がしても、それは、奥さんがSMプレイのルツボの中で燃え上っている歓喜の声か、或は感激のあまり、嬉し泣きしているのですから、深い理解を以て、胸をときめかしながら待っていきましょう。

「クッキングカード」 その五

花嫁の名を完うする為に

『SM愛』の前奏は、三十分というタイムリ

ミットによって、彼とあなたの奥さんとの間に、固い融和の絆が確かれました。

「見知らぬ人と、S M 愛のプレイを遂げるために」という題で作曲された前奏曲は、また彼とあなたの奥さんとが、二人で協奏された△艶舞曲▽でもあります。

一つの皮袋から、聖い酒を汲み交わした私達は、もう他人ではありません。女の神酒のとりなしに依って契られた友愛は、固いものです。一人の女のエキスを腹中に収めた二人の男の関係は、それぞれが複婚した関係ともいえるのです。

縄が肌に喰い入り、一切の身の自由は奪われていても、二人妻となった奥さんは、自ら生きた歓喜天ともなるのです。そして、二人の花婿に、一人の花嫁としてのS M 愛を誓うのです。

あなたは、自分の好きな紋章を誓紙に、肉体をベースとして、力強く泌み込ませるのです。

素敵な裸の美しいあなたの奥さんを、二人の花婿が羽毛で乳房を責め、次いで秘園を責めて式を進行させて行きます。舌で以て責め脇腹、腰、首筋を吸咬し、愛吸するのです。彼女は、嬉し涙と泣き声を挙げて、身をよじって悶え抜きます。

あなたは、きっと、こんな奥さんを見て、もう一度、惚れ直すこと請合いです。一人の

夫にかしづくよりも、ワイドなスリリングの関係の中に昇華する事こそ、現代にふさわしい生気に満ちたプレイ妻と、いえるのではないでしようか。

「クッキングカード」 その六

愛のプレイの食卓を飾る人妻

羞恥責めの終る頃、彼女が便意を催す場合があるでしよう。勿論、それがあっても、なくとも、結果は同じ事です。

自由を奪った彼女の臀部を、軽く鞭打つのもよいでしようが、可愛い菊座を訪れる嘴管で、内側を清掃してもよい頃です。

一人の夫が前から抱える様にして膝の中へ頭を埋めさせ、他の一人の夫が嘴管を押え乍ら五〇〇C C か一〇〇〇C の溶液を注入します。

排泄は明るい処でカメラの方へ尻を向け、赤児を捧げるようにして排泄させるのがよいでしよう。他の異性に抱かれ、やてれ乍ら顔をそむけ、正面向って排泄させられる人妻の姿は美しいと思います。

あなたは、奥さんに対して、一層いとしさが増してくるでしよう。明るい浴室で、或は明るい広間で、自分の意志とは関係なく、ゼリーを、そして時折、大きな塊を押し出す彼女。それをあなたは、アップでフォトに撮影するのです。

浣腸の行事が終ったら、彼女を解き放してやります。

縄がなくなり嘴管が消えたからといって、彼女の喜びが減るものではありません。それどころか、人妻である奥さんの真の喜びは、これから繰りひろげられるのです。

三個の肉体を一つにする誓いの祭典が、いよいよ始められます。上半身は戸籍上の夫に委ねて、下半身は新しい今宵の夫に預けて、愛の証しを語らせるのです。二人の夫への愛の宣言をした実践者として、心残りのない睦言を肉体で語り合うのです。

「クッキングカード」 その七

S M プレイのために

六つのカードを読まれましたら、それは、どなたでも、実行して欲しいものです。三人プレイが行われる合間には、一カップル宛のお楽しみプレイを、よくクッションの効いたベッドの上で行って、情愛を高めて貰いましょう。

美容と健康のために、S M という姦淫があってもよろしいでしよう。△S M 複婚▽は明日の力の源泉となるでしよう。

プレイの終った翌朝、射し込む朝日に恥じらう人妻を見るのも楽しいものです。

誌友の皆さんの為に、妻のある日のフォトを二枚、載せておきましょう。

加虐の美酒

はじめて味わった加虐の美酒は、百合子を夢幻の陶醉境に遊ばせることになった。

昂奮に彼女の全身は小刻みに慄え、依然として装置されたままになっているゴム袋が、異様な音色を奏で続けるのであった。

水上自転車（前回参照）を乗りつぶしてしまった有明と百合子は、火照った身体を冷やそうとして、どちらからともなく透明な華清池に飛び込んで、たわむれ合うのだった。

水中照明が眩しい程、見事な百合子の裸身を照らして、いやが上にも有明を楽しませてくれる。はじめて触れる百合子の肉体はピチピチして新鮮だった。

疲れると島にあがる。自由に調節出来る赤外線太陽灯が、濡れた肌を快く乾かしてくれた。すぐそばに、息も絶え絶えのペルラと豪州娘が、自由な百合子を羨ましそうに眺めていたけれども、その力のない目には、もう一カケラの反抗心もなくなってしまっていた。

床に敷いた厚いタオルケットの上を、百合



第六十二回

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その機質に応じて五段七階級に分類され、巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。ミス・フィリップにえらばれた美女ペルラも今は一匹のサカナでしかない。貴妃となるべき山本百合子を水に沈めようとしたところで、罰するに価しない程の存在となった。それよりも水上自転車の動力となった彼女は、逆に百合子に、しぼり抜かれて失神に追いやられてしまう。

子の真っ白な裸身が、小猫のように躍った。赤い禪の色が、チラチラと血が流れているように見える。

巾の狭い布切れは実際のところ肌をかくす効果を、果さなくなってしまうたのである。運動の間に、それは真中に寄って一本の紐状に交っていた。

苦笑しながら有明は、

「もう脱っても、いいぜ」

と、手をのばす。

「いやッ。いやですっ」

くすぐったそうに身をくねらす百合子にはもう遠慮したような翳りは消えて、屈託なさそうな笑い声が耳に楽しかった。

「ホホホホ、いやですわ。自分で、とらしてください」

くるくるっと寝返って逃れる。逃げながら腰のうしろに手を廻し、ひねって押し込んであった禪の端を引き出した。封印の日本紙がプツンと千切れた。

「おっと、そいつは自分で引っぱっちゃいけない。切れてしまう」

「いや、いやです。はずかしい」

両手で顔をかくしながら、それでも膝は自分で開いて、有明に一切を委そうとする風情

だった。

とに角、百合子は有明の前に一糸まとわぬ裸身を曝したことになる。禪の痕だけが、うす赤く充血していた。

ねころびながら有明は嬉しそうに見廻す。

「立ってごらん。右足を少し前に出して、そうそう。一寸、爪先立ちになるんだ。手を頭の後で組むんだ。少し上を向いて……」

などという有明の言いつけ通り、ポーズを作って見せる百合子だった。有明が宝物のようにするだけあって、シミ一つない白磁の肌は、少しの無駄もない曲面を構成して微妙な艶めかしさを創造する。

突然、その彫刻のような固さが、くずれ落ちた。おどろいて起き直った有明の前に百合子は、ひれ伏して叫んだ。

「お願いします。どうぞ、どうぞ、わたくしを抱いて下さい。わたくしは、なにかも貴方に、さしあげます。ですから、ですから、わたくしを、お抱きになって下さい。そしてわたくしを可愛がって下さい」

いけにえは遂に蟻地獄のドン底に自分自身を投げ出してしまった。あとは鋭い刃のひと突きだけであった。いけにえは、それを甘ん

じて受けるであろう。

有明が言う。

「君の気持は、よくわかった。私も君が好きだ。君は私の手で奪った宝物の一つだ。しかし、その前にまず、この国の人に、なり切ってもらいたいと思う」

「なります。ならせて下さい。どんなことでも、いたします」

必死に百合子が叫んだ。

「この国の人になるには、いろいろな、おきてがある。試練がある。地上的な善悪の観念は捨て去って貰わなければならぬ。私に対する愛と服従以外の一切の絆は断ち切ってしまうなければならぬ。それが出来るかね」

涙を一ぱい、たたえた目が、うらめしそうに有明を見上げた。

「わかりません。どうしたらいいのですか。教えて下されば私はどんなことでも一生懸命いたします」

「むずかしいことだよ」

「どんなに、むずかしくっても……それは、それは貴和さまだって、エミーさまだって、なさったことではないでしょうか」

「それはそうだ」

「だったら、どうして、わたくしに出来ないとおっしゃるんですか」

百合子は、駄々をこねるように身をもんでうったえるのだった。

屈服した瞬間から百合子の苦しみが始まったといつてよいかも知れない。

いつ奪われるか、いつ奪れるかと怖れ戦っていた時の方が受身でいられるだけ、まだしも救いがあった。

今はどうしたら有明の気に入るだろうかと焦慮していなければならぬ。有明に、いのように焦らせられるしかないのである。

再び茶室に戻って、キチンと和服を着けさせられ、さて、もう一服をと言われたとき、あれ程、好きでたまらなかつた茶道の手順が何とも言えない、まどろっかしいものになつてしまったということを知った。

しかし、有明が点前を求めれば快く応じなければならぬ。何の保証もなく、確かな根拠もなく、有明に一切を捧げようとしている現在、少しでも有明の機嫌を、そこなわないうように奉仕する以外は何も思いつかない百合子だった。

そうした百合子の様子を注意深く観察して

いた有明が、ポツンと言った。

「一度、東京へ帰らせてやろう」

「え？」

思わず茶筌が停った。

「東京ですか」

「うん。ご両親にも会わせてあげる」

不意に、過去が爆発したように蘇ってきた。意識の片隅に押しつぶしていた感情が堰を切ったように溢れ出してくる。懐かしくないといえばウソになる。恋しくないのでは人間ではあるまい。数カ月間、凍結したように諦め切っていただけに、思わず心臓の鼓動が激しくなるのを、どうすることも出来なかつた。

——そんな筈はない。これは畏だ。

ふと、そんな不吉な思いが彼女の念頭を過ぎった。

たしかに有明の幾分かを知り得た今、百合子には彼の底知れない怖ろしさが朧気ながらわかり始めていた。そして彼が、その女達を自由に翻弄する数知れないテクニックを（それはホンの一部分にしか過ぎなかつたのだけれど）、多少は見聞して来ていた。

東京へ連れて行ってやろう。——そんな餌

で、彼女の心を試そうとしているのではないだろうか。

百合子の判断は当らずといえども遠くはなかった。すくなくとも、簡単にひっかからなかったことだけは良いことだった。

「もう結構ですわ。東京なんか行きたくもございませぬ。わたくしはマスターのおそばに置いていただくことが一番幸せなんです」
こんなことがスラスラと口をついて出てしまふ。言ってしまったって、忽ち後悔する。矢張り、東京へ行きたい。

有明には、小娘の内心の動揺など手に取るように、わかつていた。

「それは有難う。私も嬉しいよ。でも、君の決心が本物かどうか、自分で試してみることだ。東京へ行つて、お父さんお母さんを見てそれでも君が、ここに帰りたいというのだったら、そのとき、改めて私は君を貴妃としてこの国に迎えてあげよう」

翌朝、新しいG号作戦が発令されたことは東館で平常の日課に戻った百合子には知らされることもなかった。しかし、命令に基づいて諸般の準備が忙しく展開して行った。

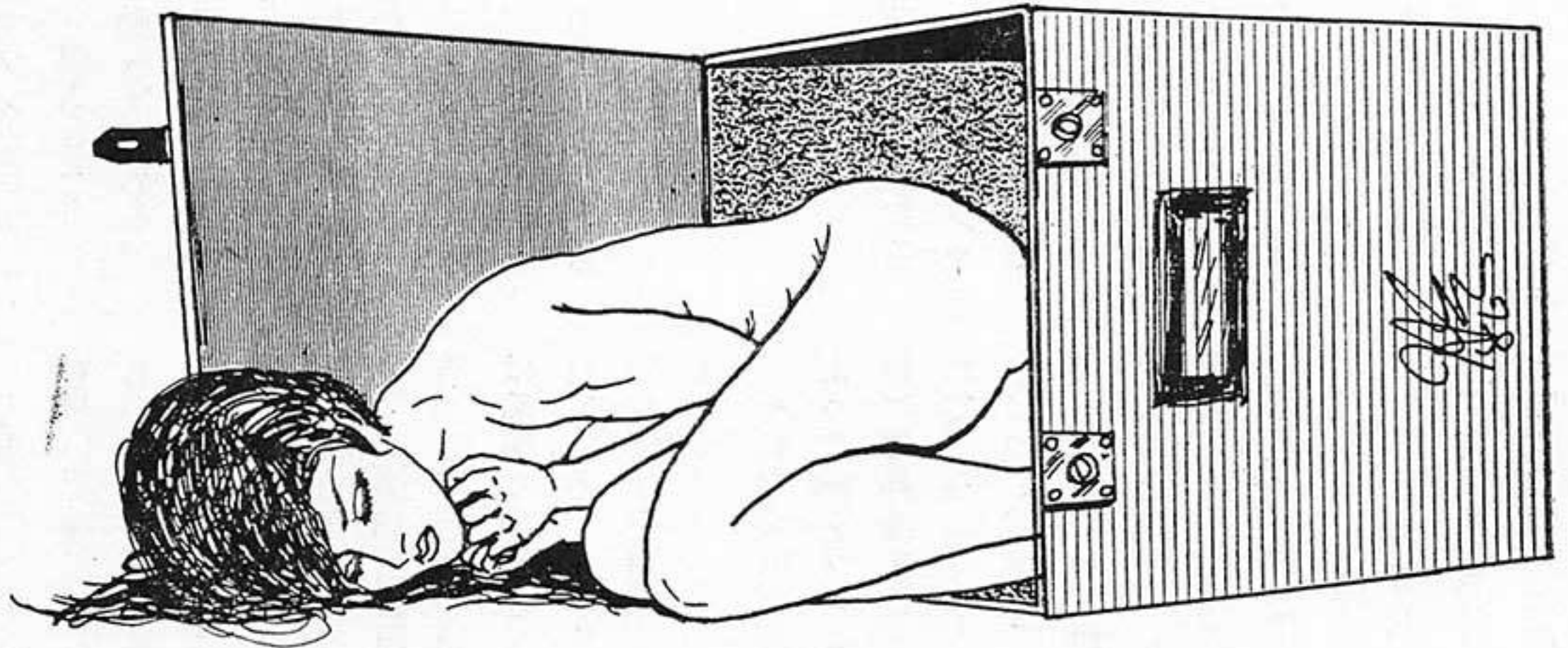
例によって原子力潜水艦ネプチューン号の

指揮は星エミー司令に委ねられた。彼女の統率下に、選り抜かれた将校団が編成され配属を終ったのは、それでも発令後、約一週間の後のことであった。

F号作戦で杉本美知子元中尉の脱走という不祥事件が起っただけに、今回の将校団は余計、嚴重に審査されたのである。

そうでなくとも、O(ゼロ)号生存刑に処せられて次第に自分の肉体を切り刻まれて行く杉本美知子の姿は、見せしめとしては強烈な印象を全員にあたえていたから、間違っても作戦中に脱走しようなどと考えて者は皆無だった、と言つてよいであろう。

余談になるが、新津謙介(国際捜査官)に右の乳首を噛みとられた杉本は、その時、新津の胤を宿すること



になつてしまった。このことが判明したとき、彼女に対する刑の執行はその時点で凍結されることになり、新津との子が生れるまで痛い目に遭わなくて済むという束の間の幸せを与えられた。しかし、胴体だけの姿で、妊娠するという苦痛は、また、肉体を切り刻まれる以上の、苦難であつたろう。

丁度、十日目に有明が迎えに来た。

百合子には、もう全裸になることをためらう理由がなかったし、有明も同じであつた。

二人は生れたままの姿で華清池からゴンドラに乗った。

ペルラとオーストラリア娘の二人は、華清池に

連絡しているマスター専用の漕ぎ女調教所に送られ、そこで飼育されると共に、何時でもマスターその他の用を足せるように待機することになったから、例のコンクリートの小島には誰も、いなかったのである。

ゴンドラは例によって水門を降りて「海」に出る。今日は命令がないので、あの双胴船は、ひっそりとして人の気配もなく、大きく吃水線をあげて浮んでいた。

海の一隅には、アマゾン訓練連隊の船着場があつて、そこに荷車を用意して数名の女兵たちが待っていた。そして、そのすぐ側に輝くばかりの黄金の馬具に飾られた有明の専用戦車が控えていた。二頭曳きは、いわずと知れた「名馬」E・一四三号(かつての尼僧アン・ブラウン)とF・五五四号(アメリカの富豪令嬢)の二匹だった。

「これからポートエリアに出る道は、君に教えるわけには行かない。すまないが少し眠つて貰おうか」

アツという間もなく注射針が突き立てられた。たちまち、くずおれてしまう百合子を、荷車にのせてきた木の函に詰めた。あらかじめ彼女の寸法に合わせてこしらえた特製の棺桶だったのである。

早桶を荷台に縛りつけたアマゾン女兵が、人間馬の手綱をとってピシリと鳴らせた。

ギイギイと音がして荷車が動きはじめた。

パレスエリアからポートエリアに現役の女性を出す場合は、つねにこうした手順がふまれるのである。秘密のリフトは余人を入れず有明だけの手によって操作される。

荷車が着いたところは、リフトに続くコンベアー・プラットフォームで、すでにその上には同行するアマゾン将校たちを詰めた多数の木函が整然と並んでいた。

人 位 式

時間的には数日前にさかのぼることになるが、G号作戦を発動するに当って有明はジャンヌこと、小林敏子を同行させようと思っていた。

アマゾン女兵の下士官は、この国の五段七階級にあてはめると銅のクラス、婢位に属する。見習士官といえども、任官しない以上は下士官ではない。

ネプチューンに乗組みを許されるのは特科部隊と呼ばれる将校団だから、ジャンヌを少尉に任官させる必要があった。

人事を担当する予備要員の中から、余りにも早い昇進に対し若干の危惧を上申して来たものの、有明の意向は絶対だった。

定時の異動とは別に、特にジャンヌのための人位式が発令された。

佐瀬直美の親授式を想い出していただいた。(第43回参照) 彼女は一人のスラヴ女を屠って、若紫の局となった。スラヴ女の鞞皮は美事な幢幡となって今も若紫中隊に奉持されている。この秘儀には、高官が始めて有明のお情けを頂戴したことを記念する意味が含まれる。

それならば、現在ジャンヌが直面しているような銅クラス(奴・婢)から銀クラス(人位)に昇進するときは、どんな儀式が用意されているのだろうか。実際、この国では人位となつて、始めて(それは極めて外観的ではあるとしても)地上的な意味における人格とか人権とかいうものが認められるので、初お目見えの「断根式」と「親授式」の中間に位置する重要儀式として、この三つを総称して、「三断儀」と呼びならわしている。

そして「人位式」と呼ばれるこの儀式だけは、文官用と武官用の二種に分れる。したがって、文官用は次の機会にゆずることとして

今回はジャンヌを追って武官用人位式を紹介することにしたい。

さて、若紫中隊騎兵小隊に配属された肉体番号F―七五三、俗名小林敏子は、姉のカタキ、憎むべき林美玉に復讐を遂げて以来、あの和製ジャンヌといわれた男まさりの激しい言動がほとんど影をひそめ、めっきり女らしくなったという評判だった。

その復讐というのにも、実はカラクリがあったのである。林美玉の手によって賜り殺しにされたのは、前述(第21回)の通り、ジャンヌの姉に化けた野沢洋子だった。ジャンヌは姉が殺された現場を知らない。知っているのは姉が黒コゲの死体で収容されたことである。一方、林美玉はジャンヌの本当の姉を知らないから、自分がジャンヌの姉を殺した下手人であると自認している。もともと、野沢洋子と小林敏子は非常によく似ていたから、野沢洋子を誘拐するとき、身替り死体とされたのがジャンヌの姉、小林敏子の最期の真相だったのである。その意味で、ジャンヌの本当の仇(カタキ)は有明、その人だったのであるが、このことは有明が白状しない限り、誰も知らない。

ともあれ、そんなこととは露知らず、ジャンヌは東京にいるときから有明の情を受け、入国したとき、すでに「お手付き」だったのである。だが、有明は何故か山本百合子のように一足とびに宮殿に入れる一等扱いとせず、通常のレセプション手続きをとらせた。

それでも、ジャンヌの昇進は異例のことでとうとう二カ月余りで、人々のうらやましが人位式を命じられることになった。

有明が、彼女の前にまた一步、近づいてくれる。事実、将校（人位官）になれば王宮に入る事が出来たし、また願い出てマスターに面会することも許されるからである。

ジャンヌは胸をはずまして、その朗報を聞いた。その欲びに比べれば、式るとき、やらなければならぬ陰惨な勤めさえ、少しも苦にならなかったのである。

普通、人位式の授与は、その所属する部署の長が有明に代って行うことになっていたがジャンヌの場合は、特に有明が臨席することになった。

「三断儀」は犠牲（いけにえ）を必要としている。すでに記したごとく初の断根式では男

奴のものを切除し、それを灰にして踏みにじることにより、有明以外の男を「断」つ決意を表明した。中の儀式である人位式では男奴一匹を屠殺して、その心臓を焼いて喰べなければならぬ。つまり、人位式では、その者が最早、不可逆的に地上の道徳や法律の外に出てしまったことを証拠づけるのである。言いかえれば人位以上の女たちは自由の代償に地上的な魂を放棄した者であり、地上の尺度では一人残らず殺人者であり、背徳者であることになる。

この想像を絶した異常体験は、経験した者をして完全な諦めを持たせ、この国の法律にしたがって有明にのみ、奉仕することを生涯かけて覚悟させるといふ点で、大きな効果をあげていたし、實際上、このような荒療治は必要で止むを得ないことと判断されていた。

その日、会場となった練兵場には文武の高官たちが夫々の格式にしたがって、あるいは轎、あるいは戦車に乗って集まってきた。有明が臨席をするというので、ほとんど有資格者全員が参加することになった。

訓練連隊は全員、また、高官に供奉する従者等も見学を許されるから、その数は凡そ五

百名を越える規模になる。

正面、大理石に黄金の装飾を施した玉座はこれも金刺繍で彩った真紅の天蓋で蔽われ、物位女囚、六人の裸身で組んだ第四種椅子が二座、しつらえてある。

寛衣^{トガ}を卷いた有明と大后貴和が最後に入場すると、高らかに喇叭が鳴りひびき全員が開股跪坐の礼を捧げるなかを、二人は玉座にあがって、人肌の椅子に静かに腰をおろした。有明が一寸、右手をあげると、ザワザワと人波が揺れ、皆がグラウンドの方へ向き直った。玉座の右手は文官、左手は武官が夫々、玉座に近い方から階級にしたがって居並ぶのである。

再び喇叭の音が響くと、玉座と相対する正面の扉が開いて、はやてのような速度で一団のアマゾン騎兵が入場してきた。

旗手が奉持する人皮幢幡は正しく若紫のものであった。

若紫騎兵小隊は小川晶子小隊長指揮の下、齊々と行進して玉座の直下に来ると一度に白い背中の上に立って、その位置で開股跪坐の礼式を行う。

有明が、自分の右手に飾ってあった薔薇の

一輪を抜いて、さっと投げると、小川少尉が巧みにそれを受けとった。かつて少佐だったのに部下の杉本美知子中尉脱走事件の責任を問われ少尉に降等されてしまった。それだけに新任の少尉とは違うキャリアがあった。

小川小隊長は軍馬（大柄な北欧娘は地上にあってはスエーデン王家の血をひく貴族で、陸上選手としても知られていた身が、今はその身分も権威も無視され、一匹の軍用畜として調教飼養されているのだが）それを巧みに操って玉座に向って右手の文官席の方へ移動して行く。

有明の隣、貴和から始まってサラから数名のお手付上臈が居並ぶ末に新しい若紫の局が坐っていた。小川小隊長は、その前に進んで、有明から、いただいた薔薇一輪を捧げる。再び喇叭。

小川少尉をはじめ全員が四方へ散ると、若紫幢簾を奉持した一騎がポツンと残った。奉持するのは勿論ジャンヌだった。

少し脚が太いという難点はあるが、それだけに逞しさを感じさせる真白なカナダ娘の脊に、またがっている。

衆人環視の中をジャンヌは少しも悪びれずに静かに若紫のいる機敷下に進み、ヒラリと馬の脊から降り立つ。そこにあらかじめ用意してあった旗立てに幢簾を立てる。

スラヴ女の黥された生皮を剥がして鞣したことは、前に述べた。（第44回）それが、かつて脊中であつたところを中心として、手足が飾り房のように垂れ下がっている。中央に大きな字で位記が記され、一段下った臀の位置に有明のイニシアルが彫られてあつた。その位置にジャンヌはそっと口づけをする。

正面に向って左側の不浄口が、急に騒々しくなった。何度となく鞭の音が不気味に聞える。そして、アマゾン騎兵たちに追い出されてきたのは一匹の男奴だった。

頭部だけヘルメットのように金属で蔽われている他は全裸で、去勢された痕も丸出しである。

男奴は奇妙なカケ声を出しながら懸命に走った。白人らしく上脊もあり、堅くひき締まった筋肉は躍動に



よってクッキリと浮き出して見える。女体には見られない荒々しい美しさが、そこにあった。

たちまち、ジャンヌが愛馬にまたがったかと思うと、まっしぐらに、その男奴を追いはじめた。

すべて脳手術をされている男奴には情緒感情はない。しかし、動物的感情は残っているし、また憶病なほど、危険に敏感だった。したがって、反抗することなど思いもよらなかったし、諦めて従容として死に臨むという意志力も残されていない。彼に出来ることといえば、追われるニワトリのように鳴きながら逃げ廻ることしか、なかったのである。

しかも、それは馬鹿力を地でゆくようなものだったから、さしにも鍛え抜いたジャンヌの馬、カナダ娘にしても追いつくのが容易ではなかった。カナダ娘はプリプリした尻を宙に打ち振るようにして走る。尻尾として小さな金属球に結びつけられた赤い頭髮カモジが風ではたいて、それが女体というより本物の馬の尻尾であるように錯覚された。

しかし、徐々に優劣がハッキリしてきた。何といっても激しい調教の成果といえようか

ジャンヌの馬は確実に男奴をとらえた。

アッという間の出来事だった。

鮮血が霧のように飛び散る。男奴は、もんどりうって倒れた。

馬から降りたジャンヌが、たちまち男奴の胸を割って、その心臓を握み出した。

玉座の前に炉が設けられた。

鉄串に刺した男奴の心臓が焼かれる。

ジャンヌは不快感を辛うじて耐えていた。

有明への尊敬と愛がなかったら、到底、我慢出来る作業ではなかった。

ゲーツとなりそうなのを必死におさえて、噛みも出来ずに小片を呑み込んでしまう。

何としても罪深い異常な行為だと思ふ反面人間の長い歴史の間に、全然なかったことではないと、辛うじて自分自身を説き伏せる、ジャンヌだった。

そんな内心の葛藤とは裏腹に、彼女の健康な舌は、食道は、そして胃の腑は、むしろ熱く焼けたレバーを、おいしいものとして受け容れてしまったのであった。

ふと気がつく、一切のオドロオドロしいものは跡かたもなく始末され、代りに撒き散らされた様々の花びらが、香わしい薫りを、

はなつて芝生を彩っていた。

革の制服、階級を示す髪飾り、その他、身につけたもの一切を、とり去って、文字通り全裸となって芝生に平伏しているジャンヌの前に、訓練連隊長伊藤香織が立った。

「F―七五三号」

伊藤大佐が、おごそかにジャンヌの肉体番号を呼んだ。

「はいっ」

平伏したまま、ジャンヌが答えた。

「おまえは、マスターのおめぐみにより人位に昇ることを許された。これを有難くお受けするか」

「はいっ。有難くお受けいたします」

「よろしい。起立して、開股跪坐せよ。そして改めて三誓願を申し上げるがいい」

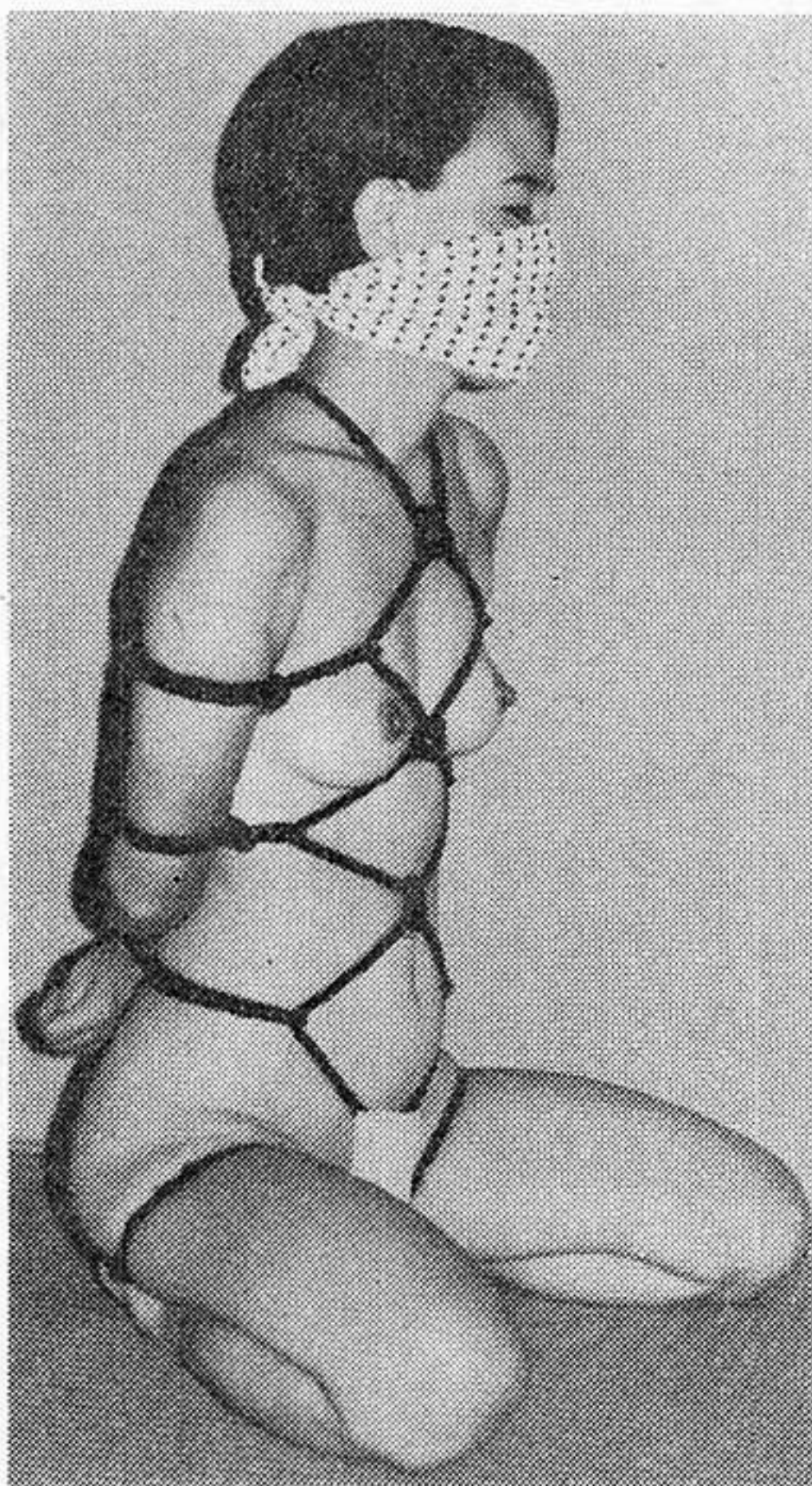
ジャンヌは言われた通りにした。毎日、唱えている誓願なのに、感激の余り、声がつまってしまった。場内はシーンとなって、ジャンヌの声に聞き入っていた。

長いことジャンヌの首、手首、足首の五カ所になじんできた鉄輪が鉄挺とヤットコで壊されて落ちた。代りに細い紙銀製の輪が形式的に巻きつけられた。これで人位式は終る。

——(未完)——

須坂旭氏のイメージ画に寄せて……

梨花のゆくえ 城 章 夫



た緊縛女人像（ことしの三月号に掲載された拙稿『ひとり都の夕暮に』のなかの那津子の立像に、ヒントを得て描かれたようだ）に、那津子の面容が、なんと見事にとらえられていることか！むしろ、現実の那津子より、さらに美しく、さらに可憐に理想化されてさえいるようだ。

ぼくは、この那津子の絵姿に、飽くことなく眺め入った。明るい水平線のかたには、夏の雲が、むくむくと、わきあがり、海は単調な波の唄を日がな一日、繰り返している。その海への砂の上に、後ろ手、股間縛りのきびしい縄目をうけながら、涼やかな瞳を、みひらいて、ひっそりと立つ那津子。

その裸身を飾るのは、いみじくも白い梨花だ。詩趣にあふれた須坂氏の画筆は、うつつには、あり得べからざる夢幻の空間を、小さな紙のうえに創りだされた。

それにしても、黒く陽焼けした背中を見せて、向うへ歩み去ろうとしている男は、いったい誰だろう。ことによると、それは須坂氏その人なのかもしれない。

那津子を捕えて丸裸にし、後ろ手に縛りあげ、その裸身に梨花の花を供えたまま、いま大股に遠ざかってゆくその男に、ぼくは激しい嫉妬を覚えずにはいられなかった。

おとしから昨年にかけて、ぼくが那津子をモデルとしての緊縛写真撮影記を書き綴り

本誌九月号を手にして何気なくパラパラと頁を繰っていた、ぼくの目に、突如、ひと筋の光の箭のように、つきささったものがあった。それは、五一頁に載せられた須坂旭氏の絵であった。『那津子供花』と題されたその絵から、ぼくは、しばらくのあいだ目を離すことができないでいた。

春風に吹かれて散りゆく梨花のように、

って、いつとはなしに薄められ、弱められつつあった今日のごろ。当事者のぼくでさえもが、そのようにして那津子の記憶を忘却の淵へと徐々に追いやりつつあるというのに、いまなお、那津子を記憶にとどめていて、その面影を、絵に書きとめてくれる人があろうとは。

しかも、須坂氏の麗筆によって描きだされ

本誌に発表させていただいた時分、ぼくは、ぼくのルポと那津子の写真に関心を示し感想を寄せてくれる読者が、余りにも少ないことを、しばしば嘆いたものだった。本誌のように筆者と読者とが特別な連帯感で結ばれているところでは読者諸賢は、もっと活潑にぼくの作品を取りあげてくれないのではなかないかと、自分の作品の拙さを棚にあげてハツ当りしたことさえあったくらいだ。

わずかに長田二郎氏が兩三度、好意にみちた懇切な印象記を寄せられ、たしか室井亜砂路氏だったと思うが、いちど、那津子の面ざしを氏独特の幽幻な絵のなかに定着して下さったことがあったくらいだった。

それが今になって——那津子がこの世を去って一年以上もたった今になって、なおも那津子のことを深く心に留めていてくださる人があったことを知り、ぼくがどれほど驚き、且つ喜んだことか。

しかし、それと同時に須坂氏は、ふさがりかけたぼくの心の傷を、また開いてしまわれた。いや、というよりも、一見ふさがりかけたと思われたその傷が、実はいっこうに癒えてはおらず、かえって内にむかって深く深くぼくの心を蝕みつづけていたことを、今更のように気づかせてくれたのだった。

それにしても、ぼくが那津子に縄を掛けるようになったのは、いったい、いつの頃、ど

のようにしてであっただろうか。それはそんなに昔のことではないのに妙に記憶が、ぼやけてしまっている。ぼくと那津子が、いっしょに夜を過ごす時、そこには、いつも縄と猿轡があり、それらなしには、ぼくら二人の仲を考えることもできないような気さえする。

ただ、これはあくまでも、ひとつの戯れなのだよ、といいながら、ぼくが初めて那津子を縛ったとき（いまも書いたように、それがいつ、どこであったか定かではないのだが）那津子は極めて素直にそれを受け入れ、何の反抗も示さなかったことだけは、ハッキリと記憶に残っている。それは生来、那津子がマゾヒストであったということなのだろうか。それとも、ぼくを信頼し愛していたが故に、ぼくの好みに合わせて、ぼくの言うがままになったということなのだろうか。いまとなつては、それを問いたす由もないが、多少その気はあったとは言えそうな気がする。

かなり強く縛っても、あまり文句をいわなかったし、緊縛には猿轡が伴わなくてはならないという、ぼくの持論にしたがって、口にぎゅうぎゅうハンカチを押し込んで、長いあいだ猿轡をしておいても「ハンカチに唾が、すっかり吸われて、口の中がカラカラになっちゃったわ」などと、こぼしはするものの、猿轡それ自体を、いやがることもなかった。そんな那津子だけれども、ひとつだけ厭が

ったことがあった。それは剃毛である。初めのころ、一度だけツルツルに剃りあげたことがあったが、しばらくして伸びはじめると、チクチクして、痛くて気持がわるいわといって、剃毛を拒否した。一方ぼくにしても、剃りあげたあとが妙に赤黒く（男のひげ剃りあとは青々とするのに、どうしてあんな変な色になるのだろうか？ それとも、あれは那津子だけの特殊な現象なのだろうか？）どう見ても美しいとはいえなかった。それで、那津子の厭がるのを押してまで、もう一度、剃毛しようなどという気はおこらなかった。ぼくにとつて、緊縛写真の一切の基底にあるのは、常に『美』の観点であったのだから。

そういう立場にたって、那津子の裸身をモデルに、ああもしてみたい、こうもやってみようと、さまざまアイデアを練っていたのだが——。

いや、死児の齢いを数えることは、もう止めよう。折角、那津子を記憶のすみにとめて美しい絵を仕上げて下さった須坂氏には申し訳ないような気もするが、ぼくは那津子の想い出を、さっぱりと、切り捨てることにしよう。後ろを顧ることはやめて前方にだけ目を注ぐことにしよう。那津子にかわる、那津子にまさるモデルが、いつかは、ぼくの前にあらわれるであろうことを信じながら——。

カット・マエダヒオミ



「ようし三号。一号のやった通り、始めろ！」

珠子は一瞬、ぽかんとした表情をした。自分が三号と呼ばれた事すら、まだピンとこないのである。ましてや今日限り、自分がこの目の前にいる三人の男達に、本物の奴隷として調教されるのだとは考えてもいなかった。一号と同じように、パンティとブラジャーだけで、首輪に後ろ手錠をつられた姿で、ひざまずかされ、一号のした通り、三人の男の靴に唇を這わすなどということは、そう簡単にできなかった。

「このアマッ！ なめるな！」

激しい怒声とともに、ピノキオの鞭が珠子の背に鳴った。

「いいっ！ やめて！ そんな約束じゃないわ」

「やかましい！ くらえ！」

創 作

S M 企 業

第三話・奴隷三号の誕生

秋 津 新 次 郎

たて続けにピノキオの鞭が炸裂した。

「ヒイッ！ ぐうっ、いや！ ヒエッ」

珠子の脳裡は完全に混乱した。息もつかせず浴びせられる鞭の痛みは、もうSMプレーへの期待も何もなく、本能のままに鞭をさけようと、ころげまわった。

「一号！ もう一度、見本を見せてやれ」

覆面の下から修一の声がする。一号は素早い動作で修一の靴に唇を這わすと、ピノキオとボロ武にも、同じようにしてまわった。

「ようし、三号、もう、わかっただろう。やれ！」

後ろ手錠でこらった身体は、なかなか起き上がれない。業をにやしたピノキオは珠子の髪の毛をつかむと、強引に自分の靴へ珠子の唇を押しつけた。つづいてボロ武の靴が差し出される。

「早くせんか！」

珠子は、もう何も考えてはいなかった。自分でも気がつかないうちに、三人の靴に口づけをしてまわっていた。鞭の痛みが思考力を奪い、本能のままに身をかばって行動してしまっていた。

「一号！ 明日までに三号に礼儀作法を、教えておけ。いいな、これは命令だぞ。もし明日になっても三号が今日のままだったら、その時にはお前が、その身体で罪をつぐなうのだ。わかったか！」

「はい、ご主人様」

一号は床に正座したままで、ひたいをつけて深々と頭を下げた。

「ようし、三号。あそこを覚えてみる」

修一は電気鞭をかざすと、天井の片隅をさした。

「あれはマイクロホンだ。ここでの話は、みんな筒抜けになっている。どうすれば従順な奴隷になれるかということ以外、無駄話は、するな。身の上話や、ここから逃げ出そうなどということ話を話してみろ。この鞭の洗礼をうけることになる。よく覚えておけ！」

修一の電気鞭が、珠子のブラジャーの間へ、さし込まれた。

「ヒエッ！ ぐうっ！ ギエッ！」

不意をつかれた珠子は、凄まじい叫び声をあげ、転倒した。珠子のパンティに、みるみるうちに変化が現れた。あまりの衝撃に思わず失禁したのである。一号は、まるで自分にその鞭が当てられたようにビクンと身を慄わせた。もう何度か電気鞭の凄まじさを知っているだけに、激しい恐怖で身を慄わせながら身を固くした。

「一号、向こうを向け」

ビクンと身を慄わせながら一号は、後ろ手錠の姿を三人の男にさらした。首に高く吊り上げられた両腕に男の手がかかったかと思う

と、鍵を開く音がして、手錠がゴトリと床へ落ちた。

「今日一日、自由にしてやる。有難く思え」

「ありがとうございます、御主人様」

思わず本気でお礼の言葉が口について出てきた。気がつくとも両手を床の上に這わせて土下座をしてしまっていた。逆らえば、すぐとんでくる乗馬鞭と、脳髓を狂わすような電気鞭の苦痛から逃れるために、出来る限り従順にふるまって来たものの、心から服従を誓っていた訳では毛頭ない。だが、久しぶりに後ろ手錠をはずされた喜びは、思わずお礼の言葉を口にせずにはいられなかった。そんな自分が哀れで情なく、奴隷一号の洋子の目から、はらはらと涙が、したたり落ちた。

×

「あら、早かったのね」

×

思いがけなく早く帰ってきた修一に美紀は悦びの声をあげた。ひよっとしたら今夜は帰って来ないのではないかと、地下室でくりひろげられているであろう激しい調教を考えて嫉妬のほのおを燃やしていた美紀は、武者ぶりつくように修一に抱きついた。

「ねえ、どうだった、珠子」

「バカ！ 何度、言ったら解るんだ。名前を呼ぶんじゃないと、あれほど言っているじゃねえか」

「ごめんなさい。ね、どうだった三号。何とか、ものになりそう」
「そうだな、まだ何とも言えねえな。取り敢えず明日もう一度、行ってみる。一号によく仕込むように言っといたんだが、明日のようす次第でピノキオに調教さすか、ボロ武にさすか、それとも俺自身でするかを決める。おい、それより用意しろ。今日は、こっそり、

かわいがってやるからな。覚悟しろよ……」

修一は何かまた、新しい責め手を考えついたらしい。美紀は、いそいそと自分を拘束するためのロープや革の拘束衣を取り出すと、期待に胸をときめかしながら、うなじを染めた。

三号の調教はピノキオに一任することにした。ピノキオの調教ぶりは初期の調教にうってつけのようだった。大森組のチンピラだったときはうって変って、一号と三号に対しては修一も舌をまくほど威高気に君臨した。元々性格的にも強度なサド性を秘めており、女をいためつける事で心理的な快感を覚えるたちらしく、容赦なく鞭をとばした。一号はそのお蔭で、まだ二カ月に満たないのに従順な奴隷と化した。だがピノキオは、そんな一号に対しても、気が向くと鞭をふるった。

「兄貴。ピノキオの野郎、どうも少し、やりすぎるんじゃないかと思うんですが……」

とボロ武がこぼすのを聞いた修一は、一号の管理をピノキオからボロ武に移した。

「ピノキオ！ おめえの役目は忠実な奴隷を作る事だ。いいか、これは仕事なんだぞ！ おれは、おめえを楽しめますために、こんなことをはじめたんじゃねえんだ。自分が楽しみたかったら、トルコへ行くなり飛田^{ビタ}へ行くなり、好きなようにやれ。女はこれからの大事な商品だ。勝手なまねをしやがると、承知しねえぞ」

ドスの利いた声で修一に、にらみつけられると、ピノキオは身をすくませて小さくなった。一号や三号が、その姿を見れば、これが同一人物かと疑いたくなるほど卑屈な態度であった。

四号は、なかなか見つからなかった。一号と三号は、どうにか美

紀の店を手づるにして、ものになりそうだったが、あとは少し時を置く必要があった。一軒のバーから、たて続けに何人もの女が行方不明になれば自然と人の口にのぼる。いくら異動の激しい水商売だとは云っても、あと一年位は美紀の店から女を誘拐^{スケ}する事は危険だった。一号、二号、三号と美紀を入れて、たった三人の女奴隷だが取り敢えずこれで暫く様子を見てみよう、かねての計画通り修一は広告文の作成にとりかかった。

×

×

木戸大造は、とし子のマンションでSM雑誌を腹這いになって読みふけていた。浴室で、とし子の使うシャワーの音がする。連載小説を読み終り、何気なくページをくると、そこに奇妙な広告が載っていた。二段つぶしの二号活字で、ひどく目立つ広告だった。

『SMクラブ〇〇男子S会員公募』

（当会は十二名の会員から成るSMクラブです。このたび二名の欠員が出ましたので、ご入会を呼びかけます。どなたでもという訳にはまいりません。ただし、当会は営利が目的の会ではありませんので、ある程度、社会的地位があり、絶対秘密を厳守できる方に限ります。詳細については電話番号を左記へお知らせ下さいれば担当幹事が、ご説明申し上げます。尚電話は必ずしも、ご自宅でなくても結構です。公衆電話や喫茶店を利用され、何日の何時にとお知らせ下さいれば、当会より電話で、ご説明申し上げます。尚、封書に対してのご返答は致しませんので、ご了承下さい。大阪中央郵便局私書箱××号）

大造の気持が少し動いた。週刊誌やSM雑誌の探訪記事から、いくつかのSMクラブや同好会が存在することを知ってはいたが、こ

んな広告を見たのは始めてであった。特に気に入ったのは電話に対する配慮がなされていることである。

最近のSM誌の氾濫は一昔前を思うと嘘のようである。テレビで堂々とSM論議が、たたかわされるぐらいであるから当然の事かも知れないが、しかし、まだまだSMの世界は陰花植物に似て、日の当る場所に出ているとは言いかねた。現に大造のように、SM誌を見るのも愛人のとし子とところで以外、読まない人間も多いのではないだろうか。小なりと言えども従業員二百名の電器メーカーの下請け会社の社長ともなれば、保たなければならない体面も多い。家には大学生の息子と高校へ行っている二人の娘がいる、よきパパであってみれば、自分はSM雑誌の愛読者である事すら、人に憚らねばならないのだ。

二十年前に何気なく手にしたSM雑誌を見て、すっかり、そのとりこになった大造は、ただ空想の世界にのみ自分のS性を満たして来た。勿論、読者欄の呼びかけや、またSMバーの存在を知るにつけても、一度は自分も空想の世界だけではなく、現実のSMプレーを楽しんでみたいと思わぬでもなかった。だが生来、小心者の大造は、もしひょっと自分の性癖を知人に知られてはと思う気持ちから、つい今日まで空想の中にのみ、生きて来たのだった。ところが、この広告は、まるで大造の心の底を見通したように配慮されていた。電話は自宅でなくても、公衆電話でもよいのである。これなら話だけ聞いて自分の気に入らないところであれば、自分の素性を知られる事なく電話を切る事ができるのだ。

大造は、ふとんから起き上ると、浴室に向かって声を、はり上げた。

「とし子。便箋は、どこにあるんだ」

「ビンセン?」

「ああ。手紙を書きたいんだ」

「隣の部屋の机の引出しよ」

大造が隣の部屋から便箋と万年筆を手にもどってくると、とし子は湯上りの素肌にバスタオルをまきつけた、しどけない姿で鏡台に向かっていた。

「どうしたの、パパ。今時分、ビンセンなんか持ち出して……」

「うむ、いや、ちょっとな……」

いずれ、とし子には話すことになるだろうが、とにかく、よく相手の内容を聞いてからだと言葉を濁して大造はペンを取った。電話をうける先は、よく親会社の重役の接待に使う料理屋の「つた屋」という店の電話にきめた。つた屋なら絶対、大丈夫だった。大企業が汚職すれすれの接待をする場所として知られた、口のかたい事では絶対の信頼をおかれている料理旅館である。

「ねえ、どうしたのパパ、そんな難しい顔をして……」

鼻を鳴らしながら、とし子が大造のそばに身を横たえてきた。

「うむ? いや……」

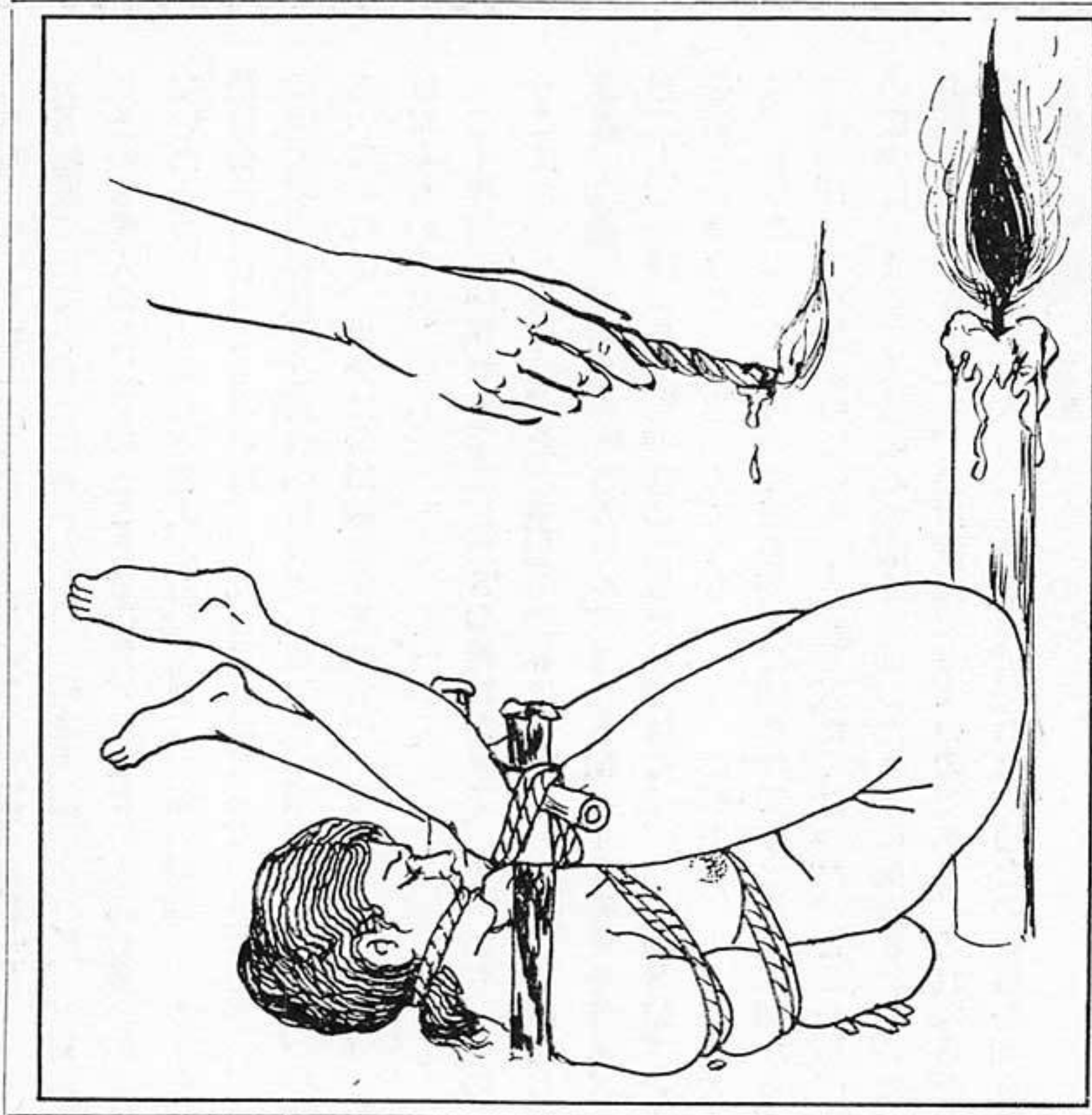
頭の中で手紙の文案を練っていた大造は、とし子のつけている香水のかおりを鼻にすると思考が途切れた。

「おい、このあいだ、買ってきたやつを出せよ」

「またあ? ね、あたし、あんなの好きじゃないのよ。だって、ちつとも良くないんだもの」

従業員をつれての慰安旅行で温泉地へ出かけた時に、ふと目についた大人のオモチャである。電池式のバイブレーターで、SM小説

イメージギャラリー 『熱 涙』 須坂 旭



などによると、女がのたうちまわって、しびれるという事である。だが、大造の腕が悪いのか、それとも、とし子のM性が、そう高くないのか、どうも、とし子は、あの機械が嫌いなようだった。和服のしごきで軽く後ろ手にゆわえて、乳房を愛撫したり、舌を這わす

程度の軽いプレーなら応じる、とし子だが、それ以上の行為は苦痛以外に何も感じないようである。

大造ぐらいの年になると、自分だけ満足していれば、それでよいと云うのでは物足りない。相手の女にも充分、満足感を与えて、その嬌態や呻き声を楽しみながら自分も気持を昂ぶらせて行くといういわばセックス自体を楽しむより、その過程を楽しむようになってきていた。それだけにSM小説を読んでは思う存分の空想を、ふくらませてきたし、その空想は、どんな小説よりも甘美で楽しく、大造の頭の中で縦横に動きまわった。

だが現実には、とし子を相手にしてみると、そんなあまいものではなく、大造はいつも欲求不満の状態に置かれていたと、言えるだろう。とし子との間も、金だけでつながっているとは思いたくないが二十才の年令のひらきや、月々十五万円の手当を渡す時にみられる態度からも、愛情だけで自分の愛人でいてくれると考えられるほど甘い気持ではいられないのも事実である。

×

×

「もしもし、大枝さんですね」

落ちついた声だった。大造は年甲斐もなく声が上ずりそうになるのを押えながら受話器を、にぎりしめた。

「は、はい、そうです」

「お手紙ありがとうございます。先ず、お伺い致します。今、電話のそばに、どなたかいらっしゃいますか」

「いいえ、私一人です」

「それじゃあ……まずお手紙の質問にお答え致します。広告にもありましたように、当会は営利が目的ではありませんので会費は頂い

ておりません。従いまして費用の点におきましては全くご心配いりません。その次に会員としての資格でございますが……これは当会の会員が投票いたしましたして、過半数を超えた方のみ会員になって頂いております。そのため会員としてのテストがございます。テストの方法につきましては今、詳しくは申し上げられませんが、絶対に欠かすことのできない条件を一つ、申し上げます。プレーをなさる相手の奴隷に対して、医者が必要とするような激しい行為は絶対に困るということです。この点、如何でしょうか」

「はい、あのう……私、手紙を出しましたんですが、何しろ今までプレーの経験は全くありませんので……絶対、大丈夫です。Sといっても、そう強いものではありませんし……」

「結構です。お声のようすから、失礼ですがお人柄のよさが感じられます。テストと申ししましても大したことではありません。私どもは何よりも秘密保持が第一でして、つまらない週刊誌の記事になぞなることは絶対、避けたいのです。あなたのS性については、どんなか知られている方がおありでしょうか」

「いいえ、いや……そのう……」

「奥さんですか？」

「いえ、どうもその……」

「わかりました。奥さん以外の女性ですね」

「はい、でも、そのう、それは、ど……」

「大体の察しは、つきます。お手紙の文面からも几帳面な、ご性格のように感じられます。もし当会へ入会のご意志がおありでしたら次の水曜日の同じ時間に今一度、そのお電話の前でお待ち願えますでしょうか」

「はい……」

「では水曜日には、ごく目立たない服装をなさって、そこで待機してして下さい。多分その日に、我々の例会へ、ご招待させていただきます。詳しい連絡はその時、いたします」

電話は一方的に切れた。声のようすから若い男のようである。夢中で握りしめていた大造の受話器は油汗で、じっとりとしていた。

×

×

修一は受話器を置くと、次の電話先に対するメモを、ながめた。まだ先方の指定していた時間には一時間ほど、間があった。電話は自宅のようである。封筒には住所こそ記してないが、便箋十二枚に綴られた手紙の内容には修一も圧倒されてしまった。

「……以上、申し上げましたように、私の奴隷は全く申し分ありません。S誌、T誌で呼びかけました夫婦プレーも、もう何度か経験済みでありまして、この頃では生意気にも、ご主人様の私に向かって、もっと多くの方とのプレーをしたいと言うのです。もし、幸いにして私が貴会の会員にさせていただく事が出来ますれば、時間の許す限り、私の奴隷をお使い下さいまして、お楽しみ下さい。お電話下さる日を鶴首いたしております……」

手紙に記された名を頼りに、S誌やT誌から、手紙の主をさがし出すのに、そう時間はかからなかった。『私の奴隷妻』と題した告白手記やSMスワッピングの呼びかけには、おそらく妻であるらしい女の緊縛写真を添えたものが載っており、相当強度なSM夫婦であることが察しられた。そのほかに、私書箱には、夫婦プレーのマニヤからのマンネリを訴えた手紙が四通も、まざっていた。それらの手紙を一つ一つ分析して、電話で話しかける内容を検討してい

くうちに、修一は久しく味わったことのない仕事をしているという充実感を感じていた。

その頃、例の地下室では、二匹の女奴隷調教の真最中であつた。本番を一週間後に控えて、ボロ武もピノキオも大張切りである。

「三号、前へ……」

ピノキオの声に、珍しく両手錠をはずされた三号がひざまずく。傍ではボロ武が電気鞭を手に、にらみをきかしている。ブラジャーもなく、薄いすきとおったパンティをつけている。

「よし、うしろを向いて両腕を組め」

おずおずとまわした両腕をとるより早く、ピノキオの手にしたロープがかかった。馴れた手付きである。またたく間に高手小手に縛りあげられた三号はロープの苦痛に低い声をもらした。

「よし、立て！」

高手小手の不自由な姿勢で立ち上る間もなく激しい声がとぶ。

「両足を開け！」

びくっと肩をふるわせながら、次のロープがかかる苦痛を思つて躊躇する三号に、

「むちが欲しいのか！」

激しい声とともに、あまつたロープが三号の尻にとんだ。

「ヒイッ」

思わず悲鳴とともに三号の足が開く。ピノキオは余つたロープを素早く両足の間にくぐらせると、思い切り締め上げた。

「ヒイッ、痛い。お許しを……」

「やかましい！ 何だ、このぐらい」

薄いパンティを割って、臀部にくい込んだロープを腰縄のところ

で、しっかりと留めると、ピノキオは、あごをしゃくった。

「よし、坐れ」

くたくたと崩れ落ちるように坐り込む三号に目もくれず、ピノキオの目は次の獲物に向かった。

「一号、立て！」

久しく身につけることを許されなかったドレスをまとつた一号が素早く立ち上った。

「よし、脱げ！」

「はい、ご主人様」

打てば響くように返事をした一号は素早くドレスのチャックをひくと、脱ぎはじめた。

「バカもん！ 何だ、その脱ぎ方は。もっと色っぽく、脱げないのか。やり直しだ」

「はい、お許し下さい。やり直します」

あわてて元の通りドレスを着た一号は、今度は時間をかけて、恥じらうように少しずつ脱ぎはじめた。シュミーズを取りブラジャーのホックをはずすと、さも恥かしそうに両腕で胸のふくらみをおさえて、ひざまずいた。

「どうした！ 忘れたのか、セリフを！」

「はい、いえ、わ、わたしは今日一日、ご主人様に買われた奴隷でございます。どうぞ、お気のすむようにお責め下さい」

「何だ、その言い方は！ もっと、感情をこめてやれないか。やり直しだ！」

「はい、ご主人様。わたしは……」

「だめだ、そんな目つきでは。感情がこもってないから、そんなし

やべり方しか出来ねえんだ。もっと研究しろ」
 「はい、ご主人様。私は今日一日、ご主人様を買われた……」
 もう何度、繰り返させられたセリフだろうか。何度も何度もやり直しを命ぜられているうち、洋子は次第に自分が本当の奴隷であるような錯覚に陥りはじめた。

「ようし一号、まずまずだ。だが、のぼせるなよ。今のご主人は俺だが、次のご主人は、もっと厳しいお方だからな。いい加減な芝居じゃ、ひどい目に合せるぜ。よく覚えておけ」
 「はい、ご主人様。よくおぼえておきます」
 「うむ、三号。今度はお前だ。立て！」



イメージギャラリー

『ある夜の正夢』

マエダ・ヒオミ

「はい、うっ！」
 反射的に立ち上がろうとして、くい込んだロープの痛み思わず苦痛の声を洩らした三号である。

「何だ、そのつらは。セリフを言わんか！」
 「はい、お許し下さい。つろうございます。どうか縄を解いて下さい。お願いします」

「はい、つろうございます。どうか解いて下さい」

「どこがだ！ ええ、言ってみろ。返事次第じゃ、解いてやらんでもないぞ」

「あの……股のところが……」

「なにお上品ぶりやがって、はっきり言ったらどうなんだ。〇〇〇に、くい込んだ縄を解いて下さいとな……」

「知ってるんだったら、解いて下さい」

「バカヤロツ！ 甘ったれるんじゃないぞ。そんな口のきき方は教えてなかったぞ」

ピノキオは床においてある乗馬鞭を取り上げ

るとピシッと音をさせて床を叩いた。修一にとめられていなければ三号の身体にとばした鞭である。

「お許し下さい。わるうございました」

水商売に入って十年になるとはいつても、酒の上の冗談ならともかく、滅多に女の口からは出せない言葉を口にさせられた屈辱は、股間縄の苦痛と相俟って珠子の目から涙を、したたせさせた。

「ああ……もういや！　こんな……こんなみじめな……いっそ殺して下さい」

「なにいつ！」

ピノキオの目に残忍な光がはしった。ボロ武の持っていた電気鞭をひったくると、三号のくびれ上った乳房につきつけた。

「ヒエッ、ぐっ！　があっ……やめて！　ヒエッ……！」

「どうだ、殺してほしいんだろう。これで、どうだ！」

「お許し下さい。いやっ、げえっ！」

高手小手に股間縄の不自由な姿勢で、床の上をころげまわって電気鞭を逃れようとする三号に向かって、ピノキオは、あくまで執拗に、その身体に鞭をのばした。

「ギャッ！」

およそ人間の声とは思えない凄まじい叫び声を挙げた三号は、とうとう気絶をしてしまった。もうピクリとも動かなくなった三号を見て、いまいまいそうに舌打ちをしたピノキオは、

「一号、ロープを解いてやれ。それから床を掃除しろ。畜生っ、ガキみたい、たれながしやがって！」

と激しい舌打ちを、くり返した。余りの苦痛と恐怖のために、床は三号の洩らした小水で濡れそぼっていた。

「おい、腹がへったな。めしにしようか」

あまりの凄まじい三号の叫び声に、その場に立ちすくんでいたボロ武は、涼しい顔をして、めしを食おうと言うピノキオに、どうにもやり切れないものを感じながら、救われたように、つい頷いてしまっていた。

二人の男が立ち去ってしまい、ドアの外から鍵のかかる音がすると一号は、いや洋子は素早い動作で三号の、いや珠子のロープを解きはじめた。男の力で、思い切り締め上げられたロープは、はがゆいほど、解けにくかった。ようやく股間にかかった縄が解けると、あとは比較的、楽に解けた。珠子は低い呻き声をたてて、息をとり戻した。

「ね、しっかりするのよ。大丈夫？」

私語は禁じられていたが、一つ間違えば自分が介抱される立場にいつ、たたされるかもしれない洋子だけに、部屋に仕掛けられたマイクすら、忘れていた。

「いやっ、ゆるして！　もう逆らわないから許して！」

まだ完全に意識をとり戻してないのか、珠子は洋子に抱きかかえられながら逃げようと身をもんだ。

「大丈夫よ。もう二人とも、いないのよ。しっかりするのよ」

自分を抱きかかえているのが、鬼のような男でないことがわかった珠子は、ワッと声を上げて泣き出し、洋子にしがみついていた。裸の洋子の胸に、幼児のように泣きむせぶ珠子の涙が、したたり落ちては流れていった。

「さあ、もう泣かないで。いつまでも泣いていると、またあの男にひどい目に合されるわよ」

まるで母親に甘えるように泣いていた珠子は、その声に我に返ったように泣き声をとめた。

「さあ、下穿きを、はきかえて。私はお掃除しなくちゃ。また鬼がやってきて叱られるから。さあ、早く」

床の上にこぼれ落ちた水が、自分のそそうによって起った現象であることに気がついた珠子は、さっと羞恥で耳たぶを染めながら、あわててロッカーのパンティをはきかえるために立ち上った。部屋の隅にある小さな洗面所で雑巾をしばった洋子は、汚れて臭気を立ちのぼらせる床を懸命にふきはじめた。

「ごめんなさい、私が出します」

ロッカーから取り出した新しいパンティにはきかえた珠子は、自分も雑巾をしばると、床をふきはじめた。ロッカーには身につける衣服がありながら、肌が透けて見える薄いパンティ一枚の姿で、豊かな乳房を揺らして床を雑巾がけする二匹のメス奴隷の姿は、その道の愛好者が見れば目を輝かす光景であろう。

その頃、隣の部屋では、ピノキオ、ボロ武と入れ違いに入ってきた修一が、美紀と向かい合っていた。

「よし、それじゃ用意しろ」

ピシリと決めつけるような修一の口調は、もう奴隷に対する支配者の姿以外のなにものでもなかった。美紀は激しい被虐の血が身内から湧き上って来るのを感じながら身につけたブラウスを取り、スカートを下げていた。

この部屋は、もう何度も訪れて美紀には馴染みの部屋だった。初めて奴隷一号である洋子をつれ込んだ部屋である。だが隣の部屋には、まだ美紀は一度も入った事がなかった。小さいながらも洗面所

やロッカーがあり、それにトイレまでついていて、二日や三日、暮らす分には不自由しないと聞かされても、一旦その中に入ったが最後、今度はそうすぐには出られなかった。あと一週間後に控えた本番に備えて、激しい調教をうけなければならないのだ。店もそのため三日間の休みにして、ホステスには国の母親が死んだので葬式に行くと言っておいた。

隣の部屋に入ったその時から、もう修一は美紀の愛人ではなく、三匹のメス奴隷に君臨する絶対の権力者になり、美紀は一匹のメス奴隷として他の一号や三号達と同様に扱われる事に甘んじなければならぬ。その上、常日頃は「あねさん、あねさん」と呼ばれて立てられているピノキオやボロ武にさえ、同じように奴隷としての扱いをうけるのである。

修一のためなら地獄の底へでもついて行きたいと願う激しい愛に加えて、二人だけでくりひろげるSMプレーを大事にしたいと願う心の反面、他の男の前で縄を打たれ、鎖につながれて鞭打たれる自分を想像すると、今までかつて感じたことのない激しい陶酔感を伴って、目くらめくように女の恥しいところがうるおってくるのを抑え切れない美紀であった。

「さあ、行くんだ！」

激しい修一の叱咤の声と電気鞭に追い立てられる美紀の姿は一号と三号と同じように、すけて見える薄いパンティ一枚の姿で、早くも被虐の血が疼きはじめた乳房をかくすように、これから三匹のメス奴隷を責めさいなむであろう、責め具の一杯、詰まったボストンバッグを胸に抱えて、隣の部屋の前で立ち止まった。

〔真知子論〕

新しきサディズムへの出発

— 小 沢 準 —

(写真は長谷田真知子夫人)

※ ミロのビーナスには 両手が、ない。

真知子のビーナス像にも、やはり同じに両手が ない。

※

一葉の写真が ありとあらゆる想像力を、刺激して恐怖にまで昇華する。抽象観を、喚気する。

※

◇

サディズムの男性にとって、最終到達点はある種の女性崇拜者となるべきはずだ。

今回の真知子ビーナス像で、この感想は、更に一層、確証されたようだ。

構図や小道具の仕立てによって女体を見せる、などという安易な気持の現代の多くのストリッパーやヌード嬢などは、この誤った考え方を、真知子によって知らされるべきだ。

真知子が何故、これ程までに、あやしい魅惑をはなち、人をひきつけて、はなさないのであるか。これは、もう絶対に真知子自身の持っている女らしさと可愛らしさのゆえんである。

完璧なまでの肉体美。成熟した豊潤で、まろやかな乳房の、つかみたくくなるような視覚感。この身体の最大の美である、清楚でうまい肩から腕への流れるようなまろみ。この付け根からは、一つの若さが、ただよってくる。

極端と言えるまでの端正な眼鼻立ちの顔にいたっては、女性美の絶対条件である、気品の誇りと、羞恥の訴えが、ありあり読みとることが出来る。

もう、ここには真知子自身しか、存在しない。真知子という女しか居ないのである。

☆

サディズムというものの意味が大きく変化した。始めだし、一般家庭の夫婦間にまでも滲透した今日。

改めて真実のサディズムの意義を、考えなければならぬだろう。

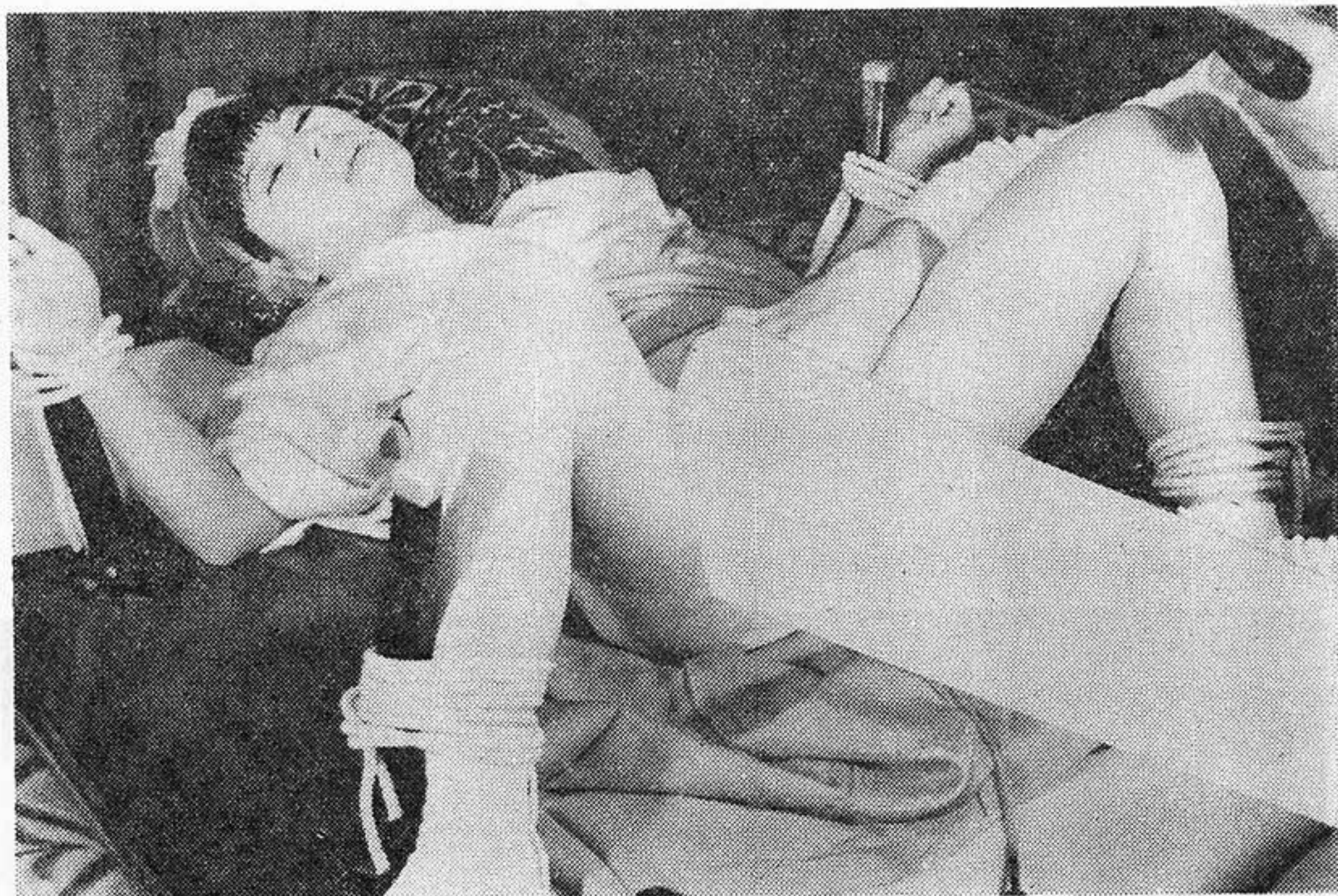
☆

サディズムが、プレイと言われ、愛情表現の形体に使われ始めだしたのは何故か。

真知子ビーナス像によって、このことは私なりに演繹^{えんえき}することが出来たようだ。

☆

サディズム、すなわち「変態」という限定



された狭義と設定とに、あえて立ち向い、このことを、集大成に造り出したことによって限定された狭義を、打ち破ったのは団鬼六氏の永遠の金字塔『花と蛇』だ、と言いきってしまっても良いだろう。

この業績は、記録されるべきものだ。

真のサディズムは何か？ ということは、結局は女性の持っている美しさを崇拜することであり、成り立った、マルキ・ド・サドやボードレール、伊藤晴雨の定義が、そのまま、生きて来たということなのだろう。

☆

『万婦ことごとく小町なり』と言った言葉のように女性の美しさに愛の目を持って接しないとサディズムは、自分のものに消化することが不可能であろう。縄をかけたリムチで打つということだけが、サディズムではなくなってきた。

長谷田亀治氏の記述によれば、世に出回っているポルノ・グラフィーを否定することから、真知子夫人をカメラの前に置いた、とあるが、このことは、ほんとうに拝聴すべきお話だと思う。

私が言うところの愛情が礎底となったことも述べているようだ。

真知子夫人に対して愛というものがあったからこそ、夫人の美しさを見いだしたのだろう。

昨今、流行の△原点へ帰れ△ではないが、真一人一人が、マルキ・ド・サドであり、ボードレールであり、伊藤晴雨である、ということが必要のようだ。ここに大きくサディズムが意義をもって、その位置を得ることが、これらの人達の業績によって遠い日ではないようだ。

☆

「おおっ」真知子は、その瞬間、あえいだと同時に、腰から背中の中を通って行った言葉が、頭の内で声にならない言葉となって叫んだ。

「そこじゃない」

確か今の今まで、自分の身体を押え付られながら、確かめて期待していたものが、飛び

出したのかと思った。

だが、それは間違いなく、真知子の期待を裏切ることなく、おさまるべきところに、おさまっていた。

充実しきった、生きていることのよろこび、そのものだった。

真知子は、だが、さっきまで腕の付根のあたりに、強くきつく、感じていた、夫の両手が、左手だけになっっている事に気がついた。

コリ、コリ。夫が動くたびに聞える骨と骨とが触れ合うような音を聞いた時、このようなことに無知であった真知子にも、何のことだか分り始めた。

『指』『手』『尻』『肛門』

真知子の頭の内を、これらの単語が走っていった。

いつもは、終るまで目を開く事はない真知子だったが、その時は、明けて見ることにした。

身体は、醒めだし始めた。

そっと目を開いた。夫は目を閉じていた。頭が、真知子の右肩にあった。

瞬間、感じた驚愕の違和感は消えていた。いや、むしろ真知子は、初夜の



時を思い出し始めていた。

真知子の目にうつった夫の左側だけの顔は真剣そのものだった。何かを、じっとこらえて耐えているようでもあった。

見てはならなかったのだと真知子は思っ、自分の目を閉じた。

夫が急に、むしゃぶりついて来たような思いがした。夫に、いとおしさを感じた。

夫の目からは、涙さえ流れているのではないかと思ったりもした。

真知子の右肩あたりが、夫の唾液でヌラヌラしているようでもあった。

真知子の頭の内が、これらの思いを全て一通り整理し通した時、一度は醒めた身体だったが夫に答え始めた。真知子の頭の内は、真白な真空となった。

真知子は無意識のうちに自分で尻をもち上げ、受ける体位を作っていた。

この時、真知子は泣いた。あらん限りの涙と、歓喜の声を上げた。

真知子は、夫の愛情を完全に自分の手に入れたと、感じ取った。

しかし、この思いが真知子を狂わすとは、本人自身は気がついていなかった。

☆

夫は『プレイ』とか『調教』と言う言葉を使って、可能な限りの侮辱を真知子の身体にたたき込んでいった。

『剃毛』『浣腸』『縛』『花電車』『撮影』

ある時は、なだめられたり、又ある時は身体がバラバラになる程、すかされたりした。

真知子は、あの夜、感じた愛情を、とうに忘れていた。真知子の気品の高さと羞恥の誇りが、逆に、夫に不信を抱き夜を呪ったりした。

しかし、全て無駄だった。まるで行程通りに進行してゆく一つの機械のように、調教とプレイは進んでいった。

☆

〔伝言板〕○本誌へ寄稿された方、投稿された方、モデルに志願された方、読者通信を寄せられた方々の住所氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故に御安心の上、通信をお寄せ下さい。尚、手紙の転送や斡旋などは双方が納得されない限り原則として取扱いは致しておりませんので御諒承おき願います。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。電話連絡が必要な際は、当方からその旨を記してお返事申し上げます。

その夜、真知子は撮影用の投光器の光沢の内に、全ての衣服を剥ぎとられ、白い裸身をさらしていた。

夫の手には、ムチがあった。

真知子の身体にムチが、飛んで来た。

真知子は意地になって、固く結んどくちびると冷たい瞳の光彩とでムチと夫に挑んだ。

何度目かのムチが身体に止まった時、真知子は縄をかけられた。

もう、どうしても良かった。こんなことは、どうしても良いことなんだと思っていた。

早くすべての儀式が終る時間を、待ったりした。

両脚をグラスファイバーの釣りざおに固定され、大きく開脚された。

夫の強烈過ぎるほどの視線を、いたいほどそこに感じた時、真知子の固く結ばれていた可憐なくちびるから、嚙り泣きの声が低くほとばしり、広い寝室の部屋中に鳴り響いた。

この時、夫が言いだした。まるで自分自身が、苦痛を覚えているかのような顔付きだった。

「真知子、それだ。そのお前が全てを、はぎとられても、永遠に肌身から、はなれない飾り、それを、いつまでも失うな。絶対に失うな」

な

夫は、かわいた声で言っていた。

真知子は、身体中に不安と憔悴を感じていることが自分にも分かった。瞳が、くもり始めた。

腰から頭に向かう何かが、胎動し始めた。

真知子は、あらん限りの声で、わめいた。

「咬んで、咬んでちょうだい。私の肩を、もぎとって」

滑らかでひきしまった腕の付根に、夫の歯を強く、そしてやさしく感じたとき、真知子は美しく幸福な花園を飛浮し始めていた。

☆

真知子は、この後、カメラの前に立った。

黒いガードルとストッキングを身につけただけの八亀甲股間縄りVの姿で――。

カメラの前には、女が居た。美しく可愛い女王だった。

真知子は、夫の頭を自分にひれ伏さすことが出来たと思っていた。

☆

真知子のビーナスは完成した。

あの骨と骨とが触れ合う音を、真知子が始めて聞いた夜から、三年の時間が過ぎた日だった。

女体の哀しさというものは、このように捕われの身になってからでも、そこに一筋の生きる道を見

つけ出し、そして、そのドン底のみじめな生活のなかにも、或種の快感を味うものである。うら

若き日本女性たちは、異国人の手によって、このように汚辱にまみれ去っていったのである。

敗戦秘話

北満悲歌

奇妙な綱引きと淫虐な賞品

カット・黒田 縛



鈴^{すず} 鹿^か 晶^{あき} 子^こ

ドアが開いて、ドヤドヤと多勢のロシア軍

の将校たちが階段を降りてまいりました。

地下室へ投げ込まれ、疲れきった裸身を寄せ合って床の上に、じかにゴロ寝していた私たちは、ハッと顔を見合わせ、お互いにかばい合うように身をすくめました。

「また何か、ひどい、いたぶりを受けるので

す。

「さあさあ、皆さん、そこへ並ぶのですよ」

お八重さんの大きなガラガラ声が地下室の壁に反響してガンガン響きます。

「先生、智恵子先生ッ、あなたが級長さんでしょ。早くみんなを整列させなきゃあ、駄目じゃないの……」

はないかしら？」

みんなの脳裡に一瞬、同じような不吉な思いが、走ったのでございま

持っていた竹の鞭に素振りをくれながら、私たちを追いたてるようにするのでした。私たちは慌てて立ちあがりました。

「皆さん、早くお並び頂けませんか？」

私たちは、うち続く厳しい、いたぶりに、みんな全精力を使い果たして疲れきっておりました。のろのろと、にぶい動作で並びはじめたのでございます。

「ちよっとッ、あんた達。何か不服でもあるのッ？」

すかさず、お八重さんが怒鳴りました。「気をつけッ」

智恵子先生の号令に、裸のままの私たちはもう、すでに習慣になってしまった、両手を頭の後で組み、両脚を大きくひらき、下腹部を前へつき出すという、ここ独特の、あの恥かしくも、おぞましい気をつけの姿勢を、とったのでございます。

ロシア軍の将校たちは、二十人ほど居ったでしょうか。今日はじめて見る将校の顔が大勢、混じっていました。

彼らは、恥かしい姿勢をとっている私たちを、ぐるりと取り囲み、ギラギラと煮えたぎるような欲情に燃えた脂ぎった視線を、私たちのあの一個所に集中して、ニタニタと、みだらな笑みを浮かべているのでございます。

「よろしいッ」

お八重さんが、やっと頷きました。

「休め」

先生の号令に、私たちはホッと弓のように張りつめた緊張をといたのでございます。

お八重さんは、一通り、私たちを、みんなに紹介しているようでした。それが終ると、私たちの方を向いて声を掛けました。

「今日はねえ、新しい将校の方も沢山おみえになったので、今から、とっても楽しい運動会をして下さるそうですよ。どお、嬉しいで

しょう？」

そこで言葉を切って、私たちの顔を、意地悪い目つきで一人一人、のぞき込んだのでございます。でも、私たちは誰一人として返事をする者としてありませんでした。いや、返事をしようにも出来なかったのです。

今まで、続けざまに、いろいろと、恥かしいひどい目に、さんざんあわされている私たちでございます。楽しい運動会といっても、私たちにあって、本当に楽しいものやら、なかったものではございません。また、どんなひどい目にあわされるんじゃないかと、その方の心配が先に立つのでございます。

しばらく無言で、私たちは、お八重さんの顔を見つめておりました。しかし、お八重さんにしてみれば、返事もせずに、ジィッと自分を見つめている私たちの態度を見て、反抗していると感じたのも当然です。

「あんた達、折角、楽しい運動会をしてあげようと、親切に言っているのに、なんとも思わないのッ。返事ぐらいしたら、どう」

カン高い声でヒステリックに叫びました。

「馬鹿野郎、才前ラハ、ロガナイノカッ」

怒声とともに、李さんは、先頭に立っていた智恵子先生の豊かなお尻めがけて、力いっ

ぱい皮の鞭を振ったのでございます。

“ピシッ”

鞭は大きく宙に躍り、あたかも生きているもののように、先生の真っ白い裸身に鋭く喰い込み、柔肌に赤いミミズばれの筋を作りしました。

「ヒィーッ、あ、ありがとうございました」

「ホカノ者ハ、ドウナンダッ」

“ピシリ、ピシリ、ピシリ”

李さんの鞭は、狂ったように、続けざまに鳴りつづけ、みんなの裸身を、次々と襲うのでございます。

「ヒェーッ、い、痛いッ」

高松夫人と大坂夫人が、ぴったりと抱き合って悲鳴をあげました。しなやかな鞭は、二人の裸身を縛るように巻きついていきます。

“ピシッ、ピシッ”

二人は、ひとと互いに抱き合い、豊かな胸や、ようやく、ふくらみが目立ちはじめたお腹を、鞭から防いでおりました。

「ヒィッ、あ、り、が、と、う、ご、ざ、いま、すー」

「うっ、楽しい運動会をしていただけるそうで、とても感謝いたしておりますッ」

それを聞いて、李さんの鞭の唸りが、よう

やく止まりました。

「ソレヲ早く言エバ、痛イ目ニアワズニスンダノダ。馬鹿ナ人タチダネ」

李さんが力いっぱい鞭をふるう残虐なお仕置を、さも楽しいお芝居でも見るように、目を細めて見ていたお八重さんが口を開きました。

「じゃあね、運動会について、今から、ガガーリニコフ情報中尉殿から説明がありますから、よく聴いておくのですよ」

そう言って、傍に立っているロシア軍将校に合図を送って会釈しました。

驚いたことには、このガガーリニコフ情報中尉は、流暢な日本語を話したのでございます。

「ミナサン、今、オハ重サンが言イマシタヨウニ、今カラ、全員デ、トテモ楽シイ、運動会ヲ行イマス」

そこまで言ってから、ぐるりと私たちを見回し、私たちが大きく頷くのを待ってから言葉が続けました。

「運動会トイッテモ、外デスルノデハ、アリマセン。コノ地下室デシマス。綱引キヲシテ遊ビタイト思イマスガ、綱引キツテ、知ツテイマスネ」

私の方を向いて、相槌を求めたような気がしました。私は、あわてて、「は、はい」とあたりを見回しながら返事をしました。

素早く返事をしなければ、また、苛酷な鞭の洗礼を受けるかも知れません。

この思いは、皆、同じだったのでしょう。隣の圭子ちゃんも、宇都宮夫人も、

「はい、知っております」

と、異口同音に答えたのでした。

それほど、さきほどのお仕置は、皆にとつて、身にしみて恐ろしかったのでございませう。

「アノ綱引キヲ、アナタタチノ、ダレカ二人ニヤツテ貰イマス。イイデスネ」

「はい」

「シカシ、ソレダケデハ、ホカノ人ニハ、ナシニモ面白クアリマセン。ソウデショウ？」

「はい」

「ダカラ、ホカノ人ニハ、競馬ノ馬券ノヨウニ、誰ガ勝ツカラ決メテ、馬券、イヤ、コノ場合ハ人券ダナ。コレヲ買ツテ貰ウノデス。

コノ人券ハ、オ前タチダケデナク、私タチモ買イマス。ソシテ、予想ガ当ッタ者ニハ、賞品ヲ出シ、ハズレタ者カラハ、罰金ヲトリマス。判リマシタカ？」

「はい、わかりました」

「ソレデハ、綱引キヲスル選手ヲ二人、アナタチデ選ビナサイ」

私たちは顔を見合わせました。それを見て早速、智恵子先生が口を開かれました。

「あのように、ガガーリニコフ情報中尉殿がおっしゃるのですから早くきめましょうよ。どなたか、選手になろうという希望者の方はいらっしゃらなくて？」

皆の意見をお聞きになるのですが、誰一人、進んで希望する者はおられません。

「困ったわあ、宇都宮さん、いかがですか？」

選手になって頂けませんかしら」

「駄目ですわ、とても私なんか。だって、私は、こんなお腹しているんですもの。どなたか、ほかの方にして頂けないでしょうか」

宇都宮夫人は、せり出しているお腹をさすりながら、慌てて断わるのでした。

「それもそうねえ。じゃあ、圭子ちゃん、あなた、どうかしら。若いんだし……」

「わあ、私だなんて、先生、ひどいですわ。

私、力がとても弱いんですもの」

「だって、一番、若いんでしょう？」

「許して、それより、晶子姉さまはどう？」

「あら、私だって、綱引きなんか、自信がご

「はいませんわ」

中々きまらないのに業をにやしたガガーリニコフ情報中尉は荒々しく声を出しました。

「オ前ラダケデキマラナイノナラ、コッチガ決メテヤル。オイ、オ前ハ誰ダッ」

手にしていた竹の鞭の先で、宇都宮夫人の肩を、ぐいッと突きました。

「は、はい、宇都宮でございます」

「オ前ハ、妊娠何カ月ダッ？」

「はい、六カ月でございます」

「ウン、ジャア、オ前ハ誰ダ？」

「はい、高松です」

「腹ハ？」

「五カ月になります」

「フフン、六カ月ト五カ月カァ……」

中尉がひりでうなずくのを見て、高松夫人は悪い予感がしたのでしょうか。

「お、お願いでございます。私は、こんな身重の身体でございます。とても、綱引きなんて、出来そうにありません。お許し下さい」

悲痛な声で頼み込まれました。宇都宮夫人も同様に、負けじと頼まれたのでした。

「私もでございます。どうか、お許しを……」

「ウルサイッ」

声よりも早く、李さんの鞭が唸りました。

「オ前タチハ、中尉殿ノ命令ニ、タダ従エバイイノダッ」

二打ち、三打ち、ピシッ、ピシッと鞭は情容赦なく、二人の上に打ちおろされます。

「ひいえーっ、は、はい、ご免なさい。お、お許しくださいませ」

二人は鞭で叩き伏せられ、切り裂くような悲鳴をあげながら、床をころげまわっていました。蒼白く静脈のういた肌に、無惨なみみずばれの跡が、三筋、四筋と走ります。

「ひいーっ、い、痛いっ。私が、私が悪うございました。どうか、お許しを！」

魂ぎるような悲痛な叫びと、もだえ苦しむさまは、とても、正視できるものではございません。私は、知らず知らずのうちに、目を閉じ、うなだれてしまいました。

「晶子っ、なんでうつむくのよ。あんたたちだって、少しでも、反抗的な態度をとるとすぐさま、あの調子で、お仕置があるのよ。ようく、目を開けて見ておきなさい」

お八重さんが目ざとく見つけて、私の髪の毛を掴んで、ぐいと引き起しました。

「は、はい、済みません」

「い、痛い、痛い、助けてーっ」

高松夫人と宇都宮夫人の号泣は、まだ続いていきます。二人はもう、転がって鞭を避ける元気もなくなり、ぐったりと伏せ、四肢をピクピクと小刻みに痙攣させ、鞭打たれるたびに海老のように腰を跳ねあげていました。

そんな有様を見ていたガガーリニコフ情報中尉は、手を挙げて李さんを制しました。

「李、モウヨイ、ソレ位デ許シテヤレ。オ前タチハ、高松ト宇都宮ダッタナ」

「はい」

「ソレデハ、オ前タチ二人ガ、コレカラ綱引きヲスルノダ。イイナ」

「はい」

二人は涙のいっぱいだった瞳をあげ、力なく、うなずいたのでございました。

☆

綱引きが始まりました。

地下室の中央に、高松夫人と宇都宮夫人とが、向い合って立ち、その周囲を将校たちや私たち、それに李さんやお八重さんが、とり囲むようにして座ったのでございます。

私たちが心配したように、案の定、*「楽しい綱引き」*といっても、普通に行われる綱引きではありませんでした。それはそれは、恐ろしいものだったのでございます。

綱引きの綱といっても、長さ五十センチ程

の細い麻紐で、その両端にはクリップが取りつけてありました。それで、二人の一番恥しい場所の毛を挟み、引き合って自分の陣地の方へ相手をつ引っ張ってくるという遊びです。「遊び」といっても、これは、恥知らずで淫虐なプレイです。

髪のおくれ毛を、一本引き抜くだけでも、身をよじるような痛さを感じるものです。この「綱引き」は、クリップに挟まれた恥毛に、全身の力をかけて、相手を引っ張り寄せるといふものですから、動けば動くほど、お互いの恥毛を引っ張り合う結果となり、堪えきれないほどの激痛が襲うことになるのでございます。

今から繰りひろげられる、恐ろしくもおぞましい、いたぶりを想像しているのでしょうか、高松夫人と宇都宮夫人は、じっと唇を噛みしめ、蒼ざめた顔で目には、涙をうかべていらっしやいました。

その上、馬券ならぬ人券の賞品というのひどいものでございました。ロシア軍の将校たちは、お金を賭けているようでしたが、着る物さえ与えられない無一物の私たちには、そんな真似はできません。

ガガーリニコフ情報中尉のいった賞品とは

賭が当たった者は、当らなかつた者に対して、浣腸をするというものだったので。

そんなむごい仕打ちを、と抗議したところで、従わなければ、また、どんなひどいお仕置をされるか判りません。私たちは、無理矢理、どちらかに賭けさせられました。

高松夫人が勝つと賭けた人――。

智恵子先生、大坂夫人、私。

宇都宮夫人が勝つと賭けた人――。

圭子ちゃん、山口夫人。

私と大坂夫人、智恵子先生は高松夫人の後へ坐らせられ、圭子ちゃんと山口夫人は、宇都宮夫人の後へ回られました。

「さあ、二人とも、いいわねえ」

お八重さんは、二人の毛を、麻紐の両端にそれぞれ取りつけてあるクリップで、しっかりと挟みつけました。二人は悲しみに打ちひしがれた目で、お互いの恥しい所を、見詰め合っていました。

準備が終ったところで、手を使わないようにするためだといって、両手首をうしろへ回して白い縄できりりと括り、余った端を、お腹にまわして縛りあげてしまいました。

「ヨウシ、イヨイヨ始メルゾ」

ガガーリニコフ情報中尉は、高松夫人と宇

都宮夫人のお尻を、左右に押し分け、二人を結びつけていた麻紐をピーンと、張りつけました。

ピーッ

中尉は、二人の肩を、トンと叩いたかと思うと笛を吹いて合図をしました。

高松夫人が、ピクッと、ほんの少しばかりお尻を後へ引きました。その途端――。

「い、痛いっ、高松様っ。止めて、止めて下さい。い、いい、痛いっ」

宇都宮夫人が、甲高い悲鳴を挙げ、よろけるようにして、一步、前へ引っ張り寄せられたのでございます。

「わ、わたしもよお、奥様。痛くって、痛くって。ああ、どうしましょう」

高松夫人も顔をしかめ、歯をくいしばって必死に耐えておられます。お互いの毛、しかも、一番敏感な所の毛を引き合っているのをごいいますから、どんなにか、痛いことではないでしょう。しかも、どんなに激痛に襲われても、両手は後手に縛りつけられているのですから、手で痛みをやわらげるといふ事は許されないので。綱引きをするどころか、二人は、少しでも動けば、紐がピンと張って痛いものですから、まごまごしているのをご

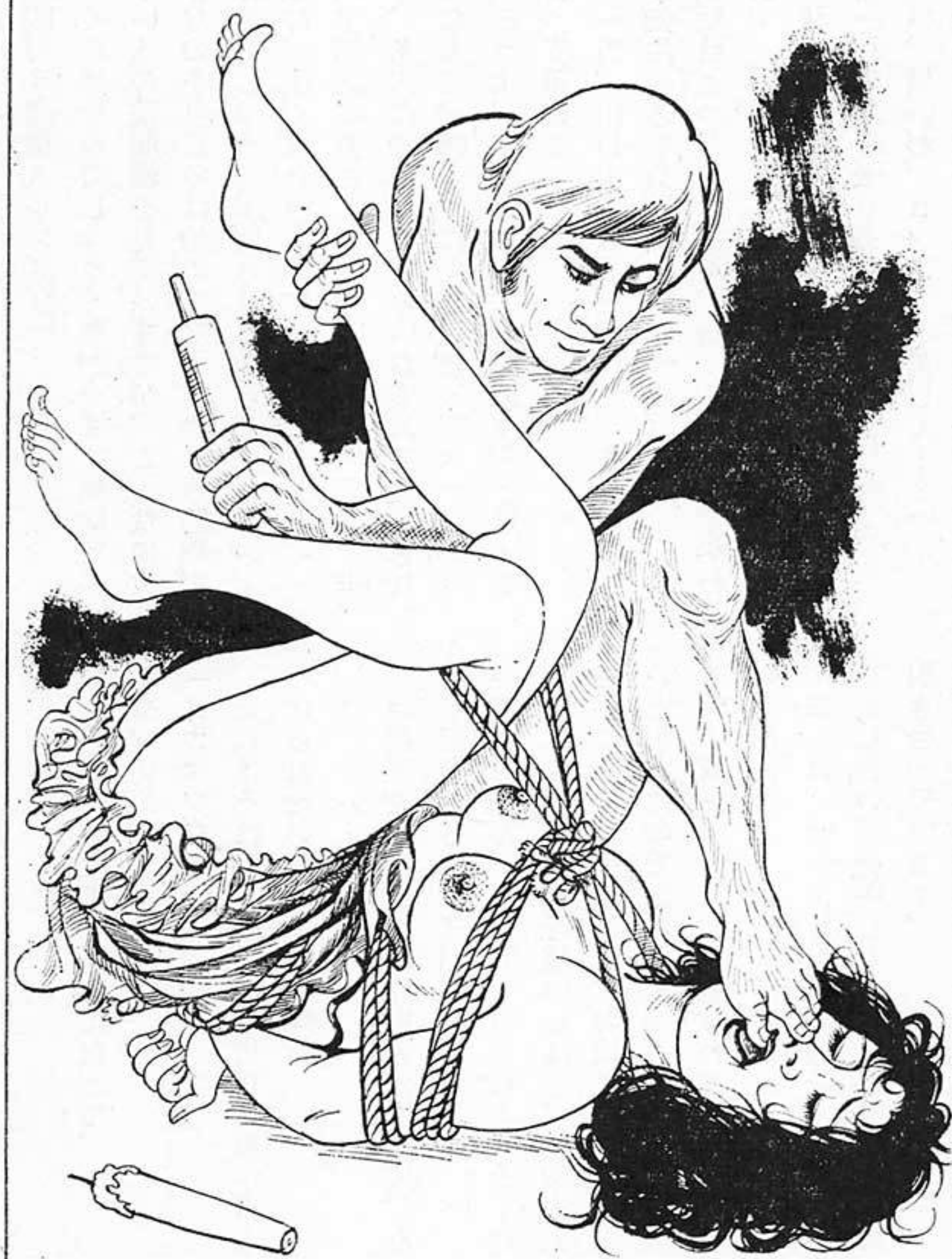
ざいます。

「い、痛いわぁ」

「許してえ、痛いのお」

動けば痛いので、二人は暫く、睨み合うよ

うな格好で体を動かさず、紐を引き合うよりは、むしろ寄せ合いました。麻紐は、だらりと途中でたれ下っています。それを見て、ガリーニコフ情報中尉は怒りました。



イメージギャラリー

『只今恋愛中』

岡

たかし

「コレ、ナニヲグズグズシトルノダツ、真面目ニ綱引キヲヤラナイカ。ヤラナイノナラ、鞭ヲ使オウカ。ソレトモ、二人トモ、ミンナノ前で浣腸サレタイノカ。オイ、李、負ケタ方ニスル浣腸器ヲ持ッテキテ見セテヤレ。アレヲ見タラ、選手モ見テイル者モ、キット必死ニナルダロウ」

李さんが隣の部屋から持ってきたのは、五〇〇CCは入るかと思われる恐ろしいような硝子製の浣腸器でございました。

「オイ、ミンナ。コレガ負ケタ奴ニスル浣腸器ダヨ。コレデタツプリ可愛ガッテヤルカラナ。ドウダ、楽シミダロ。オイ、先生、浣腸サレタクナカタラ、一生懸命応援スルンダナ。今ノママダト、宇都宮ノ負ケダ。スルト圭子ト山口、オ前ラガ浣腸サレルノダゾ。ソレデモイイノカ」

「嫌です。私、浣腸されるなんて、嫌です。あんな大きな浣腸器で浣腸されるんだって、恐ろしいわア。嫌、嫌、い、ヤー」

圭子ちゃんは思わず、悲鳴をあげて山口夫人に抱きつき、早や泣声になっています。

「宇都宮ッ、オ前モダゾ。オ前ガ負ケタラ、圭子タチダケデナク、オ前ニ賭ケテイル将校タチニモ大変迷惑ヲカケルノダカラ、オ前ニ

ハ特別ニ、コレヲ二本ブチ込ンデヤル。コレハ馬や羊ニ使ウ道具ダカラ、ソレハソレハ凄イ威力ヲ發揮スルンダゾ」

それはそうでしょう。私が今まで病院でいろいろの浣腸器を見ていますが、こんなに大きなのを見るのは始めてです。やはり動物用なのでしょう。嘴管も見るからに恐ろしいような、凄く大きいのです。

「宇都宮の奥さん、お願い、頑張ってえ。圭子、あんな恐ろしく大きいお道具で浣腸されるなんて、嫌よ。ねえ、頑張ってえ」

「そうよ、宇都宮さん、私を助けると思って勝って頂戴よお」

一方、山口夫人も必死でした。また、智恵子先生の方も負けてはいません。

「駄目よっ、高松さん、負けちゃ駄目ですわよお。頑張ってえ——」

私も、自分の組が負けては大変ですから、精一杯の声を張りあげて応援しました。

「い、痛いわ。ヒィッ、許して……」

宇都宮夫人は、ちょっと、お尻を振って、相手を自分の方へ引こうとしましたが、悲鳴をあげて、すぐ止めてしまいます。

「宇都宮さん、そんな事じゃ駄目よ。うん、頑張るのよお」

「宇都宮さん、もう少し、力を入れて、十分に腰を入れて、ひと思いに、ぐいぐいと引くのよお」

ロシア将校たちも一緒になって、

「ウツノミヤッ」

「タカマツウー」

それはそれは、賑やかな応援合戦が繰りひろげられたのでございます。

「は、はい……」

宇都宮夫人の美しい乳白色の裸身に、みるみる紅色がさしてまいりました。

「圭子ちゃん、見てて、いくわよ。そーれ」

夫人は美しい齒を喰いしばり、高松夫人を睨みつけるようにして、お尻に力を入れ、ぐいと引いたのでございます。

「い、痛い、うーん、痛いわあーっ」

「宇都宮さん、止めてえ、ヒィッ」

二人は、せり出した妊婦腹を、更に前へ突き出し合い、絶叫しながら、必死になって、引き合っています。

二人の間に張った綱は、ピーンと張れるだけ張り、クリップではさんだ恥毛も、一直線に伸びるだけ伸びきっておりました。

宇都宮夫人の力が、いくらか強かったのでしょう。じりじり、じりじりと、夫人は後ず

さを始めたのでございます。

「ウワッ、ウワッ」

期せずして喚声があがりました。

「宇都宮ッ、ソノ調子ダゾッ」

「高松さん、どうなったの？ 負けちゃうわよ。しっかり……」

「宇都宮さん、最後まで頑張ってえ」

「馬鹿野郎ッ、タカマツ、負けタラ、浣腸ヲ

五本ブチ込ムゾ」

もう、その騒がしいことと云ったら、大変なものでございました。なおも、宇都宮夫人はじりじりと後ずさを続けています。

「宇都宮さん、そうよ、その調子よお」

声援に答えるように、宇都宮夫人は、一層力を入れるのでした。

「でも、とっても痛いよ。痛いわあ」

目はひきつって、全身に脂汗を流しながら懸命に頑張るのでした。

「高松ッ、ドウシタノダッ」

忽ち、高松夫人には、叱責の聲が浴びせかけられます。

「ウーン」

「ヒィッ」

二人は全身を白木の弓のように反らし、両脚を左右に大きく開いて、ありったけの力を

出し合っていました。

「宇都宮さん、負けちゃ、駄目よお」

「高松さん、頑張ってえ——」

見ている私たちも、引き合っている二人以上に、真剣でございました。勝負の結果は、後の厳しいお仕置に關係あるものですから、もう、それこそ必死でございます。髪をふり乱し、あらん限りの声を張りあげての声援でございました。

「ヒューッ、い、痛いよお」

「駄目だわあ、ああ、あああ」

二人は恥毛を引き抜かれるような激しい痛みを奥歯をかみしめて耐え、全身の力を一個所に集中して、気も狂わんばかりの甲高い呻きを発し続けています。

「皆さん、いくわよお、ヒューッ」

今度は高松夫人が攻勢に出ました。

「それーっ」

腰を一ひねりすると、一気に、ぐいぐいと引っ張ったのでございます。

「あっ、ま、待ってえーっ。あっ、あっ」

宇都宮夫人は、その勢いに負けて、ずるずるずるっと、引っ張られます。

「どうしたの、宇都宮さん、駄目よっ。我慢するのよお」

もう圭子ちゃんは泣き声をあげています。

「よいしょっ。これで、どう？ ウーン」

勢いにのった高松夫人は、悲鳴をあげながらも、ぐいぐいと引っ張り続けるのでした。

「駄目、駄目よお」

「ウーン、まだなのお、まだ終わらないのお」

「い、痛い、止めてえ、お願いです。ガガー」

リニコフさま、早く止めて、お願い」

二人は喚き続けるのでございました。

「バカ、ソノ位デ、ナンダァ、マダ3分シカ経ッテイナイノダゾ。アト5分ハ、チカラ一杯、タタカウノダ」

「ひえーっ、まだ、あと五分も……」

「ウルサイッ、文句ヲ言ワズニ、引ッ張りアウノダッ。チカラヲ抜イタリシテミロ、イツマデモ、ヤメサセナイゾ」

「は、はい」

「痛いよお、どうかして。いや、いや」

相変らず、高松夫人の方が優勢で、宇都宮夫人は、まるで幼な児が、いやいやをするように頭を振りながら、じわじわ、じわじわと高松夫人の方へ引きずり込まれて行きます。

「もう駄目だわっ。いや、いや、いや」

とうとう宇都宮夫人は、痛みに堪えかねて二歩、三歩と、たたらを踏んで、前へと引か

れたかと思うと、あとは走るように引き寄せられてしまったのでございます。

ピーッ、

「ヨウシ、ソコマデ。勝負ガアッタ」

ガガーリニコフ情報中尉が、試合の終了を命令したのでございます。

「ワァーッ、ワァーッ」

悲喜こもももの喚声があがりました。

むごたらしくも淫靡な、この奇妙きわまりない綱引き競争も、結局、高松夫人の圧倒的な勝利に終わったのでございます。

「あらあら、私たち、どうしたらいいの」

もう圭子ちゃんは、蒼ざめた顔で、泣きじやくりながら、山口夫人の胸に顔を埋めております。あられもない格好で、珍妙な綱引きをさせられた二人は、李さんにクリップを、はずしてもらおうと、くたくたと、その場へ座り込み、肩で大きな息をついております。

はあはあと喘ぐ、二人の肩口から背中にかけて、玉のような汗が噴いているのが、私は、不思議に美しく見えました。

☆

圭子ちゃん、山口夫人、それに今、綱引きをし終ったばかりの宇都宮夫人の三人が、部屋の本真中へ引っ張り出されました。三人は

……イメージギャラリー……『たばこをどうぞ』……四馬 孝……



嫌がって、懸命の哀願を続けていましたが、李さんに頭髪を握られて引きずり出されたのでございます。

それぞれの前には、バケツ、洗面器、新聞紙とともに、おぞましいように大きな馬や羊に使用する浣腸器が並べてあります。

「約束通り、今カラ賞品授与ヲ行ナウ。賭ケニ勝ッタ者ハ、二人一組ニナツテ、浣腸ヲシ

テヤルノダ」

ガガーリニコフ情報中尉は、淫虐な笑いを浮かべながら上機嫌の様子でした。

「試合ニ負ケテ、ミンナニ迷惑ヲカケタ宇都宮ニ対シテハ、俺タチが浣腸ヲスルカラ、圭子ト山口ニハ誰ガ浣腸スルカキメロ」

話し合った末、智恵子先生と私が、圭子ちゃんに、大坂夫人と高松夫人とが、山口夫人

に浣腸することにきまりました。

「ヨシッ、ソレデハ、浣腸ノ手本ヲコレカラ示シテヤル。ヨク見テイルノダゾ」

お八重さんは洗面器の中で、石鹼を溶かし浣腸液を作りはじめました。ガガーリニコフ中尉は、李さんに手伝わせて、宇都宮夫人を四つ這いにさせ、跪かせて、お尻を高々と突き出させたのでございます。

「宇都宮ッ、ウツムイテハイカン。顔ヲ横ヘ向ケテ、ニコライエフ司令官殿ニ、ハッキリトオ見セスルノダ」

顔を真赤にして、うなだれていた宇都宮夫人は、言われて仕方なく、愁いに沈んだ美しい顔を横へ向けたのでございます。

「中尉殿、どれ位作ればよろしいのですか」お八重さんが訊ねます。

「ウム、二〇〇CCヲ二本、ブチコムノダカラ、相当イルゾ。始メカラ二本作ツテオケ」二〇〇CCといいますが、牛乳瓶一本分以上でございます。それを二本も注入するのだから、本当に、悪魔の仕業でなくてなんでございましょう。中尉殿は、お八重さんから注射器を受け取りました。

「オイ、李トオ八重。オ前ラ二人ハ、宇都宮ガ暴レナイヨウニ、押エツケテオケ」

と命令して、夫人の足元に腕まくりをして仁王立ちになりました。

李さんは、夫人の二つに割れている豊かな双丘を、力一杯、左右に押しひろげるようにして押えつけます。お八重さんは、お八重さんで、司令官殿の方を直視するように、夫人の顔を真横に、ねじ向けたのでございます。

「イクゾ、カクゴハイイカア」

「お止めになって。どうか、お許しを……」

それまで、ずっと蚊の鳴くような弱々しい声で哀願し続けていた宇都宮夫人でございましたが、中尉の声に、もう観念し切ったのでしよう。目を閉じ、黙ってしまいました。

「奥さん、目は開けておきなさいと言ったでしょう」

お八重さんは、夫人の髪をぐいと引っばって、いためつけ、顔をゆさぶって、無理矢理目を開けさせるのでした。

ガガーリニコフ情報中尉の手が、形のよい夫人のお尻にかかりました。と、太い毛むくじらの腕が、夫人の可憐な菊の花めがけて大きく弧を描いたのでございます。

その刹那――

「あっ、うっ、入ったのねえ、ああっ」

魂切るような悲鳴が、夫人の口から切なく

洩れたのでございます。流腸器の嘴管の先に何も塗っていなかったからでしょうか。

それとも、恐怖で筋肉を引きつらせていたのでしょうか。嘴管の先がきしんで、なかなか中へ入りません。

「い、痛いっ、引きつるのよお」

「奥さん、何も怖わがることなんか、ないのよ。お尻の力をすうっと抜いてご覧なさい。

わけなく入るわよ」

お八重さんは、夫人の耳元で囁きます。

「コレデモ入ラナイノカッ」

中尉は、力一杯、ぐっと一気に挿し込んだのでございます。

「あっ、あっ、きついわあ」

中尉は無造作に、ピストンを、ぐぐぐと押し込みます。

「あっ、あっ、ひいーっ」

夫人は悲痛な叫び声を洩らし、顔をゆがめています。そんなことに、お構いなく、最初の一本目は、忽ち注入し終わりました。

「オ八重、モウ一本ダッ」

中尉は、お八重さんから新しい流腸器を受け取ると、また、力まかせに、ずぶりと突っ込んだのでございます。今度は石鹼液で濡れているので、前よりは楽のようでした。

「うっ、うっ、もう止めてえ。お腹が張り裂けるわあ、く、苦しいのよお」

四〇〇CCもの液体を一気に注入されるのですから、たまったものではありません。

夫人は苦痛に顔をゆがめ、奥歯をかみしめて耐えていらっしゃいます。せりだした妊婦腹が、一きわ膨らみ、大きく波打っているようです。ございました。夫人の体内に入りきらなかった流腸溶液が菊の花に溢れ、お尻のまわりをビッシヨリと濡らしています。流腸器を引き抜くと、中尉は脱脂綿を李さんに渡し、菊の花のところへ当てがっておくように命じました。

「イイカッ、宇都宮ッ、デキルダケ、長ク我慢スルノダゾッ」

宇都宮夫人は流腸器を抜かれた時から、「出そうなの、お願い。……させて……」

身を揉んでいましたが、すぐにさせてくれないと知って泣き声をあげました。

「すぐではいけませんの？……」

「当リマエダッ、三十分デモ一時間デモ、我慢デキルダケ我慢スルノダッ」

「ひいーっ、とても、そんなに我慢できないわよ。うっ、うっ……」

李さんは動きまわる、お尻をがちり押え

つけ、脱脂綿で蓋をしながら、菊の花を上手に揉み続けているのです。

「奥さん、そんなに苦しいの。折角の綺麗な顔を、そんなにゆがめては台なしだわ。旦那さんに見せたら、なんと言うかしらね。オホホホ……」

お八重さんも、夫人の髪を、しっかりと握んで、苦痛にあえぐ泣き顔を、将校たちの方へ、ねじ向けているのです。

「もう駄目、出るのよお、出るのよっ、ひいっ、く、苦しいっ」

かん高い絶叫が、がんと天井に反響します。必死の力で、お尻をよじるので、さすがの李さんも、もて余し気味です。

「コラッ、モット我慢センカッ」

怒鳴りつけて、全身の力で押えつけようとするのですが、その手を夫人のお尻は、すぐ振り切ってしまうのでございます。

「出したいのよ。お腹が裂けるようだわあ、ひいっ、もう駄目、駄目よっ、駄目よっ、させてえーっ、ああっ」

絶叫は最高潮に達しました。

「ヨシッ、宇都宮ッ、出シテヨロシイ、ソノバケツニ、ソノママスルノダ」

「あ、ありがとうございます。ひえーっ」

排泄の許しの言葉をきいた宇都宮夫人は、李さんや、お八重さんの手を振りきるようにして跳ね起き、恥かしさも、うち忘れてバケツに跨りました。

「あ、ああっ、出るわあ、漏れちゃうわ」

悲鳴と共に、バケツを叩く激しい音が、部屋中に響いたのでございます。

☆

「ヨシッ、コレデ、浣腸ノ要領ハ、ワカッタダロウナ、アノヨウニスルノダ。サア、二人ニ、浣腸ヲシテヤリナサイ」

ガガーリニコフ情報中尉は、山口夫人と圭子ちゃんを指さしました。二人は、宇都宮夫人に対する凄まじい責めを見せられ、真っ青になって呆然と突っ立っています。

「恐いわお」

「私、とっても、出来そうにないわ」

二人は恐怖のあまり、ぶるぶると、ふるえているのでした。お八重さんは、二人の前に道具を並べました。

「先ず、石鹼水を作りなさい。二〇〇CC入れるのですよ」

「先生、私が作りますわ」

私は、お八重さんから石鹼を貰い、洗面器に、お湯を注いで溶かし始めました。

「濃度は、どれ位がよろしいのですか？」

「そうねえ、あんまり濃くしても、圭子ちゃんの器管を傷つけるし、そうかと言って、薄すぎても効き目がないからねえ」

先生は、私が石鹼を温湯に溶かすのを、じっと見ていましたが、「もう、それぐらいでいいようねえ」と、泡の立ち具合をみて判断して下さいました。

「先生、浣腸は、どうしましょうか。なんでしたら、私がしてもよろしいですけど」

「そうねえ、でも、いいわ。私がしてあげましょう。晶ちゃんは、圭子ちゃんのお顔を、持っていてね」

私にそう言われて、圭子ちゃんに対して、「圭子ちゃん、先生が上手にしてあげますからね。何も、心配しなくてもいいのよ。さあ用意してごらんなさい」と促しました。

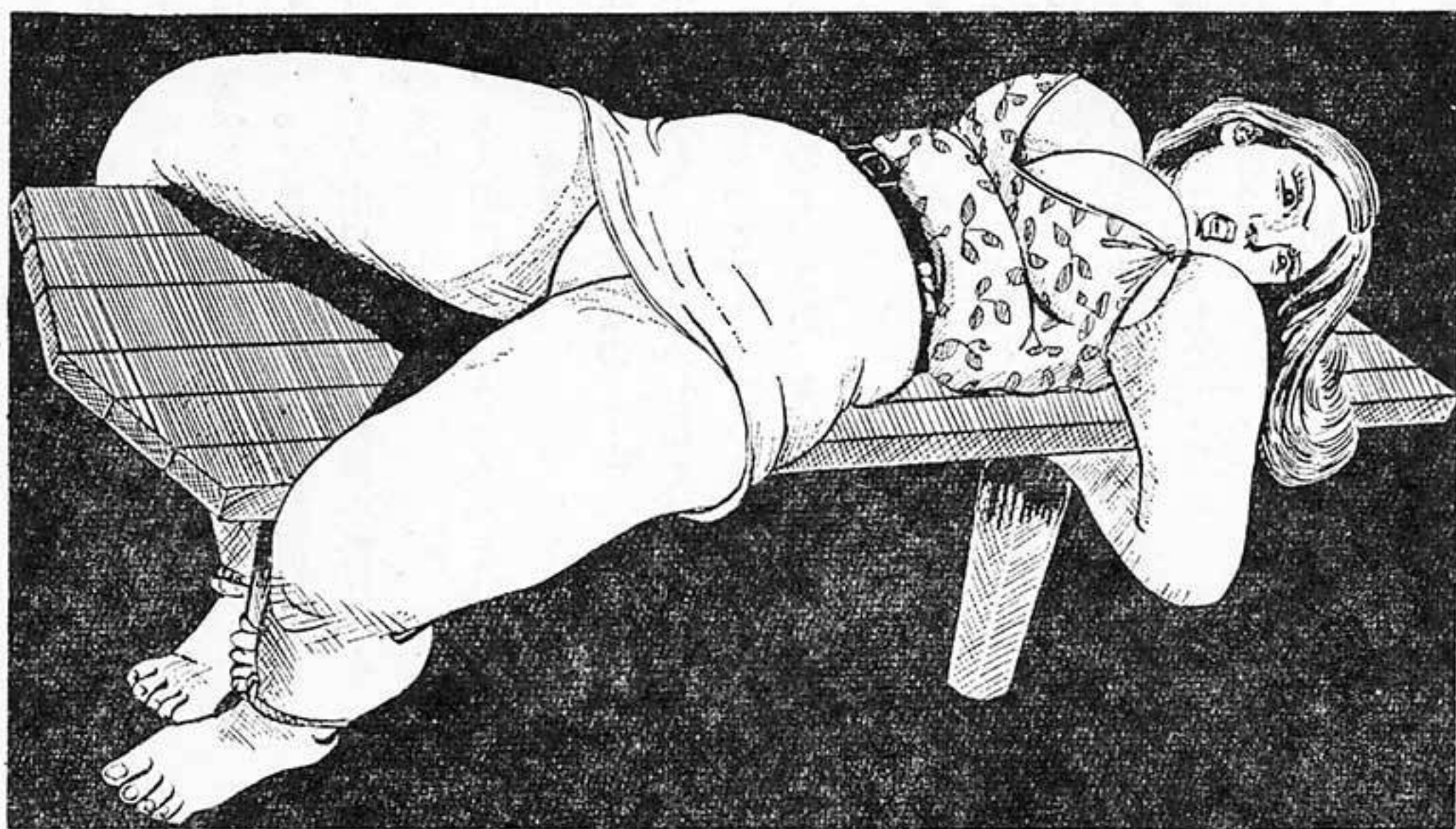
「でも、先生。圭子、恐いのよ。それに、人前で浣腸されるなんて、恥かしいわ」

圭子ちゃんが先生に甘えきらない態度で、もじもじしているのを見て、先生は、

「なにを言っているのよ。圭子ちゃん、先生が痛くないようにしてあげるって、言っているでしょ。だから、ね……」なだめます。

「だってえ……」

イメージギャラリー 『近づく足音』 南部 紅



「圭子ちゃん、もう諦めなさい。あなたが、賭けに負けたのが不運なのよ。それに、私たちは、もう敗戦国の奴隷なのよ。命ぜられた通りにしなくっちゃ、また、どんなひどいお仕置を受けるか、わからないのよ。あなた、それでも、いいの」

「いやよ、それもいやよ」

「そうでしょ。お仕置を受けるのが嫌だったら、先生の言う通りにするのよ。見てみなさい。山口の奥さんなんか、もう、ちゃんと、用意なさっているでしょう」

山口夫人の方も、もう準備が出来たのでしょう。さっき、宇都宮夫人がしたように、山口夫人をうつ伏せにし、頭の方へ大坂夫人がまわり、お尻の方へ、高松夫人が浣腸器を持って構えていました。

「圭子ちゃんは、上を向いてしましようか。圭子ちゃんも、赤ちゃんの時、よくして貰った覚えがあるでしょう。あのように、上を向いて足を高く挙げるのよ。さあ、早く、上を向いて寝なさい」

圭子ちゃんは、諦めきれない表情で渋々床の上に寝ました。

「晶子さん、圭子ちゃんのお尻の下に、新聞紙をひろげておいてね」

先生は、浣腸器に液を入れながら、おっしゃいます。智恵子先生の手元を、じっと李さんが見つめていて、途中で、先生がもう止めようとされましたら、目ざとく見つけて、

「コラッ、マダ、オワリマデ入ッテイナイジヤナイカ?」と、叱りつけました。

「さあ、圭子ちゃん、両方の脚を高く挙げるのよ。そうそう、そのようにして……」

先生は、圭子ちゃんの足元へ座り込まれました。でも、いくら悲しい覚悟をしているとはいうものの、いざとなると、恐怖心が湧いてくるのでしょう。

「先生っ、私、とても受けられそうもありませんわ。いやよ、いやよ。浣腸だなんて」首を左右に振って訴えるのです。

「そんな無理を言うものじゃないのよ。圭子ちゃん、早く早く、両脚を挙げて、先生の肩にのせなさい」

「いやよ、いやよ。そんな太い浣腸器なんて圭子のお尻、裂けちゃうわぁ」

「大丈夫よ。先生が優しく、全然、痛くない

ようにしてあげるから……」

「それに、二〇〇CCなんて、圭子のお腹に入るの、圭子のお腹、とっても小さいのよ」

圭子ちゃんは、心配の種を、あれこれと、いろいろ並べるのです。

「大丈夫だって言ったら、先生を信用しなさい。ほれ、もう山口さんは、浣腸を受けてらっしゃるのよ」

隣の山口夫人の口から、うっうっという呻き声が洩れてきました。

「先生、本当に大丈夫なの……」

「圭子ちゃんも、しつこいわねえ。先生が、ああ、おっしゃって下さっているのだから、おまかせするのよ。さあ、先生の肩に脚を乗せなさい」

私も圭子ちゃんを軽くたしなめました。

「先生、痛くないようにして下さいね」

「はい、はい」

山口夫人の呻き声は、いつしか苦痛を訴える悲鳴にかわっていました。

「さあ、圭子ちゃん」

智恵子先生に、何度も促された末、やっとしぶしぶ脚をあげ、先生の肩の上に乘せたのでございます。

「晶ちゃん、始めますからね。圭子ちゃんが

暴れないように、肩を押えておいてね」

ロシア軍将校たちは、周囲を取り囲み、のぞき込んでいます。圭子ちゃんは恥かしそうに、目をつぶりしました。

「駄目よ、圭子ちゃん、目は開けておきなさいって、中尉殿がおっしゃったでしょう。私の顔を、じいっと見ていなさい」

私は圭子ちゃんの顔を、指先で軽くつついて注意しました。

先生は、しばらく圭子ちゃんの、まるで花の蕾のような淡いピンク色をした菊の門を、やわらかく揉みほぐしておられます。

圭子ちゃんの頬に、ぽおっと、うっすら紅がさしてきました。

「先生、そこをいじられると、圭子、とっても、いい気持ちなの……」

圭子ちゃんは、うっとり目を細めているのでございます。

「そうでしょう。だから、先生がなんにも、恐ろしくないといったでしょう」

「ええ」

「このように、先生が、ちゃんと上手にしてあげますから、安心してらっしゃい」

「お願いします。ああ、お願いします」

先生は浣腸器を上へ向け、ちよっとポンプ

を押して、液を出し、嘴管の先をしめらせ、余った液を指へつけて、菊花の入口を濡らしました。

「晶ちゃん、さあ」

先生が目くばせをなさいました。

「はい、先生」

私は、それに応えて、肩を押えていた腕に力を入れたのでございます。

「圭子ちゃん、いくわよ、いいのね」

それを聞くと、圭子ちゃんは、さっと、細かい体を硬直させ、お尻をのけぞらすようにして、つつぱります。

「駄目じゃないの、圭子ちゃん。そんなに体を固くしては、浣腸ができないわ。先生に、まかせておきなさいって、言ったでしょう。全身の力を抜いてご覧なさい」

「でも、圭子、やっぱり恐いの……」

「何回言ったら判るの？ 圭子ちゃんたら、ききわけのない子ねえ、最後には、先生だつて、怒るわよ。先生が気持ちがいいようにしてあげるって、あれほと言ってるでしょう。

さあ、体の力を抜くのよ。先生の肩に両足をそっと乗せておくだけでいいの……」

「はい」

「そう、そう、もっと柔らかくならないの。

肩の力を抜くだけじゃ、駄目。かんじんの、お尻の力を抜かなくっちゃ、駄目よ。お尻をすんと床の上に落してごらんないさ」

「そうですの？」

「それでいいのよ。体を固くしていたら、かえって苦しいのよ」

智恵子先生は、そうおっしゃりながら、じろわりと、可愛い菊の蕾を、もみ続けていらっしやいましたが、圭子ちゃんの力が、ふっと抜けた頃を見抜き、嘴管を菊の花にあてがわれるのでした。

「いい？　いくわよ」

先生は、両手でポンプを持たれて、そろそろと、挿し込み始めました。

「う、う、うっ」

一瞬、圭子ちゃんは、眉をひそめ、小さな呻きを唇から漏らしました。拇指ほどもある太さの嘴管が、アヌスに呑み込まれるように少しずつ姿を消してゆきます。

「どおう？　圭子ちゃん、先生が流腸したらちっとも痛くないでしょう」

「ええ、でも、なんだか変な気持がするの」「そら、そうでしょうね。こんなに太いガラス管が入っていくのですもの……」

山口夫人は、もう耐えきれなくなったので

しょう。がばっと起き上るなり、悲鳴をあげながら、バケツに走り寄りました。忽ちにして、激しい潑音が響きわたりました。

ぶち、ぶち、ぶ、ぶ、ぶちっ……。

「先生、まだ入らないの？」

「いいえ、もう全部、入ってしまったわ」

「本当？　圭子のお尻、張り裂けなかったのねえ……」

「だから先生が大丈夫っていったでしょう。今から、お薬を入れるから、お腹の力を抜いておくのよ。お腹に力が入っていると、お薬が逆流しちゃって、とっても、しにくいの」

「はい」

智恵子先生は、ゆっくりと、ポンプを押してゆきます。

「あつ、今、お薬が入りだしたのね」

「そうよ、どんな具合なの」

でも、二〇〇CCというと、相当の量でございます。圭子ちゃんの、か細い体には、とても耐えきれない程のものなのでしょう。次第に苦悶の表情を浮かべてまいりました。

「先生、まだですか？」

「まだまだよ。圭子ちゃん、まだ半分も入っていないのよ。これ位で泣き事をいつていたら、どうなるの。しっかりしなさい」

「先生、圭子、苦しくなってきたの。なんだか、お腹の中を冷たい棒で、ぐるぐる掻きまわされているみたい……」

圭子ちゃんは、ようやく、お尻をよじった、のけぞらせたりし始めました。

「駄目よ、圭子ちゃん。お尻を動かしたら、先生のお仕事が、とっても、しにくいの」

「だってえ、圭子、たまらないんですもの。まだ終わらないの、ねえ、先生！」

「もう少しよ。だから我慢して、じっと、静かにしてるのよ」

「圭子ちゃん、宇都宮さんは、二本も流腸されたのよ。貴女は、その半分でしょ。ねえ、我慢できるわねえ」

私も横から口をはさみ、圭子ちゃんをはげましました。

「だって、圭子のお腹、とっても小さいんですもの。うっ、ううう、まだなの……」

「はいはい、もう直ぐですよ」

「早くしてえ、お腹の中を、ぐるぐると、お薬が走っているのが、よく判るのよお」

圭子ちゃんの、か細いお腹が、心なしか、少し大きくふくらんだように見えます。それで一層、お臍が可愛いくまりました。

「そんなに、圭子ちゃんが言うのだったら、

早く済ませましょうか。そのかわり、ちょっと痛いかも知れなくってよ」

「構わないわ、先生。早く、早く、してえ」

先生は、ピストンを押す手に力を入れ、残っていた液を一気に注入してしまいました。

圭子ちゃんは、一瞬、のけぞらんばかりにそり返って、かん高い悲鳴をあげました。

「あっ、あ、もう、終わったのっ？」

「ええ、もう済んだわよ、圭子ちゃん。よく頑張ったわねえ、二〇〇CCが一滴も残らず貴女のお腹の中に入ってるのよ。じゃあ、今からは、出来るだけ我慢するのよ。いい、先生がしっかり口をおさえてあげますからね」

智恵子先生は、浣腸器を引き抜かれると、肩にかかっていた圭子ちゃんの脚をはずしました。そして脱脂綿を取って、菊座を揉みながら、片手では、お腹をやさしく、さすってあげているのでございます。

「圭子、もう出そうなの……」

「駄目駄目、今、浣腸が終わったばかりじゃないの。一時間位、頑張るつもりで、我慢しなさい。圭子ちゃんだったら出来るでしょ」

山口夫人に対する浣腸責めに興味を持って見ていた将校たちは、その方が終わったので、みんな、わたしたちの周囲に集まってまいり

ました。

「圭子ッ、ウント頑張ルノダゾ、オ腹ノ中ヲ綺麗サッパリトシテヤルノダカラナ」

ガガリーニコフ中尉は、しゃがみ込んで圭子ちゃんのお腹をさすりはじめました。

「はい」

苦痛に顔をゆがめながらも、圭子ちゃんは健気な返事をしました。でも、決心とはうらはらに、圭子ちゃんのお腹は、次第次第に、大きく波うってきたのでございます。

「うーん、うーん」

苦痛をこらえる呻きは、いつしか、身をよじるような悲鳴にかわっていました。

「ひえーっ、もう我慢できないわあ。晶子お姉さま、許して。肩をはなして……」

全身を縄のようによじり、必死になって耐えているのでございます。体中、べっとりとした脂汗が噴きでていました。私はありったけの力で、圭ちゃんのお尻をおさえつけました。

「圭子ちゃん、我慢するのよ。両脚に力を入れて、お尻をぎゅっと、すばめてごらん」

「それが出来ないのよ。ひーいっ、先生、もう駄目だわ」

あの小柄な体のどこに、あのような強い力が潜んでいるのでしょうか。すらりとした両

脚をばたつかせ、押えようとする先生を、はね飛ばさんばかりの勢いでございます。

「圭子ちゃん、おとなしくして頂戴っ」

智恵子先生も髪をふり乱して、声を上ずらせながら、お尻に蓋をしている手を放すまいと一生懸命でございました。

「ヨシッ、ワシガ手伝ッテヤルゾ」

李さんは、お八重さんに目くばせして、二人で片方ずつの足首を握り、左右に大きくひろげて圧えつけてしまったのでした。

「ひいーっ、もう出るわあ。させて、早く。」

させてえー、出させてえー

「ウルサイッ。ツベコベ言ッテイタラ、モウ一本、ブチ込ムゾ」

李さんは、残忍な笑いを浮かべながら、怒鳴りつけ、更に脚を大きくひろげさせ、可憐な日本の乙女の秘境を楽しみました。

圭子ちゃんは、肩と両足を押えつけられたまま、真白い裸身をよじったり、突きあげたり、それは凄まじい暴れようでした。

「ひゃーっ、もう駄目っ。本当よ、先生っ。」

駄目よ、駄目よ。手をのけてえー

それでも構わず、先生は、お腹とお尻を、執拗に揉み続けるのでございました。

「圭子ちゃん、我慢すればするほど、後が気

持いいのよ。だから、ねえ、もう少し、辛抱してご覧なさい」

「いや、いや、そんな事、無理よ。ひいー、早く、早く、バケツを。早く出させてー」

「バケツでなくていいの。圭子ちゃんは、そのままでもいいのよ」

「うっ……く、苦しいの。だって、そんなことをしたら、汚してしまうでしょう」

「構わないのよ。先生と晶ちゃんとで、ちゃんと綺麗にしてあげるから、だから、起きなかつたって、いいのよ。出しなさいよ」

「でも、そんなこと、恥かしいわ」

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めま

「恥かしいって、なんて言っているのだからまだ我慢できるのねえ、どお、こちらあたりが、ゴロゴロいうのでしょうか」

智恵子先生は、そう言われながら、意地悪をするように、圭子ちゃんのお腹のあちこちを、ぐいぐいと押すのでございました。

「あっ、止めて、止めて。先生、もう我慢できないう。先生、手をのけてっ。ひーいっ」

圭子ちゃんは、顔を真っ赤に紅潮させて、この世のものとも思われないような絶叫をあげたのでございます。

「李さま、お八重さま。圭子も、もう最後の

す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

ようでございますわ。済みませんが、脚をいっぱいにひろげたまま、高くあげ、お腹の方へ引きつけて持っていただけませんかしら」

圭子ちゃんの裸身は、丁度、お尻を中心にして△逆くの字▽になりました。

「あっ、そ、そんなにしたら、お腹が圧えつけられて苦しいわあ。あっ、あーっ、お尻に力が入らないのよ。先生、先生、もう駄目。どうしたらいいのよ。もう、ああ……」

「圭子ちゃん、もういいのよ。遠慮しないで出してご覧。思いっきり沢山、出すのよ」

「でも、こんな格好で。ひいーっ」

「いいのよ、いいのよ。さあ、出しなさい」

「あっ、あっ、うえーっ、う、う、うう」

圭子ちゃんは、がくんと、大きく裸身をゆすったかと思うと、びくびくと痙攣させてから、一挙に全身をぴんと硬直させました。

「ひいーっ、あっ、もう出るわあ……」

智恵子先生は、圭子ちゃんのお尻を押えていた手を、さっとのけました。

そのとき圭子ちゃんの絹を裂くような高い絶叫とともに、噴水のように勢いよく糞塊の混じった液体を噴きあげたのでございます。

——(この項おわり)——



若くて美しい女の先生の下着は妖しい魅力をもって、少年の心をつかんだ。

白と赤のバラード

穂^ほ 積^{ずみ} 元^{げん} 司^じ

春が遅いといわれる奥飛驒のT市にも、ようやく春が訪れて桜の蕾が膨らみ始めた。二郎は市内のH高校の3年に進級した。H高校は有名な進学校である。そのH高校に、新しく就任した、今年、女子大を出たばかりだという先生が、今日、二郎の家に来ることになっていた。

二郎は朝からワクワクしていた。二郎の家は、人に部屋を貸して、金をとって生活しているわけではなかった。父は、やはりH高校を卒業してから、名門N大の医学部を出て、T市立病院の院長をやっていたし、H高校の校友会の会長もやっていたので、いわば好意という形で、H高校に

新しく赴任してきた先生のために、当座の部屋を貸しているわけであった。

二郎の家は、市内の北の高台にある。見晴らしのいい、二階建ての豪華な屋敷である。

門から玄関までは、白玉砂利が敷かれてあり、広い庭の周囲には、緑したたる樹々が生い繁っていた。部屋の数も、五人や十人の人に貸しても余るくらい何室もあった。

彼は二階の一番奥の十二平方メートルの洋間を使っており、今度新しく来る女の先生は、二郎の部屋とは廊下を隔てて、斜め向いになる八帖の和室を使うことになっていた。

その部屋は、二郎の母親の手によって、すでにきれいに掃除され、床の間には、フリージャの花が活けられて、パツと急に明るくなったような感じであった。

昼過ぎになり、二郎の家の前に、荷物を積んだ小型トラックが停まった。

真新しい洋服ダンスや白いベッド、鏡台などが、その荷台に積み込まれてあった。

「二郎、二郎。ちょっと手伝っておくれ」
階下から母の呼ぶ声がした。

ベッドに寝ころんで漫画を読んでいた二郎は、あわてて階段を降りて玄関に行った。

「ああ、これが息子の二郎ですよ。お話ししたような我儘な子ですが、どうか、よろしくお願いします」

母が、黒のニットのパンタロンスーツを着ている目もとのぱっちりした美しい女性に向かって言った。薄い化粧を施した顔は、いきいきと涼しげだった。

「今度、H高に勤めることになりました立花恵美子と申します。どうぞ、よろしく」

二郎は、あんまり、その女性が美しいので一瞬、ぼうとして先生の顔を、じーっと見ていたが、返事していいことに気がつき、あわててペコリと頭を下げた。

「こちらこそ、よろしく、お願いします」

二郎は凄い美人の先生だと思った。

たいした荷物でもなかったし、運送屋がほとんど部屋まで運んでくれたので、二郎が手伝う程でもなかったが、スタンドとかケース入りのフランス人形、学校のネーム入りの時計などは大事に抱えるようにして運んだ。

殺風景だった八帖の部屋は、たちまち一転して、はなやかに変わった。

窓側の隅にベッドが置かれ、壁際に洋服ダンスや鏡台が置かれると、見違える様になった。如何にも若い女性の部屋らしくなった。

停年勇退した老教師の後任として、新しく赴任して来た立花恵美子は、たちまち、H高では評判の人となった。休み時間になると、校内は彼女の噂で、いっぱいだった。

ちよっと栗色がかったセミロングの、やわ

らかそうな髪に、涼しい目もとが不思議に似合っていてチャームキングだった。

笑うと、かわいい口もとから、真白な歯がこぼれるのが、いかにも健康的だった。

「おい、二郎よ。今度来た、立花って先公、いい線、いってると思わねえかよ」

悪友の平川が二郎に話しかけた。

「まあな。でも、俺の好みじゃねえや」

二郎は心にもないことを言った。

☆

立花恵美子が、二郎の家に来てから、無口だった二郎の父も、よく喋るようになった。

二郎は、彼女が来てから家の中に、美しい花が咲いたみたいなきがした。

時々、学校から早く帰ってきた時など、台所で母を手伝って、夕餉の仕度をする花模様のエプロン姿の先生が、二郎には、まぶしく見えて仕方がなかった。

「うちの二郎もねえ、貴女みたいな素敵なお姉さんがいるとねえ、少しは我儘も、直ると思うんですけれど……」母が言うのと、

「あーら、おばさま。私みたいな未熟な先生が来て、二郎さんに、悪い影響を与えるんじゃないかと、心配していますのよ」

恵美子は、ピンク色の舌をペロツと出して首をすくめてから微笑んだ。

☆

恵美子が二郎の家に来てから一カ月余り経った。ゴールデンウィークの連休に、彼女は実家のある東京へ帰っていった。

二郎は、先生がいなくなったあと、面白くなかった。部屋を出て、そーっと先生の部屋の襖を開けてみた。中から、プーンと甘酸っぱいような若い女特有の匂いがする。

化粧品の匂いと体臭のミックスした魅惑的な臭いであった。二郎は、たまらなくなつて部屋の中に忍び込んだ。

白いベッドの上に、きちんとたたんであるピンクのネグリジェが目に入った。傍の机の上には、国語の教科書やノート、辞書などが置かれてある。大きな黒い熊のぬいぐるみがタンスの上で、こちらを向いていた。

二郎は、恐る恐るベッドに近づき、彼女が毎日、着て寝ているピンクのネグリジェを取り上げてみた。やわらかなナイロンの布を、鼻先へ持ってゆくと、全身がぞくぞくとするような、いい香りがした。

「ああ、あの立花先生は、このネグリジェであの白い体を包んで眠るのだ」

そう思うと、二郎はたまらなくなつた。自然に二郎の手は、洋服ダンスの一番下の抽出しにかかっていた。

軽く引くと、こぼれそうな位に、色とりどりの下着が詰っていた。ふるえる手で、二郎

は、きちんとたたまれていた小さな布きれを取りあげてみる。それは、とても、やわらかそうなナイロンパンティであった。

二郎の胸は激しく動悸を打ち、ある部分はまだ、はち切れそうになっていた。

「ああ、こんな奇麗なパンティを恵美子先生は、はいているんだな」

そう思いながら、右手を少し動かしただけで、桃源境はすぐに訪れた。

畳の上に放出された快楽の副産物を見て、罪悪感と自己嫌悪に陥った。ティッシュペーパーで、それを拭きとり、パンティを、もとの場所へ返して部屋を出た。

「ああ、俺は、とうとう、恵美子先生を汚してしまった」

彼は、ベッドに寝ころんで、そんなことを思っていた。

☆

恵美子が東京から帰ってきたその日、二郎は、まともに先生の顔が見れなかった。しかし、下の部屋から聞えてくる彼女の屈托の笑い声で、二郎の心は明るくなった。

二郎の部屋のドアがノックされた。

「誰？ お母さん？」

「私、立花よ」

ドアの向側から先生の声がした。二郎は、一瞬、ドキッとした。下着のことが、バレた



のかなと思ったが、すぐ平静を装って、ドアの所へかけ寄り、ノックを回した。

暫く見なかった恵美子先生の秀麗な笑顔が二郎の目の中に飛び込んで来た。

「まあ、ちらかしているのねえ」

部屋へ入ってくるなり、先生は、きよろきよろ見まわしながら言った。

「何してたの、勉強？」

「ええ、まあ——」

二郎は椅子に腰をおろしながら答える。先生は二郎のベッドに腰をおろした。白いブラウスに、紺のミニスカートという清楚なスタイルが、よく似合って美しかった。

「わからない問題があったら、いつでも聞きにきなさいよ。数学や理科系の科目は駄目だけど、あとは大体わかるわよ」

恵美子は、ミニスカートから出ている白い膝小僧を手でかくすようにしながら言った。

二郎は彼女が他愛もない雑談をしにきたとわかって安心した。暫くして出ていった。

安心感が訪れると同時に、二郎は大きな溜

息を、ふーっと、ついた。

「ああ、今の紺のミニスカートの下には、先生は、どんなパンティを、穿いていられるのだろうか？」

二郎は、清楚な恵美子先生の白い体を思い浮かべて、独り興奮していた。

☆

次の日、二郎は頭が痛いと思病を使い、学校を休んだ。どうしても恵美子先生の下着が欲しかったからである。

恵美子は、いつものように学校へ行った。

母が、二郎の部屋へ頭痛薬を持ってきて、置いていった後、二郎は、そーっと、部屋を抜け出して恵美子先生の部屋へ忍び込んだ。タンスの一番、下の抽出しを開けてみる。華やかな下着が一杯、詰っている。

ピンクの小さなナイロンパンティや、肌色のパンティストッキングからは、ぷんと香水の香りがする。隅っこの方には、水色の生理バンドが、きちんと折りたたまれていた。

二郎は、今日は恵美子先生が昨日、穿いて

いた下着が、どうしても欲しかった。多分、先生は、今朝、下着を取替えただろうと思っただ。そおっと、押入れの戸を開けてみた。

「あった。こんな所に——」

二郎は、小躍りしそうになった。押入れの下段に置かれてあるプラスチックの洗面器の中に、溢れる程の下着が入れてあった。

ふるえる手で、洗面器をとり出して、まるめられた白いナイロンのスリッパをつかむ。

まるめられたそれからは、白のブラジャーと、肌色のパンティストッキング、そしてお目当てのパンティがころげ落ちた。

二郎の、その部分はすでに激しく変化しており、口の中は、からからに渴いていた。

パンティは、薄いブルーのナイロン製で手の中に入るくらい小さく、ふちにはバラの刺繍が施されてあった。しっとりとしたそれを裏返して、彼女の恥かしい部分を覆っていたナイロンの二重になった、底の部分を覗いてみた。

同じ薄いブルーのパンティの底の部分は、ある色に変化さえしていた。

（あの美しい女神のような彼女も、やっぱり人間だった）

その底の部分を鼻腔にあてがう。

（ああ、昨日着ていた紺のミニスカートの下には、このパンティを穿いていたんだな。こ

んなに、ひどく汚して……）

二郎は、クンクン鼻をうごめかして匂いを嗅いでから、その部分を唇に当てて、ちゅっちゅっと吸った。

「むむっ、ああ、恵美子先生——」

二郎は、たちまち佳境に陥った。

☆

夏休みが、もうすぐだという、七月半ばの暑い日だった。土曜日だったので、二郎は、いつもより早く、家に帰った。

家に着くと、珍しいことに、鍵がかかっていた。牛乳箱に入っている、鍵で扉を開け、すぐ二階へあがり、恵美子先生の部屋へ飛び込んだ。彼女は、今日は午後、職員会議があるので、夕方まで帰って来ない。

それが二郎を、一層、大胆にさせていた。このごろの二郎は、洗濯されてしまった彼女の着では、刺激が薄くなったので、もっぱら、彼女が穿いて汚したままの下着ばかりで、悪い遊びをしていた。

そおっと、押入れの戸をあける。

もう何回もやっていることなのに、未だに二郎の心はドキドキしているのだ。

洗面器の中に、つましげに、まるめられたブルーのナイロンスリッパを取り出して、ひろげてみた。中から、湿っているピンクのナイロンパンティと、肌色のパンティストッ

キング、それに、白の綿のブラジャーが、こぼれ落ちた。

洗面器の底には、まだ何か布きれが残っていた。取り出してみると、それは黒いナイロンの生理バンドである。

裏返してみると、底の部分のゴムは、ひどく汚れ、異臭をプンプン放っていた。湿っているピンクのナイロンパンティを、つまみ上げ、いつものように、これも裏返しにしてみる。

「今日は、どれぐらい汚しているかなあ。このところ、毎日暑いから、あの部分もむれて大分、汚れているのと違うか」

そんなことを思いながら、二郎は、二重になったピンクの底を、しげしげと覗き込む。

底のナイロンの二重になった部分を、縦に走るように描かれている黄褐色の染み。

そして、その染みの中に、たった一本の縮れた黒い若草が一層、二郎を亢奮させた。

その中心の部分を鼻に近づける。

そして、思い切り、臭いを吸い込む。

（ああ、あんな美しい女の人でも、こんな色に汚れている。それに、この凄い香り）

白い液体が宙に舞い畳の上にひろがる。二郎は、「むむっ」と声を上げていた。

——（おわり）——

「毬子の手記より」

愛^{いと}しの風^{ふう}船^{せん}妊^{にん}婦^ぶ

高原

薫

(カットも)



今日は、ふとした事で見つけた毬子の手記のことを、お話ししよう。

例の山荘の洋間の額が、少しゆがんでるのを、直そうとすると、うしろに黒表紙大版のノートがあったんです。

それが私の知らない間に書いた『プレイ日記』なのがあった時は、前に祖父の『佐渡日記』を見つけた時と同じ位、うれしかったですヨ。

全部というわけにも参りませんので、その中から、いくつか拾ってみることにします。

×月×日 晴

今日は、とんでもない物で、浣腸されました。いつもの様に大量浣腸で、お腹が空っぽになり、ぐったりしていると、あのひとがニヤニヤ笑いながら、色んな器具を湯船の横の棚に並べたので、オヤツと思っていると、

「今日は一寸変わった物、入れてあげるヨ」

金魚鉢程もある大きなビーカーに入った、どろっとした液体を見せるのです。

聞くまでもなく、バリウムだということ
はすぐわかりました。胃や腸の具合を調べる
あれですが、口から入るものを逆にお尻から
入れ様というのです。

「いやだわ、こわいわ。お腹、どうかなるん
じゃない？」

口では、だだをこねてるのに、体の方は仕
付通りに反応して、丸々としたお尻が自然に
上ってしまうのでした。

クリームでもつけてあるのか、細目のホー
スがヌツ、ヌツ、と入ってくるのがアヌスに
ピンピン感じます。

しばらく、そんな状態が続いてたので、ず
い分、お腹の奥の方まで入った様です。

大型の水鉄砲をポンプにしてバリウムが
グウツ、グウツ、と押し込むようにして入っ
てくるのが、よくわかります。何となくジ
ンとした冷たさが、お腹にひろがってきて、
あまり、いい気持ではありません。

どれ位入れられたのかわかりませんが、と
っても、お腹が重いんです。お湯の大量浣腸
よりドボツとした重い感じですよ。

(入れたのは一〇〇〇CC位ですから目方に
して一・五キロ足らずですが、液体じゃなく
半固体だから重く感じるんですネ)

立ち上ってみると、お腹はボツテリ膨らん
で、空気妊娠の時とは全然、形が違うし、何
かムカムカするし……。

でも、あのひとが、そうしろということな
ら、がまんするわ。それに優しく体をふいて
下さったり、抱く様にしてベッドへ運んで下
さるし、いつのまにか、そのまま眠ってし
まって、数時間たった様です。

のどがカラカラになって目がさめ、口うつ
しに、何度も何度も、お水を飲ませてもらっ
て、しばらくすると、がまん出来ない程の便
意で、冷汗が出て来ました。

空気妊娠の時は、出すな、出すな、という
あのひとが、イイヨ、と気軽に許してくれた
ので、変だなと思うと、やっぱり！

「ここでしょう！」といわれて、ふと見ると、
いつのまにか、ひろい床一面に大きなビニー
ル布が、ひろげてあるんです。

しばらく、だだをこねてましたが、結局は
そこですることにされ、恥かしい姿でかむ

と、あのひとは、うしろへ廻って、出る様子
をたしかめ様とするんです。「おねがい！
見ないで！」といっても、知らん顔。

油汗を流しながら力を入れると、かなり固
いものが、ゆっくり出始めました。

突然「止メロ！」といわれ、びっくりして
アヌスに力を入れると「ヨシ！ 一歩前へ。
出セ！」幾つか出ると、また「止める。一歩
前へ。出セ」と2・3回くり返し一応終り。

ふと、ふり返ってみると、こんもりしたの
や、むにやっとしたのや、色んな形のもの
が小さな白い山を作ってるのでオカシクッテ。

これをやらせたかったんだナ、とわかると
抱き合って涙を流して大笑したら、お腹が
ゆるんだのか、また便意。今度は出来るだけ
良い型になる様に努力して作ってみました。

合計7個出来ました。が形の良いのは2・3
個で、後はウズ巻形やお好み焼形やコロんと
したフランクフルト形などで、それに面白い
のは先程の大量浣腸でお腹は空っぽだと思っ
てたのに、どこに残ってたのか白茶まだらの
もあり、思わぬ造形ウン個展が出来ました。

このまま2日もすればカチンカチンになっ
て石膏の様になる、とのこと、出来上ったら
ひとつもらって帰り、主人やお友達に見せて

あげよう、知らん顔して。

〇月〇日 暖かい夜

下界は暑い暑い、といってるのに山荘はとても涼しい夜が続いてたのが、今夜はホカッと暖かい。こんな夜はきつと何かある、と思ってたらヤッパリ。大量流腸がすんだ後で、「これ、着てごらん」

渡されたのは、シャツとパンティをいっしょにした様な、あのボディウェアでした。

色んな形がありますが私が今、手にしてるのは袖なし、丸首の後ろから腰の所までがファスナーで、別に特に変わったスタイルではありませんが妙に細いんです。

長さは充分以上にあるのに、巾は20センチも無く、不思議そうな顔でふりかえると、

「伸びるんだよ、これ。仕事仲間の洋裁店で見つけた試作品の生地で、私が作ったんだ。3倍以上、楽に伸びるんだよ。ホラ」

濃い紫色のボディウェアのファスナーを下し、破れやしないかと、こわごわ足から腰を入れたのですが、抵抗も無く丸いお尻をピッチリ包み込んでしまいました。次に両手を通してファスナーを上げてもらうと、布地はウーンと伸びて92センチのお乳も難なく包んで

しまったのです。

大鏡の前に立ち、よく見ると首廻りや肩辺りは濃い紫ですが、お乳の所から急に布地が伸び切って、すき通る程になり、うす色の紫が、その下の濃い紫と対照して、よけいに、お乳が大きく見え、お腹の所で布地が少し伸びて柔らかな丸みを見せ、カーブの下は、また濃い色に沈んで、とてもキレイです。肌にピッチリ、フィットして、指でつまむことも脇から手を入れることも出来ない位です。

しばらく鏡の中の自分に見とれてると、

「どう？ いいだろ？ そして、ここから、こうすることも出来るんだヨ」

といわれて気がついたんですが、乳首の所に小さな丸形のボタンホールがあり、そこから、まだ小さくて柔らかな乳首をつまみ出されてしまいました。あのひとの愛撫で、それは見る見る内に、大きく堅くなり、小さなボタンホールが根元をしめつけて、ぬけない様になり、うす紫の大きなゴム風船にくっ付けたサクランボの様になってしまいました。

その時、ハッと気がついたんです。

何もこんなもの、着せるために着せたんじゃない、このままでお腹へ空気を入れて膨らし空気妊娠させるつもりなんだわ！ と。

そっと指をずらすと、やっぱりAとVのところにチャーンとホールが切っており『あたり前やないか！』という様に笑ってる、あのひとの顔を見たたん、未知のプレイの嬉しさが身体中をかけめぐって、思わず歓喜の声を上げてしまいました。いそいそとベッドの方へ行きかけると、

「今日はそっちじゃない、ここでするんだ」

あのひとが壁の側のボタンを押すと、カラカラと天井から大きなフックが降りてくるのが見えました。何か柔らかそうなロープが下り、先に肩巾位の横棒がついてるのを、両端をつかむ様にいわれ、そうすると、たちまちそのまま両手首をくくりつけられてしまいました。そして、もうひとつ輪になったロープがアゴにかけられ、顔を上に向けられた時、わかったのですが、このロープもフックから下ってるのも、本体は細いゴムヒモを何本もより合わせたものなのでした。

ブーンと、モーターの音がして、カラカラカラとフックが引き上げられ、それにつれて私も爪先立になるまで吊り上げられてしまいました。

顔が上向きなので天井しか見えませんが、よく見ると厚板を張った天井の中央にある小

型のシャンドリヤに近い四方に、枠取りした丸い凹みがあり、そのひとつから滑車とフックが下ってるのです。

こんな凹みがあるのは今まで気がつかなかったし、後の3つの凹みには何があるんだろうなどと思っていると、ヒヤリとする感じで黒鈴がアヌスへ入ってきたのがわかりました。

下を見ることが出来ないのです、あのひとが何をしてるのかわかりませんが、シュツ、シュツというのは、いつもの様にポンプで肉厚風船を大きくしてる音で、その音が止まればコックが開かれて大きく膨らんだ風船の空気が、今度は私のお腹を風船の様に大きく膨らすために、どんどん入ってくる筈です。

やがて空気が入り始め、あちこち、つかえながら、お腹を膨らしつづけてるのは感じるんですが、いつもと違って、今何カ月位に膨らんでるのか、今何CC入ったのか、全然わからない、というのは、とっても不安なものです。それに、あのひとにも何も答えてくれず、ただふくみ笑いするばかり……。

お腹のあちこちが痛くなって来たので、ずい分入ったナ、と思っても見ることも出来ず縛られてるので、お腹を撫でてみることも出

来ないし、じっとり汗ばんだ肌にボディウェアが、ピッチリ張りついて窮屈に感じ始める頃、やっとコックが閉じられ、黒鈴の代りに入れられた止め栓が、いつもの金鈴球と違うのでオヤツと思っても、見ることもたずねることも許されない内に別のところへ注空器をセットされてしまいました。

空気流腸でひと通りお腹を膨らまされて、次に子宮注空で仕上げをされ、いつもの様に空気妊娠の風船妊婦にされてしまいました。Aと同様Vの止め栓もいつもの金銀鈴筒とは違う何かなんですが、アゴのゴムロープを外してもらっても何が入ってるのか、大きく膨れ上ったお腹で見ること出来ないのです。くるっと本を廻されて大鏡の方へ向いた時は、アツと声をのんできました。

濃い紫の布地が伸び切ってすき通る程、お腹が大きく。丸々と膨らみ、影になる部分が濃い色だけに、お乳もお腹も膨らめるだけ膨らんでいる感じで、お乳は先程ボタンホールが、つまみ出されて大きくされたそのままのピンクの乳首が、うす紫のゴム風船の上にチヨコンとくっつき、お腹は見つめてるだけでもう、息がつまりそうな位まん丸く膨らみ、

すき通った布地の下に、オヘソの凹みが濃い影を作ってるのが見え、妊婦マニアの私はただ嬉しさにゾクゾクしながら声も無く見つめてたのです。

突然カラカラカラという音と共に床から60センチばかり吊り上げられ、アアアと思う間もない内に両ひざを合わせて縛られてしまいました。

これからどうするの？ と聞く前に、あのひとの手がスツと股間に入ってきて両方の止め栓に指をふれたとたん、私のお腹の中で異様な響きが、し始めたのです。

あのひとが止め栓に入れたのが細工したバイブだとわかるのには、そう時間がかかりませんでした。こんな経験をなさった方は他におられるでしょうか？

お腹の中は空気で一杯です。丁度お腹全体が大きな音響箱エコーボックスになってるところへ、コントラバスの様な低音の連続音をバイブでハミングさせるんですから、たまったもんじゃありません。曲りくねった腸の中でブンブンとエコーが走りまわり、ぶつかって返ってくるころへ、またエコーがぶつかり、子宮の丸い空洞の中でもワンワン響き、お腹全体に反響し共鳴して居ても立っても（もちろん吊り上げ

イメージギャラリー

『顔見世タイム』

志羽利也



られてる私には居ることも立つことも出来ません)とにかく、アアアア……としか、いい様のない状態になってしまいました。

膨れるだけ膨らされたお腹は、それだけでも、内側から抱きしめられてる様に苦しいのに、そのお腹ん中で何匹ものミツバチがブン飛びまわってる様な異様な『音の戦慄』

が体中をかけめぐり、それに止め栓としてシツカリさし込まれてるバイブは中で微妙に動いて、ピッチリ合わされてる内股にまで波動を伝え、戦慄がいつのまにか、苦悦に代ろうとし始めるところを、あのひとが抱きしめたり、お乳をもちんだり、息がつまる程キッスしたりするので忽ちの中に身体に火がついた様

になってしまいました。

そんな私を横目で見て笑いながら、あのひとは、つっと大鏡に近より手をかけると鏡は左右に開いて巨大な三面鏡となり、真中に包み込まれる様な形になって満々とお腹を膨らませた風船妊婦の私の姿が前の鏡にも左にも右にも写り、喜びと苦しさ悶える風船妊婦が鏡の中の鏡に写り、左の鏡に右の鏡の中で喘ぐ風船妊婦が写り、またその鏡に左右の鏡で悦びに身をよじってる風船妊婦が……。

それに、悶えたり、身体をくねらせたりする度にロープが伸び縮みして、宙吊りの私の身体がフワッともち上ったり、スッと下りたりするのが、まるでお腹へ空気を入れすぎたため浮き上るみたいな錯覚にとらわれ、フワフワと上ったり下りたりしてる中に、それがいつのまにか、アア私は空気妊娠だけじゃなく、とうとう本当の風船妊婦にされてしまったんだ、みたいな気持ちになり、鏡の中で喘ぎながらフワフワと悶えてる大きなお腹の自分の姿を見つづけてる内にますます身体は燃え上り、前姿、横姿、くるくる廻り、フワフワゆれて、右から左へ、左から右へ、そして奥へ奥へ、写り、写り、限りなく写り続ける風船妊婦の万華鏡の妖しさに、身も心もいつし

か幻想の世界へ引き込まれ、あのひとの愛撫にめくるめく陶酔の底へ、吸いこまれる様に気が遠くなっていってしまったのです。

△月△日 絹糸の様な小雨の日

この間から前々、あのひとに内緒で楽しんでいる妊娠ごっこを一寸。

あのひとと別れて家へ帰る途中、街角や喫茶店などで、知らない人に声をかけられることが時々あります。以前からそうでしたが、あのひとと、こうなってから、お色気でも出て来たのか、前より声をかけられる回数が増える様になりました。

いつだったか、まだお腹にかなり空気が入ったままで帰ったことがあり、運悪く途中から今日の様な雨になり、軒をかりて雨宿りしていると、高校生位の男の子が通りかかり、私の方をチラッチラッと、それもまだ6カ月位に膨らんでる風船お腹を見てるのが、目についたので、一寸からかいたくなり、

「駅まで傘に入れて」

頼んでみたら赤くなりながらも、どうぞ、と傘をさしかけてくれました。

取りとめのないことを話し合ってる中に、固くなってた彼もだんだん打解けて来て、

「赤ちゃんがいるんですか？」

いいながら私のお腹を見る目の好奇心一杯の輝きがとても可愛かったので、笑いながら

「さわらせてあげようか？」というのと、

「ソナナ、イエ、何とかかんとか……」

逃げ腰になってる彼の手をそっとつかまえ「一寸だけヨ」とお腹の上へもって来てやりました。真赤になって、それでもおずおずとしばらくお腹をなでてた彼が、駅近になると突然、とび上る様にはなれて、「アノ、ここからは傘なしで行けます！」と走り出し、後に学生特有の汗と若さのにおいが雨の中に、少しだけ残りました。

アーケードから駅へ曲る時、ふり返ると、彼まだ遠くからこっちを見てるので、サービスにお腹をなでながら一寸頭を下げて笑ってあげると、ペコッとおじぎして、すっとんで行ってしまいました。口ではスゴイこといつてる学生達でも、こんな時には、ずいぶん純情なんだナ、と思うと一人でクスクス笑い出しました。

このことがあってから、時々、あのひとに頼んで空気妊娠のままで帰ることにしたのですが、顔や体つきのせいか、若い人には、かなり年上の姉さんに見え、同じ年位の人には

年下に、年配の人には若妻タイプに見られる様です。

若い人にとって妊娠って、まだ神秘的なムードがあるんでしょうネ。好奇心も手伝ってか、とても親切です。年配のご婦人は殆どの人が親切なのは、ご自分の娘さんやなんかの時と同様に感じるんでしょうネ。

全部がそうではないんですが、イヤなのは三十前後の女性です。自分が未だ結婚してないか——あるいは、出来ないか——していても子供が作れないか——あるいは出来ないか——といった女ひとなんでしょうが、若妻タイプの私が膨らんだお腹で幸せそうなのがシャクなのか、ヤキモチなのか、時々イジワルされるんです。中には、わざと荷物を私のお腹にぶっつける女もいて、私も女ですが、女ってやだな……と思うこともあります。

面白いのは年配の男の人なんですが、何かかまいたいし、面映おもゆいし、電車の中なんかですと、グラッとゆれないかなとチャンスをつかがってるのが、よくわかるんです。

そんな時、私は始めて妊娠し、それがとても嬉しくって、しかも恥かしい若妻らしいポーズを体中で表現し、一寸したゆれにも大げさによろけてチャンスを作ってあげると、と

てもよろこんで面倒みて下さるので、車を降りるまで「お父さん、お父さん」と甘えてあげるんですが、「大事にしなさいヨ、いい子を生むんですヨ」と別れてゆくその人が、私のお腹は赤ちゃんでなく空気で膨らんでるんだと知ったら、どんな顔なさるでしょうネ。フフフ。

あのひととのプレイの時みたいに大きくなるまで空気を入れると歩くのも苦しいし、もし止め栓でも外れたら恥かしいので空気浣腸と子宮注空を半々位で6カ月程に膨らしてもらって帰るんですが、好奇心と父性愛と、母性愛にくるまれるのは、とても楽しいもので時折、出合うお腹の大きい女の中には私の様に妊娠ごっこを楽しむため、ひよっとすると本当の赤ちゃんでなく、私の様に空気でお腹膨らしてる女も居るんじゃないかしら。

とにかく、この楽しみは、あのひとに見つかって叱られるまで止めないつもりです。

（なんてヤツだ。毬子め！ こんなことして楽しんでたのか?! ハハハ。それにしても「あなたと少しで、もいっしょにいる気持ちになれるから空気妊娠したままで帰るの……」などと、しおらしいこといって、もう！

なんてヤツだ、ほんとに。

ヨーシ、今度そうして帰る時はノーブラでニットの上下で帰らしてやろうか！

肉感的すぎて、父性愛どころか痴漢がいっぱい集まって来て……それじゃ私が困る。

じゃ、この次逢ったらこのノートをつきつけて……いや、まて。ノートのことは知らん顔しとこ。次々に書き足すのを、こっそり読んだ方が面白いからナ……。

しかし、その内に何かで、お仕置をしてやるとするか！

それからしばらくたって。毬子、

お仕置のこと。

暑い京都をさけて、大津のホテルへ泊る。

今朝、ふと思いついた様に、

「ヨット、乗りに行こう」

というとか物いいたげな顔をしたが、結局うなずいてついてくるとこなんか、可愛いもんだ。

昨夜は薬液浣腸を少し、大量浣腸も少ししてやったが空気妊娠はさせてやらなかった。

今期も同じ様にして、膨らしてやらなかったの何となく物足りない様な、少々すねてる様な顔で路の石などけりながら、だまって

ついてくる。

真直ぐヨットハーバーへ向う。私の学生時代からの知合いのオバサンがまだ元気で、喜んで迎えてくれる。

手頃な安定の良さそうなスナイプを一隻、引っぱり出し、彼女とプレイバッグを放り込む様に乗せて、早く沖へ出る様に出来るだけセールを切上げてタッキングをくり返し30分程、帆走する。快晴、風力3、

周りに他のヨットもないし、もういいだろう。まだすねてるのか、指で水をはねとばしている毬子に声をかける。

「マリ、膨らしてやろうか?」

「エッ?」といって意味がわかると急に晴れやかな顔になり、辺りを見廻してから、一寸不安そうに聞かえす。

「ここぞ?」

「そうだ。ここで、毬子のお腹へ、空気を入れて、風船妊婦に、するんだ」

ひとことずつ力を入れてくり返すと、目をキラキラさせて近よって来た。

「エエ、膨らして。昨日から、あなた……」

「いいから、これに着代えろ! ホラ」

特製の水着を渡す。

明るいオレンジ色でハイネック、頸のうしろでボタン止め、背Vカットのワンピース。いくら岸から遠いといっても、だれかに見られてるみたいでモジモジしながらも、せまい艇内で、どうにか着かえる。

「着替えたわ」膨らんだ時、どれ位伸びるかをたしかめる様に、お腹の辺りの布地を引っぱってワクワクする様な声でいう。

これから、どんな目に合わされるかも知らないでネ。

艇尾板に背をつけて足を開けて投げ出し、その間に彼女を後ろから抱く様にして、私の胸と彼女の背中がピッタリつく様にし、体が楽な様に足を伸ばさせると、せまいコックピットの右側が一杯になり、セイルを左舷にして風を抜いて艇を漂わせる。

近くに艇影なし。ビワ湖大橋が、かなり近くに見える。

毬子程ではないが、かなり大きな私のお乳の間に頭をもたせかけてウットリしてる彼女に、バッグからポンプを取り出して見せる。

大きな風船注空器やメーターは、かさばるのでやめて、今日は旅行用のビデの底に小さな穴をあけ、エネマを硬く差し込んだ物。

これは簡単だけど、空気浣腸にも子宮注空にも使えて効果的だ。ただエネマの赤球は、液体用なので、空気用に使う時は吸込口に、クリームでも、ぬっとく必要がある。ひと押しが大体40CCだが、エアもれがあるから、30CC位と考えた方が、いい様だ。

「今日は空気浣腸だけで、いつもと同じ位に膨らすからナ……」

「かなり苦しいわネ。でも、いいわ」

私の手は届きにくいので、彼女に自分でセツトさせる。艇のすぐ横をツバメが一羽、宙返りをして飛び去る。

エネマを押しつづける。大きなお乳の下のおペツチャンコのお腹が、少しずつ、少しずつ膨らんでくる。左手はチャラーを押さえてるの時々右手を赤球からはなして、お乳をもんでやる。

かなりお腹が盛り上って息がはずむのは、燃えてるせい？ お腹の空気が胸を圧するか？ どっちでもいい。もっと、どんどん空気を入れる。柔らかい布地が一杯に伸びてオレンジ色のゴム風船の様になるまで、お腹を膨らしてやる。

やがて、きれいに空気妊娠した風船毬子を

抱きかかえる様にして入れる止め栓は、いつもの金鈴球。

「とっても苦しいわ。ホラ、こんなに膨らんで！いつもよりたくさん空気入れたわネ？」

「サア？ 知らないヨ。今日はメーターが付いてないからネ。立ってごらん、立ったら少し楽だヨ。帆柱にもたれて、ノウノウ……」

きれいだ。とてもきれい！ 快晴の夏空を背景に、純白のセイルを横に帆柱につかまって立つオレンジ色の水着の風船妊婦！

そよ風に髪の毛が乱れ、上気した頬にかかるのをかき上げると、大きなお乳がユラッと動き、パンと張ったお乳より尚大きく張り出した7カ月のお腹が、強い日ざしを一杯に受けて、まぶしく輝くばかりの美しさだった。

「ウン、キレイだヨ、とても。そのまま目をつぶってごらん、ヨシ、というまで決して目をあけるなヨ」

急いでバッグから取り出した黄色いロープで彼女を背から廻してお乳の下でキュッと縛る。強くはないが決してほどけない様に……「さあ、端はしっかり持ってやるから、水へ入れ！ 泳ぐんだ。それだけ空気が入ってるんだ。泳ぐのは楽な筈だ！」

「イヤン、こんな大きなお腹では泳げない」

「つべこべいうと、けり込むぞ！」

「イヤ！ 自分で入る。キャッ、冷たいわ。」

今日は泳ぎたい程、暑くはないのに……」

「どうだ？ 浮力の方は。足りなければ、もっと空気を詰め込んでやるぞ」

「イヤヨ。これ以上、空気を入れたら、お腹がパンクするわ。アラ、アラアラ、浮くわ。」

ホントに浮くみたい。大きなゴムボールに乗ってるみたい。でも、前のめりになるみたいな感じヨ、一寸」

どれ位の量の空気で人間一人、浮くと思います？ 浮輪は体に乗せるため随分の量が入ってますが、ビニール球に空気を入れ、水の中から持ち上げる様にしてつかまると、海水中では50kgの人間なら約一八〇〇CCで浮きます。今、毬子のお腹には二六〇〇CCの空気が入ってますが、お腹の中へ入れた場合は圧搾空気のボンベが沈むのと同じで、データ1通りに行かない様ですが、それでも大きな風船をお腹に入れてるんですからね。でも浮力は体の下半分に近いところへ、重心は頭という重い物があるから上の方へくるので、前のめりになりそうなのは当たり前です。

「こっちへ来い！ サア、ここへつかまって胸をこっちへ突き出して。バカ！ さわってやるんじゃない。空気を入れてやるんだ！」

「エッ！ お乳へ空気を入れるの？」

「心配すんな。お乳と水着の間さ」

「？ ？ ？」

ブラカップを入れる様に、水着の胸のウラに、カップ型のビニール袋がつけてあり、両乳の間に注空口があるんです。

両方で六〇〇CCの空気を入れると、マアすごい胸になってしまいましたヨ。

もう水着の胸をつきやぶるばかりに膨らんで、アメリカマンガのウルトラグラマーみたいになってしまいましたネ……。

「どうだ、浮くだろ！」

「浮くわ、よく浮くわ。ホラ」

かなり、泳げる彼女。体が軽くなったのでよけい泳ぎやすくなったから、気持良さそうにバシャバシャやってる間にロープを艇尾に固定し、シートを引いてセイルを切上げ、帆走に移る。

たちまちロープがピンと張って、風船グラマーを引っ張り始める。数メートル後ろで何かゴチャゴチャいってるが知らん顔だ。

手足でバランスさえ取ってりゃ浮いてる体だ。溺れる心配は、先ずない。ラフギリギリまでクロスホールドしてスピードを上げる。

毬子め、ロープをたぐりよせようとしてるナ？ そりゃだめだ。ロープをたぐるため両手でつかむとバランスがくずれ、クルッと仰むけにでもなれば大きな風船腹と風船オッパイが出てしまうから。ソーレ見ろ！ あわてて手をはなした！ 面白いナ。どんどん引っぱる水上引廻しの刑だ。

しばらく引廻すと、なれて来たのか、バランスを取るのが、うまくなって来た。

すぐそばを、はり丸が通る。船客達は上から見て、水泳の特訓だとも思ったのか、毬子に「ガンバレヨ」だの「シッカリ」だのと声をかける。お返しに私が手をふると彼女もイイカッコして手をふり、バランスがくずれそうになってあわててバシャバシャやる。もしバランスがくずれ、仰むけにでもなってみろ、大きなお腹と大きなお乳が丸見えになって恥かしいぞ。船客達は喜ぶだろうが。

はり丸の造る波頭を、何とか乗りこえ、や

がて船影が遠ざかったので艇を漂わせ、ロープをたぐって彼女を引き上げ、水上引廻しの刑を終る。

半時間程、浮いてただけなのに、カチカチふるえて、寒そうにしてるので、可哀そうになり、マホービンに入れて来たウイスキー入りの熱い紅茶をのませる。大きなコップを両手でかかえる様にして飲みながらチラチラ私の顔を見る。

昨夜、今朝、と全然、膨らしてもらえず、やっと膨らしてくれたと思ったら、風船妊婦

☆SM画稿募集!☆

◎SM雑誌の草分けとして、二十数年の歴史を誇る本誌にふさわしいSM画を募ります。画材はどのような傾向のもので結構ですが、女体緊縛画、男性に対する責絵などを主体として、フェチシズムに関連したものなどを望みます。

◎必ず自作—もので白い用紙に黒色の毛筆、ペンを御利用願います。大きさは自由ですが、ハガキ大から雑誌大位までが適当です。掲載作品につきましては、作品に相当した画料をお支払いします。アイデアだけの時は鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう願います。

△奇譚クラブ編集部△

の水上引廻しだ。少しは恨んでるのかな?

唇の色が、やっと戻ってくる。エアカップの空気を抜いて背中から手を入れ、お乳をもんでやると、やっと顔色も戻って来て、私の肩に頭をのせて大きな、ため息をつく。

「お腹の空気も出しているヨ」

「そう? そうネ。アラ、どうしたのかしら? 止め栓が出ないわ。ウーン、出ない」

水で冷えたのか、力を入れたので筋肉が硬くなったのか、アヌスが固くしまって止め栓が出ない。これは一寸、困った。こんなことになるとはネ。

仕方が無い。一寸おしいけど、熱い紅茶をタオルにしまして温シップを、くり返す。

少し柔らかくなってきたけどまだ出ない。無理に出させてアヌスが切れたら大変だし。マッサージがいいだろうと、ひざに乗せてやる。だれかが見たら、妊婦をかかえてペッティングしてる様に思うだろうナ。ヨットのうだから、ヨッティングかな?

しだいに息が弾んでくる。目がうるみ、息が荒くなり、胸が大きく動く……。

水着の下で乳首が硬く、大きくなり、水着の胸にチョココンとふたつの凸を作ってるのを時々つつきながらマッサージを続ける。

始めは指も入らなかった位、固くしまっていたアヌスも、かなり柔らかになり、指にコツンと球が当たる様になって来た。

時折、アツ、アツと、のけぞる彼女の紅潮した頬と小さな唇が愛らしい。

二十分位のマッサージで、やっと止め栓を出すことが出来る様になった。

力を入れて、ウンというポンと飛び出し艇内をカラカラと転がり、チリリ、チリチリと、中で金の鈴の音がするのが、かすかに聞え、波の音に、かき消える。

空気が抜けて、少しずつしぼんでゆく毬子のお腹と、大きく盛り上ったお乳に、昼下りの黄金色の太陽が強い光と影を作り、バタバタ鳴る帆と舷側に寄せる優しい波の音に祝福されて、今日の水上のプレイを終る。

今日のプレイのこと、毬子め、どんな風に日記に書くか、楽しみだ……。

「ビワコホテルへ何か食べに行こうか?」

「いいわネ、後でまた膨らしてネ」

答えて笑う彼女を、力一杯、抱きしめ、艇を廻してランニングに入り、追手風をセイル一杯に受けて銀波をかきわけ、艇首を港に向け、力強く走り始めた。

(この稿終り)

カット・春川ナミオ



女にはあまい

植座たき子は安井安芸雄に対する愛情が、急速に深まって行った。

四十日間の、二人の愛の断絶が、反動的に

連載・M派交友録 八四十五

グラマーな猛女

植座たき子の巻 (8)

鬼 山 絢 策

火をつけたのだった。

二人の交情を緊密にさせた、もうひとつの理由としては、橋本宇吉も大きな役割りを占める結果となっていた。

安井安芸雄がアメリカから帰って来た夜、たき子は宇吉の来訪をスッポカして安井との情痴に耽った。翌日、宇吉が訪れた時、「パパ、昨夜いらしたのね。留守して、ごめんなさい」

「うん、いいんだよ。突然、来なくなっただけなんだから。どこへ行ってたの」「お友達と飲んじゃったの」

それですんでしまった。たき子は、宇吉が大して機嫌を損じてもないらしいので、安心した。

これが安井とたき子の交情に火をつける原因となってしまったのである。

宇吉が、もしも普通のパトロンのように、嫉妬して、どこの誰と会ってたとか追求をきびしくするか、お前の居ない室に一人ポツネンと持っているわしの辛さを察して見るとか留守の時には時々電話して、わしが来ていなか確かめるぐらいのことはしてほしい、とか口やかましく言えば、たき子も少しは慎ん

だであろう。仕事の鬼と言われる宇吉は会社では恐れられている、きびしい人物である。そのことは、たき子も人から聞いて知っていたし、宇吉を畏敬していたことは事実であった。

こと二人のセックスとなると宇吉は痴呆のように、たわいなくなるけれども、それだからといって、たき子は宇吉を馬鹿にしたことはなく、このマンションを買ってもらった当座は宇吉を恋人として扱っていた。彼の細君

登場人物紹介

植座たき子 26才。1米72、68キロ。

美術学校出。学生中にモデル、バニーガール等のアルバイト。橋本宇吉の援助を受けて、絵の勉強中。

橋本宇吉 69才。中央生命常務。初恋のアメリカ娘サリーに似ているたき子をサリーと呼んで愛している。平素は不能に近く、オーラルセックスでたき子を愛しているが、特殊な刺戟を与えた時、男としての機能がもどることもある。

安井安芸雄 33才。たき子と同じマンションに棲む画家で、たき子の恋人。

鬼山絢策 雑誌の編集長。安井の紹介でたき子を知り、挿絵の仕事を頼んでいる。たき子をモデルにMの写真を撮ったこともある。

が死んだら結婚も……ぐらいにまで考えていたこともあった。

宇吉の男としての機能が衰えても、たき子は宇吉の愛に感謝していた。ただ「恋人」から「父親」のように愛が変形して行った。

慈父のように、あまい宇吉に、たき子は、あまつたれて、娘らしい我がままが次第に出てきた。安井安芸雄という恋人をつくることも、最初は宇吉に済まないという、うしろめたさがあつたが、インポのパトロンでは、ほかに吐け口を求めるのも、しようがないじゃないの、と理屈をつけた。

村中二郎から「親父さんは君の自由を束縛する気持は全然ない。君は自由に振舞っていいんだと言ってたよ」と言われたことも、へんな自信を深めることになった。

宇吉が留守中に来たことも、たき子が外出していて、ほんとに知らないのなら、それほど気がとがめなかっただろうが、宇吉が来ていることを知っていてスッポカしたのだからたき子としてはかなり良心がとがめていた。

にも関わらず、宇吉は簡単に許した。このへんに、たき子が増長する素因をつくってしまったのである。

たき子との関係は、もう二年以上になる。

最初のうちは毎晩のように訪れていたが、そのうち一週間に一、二度という時期が長く続いた。それが最近になって、また回数が増えてきた。

宇吉は不能であったのが、この間の事件で久し振りに機能が復活した。

それは村中という人物が介在して、その刺戟によって復活したのであることは、宇吉も知ってはいたが、何にしても、大変うれしいことだった。それだけに、たき子が恋しくなり、ひんぱんに通うようになったのである。

焦らしでやる

「あ、また来たわ」

夜の十一時近くだった。たき子と安井は六本木のレストランで酒を飲み、食事をして帰って、いまベッドに入ったところだった。

たき子の部屋の扉の締まる音がインターホーンから聞えて、安井とたき子は夜の来訪者を知った。

「チョッ、この頃、よく来るわね。昨夜も来たのに、今夜もまた来るなんて」

「御年寄り、だいぶ、無理してるようだな」「ほんとよ。昨夜は電話、掛けてきたから仕

様がないけど、今夜は予告なしよ」

「爺さん、きっと君が恋しくてしようがないんだよ」

「フン、年甲斐もなくサカリがついたみたいで、イヤんなっちゃうわ」

「どうする？」

安井は皮肉な笑いを浮かべながら、たき子を抱き寄せた。

「いいわよ。電話もかけずに不意にやって来る方が悪いのよ」

たき子の部屋の居間から寝室へ通ずる扉の開閉の音が聞え、更に浴室まで見て廻っているらしい気配がする。

「フッフ、爺さん、あたしを探してるのよ」

住み馴れた自分の室のことであり、既に何度か、こうやって聞きつけているので、宇吉が何をしているかは手にとるように分った。

「いいの？ 行かなくても……」

安井は言葉とはうらはらに、たき子をおさえつけるようにした。

「フン、いじわる。分っていて聞くのねッ」

たき子は下から怒ったように、すねて見せたが、これも言葉とは反対に、安井に抱きついてキスした。

安井は時間をかけてゆっくり楽しむ方だ。

彼のスタミナは、かなり強い。

だが、今夜は、あっさりしていた。安井としては珍しい淡泊さである。

「爺さん、静かになったね」

「寝ちゃったのかしら。イヤだわ」

「一ぱい飲もうか」

二人は起上り、たき子はバスルームに行ってきた。

「どうする。行ってあげた方がいいんじゃないか」

「フッフ、放っというてやるわよ。もうこれからは予告なしに来た時はスッポカしてやることにするわ」

「俺、仕事が溜ってるんだがなあ」

「またア、この女たらし！」

たき子は安井の腿を強く、つねった。

「痛ててッ。おい、爺さんとは違うんだぜ」

「あら、パパには、こんな手荒なことは、しないわよ。舐めるように可愛がってやるわ」

ガサガサと紙の音がインターホンから流れてきた。

「あ、起きてるんだわ。新聞でも読んでんのかな」

咳払いの音が聞える。

「だいぶイライラしてるんだわ。ウッフ」

首をすくめて笑うたき子を見ると、安井はまたムラムラとしてきた。

「どうするんだい。行かないのかい」

「行くと云ったら？」

「行かせない！」

安井とたき子は、再びベッドに戻った。

ふたりは、たき子の部屋の物音が、刺戟となっているのだった。

恋人の帰るのを待ってイライラしている宇吉の姿を想像するだけで、安井は慾情するのだった。

性のアクセサリ

橋本宇吉は滅多に、たき子のところで泊まっては行かない。それを知ってるから、たき子は焦らせるだけ焦らせて、スッポカしてやるのである。

宇吉が、諦めて力なく扉を締めて出て行く音を聞くと、たき子は

——ざま見ろ！

と言ったサジスチックな快感を味わう。だが同時に、ふたりの情熱は張り合いを失って萎えてしまうのである。

たき子の留守に来て、一人で酒を出して

きて飲んだりするので、留守に来たことが分かる。そんなことをしなくても、もちろん、たき子には分かっているのだが、痕跡を残されて行った以上、たき子は知らぬ振りをするわけには行かない。

「昨夜、いらしたのね。また留守して、ごめんなさいね」

「ウン、イヤ近所まで来たから、ちよいと覗いただけだよ。いいんだ、いいんだ」

むしろ、宇吉の方で弁解するように言うもんだから、二度三度と重なると、たき子はスッポカした次の日に来て知らぬ振りをするようになった。それでも宇吉は何も言わなかった。

「しつこくてしょうがないから、これからだしぬけに来た時は、スッポカしてやることにきめたわよ」

と、たき子は安井に言い、

「フン、勝手にウイスキーでも飲んで、帰ればいいんだよ」

と毒づいたりした。

だが、たき子は安井の前で言うほど宇吉を嫌っているわけではなかった。宇吉と会えばいままでと変らずに迎え、彼の求めるものは何でも好きなように応じてやった。

時にはあまえてものをねだることもある。宇吉はそれが却って嬉しく、たき子の言いなりに買ってやった。

一方、たき子の絵の仕事は次第に殖えて行った。安井の紹介で、園芸関係の雑誌のイラストも描くようになったし、喫茶店の壁画を頼まれたりして、毎日出張して描いた。もちろん、安井のアドヴァイスを受けていた。

仕事が忙しくなるのと比例するように、宇吉の来訪も繁くなった。この頃は予告なしに行くとスッポカされるので、必ず電話をかけてくるようになった。

週に一、二回ならよいが、毎日のように来られると、たき子も小うるさくなってきた。

一回訪れれば五千円お小遣いをくれるのだから、悪くはないのだが、この頃、たき子は金には全然、不自由してなかった。不自由どころか七、八万から多い時は三十万も入ってくるので、貯金が殖えて行った。宇吉からは別に月五万円のお手当があるから、一日五千円の日当と合せて十万以上になり、絵で稼いだ分は、まるまる貯金ができた。

仕事が忙しい時や、会うのが面倒になった時は、電話がかかっても、とらないでやろうかとも考えたが、最近では出版社や、その他、

仕事のことでは電話が、かなりかかってくるから、ベルが鳴れば送受器をとらぬわけにも、いかなかった。

電話の声が宇吉だと知ると、ウンザリすることもあるが、表面は、あくまで嬉しそうに応待するのだった。しかし、ほんとに仕事が溜ってくると、

「パパ、今夜はわるいけれど仕事が一ぱい溜ってるのよ。徹夜で描き上げなくちゃならないの。ほんとにわるいけど今夜は勘弁して」

「結構だね、君の絵が世の中に出て行くのは僕も嬉しいよ。いいよ、仕事を続けなさい。僕は傍で見ているだけで楽しいんだから」

「うーん、でもパパに見ていられると気が散って描けないわ」

「そんなことじゃプロとは言えないよ。邪魔しないからさ。君の顔を見てれば、いいんだから」

しかし、実際に宇吉に来られると、仕事はできなかった。お茶を飲む時でも酒を飲む時でも、うっちゃらかしておくわけには、いかないからだ。

「ああ、もうやめて、パパと遊びましょ。その方が楽しいわ」

「でも、明日までに描き上げるんだらう」

「そうだけど、やっぱり描けないわ。いいわ徹夜でやるから。休憩よ」

仕事の量が確かに一ぱいあるのを実際に見せられると、宇吉も、さすがに遠慮するようになり、三度に一度は、たき子が「忙しいから」と断れば、来訪を控えるようになった。

必ずしも仕事の忙しい時でなくても、結構断る理由に役立った。

そんな日が続いて、この頃、宇吉のあしは少し控え目になった。

しかし妙なもので、そうになると、安井と情痴に耽っている時、何となしに物足りなさを感ずるようになった。

たき子の部屋で宇吉が居るのを待たせながら愛し合うことに安井は、かなり刺戟を受けていたのだ。その刺戟がなくなると、さすがにタフな安井も、たき子の飽くなき求愛に疲れてきたのだった。

たき子は、その原因が何であるかは、すぐに察しがついた。たき子自身も、何かひとつ足りないものを感じていたからだった。

悪の匂い

鬼山は、新しく出版するシリーズ本三冊の

表紙と装訂を、安井に依頼した。

筆者二人と安井とで打合わせ会をやったあと、麻雀をやった。神田の雀荘で12時近くまでやったが、安井がつきについて大勝した。

「ちょっと家で一ぱいやっていきませんか」

安井は上機嫌で鬼山を誘った。鬼山は安井の家へ行けば、たき子に会えるという期待をもってついて行った。昼間のたき子には、よく会っているが、夜のたき子には、このところ暫く会っていないかったからだ。

安井のマンションに行くと、安井は一人でキッチンに行って酒の肴やグラスなどを用意した。

仕事場で一人、待っていた鬼山に、異様な声が聞えてきた、苦し氣にうなる、しわがれた男の声だった。それに時々女の含み笑いの声が、まざってくる。

ラジオの声のようでもあるが、そうでもない。その声は、どうやら隣の寝室から洩れてくるようだった。

まさか安井の寝室に男女が居るはずはないし、いぶかしく思っていると、安井が酒肴を盆に乗せて持ってきた。

「何もありませんよ。男世帯ですから」

安井は、すぐ怪声に気がついた。

「あ、畜生。また、つけっ放しだな」

安井は寝室の方へ立って行き、すぐ出て来たが、声はやんでいた。

「何です、いまのは」

安井はニヤニヤ笑っていたが、インターホーンの、からくりを話してくれた。

「聞きたいですな」

「あれを聞くと仕事ができないんでね。でもこの頃は馴れて、聞きながらも描けるようになりましたよ」

安井は、またスイッチを入れた。

「だめ、だめッ。まだよッ。フッフフ」

なるほど、たき子の声だと鬼山は思った。

昼間の声とは違って、少し低い太い声になっている。たき子が酔った時に出す声だ。

鬼山は、たき子と新宿のバーで飲んだ時の声を思い出した。そして阿保を相手に写真を撮った時のたき子の姿態がすぐ連想された。

たき子と宇吉が今どんなポーズをとっているかは、鬼山にも、およそ想像はできた。

インターホンから流れる声や物音を聞きながら酒を飲み、鬼山は、たき子と宇吉の関係、たき子と安井のこれまでの交情を執拗なまでに聞いた。安井は自分自身のことでも、まるで、ひとごとのように、ドライに冷静に

何でも話した。

「うらやましいですな。あんな、すばらしい女性には滅多に居ませんよ」

鬼山は、たき子を讚美し、いずれ二人は結婚するのだろうと、遠廻しな質問を試みたが、安井はニヤニヤ笑って、はっきり答えなかった。

もちろん、イエスともノーとも、はっきり答えられる時期には達していないから、それは当然としても、たき子との結婚に関しては、何か避けるような、感じを鬼山は、うけとった。

「あ、いま出て行きましたね」

扉の音を聞いて、安井は千里眼のように言い当てた。

問もなくたき子が寝巻姿のまま現れた。

「あら、鬼山先生、来てたの」

「先生に、みんな聞かれちゃったよ。スイッチ入れっ放しだったね、また」

「あら、いやだ。聞かなきゃいいのに。聞かれたんじゃないくて、聞かせたんでしょ」

たき子は、ちょっとテレた風だが、さして気にもとめない風だった。

「寝巻のまま来ちゃ、まずいじゃないか」

タオル地の寝巻の下には何もつけていない

らしく、細紐ひとつで結んだ襟もととはゆるんで、豊かな乳房が半分、のぞいて見える。大胆に脚を組んだ裾が割れて、太腿の奥まで露出していたが、パンティの端さえ、見えなかった。

「大丈夫よ。もう帰っては来ないわよ」

「でも、ひと眼にはふれないようにしなければ、だめだよ。変な噂を立てられるのは、お互いに、よくないぜ」

「いいじゃないの、噂を立てられたって」

ここにも安井と、たき子の心情の違和感を鬼山は察知した。安井は、たき子との恋を、あくまで秘密にしておきたいらしく、たき子の方はどうせ結婚するんなら、どうということとはいいじゃないかと言う風な気持だった。第三者の鬼山から見ると、すぐ解ることなのだが、果して、たき子には安井の気持が解っているのだろうか。恐らく全然、気がついていないのではないかと思った。

「だいが、爺さんを虐めたようだな」

「フフフ、この頃、だんだん変態になってきたのよ。しつこいから、毎晩来られないように少し、こたえるようにやってやったわ」

不敵に笑う、たき子は妖精のように美しく悪の匂いを放つ牝獣のような魅力があった。

時計は二時を回っていたが、鬼山は席を辞した。安井は「泊ってらっしゃい」と前に言っていたので、はじめは鬼山も、その気で居たのだが、たき子が現れては、そうも行かないと思った。

「もう遅いから、泊ってらしたら」

安井も、たき子も、そう言ったが、鬼山は部屋を出た。遅くても、このへんは楽に車が拾える所だった。

声のセックス

習慣というものは、つきやすく、一たん慣れると、それを打ち破るのは容易でないものである。

だが、たき子のように、これまで環境のガラガラ変ってきた女にとっては、習慣のつく余裕がなく、環境に順応して生活をつくり変えてきた。宇吉の援助を受けてからが、彼女の一番、安定した環境に落ちついたわけであるが、それからの二年半というものの、彼女はそれなりに成長して行った。そこに生活の慣習も、かなり変化が見られた。つまり普通の人間より習慣を打ち破ることが容易にできる女であった。

例えば、宇吉と安井という二人の男性との関係の、ひとつの習慣とも言わべき流れは、宇吉の来ない日に安井とタップリ愛し合い、宇吉の訪れた夜は、安井と会ったり、会わなかったり……それが今までの習慣であった。しかしこの頃は、どうもそれではシツクリ行かなくなったのである。

たき子は、すみやかにその習慣を変えた。宇吉の来ない日は安井とも愛し合わなくなったのである。この頃は絵の仕事も多くなつたし、絵のことで安井の部屋を訪れることはあっても、彼もまた、アメリカから帰ってきてから、より一層、忙しくなっていたので、早々に引きあげて、互いに仕事に没頭した。宇吉は突然訪れることをしなくなったし、来る時は必ず電話で予告してくる。

いままでの習慣だと、宇吉の来る日は美容院に行つて髪をセットしたり、宇吉の好む酒の肴を買ってきたり、部屋を掃除したりして待ち受ける習いになっていた。

それがこの頃は、宇吉が来ても、たき子の居ないことが多くなつてきたのである。

宴会が終つて十時過ぎに、たき子の部屋へ行つても、たき子の居ないことがあった。

一時間以上もテレビを見たりして待ってい

ても、なかなか帰つて来ない。腹を立てて帰ろうかと思つてるところへ現れる事がある。

「ごめんなさいね。出版社の人に誘われて御飯を御馳走になってきたのよ」

いきいきとして陽気に、はしゃぐ、たき子の顔を見ると、宇吉の機嫌は、すぐ直つてしまふのだった。

待たされたあとというのは、却つて焦燥感によつて欲情がつるもので、たき子が寢室で外出着からガウンに着替えるのを待ちきれず、宇吉は性急に、たき子を求めた。

「おお、サリーちゃん。ぼくの可愛いサリーちゃん」

宇吉は、自分より背の高い、たき子に背のびするように抱きしめて唇を求めた。

「なによう。待つてよ、着替えのすむまで」唇から首筋、肩の丸味と、宇吉は、いたるところにキスをする。

母親が、むずかる赤児に乳房を与えるように、たき子は好きなようにさせた。

「くすぐったいわよう、おへソ舐めちゃあ」たき子はチラッと上眼でインターホーンを見る。スイッチがONになっていることを確かめる。

以前はスイッチがOFになっていることを

確かめるために見やったものだが、いまは逆だ。安井に聞かせるために、やっているのだった。

安井には宇吉との愛戯のポーズを委しく話してある。こういう風にする時もあるれば、こういう風にやることもあると、安井を相手にポーズを演じてみせることもある。

宇吉が、こういう声を出す時は、こんなポーズだとか、こういう風にすると、こんな唸り声を出すのだと、手にとるように説明してある。だから、安井は二人の声や物音を聞いて、今どういうポーズをとっているかは鏡に写して見るように分かるはずだった。

宇吉の唇が、臍から更に下の方にズレ下つて行く。

たき子は毛深いたちで、腕や脛にも毛は濃い方だったが、それ等は脱毛クリームで、おとしていく。

宇吉はパンティに両手をかけて、足もとにおとした。

たき子は片足をあげて、宇吉の肩にかけてやる。

かつて、たき子は安井と愛し合った直後は風呂に入つて全身をよく洗つてから宇吉に接していたが、一度風呂に入る余裕を与えず、

宇吉がプレーに入ってきた事があった。

その時、たき子は拒んだ。しかし、宇吉は興奮していて、そのまま続行してきた。

宇吉の唇が触れた時、電気にでも触れたようなショックを感じた。

宇吉にわるいと思う反面で、体内からしびれるような快感が背筋に抜けたことがある。

だが、今は違う。

たき子は予期していたものが、予定通りに進行しているという、自信と落ちつきを見せ唇に、ほほ笑みを浮かべるだけの、余裕があった。

このマンションに住まわせてもらって、着るものから家具に至るまで、貧乏な生活から一躍、ぜいたくな生活に切り替った時、たき子は夢のような気持で、宇吉を心から愛したことがある。安井と交渉をもつようになり、安井を愛するようになって、宇吉に対する愛情は、恋人から父親に対する愛情のように変化した。また、宇吉に捨てられたら、今のような生活ができなくなる。だから、宇吉に依存する心も大きかった。

それが、この頃はイラストの仕事も相当に殖えたし、マンションも完全に自分のものになったし、貯金も二百万円以上、できた。そ

うなると、宇吉に、対する依存度も薄れてくる。従って宇吉に対する義務感が薄れてくるのも当然の流れであった。

一方、宇吉の方でも、たき子が年毎に成長し、経済力もついてきたことは、経済畑の間だけに、敏感に感じていた。

老人が女を愛するには、その報いるものは金しかない。その金を、あまり欲しくなくなった時、もちろん金は誰でも欲しいが、必要性が薄れてきた時、老人は何をもって女をつなぎとめたいのか、というのであろうか。

橋本宇吉は、そういう風に考え、悩んだ。

日ごとに成熟し、ますます魅力的になってきた、たき子は、何としても離したくない。しかし、生活権を全面的におさえることのできなくなった今は、どうしても、たき子に対する遠慮というか、ひけめみたいなのを感じようになったのだ。

この頃、たき子には恋人ができたらしい。

安井とかいう絵描きではないか？ と村中がチラリと、ほのめかした事がある。しかし安井はいくつ位で、どんな男か、また、どこに住んでいるのかさえも知らなかった。

村中から聞いた時は、不愉快な感情にとらわれたが、それは嫉妬ではなかった。

宇吉は、たき子の自由は束縛しないことを心にきめていたし、たき子にも言っている。

だから、たき子が恋人をつくらうと、結婚にまで踏みきろうと、それを制止する権利は宇吉にはない。だから嫉妬するのは却って自分自身を苦しめるだけだ——と考えていた。

これが権力者の顔か

たき子の丸っこい太腿は、プリプリしていて肌ざわりがいい。唇をつけて吸ったり、舐めたりすると、

「ウフフ、くすぐったいわよう。早くう」「早く」というのは、舌を移動しろという意味である。

たき子独特の体臭とミックスして、女の匂いが鼻にかぶさってくる。

——たき子の恋人というのは、どんな男だろうか……

ふと、そんなことが浮かぶ。すでに肉体関係があることは九十パーセント間違いない。

——今日も会ってきたのだろうか？

それは、考えたくない問題だった。しかしそう思わずには居られなかった。

——でも、まさか……

イメージギャラリー 『動力付玉座』 岡 たかし



仮にそうであったとしても、処理ぐらいはちゃんとしてきているはずだ。

——してみると、この状態は、自分に、たき子が応じてくれているのだ！ と思う方が宇吉にとっては幸福だった。

——もっと、たき子を喜ばしてやろう。

宇吉は、真剣に考えた。

「あ、あつ。パパ、パパ。好きよ、パパ」

巨大な重味に、宇吉の首は不自然に捻じ曲った。

たき子は今しがたままでの、安井とのことを脳裡に描いていた。

安井の逞しい若さを想い出していた。

せつない声を出してはいるが、真からのうめきではなく、半ばは演技であった。

もちろん、快感は感じるが、安井と比べれば、その比ではない。

ただ、触覚よりも、精神的な快感の方が、より強い刺激となっているのだった。

安井がアメリカに行っている間に、たき子は、満たされぬ焦燥感に気が荒んでいた。

そこへもってきて、阿保を相手のSMプレイ、これは写真のモデルとしてだったが、被写体となっているうちに、いつしかモデルであることの意識を失って、プレイの方に専念してしまった。男性に対するサジスチックな行為は、もの好き半分、S的興味半分といった程度だったのが、男性を責める快感の方がグッと比重が重くなってしまったのだった。

満たされぬ欲望を、それにより満たすのであれば、より強烈な刺激を求める気持になる。

それもMの男性と対でプレイするよりも、もう一人、そこに何らかの役割をもった人間が加わったトリオでやる方が、更に刺激が強い。たき子は、その味を覚えてしまったのだ。

った。

安井が帰ってきた当座は、お互いに夢中になって愛し合ったが、安井が、ようやく疲れ倦んできたとみると、それをトリオのプレーによって復活させようと試みたのである。

たき子は、いま、自分が、せつなそうな声をあげた。これは間違いなく、安井が聞いている。何度も聞かせた声である。

「あんな声を出すほど、いいものかい」

と安井が聞いたことがある。

「そりゃ、いいわよ。でも、あんたの時とは問題にならないわ。要するに営業的なテクニク的一种よ。あれで爺さんは、あたしが喜んでると思って満足してるんだからね。フフおアマイもんよ。アハハハ」

「どんな風にしてやると喜ぶの」

たき子は、そのポーズを微に入り細にわたって安井に説明した。

だから、たき子の声を聞いただけで安井は今、たき子がどんなポーズなのか想像できるはずである。

でも、このポーズは通常のものとは異なっていたかたちである。普通の人が見たら異常に見えるであろう。

それは女王と奴隷のポーズだ。奴隷の顔の

上に君臨する驕慢な女王の姿としか、うつらないだろう。たき子と宇吉の場合は、最初から何となく、このポーズに流れこんでしまっただけで馴れっこになってしまっている。だから宇吉にとっては、そのポーズから受ける屈辱感はない。

だが、たき子の方は極めて征服的な気分である。跪かせた男の前に立ちはだかり、片足を上げて男の肩を跨ぐ。この場合、跨いだ方の太腿で、男の顔を斜めに押える、かたちになる。だが、手前の方の足には密着感がないし、完全に強く締めつけることはできない。しかし足と足の間隔は相当、広く開くことになる。

男の奉仕によって征服感が盛り上がったところで、残る片足をもちあげて男の肩越しに跨いでしまう。このポーズが好きなのだ。

ちょうど逆に男へ肩車に跨がったかたちである。これなら両の太腿で自由に締めあげることができると同時に男の顔は、いやでも上向きになる。

こうなれば男はただ坐っては居られない。両手を後に突っかい棒にしなければ、ひっくり返ってしまう。

大抵の男が、宇吉もそうであるが、最初は

両膝をついて坐っているが、たき子が片足を跨いだ時点では、あぐらをかいている。だが逆肩車のかたちになると、あぐらをかいていた足を長々と、のばすのである。たとえ片足でも、自分の前に残っているうちは、あぐらをかいているのだが、前面になにもなくなるのと、足を伸ばす。男に与えられた自由の境地は、両足のみであるからだ。

たき子が上から体重をかけるように、のしかかれば、男は両手と両肩で、これを支えなければならぬ。

この頃、たき子は肥って七十キロ近い。このボリュームで本腰に、のしかかれるのを支えるのは、かなり苦痛である。

宇吉は老人でもよく我慢して支えている。村中の場合などは、支えきれずに、すぐヘナヘナと仰向けに倒れてしまうのである。

追い討ちをかけるように、たき子は顔の上に跨がってやるのだが、その時に改めて征服感をおぼえるのである。

今、たき子は片足跨ぎから、逆肩車のポーズに移った。

顔が上を向いた宇吉は、ちょっと、たき子の方を見上げたが、すぐ目を、とじた。

——フフフ。

顔をギョッと締めてやると、ちょっと苦しそうな顔をする。すぐ力を弛めて楽にさせてやる。宇吉の顔が、あかくなった。

たき子は宇吉の顔を見下ろして、——これが経済界では羽振りのきく実力者の顔なのかしら……

と思った。半白の髪が、いつも綺麗に櫛けずられているのだが、今は乱れている。下がりの眉、下がりの目。それらが、だらしなく弛緩して、母親の乳房を吸う小児のような他愛もない、この顔が、財界では睨みの利く顔なのであろうか。

——フン、だらしのない顔だわ。

たき子は大きく尻を揺った。

宇吉の顔は、たき子が足に力を加えると、額に四本も五本も皺が寄って、猿のような醜い顔になった。目は泣き出しそうにシヨボシヨボさせている。だが、それでいて拒否の態度は示さず、むしろ歓喜の表情にも受けとれる複雑な顔をしてみせた。

——爺さんは、あたしに虐められるのを喜んでるんだわ。

宇吉の苦しそうな顔を見ると、もっと虐めてやりたくなる。

——もっと苦しめ。ホラ、こうしてやる！

たき子は両腿で締めあげながら、上から圧し潰すように体重をかけた。

「ねえ、パパ。うれしい？」

宇吉は、もちろん、声は出せない。

それは安井に聞かせるための言葉なのだ。

たき子の言葉によって安井は、今どんなポーズにあるかを知ることができる。

安井は、どんな気持で聞いているかしら？

たき子は安井の方に神経をつかう。安井に聞かれているということが大きな刺戟となっているのだ。

も っ と 刺 戟 を

たき子は、宇吉が奉仕に勤めれば勤めるほどサディスティックになっていた。

——ゆう子が言っていたわ。老人というのは若い女に虐められるのが好きなんだって。虐められて喜ぶなら、もっと虐めてやろうかしら——

たき子は村中二郎に対しては憎悪をこめて苦しめ、羞しめ、思いきった、あくどいことをやってやった。あれは村中に対する憎しみがあつたからだ。

宇吉に対しては、憎しみは全然ない。ただ

宇吉が求めるから応じてやっているだけだ。

だが、次第に宇吉がM的に陥って行くのを肌で感じとると、もっと刺戟を強くしてやらないと喜ばないのではないだろうか。そのことに努力すべきだ。と思うようになった。

「フフフ、アハハハ」

たき子が急に想い出し笑いをしたのを、宇吉は不審気に見上げた。たき子が想い出したのは、いつか安井が

「努力するのは、股に力を入れるってことなんだよ。僕は君に対して懸命の努力を惜しまないよ」

と言っていたが、あれは男の努力のことなのだ。もしも、女が努力することになると、女が股に力を加えることになる。

その点、たき子は、まだ宇吉に対して「努力」は、してやってない。

——そろそろ、本腰を入れて努力してやろうかな……

宇吉の顔を見ると、目をつぶり、腑抜けのような顔に見える。時々薄目を開けてたき子の顔を、まぶしそうに見上げている。たき子の御機嫌をうかがうような目つきである。

——ああ、御機嫌は、いいよ。だから、こうしてやる！

たき子は、ちょっと両腿に力を入れて締めあげてやる。苦しそうだが、我慢している様子だ。

——よし、じゃ、もうちょっと御機嫌のいいところを見せてあげようね……

鼻と口をグッと圧迫してやる。

宇吉は眉間にハチを寄せて懸命に、こらえている。心臓のたかなりが、ドキドキと感ぜられる。

——よしよし、感心だね。じゃあ、これじゃあ、どうだい？

更に、のしかかるように重圧を加える。

ドキドキと、心臓が早鐘のようになっていく。みるみる顔が真っ赤になって、かなり苦しそうである。

だが、たき子としては半分も努力していないのだ。

——我慢おし、このくらい……

ちよっと締め上げをゆるめて呼吸をさせてやる。

ひと息入れさせたあとで更に力を加えた。

「ウウ、ウウッ」

宇吉は右手でバタバタと床を叩いた。

ギブアップのサインである。

——まだまだ、このくらいで音をあげるんじ

やないよ。我慢しろ。ホラ、ホラホラ。たき子は面白くなって老人を、なぶってやった。

床を叩く手が激しくなった。

——フッフ、だいぶ苦しうだね。この位で勘弁してやろうか。

たき子は両腿の力を抜いて、楽にしてやった。ゴールを過ぎた競馬馬の上に立つ騎手と同じ心境だった。

宇吉はフーッと大きく吐息をつき、

「ああ、驚いた。窒息してしまっようよ」

「ごめんなさいパパ。あたしも夢中になっちゃって何も分かんなくなっちゃったのよ。苦しかった。御免なさいね、ほんとに」

「いいんだ、いいんだ。君が、それだけ喜んでくれれば、僕としても嬉しいんだよ」

「ありがと。パパは、ほんとにいい人だわ」

「ただね、これからは手を叩いたら、すぐ勘弁してくれよ。心臓によくないからね」

「ほんとに御免なさい」

あやまってはいるが、たき子は、まだ顔はさんだままだった。

宇吉の人のよさそうな顔つきを見ると、どうしても憎めなくなる。

——あたしって、何だか毒婦みたいな、悪い

女になっちゃったのかしら。

と、反省もしてみるのである。だが、今の様子を逐一、安井が盗み聞きしていると思うと、宇吉を帰したあとの、安井とのことが楽しみでもある。

——ごめんなさいね、パパ。あたし、安井さんを喜ばす道具にパパを使ってるのよ。憎くてやってるんじゃないんだからね。

もしも言葉に出してそんなことを言ったらいくら人の好いパパでも怒るだろうと思ったりした。

「サリーちゃん、ベッドへ行こうよ」

宇吉の目は活き活きと光っていた。

男を虐める声

しかし、宇吉は、十秒と保たなかった。

——だらしがないったらありやしない。あれだけ手間をかけてやったのに、このざまなんだから……

二人は浴室に入って汗を流した。

そこでも宇吉は、また、たき子の乳房や可愛らしくペコンと凹んだお臍に戯れた。

「あたし、これから、また、お仕事しなくっちゃならないのよ」

たき子は早く安井のところへ行きたくなつたので、口実をつくった。

「そうかい、忙しくて大変だね。でも、いいことだよ」

宇吉は結局、たき子にアフターサービスをした。しかし、浴室の音はインターホンに入らないから安井には聞えない。

適当にあしらってやると、それでも宇吉は満足した表情で帰って行った。

「アキオさん、アキオさん」

たき子はインターフォンで呼びかけた。

向うからの返事は聞えないけれど一応、声をかけておいて、たき子は安井安芸雄の部屋へ行った。

鍵はかかっていなかったが、安井はソファの上で眠っていた。

「フッフ、待ちくたびれた？」

たき子は、安井の肩をゆすって起こした。

「ね、どうだった？」

「何が？」

「聞いたでしょ」

「ああ、最初の方は聞いてたけど、眠くなっちゃってね」

「あら、いやだ。聞いてなかったの。嘘！」
安井は黙って微笑していた。ほんとに眠っ

てしまったのかもしれない。人が折角、苦勞して演技しているのに人の気も知らないで。

「薄情ね。早く来たかったんだけど、この頃くそ爺いが、しつこくてさ」

ドシンとソファの安井の上に乗っかるように身を投げかけた。

「重いよ。おい、重いつたら」

たき子は、構わず安井の頬を手ではさんでキスを何度もした。

「サ、早くう」

寝巻の前がはだけて、豊かな内股が露わになった。

「あ、俺まだ仕事があるんだよ」

「何言ってるのさ」

たき子は安井をソファから抱え上げた。

たき子と同じ七十キロ近くある安井を軽々と抱き上げるのだから、たき子も女にしては力のある方である。

寝室へ持って行って、ベッドの上に放り投げた。

「おい、乱暴すんなよ」

「何言ってるやがんだい。ひとがジリジリしてるのに……あんた、この頃、冷たいよ」

たき子は、安井の胸の上に、馬乗りに跨がった。

「おいおい、よしてくれよ。爺さんにするよな真似は」

「なに言ってるやがんだい。あんたが聞いてくれると思って、あたし一生懸命だったんだよ。畜生！ お仕置してやる」

ガバツと安井の顔へ跨がった。

「おい、バカ！ よせよ」

「こん畜生ッ」

暴れる安井を無理矢理、おさえつける。

「おいっ、よせよ。分ったよ」

「畜生！ これでもか」

「わ、わかったよ。言うこと、きくよ」

たき子はサツと顔の上で向きを変えて、安井のズボンに手をかけた。

そうしたことが常習のようになった。

安井は、たき子の猛烈さにへきえきして、

時々四、五日、旅に出ることがあった。

安井は部屋の鍵をたき子に預けて行った。

ちようどその頃、鬼山は、頼んでいた表紙

と扉の絵を、締切りが来ても、たき子が描き上げないので、電話で催促すると、晩までに仕上げるから十時頃、来てくれということだった。マンスヨンの一階で食事をして十時に、たき子の部屋を訪ねると、扉の鍵はか

かっついていないのに、たき子は部屋に居なかった。しかし、すぐ、たき子は現れた。安井の部屋で仕事をしていたらしい。

「もうちょっとですよ。でも困ったわ。今パパから電話があつて、やってくるのよ。どうしましょう」

鬼山は、たき子に連れられて安井の部屋に入った。なるほど絵はあらかた描けていた。

文字を入れる場所などを打ち合わせていると、インターフォンから物音が聞えてきた。

「あら、来ちゃったわ。先生、すみませんけどこの部屋で少し待ってて下さらない。一時間ぐらいで帰しますから」

仕方なく鬼山は安井の部屋でテレビを見ながら待っていると、インターホンから、いろいろな音が入ってきた。

荒い息使いの声や、

「フフフ」

と、たき子独特のふくみ笑いの声が聞えてきた。

「だめよ、パパ。もう少し我慢するのよ」

いつもの話し声より、やや太い声で、たき子が、しゃべっている。

パタンパタンと何かを叩く音が聞える

「苦しい？ フフフ、パパ、この頃、少し弱

くなつたわね」

ハーツ、ハーツと物凄い息使いの音が入ってきた。百米競走のあのような激しい呼吸の音だ。たき子ではない。

鬼山には、どんなシーンか分るような分らないような、どうしても耳をすませて聞かずにいられない。

「ふふふ。フフ、うふふ。ホラホラ」

たき子の声が凄く煽情的である。男の欲心を、かきたてる声である。

ポルノ映画を見ても大して昂奮もしなくなつた鬼山だが、この物音や声には激しく、かきたてられた。見知らぬ他人の映像よりも、知っている女のそれの方が、はるかに迫力があるものである。

——これを毎日毎夜、聞かされるのでは安井もたまらないな。

と思った。たまには食傷して逃げ出すのも無理はない気がした。

橋本を帰すと、すぐたき子はやってきた。

シースルーのガウンを裸の上にまとつただけの大胆な恰好で廊下を横切ってきたのだ。

「お待たせ。ウフフ」

インターホンで聞いた、あの独特の笑い声を目の前で聞かされた。

「あんたの笑い声は男を虐める声だね」

「あら、どうして？ フフフ」

「その笑い声で、私の心臓はズタズタに刻まれちゃったよ」

「そう？ 一人の男は刻んでやってるけど、もう一人の男性の心まで刻んでると思わなかったわ。自分で勝手に刻んでるんじゃないの？ アハハハ」

たき子はグラスに氷を入れて持ってきた。ウィスキーを水割にして、椅子に腰かけると足を組んだ。シースルーのガウンの裾が割れて、巨大な太腿がニョキリと現れた。

見れば見るほど太い大きな足である。ひろい肉の丸味は奥深くまで続いている。

「ああ、もう今夜は仕事ができないわ。明日の午前中でいいでしょ。ねえ、先生」

鬼山が承知するに決まってるといった顔でたき子は鬼山に迫って行った。

「ちょっと行きすぎてるんじゃないの、パパさんに対してさ」

「フフ、なに言ってるのよう。あたし達のこととは、あたし達のこと。ね、そうでしょう」
このボリウムに襲いかかられては、鬼山もどうすることもできなかった。

—— 〆耽 奇 房、 我 楽 多 控 —— <第九回> ——

筐

底

秘

戯

辻 村 隆

SMカメラ・ハントに勢いづいていた一時期、毎月毎月、異なれる女性を登場させることに激しい意欲を燃やし、せっせと渉猟しては、次々とハントしていったものだった。

内心それに誇りを感じ、一寸真似の出来ないことを、オレはやっているんだぞと、独りよがりの自負心で、登場のハント女性とは、その後も交渉を持ちつつも、一度登場させた女に二度のおつとめはさせないと、独り合点で、筐底の奥深く秘蔵し、女性達とのその後の交渉については、口を緘していたが、想い出のよすがに眺めた時、私の脳裡には、女性群像が走馬灯の如く去来するのであった。

プライバシーの関係で、書けなかった女性も相当数にのぼる。歳月の経過は、当時のプライバシーを、いつか忘却の彼方に押しやってくれる。SMカメラ・ハントの晩年、ネタに困って、同一女性を幾度か登場させたことを思えば、頑くなに守った一人一度の登場は私の独り角力のものであった。

あの当時なら、強烈すぎて、到底掲載されそうもなかったフォトも、時流と共に、今ならスuisイと罷り通る、世の移り変わりようである。

他誌が奇クの開拓したモデル女性を恬然と

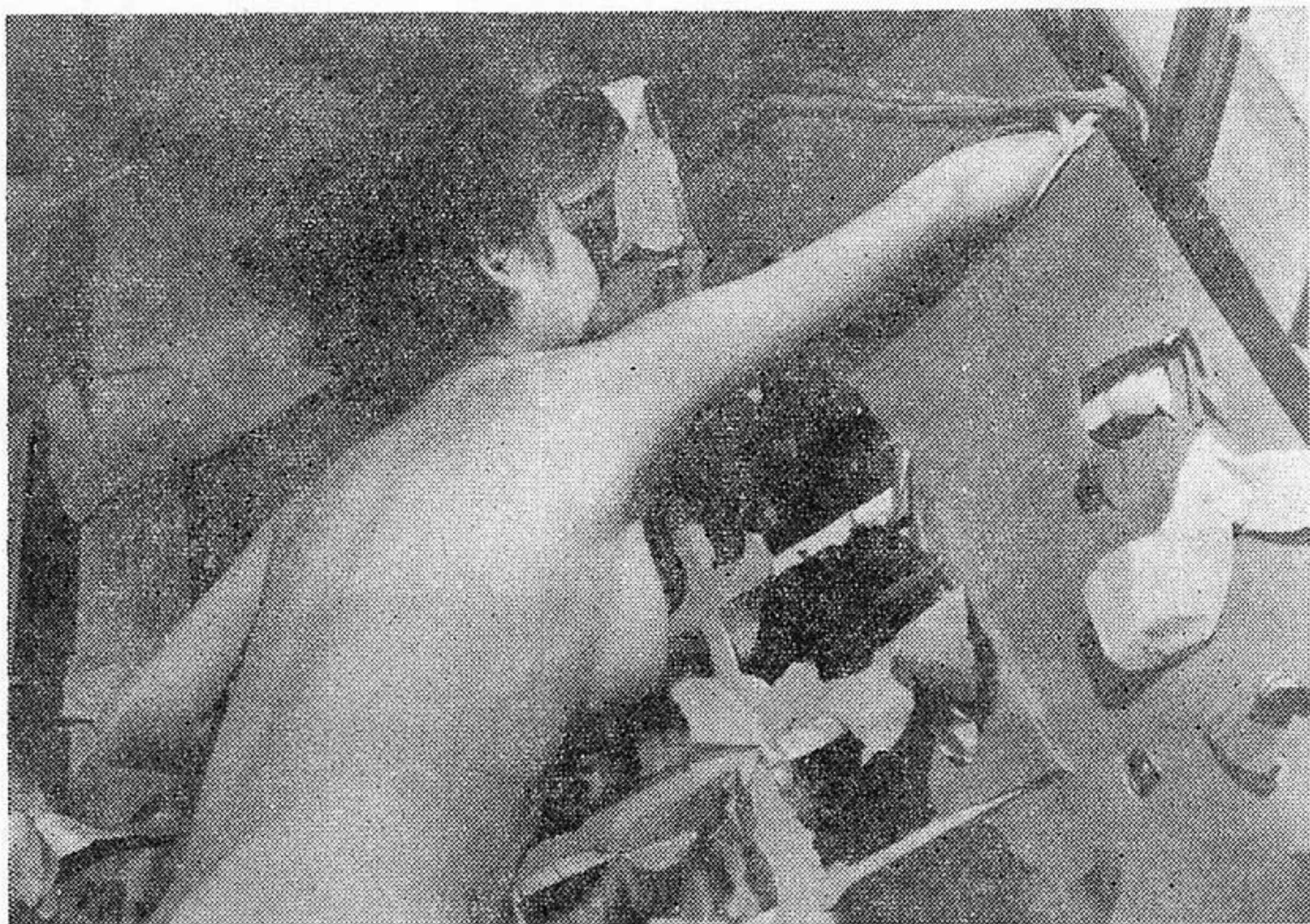
のせる世の中であり、断り切れず、同好者に交換で貸したネガが、又貸しされて、私以外にない筈のフォトが、他誌や、外国誌にまで出ていてビックリする無責任時代でもある。プライバシーの問題で、書かなかった女性にしても、やはり私という人間はどこか古いのか、勝手に無断でのせるということは気が引けて、一応は連絡をとって、諒解を得たりもするのであった。

謂わば、SMカメラ・ハント余聞とでもいおうか――。

そんなものを、膨大な資料の筐底を引っ繰り返してとり出してみ、全葉のせたら、一篇のカメラ・ハントになるので、取捨選択したのがこれである。

その一 引つ越し騒動記

書かないでくれと、念を押されて、もう五年になる。その彼（彼の名前など本当はどうでもよいのであるが、勿論本名を出すわけにはゆかない。当字を嵌めて、盛長与四夫としておこう）が、どんな風の吹き廻しか、美しい奥さんを伴って、晩春の一日、ヒョッコリと訪問してきたのであった。ドライブの帰り



で、時間も早かったし、思い立って、一寸、寄る気になったそうである。

五年の歳月の経過と共に彼にもすっかり落ちつきが出来て、三十過ぎにもかかわらず、会社では課長代理の地位を占めていた。

奥さんは、あの日の、引越しのドサクサにまぎれて行なった、我々のSMプレイは、夢にも御存知ではない。あの引越しを契機に、盛長与四夫と、SMプレイガールの恵子は、綺麗さっぱり手を切ったからであつた。

「辻村さん、今日の事は書かないで下さい。万一のことがあつては困りますから——。私のためにも、恵子のためにも……」

とダメを押されている。面白いカメラ・ハントではあつたが、私は、彼の意志

を尊重して、断念せざるを得なかった。忘れもしない、昭和四十三年六月第一土曜日のことである。

滋賀の古城のほとりH市から、大阪市内の東淀川の社寮に引越して以来、私達の友誼は、年頭、暑中の挨拶程度になってしまい、彼は何を思つてか、心気一転してエリートコースをひたすらに走っていたようであつた。だから私は、彼が結婚したということも知らなかった。後にも先にも、彼等カップルから陪席のお声がかかったのは、一ぺんコッキリである。

同好仲間のプレイメイトとしては、縁の薄い方であつた。

筐底深く、その時のSMプレイのフォトを秘めた俚今日に到つたのであるが、はからずも今、夫婦の訪問を受け、私の記憶は、五年前のあの日を脳裡に思い浮べたのであつた。

愛人の恵子との交際期間が長かっただけに彼の結婚は遅く、三十の声をきいてからで、一昨年、結婚したという奥さんは、六才年下の若々しい女盛りである。

何年振りに出会つても、私達共通の話題は、あの引越し前日の、慌ただしくも又、強烈な刺激の、SMプレイの一件しかない。

しかし、奥さんの手前、迂かつに口を切って、旧悪曝露したら、彼も困惑するに違いないと、私の方からは切出せない。彼が皆目、そのことに触れないのは、この若く瑞々しい奥さんに、知られたくなかったからに違いなかった。

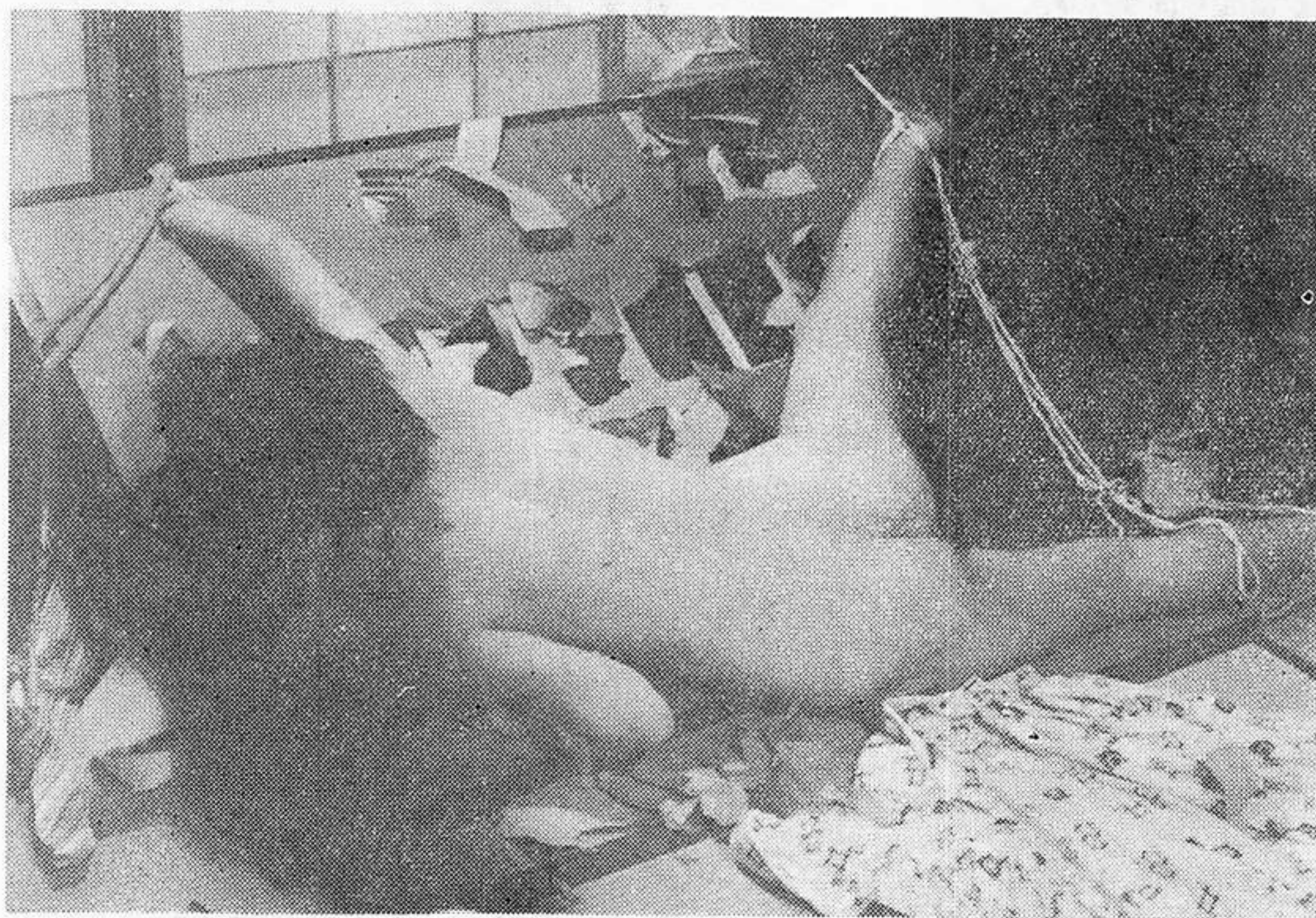
当り触りのないSM談のひとつとき。

彼の話の端々によると、彼は数カ月前頃から、奥さんに対して、SMプレイめいたことを、ボツボツ始めているというのであった。

私達の話に、聞くとともになしに耳を傾け乍ら、この初々しい若妻は、ボツと頬を染め、モジモジして、それでいてチラリと好奇心を覗かせて、同席していた。

地位も出来て、衣食足って礼節ならぬ、プレイの味を、今ひとたび求めてこの愛すべき若妻を、彼は私に会わせることによって、さりげなく飼育しよう、かかっている。

部長の媒介で貰った妻だけに、すぐさまには、夫婦の生活に、倒錯めいたSMの行為は、とり入れられなかった



らしい。

だからして、ドライブにかこつけて突然に私を訪れたのも、SMプレイ促進の一つの手段であったのであろう。

私の予期した通り、究極は、私の蒐集がお目当てのようであった。それを妻にみせることによって、妻をSMづかせようとしていたのであった。

あの日の引越騒動のSMプレイのフォトには、彼自身、随分写っているし、この若妻の眼には絶対触れさせてはならないものもかなりあった。

土産に持参したジョニ赤一本の手前でもそれはうまく省かねばならない。

私は耽奇房にこもると慌ただしく、一冊一冊に眼を通し、彼のフォトがないのを確かめてから、尚且、そのうち比較的、初心者向のおとなしいものを選んで、この好ましい若妻の為、提供したのである。

怖いものみたさの心理で、若妻はおずおずと一枚一枚、はぐってゆく。それは何ともいえぬ楚々として艶な風情であった。

そつと彼を耽奇房に呼び込んだ。

「あの日のプレイのもの、見せちゃまずいんでしょう」

「ええ、そりやもう……。妻にとって、私は始めての男性ですからネ。やっと最近、簡単な縛りは許すようになったのです。恵子とのあのような激しいプレイのセックスを経験すると、妻との夫婦生活なんか、もうアホらしいようなものです。何も知らぬノーマルな妻に、SMプレイめいたことをするのは、本当に冒険でしたが、妻がセックスにどうやら燃えるようになってきましたので、その折を見計らって、囁言のように吹き込んだらO・Kでした。そんな時、女は、もうどうされてもいいような気分になるものなんですネ。縛ることも、私にとっては愛情の表現の一つですから、私の申出を甘受した時には、精一杯の愛情を注いでやるのです。そろそろSM雑誌も読ませ、奇クのパックナンバーなども取出して、枕許へ置いておくようにしています。だから、妻は、辻村さんを知っているのですよ、奇クの中で……」

「そりゃいい傾向ですよ。一対一の夫婦の場合、お互いに理解しておれば、SMプレイだって、性への潤滑剤ですからネ。それが愛情の発露となれば、SMのプレイ自体、アブノ

ーマルな行為じゃなくなるのですから。私の持論ですが、妻が、夫好みの妻になった時、その夫婦の家庭は円満ですよ」

「ええ、確かに——。近頃は愉しくて仕方ないのですから……。仕事にもハリがありますからね」

「SMについて、幾分でもアドバイス出来ればそれでいいんです。ところで、奥さんの手前、お聞き出来なかったけど、あの時、別れた彼女、その後どうしているんです？」

「無責任みたいだけど、全然、知らないんです。あれ以来会っておりませんからネ。私達のああした秘かな生活に、あんなヘンな手紙をよこした奴さえいなければ、恵子との生活は、もっと続いていたでしょうし、ヒョットしたら、結婚にまで踏み切っていたかも知れません」

「ヘンな手紙？ そいつは初耳だなあ」

「そのこと、言いませんでしたか？」

「ええ、引っ越しを明日に控えての、ドサクサまぎれのプレイで、あんたも随分ハッスルしていたようだったから……。いつもそうですが、余りプライベートには触れない主義でしてネ」

「じゃあ、プレイに夢中の余り、言い忘れた

のでしょう。一寸非道い中傷の手紙でしてねえ。思わず頭に來たものですから、あんなことになっちゃって」

話が長引きそうなので、私は新たな数冊をとり出して、さりげなく耽奇房を出ると、若夫人に与える。怪しまれてもいけない。

私一人、耽奇房へ引き返すと、暫くして、彼はソツと這入ってくる。

話の続きは単刀直入である。

「どんな手紙の内容だったのです？ お差支えなかったら聞かせて下さい」

「誰か近所の人間が、私達の激しいSMプレイの最中を覗き見たらしいのです。あの部屋を覗こうとすれば、ベランダを鉄柵越しに伝ってこないと覗けない筈です。そんなこともあるかと、プレイの時は、いつも厚いカーテンをしめ切って行なっているのですが、左右のカーテンの引いた中心は重ならず、ごく僅かですが隙目があります。多分テキは、そのカーテンの隙間から覗いたのでしょう。御存知の通り、あの三階のマンションは、端から端までハツの部屋に区切られていて、出張りのベランダは、それぞれ屋根の^{ひさし}廂までブロックがつんであります。身軽な者なら、鉄柵につかまって、越えることも可能ですが

みつかりと泥棒と間違われます。懼らくテキは、この三階の住人の誰かと思いますが、ヘンな手紙は、用心深く、タイプでうってあるのです。筆跡を知られないためでしょう。内容は、破廉恥でアブノーマルな、靡れた二人の性生活を知っている。会社へ知らせたら大変なことになるぞ。だから口止料を寄越せ。それがいやなら、自分にも女の相手をさせろといったもので、口止

料の金額や、秘密の置場所を書き、SMプレイの相手をさせてくれるなら、どこそこのホテルへ女一人で来い。ついてきたり、訴えたら、会社にバラすという、イヤな悪質の脅迫状なんです。恵子と相談の結果、私達は急拠そのマンションから、姿をくらまし、離れ離れになって、蒸発することになりました。引越しの前日、心残りのないプレイをしようと



相談し、それなら、かねて、親しくして戴いていた辻村さんを、最後にでもお呼びしようということになったのです。恵子はこの私の申し出に納得してくれました。その時は、まるで追い立てられるような気持ちになって、会社もやめるつもりでしたから、勝手休みして丸三日間、朝から夜まで、もう、靡れるような耽溺の生活を続けました。辻村さんが恵子

の裸身に眼をやって、体のあちこちに残っている、愛咬の痕や縄傷に、好奇の眼を、みはっていられたのを覚えていますよ」
言い終って、彼は、
「ちょっと……」
と、私に眼で合図して、夫人の許へ戻っていった。彼女独り放っておくのも、気掛りなのであろう。

強烈な刺激を受け、体中を熱くして、懸命に見入る夫人に、幸いにも、私達のしめやかな会話は気付かれていないようであった。

冒頭に述べたように、書かないで呉れと、念を押されたのは、そんなイキサツがあったからであらうとは私も今が今まで知らなかった。SMに耽溺する愛人関係の二人の、プライバシーの秘密ぐらいに、軽くとっていたが、二人にとっては懼らく、それどころではなかったに違いない。

まるで推理小説の謎解き

めいた真実の剔抉だけに、私の好奇心は、未だ未だ、その先を聞きたがっていた。

私の知っている事實は、この一つのケースの、ごく一部分の、三時間ばかりであった。今にして思えば、あの日の二人の表情には、不安と焦燥めいたものが泛かんでいたが、私はそれを、始めて加わった私に対する不安と近隣を憚る危惧と真剣味のようなものにつけてとっていた。

脅迫の手紙に、切羽詰まって追い立てられるような気持でプレイしていた二人の姿が、今ありありと瞼の底に蘇ってくる。

記憶のタイムカプセルは、須臾にして、五年前の、新緑のあの日に遡る。

.....

盛長与四夫は、未婚の青年であったが、かなり熱心な奇クファンで、私のSMカメラハントの愛読者でもあった。交際している女性とのSMプレイを紹介するからと、頻々と奇クに通信を寄越し、当時の奇クの読者通信欄にも二度ばかり掲載されている。

彼の若さの熱心さに負けて、箕田氏は彼の手紙を私に転送してきた。私から好餌とばかり、彼に連絡する。喜びの返事がかえってくる。近日中に、近日中にと、頻りに気を持た

せ乍ら、同好仲間になって一年以上も、彼のいうSMプレイは実現しなかったのである。

その気でおり乍ら、いざ実現となると躊躇し、逡巡し、恵子の不同意もあって、プレイの実現は空転していたのである。

結局は冷やかしかったのかと、私も若干の憂憤も手伝って、当てにしくなると共に、二人の連絡は、いつしか途絶えつつあった。

それが突然、思いもかけず、彼の電話で、明日、是非来て欲しいという早急さに、半ば不審の思いを抱き、まさか、かくいうなればすっぱかしやウソでもあるまいと、腹をくくって名神高速を車で飛ばし、井伊大老ゆかりの湖畔のH市の、彼のマンションを訪れたのは昼下りであった。

ブザーを押すと、覗き窓から、見憶えのある彼の顔が覗く。

扉を開き、彼は辺りを見廻すようにして、慌ただしく私を中へ招じ入れた。

眼が血走っていて、どす黒い眼隈をかげらせ、頬骨が、以前会った時にくらべて尖っていた。不安と危惧にさいなまれていることを知らない私は、それを激しいプレイによる憔悴の結果だと勝手にそう解釈したのである。

一步室内に踏み入って、足の踏み場もない

乱雑状態に私は啞然とした。これは一体どうしたことかと訊ねると、明日引越すので、片付けているのだと彼は応えた。

撰りに撰って、とんでもない日に私を呼んだものだ、内心慄然としたが、豈はからんや、SMの凄まじいプレイは既に興たけなわに、朝早くから続いていたのである。

興乗れば恵子を縛る。精力を涸れ果たし乍ら氣力で挑む彼。ドロドロしたなまぐさいプレイに耽り、喘ぎつつ二人は引越しの荷物を纏める。そして又ぞろきざすと挑む――。まるで二匹の野獣の戯れである。

私の訪れた時、恵子は、無惨にも、ズタズタに破り裂かれた襖の骨組に縛りつけられていた。目的もない――。縛りたいから縛るのである。何かささみ切ったものを感じたが、彼の精しい説明がなかったので、引越しに当って、何か気に入らぬことがあって、八つ当りに当たっているようにしか思えなかったのであった。

「いずれ燃しちまうんですよ。何か暴れたいなりました、無茶やってるんですよ」

「どうして又急に、私を呼んだのです」

「ええ、急に、明日引越すことになりました……或はこの女とのプレイも、これが最後

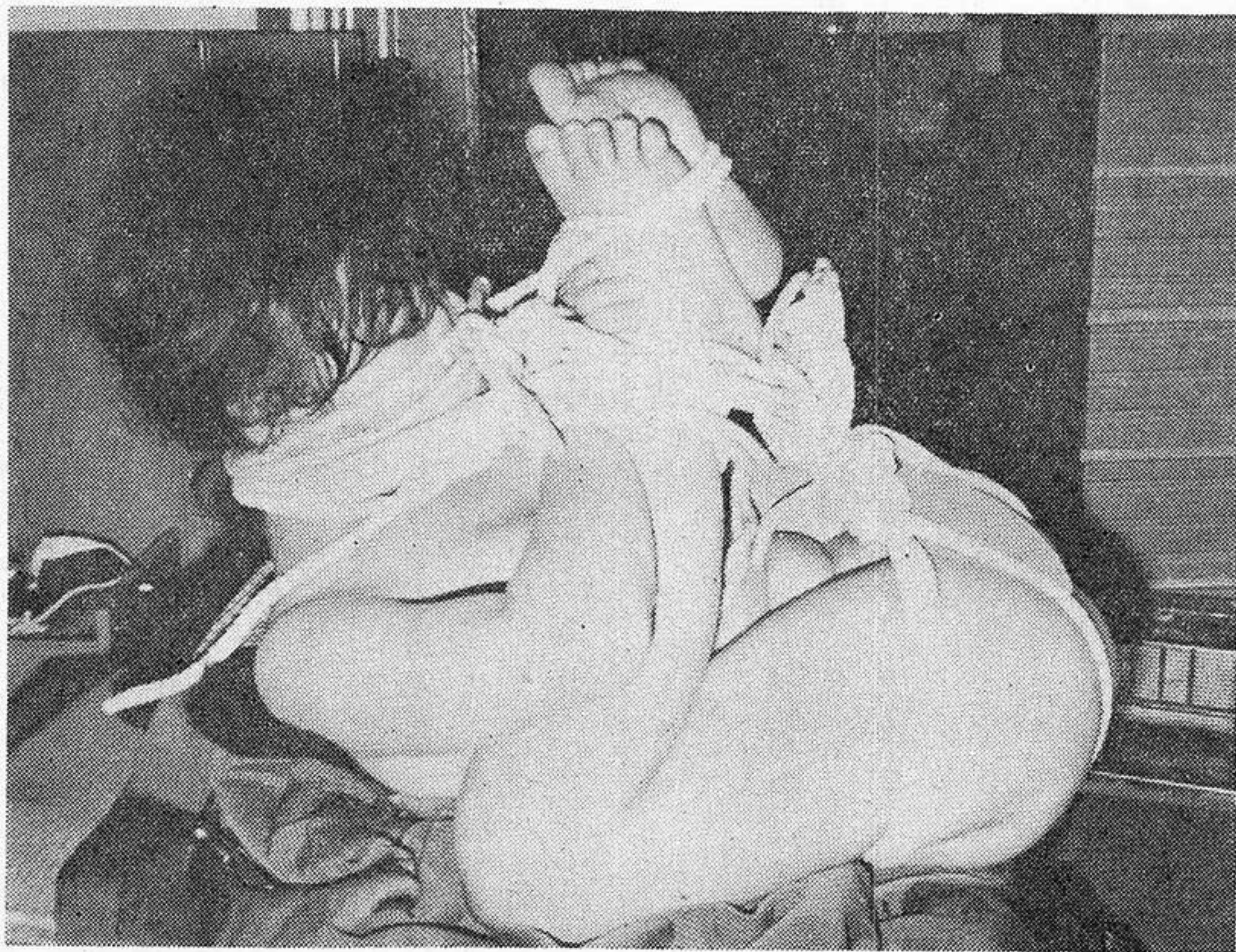
になるんじゃないかと思ひまして。一度は辻村さんとのお約束を果しておきたいと、それで思い立ったのです。ホテルでのおとなしいプレイも結構ですが、こうした乱痴気騒ぎも変っているでしょう」

いや、確かに変っている。彼は襖に手をかけて、ぐいと裏返す。両手を襖に突込んで無難作に縛りつけられた背面の女体が、私の眼を、異様なまでに釘付けにする。背の縄傷、二の腕に咬みついた痕、臀部の打擲のあとなどが、ありありと、激しいプレイのさまを、とどめていた。

彼女は、ヒタと襖に顔を伏せた唇喘ぎ、私に一言もいわない。豊かな胸が生々しく揺れて、襖の骨に圧迫されて息づいていた。

その激しさに圧倒されて私は息を嚙み、無言の俛、逸早く、カメラを構えて、閃光を走らせた。

彼は、パリパリと襖を打碎いてゆく。手のつけられぬ荒れ模様であったが、何が彼をそうさせたかという詮索の前に、私はこの凄まじくも生



々しい光景に、唯々心を奪われ、只管に、カメラの構図に心を走らせていたのであった。

「これもういかに壊しちゃうか」

独りブツブツ呟いて、彼は立てかけてあった衣桁を、恰度鞍馬の様に三角に立てると、開かぬよう、有り合せの紐で、衣桁の底辺を結んでゆく。支度の出来上ったところで、彼女を襖より外してやる。私の眼を避けるようにして、彼女は薄い透けすけのパンティを慌てて身につける。

衣桁の三角の頂点に、バスタオル一枚折り畳んでのせると、うつぶせに彼女を鞍馬に縛りつける。ビリッと絹の裂ける音がして、薄いパンティは、ずり下げられて破れる。

この最高の尻打ちのポーズに向って、彼の打擲の革バンドが、容赦なく唸りを発した。

ヒューッと洩れる悲鳴を必死にこらえ、恵子は、ヒクヒクと嗚咽にすすり泣き、美しい臀園に、桃色の条線を彩っていった。

バンドを投げ捨て、彼は、犇と臀

園に、しがみつく。いとおしくてならぬ様に優しく撫でさすり、頬を擦り寄せて、赤く腫れ上った白い肌に、唇を押つけてゆくのであった。

最早そこに、私の介在の余地はなかった。

人在って無きが如く、無心に唇で痛みの肌を撫でさする彼は、さながら無心の境地で、甘いSMのプレイに真底、耽溺しているようであった。

稍あって、正気を取り戻したかの様に、男は女を解き放つ。倦怠と放心が交錯し、無言の俛、二人は足の踏み場もない部屋の片隅にうずくまる。

始めて、まともにみた、愛人の恵子は、ふっくらとした顔立ちの、下ぶくれの肉感的な頗るの、美人であった。眼許がチャームリングで、心持ち大きめの双つの唇は、感覚的に、好色の感を抱かせた。だから、尚更に、彼を夢中にさせるのであろう。

恵子はのろろ立上ると、その時になって私に、はにかみの笑顔で会釈すると、片隅に押しやられた茶籠笥の上の抽戸を開くと、折詰の寿司を三箱とり出し、赤いポットと共に盆にのせて持ってきた。

ささやかな昼食――。

片付けてしまったのか湯呑みもなく、私達は、ポットの上蓋をコップ代りにして、熱い茶を廻し呑みし乍ら、寿司をほうばる。

驚きの形容詞の羅列で、プレイの激しさを詠いあげる。

「どうです、いい奴でしょう」

恵子を眼でしゃくって、彼は私に同意を求める。

「素晴らしいの一語に尽きるね。カメラ・ハントでは、読者は嘸かしビックリするよ」

「いや、それだけは事情があって許して下さい。その懸念で、今まで実は延々にしていたのです。突発の事情で、今日お呼びしましたが、書かないでほしいのです」

真剣な眼付で、彼はくどい程、私に念を押した。残念だが、やはり当人達の意志を尊重するしかない。私は、やむなく諦めたのであった。

「その代り、もっと強烈な縛りをお目にかけます」

まるで償いのような言葉を吐いて、彼は、ドサリと縄束を、恵子の膝元に投げ出す。

「私の得意の縛りなんです。まあみて下さい」

仰向けの恵子の体が二つに折れた。

手足を胸許で一束にして犇と縛り上げ、余った縄は、彼女の頬をくびって、縄の猿轡となって巻きついてゆく。

開股の双臀から太腿にかけて、ゆるぎない縄が、遠慮会釈もなく、苛酷に締めつけられていった。

呻き声すら抑圧されて、恵子は究極のポーズで、唯微かに、うごめくのみである。

なんの銜^{てら}いもなく、盛長与四夫の肉体が活動を始める。

原始的で素朴な、そのくせ、強烈に刺激的な開放のセクシオンで、ソワサン・ヌーフにはじまる彼の愛情の発露が、妖しいマロンフラワールの香の漂うなかで、延々と続けられてゆくのであった。

.....

プレイ果てたあと、片隅のソファ椅子二つを並べて、豊かな肉体を惜しげなく曝しながら、アルカイックな笑みを泛かべて、恵子は軽く両手足を縛られて転がった俛、飽和のあの、半醒半眠の余韻を貪っている。

愛虐の宴を終わっても、彼は愛人に衣服を与えなかった。そしてこのポーズ。

それは彼の、私に贈る、はなむけの最後のサービスであったかも知れない。

その姿に、羨望と、軽いジェラシーをおぼえつつ、たっぷり未練を残して辞去した私であったが、優艶に眠る美女の白磁の裸像は、今もって私の脳裡の映像に残存していた。

私は、やがて再び、この耽奇房に現われるであろう彼の為に、筐底を掻きまわして、美しき裸像の想い出をとり出すと、喰い入るようにみつめていた。

さりげなく戻ってきた彼は、一瞥して、

「恵子ですね」

と、声を潜める。

「そうですよ。いつみても美しい。今頃どうしてるだろうネ」

「故郷の秋田へ帰ったそうですよ」

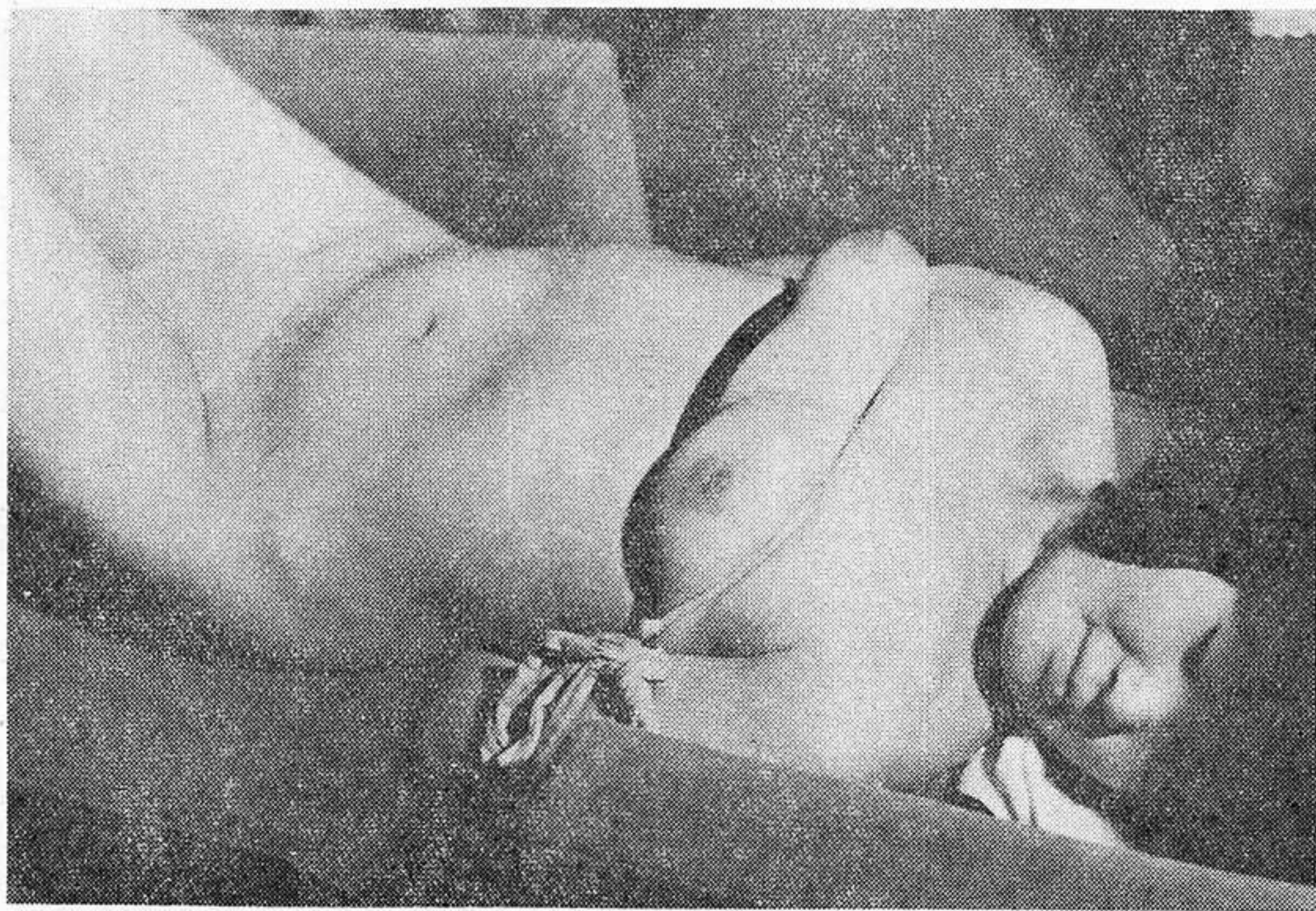
「知ってたのだね」

「と、いう噂です。精しくは知りません」

顔を強ばらせて、彼は苦しげであった。残像の思い出は、余りにも強烈であったのだろう。

「脅迫の方は？」

「何のことはない、その儘です。で



もあの俣マンションに居坐っていたら、又ぞろ、嫌がらせしたかも知れません」
「彼女が美し過ぎたからだよ。美しいものに、男は往々にして、憧憬と羨望と嫉妬を覚えるからね」

彼は黙って、うなずいた。

「頑張って、新しい会社で課長代理になり、美しい奥さんを得たのでは、この災難、以て瞑すべしだよ。私は今後も、あんた達のSMプレイの、よきアドバイザーとして協力しますよ。だから過去の、この五年前のフォトの一部、発表してはいけないだろうか。勿論、あんたのフォトなど出しやしない。美しい裸像と、強烈な緊縛の思い出につながるものだけにする。あんたに選んでもらってもいいんだ。五年前と今では、SMの感覚も、かなり変っているし、普及した今、もういいのじゃないだろうか」

私は、彼女の二十数葉を彼に示した。

「いいでしょう。既に過去のことだし、滅多に迷惑もかからないと思います。じゃあ」

彼は選ぶ――。そして五葉。

SMプレイの、恵子の最後の日の、美

しき裸像が、ここにある。

あの日、彼から聞いた、SMプレイの詳細など、ここにくわしく書けば、も早、一篇のSMカメラ・ハントである。少々、古ネタではあるけれど――。

ひしめき合う、日本の狭い空の下、何処かに住む恵子に、幸多かれと祈るのは、あながち私一人でもあるまい。

今年の夏の、彼の暑中見舞の片隅に、『お蔭様で、着々と進行中です。深謝』

その二 何放かMに ヘンシンの魔子

SMカメラ・ハントで、『魔子の呻く夜』『魔子の甘く泣く夜』と、二回に亘って発表したので、その後の魔子とのSMのプレイフトは、私自身の気持で、オクラにしてしまった。書いた執れもが、S性の魔子で、彼女が嫌がるのを、なだめすかしてとった緊縛フトである。その代償として、私はいつも、フトのあと、M族にヘンシンして、魔子に隷従させられ、心ならずも（或は、チョッピリ希んでもいたが）女王様として、お仕えたのであった。

かなり魔子に熱をあげていた私は、ハント

の分も含めて、前後六回、彼女とプレイしているのであるが、もう今は伝説の人になり果てた、『痴人の糧』『この女と』の、山本章氏が、魔子と数回プレイしたあと、どういう心境の変化か、魔子は奇妙に淑やかになって、Mにヘンシンし始めたのであった。

山本章氏と最後のプレイをした昭和四十六年の夏の終り頃、彼女の方から電話でデートの申し込みがあつて、一泊ぐらいのドライブに連れて行って欲しいというのであった。「そりゃ又、嬉しい話だけど、急にどうなったの？」

「フラれちゃったの一章さんに……。勿論あなたの方に奥様のいらっしゃることにぐらいハナから承知だから。ツイ（ドイツ語の2。英語ならツウ、洒落ていってるのです。オワカリ？）でもいいからっていったのだけど、そんな柄じゃないって蹴られちゃった。第一、趣味が違うっていうの。SとSじゃ衝突するばかりだって――。あたし随分、彼とのプレイでMになったつもりだったんだけどなあ」「なったつもりでも、真底マコはMじゃないからね」

「彼もそういうんです。疑似性のマゾヒストはダメだって。相当ショックキングに虐められ

ても我慢したのに」

「それで、彼に振られたシワ寄せで、私と旅行ということ？」

「ウウン、そうじゃないの。センセイに、あたしのM性を確かめてもらいたいの」

「嬉しいこというな。じゃあ、今度は、絶対ダダをこねないっていうのだネ？」

「勿論よ。センセイの命令の俤になるわ」

「それならO・Kだ。どこへ行こう？」

「夏の終りの浜名湖は、静かで美しいって話よ。館山寺温泉なんかどう？ 東名を走れば忽ちでしょう」

と、マコは気軽に、自分できめる。ここらあたりに、Mになったと称し乍ら、彼女の女王めいたところがチラリと覗くのであった。でもまあ、どこでもいいわといわれるより主体性があつて、判っきりしてるところが、やはりマコらしいわいとすがすがしかった。

マコは振られたといっているが、山本章にとつては、一向に振ったという感覚はなかった筈である。彼はこの女性とガンをつけたら、執拗なまでに迫る。そして殆どの場合、目的を達する。優しく柔和でフェミニストで美男子の中年紳士ときては、大抵は参ってしまふ。数度のプレイののち、さりげなく遠ざ

かつて行く。謂うなれば、ダンディな、根っからのプレイボーイでもあった。

文を書かなくなってからの、地下に潜った彼のプレイハントは、かなり浮名を流しており、私が東京新宿に近いSMプレイの店「マルゴ」を訪れた時、鍋島マネージャーが、近頃折々、山本一章がこの店にも出没していることを告げてくれた。彼にとっては、マコも又、SMプレイの一人の過去の女に過ぎなかったであろう。

自由奔放に生きるマコにとって、曜日など是一向に関係がない。当然の様に、私達はウ



イークエンドを避けて、九月初旬の一日、名神から東名へと、ハイウェイを飛ばした。三カ日インタを出て、浜名湖畔を走って館山寺温泉へと向う。

金糸の縫取りのある長袖の黒地のブラウスに、パンタロンも黒。丸型の大きいサングラスも黒味勝ちで、黒づくめの精悍な牝豹めいたマコは、やはりどうみても女王的存在である。山本一章に振られたといっているが、彼女の表情には、深刻、悲愴さのかげらいもなく、ケロリとした、いつも通りの魔子であった。妙にジメつかないのが魔子のいいところ。

自分から振ったのなら兎も角、向うの方から離れていったのが、矜持の高い魔子の心を傷つけたようである。所詮、Sの女王らしく誇り高い女でいたかったのだろう。

しかし、陰にこもるM族より、男性的なS人間に魅力を感じた時彼女はヘンシンせざるを得なくなったのである

ろうか。

今日のプレイの華やかさを希って、車のトランクには、かなりの多量の縄と、愛悦の器具が忍ばせてある。フルに使うもよし、すべてが使えなくても、マコを膝下にひざまずかせ、思う存分いたぶってみたい野望に燃え、私は車中、わざと粗野めいた口調で、言葉のSMプレイを続けてきた。

(今日は思い切りムチでぶちのめしてやるからな、覚悟はいいね)

(パイプをフルに使って、ヒーヒー喚かせてやるよ)

(雁字搦目に縛り上げ、逆さに吊してやる)

(開股縛りにして、ローソクたらたらだぞ)

そんな私の、卑猥にして粗野な言葉を柔らかに、うけ止めて、マコは或は小鼻で笑い、時にはアルカイクに微笑んで、

(いいわよ、センセイの好きな様にして)

(さあ、どうだか。風呂屋の釜で、いうばかりでしょう)

(そんな虐め方しちゃイヤ。SMのプレイだから、お互いに快樂していなくては)

(ハイ、ハイ、御自由に)

(でも、牀に傷つけちゃダメよ)

など、適当にうまく配列して、応答するの

であった。

予約しておいたホテルに到着したのは、午後の四時半。ホテルは中流クラスであるが、以前に一度泊っていて、勝手知っているのが便利であった。ホテルの裏手は、浜名湖畔の浪打際で、漣の夕映えは、こよなく美しい。ささなみ

中年の私と、まるでスターのようなマコとこのカップル。どうみても夫婦や恋人同士には、みえっこない。まあいいところ、ファッションモデルを、企業メーカーのおやじが口説いて啜え込んだというところであろう。

ホテルの浴衣に着がえて、大浴場でのんびりつかっていても、夕食の時間までには小一時間ある。黒づくめのマコは、浴衣に着換えても、どこことなく、なまめいて、妖しい色気を全身に漂わせていた。僅かの時間をせいてプレイしなくても、私達にはゆっくりした夜がある。窓辺に向い合せて坐って夕陽の沈むのを眺めていたが、手招くと、マコは気軽に私の膝に座った。抱きしめて、必然的に唇が合う。仄かな湯上りの若い女の匂い。思わず手が伸びる私――。

「慌てない、慌てない。ゆっくりした夜があるじゃん。相変らずねえ、センセイ」と、マコは、そっと私の指先を剥がした。

いつにない女らしさに、私の胸は疼く。豪勢な夕食に、ビールを二人で三本のみ、ほろよいが、私の心を放恣にする。

食事の跡片付けにきた部屋つきの女中に、多いめの心付を握らせると、心得て、匆々に床をとって引下ってゆく。八時半――。



湖畔の夜は長い。二間続きの広い部屋が、撮影には都合がいい。バッグから、ぞろぞろと縄束や女悦の器具をとり出し、カメラの準備を進め終って、入口の扉をロックする。

マコは窓辺の椅子に腰を降した俤、漫然と湖畔に点滅する灯りを、みつめていた。

マコの背後に立ち、そっと肩に手をおいて

「生理は、いつ？」

「三日前に終わったわ」

「じゃあ、恰度いいや、心配しなくても……」

「フフ、好きねえ、センセイ」

そんなやりとりが出来ただけ、気がラクである。

マコは、いつになく、しおらしかった。

S 的で強そうでいても所詮は若い娘――。

内面的な打撃が、マコを気弱い娘にヘンシンさせていたのか――。

「苛められていても、愛情がジーンと感じられるプレイは素晴しく愉しいわ。センセイに彼のようなプレイ求めること自体、無理かも知れないけど……」

車中で呟くようにいったマコの言葉が、フト蘇る。そういえば、この私とマコの、過去数度のプレイは、単なるSMプレイとして割切ったの行為ばかりの様であった。心の交流

や愛情の繋がりという点では確かに乏しい。私のマコを見る眼は、尊大で自負心の強い女王似的な一人のプレイ対象の女、とだけしか見ていなかったのではあるまいか。

数多プレイする女性も変っても、山本一章の場合、その刹那、刹那に、相手の女性に愛情丸出しで、心の底から愉しくプレイしていたのにくらべ、私の場合、SMプレイは、愛情が前提などと、いつもそのことを提唱していながら、その実、単なるプレイメイトとして割切っていたようである。肉の交流があっても、愛情の発露ではなく、SMプレイによって昂揚した気分の吐け口ではなかったか。だからマコと過去既に幾度かプレイし、セックスに到り乍ら、所詮、その場限りのプレイで割り切っていたことを、この才女は、チャンと見抜いていたようであった。

如何に女王的に振舞っても、所詮は女——SMプレイが、愛情の発露であると肌で感じた時、魔子はどのようなヘンシンする柔軟性を持っていたのであった。

縛る、カメラ、解く。又縛ってカメラ。時偶チヨイチヨイ女悦のバイブで挑発して又カメラ。縛る——解く——カメラ。そんな繰り返しに、愛情のついている隙間はない。私独自

の独りよがり、カメラ・ハントには、愛情云々と書きつらねても、実際のプレイの時、宿命的なカメラの挿入と、緊縛の構図は、女心を冷やしてゆく要素を存分に胎んでいた。そこに、SMカメラ・ハントと、ナマのSMプレイの相剋がある。私自身、いつもこの矛盾に低迷しつつ、やはり、過去、前者の轍を、いつも踏み続けてきたのであった。

それが、八年半のハントの集積であれば、この矛盾、又何をか、いわんやである。

マコは言外に、私との、愉しい、温かみと愛情のあるSMプレイを望んでいる。それがS的、又M的な性癖を抱く者の、本音であり本心である筈であった。

カメラに撮られるという行為は、若干、刺激はなくてもないが、ナマの愛情の籠ったプレイとは、凡そ程遠い、一つのプレイの残像を止める手段に過ぎない。それが願望の女心を如何程、昂揚するといふのであろうか。

いみじくも、マコはそれを山本一章に比較して指摘しているようであった。

又ぞろ、カメラをとり出し装置する私に、彼女は懼らく、期待外れの幻滅を感じていたかも知れない。

女性を縛ったら、まるで撮らねば悪いよう

にカメラを構える私のこの習性に、マコは落胆しているのだろうか。

SMのプレイに徹してこそ、女も男も愉しい。それを、敢えて、わざわざ夾雑物を挿入する私は、根っからのSMプレイヤーではないのであろうか。

(フフ、好きねえ、センセエ)といわれ、苦笑し、向い合って坐り、煙草を吸う間、これだけの思考が、私の脳裡を去来していた。

(今夜のお前は、カメラが主か、プレイが主か——とくと返答しろ)

私のハイド氏が、低迷する私を、にらみつけて、心の中で返答を迫っている。

(勿論プレイさ。一夜泊りで可愛い子ちゃん、夜もすがら出来るなんて、こんなチャンスはザラにはないからね)

(だったら、あっさりカメラなんぞ蔵っちゃまえ。未練らしいことをするな)

(だって、同じポーズは二度とないんだぜ。プレイの合い間に、チヨイ、パチリぐらい、いいじゃないか)

(だから未練だというのだ。折角のこんなチャンスに、少しぐらい撮ってどうってこともない筈だ。だからマコは、真底、お前に靡かないんだぞ。やめちゃえ)



（だって、こいつはオレの趣味なんだし……）
（ええい、勝手にせい）

Sのハイド氏と私は、ぼんやり煙草をくゆらせて、こんな腹蔵の意見を斗わしていた。

私はマコの手をとる。彼女は従容として立上るとサラリと浴衣を脱ぐ。既にブラジャーはなく、薄いパンティ一枚きりの裸身を惜し

げもなく、私の眼前に曝したが、思い切ったように、最後の一枚も、さっと脱ぎ捨てた。

しなやかな女体は、覚悟して、私に導かれる。座椅子に坐らせて、私は縄をはためかせた。

深更、午前二時——。

激しい苛責の行事で昇華した、疲労困憊の

大脳神経に鞭打って、私はやっと辛うじて奮起し、成すべきことは終った。

ハイド氏の嘔きに、内心忸怩たる思いで、それでも私はやはり、36枚撮りフィルム三本を消化してしまった。

延々続く、五時間の難行苦行の末、マコは全身に縄目の跡をレリーフさせて、ぐったりと眼を閉じて私の傍らで動かなかった。

十数種の緊縛の変化は、魔子にとって、始めての受難であった。

よく耐え、マコは約束通り柔順であった。それでいて、ちっとも燃えないのは、どうしてであろうか。

魔子が好むと好まざるとにかかわらず、私の一方的な押しつけのプレイが、マコの心を硬化させていったのか——それとも。

マコが山本一章によって開眼された、官能をゆすぶり、快楽につながる緊縛のSMプレイが、私によって得られなかったとでもいうのであろうか。

緊縛した俤の女体に、焦り気味に挑みかかる私に、マコは微かに呻いてはいても、そつと顔をそむけて、苦渋を泛かべていたのだった。

努めてM的になろうとしても、Mになり切

れない仮性M女は、私の懸命なるプレイをも受け入れなかったようであった。

いつも緊縛プレイのあと、私をM族にすると、女王にヘンシンしたマコは、忽ち、いきいきと蘇る。

主導権を握った女王が、私をほし
い尽にいたぶり、隷属させて、自己
の自由意志で、セックスの対象にし
た時、女王は、妖しく燃え上るので
あった。

だから――。

いっそ、いつもの様に、私はMに
ヘンシンすればよいのであろうか。

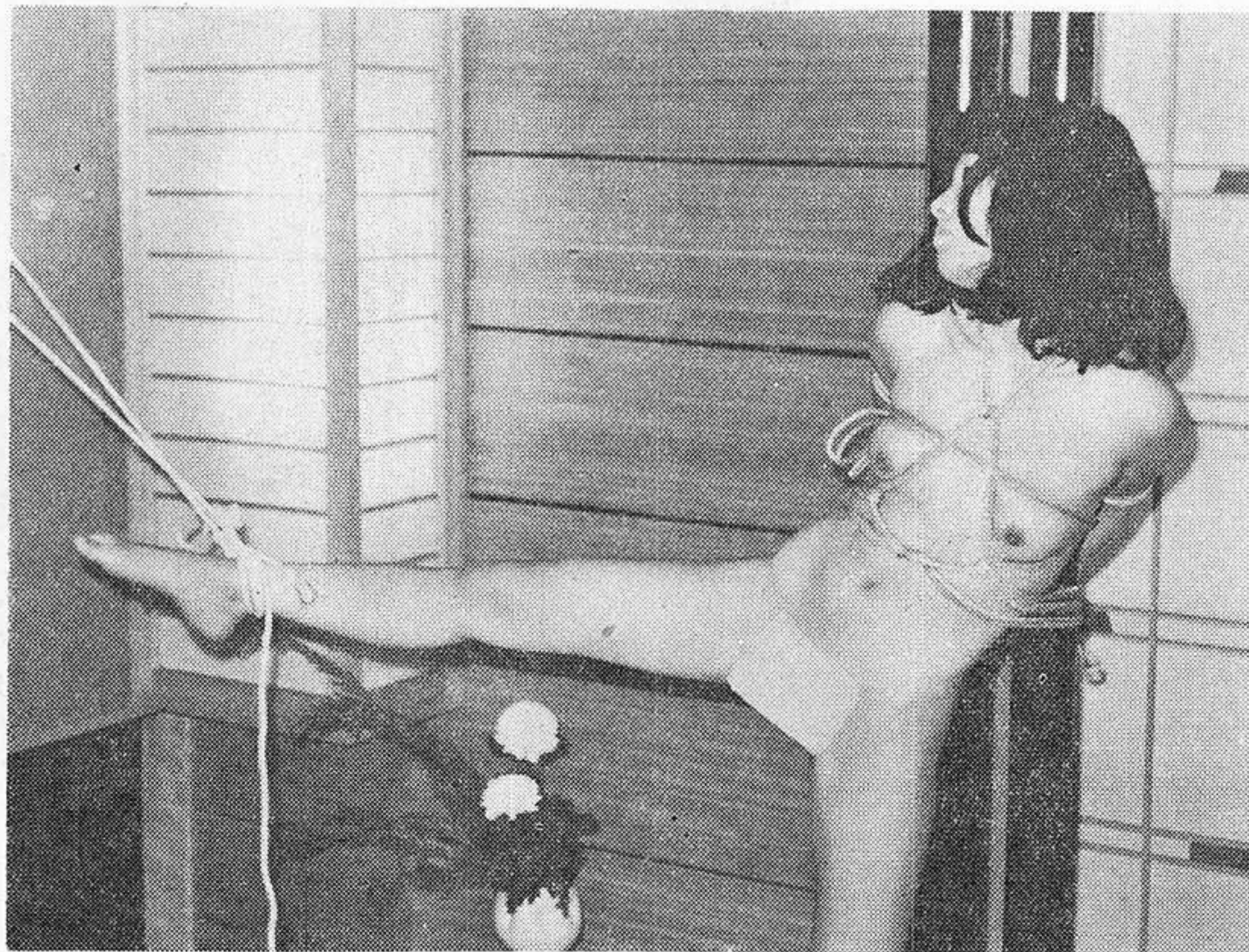
しかし、五時間というプレイ時間
は、この中年男を余りにも疲れさせ
ていた。

白けたあとの飽和状態が、私を昏
迷の冥府へと導いてゆく。

深い眠りの中で、私の神経だけが
奇妙に起きて続いていた。

グリーンと体が重い。不動金縛りに
なったように、私はビクとも動けな
い。どうしたのだろう――。

臀部や腿に、灼けつく痛みを感じ



る。息苦しい。

私は醒めた。辺りは漆黒の闇であ
る。

私は韓々と縛られている自分を自
覚した。

叫ぼうにも声は出ない。

正確な神経が、徐々に、私の状態
を大腦に伝えてくれる。

眼隠し、猿轡――。緊縛の裸身に
魔子が跳梁し、撥ねる。

含み笑いと共に、私の覚醒を知っ
た魔女は私の猿轡を外した。

「どうしたんだい？」

「ホホ、やっぱし、これが私の性に
合っているの。アーンとお口をあけ
なさい。おいしいものを、のませて
あげるから。さあ」

マコの匂いが私の鼻腔を擦り、顔
を押し潰されて、息詰るようになっ
た。

懐かしいマコの香りにむせたあれ
は、夢だったのだろうか――。

朝の陽に目ざめた時、マコは未だ
ぐっすりと、私に背を向けて眠りこ
けていた。

うなじから肩のあたり、シートがしっとりと濡れている。暁暗の顛末は、シートにその事実を証明していた。

押え切れぬ願望に悶々し、マコは寝込みの私に襲いかかり、自分自身の燃える気持を鎮めたのであろう。

排泄につづく、執拗な一方的押しつけのソワサン・ヌーフ。それはもう、疲労の私にとって、苦痛にも似た業^{ごう}であった。

考えてみれば、いつもすれ違いの私達であった。一方的に私はSの快虐に走り、主客転倒して、マコは私にM化を押しつけて終る。レールの様に並行的で、いつも交叉しない私達。それでいて、自己の願望を銘々に果して奇妙なプレイメイトの仲は続いているのであった。

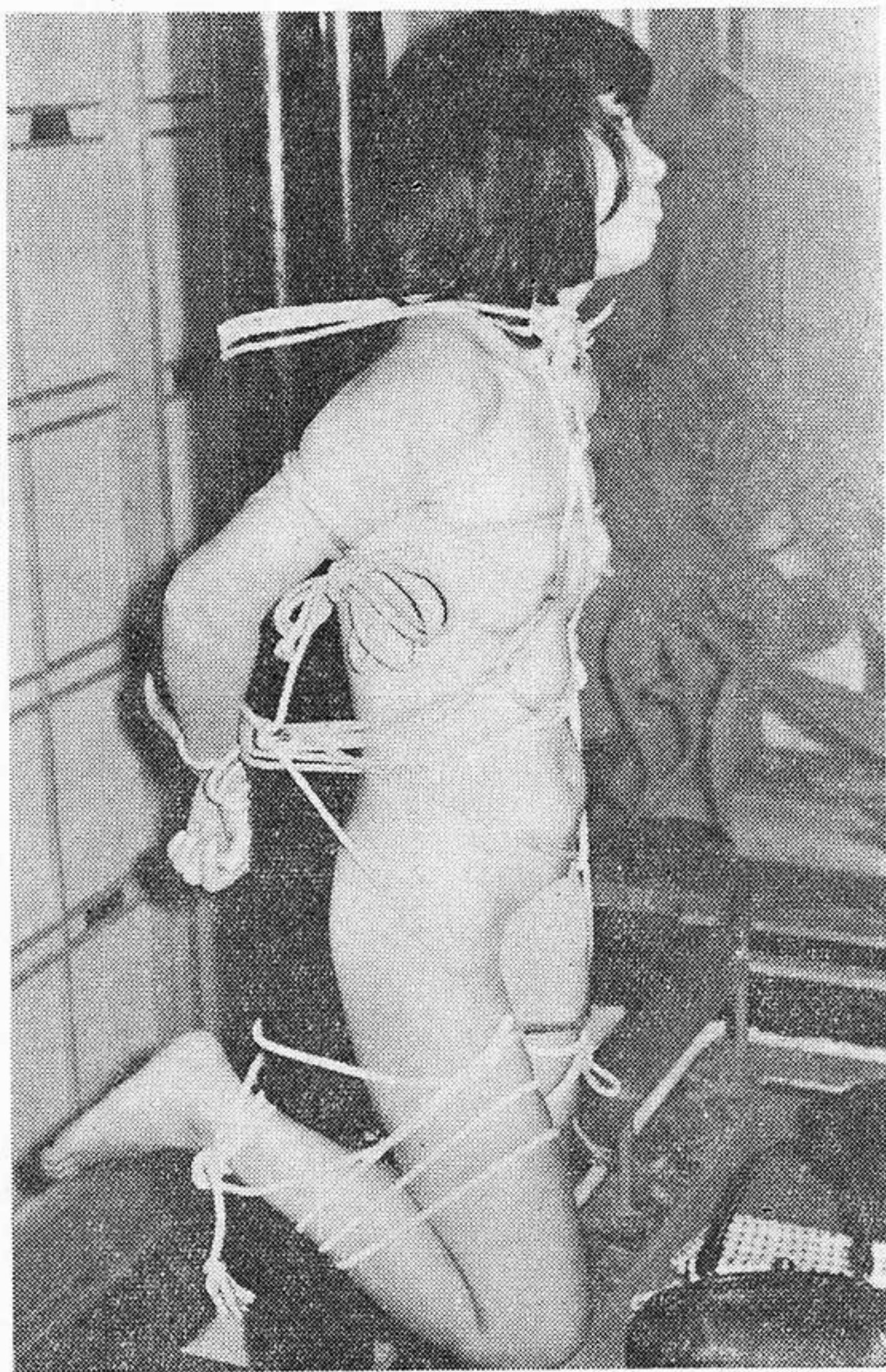
気配で、めざめたマコが、身を翻えして、薄目を開いて私をみた。

「抱いてエ、センセイ」

大きくうなずいて俄破と抱きよせる。

ノーマル・コイトス——。

お互いが、SとMにヘンシンする私達が、しっくりと心の通い合ったのはこの時だから皮肉である。



五時間に亘る緊縛のSMプレイの状況を、私は、わざと省略した。その一つ、一つを述べても冗長にわたるだけである。

二年前のプレイのいきさつを、こと細かく説明するだけの根気が、今の私にはなかったからかも知れない。

筐底の秘葉のその数枚、列举して、偲んでいただけたら幸甚である。

男女、いかに奇を衒い好んでも、帰するところ、ノーマルなものが根源なのか——。

マコも一風も二風も変った女——。

私にしてからが、嗜虐に愉しみを見出す粹狂な男——。

それが結局は、単純な、男と女の、誰しもが行なう生理の方程式で、満足と、愛情の交歓をし、気持よく京都で別れたとなれば、若

干、私のSMプレイの理論も、訂正する必要がありそうである。

マコと私の、時折の交遊は、今も続いている――。

その三 モーレッツ女性に してやられの記

かつて、奇譚三十九夜物語の篇中、野外緊縛撮影会で登場した宇治さゆりとは、撮影会以後、ぼったり消息が途絶えた筈、再会する機会もなかった。

それが、六年振りの、昭和四十五年の春、堂々と私の家を訪問してきたのだから、私は懐かしいやら、驚くやら、戸惑うやらで、ウロウロしてしまった。

女は、まさに不思議な、いきものである。

六年の歳月を全然感じさせない若さで、むしろ、あの頃に較べて、いきいきして若返ってすら見えるのだから、どうなっているの。

宇治さゆりは、生菓子の手土産まで携えてきながら上ろうともせず、いぶかる眼付の案内が傍らにいるせいか、昔語りをするでもなく、近頃の世間話やら、物価高の話やら、とりとめなく、よく喋って、この近くまで来たから一寸、立寄ったのだ、とだけいって、又

近くへ来たら立寄りますと、十五分ばかりであっさりと帰ってしまった。大島紬の、渋い和服が、よく似合い、かなりいい生活をしているようであった。

始めて知ったあの当時、まるで体当りの白タクの女運ちゃんをやってみたり、パチンコに入り浸って、プロ並みに、チンジャラで稼いでみたり、寿司屋の茶汲み姐さんになっ てみたりして、何にでも取組むモーレッツ生活をし、緊縛のモデルになったのも、その頃であったが、今見る彼女に、その様な往時の面影はなかった。

「一体、どんな知合いの方なんです？」

と、女房は心配げに訊ねる。宇治さゆりの年頃が、女盛りの、男欲しげな好色的に見えるだけに、内心、穏かでないらしかった。

女の直感で、ちよいと口説けば、コロリと参りそうに見えたのであろう。

私は在りの俣を話す。狐につままれたみたいで、それしか言い様がなかったのである。「そんな人が、突然、何の用で来たのでしょうね」

妻は、尚も釈然としない。私の住居を知っているだけでも可怪しいと思うのか――。

過去、緊縛女性が正面きって訪問し、妻が

安心して応待したのは伊吹真砂子ぐらいで、彼女は元来レズだし、気さくなタチだから、あっさりしていて、私達の家族と食事を一緒にするくらいの間柄であった。

夫婦プレイヤーは別として、女性一人の訪問は、SMプレイという名の情事の仲だけに矢張り誰も、正面切って訪れはしなかったのが実情である。

何の用件で宇治さゆりが、突然訪問したのかは、私の方から聞きたいくらいのものであるが、弁解めいて聞こえてもつまらぬから、妻の疑問は、私の疑問として、その俣放っておくより仕方がなかった。

釈然としない筈、そろそろ彼女のことなど忘れかけていたら、それから半年近く経った秋の初め頃、突然又、ひょっこりと現われたのである。この日も和服で、度があるのかなのか、流行りの眼鏡などかけて、どうみても有閑マダム風である。年令を逆算したら、確か三十五、六才の筈であるが、風体は、年令以上に落着いてみせている。

幸か不幸か、家内は外出中で、私と娘だけであった。

この日も彼女は、手土産持参で、どうも反って薄気味が悪い。

立話も気の毒と応接間へ契めたら、家内不在と知ってか、あっさりと上り込んできた。

とりとめない四方山話が数分、続き、宇治さゆりは、一寸、言葉を改め、

「今でも、ああしたお写真お撮りですか？」ときく。そらきた。どうやら話は核心に触れそうと、

「ああ、相手変れど、主変らずで、相変らず飽きもせず、やっていますよ」

「もう私のようなおばあちゃん、ダメでしょうかしら……」

「とんでもない、以前よりむしろ若返っているですよ。勿論今でも撮りたいですね」

「まあ、嬉しいこと仰有って……それ本心？」

「当然ですよ」

「唯、縛るだけじゃいやヨ。いつかみたいにイジめて下さいますか？」

「そりゃ、その方が嬉しい……」

私は思わず本音を吐いてしまった。

始めて出会って以来、彼女が思いがけず、好色的なのを知って、立て続けに二度ばかり出会い、この時の二度目の、アベノのアベックホテルでは、カメラ抜きで、SMプレイに耽溺し、愛情まるだしに濡れた仲になったのであった。彼女はそれを指しているらしい。



過去の遠い幻影が、今、俄に身近な現実になって、私の心はときめき、疼き始める。

一入、妖艶と豊満さを身につけた、有閑マダムたる宇治さゆりは、私とのプレイを求めて、心臓強くも乗り込んで来たというのであるか——。家内在宅なら困惑するところも

うまく不在となるとゲンキンなもので、彼女の来訪を心嬉しく思うのだから、私も矢張り根っからの助平人間らしい。

「ねえ、イジめて……きつとよ。ゲンマン」

彼女は、年に似ず、初々しい素振りで、欲びを全身に漲らせて、ふっくらと脂肪の乗った小指を差出す。照れ乍ら、小指を絡ませると、それをシオに、女は私の手をグッと力強く握りしめたのであった。

その指に、ダイヤの指環が光っている。

「今、どんな生活しているの？ 裕福そうじゃないか」

「お蔭様で何とか……。喰べる心配だけはいりませんわ。でも今も独り暮らしよ。チップケなマンション暮らしですけど、近いうちに是非いらっしゃいませよ。御馳走しますわ、いつかのように可愛がっていただけたら……」

彼女はハンドバッグから、革表紙の、どこかの化粧品会社のサービス品らしきメモ帖をとり出すと、洒落たボールペンのペンシルで住所と電話番号を書いた。

東大阪市、近鉄沿線の花園駅近くである。

「いつ、来て下さいますの？」

「さあ、いつが、いいかなあ」

「ここ、数日、安全期間なんです」

と、いうことは、生理前後か——。だから尚更、独り暮しの女盛りは欲情するのだな。

「じゃあ、明日にでも……善は急げだ」

何が善なものか——。不善に急いで、内心女房を恐れているくせに……。

「泊れないんでしょう？」

「近いからね、帰った方が無難だよ」

「でも、夜の方が、気分が落着くから……」

宇治さゆりの双眸は、既に、猥らに光っている様であった。

まるで、棚ボタ式の情事到来。しかも、先方からボタ餅を運んでくれた都合よさに、私の心も俄に猥ら心が昂まり、既に明日のSMプレイに心を千々に走らせるのであった。

食事を作って、夕方六時にお待ちしますという、鬼のいぬ間の洗濯の何とやらで、私の家内が戻らぬうちに、匆々に立上る。

勿論、私にも、その方が有難い。愚図々々されて、女房が帰って来ては、明日が出難くなってしまう。不在の今なら、何とでも外出の理由が出来るからであった。

単なるSMカメラ・ハントなら、女房に堂々と告げて出掛ける私も、情事目当てのプレイだけに、内心忸怩たるものがある。

かくて翌日の夕方、同好者に出会おうと偽っ

て、数本の縄とカメラをショルダーバッグに詰めて、近鉄を利用する。駅に近いこの田園都市は、なまじ車でゆくより、電車の方がラクで早かった。

マンションというより、中級アパートといった木造三階建ての、彼女の棲家は、駅から十分そこそこで分り易かった。

二階の奥から二番目に、均一の氏名差しに彼女の名が横書に挟まれてある。

ブザーを押すと待ちかねた様に扉が開く。

満面に笑みを湛え、念入りに化粧した宇治さゆりが、手をとらん許りに招じ入れる。

六帖と三帖とキッチン——。それでも女一人暮らしにしては、ゼイタクな方であろう。狭いながら、バス、トイレつきである。

「いい暮しだね」

皮肉でなしにそういつて、私はあたりを見廻していた。独り暮らしは嘘ではなく、男氣らしいものは何もなかった。

「でも、生きるのに精一杯なんですよ」

折タタミ機の脚を伸ばして、部屋の中央に据え、彼女はまめまめしく、夕食の準備にかかっている。

思いもかけず、彼女の方から近付き、こうして歓待する宇治さゆりに、私は何がなし、

若干の疑義を抱きつつも、淋しさに耐えかねて、昔の私を思い出し、情事に濡れてみたくなったのが本心かとも、甘く考えてみたりもするのであった。

彼女程の器量と生活をしていれば、私でなくとも、彼女を求める男性は、その気になれば幾らでもあらうに、私に白羽の矢を立てたのは、やはり、Mの願望を秘めている彼女にとって、甘い被虐の陶醉の中へ、ドッポリとひたりたかったからなのであらうか——。

「お酒？ それとも、おビール？」

料理を二人分並べ終って、彼女は聞く。

甘えついでと、

「じゃあ、ビールを頂こうか」

と、もうすっかり私はヤニ下っていた。

若鶏のブロイラー、ハマチの造り、蛸酢、

板ワサ、蟹缶のマヨネーズ和えと、中々豪華である。（この料理、三年前の話なのに、よく記憶していると思われるだろうが、タネを

明すと、その日の日記を開いて、書き写しているのだから当然——。このSMプレイ日記

耽奇房で眠っていて、女房の眼に触れない秘蔵版日記の方である。冗言）

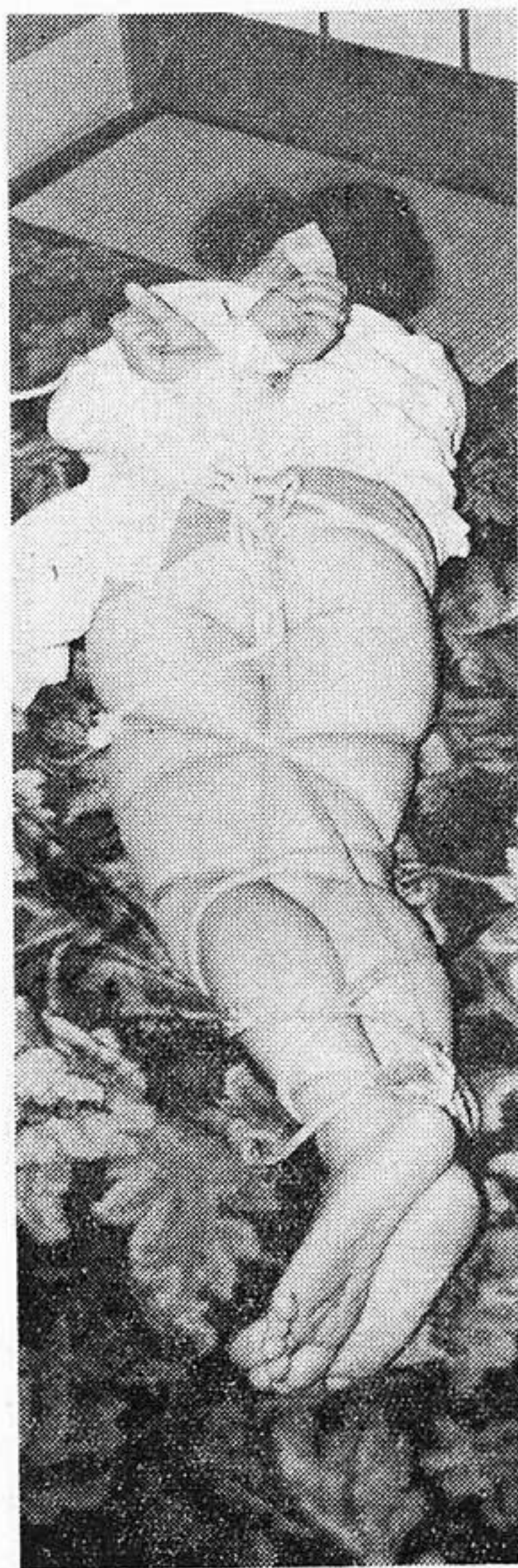
私は手土産も持たずに、手ぶらで来たことを内心、恥じていた。彼女からこうして一方

的に御馳走される程の理由は何もない。SMプレイをしようとして欲心を買うのは、むしろ男からの場合が多いのに、女の方から欲待をうけると、何がなし心苦しかった。

帰りがけに、土産代りに、少し多いめのプレイの報酬を置いてゆこうと心にきめて、巧みな手付でつぐビールを受ける。

彼女もよくのむ方であった。互いに向い合って料理をつつき乍ら、ビールを交し合っている間、どういうものか話はさして弾まなかった。六年という歳月の断層は、めまぐるしく変った世の中では余りにも距たりが遠く、共通の話題に乏しかったからであった。

宇治さゆりが、奇クか、SM雑誌のファンでもあれば、又、最近のSMの話題も着に出て来るが、どうやら、その種の本や雑誌は、関心がないのか、女の独り暮らしからなのか全然読んでおらず、私が、映画やテレビに登場したことなど喋ると、始めて知ったという顔付で惜しがっているのだった。



単刀直入に、私とその気になって手を出せば、彼女はすぐ崩れるに違いなかったが、六年の断層が、何とはなく急には手を出しかねて、そろそろ欲望の鎌首をもたげている癖に私はいやに落着いて、料理を口に運び乍ら、相手の出方を見守っていたのである。

本当は、男の方から行動を起すべきだったかも知れない。

ビールに頬の染まったさゆりは、脂ぎったような顔で、ホーッと溜息をつき、その眼は悩ましげであった。

「未だお彼岸まえで、暑いわねえ」と独り呟き、着物の胸をチラリとはだけ、女は傍らの扇風機にスイッチを入れる。何となく、息の詰まりそうな雰囲気、身を持ち扱いかねているようであった。

を崩して、セブンスターを吸う彼女の姿態は挑発的であった。

「女の一人暮らしって、夜はつまらないのよ」「どうして結婚しないの？ もうテッキリ誰かと結婚していると思ったのに。それとも昔あんたが話していた、結婚するつもりだった彼が、航空事故で亡くなって以来、操を立て通してでもいるの？」

「そんな、もう彼の事は忘れちゃったよ。学資を送っていた弟もチャンとした会社に就職してお嫁さんも貰ったし、父も弟と一緒に暮しているし……でも私、ウカウカしているうちに、こんな年になっちゃったの」

短大を卒業しながら、家庭の事情でいろいろ稼いで、弟と病氣勝ちの父の面倒をみていたことは知っている。気の毒なオールドミス

食事が終わったとみて彼女は大儀そうに立ち上り、キッチンへ残骸を運ぶ。片付け終わって机の脚を折り、対面すると、もう私達二人の繋がりは、SMプレイ以外、何もなかった。

上体をにじらせ、膝

なのか——。

「でも本当はね……」

彼女は一寸、いい澱み、思い切ったように「一度、結婚したのです。でも、どうしてもうまくゆかなかったのよ。結婚した当時こそ夫婦らしい営みもあったけれど、まるでお義理みたい。三カ月もせぬうち、同僚という男性が入り込んできて夫と一緒に一つの部屋で寝て、私はいつも独りぼっち。あとで分ったのだけど、ホモの関係だったのね。正面切つてヤキモチも焼けないし、といって、イライラするし、それじゃまるで、お手伝いさんか、女中の代りじゃありませんか。遂に辛抱しきれず飛び出しちゃったんですよ」

「フーン、よくよく男運が悪いね」

「そう、悪いのネ。もうそれに懲りて、のんきな一人暮らしよ。ずっと気が楽ですわ」

女は吸っていた煙草を、灰皿でぐいとねじると、体をにじらせて、挑発するように私の膝に手をかけて、淫らに燃えた眼が私を見上げた。

ぐいと引寄せると、待っていたように力が抜けて凭れかかる。私の手は帯にかかる。

女は自ら手を添えて解いていった。

腰紐も——。

和服を脱がしてゆくのは、なまめかしかった。私にとっても稀なことである。

赤い蹴出しが躍り、肌襦袢の胸も露わに、たっぷりとふくらんだ乳房を覗かせて、さゆりは悶える。

手許のしごき引寄せ、後手に振じ上げて縛ると、もうそれだけで女は、紅い悲鳴をあげて蹴出しを乱して、のけぞった。

入口の扉近くにおいてきたショルダーバッグをとり立上り、私は、もうそぞろ心で、ズルズルと縄束をとり出すと、はだけた胸に犇々と縄をかけてゆく。

まくれ上った蹴出しから、むき出しになった、白々とした脂の乗った両脚に縄は、蛇のように絡んで、ぐいぐいと締めつけていった。

全身を縛られて、女は尺取虫のように、くねくねとうごめいた。これから始まるSMのプレイに心を弾ませて、早くも甘い鼻にかかった喘ぎが洩れていた。

六年前と違って、今は、女悦を掻き立てる大人の玩具が普及している。当然のようにそれをとり出すと、胸許へ迫る。

ぐいと引寄せ、私は座って膝に女を抱きかかえると、羽虫の響きを肌に這わせる。

昂まる嬌声——。壁一枚の隣室の存在が気

になるような、けたたましい喚きに、私は内心、辟易し乍らも、さゆりの悦楽の心を掻き立てる作業に没頭していた。

折々に私はカメラを構える。女に抵抗はなく、欲求の不満を、この刹那、どっと吐き出そうとするかのように、堰を切つて悶える。

逆海老の時、さゆりはもう全裸であった。竹箒を使つての開股に、欲びの余り、箒はしなう。

三帖の間のセットの椅子の両脚に、足首を縛りつけアラビヤ人形は、くねくねと舞う。

悦楽の極みに、さゆりは動てんして、うわ言めいて、私を求めるのであった。

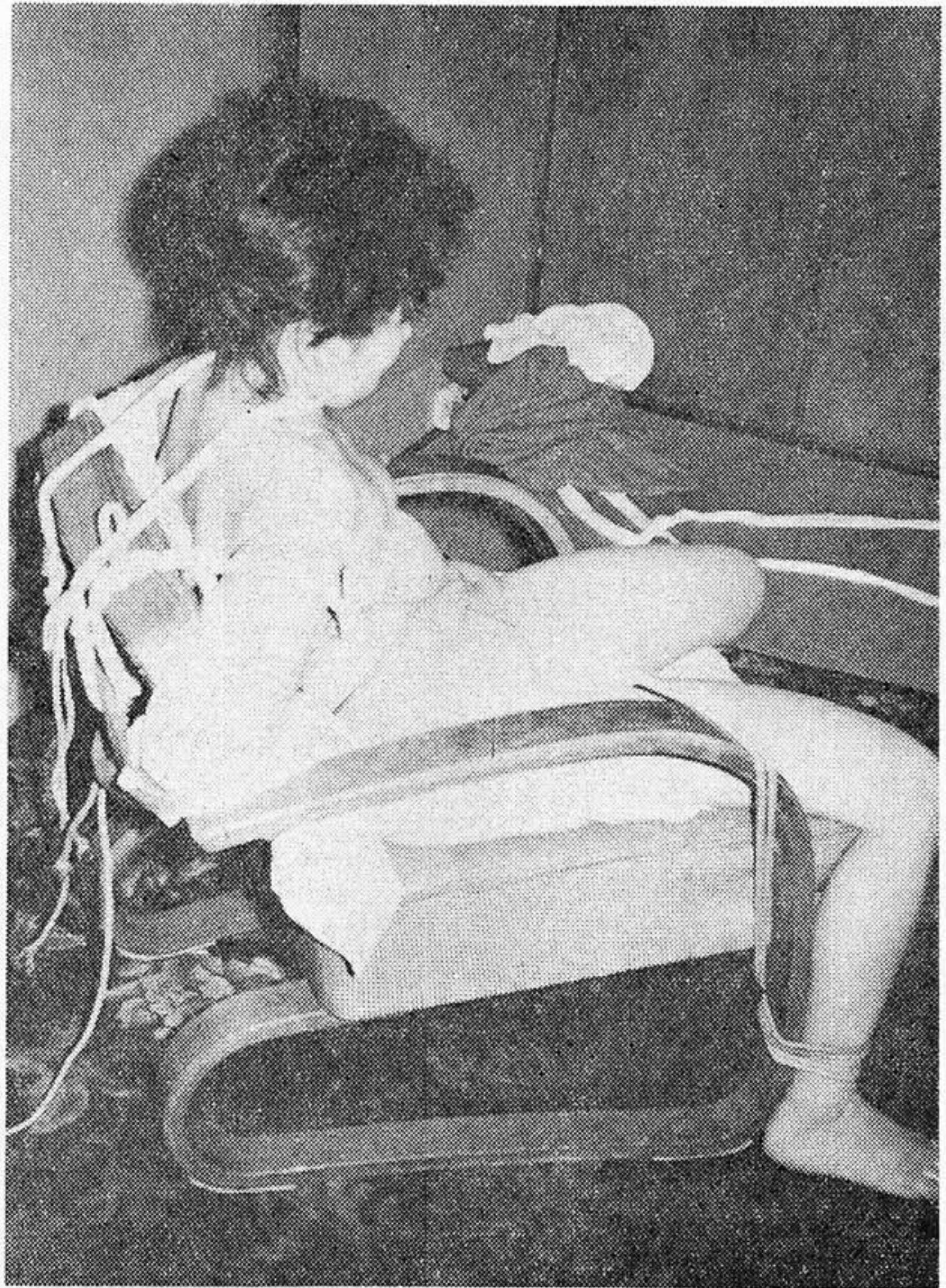
うつ伏せにして、双臀屹立の尻打ちに、もつともふさわしいポーズをとらせ、私は伊達ノめで甘い愛情のムチをふるまつてやった。

それは被虐願望の女の悦楽に繋がる。

幾度か恍惚と陶酔の谷間を彷徨して、放心の彼女は、私をしきりに求め続ける。

縄を解き放した時、ビールの酔いが急速に廻り、私自身、かなり粗い息を吐いて、大きく胸を弾ませて息苦しがついていた。

壁を背にしてあぐらを掻き、ホッと一段落の煙草の煙を吐くと、紫煙の中から、女はゆらゆらと立ち上り、押入れを開いた。



ドサリと夜具が落ちる。乱雑に敷き延べてゴロリと仰向けに倒れると、両手を広げて挙げ、私を急がせるのであった。

当然といえば当然の帰着——。

六年の断層が消えて私達は並んで転がる。

狂おしく私の背に爪を立てた女は、快樂の

味をじっくりと噛みしめるように眼をつむって静止していた。

「ねえ、お願いがあるの、聞いてくれる？」

私は何故ともなくハッとする。

「ウン……まあ、云って御覧」

「私、今、生命保険の勧誘しているの。今月

は、目標達成月間なのに、私のノルマがどうしても足りないの。五百万位、加入して戴けたら、本当に助かるのだけど……」

私の気持は、瞬間に白けた。

やはりそんな下心あって、訪問したのか。

春には何となく云いそびれ、昨日訪問したのも、あわよくばの、その腹つもりだったのかと思うと、ヒョッコリ現われて、手土産まで持参したのが分る様な気がした。

SMプレイと肉体の提供という餌で、保険加入を勧誘しようとしたのか——。

私の顔はきつと強ばっていたに違いない。

私の心の変化を見抜いたかの様に、宇治さゆりは、私の首を抱き、

「私ってイヤな女ね。折角の、いい気分を壊しちゃって……御免なさい、もういいの。もう少し期間があるから、明日から又、頑張るわ。こんな話きかなかったことにして……」と、ビールの香の漂う唇を押しつけてくるのであった。

プレイはプレイ。ビジネスはビジネスだと彼女は思っていたのかも知れないが、欲望が昇天して、飽和状態の折も折ただけに、私の心に不快感が走ったのだった。

かなり潤沢な生活は、保険勧誘が支えてい

るというものの、或は私に似た行為で、色仕掛で勧誘したのではなからうかという、そんな想像すら、フト働くのであった。

生命保険という、長期に亘る契約の勧誘がかなりシンドイ仕事であることは、私も承知している。

そんな私の思考にお構いなく、女は熱い唇を押しつけた俣で、舌を忍ばせてくる。

「ねえ、怒ってるの？」

唇を離して私の顔色を窺う、さゆり。

「イヤ、女の仕事とはいえ、大変だからね。」

折が折だけに、つい、色仕掛かと思った」

「そう思われても仕方ないわねえ。でもプレイは本当に愉しかったの。何年振りかで自分を取戻した気持——嬉しいわ。だから、もうあのこといわないで——。こんな仕事に従事しているから、ついお願いしたりして……私ってバカねえ」

こうもあっさり撤回されてしまうと、男というものは、哀れさについて同情したくなってしまう。

私にしても、古い保険で、百万そこそこの保険を何口か、断わり切れず加入し、今となつては、老化してこの保険、満期となつても幾許の役に立つかと、物価の激しい上昇に、

四馬孝画、巻頭口絵「花と蛇」

団鬼六作「花と蛇」特集号

本誌昭和42年1月号より昭和44年4月号までの二年有余に亘って連載した文に四馬孝画伯の華麗なる口絵を附した大冊の特集号です。只今、若干の残部があり、ますので未入手の方は是非蔵書の一端にお加え下さい。お申込みは大阪市住吉郵便局私書箱41号、暁出版株式会社へ。

略号「花」定価五〇〇円（送共）

保険金額ばかりは取残されてゆく現状に、もう今後は、今輪際、入ってやるものかと思つていても、甘い情事に溺れた女の口から勧誘され、更に一転して撤回されれば、なにがしかの顔も立ててやりたい気にもなってくるのであった。

「五百万で、どれ位の掛金になるんだね」と、きいたのが悪かった。勿論、女は、「もういいのよ、そんなこと——」と否定する。

「まあ、いいから、どのくらいなんだい」とたたみかけると、女は裸身の俣で、簞笥の戸棚をあけて、書類をもってくる。

「いいのよ、本当にいいのよ」といわれ乍ら、私は結局は彼女の術中に嵌っていったようである。

プレイの報酬が高い掛金に化けたが、一度きりなら、それもよし。

今に到るも、年二回掛けで、数万の金が、宇治さゆりならぬ保険集金人の手で、もぎとられてゆく。

私を突然、訪問したのは、勧誘の下心あつてのことにしても、うたかたのSMプレイとそれにつづく交歓を、勧誘のための仕業とは思いたくない。

私は、さゆりの部屋をもう一度、訪れ、判を押して掛金を払ってやった。そしてカメラ抜ききのSMプラス、セックスに酔って帰り、その後、彼女とは会っていない。

私以外に、そんな手段を弄して勧誘してないと思いたいのは、私の甘い考えであろうか——。

ホロ苦いプレイの、現実のフォトが茲にある。

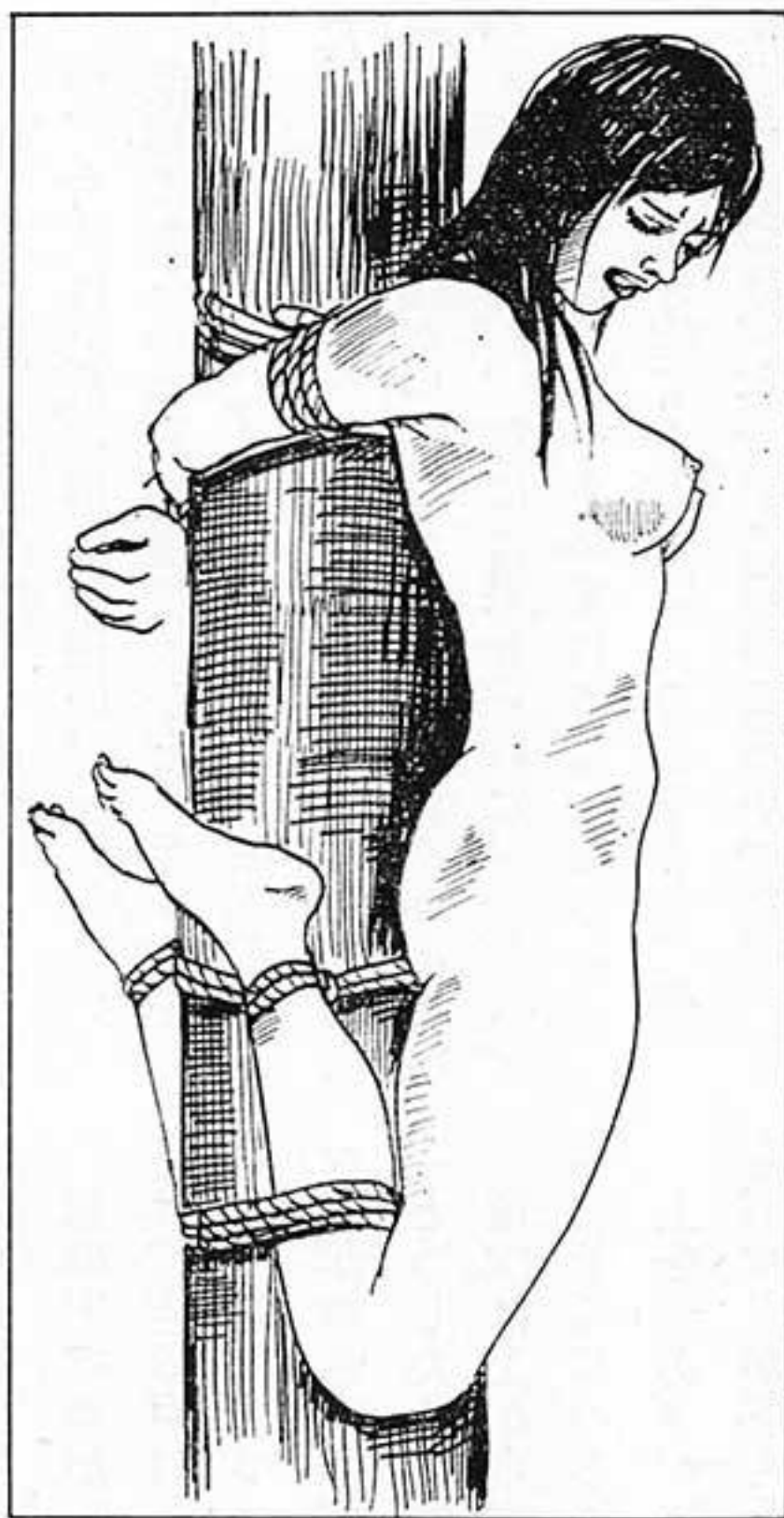
筐底を探れば、尚も又、喜怒哀楽の、数々のプレイのフォトが眠っている。

宇治さゆりとのこの一件。当座は何となくシテやられた気になって、発表する気持もなかったが、今になればそれも又、懐かしい、郷愁をさそう、プレイの一コマ、一コマである。

S 小説

夜^{よる}の静寂^{しじま}に動く^{うご}ものの

カット・須坂 旭



吾妻竜一

いか、客足が遠のき、いきおい、店の雰囲気も沈みがちになった。

長年、竜次の片腕として働いてきた富田がそんな気配を敏感にかきとり店の女の子の代弁をしたのだ。

を二枚、とり出し、富田に手渡した。
「はあ、どうも。でも俺は、そんなつもりでは……」

「分ってるよ、気にするな」
剣崎竜次は皆んなを送り出すと、店のドアに鍵をかけ、二階にあがった。

そこが彼の住居である。

そこには、一人ものの男の、自由で気ままな世界が彼を待っている。竜次はそんな自由な気楽さが好きで、35才の現在まで、結婚もせず独身で通してきた。勿論、過去には、それなりに女達との面倒な関係もあり、ある時は相当長い月日を、ひとりの女との同棲生活に費やしたこともある。

しかし女達の望みが、きまって、平和な家庭であり、それを維持するための金銭であることを知るにつれ、そうした女達の願望を満

「マスター、ぼつぼつ閉店にしましょうか」

バーテンの富田が言ったのは、有線放送が螢の光を演奏し終って、しばらくしてからだった。

「そうだなあ、今日は早じまいするか」

この店のマスター、剣崎竜次は長身をゆっくり伸ばすと、サエない顔つきで答えた。

雨季に入って、このところ、連日の雨である。すでに四日間も降り続けている。そのせ

女の子といっても、この店には三人しかない。古株の雪江と新入のマリ、それにアルバイトで時々顔を出す美加の三人きりだ。そして、今日は美加は出勤してはず、先程から雪江とマリが、もてあまし気味に、やたら煙草をふかし、ソファに坐っていた。

「じゃあ後は俺がやっておく。富田、お前、めしでも喰って、女の子を送ってくれ」

竜次はそう言うと、ポケットから千円紙幣

たすために、自分の一生を縛られることに我慢がなくなってきたのだ。

人間の営みには、それだけしか、ないのだろうか。そんな疑惑に包まれ、自分は生涯、家庭を持つまいと決心したのだ。

竜次はテレビのスイッチを入れると、深夜放送の映画にチャンネルを合せ、ウイスキーを飲み始めた。それが彼の夜の日課である。大抵、ちびちび、やりながらテレビを見、いつしか、ほろ酔い気分で寝てしまう。

が、今夜は何故か酔いが遅い。

乱雑に散らかった部屋で、ひとりテレビを見る自分が何となく、みじめで気が滅入るのだ。多分、それは陽気のせいだろう。しかしそれだけではない何かが、今夜の竜次の心を噛んでいるのが、彼には察せられた。

「俺も、そろそろヤキがまわったかな」

竜次は吐き捨てるように、つぶやくと、煙草を一服つけ、ベッドに寝ころがった。

そのベッドは竜次と一番、長く生活をともにした女が、夫婦きどりでデパートから購入したものだ。その女の性格をよく顯わすように、そのベッドは、部屋の雰囲気とは、おおよそかけ離れた豪華で華美なものだった。

ふと、竜次の脳裡に、その女との夜の場面

が浮びあがってきた。その女こそ、竜次の心深く眠っていた悪癖に火をつけ、種々の技巧を助長させた張本人なのだ。

竜次はいつしか、幾筋もの腰ひもで身体を固定され、むき出しにされた臀部や乳房、さらに羞恥あふれる部分へ、さまざまな攻撃を加えさせ、苦痛と快楽に酔いしれた女の波打つ肉体を思い描いた。

その時であった。

「マスター、ちょっと開けて頂戴！」

窓の下で声がした。竜次が我に返って窓をあけ、店の戸口あたりを薄明りにすかして見ると、シヨボついた雨の中、先程出ていったマリが傘もささずに、一人で立っている。

「どうしたんだ」

竜次は上から、どなった。

「迷子になっちゃったのよ」

上を見あげ、じれったそうに足踏みしながら、マリが答える。

竜次は仕方なく、階下へ降りると、ドアを開け、マリを店の中に入れた。

「迷子になったって、どうしたんだ？」

「あれから食事を済ませて、皆んなで踊りに行こうって、私、車を捜しに出たのよ。そして、行き違いになったらしくって……」

「二人に、まかれたのか？」

「そうじゃないと思うけど……私、暫く捜してたら、急にひとりで居るのが恐くなって、戻ってきちゃったのよ。もしかしたら、今頃捜してるかもしれないわ」

「そうか、まあいいさ。じゃあ俺がアパートまで送ってやるよ」

竜次はそう云い残すと、着換えのために二階へ戻った。

階段を登る時、竜次の心にふと、どす黒い欲望が横切るのが感じられる。先程のベッドの上での回想がマリの若い肉体と重なり合ったのだ。

しかし、竜次は、ハガキでもないのに、雑念を、おい払い、着換えを済ませた。

そこへ、階下からマリの甘えた声が響いて来た。

「マスター、ちょっと上ってもいい？」

一瞬、竜次はその言葉を疑った。だが次の瞬間、無性に腹が立つのを禁じ得なかった。

彼の心配をよそに、勝手にふるまうマリのあまりに無分別な行為に、裏切られたようないらだちを感じたのだ。

「勝手にするがいいさ。どうなろうと俺の知ったことか——」

竜次は、つぶやくように云うと、
「暗いから気をつけてあがって来いよ！」
階下に叫んだ。

マリは、まだ二週間程前に入ったばかりの女である。富田の友人かなにかの紹介で来たのだが、二十歳まえの感じで、どこかに素人ぽい初々しさが残っている。竜次はそれを大切に思い、気を使っていたのだ。

しかし、当のマリは、そんな竜次の気持とは別に、勝手にふるまう。その姿を見ていると竜次がいくら大切に扱っても、いずれ作法な男達に、泥まみれにされてしまうのが、彼女の運命に思われた。

マリも、つまり、そんな種類の女なのだ。

竜次は一瞬たりともマリに対し、安手の感傷じみた気持を抱いたことを苦々しく思った。

階段のきしむ音が静かに伝わって来て、マリが戸口に顔を、のぞかせた。

「そんな所に、つつ立ってないで入れよ」

竜次は、やや気色ばんで云った。

「どうした。あまり散らかっているので、びっくりしたのか。それとも、今更ながら部屋に入るのが恐くなったのか」

竜次はそう云うと、半ば強引にマリを部屋に入れ、ベッドの端に腰かけさせた。

「ううん、そうじゃないけど、でも、ちょっと不思議な気持だわ」

「何が」

「何がって、マスターのこと」

「そんなに簡単に、他人のことが分るものかな」

マリはベッドの端に腰をかけると、組んだ足をぶらぶらさせて、部屋の中を物珍しげに見渡した。その様子が、いかにも現代っ子らしい。先程の雨で濡れたせいか、短くカットした髪や、胸元、腕のあたりに細かい水滴がつき、それを気にしないマリの若さが美しかった。

「飲むかい？」

竜次は云った。

「ええ、頂きます。飲まないとマスターに叱られそうだから……」

マリは茶目気たっぷりに、首をすくめて云った。

竜次はサイドボードからグラスを出し、彼女にウイスキーを注ぐ。

「どうだい。店には慣れたかい？」

「ええ、お蔭さまで。チーフも雪江ちゃんも親切にしてくれるので……。これで、マスターが優しくしてくれたら、云うことないんだ

けど……」

マリがウイスキーに、ちよっぴり口をつけて云った。

「俺は優しくないかい」

「ええ……正直に云えば、優しい方じゃないわ……いつも冷やかに見ている感じで……」

「それは俺の性分だから仕方ないな」

「そうねえ、雪江ちゃんもそう云ってたわ。」

マスターは、ああいう人だから、気にするな。本心は、とても優しいんだけど……それを表面に出さないだけだって……」

「雪江の奴、そんなことを云ったのか」

「ええ、雪江ちゃんは何でも私に話してくれるの。私、色々聞いちゃった。マスターの前の女の人のことや雪江ちゃん自身のこと」

「下らんことを喋ってるんだな」

「そうかしら。結局、女にとって興味のあるのは男性のことだもん、当然だわ。マスターは何故、結婚しないの？」

「無責任だからさ。他人に束縛されるのが嫌なんだ」

「無責任でも結婚する人、沢山いるわよ」

「俺は、いやだね」

「それで、マスターは一生、独身なの？」

「そのつもりだ。もし、結婚したら俺は自分

を憎むようになるだろうな」

「じゃあ、雪江ちゃん、可愛そうね。あんなにマスターのこと、愛してるのに……」

「そんな事はないさ。雪江は承知でつき合ってるんだ」

「だから一層、可哀そうなんじゃない。この間だって、云ってたわ。マスターが好きだった。それから、着物を脱いで見せてくれたのよ、マスターに可愛がってもらった跡。私、びっくりしちゃった」

「悪趣味だな。俺の趣味も決して自慢できないが、そいつを他人にさらすなど、もっと悪趣味だ」

「私、でも本当を云えば、雪江ちゃんが羨ましかったわ。そんな風に男の人を愛せるなんて、素晴らしいと思ったわ」

「少女趣味っていうんだな、そういうのを。」

雪江は何も俺を愛しているから、そうしたんじゃないのさ。雪江も、それを望んだだけなんだ」

竜次は、そう云い切ると、何杯目かのウィスキーをグラスに注ぐ。

いつもなら、とっくに酔っぱらう分量を既に飲んでい。が今夜は、まわりが遅い。心の中に何かしらシコリがあって、それが竜次

の心を酔わせなくしているのだ。

竜次は八悪酔いするなVと思いつつも、それをまぎらわすために、更に、ウィスキーを喉の奥深く流し込んだ。

外は、雨が降り続いていた。

雨勢が激しさを増したとみえて、安普請のトタン屋根が悲鳴に近い叫びをあげていた。

「私、ぼつぼつ帰らなくては。すっかり、お喋りしちゃって……」

暫くして、マリが云った。

一瞬、竜次の心に影が走る。マリの別れの言葉が、竜次の淋しさを、かきたてたのだ。

しかし、彼は

「そうだなあ、あまり引き留めては、悪いなあ……」

その淋しさに堪えるように云った。

何故なら、竜次の気持は、マリを引き留めてみたところで、どう変化するものでもなかったからだ。自分の淋しさの原因が、結局は自分の身勝手な生き方が招いたものであり、その孤独感とひきかえに、自由で、無責任な生活を得ていることを、痛いほど承知していたからだ。

だから、その淋しさを理由に他人に甘えることは、竜次の自尊心が許さなかった。むしろ

る単なる肉欲からマリを引き留める方が、どれ程、ましだったろうか。だが、残念なことに今夜の竜次は肉欲よりも淋しさの方が強かったのだ。

「じゃ、送っていこう」

グラスを飲みほし、竜次は立ちあがった。

その瞬間、彼の足が、もつれた。竜次はあわてて、マリの肩に手をかけると、かろうじて平衡を保った。

「マスター、大丈夫？」

マリが立ちあがり、竜次の身体を支えるように腕をまわす。

「いや、悪かった、大丈夫だ。急に立ったんで……」

「本当に大丈夫なの、マスター。私のことなら心配しないで。一人で帰れるから、大丈夫よ。それより、雨が小やみになるまで、もう少し、ここに居ていいかしら。私、本当のこと云えば、まだ帰りたくないの。私は急ぐ理由なんか、ないんだもの。雪江ちゃんも今夜は遅くなると思うし、帰っても、ひとりぼっちじゃ、つまらない」

竜次の身体に再び、温かいものが流れた。

酔いも手伝い、その温かさは彼の心と身体に急速に広がっていった。

気づくと、それは竜次の腰にまわしたマリの腕の温かみであった。

竜次は突然、マリを自分の方に引き寄せ、力強く抱きしめると、マリの唇に自分の唇を押しあてた。

「あっ、マスター」

マリは驚いたように、言葉にならぬ叫びをあげ、身もだえる。

しかし、それもつかのま、いつしかマリも竜次の唇を激しく吸い、腕を背に、くい込ませていった。

「マリ、ありがとう」

竜次は口づけをしながら、口走った。

その言葉は、彼の偽りのない気持である。

自分の唇を素直に受入れてくれたのが、竜次には嬉しかったのだ。

「マスター、私も嬉しいわ」

マリは云った。そして

「私、マスターのことが好きだったの」

とぎれがちにつぶやくと、竜次の口中深く舌をからませた。

柔らかく甘いマリの舌の感触が、竜次の五体を、しびれさせる。竜次は、いつしか己れの欲望に逆らえなくなっていた。

激情に押し切られたように、思いきり強く

抱きしめると、竜次はマリを、そのままベッドに押し倒した。

マリは頬を紅潮させ、胸を大きく波打たせながら、竜次のなすがままになっている。

竜次はマリの身体から、ブラウスを取り、スカートを脱がせた。

ベッドの上に投げ出されたように横たわるマリの若い肉体は、ゴムまりのように弾力に富み、はち切れんばかりに豊かだ。特に太腿と二つの隆起は意外なほど発達している。

竜次は太腿に手を置くと、それを、膝からすべりあがらせた。そして彼の手の平が下から上、外から内へ撫であげるたびに、マリの唇から声もれた。

「ああ、あ」

ピンクのスリップが、あられもなく、まくれ上り、それが一層、マリの肉体を魅惑的に見せる。

竜次は、そこにあらわにされた、白く柔らかい内腿と、その奥に、ぴったり、くい込む可愛いげなパンティを見つめながら、マリをどんな風に燃えさせたかを考えた。

「ああ、マスター。私、幸せだわ」

喉をのけぞらせ、上体を大きく、くねらせながらマリが喘ぐ。

「ああ、マスター。私、お願いがあるのよ。優しくしないで。私も雪江ちゃんのように可愛がって。だって、マスター、そういうのが好きなんですよ。だったら、私も同じように愛してもらいたいの」

マリは、そう叫ぶなり、くるりと反転し、ベッドにうつ伏せになると両手を後に交差し「縛って！」と叫んだ。

○

全裸にされたマリが、後手に縛られ、その上、両足を左右に引き裂かれ、ベッドの上に仰臥させられたのは、それから暫くたってからであった。

更に、別の細ひもがマリの乳房を、はさみこむように、くい込み、別の一本が彼女の股間を縦に割って走っている。

竜次は、そんなマリの悦虐の姿態を見下ろすように、ベッドの傍に立っていた。

足元には、これまで何人もの女達を泣き叫ばせ、愉悦にむせばせた数々の責具が、散らばっている。

竜次は、その中から鳥の羽根で作ったペンを取ると、マリに近づいた。

「マリ、ほんとに、いいんだな！」

……イメージギャラリー……『動くと落ちるよ』……小川茂正……



竜次は自分自身に云い聞かせるように云った。

マリが黙って、うなづく。その表情には、既に恍惚とした陶酔が溢れ

ている。衣服を、はぎ取られ、不自然にゆがめられた体位で縄をかけられた羞恥が、早くも、彼女を強い刺激の嵐の中に投げ込んだようである。

竜次は、その無防備な裸体に満足を覚えながら傍に坐りこむと、まず、マリの豊満な乳房を責めにかかった。

「ああ、マスター」

マリが本能的に身をよじり、無意識に叫び声をあげる。

しかし、その叫びは決して拒否の叫びではない。その底に長く尾をひく、とぎれがちのあえぎが、マリの肉体をかけめぐる快感を証明していた。

その反応が竜次を驚かせた。

マリは、彼の嗜虐心を初めて満足させた、あの女のように、その本性に被虐の願望を持った女なのだろうか。それとも、雪江から聞いた竜次の性向に、唯、あわせようと努力しているのだろうか。

彼には、それが分らなかった。

竜次はマリの乳房を上下から、はさみこむように、ぎりぎり、くい込んだ縄の間に、自分の指をすべりこませると、それをゆっくり、ねじり、彼女の乳房を、いたぶった。

乳房が奇妙な形に、ふくれあがり、今にもはち切れんばかりに突出する。

その先端へ、竜次は柔らかい羽毛を軽く触れさせると、それを静かに動かした。

「ああ、たまらないわ」

マリが、ひととき大きく叫び、竜次の眼下で白い幼虫のように身悶える。

後手に緊縛された上、乳房を蹴られ、その白い豊潤な肢体を蛇のようにくねらす姿は、まさに、男の欲情を、そそらずにはいられぬ優美な姿だ。

竜次は、そのみだらな快楽を更に深めるように、きつくしぼりあげると、今度は、ペンの先を使い始めた。

マリの乳房は既に、押しつぶされたゴムまりのように無惨な形に変形し、張りきっている。

そこへ、ペンの切っ先が、くいこむのだ。たまらず、マリの口元から悲鳴が、ほとばしった。

「痛いわ、許して！」

叫ぶなり、マリは自由な両足をばたつかせ魔手から身を守ろうとあがいた。だが、その非情の針は、二つの隆起の裾野を徘徊しながら、徐々に、着実に頂点をめざして、はいあがっていった。

本当の苦しみが始まるのは、その歩みが、その先端に達した時だ。

マリは、その予感におののくように身をふ

るわせた。

しかし、竜次は頂上の砦を十重、二十重に囲みながらも、最後の一矢を放たず、自らの落城を待つ軍師のように、あくまで冷静で巧緻な責めを、寄せては返す波のように、くり返した。

「ああ、マスター。お願い、やめて！」

マリは身をもみ、降伏の叫びをあげる。そして、のけぞるように胸をつきだし、半開きの唇を、わなわなと、ふるえさせた。

「マリ、お前は男に、いじめられるの、初めてじゃないな。お前、以前に男から責められた経験があり、その快感が忘れられず、俺のところへ来たんだろう」

竜次は今まで彼の胸の中で、くすぶり続けて来た疑問を口にした。

「どうなんだ！」

「ああ、痛いっ！ マスター堪忍して！」

「云えよ！」

その答を促すように、ついに残された頂上の一点に、ペンの先が突き立てられた。

「ああっ」

マリの身体が電気にうたれたように、そり返り、硬直する。

「もし、そうなら、俺は許さないぜ！」

「違うわ。そんなんじゃない。私、マスターが好きだから、それで、それで、来ただけだわ。本当よ、信じて！」

マリは、あえぐように叫ぶと、必死に身をくねらせ、哀願の目で竜次を見つめた。

だが、その瞳は、ひどく、うつろだ。

身体の奥底から、つきあがる快感に酔いしれたように濡れている。その陰微な光が彼を酔わせた。

竜次はマリを、うつ伏せに寝かせると、今度は、彼女の背後に襲いかかった。

臀部の豊かな丘陵。太腿の柔らかなスロープ。そして、その合流地。

ある時は柔らかな羽毛のいたぶり、ある時は、鋭くとがった切っ先をもって、竜次は、情容赦ない責めを加えた。

「イイ……」

後手に緊縛されたマリの不自由な身体を追って、隅々まで加虐の魔手が伸びるに従い、マリの身体が狂ったように、痙攣し、その声が次第に嗚咽に変わっていった。

「ああ……マスター……許して……」

その泣き声に、竜次は、ふと責め手を、休めた。激情のあまり、自分本位の快楽を求め過ぎたことが、竜次に自責の念を覚えさせた

のだ。

「マリ。お前、本当は、こんな事、嫌いなんじゃないのか」

彼は苦い思いを吐き出すように云った。

「いいのよ、マスター、気にしないで。私が云いだした事なんですよ……」

マリは息を、はずませて云った。

「私、嬉しいのよ……」

だが、竜次の手に再び、最初の力強さは戻って来なかった。

雪江には、あれほどまでに激しい、いたぶりを甘受させる嗜虐の針が、マリには、どこか、ためらいがちとなるのだ。

それは、マリがそうした痴戯を知るには、あまりに若すぎるせいかもしれない。雪江のように人生の半ばに達した女が、最後の残り火をかきたてるために、こうした倒錯した悦虐に、ひたるのならば、そこには、まだ救いがあり、それなりの意味もある。

しかし二十歳前の、これから、いくらも至極あたり前の生活が続け得る娘を、竜次が無理矢理、そうした悦楽の業火に身もだえさせるとしたら、それは、あまりに酷い仕打に思えるのだ。

そんな配慮が竜次の責め手を鈍らせ、彼の

嗜虐心に水をさすのだ。

竜次は責具を手放すと静かに目をとじた。

「マスター、どうしたの？」

マリが云った。

「何だか、気になってしまったんだ……」

「何が？」

「お前にこんな事をしてしまったことがさ」

「何故、なぜなの？」

マリが、すねたように身体を左右に振る。

「マスターの意地悪、私をこんなにしておいて！」

マリが身をくねらすたびに、彼女の柔肌に縄がくい込み、その痛みがマリの額にゆがみを作った。

「マスターはマリの気持が、ちっとも分らないのね。それとも、マリじゃ駄目なの」

竜次は、その言葉に何と答えたら良いのか分らなかった。

その意味が理解できなかった。

「マリは何を求めているのだろうか？ 竜次は考えた。△愛されることなのか、それとも、被虐の快感をか！▽」

もし、マリが竜次から愛されることを望みその愛ゆえに、彼のいたぶりを甘受しようとしているのならば、それは竜次には堪えられ

ぬことだった。

竜次は愛など信じたくもなく、真平だったからだ。竜次にとって、それは触れたくない世界であった。

しかし反面、性の快楽だけを求めたマリが竜次を、いわば性の道具として扱おうとしているならば、それもまた彼の心を傷つけた。何故なら、竜次はマリに対し、何かしら他の女とは異質の感情を否定できなかったからである。

竜次は自分の心の中に、今までのように、単に性の遊びとして明解に割り切れぬ何かが介在しているのを意識して不愉快になった。彼はマリをそのまま放りだすと、ベッドを降りた。

そして、煙草に火をつけ、窓際に寄り、ガラス戸を少し引き、外を見た。

雨は小降りになって、絹糸のような軌跡を描いて音もなく落下している。

「マスター、どうしたの？」

背後で、マリの心ぼそそうな声がした。

竜次は、それには答えないで、黙って煙草を喫った。

冷たい外気が竜次のほてった頬をかすめて部屋の中に侵入してきた。以前は、あれほど

気を滅入らせた湿り切った空気も、今は心地良く彼の心にしみる。

竜次は、その外気を、煙草の煙とともに胸いっぱい、吸いこんだ。

「マスター、寒いわ」

マリが云った。

振り返ると、マリが、うつ伏せのまま顔だけを竜次の方へ向けていた。白くなめらかな曲線を描いて起伏する彼女の肉体の要所々々に厳しい邪悪な縄目がくい込み、鳥の羽根とペン軸で、いたぶられた個所が、うす桃色に紅潮し、白い裸身の所々に花びらのように浮きでている。

竜次は暫く、その裸身に見入った。

「マスターは、マリのことが好きじゃないのね」

低く湿った声がした。

「やっぱり、雪江ちゃんの方がいいんだわ」

「そんなことはないさ」

竜次は答えた。

「お前は今迄につき合った女の中でも上等の方さ。ただマリを見てると、俺の若かった頃を思いだすのが、いけないな」

「若い頃のことって？」

「そう、まだ人並に、夢も希望もあった頃の

ことさ。だから、そんなマリを責めるのは、

マリの夢や希望を、ぶちこわしているようで駄目なんだ。マリには俺みたいな人間の仲間入りをしてもらいたくないからな」

「どうしてなの、マスターは素敵だわ」

「俺のようになってたら、お終いだ。こうやって女をいじめ、一瞬の快楽だけに命を縮めているんだからな」

「それだって、ちっともかまわないわ。だって、何故、マリをいじめてくれないの」

「こんなことに深入しちゃ、いけないと思っただ。マリは、まだ若いんだから、俺のような中年の無気力な男とつき合って、自分を駄目にしては、いけないのさ」

「でも、マスターが好きなんだもん」

「俺は信じてないな。お前は唯の好奇心、興味本位から、俺に近づいただけさ」

「それもあるけど、何となくマスターのことが気になるのよ。この気持はどうしようもないわ」

「俺が迷惑だといったら？……」

「迷惑でも仕方ないわ。私がマスターを好きになるのは、マスターだって、とめられない筈よ……」

「そうか、そんな風に云うのなら、仕方ない

な。勝手にしろよ」

竜次は、そう云うと、乱暴に窓ガラスを音をたてて閉め、マリに近づいた。

「怒ったの？」

竜次の顔に不安げな視線をおよがせながらマリが云った。

「いや、俺もお前と同じに勝手なことをするだけさ。マリの理屈から云えば、俺がマリをどんな風に可愛がろうと、マリにとめられない筈だから……」

途中、竜次はベッドの下に脱ぎ捨てられたマリの下着をひろいあげると、マリの顔の上で、ひらひらさせた。

「口を開けよ」

「いや、許して……」

驚いた顔付で、マリは激しく首を振る。

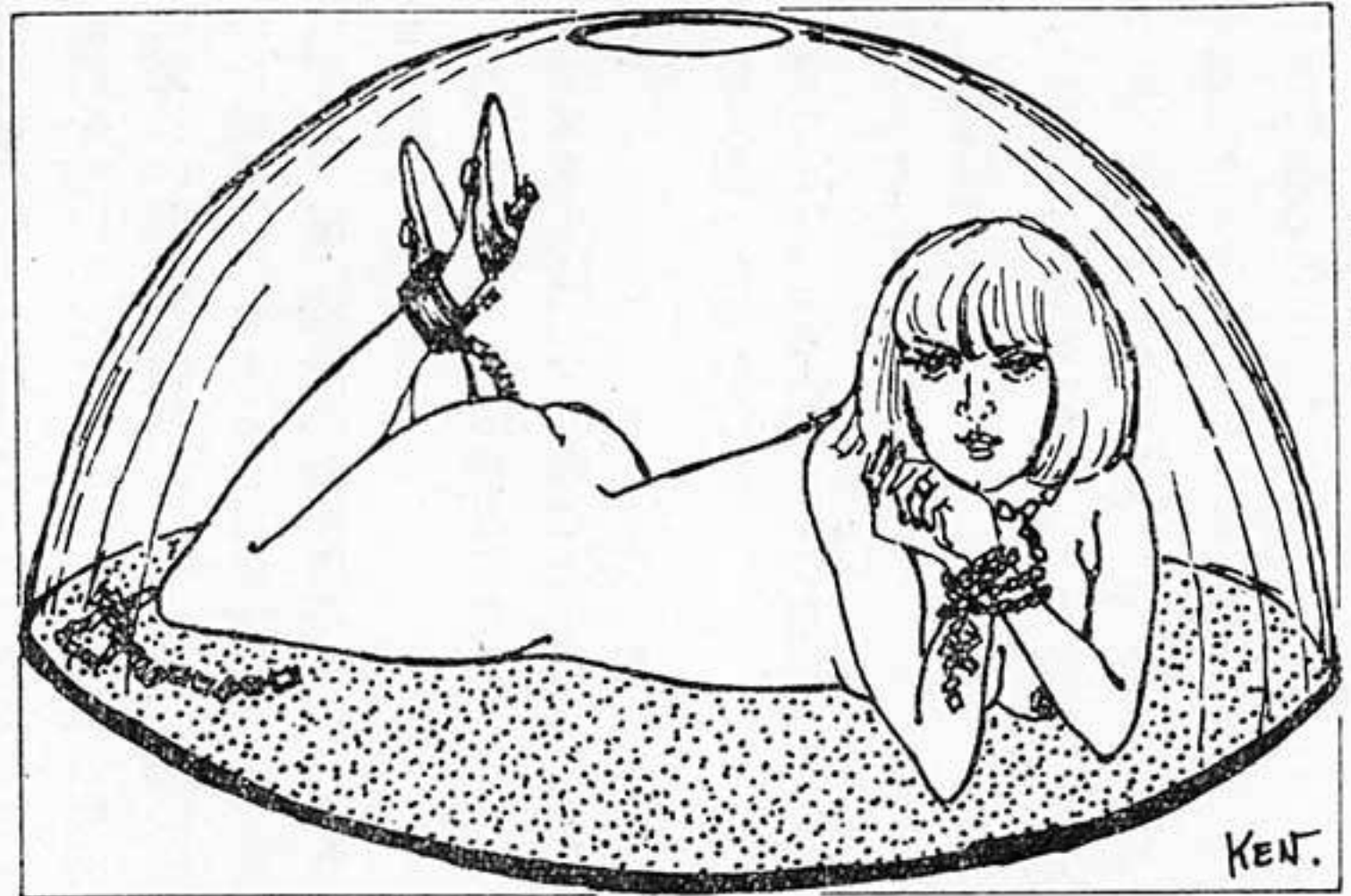
しかし、竜次はかまわず、マリの頬に指を強くくいこませて、彼女の口を広げると、その中に下着を、うめ込んだ。

「いいか、マリ。これからお前に、本当の俺の姿を見せてやる。それにこりたら、もう二度と、俺を好きだなんて云うな……」

言葉と同時に何か細く柔らかくしなうものが、空気を裂いて彼女の背に飛んだ。

——（おわり）——

カット・北畠剣二



<告白>

愛妻エミの 飼育過程報告書

山本春夫

私と恵美子が結婚したのは、丁度、今から一年前。私が四十一才で、恵美子が二十才であると告白すれば、それだけで二人の異常な愛情が、理解頂けると思う。

結婚前に、既にたっぷり縛りの悦虐は経験済みの愛妻エミ（恵美子の愛称）への飼育調教は、夫婦交換プレイへの前奏曲だ。

結婚式を挙げて数カ月もたたないうちに、先ず始められた調教は、エミを他人の目にさらすという羞恥責めであった。これは究極の目的である。夫婦SMプレイへの飼育であり、且つ、若くて美しい妻を持った中年の男の云い知れぬ快感でもあった。

とりわけ、露出部分の大きい超ビキニを身

につけた水着姿のエミは、身長一六五センチという大柄で色白、プロポーションも抜群ゆえに、男達は誰でも一様に顧る程、美しい。伸びやかな肢体のエミは、誰が見ても、どこから見ても、結婚している女には決して見えない。OLか、女子大生ぐらいにしか見えない。私は、色黒で、腹の突き出た中年太りのため、年よりも五つも六つも、ふけて見えるたちである。

なるべく若い男の沢山いそうな海水浴場を選んで、私はエミを海辺に誘い出す。だが、私は彼女の夫であるという素振りには、いささかも見せない。第一回に行ったのは、天の橋立を前にした宮津湾の智恩寺の海岸だった。

七月末の日曜日だったので、観光バスが次々と団体客を運んできて、大混雑だった。駐車場に置いた車の中で水着に着替えるまでは一緒だったが、海辺へ着くと、二人は別行動をとった。

エミは、あくまでも一人で泳ぎにきた未婚のOLであり、私は女を漁りにきた中年のいやらしい痴漢の一人であった。私はエミに、つかず離れず、周囲にいる男たちと同じように、抜群のプロポーションの彼女を眺めていた。時折りは、近寄って、お尻を触ったり、

肩をすり寄せたりして、反応を見た。

芋の子を洗うような大混雑の海水浴場で、私が最初にエミに命じておいたのは、海水の中で排尿することだった。

私は潜って、エミの脚を片手で握って、片手の掌をビキニパンティの股間に当てる。それが合図だった。掌に感ずる水流と温かい感触が、彼女が実際に私が命じた通り、やったことがわかる。周囲に群れている男たちには私たち二人が、こんな奇妙なプレイをしているように、誰も知らない。

私は美しいお嬢さんOLに悪戯をする中年男として、エミに、つかず離れずにいる。水中から顔を出して、こちらから眺めると、羞らに顔を真赤にしたエミが可愛い。

首までつかる深みへつれ出して、海水パンツを太股のつけ根までずり下げて、いたずらをする。ボートが近づいてきたり、近くを若者たちが泳いできたりするので、その都度、エミが恥かしがっておののくのが見ものであった。

そんなことをして一時間ばかり、今夏最高の人出だという文殊堂脇浜の海水浴場でのエミに対する羞恥責めを楽しんだ。そして最後は若い男達が出来ただけ多く屯ろしている海

辺を選んで、海水が膝頭ぐらいの深さのところ、陸の方へ向って股を開いてエミを立たす。

私は沢山の男たちに混じって、エミのそんな姿を眺めているのだ。私の彼女に命じたことは、膝小僧のあたりで、海面が波によって上下している深さの個所で、股を開いて立たままで排尿するということだった。

ビキニといっても、海水パンツのままだから、まさか二十才になるかならない若い女性が、海岸の方へ向って、そんな行為をするとは、誰も夢にも思っていないだろう。だが、水面から顔を出して、近くで覗いている私には、エミが小水を洩らしているのが、よくわかる。彼女にとっては、きっと死ぬほどの恥かしさなのだろう。

顔を真赤に染めて、もじもじした上で、結局、私の命じた通り、見事に立ったまま、たれ流してみせたのだ。私はエミが、これほど可憐で、いじらしく思ったことはなかった。

天の橋立海水浴場での野外プレイで味をしまった私は、それからの羞恥責めを、夜の公園や場末の映画館の中で繰り返して行い、大分馴れてきたところで、能登半島へ旅行したとき、エミに加えた責めは、二人にとって、永

遠の想い出となった。それを今、ここに敢えて告白したい。

馬蹄型の、とてつもない大きな浴場で、馬蹄の一方から男性脱衣室。もう一方の馬蹄から女性脱衣室。それぞれ入口は別々だが、馬蹄の頂点の内部では、完全につながっているという大風呂である。

馬蹄型の中央の部分は、所謂ジャングル風呂となつて見透せないようになってはいるものの、そこを勇敢に越してしまえば、相手方の風呂へ行けるというわけだ。しかし、よくある例で、こういった風呂には、年寄りの女は入ってくるが、決して若い女は入ってこないものだ。まあ、中年以下の女を期待するのは無理というものだ。

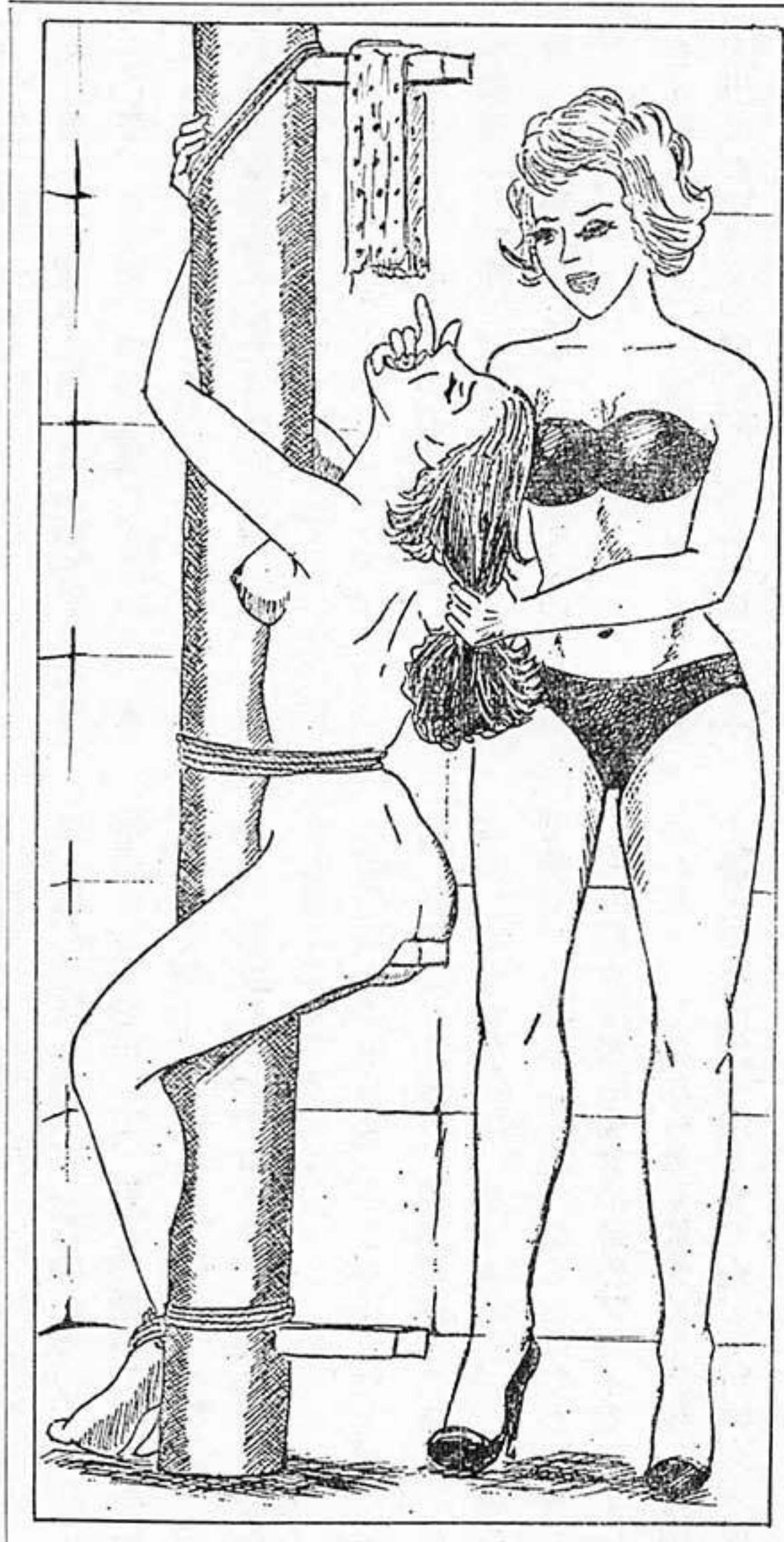
私たち夫婦が能登旅行で泊った旅館は、ジャングル風呂の大浴場の他に、背中合わせに女性専用の小浴場が沿っていた。だが、うれしいことには、その女性専用浴室と大浴場の境に、人が一人通れるくらいの扉がついて、人気さえなければ、女性客も自由にジャングル風呂に出入り出来るようになっていた。

早速、自慢の恋女房の肌を他の男達に拝ませて、羨ましがるのが楽しみ、また一方、

イメージギャラリー

『静かに遊ぼうよね』

名古屋 S 生



妻の美しい恥らしいを肴にしたいという例の悪癖が鎌首をもたげてきたというわけだ。

恥かしがって許しを乞い、尻込みをするエミを強要して、やっと納得させての打合せを終え、柄の悪そうな中小企業らしき団体客の宴会が終るのを待った。

どうせ、アブ好みの夫婦がSMプレイの延長としてやる快感ごっこなのだから、出来るだけ八旅の恥はかき捨てVにしたいと考え、衆をたのみ、酒の力をかりて騒ぎたてる団体

客と一緒に入浴して、エミの羞恥責めを完璧にしたいと思ったのだ。

頃を見はからって、時や良しと、女性小浴室のドアを排して、ジャングル風呂へおずおずと入ってきたエミと、わざと他人顔をして数メートル離れて湯につかっていると、どやどやと、今、宴会が終ったばかりの男達が、十数人も一団となって入ってきた。

酒くさい息を吐き、大声で喋り合いながら馬蹄型の浴槽の合体部分を越境して、エミの

つかっている女性脱衣室側の方まで、まわり込んできた。エミの白い姿を見て、一瞬、たじろいだ様子だったが、酒が入っているので忽ち痴漢型に変わってしまった。

男性脱衣室側で、まだ、うろろろしている同僚達に向って、遠慮会釈のない大声で喚いた。

「おい、凄い別嬪が入ってるぞ。早よう、こっちへ、来てみんか」

怒鳴っておいて、四メートルぐらいの間隔をあけてエミを取り囲んで、じろじろと眺めだした。これだけ、多くの素っ裸の男たちに取り囲まれたのは勿論、エミにとっても初めての経験故、顔を真赤に染めて、小さくなっている。

「これは、えらいことになったぞ」と、私も思ったが、他人顔をしているのだから、もうどうすることも出来ない。エミの白いうなじまでが、真赤に染まっているのを見ると、私も完全に興奮してしまった。

総べて、計画通りになって、団体の酔客たちの野卑で淫らな視線がエミの裸身を撫でまわすということになって、私は大いに満足だった。次の計画は、エミを、どのようにして浴槽から逃げださせて、木戸の扉から婦人専

用の浴室へ送り込むかということだが、それまでに、エミの裸身を、たっぷり酔客たちの酔眼に見せつけてやるプランを樹てていた。

それは、エミが洗場にあった石鹼に滑ったふりをして尻餅をつき、片足を思いきり挙げるといふものだったが、その計画のおぞましさに、エミが躊躇しているうちに、思わぬハプニングが起ってしまった。

突然、三十五、六才の髪を短くした苦味ばしった男が、エミを取り囲んでいる団体客の男たちを押しのけて前へのり出してきたのである。あっと思ったときは、もう遅かった。

たとえ、大勢の男達と丸裸で入浴していても、衆目の中で、直接エミの体に出す者は絶対にいないと思っていたのが、私の大きな誤算であった。その男は、エミの膝の後へ手を回して、さっと抱き上げたのである。

他人面をして、団体客に混じってエミの羞恥の裸身を愉しんでいた手前、今更いきなり亭主ぶって助けにゆくわけにもいかず、私はただ、おろおろしているばかりだった。

若い男は、エミを抱えると、すっくと立ち上った。真白いエミの裸身が、もう、何一つかくすものとてなく、赤裸々に二十人ばかりの男たちの目に晒されてしまった。

「やめて、やめてえ」

エミは悲鳴を挙げて足をバタバタさせるがその男は、一向にお構いなしに、抱えたエミを皆の前でゆさぶりながら

「どうだ、いい玉^{たま}じゃないか。こんなハクイ子は、そんじょ、そこらにいないねえ」

と、見せつけるのである。事の重大さと、たまらない羞かしさとで、エミは必死になって、暴れたが、反って見物人たちを楽しませることになってしまった。

私の隣の男が、「あんた、可哀そうにな、あの娘、やられまっせ。阿呆やな、こんな、お風呂に一人でくるなんて、ほんまに」と大阪弁で私に囁く。私が答えられないでいるとすぐ側の老人が、「あの男、それにしても、心臓ですなあ、本当にやるつもりなんかね」と言う。誰もが、夢にも、私を亭主だとは思っていない。

みんな、おとなしくなり、何事か起ることを期待して生ツバを飲んでいる。私も、何か理解の出来ない興奮で、ガタガタふるえながら、その場に突っ立ったままでいた。

私たちの方へ、白くむっちりしたお尻を向けたまま、エミの裸身が微妙にあえぎ始めたのは男の右手が彼女の乳房を撫でたからだ

わかったのは、暫くしてからだった。

あちら向きのため、はっきりとは判らなかつたのだが、どうやら男がエミの下半身に手を伸ばしているらしい様子であった。

こうなったら、如何な私も、もう辛抱できなかった。徒らに興奮ばかりしておれないのだ。まかり間違えば、頭突^{ずづ}きでもしかねない権幕で怒鳴りつけた。

「おいっ、いい加減にしたら、どうだ。女が嫌だと言ってるじゃないか」

「ちえっ」

私が身構えているのを見て、男は、エミを湯の上に投げ出すと、さっさと団体客のうしろへ姿を消してしまった。

こんなことがあってから、私のエミに対する露出欲は、へこんでしまい、暫くの間は、おとなしく過してきたが、九月になって涼しくなってくると、又々、例の悪癖が、もぞもぞと、うごめいてくるのだった。

今度は、白浜、蒲郡、氷見、伊豆などの温泉旅館の大浴場で、同じような露出プレイをやってみたいものだと考えている。

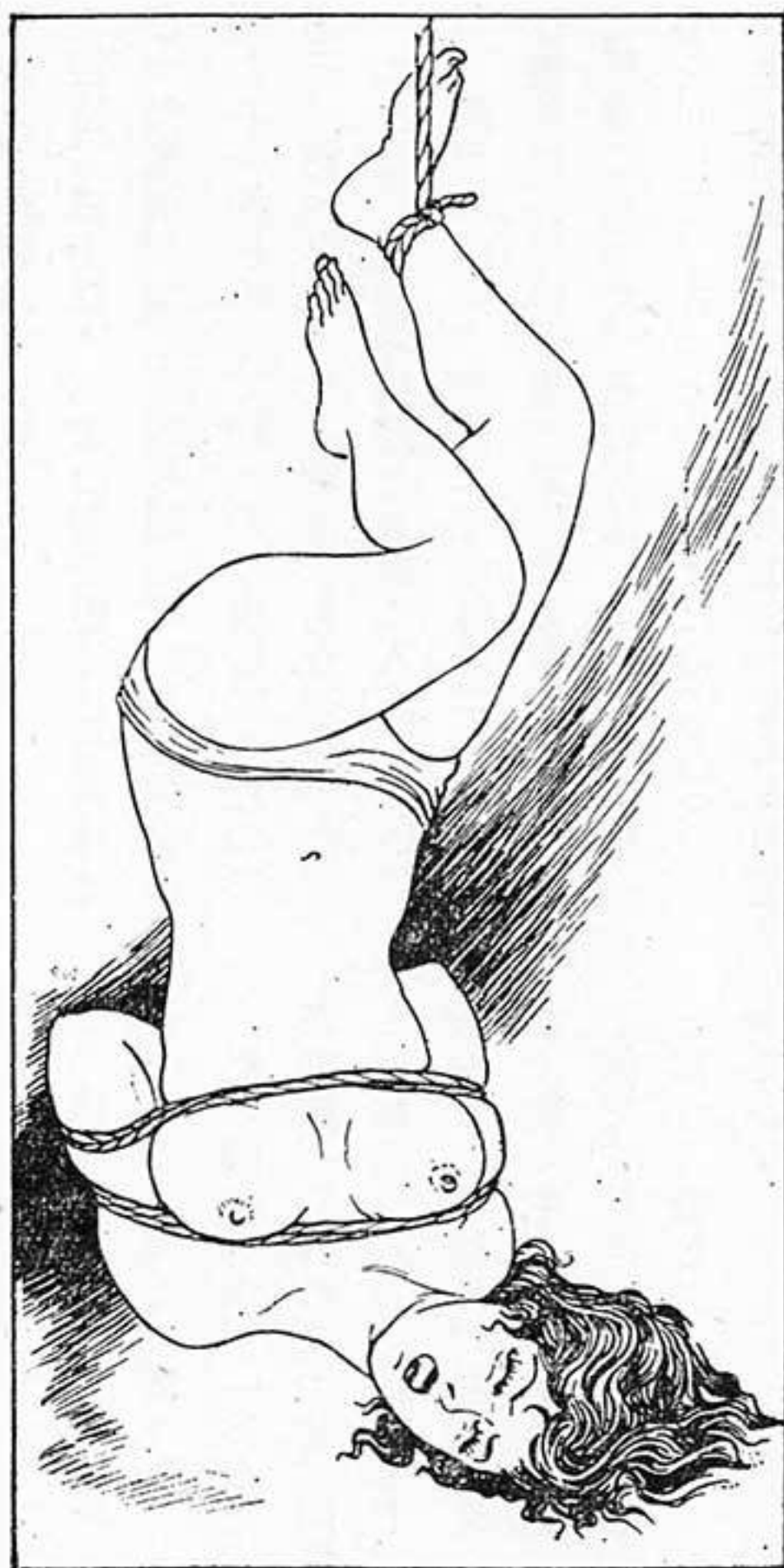
幸いにして奇ク誌友の同好者の方と御一緒願えたら、まことに心強い限りだと思っているが、如何なものだろうか。

砂登子抄 (前)

深き水の底に沈んで

久留木 栄

深き底の水に沈んで



そんなに大切な
ことかね。それ
じゃ、ちょうど
いい。今日は、
どこかで夕食を
しようと思って
いたんだ。つき
あわないか」

「はい」

「所長さん、お話があるんですけど」
榎並昭二が書類を無造作にカバンにつめ、
帰りかけようとする、事務員の高野砂登子
が思いつめた顔で立っていた。

「どうしたんだね、泣き出しそうな顔をして

砂登子は、わるびれずついてきた。サモン
ピンクの中に白が少しまじったツイードのツ
ーピースを着た砂登子は、平凡なデザインを
ポケットとポーで補い、深刻な顔と反対に、
やわらかな感じを出していた。

○

所長といわれているが、昭二は三十五才の

独身者だった。妻がいたが一年程前、六つに
なる男の子と四つの女の子を残して死んだ。
このため家庭は寂しかった。母が生きていて
なにくれと慰めてくれるのが唯一の救いだっ
たが、そのため、よく外食した。昭二は砂登
子を行きつけの「高砂」という寿司屋に案内
した。

小部屋にとおされると砂登子は、むかいが
わに小さくなってすわった。砂登子は昭二の
経営する小さな建築設計所の唯一人の女事務
員だった。四年前に採用したときは中学校を
出たばかりのあどけない娘であったが、いま
では一人前の、りっぱなビジネスガールに成
長していた。控え目で内気な女性だったが、
この一年間に、めっきり活潑な背の高い美し
い娘になった。

昭二は直観的に、いい人ができたなと判断した。そして、この半カ月間に給料の前借りが十万円近くなったのも彼は知っていた。知っていて何もきかず、何もいわず出してやったのは、やはり長い間に情が移ったのだらうと思った。

砂登子は隣村の農家の出身だったが、はじめ遠縁の小母の家から通っていた。現在では家を事務所の近くにかえ、若い大学生タイプの男が、時たま、たずねていくことを知っていた。昭二の設計所には、あと一人、年輩の事務員、谷村光次郎がいた。白髪まじりの老人で市役所を停年で退いたあと、昭二のはからいでひきとられた実直一本の男で、さしずめ小使兼事務所管理人であった。昭二は砂登子が、この男からも好意をもって見られていることを知っていた。砂登子の月給は手どり三万七千円だった。

○

ビールと寿司がくると、昭二は無理に砂登子にもコップを持たせた。昭二は晩酌はビール一本と決めていた。ニギリをたべ終わるとゆっくりと砂登子に話しかけた。

「金のことかい。恐らく君の、いい人に関係があることだと思うが……」

「はい、すみません。もう何もいうことはないんですけど、一度、所長さんに聞いてもらって、お許しを得ておきたいと思ったのですけど」

「ほう。僕に、そんなに遠慮することがあるのかね」

「はい、もう申訳なくて……。月給の方も、ちゃんといただいているうえに、借金のお世話になっている方に、こんなことを申し上げるなんて……」

「何だね」

「あの私、暇のときにアルバイトにモデルをしたいと思うんです。いいでしょうか」

「何だそんなことか。心配いらないよ、そんな事。僕は君が本当にやりたいというのなら何もいうことはない。一向に差支えないよ。むしろ心配なのは、君がなぜ、そんな気持ちになったかということ。恐らく僕は、こんな風な考えだろうと思う。君に好きな人ができ、金がいるからなんだね」

砂登子は、うつむいたまま顔をあげることでできなかった。ビールで、ほんのり色づいた顔を伏せ、その目には涙が宿っていた。

昭二は、いい続けた。

「恐らく君は、働きながらできる職業を考え

た。とても洋裁や手技、手芸などで収入を得る技術はない。あれこれ考えまよって、結局はモデルを選んだんだね。そうだろう。お金も借りれるだけ借りた。あとは体をかけるだけしかない。それならモデルという風に踏み切った。僕は、そう思うが、どう？ 当たっていないかね」

砂登子は、うなずいた。その膝に涙が一滴おちた。

「そこで僕は考えるけど、その男と結婚するのぞみはどうだね。恐らく、もう君は体をゆるしているのだと思う。それほど決心したのだから。だが、モデルになることを君の相手は承知しているのかね」

「いいえ。あの人には、まだ何も話していません。話しても承知してくれそうには思われませんもの。……私と彼、大平武夫っていうんですが、彼との交際は、今日で、ちょうど一年半になります。大平は東西大学の四年生で、もうすぐ卒業ですが、大学院に入るそう。あと三年かからねば、一本立になれます。それでもう私は持ちあぐんで、すっかり失望したのです。デートには、お金がかかるし、大平にそれまで負担はかけたくありません。もともと高嶺の花。いつかはとっ

ました。だけど、できればやはり結婚したいと思うもので、とうとうすべてを投げ出しました。ちょうど二カ月前。悔いはありませんでした。悲しくて、一晩も二晩も泣いてあかしましたが、いまの私は、たとえ結ばれなくても、することはしたいと、あきらめています。だけど所長さん。逢引きに使うお金のことで、これ以上、人様に迷惑をかけるということは、とても私にはできません。モデルにふみ切ったのも、そんなわけでございます。それで大平には全然話す気持はありません。もし話さずにわかったとき、いずれわかるでしょうが、たたかれればそれでよし、捨てられてもいいという覚悟はできています。するだけのことをして捨てられれば、自分の弱さに、あいそがつきるでしょう」

「なるほど、わかった。それなら僕は、もう何もいわないよ。僕がいま、たとえ金を積んであげても君のその気持は救えまい。君の好きなようにしたまえ。ところでモデルの種類だが、それは何だね。恐らくは、いまはモデル稼業の女も多く、モデル料も平均して一回二、三千円というではないか。写真のか、画家のかね」

「写真なのです。写真といえば写真なのです

が、普通の写真じゃないんです」

「じゃ何だね」

「ポルノ、緊縛ポルノなんです。周旋屋に行つて頼んでみたら、とても普通のモデルではペイしそうにもありません。なにしろ日曜だけですから。それも月二回ぐらいで金高のあがるものといったら、それしかないんです。緊縛写真をとりあつかう雑誌がふえ、この方は、なりてが少ないので、ひっぱりだかということでした。さいきんは、そんな写真を樂しむお金持が、案外いるそうです」

「そうか。そこまで調べ、そこまで決心したのか——。それで、裸で縛られても、こわくないかね。相手を信用していいのかね」

「そのことなんですけど、心配なら、うちの人か、知人を介添人につれて来てもよいといふんです。撮影は第一、第三日曜日と決めました。私は、とても身うちの人に話すなんてそんな勇氣はありません。それで、所長さんに介添をお願いしたいんです。本当に迷惑でしようけれども……」

「わかった。本当に迷惑だな。君にはいい人がいるんだから、本来なら断るべきだな。しかし君の場合、もう長いつきあいだから、そういうわけにもいくまい。君の気に入るよう

にする以外になかろうなあ……」

昭二は、できるだけ行かないがよいと思つた。砂登子のためにも誤解されるようなことはさけたかったし、まして砂登子の縛られた姿を見ることは、昭二には、たえがたい苦痛だろうと思つた。しかし、若い娘、しかも長い間、使ってきた娘から、こう恥をうちあけてたのまれて、どうしてことわれよう。昭二は、まだ思い迷っていた。

「すみません、所長さん。お願いします。向こうには、兄ということにしておきますから……」

砂登子の伏目がちの目がぬれているのを、昭二ははじめて意識した。

(二)

絶好の日和だった。昭二は、やばったい昔風のツイードの背広を、ぶっきら棒に着て家を出た。約束の町角にいくと、砂登子はすでに来ていて、まるで楽しい逢引に行くような素振りで、いそいそと昭二の傍に近よった。春らしい、きれいな薄紫色のウーステッドのややおしゃれな町着をつけ、ベルトは前中心を離して丸くおさえ柔い感じを出していた。いかにも砂登子らしい細かな感情のゆきとど

いたデザインであった。

砂登子のいじらしい姿を見て、昭二は思わず膚がすくんだ。そんな砂登子の真白い膚に粗いロープが無残に、まといつく。その幻想を払いのけることは、むずかしかった。砂登子に何の罪があるう。それなのに事実、あまりに残酷すぎると思った。

縛り写真撮影の会場に指定されている料亭「波の瀬」につくと、雑誌編集長の秋山司をつれ、赤ら顔の経営者松下潔志が迎えに出てきた。昭二は頭を低くしたが、あいそよくは笑えなかった。秋山は、りゅうとしたグリーンのウーステッドの背広、松下は和服で、頭が、ごましおまじりであった。応接室にとおされると、秋山が昭二の横にすわり小声で、「きょうは初めてですから、長襦袢姿の楽なのから始めることにしています。よかったらいっしょに願えませんか——」

と聞いた。

「いや僕は、とても可哀そうで、みておれません。隣の部屋で雑誌か、この本でも見ていましょう。どうぞ、お好きなようにして下さい」

と、ぶっきら棒に昭二は答えた。

撮影室はカラ紙一枚をへだてて控室と隣合

わせた八畳だった。庭に面した明るい部屋ですでに、いろんな責めの小道具が運びこまれ片隅に整理されていた。カメラマンは雑誌社専属の小田野猛で、秋山編集長、松下経営主も、それぞれ自分のカメラを持っていた。清子という四十すぎた仲居と、カメラマンの奥さんの千代子がモデルの世話をやくことになって、砂登子につきそった。周旋屋は来ていなかった。その八畳の撮影室の横に小さな四畳半の間があり、そこが砂登子の更衣室と決められていた。昭二は砂登子連れ、その部屋の入口まで送っていった。そこからひき返して控えの部屋に入り、戸をしめ、出て行くとはしなかった。

やがて、撮影が始まったらしい秋山編集長のダミ声が聞こえてきた。その声を聞くこともなしに聞くと昭二は、じっとしていることができなかった。新潮文庫の小説をあけたり、とじたりしながら心の静まるのを待った。

○

そのころ砂登子は、もう縛られていた。素裸に長襦袢一枚という姿で、腰のものも一つもつけていなかった。はじめから全裸になるという契約だったので覚悟をしてきたが、なまじ長襦袢をきせられていると、かえって恥

かしかった。

「最初は、いたくないように、しごきで縛りましょうね」

といって清子と千代子が協力して無造作に後ろ手に括り合わせた。砂登子は、その途端ちよっと涙があふれそうになったが、ここで負けてはと、ぐっと口をかみしめ悲しみを押し殺した。座敷の床の間の柱にゆわえつけられ、足をくずしてすわった。頭も横にかしげ長襦袢の前を広くはだけ、片膚ぬぎにされると、支える紐一つない体をすべって、長襦袢が手首の近くまで落ちた。砂登子は上半身を露出して思わず体を固くした。

小田野カメラマンが近づいて

「お約束のとおり、サルグツワで顔をかくしますよ」

といって金紗の男物の広巾おびを顔の下半分に巻きつけ、最後にギョツとしめあげた。すると帯の上から顔の形が、おぼろに浮かんできた。砂登子は息ぐるしさを覚えた。

用意万端、整った。カメラが操作されはじめると、意識してか砂登子は妙に興奮して体が固くなった。それをやわらげるように秋山編集長が手をふり、冗談をいった。

「まるで結婚初夜のお姫様だね」

その声で砂登子の緊張がほぐれたところをのがさずフラッシュが、たかれた。

それが口火となり、そんな姿で四、五枚、長襦袢を肩まで着せられ、別のしごきで胸をまかれて四、五枚。素裸にされてから二、三枚、とられた。

それから十分間ほど休憩した。手首の縄をとかれ、肩から千代子のコートをかけられると、砂登子はホッと初めて太い吐息をもらした。向こうの隅にかたまって、砂登子に聞こえない小声で何かを話している杉田ら一団の人間が、どっと笑った。恐らく砂登子の体を批評しているのであろう。そういうことが鋭敏な砂登子の膚を、すくめさせた。やがて、その中から秋山編集長が、ぬけだしてきた。

「もう落着いたかね」

「はい。いえ、まだ、まるで夢中ですワ」

「貴女は、まるっきり、はじめてですね。びっくりしました。たいてい、普通のモデルの経験者ばかりで、なんとなくモデルずれしている人が多かったんでネ。貴女には、それがいい。いい専属モデルになれると、我々は心から喜んでいます。素人さんには、つらいでしょうが、ひとつ、しっかりやってみて下さい。それから、いよいよ本格的縛りに入りま

すが、痛かったら遠慮なく、いって下さい。なれたら強く縛られても平気になりますが、まだ貴女は、ほんの最初だから」

「すみません。でも私、覚悟してきていますから強いのは、いくら強くても平気ですワ」
「いや、痛いというのに遠慮はいらないということですよ。貴女が泣きわめいても平気なくらいの心臓はあります。だが、縄が肉をはさんだりしたら、あとで青血がよるし、次の撮影に困ったりします。だから貴女の痛みより商売大切ということですよ。貴女の思わくを一々気にしていたら、いいポーズは、とれませんものネ。とにかく、しっかりがんばって下さい。では縛りますぞ」

秋山編集長は念を押して、カメラマンの方を、しゃくった。小田野カメラマンが足の指大のロープを、とり出してきた。砂登子はそれをみただけで身ぶるいがした。

こんな目にあうのも、みんな、あいつのためだ！ そのあいつと思うと、腹が立った。砂登子の愛情は風前の灯のような、はかないものとなっていた。

砂登子は千代子にうながされて、しびしび両手を背中に回した。手首に膚色の薄いサポーターをはめられると、その上から太いロー

プが、まきついた。その縄を首から胸に回し昔の罪人のように乳房の周囲を縛って、ふたび背中の手首にむすび、上手に締めあげられると、手首が、ぎゅっと肩の方に、せりあがる。ジーンと腋に痛みが走り、思わず手首に力を入れた。全身で力むと、歯がカチカチと鳴った。

宿の主人が持ってきた長さ一間ぐらいに切った物干竿を二本、その手の下におし、竹をかるったような恰好にされた。左の足くびと右のふとももを竹に縛りつけられると砂登子は、奇妙な、かぶとむし甲虫のような形になって畳の上におれた。その体を鴨居の下に運んで、腋の縄で鴨居から吊られると、あわれな、あやつり人形ができた。砂登子は中腰で、よろめいた。

さきほどのように顔を縛られて、撮影が始まった。

砂登子は、粗いロープを縦横にかけられ、その上、体位が非常に不安定で、わけもなく苦しかった。苦しいというより窮屈で、体の節々がうずいた。それを、じっと我慢する。その我慢も五分と、もたないのだ。

「静かに、静かに。動かないで」
という声を聞いても、一分間とじっとして

いるのは、むずかしかった。たまりかねて、一言、二言、うなり声を出した。すると、あわてて人のよいカメラマンがとんできて、おろしかけたが、砂登子は撮影途中であることを知ると、何かいらだたしいものを感じ、

「おろさないで。大丈夫。なれていないからなのよ。そのまま続けて、ね、お願い。そのままでいいのよ、そのまま。私は、そんな女なの。体が不安定だから、どこか一カ所、強い柱に括って」



イメージギャラリー

『ダイヤでも呑んだ?』

四馬

孝

と上ずった声で叫んだ。

その意地っ張りな声に、小田野は秋山編集長の方を見、すぐ竹の一部を柱に固定した。二人は砂登子の叫びの中に思いもかけない何物かを感じとった。二人は顔を見合わしてニヤリと笑った。

竹が固定されたため、砂登子の体は、ずいぶん、楽になった。しかし半面、腕の痛みや縄の痛みは倍加した。やがて痛みは全身に及び、いくら精神力を集中しても苦しみは消えないということを経験した。いやという程、味あわされた。体の苦痛が増すにつれ、榎並昭二の姿が見えないのが腹立たしくなってきた。不安になり、呼びつけて、どなりたくなった。カッと頭に血がのぼり、ぶるぶると、おこりのように体がふるえた。しかし、砂登子は縛られていた。自分の哀れさを、自分の意志で昭二に見せることはできない。それなら帰るさい、いっそう、縛られたままの姿でほっぴらかにされてもらい、皆が帰ったあとで榎並に、ほどかせてやるのだと考えた。そう考えながら不意に涙がポロポロと、こぼれ始めた。

○

撮影がすんだのは、それから一時間たって

からだ。秋山編集長が昭二の部屋に、ぬっと入って来た。

「お兄さんでしたか。高野さんが呼んでいられます」

「ああ、そう。じゃ、もうすんだのですか」

「全部、終わりました。大分、気が高ぶられているようです。何だか深い事情が、おありのようで、まあそこまで立ち入るのは、どうかと思っておりますが」

「いや、どうもすみません。またダダをこねているのでしょう。本当にあの子には泣かされました。いずれ長いおつきあいともなれば何かお話をする機会もありましょうが、いまのところ、そっとしておいてやって下さい。

こんどは第三日曜日でしたネ」

「そうです。じゃ、我々は、一足先に帰ります」

「すると、あの娘は」

「隣の座敷に、まだすわっています。我々では手がつかないようです。車は玄関に回しておきます。あと十五分もたてば、くるでしょう」

「それは、すみません」

昭二は秋山を送り出し、八畳にとってかえすと、砂登子が燃えるようなヒトミで昭二を

にらんでいた。目は血走り、髪を振りみだし長襦袢一枚の上に、太いロープで、がん字がら目に縛られていた。白い胸に黒い縄が喰い込み、こんもり盛りあがった乳房が妖しく色づいていた。乳首は赤く、太く、鮮かで上を向いていた。長襦袢は後ろ手の方にたぐれ、前からは、ほとんど見えなかった。下腹部にも、太ももにもロープは走っていた。

昭二は呆然と立ちつくした。

「どうしたんだ。バカ！」

昭二は、そういいざま、荒々しい足音で近づき、思わず砂登子の頬を殴った。

「誰が、こんな姿をオレの目に入れろといった」

昭二は、そういいながら、なおも砂登子をこづいた。

「卑怯者！」

と砂登子は昭二が入ってきたら、そう叩きつけるつもりでいた。だが砂登子の口からはどうしても、その言葉が出なかった。ワッと泣きながら、体当たりで昭二にぶつかった。

その砂登子の体は、昭二の体に、すっぽり抱きしめられ、いつしか砂登子の口の上に、昭二の口が、かぶさった。

昭二は改めて、砂登子にたいする自分の愛

の愚かさと責任を感じた。

(三)

気候は次第に春から夏に移りかわりつつあった。それから二週間は、みるみるうちに過ぎて行く――。

昭二は意識的に砂登子をさけるようにしていた。砂登子も同様だ。事務所に入ってくる、いつもの、はしゃぐ性質の女が、ひっそりと事務をとった。

こんな砂登子の変化は、すぐ昭二の目に移った。昭二は、そんな姿の若い娘を黙視できるほど、ずぶとくはなかった。砂登子の目につかないように設計室にこもり、ひたすら依頼されている食品マーケットの設計に没頭しようとした。しかし、いいヒントは生まれずヒントの代わりに、食品のいっぱいあった設計書の中から、手足をいましめられた砂登子の姿が浮かびあがってきた。まるで、あの日の責め場のように、設計室の扉の向こうで砂登子が縛られているように感ずるのだ。

昭二は鉛筆を投げ出した。砂登子といっしょに一つ屋根の下で仕事をする圧迫に耐えきれず「ちよっと、そこまで」と谷村老人にいい、ひそかに裏口から事務所をぬけ出した。

付近の自転車屋からオートバイを借り、一時間ばかりドライブした。久しぶりに空手の道場へ通おうかとも考えた。しかし、それは思い止まり、郊外の静かな池の畔に車を止め、亡妻の名を呼んだ。亡妻の顔に重なつて砂登子の顔が見え、あの日の熱い口づけが思い出された。縛られて、無抵抗の女を叩いた。その上、口づけするとは！ そんな男になりさがったかと思うと後悔の波が、くり返しくり返し訪れた。

あの料亭が他人の家でなければ、当然、接吻だけではすまなかつたと思う。そこまで行かなかつたのが唯一の救いだとは思われたがそれで気がすむものではなかつた。たとえ昭二が、いかに砂登子を愛してしようと、愛だけで人間の行為が全部、許されるものではない。砂登子には、つまらない男だったにせよいまは心に決めた愛人があるのだ。まして自分には子もあり、母もある。砂登子には、ふさわしくない男なのである。そう思うと激しい自己嫌悪におちいるのだ。

だから、はじめから行く気など、なかつたではないか。それなら何故、行った。責任をとれ。どんな形で責任をとるのか。もう行くな。他人が冒したって、自分が冒したって五

十歩、百歩じゃないか。あの状態で、あの女が救われるはずはない。むしろ昭二が行くことは、傷を大きくするばかりだ。——と昭二の心の中で心と心が喧嘩した。

昭二は結局心にも負け、自分にも負けた。よほどこの次のときも一緒に行こうと思つたが、やつとの思いでそれをやめ、出張に出ることにした。金曜の夜に砂登子を呼んだ。

砂登子は橙色の小さな枯れ葉模様を散らしたナイロンブラウスを着、髪を無造作に束ねていた。うつむき加減で、足音を殺して設計室に入ってきた。昭二は砂登子の顔を見るこゝろができなかつた。砂登子の白い手首だけを眺めていた。あそこに縄がまきついたのだと思う。昭二は勇を鼓して言った。

「砂登子。こんどの日曜日は、一緒に行けない。東京で建築士のゼミナールがあるので、出席しなければならぬ」

「すみません、所長様。わたしが、わがままなばかりに……」

「いや、砂登子。そういう意味じゃない。君も大人だから一緒に一度、行ってあげれば、あとは自分で処理できると思つたのだ。わる気ではない！」

——縛られた女が、どうして自分で処理でき

るものか。この嘘つきめ！ 優しい口調でいながら、昭二は冷汗三斗の思いだった。いうだけいうと、苦しさに耐えかねて、返事もよくきかず、外に出た。

昭二の話をきいて砂登子の顔は一瞬くもつた。みるみる悲しそうな顔になり、涙が目に一ぱい、たまつたが、やつとの思いで鳴咽するのを、こらえた。

昭二すら、見放したのだと思つた。しかし砂登子は、すでに、その気配を感じとつていた。昭二とは、そんな男である。強いようで弱い男であることを、長いつきあひの間に見抜いていた。これほど自分が生きるのに必死になっているのを知りながら、昭二はそれを傍観していて、救いの手をのべない。決して自分の生活を破壊するようなことは、しない男なのだ。そのことが、よくわかつているだけに悲しくもあり、憎くもあった。

そのため、わざわざ、あの日、自分の一番みじめな姿をさらし、心から愛したではないか。あの時の平手打ちも、あの時のキスも嘘だったのだろうか。どの男でも感じる単なる衝動にすぎなかつたのか。

砂登子は、一瞬にして視界が、真っ暗になるほど腹が立ち、絶望の底に沈んだ。なるよ

うになれば、体が千切れるほど虐められればよいと思ひ、こんどの日曜日には、わざと、ひどく虐められるのだと。

(四)

第二回目の撮影会は野外で行われることになってゐた。砂登子はミナロンジエリーのトリコットスリップの上にドレッシーなブラウスとスカートを付けてゐた。ブラウスは縄目模様のしゅす織をきれいに織り出したローンスカートはアムンゼン風の、さっくりした薄手のウールをつけた。みじめな姿をさらす自分の体にたいする、ささやかな花むけだと思つてよそおいをこらし、うわべには微笑をたたえて砂登子は出かけた。この砂登子を小田野夫妻と秋山編集長が待っていた。

秋山編集長は紺のツイードのズボンにブロードのカッター、その上に鼠色のセーターを小田野カメラマンはジャンパーに黒いベレー千代子夫人は薄い褐色のスーツという、いでたちで、いずれも砂登子に比べ、野暮ったい姿だった。三人は大きなトランク二つを荷台につみ、カメラマン夫妻がクラウンデラックス七三年型に乗り込んで待つてゐた。

小田野カメラマンがハンドルをにぎった。

秋山が、ひとり外に立っていた。

「こんにちは。おや、今日はお一人ですね。」

お兄さんは」

「兄は、ちょっと急用が、できたんですワ。」

もう皆さんにまかして安心だから、どうぞよろしくといつていました」

「そうですか。余り安心できる輩やからじゃありませんよ。だがね、そういわれれば光栄です。さ、行きましょう」

二人は客席に乗り込んだ。

車は郊外に出、ドライブウエーを、疾走した。そして人通りのない立木の比較的、多い山腹につくと、草むらに自動車をのり入れて本道から、かなり離れたところで、とめた。

自動車の荷台からトランクをおろし、携帯用の小型天幕を組み立て、木と木の間に、はりめぐらせ、にわかづくりの更衣室をつくつた。千代子が砂登子をそこへつれこんだ。

「屋外で、いやでしょう。脱衣場も、こんなところで、ごめんなさい」

「いいえ、部屋の中より空気が澄んで気持ちがいいですワ」

「そうね。じゃあ、さっそく服を着替えましょう。今日は最初は着衣のままだって。そんないいスリップじゃ、もったいないわね。よ

ごれたら損よ。できるだけ自分のものは脱いだが得よ」

いわれるままに砂登子は服を着替えた。青緑のソフトデニムのドレスで、光沢のある真白な、えりと白いステッチ。胸あてにはヒヤシンスの花を刺繍して、若やいだ雰囲気を出してゐた。砂登子は、それを着ると後頭部にピラミッド型に束ねてゐた髪をほどき、ゴムひもでくくつて、ポニーテールとし、アクセサリーとして渡された黒皮のハンドバッグをもって外に出た。

その姿を、いちはやく小田野カメラマンがみつけ、ほほうと感心した。さきほどの快活で晴れやかな砂登子の姿は、そこにみられずこにくらしいようで愛らしいビジネスガールの姿があった。

「その辺を、ぶらぶら歩いてみて」

秋山が命じた。

たちまち小田野カメラマンの姿がおどり、カメラが光った。顔をさとられないよう斜め後ろから狙い、前から、ついで、ふたたびカメラを構えたとたん、秋山編集長が、大きな唐草模様のフロ敷を持ち、後ろから砂登子にとびかかり、顔をすっぽり、つつんだ。びっくりした砂登子が手足を、ばたぐるわせると

ころを一気に二、三枚、写した。

それから改めて、砂登子は鼻から下を、そのフロ敷で、くくり直された。ついで手が後手に括り合わされ、胸を一巻二巻、された。

秋山は、その縄尻を五、六メートル余して付近の松の木に縛り、

「そのまま、走って逃げるようにやれ。縄がはったら尻もちをつくんだ。それから、おき



イメージギャラリー

『幻夢は秘願の凝結?』

岡 かし

あがり、綱引きの要領で逃げまどえ。それをとる」

と命じた。

砂登子は、いわれたとおりにしたのだが、中々うまくいかず、五、六回、やり直しをさせられた。ついでスリッパ一枚となって、こんどは草の上ところがされ、最後にはブラジャーとパンティだけで、うつされて、午前中の撮影を終わった。

ひどい責めを期待してきた砂登子には何だか、ものたりない撮影であった。あらい細引が、くいこんでいる二の腕を抱きかかえるようにして千代子がコートをかけ、草原に毛布をひいた場所に砂登子を連れて行き、細引をほどこしてくれた。

砂登子は、さるぐつわで、すっかり乱れた口紅を直し、顔をふいて、ねころび、青い澄みとおった大空を眺めていると、不思議な思いにかられるのだ。初日とちがって、縛られるのに不安もなければ悲しみもない。昭二がないことが逆に、自分を強くしたのだろうかと思った。そんなことはない。今日は、わざわざ苦しみを求めようとした砂登子ではないかと反省もしてみた。しかし、そうは言い切れない何物かがあって、なごやかな割に砂

登子の心は、うつろであつた。

小田野カメラマンが車から弁当箱を運んできた。小さな幕の内で、まず一番に砂登子に渡した。紙のコップを千代子が、くばり、魔法びんから湯気の立ったお茶を、くんでくれた。ふと、そばをみると秋山が草原に立ったまま、小さなオニギリをムシヤムシヤはおばっていた。思わず砂登子は微笑した。どうみても楽しいピクニックの光景である。

昭二たちとだけの仕事の世界と、大平という、まだ実のない男の愛の世界と、そんな狭い視野の中に住んで、その目で物事を考えてきた砂登子には、こんな責写真をとる人は何か特別な感情をもっている異種類の人間のように思えて仕方がなかった。事実、最初の日刺戟は砂登子には強烈すぎて、どうしてもそんな風に考えがちであつたが、この全く、のどかな仲のよい友人同士といった姿をみて何か新しい世界を発見したような気がした。

砂登子は気持よく、わりばしをとった。そしてオニギリを小さく三つにわけると、その一つを、ゆっくりと口に、ほおばった。

食後休憩は三十分以上もあつた。記念撮影をし、一息いれると、もうすることがなかった。砂登子は草の中に寝て、草のイキをすっ

てみた。そぞろ心が、はずんだ。腰を浮かし背のびをし、木によってみた。すると突然、全く不意打ちに昭二の顔が浮かんできて、砂登子を驚かした。

昭二は汽車にのって、ゆっくり煙草をくゆらしていた。どうだ、オレのいうとおりだった。案ずるより、うむがやすしさ。煙草のけむりが、そう砂登子に、つげた。たのしい気持が、その一瞬の幻覚のために、忽ち黒い憤怒にかわり、砂登子は口びるをかんた。

午後の予定は、自動車のある風景の責めと立木縛りだった。自動車を使った責めは午前中の写真と大同小異で全裸はなく、縛りつけられる松の木のかわりに自動車が用いられたにとどまった。単調な構成をかえるため、縄の種類をかえ、かけ方をかえ、服やサルグツワをかえて変化をもたせた。そのため、わずらわしいばかりで、いたずらに砂登子の肉体に疲労感を与え、心にいらだたしさを植えつけるだけだった。

「少し疲れたようだね、一息いれようか。それとも、あと一時間、強行するか」

秋山編集長が砂登子の顔色をうかがった。「そうね。私なんだかイライラしちゃった。このまま、やっちゃいましょうよ。先生。も

う二度と来ませんというくらい、虐めて下さらない？ 体の限界を、ためしてみたくなたの」

「何いつているんだい、まだ三回目の癖に。じゃ泣いても知らんぞ。こんどは本格的なサルグツワだ。容赦しないから」

秋山は腹立たしげに、にらみつけた。せいっぱいの好意を逆さになでられたような気がしたのだ。トランクから、一かたまりのガ―ゼをつかみ出すと、いきなり砂登子の口に押し込んだ。否も応もない。みるみる大きくひらいた砂登子の口の上から、丈夫な腰紐で五、六回、巻けるだけ巻いて縛りあげた。思わず砂登子は秋山の手しに、しがみつこうと、もがいた。しかし、その手首には、すでに縄がまきついていて。一団の布が、のどの奥までつまり、窒息しそうで、にわかに恐怖感がつり

「いや、いやーっ！ そんな、むごいこと」

と叫び、首をふり回したが、声はほとんど砂登子の耳にすら聞えなかった。サルグツワはこれだけではなかった。そんなみっともない顔は見るのも厭だというような、すごい目付きで秋山編集長は男物のしぼりのへこ帯をとり出すと、これまた鼻の上からアゴの下ま

で幅をひろげ何回となく回し、最後に思い切り、うしろで締めあげられた。この前の時もこのへこ帯のサルグツワはされたが、口に詰め物はなく、その上、締め方も、そう強くなかったが、大の男に力一ぱい締められると、どうにもならないほどの圧迫感をうけた。砂登子は、はやくも後悔しはじめていた。ただその弱い心を意志の力で、じっと押えつけ、暴虐にたえていたのだ。

縄は手首だけだった。左右の手首に別々にかけたのを、縛り合せただけで、少しも痛くなかった。だが、この縄が高い小枝にかけられ、手が引き挙げられるにつれ、偉大な効果をあらわしはじめた。

腕は、縄が胸に回されているより痛くなり爪先立つくらいでとめられたとき、もはや砂登子は、じっとしている事ができなかった。身をよじり、尻をふり、体重を交互に足にかけて、もがいた。秋山は平気でそれを眺め、手近な松の小枝をとり、千代子に渡した。千代子が、その長い枝で砂登子の脇腹を突つきくすぐった。ガサガサの小枝が体に当たるとむずがゆさと、くすぐったさで、針の葉先が皮膚にささると、とびあがるような痛さが走り、責めの効果をもりあげた。砂登子は首を

ふり、汗を流して苦しんだ。

「やめて！ やめて！ 後生だから、もうやめて！」

と叫んでも、ム、ム、ムと、わずかにもれるだけなのだ。やがて動きが幾分、にぶってきた。秋山は千代子の手をやめさせ、砂登子に近づいた。

「いいな、断然、素晴らしいよ。泣かせるぜ。

これなら、実にすばらしい演技だ」

素晴らしいながら、ぴしゃりと砂登子の肩を打った。

これが演技だって！ これが素晴らしいんだって！ 悪魔め！ と砂登子の頭に、ふたたび、激しい意地っ張りの負けじ魂が、おこった。秋山の一撃は巧みに、砂登子の感覚を、生き生きと呼びさましたのだ。

「さあ、もういっちょう、がんばろうぜ。頼むよ。こんどは全裸だ」

素晴らしいさま砂登子の横に回り、ブラジャーのホックをはずし、むしりとると、これを放り投げた。ついでパンティを、まるで竹の子の皮をはぐように、ぬきとり、これまた大きく投げすてた。砂登子の目の前を白い肌着が緑の草の中に舞い降り、白い大きな蛾のよう

に地にはった。

松の木の下では新緑の鮮かさに映えて砂登子の裸身が、くつきりと浮かびあがった。がっしりとした広くて厚い胸の中央には、むきたての梨のように水々しい乳房がもりあがりぬれたサクランボのような乳首が鮮かに色づいていた。後ろ手吊りのため、肩がつき出、胸が弓なりに曲がり、腰がまるまって、尻が高く突き出、二つの双丘が空中におどる。

秋山のこの行為で砂登子は、いいしれね屈辱の底に落されていた。それが演出者のちゃんとした計算でもあったのだ。今日の撮影で始めて素裸にした。この事は、いちろの希みの芽をつんだ。しかも生まれて始めて男の手で、しかも他人から強制的に下着をぬがされたという事は、おそろしいできごとであった。自ら決心し大平に体と愛を捧げたときも下着は自分の手でとった。その手は、いま自分のものでないのだ。他人から裸にむきあげられるくらいなら死んでもよいと思う。しかし死ぬこともできない。人気のないとはいえずいつ誰が来るとも知れない戸外で、白昼こんな目に合わされるとは、何という最悪の日だろうか。きょうの吊り責めには、体に何の縄もかかっていない。それが、よけいしゃくで

くるおしいばかりの羞恥心が砂登子の胸に、よびおこされるのだ。

砂登子は目が、くらくらした。心は絶望感におののいた。それにもかかわらず責め手はそんな絶望感など甘っちょろいものであると、いうことを思い知らせようとする。

秋山は小さな足つぎを持ってきて砂登子に一息いれさせ、苦しみをやわらげてやった。砂登子の体によりそってたち、砂登子がきびしいサルグツワの下で呼吸を整えるのを待った。砂登子の心にホッと一安堵の色がみえる、すかさず

「あ、いいものを君にやるはずだった。すっかり忘れていた。これだ。この前の写真、できあがっていたんだ」

と、ポケットから一連五枚の写真を取り出した。なんと、それはこの前、砂登子が鴨居に吊られたとき、涙を流さんばかりの表情でもがき苦しんでいる写真で、全裸のあさましい姿が、そこにあった。五枚が五枚とも屈辱のポーズである。それを、ずらり目の前に並べられると不意に、全く心の底から悲しみが襲って、わけもなく涙があふれてきた。

「ほほう、涙を出すぐらいに演技ができるとは。こりゃ堂に入ったものだ」

秋山が、からかった。その言葉が合図だったのか、小田野の手で新しい麻縄が胸にかけられ、乳房にくいこんだ。髪を、さらに別の縄で縛り、それを木の幹にくくりつけると、たちまち、顔がひきつった。

こうしておいて、秋山は足台をポンと、けた。砂登子の体が、ぐらりとゆれ、足が台から、はなれると、キ、キ、キと音がして縄がしまり、わずかに足の拇指が地上につくといどで体が止まった。砂登子は髪がぬける様に痛み、自分の体重で縄が肉にくいこんだ。痛みが改めて全身に走り、悲鳴が再三、とび出したがサルグツワに消された。苦しまぎれに力一ぱい口中のガーゼをかみしめると、そのはずみで、頬の肉の一部が歯の下になり、生暖かい血のりが口中を、ゆるやかに流れていった。

男たちは、それをみて、ゆっくりと撮影にとりかかった。その男たちの姿を見て、砂登子の胸に黒い憤怒がもりあがったが、怒りはいたずらに責めの効果をもりあげるための小道具になるだけであった。

実際に、この責めの時間は十分か十五分位であつたらう。クライマックスの時は一分もかかっていなかったのかもしれない。だが、

十二分に砂登子を苦しめ、砂登子には無限の時間であるような感じをいだかせた。それが証拠に松の木から降ろされても、ぐったりと草原に伸び、文句もいえなかった。砂登子の気持では、縄をとかれたときに、よよと泣きくずれば、責め手は本能的に加減すると考えていたが、縄をとかれると、そんな気持も失せ、ただもう、ぐったりと横たわっているのが、せいっぱいだった。

二人の男と一人の女は直ちに行動を開始した。砂登子の体を小づき、手足に黒いナイロンの手袋と靴下をはかせた。サルグツワをはずすと口の詰め物を少なくし、皮製の緘口具に変えた。尾錠で巾のある、しなやかな緘口具をはめられると、砂登子の自由は再び失われた。砂登子は当分この姿勢で、ほっておかれた。両手首両足首に、それぞれ一本ずつ麻縄が結びつけられ、それが、ゆったりとした余裕を残して、立木の根っこに、ゆわえてあった。秋山たちは、この姿で砂登子の上に毛布をかけ、自分たちは一服した。

砂登子の体に徐々に気力と体力が回復してきた。背中の草が心地よく、におい、大地の暖かさが皮膚をだいた。美しい青空をみていると、苦しみは思い出にかわり、心は無心に

なつて、あれはあれでよかったのだと、重荷をどこかに、おろした感じがした。しかし、そうなる心は何と、うつろなことか。頼るべき昭二もなく、いとと呼ぶ大平も、いない。そのことが好まざる心の責めとなつて砂登子の心を悩ましはじめた。自分は一体、どちらを愛しているのだろうか。――

砂登子は顔をあげて四囲を、みわたした。秋山がニガ笑いを浮かべ、小田野と何か、話していた。砂登子が顔をあげると、ゆっくりと近づいてきた。

「どうだ、苦しいか。お望みなら、もっと虐めてもいいぜ。だいぶ、君は荒れていたからね。肉体も心も、まるで、手負いジシのようだった。どうだ、苦しいか、苦しくないか」砂登子は苦しいという表現のかわりに首をふつて、もだえてみせた。すると秋山は「おや、苦しくないんだネ。じゃ、ちょっと虐めよう。何秒もてるかね」

といいながら腕時計を見、鼻の頭をひぎつた。砂登子はアッと音をあげた。さきほどの猿轡とちがひ、こんどの猿轡は鼻にかけてなく楽であつたが、鼻をつままれると呼吸するところのないものであつた。

「三十秒」

秋山が、いった。その声に砂登子は、ぞつとした。膚がすくむのを覚え、狂気のように自由になるところを、ばたぐるわせたが、大の字になった体には、寝返りをうつだけの縄の余裕はなく、カメラを構える責手を狂喜させるばかりだ。

「一分」

もうとても、だめだと砂登子は、あきらめた。その時、手はなれた。砂登子は思わず鼻をならして、いきをした。こんな時に、口でいきのできないことが、かくも苦しいことであることを、はじめて知らされた。

「二回目」

秋山の手が再び鼻にのびた。砂登子の顔が恐怖にひきつり、涙が耳の横まで流れた。「ねえ、堪忍して、もう何もいけません。後生だから、やめて下さい。これ以上、苦しめるのなら、一思いに殺して下さい」

と、その目が訴えた。一分たつと、秋山はゆっくりと手を、はなした。かくして、その日の責めは終わった。

サルグツワをとられても砂登子は何もいう気力が、のこっていなかった。四肢を縛ったまま、三人がバスタオルを体にあて、四肢をもみほぐしてくれた。がしかし、砂登子は、

それすらも、おびえた。

「まだ許してくれないんですか、小母さん」砂登子が千代子にきいた。

「このまま、ここにおいておこうかと、相談してますのよ」

そうおどかしながら千代子が手足のいましめを、といてくれた。砂登子は、そのまま千代子にとりすがつて、よよと泣きくずれた。

男二人は、すでに自動車に乗っていた。

一日分のモデル料をもらひ、家にかえりついたとき、だれが二度と行くものか。こんな苦しい責苦があるものかと思つた。人に知られたくない恋の責め苦だ。すると自分が出かけて行かなければ絶対、顔をみせない大平武夫の弱々しい顔が浮んできた。あの男のために苦しんでいるのだ。もし、男に良心があったら慰めに來てもしかるべきだ。それなのにあの男は決してやつてこないだろうし、もしやってくるとしたら、いま以上の苦しみを自分に与えるにちがひない。なぜなら、自分は大平にだまって自分の道を歩いたのだから。一人寝の床で、こんなことを考えた。そして空しい、ほんとに空しい心を傷ついた体で、だきしめるようにして就寝した。

――(つづく)――

奇くさい



S M プ レ イ 体 験 談 深田菊子礼讃と吾が習作

丈^{たけ} 山^{やま} 潔^{きよし}

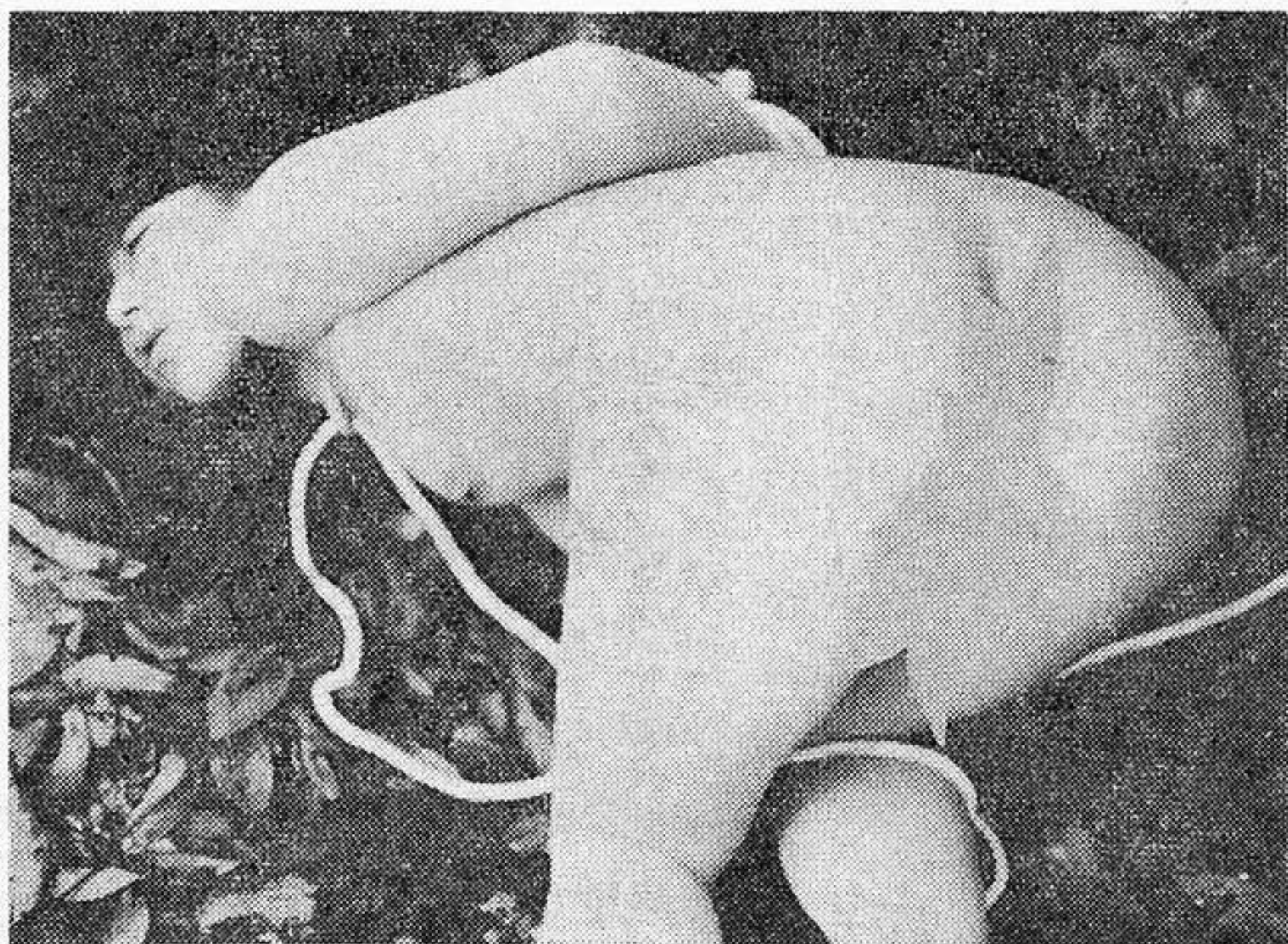
十月号の口絵写真で、深田菊子さんの『若き肢体を誇る女』の二葉を楽しく拝見しました。彼女のフォトは、つねに若々しさの中に

おおらかな美があります。前田真知子さんの青い果実の魅

力、秋山夫人の、人生の深淵まで味わい尽そうというすさまじい迫力——。その間に混じって、かぐわしさと、たおやかさと、みずみずしさを湛えた深田菊子さんの美しさは抜群です。

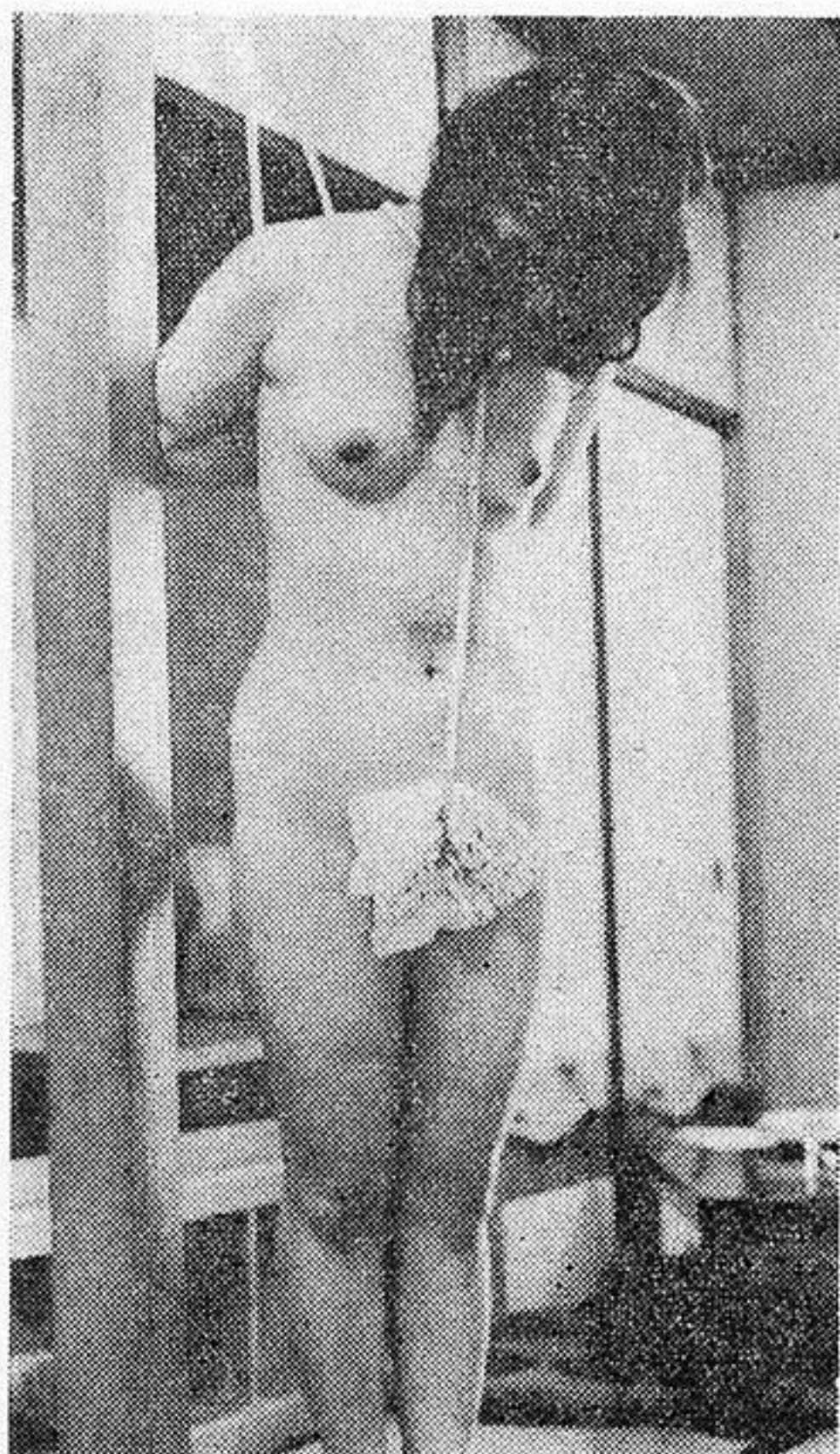
さりげない後手縄の背面のフォトでさえも、若さと美が溢れています。人若き肢体を誇る資格Vは、彼女こそ万人に認められるべきで、その意味で、奇くの手で数多く、かつ広く発表されることは、万人の華であると思います。

いつか奇くのカメラ・ルポでマゾの天使と表現されていたが、サドを渴仰する、天使ともいえるでしょう。しかし、私が最も素晴らしい美しさとしているのは、彼女がカメラを凝視する眼です。誇り高き女の眼です。マゾの姿態を執りながら、本当は、縛る男とカメラマゾンとに奉仕させている眼ではないかと、私は思います。彼女は本質的には、ナルシスト



ではないか、と思います。もっとも、マゾヒストはナルシストでもあるわけですが、彼女には、よりナルシストとしての香りが高いように思います。菊子さん、如何でしょうか。

今迄に発表された深田菊子さん

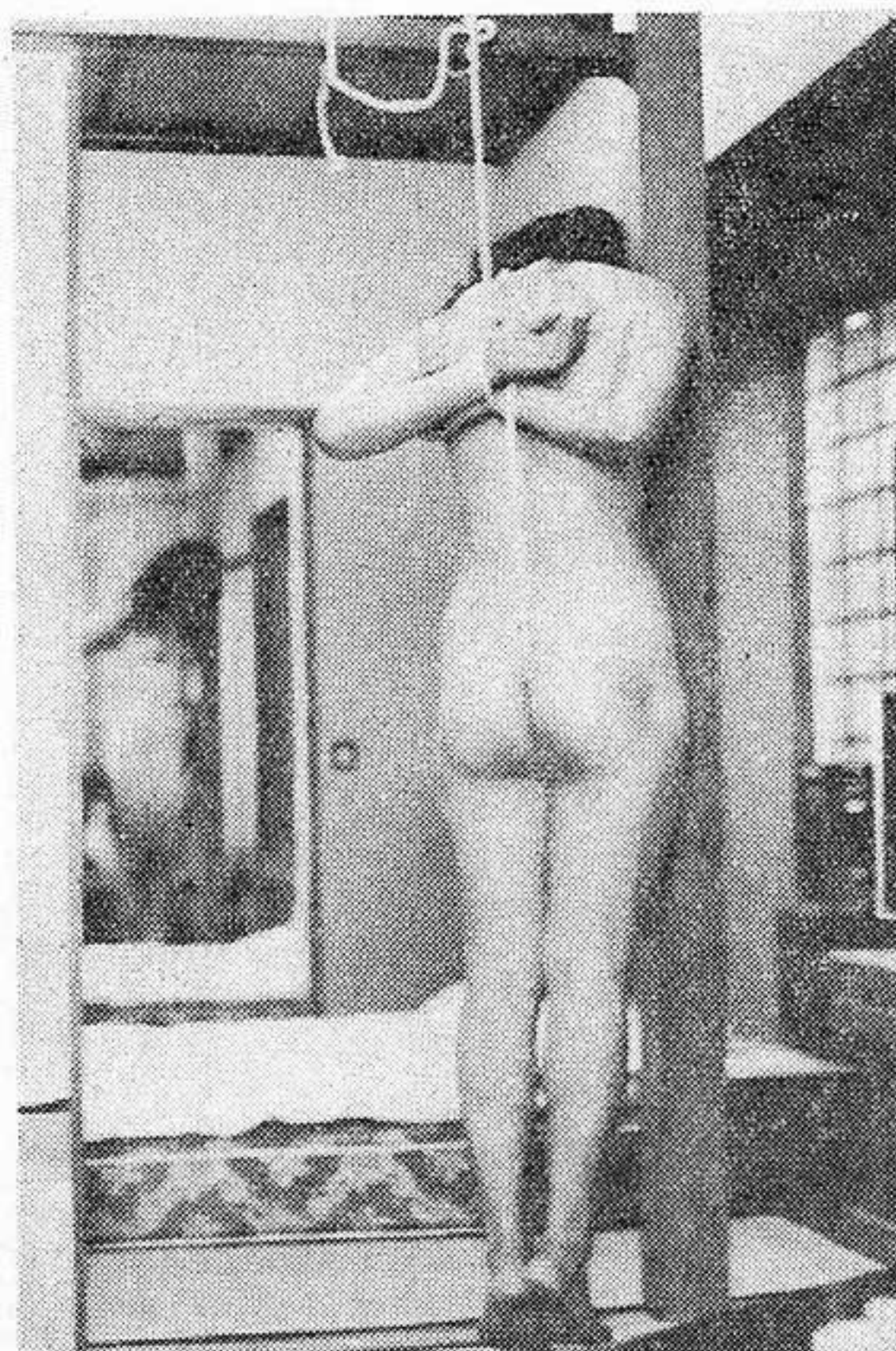


のフォトの中で、最高に衝撃を受けたのは、昨年末の奇巧に掲載された地に伏した後手縛りです。お尻を高くあげているのにかかわらず、美しい脚を真直ぐに揃えて伸ばし、頬を地に押しつけ、こちらを（カメラの方を）凝視したスタイルです。

カメラマンの腕もさすがですがこのスタイルをディレクトした方のセンスには敬服しました。実際に、このスタイルを執るのは、膝をつく、つまり脚を曲げないと苦しいはずです。苦しい姿勢で、最も恥かしいところを、顔と並列させて、しかも醜さを感じさせない魅力。

私は、この深田菊子さんのスタイルに魅せられて、私のモデルに要求してみました。結果は思わしくなく、適当なモデルに恵まれたら、再度挑戦するつもりでいます。失敗の原因は、脚が十分に伸びていないため、お尻が大きく写り過ぎたこと。何よりもモデルの表情、特に眼が、菊子さんのようには、ゆかなかったということです。

現在の私のモデルは、感度が鋭敏過ぎて、このようなスタイルでは、眼がうるんでしまい、カメラを向けると、顔が陶醉して迫力がなくなってしまうからです。モデルの個性によって、テーマとスタ



イルを撰択すべきことを思い知らされました。

このモデルは、陶醉の表情が素晴らしいので、それに適したテーマで習作中です。現在は自ら慰めさせている姿と取組んでいます。

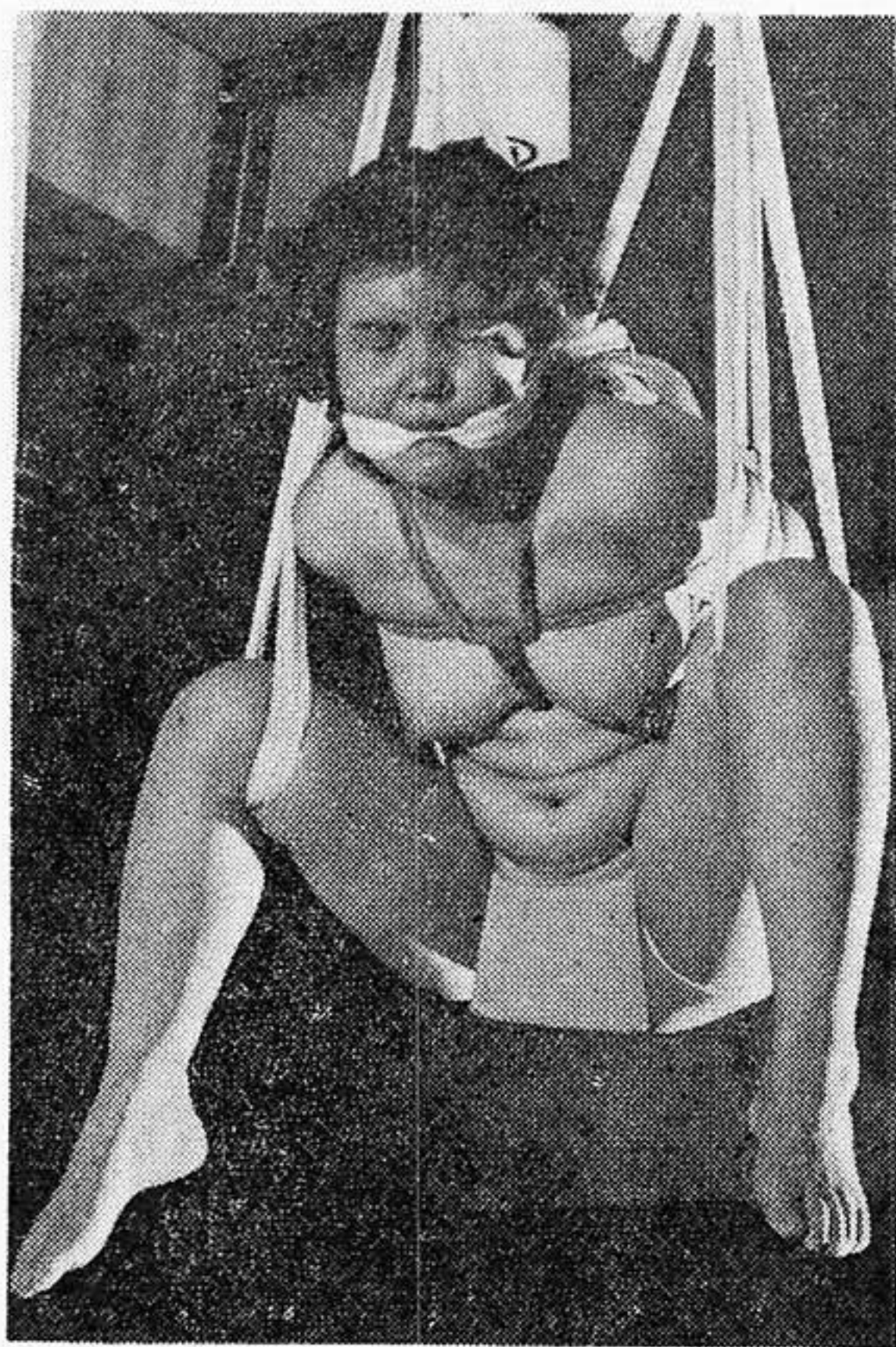
Mのフォトに限らず、すべての人が夫々に誇るに足る魅力を持っていると、私は体験から信じていますが、その表現となると、中々困難です。しかし、それを表現し得たときの喜びは、その人の美しさを固定し得たことになって、言

いようもない満足感の充足です。前田真知子さんは、グリーンセッ

クスを、シンボライズした固い感じ、特に身体を二つに折るスタイルに、それを感じます。秋山夫人は、長い黒髪を脚の間に埋めた艶麗なポーズに、前述の菊子さんのスタイル同様、その人の最高の美しさを見た思いです。

カメラの技術はアマの域を出ませんが、Mフォトについては、幾百の経験があります。貴女のMの状態における美しさを、私に表現させて下さる方を求めます。失敗作、数葉（木の葉を使ったもの）同封します。

（東京・原宿・丈山潔）



木村洋子さんという女

野村文華

木村洋子さんについて考えてみると、つくづく不思議な女性だなあという気がする。石部金吉の私からすると、とても理解できないのである。木村洋子さんを責めている現場を見たら、まず気を失ってしまふに違いない。それほど強烈なマゾを、世には、こういう女もいるもんだなあという感じを抱かせる。

十月号の吊り責めなども迫力満

点。どうピンク女優が恍惚の表情を見せてもおおぶものではない。マゾ特有の苦痛と快感のないまじった表情は、とうてい演技では出れるものではないからだ。吊り責めを、殊更に面白がる趣味など、私は持っているつもりはない。それでなくても、木村洋子さんの写真というのは、興奮的なポーズが多いのである。

奇クには数々のモデルが登場し

ているし、それぞれ読者によっていろいろと好みもあるだろう。木村洋子さんについては、私は、実をいうと、熱烈なファンというものではない。嫌いというのではない。かなわないという気が先行する。とうてい責め切れる女ではないという敗北感を持ってしまっている。

写真を見ていて、その表情が凄絶で、真のマゾを感じさせられる女としては、木村洋子さんのほかに、谷山久美子さんと玉木章子さんがいる。三人とも結婚せずにいるのは、偶然ではないだろうという気がする。

ちなみに、その他のモデルについて一言いわせてもらえば、渡部好美夫人とか三浦純子夫人には、奥底の一点で、人妻としての固さともいうものがある。前田真知子嬢、深田菊子嬢、高村浩子嬢など、独身ではあっても、真の意味の「奴隷生活」を経ている女性、その表情はいまだ未熟であり、その点で、素晴らしい肢体をしていても、なにか物足りないと感じる時がある。

マゾの表情というのは単なる緊縛体験ではなくて、マゾとしての「奴隷生活」を経て形成されるの

ではないかという気がする。緊縛が、SMプレイとしてセックスの前戯的役割のみを、つとめているうちは、いくら緊縛体験があろうともマゾとはいえないのではないかと思う。真性のマゾとなれば、やはり肉体をも精神をも支配する人格でなければならぬという気がする。

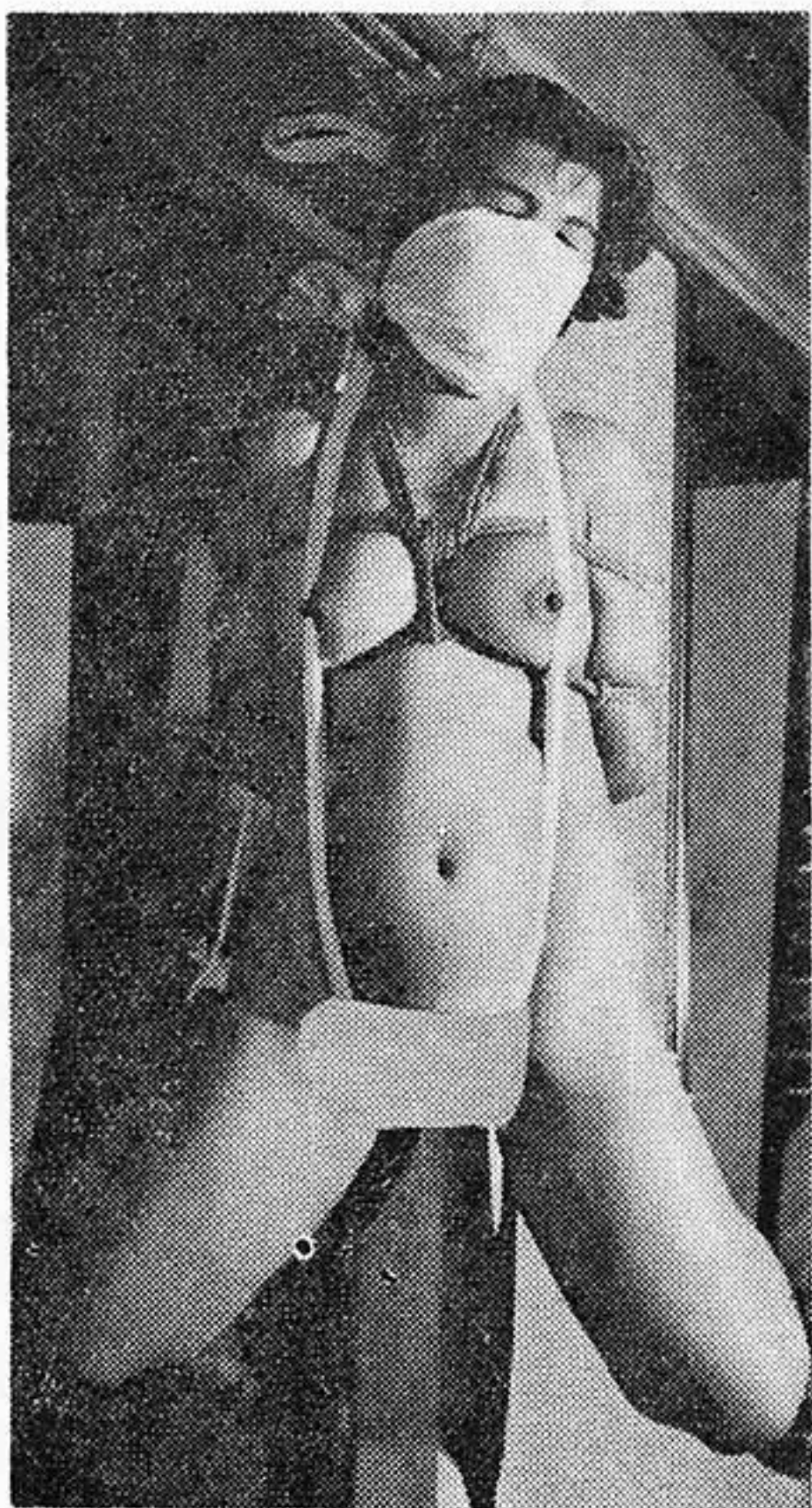
そこで思うことは、マゾとしての生活を全面的に強いられる「奴隷生活」を経なければ、マゾの表情も体得されまいということだ。木村洋子さんは露出狂であると思う。初体験が凌辱であることは以前の告白にあり、そこから露出狂の傾斜が強まったのであろう。初体験が強姦であると、一般的に女性は露出狂的症状を呈するからである。

そういう彼女にしても普段は普通のOLだという。木村洋子さんのマゾの表情を知るものには、そういう人格の亀裂は、理解できない。逆に昼間働いている木村洋子さんだけを知らずして、彼女のマゾとしての妖しい欲望を知ることはないだろう。

しかし考えてみればそれが当たり前であって、二重人格でもなんでもない。われわれが夜のセックス

『SM研究会』の提唱

塚 本 鉄 三



の営みの表情を昼間うかべていないからといって、我々は、べつに自分が異常であると思っっているわけではない。

木村洋子さん、どうしたら、あなたの、その強烈なマゾを、完全に燃えつくせしめることができるのだろうかと思う。

消しても消しても、次々と新しい炎を噴き上げて、ますます燃え広がるような底知れぬマゾ油田を想わせられるあなた。

力限りに踏み潰したイモ虫が、

ことで、本当の意味のSM研究会をやるということは大変、有意義だと思ふのです。これは助手とか補助者という意味ではなく、対等の研究者として、SMプレイに参

一瞬後には数倍の大きさに早変わりしてうごめきまわり、突いても切っても、すり寄ってきて、まといつくような感じ。不死身の反撃力を持つ軟体動物を想わせられる。

男にとっては『マゾ地獄』であろう。責める男の方が疲れてしまいうにちがいない。

責める男が強いのか、責められる女が強いのか『東京ブルース』ではないが、男と女の宿業について考えさせられてしまう、この頃である。

私は今まで、助手の募集に応じ

増えつつあります。

て来られた方々と、努めて文通もし、また実際にSMプレイの場に立ち会って貰って、いろいろとSMについての研究をしてまいりましたが、最近になって、若い女性

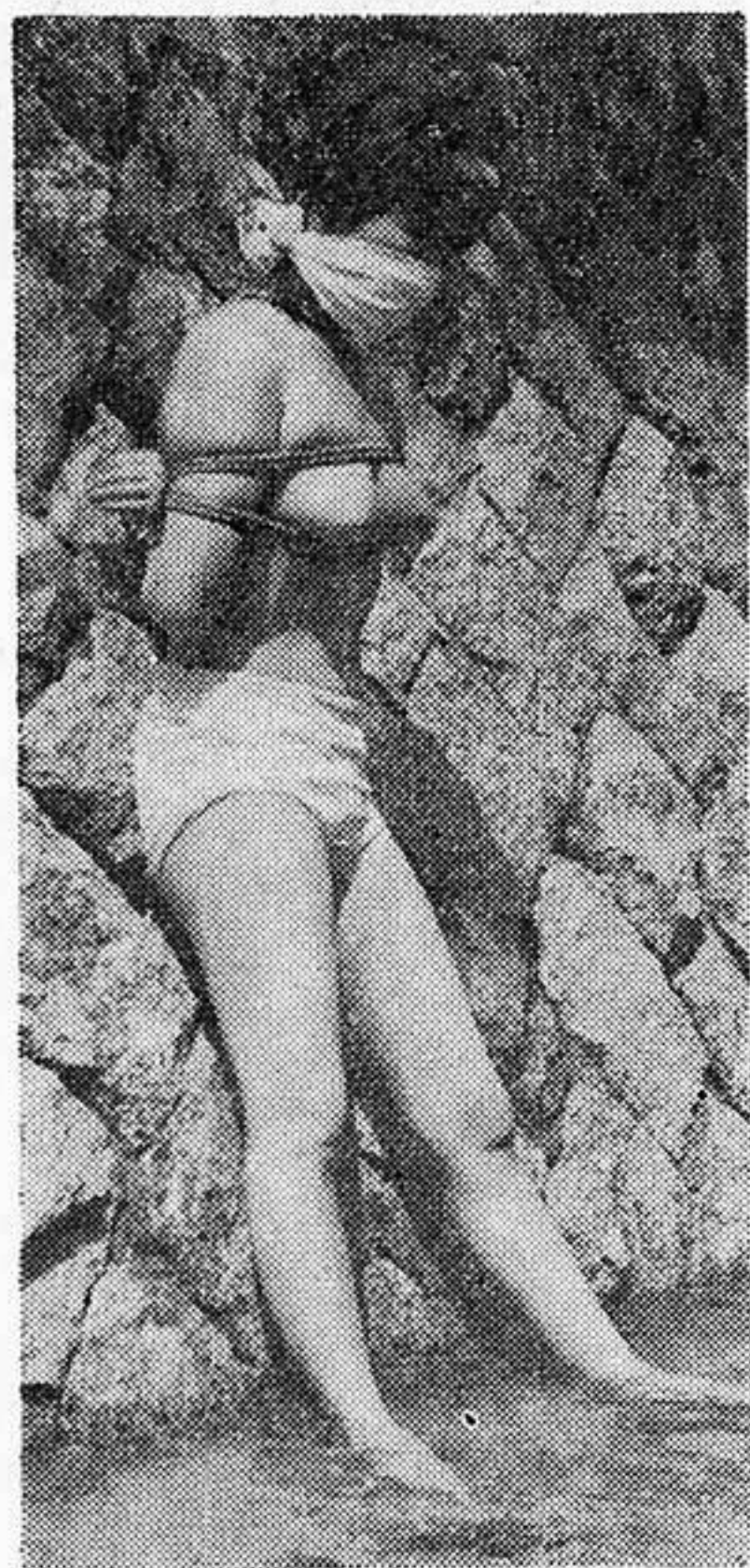
カメラルポの取材ということよりも、やはりSMプレイだけをやるという方が何倍も楽しいのです。

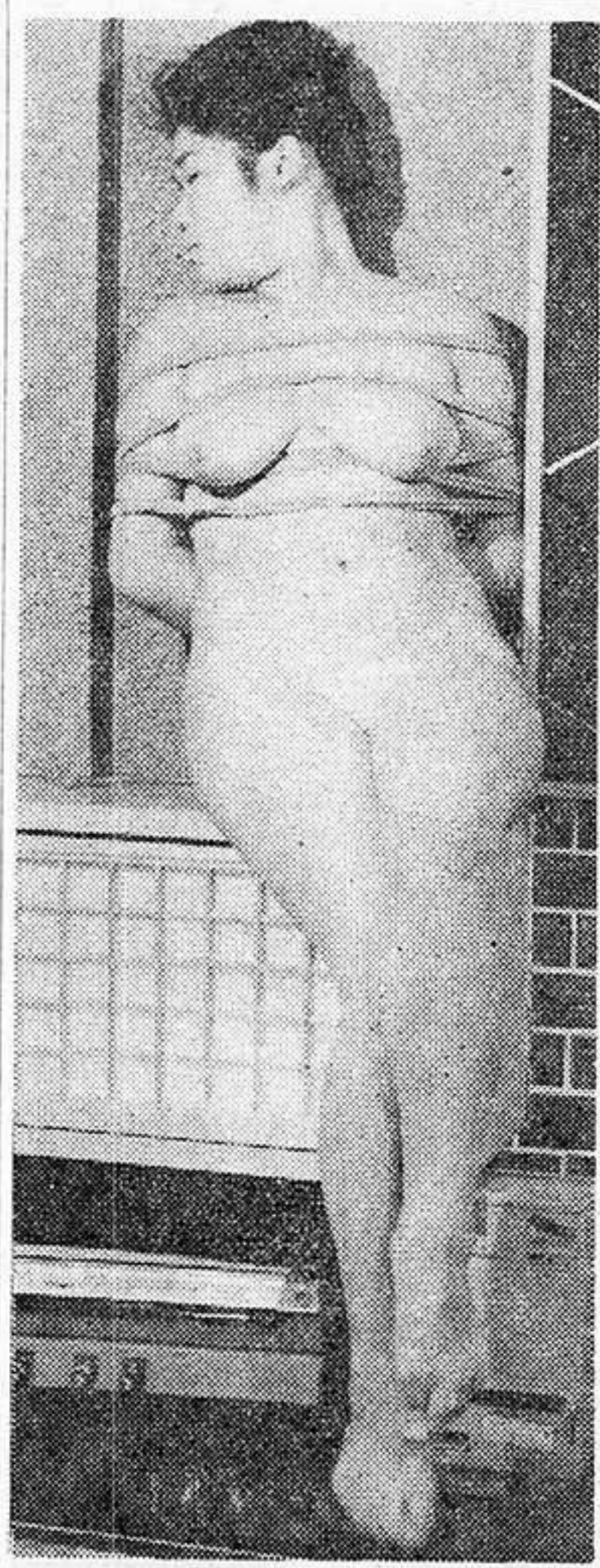
の方でSMプレイの助手をやりたいという人が現われたりして、ますます、この多岐多様にわたるSM研究に

意欲を燃やして同好者が寄り集まって実践したらさぞ面白からうと考えるのです。

SM研究に

関係する。また、SMプレイだけ





自らの中の残酷性を見た海辺

猫のよう な 女

都々美佳礼

ふとした旅心に惹かれるまま、小さな、海のある町に降りた。なんとなく海が見たかった。ただ、それだけである。

終日、眺めていようと思ひ、盛夏には人出も多かっただろう海岸に腰を下ろした。曇り空で、波は内海にもかかわらず高く、飛沫が岩陰に潜んでいる私のコートの肩まで濡らした。私の坐っている岩場から向こうは砂浜が長く続いて、海も砂浜も、真白な防波堤に、そっくり包み込まれている。果てしない風景。

「もう昼なのだ」私は、誰かに問うように独りごちた。

たばこに火を点けた。甘い匂いだ。海の匂いと混じっている。

ここに来る途中から、私は何かを期待し始めていた。

子供の頃、私は猫に対する特異な感情を持っていたのを思い出した。私の家に捨て猫が沢山、棲み着いたことがあった。それを海に捨てに行つたのである。ことは猫たちを海岸に置き去りにして置くだけで足りたのであるが、その時の私は、それだけでは物足りない

だった。

仔猫たちは放物線を描いて落ちてゆく、波の白い、うねりの中を必死で、もがいている。波にもまれ、うまく防波堤の厚い壁にしがみ着く猫。それも、つかの間また波に、たたき落された猫。幾度かの試行錯誤の後、猫たちは壁を、よじ登って来るのである。

私は、それを終始眺めていた。

猫の表情は波間から地上に近づくほど、上に上がってくるにしたがつて、不安から希望へと変わってゆくように思えた。私は残酷であつた。傍にあつた棒杭で彼女たちを、その希望の表情もろとも肉体と一緒に元の地獄へ、たたき落としてしまうのである。

落としては這い上がり、落とし

ものを感じていた。それだけでは、そっけない。私は、猫たちを可愛く思っていた。

偶然、その時間は満潮にかかつていて防波堤の下まで波が来ていた。私は五匹くらいだったろう——猫たちを次々と海中に、投じたの

ては這い上がり、猫の鳴き声は度重なる毎に、うらめしく海鳴りよりも激しくなるのだったが、突き落としている私にとっても快感に似た、ある種の感情が胸の中で少しずつ、脹れてゆくのであつた。随分、永い時間、その行為を続けた。私は快楽の内で失神してしまふほどその行為に酔っていた。やがて五匹の猫のうちの、最後の猫を打ち落とした。打ち落としたというより、猫の持てる抵抗力と較べて、幽かに力を加えたというくらいの仕草で……。それきり、どれも二度とは上がって来なかつた。波間を猫たちは波にすべてをまかせて流されるまま流れ揺れていた。

夕日が水平線に消えかかり、空の半分は、どす黒く、半分は鮮血のように真赤な美しい時刻になつて、私は初めて冷静な自分を取りもどした。

○

幾本めかの煙草に火を点けた。すると防波堤に車が止まる音がして思わず振り向いた。中から出て来たのは、二十歳も半ば過ぎた背の高い、人目を引く雰囲気を持った女性だった。

女性の方からは岩陰の私の姿は

見えないのだろう、私と目と鼻の先のところまで下りて来て、しばらく、ぼんやりと海を見ている様子だった、思い立ったように衣服を脱ぎ始めたのである。海は、すっかり秋だというのに。

衣服を脱ぐと、私に背中を向けて水着を着け始めている。私の、その裸身を見た時の驚きようといったらなかつた。

女性は衣服を身に纏っていた時よりも、はるかに若々しく感じられた。真白な背中である。尻は予想したよりも大きい、形よく均齊がとれていて、そこから伸びている肢は、体操をやったことのある者のように、たくましく、筋肉質で、ひきしまり、ギリシア彫刻のアフロディテー像に生命を吹き込んだようである。

ビキニのパンティを腰まで引き上げる時の、えも言われぬ妖艶なこと。石榴の実の割れる音が森を木霊するように、私の胸は高鳴っていた。

黒い水着が、彼女の、なだらかな起伏を持った体の美しい部分たちを気高く覆っていて、白い膚を浮き立たせている。黒く長い髪。顔は決して弱々しくはなく地中海の女の明るい表情を持っている。

大きな黒い瞳。肉色の、ややまくれ上がった上唇。それをしっかりと支えている下唇。こういうタイプの女性は私のお気に入りだ。気の強そうな丸い鼻。美しい堅い感じの顔。その中で何かに、いつも魅せられているような大きな瞳。

私は彼女に心が、すっかり囚われていた。身動きさえできず、突然の快びに全てを委ねていたが私の心の内には、かつて猫の肢体を美しいと感じていた頃の感情が表出しだしていたに、違いないのだ。

彼女は、ためらいもなく海に入ってしまった。波は彼女を呑み込む程に荒々しく私は少々心配であったが、しかし思ったより、はるかに泳ぎ手は上手く波をかき分けて行った。それと同時に私のサディズムの芽は膨らんでゆき、それが想像の範囲内であるのが少々辛いのであるが、彼女に対する私の加虐性は猫に対するものと質を同じくしていった。

私は舟を出そう。そして彼女の泳いでいる傍まで行き、艀で彼女を押し沈めるのだ。浮いて来たところを、もう一度。腕き苦しんで水面に顔を出したところで、今一度。彼女が、瀕死の状態に陥るまで。

で。

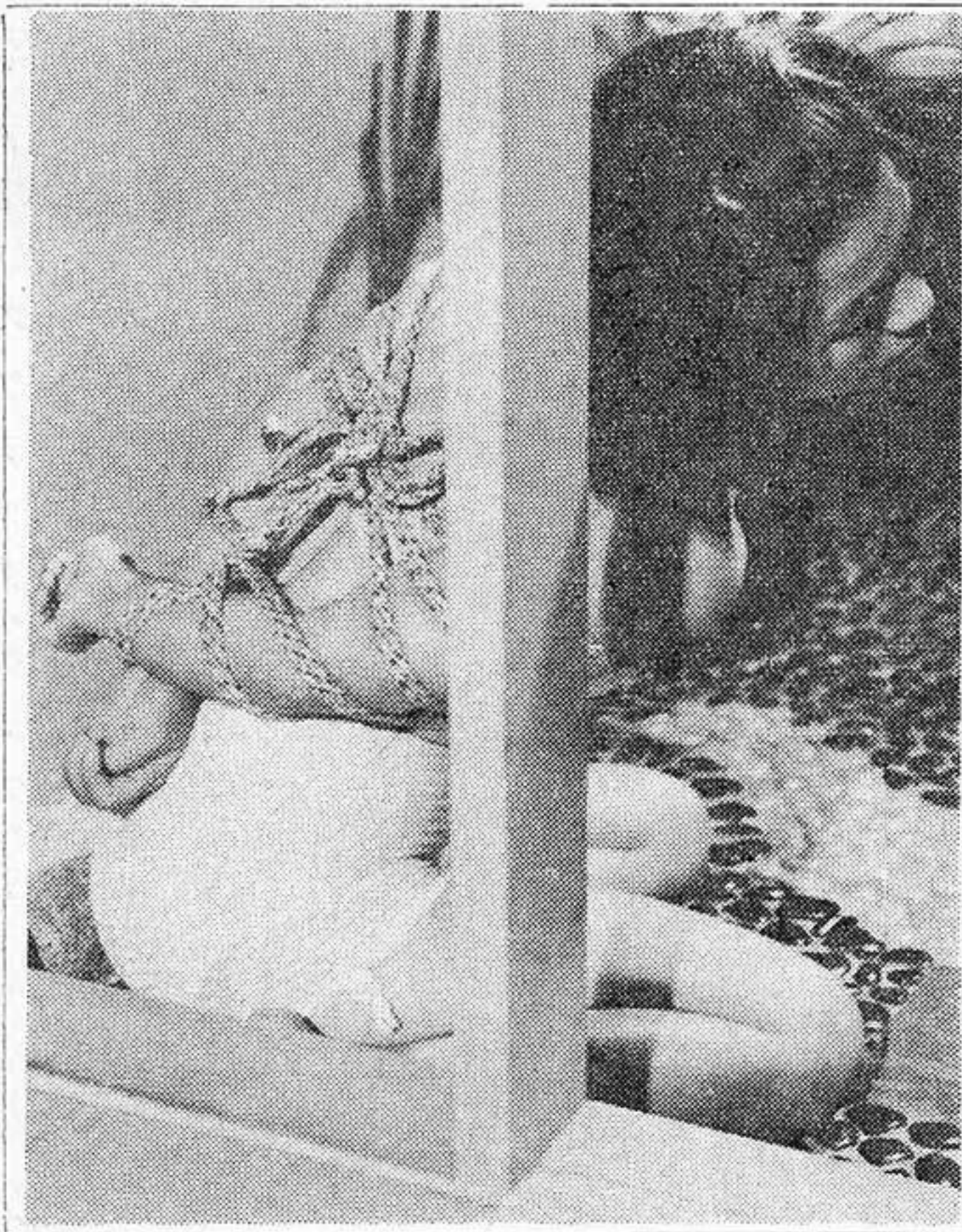
噫、それは私の想像の世界だけでのみ、許されるものなのだろうか。彼女の苦悶する表情を、たとえ、つかの間でもよいから眺められないものだろうか。私は、その瞬間が一生の、どの時間よりも永く感じられるほどに、喰い入るように、執拗に眺めるだろう。彼女の苦悶する顔や、いとおしく狂おしい軀の動きの的一瞬间一瞬間は、

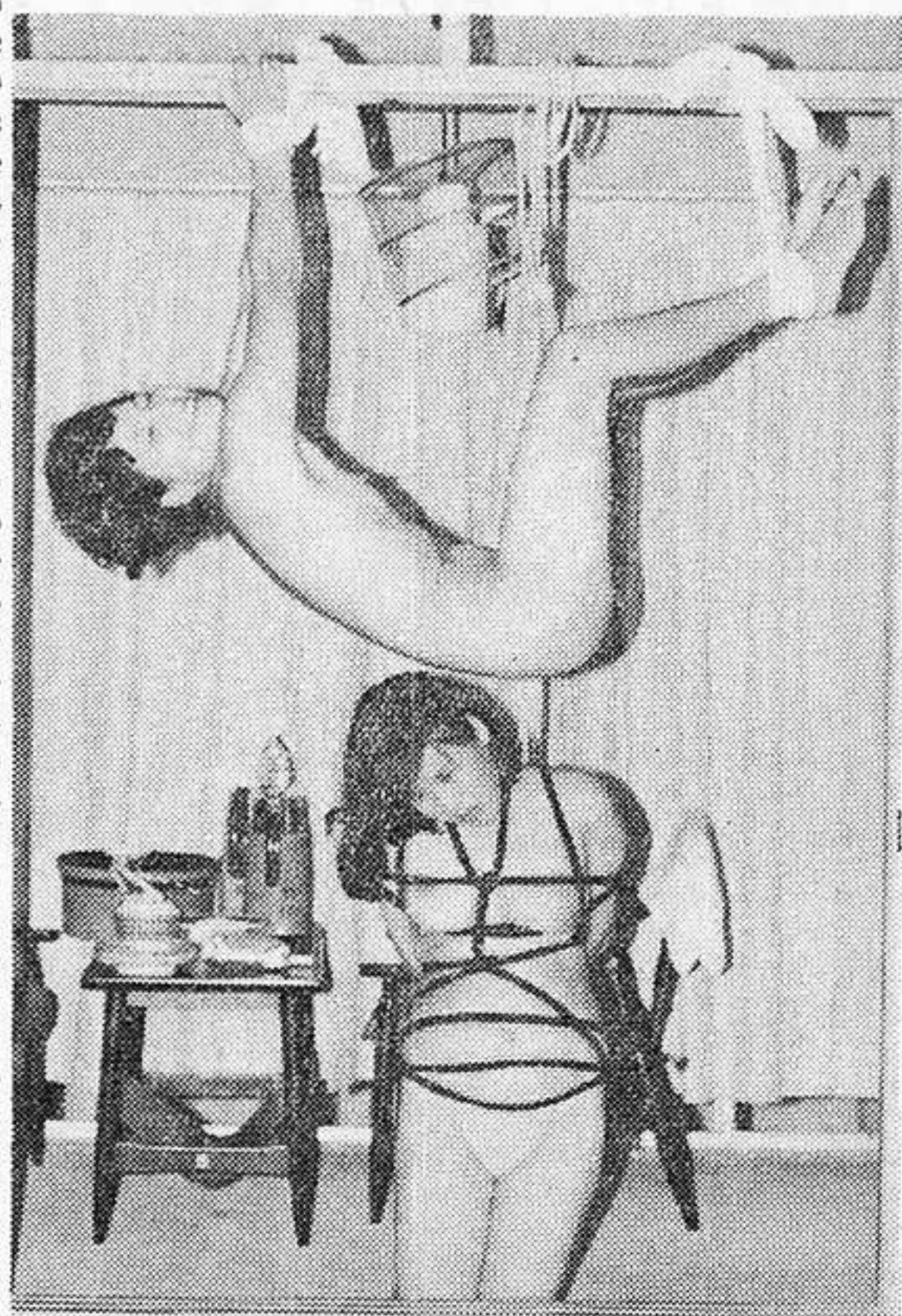
私の脳裡を一杯に満たすだろう。それを現実に移せるなら私の全てを賭けてもよい。

○

しばらくして、私は自分を、とりもどした。いつか昔の猫の事件の時のような真赤な夕暮れであった。女は、もどって来ない。私から生来、離れることのないサディズムの血のように紅い夕暮れ。

(了)





「大噴火」書評

日比谷

栄

奇ク掲載中の「大噴火」こそ、サディズム文学の正道を行く不滅の金字塔になるだろう。スケールの大きさといい、サディズムの何たるかを心得た筆致といい、正しく大河小説。絵図面をどこに隠したとかいう時代物や、縄で縛った縛られたの密室文学とは、わけが違ふ。東洋の地誌・文物に精通され、外国語を駆使される千葉青鬼氏のひととなりは、もとより知る

べくもないが、毎月、一大傑作の断片を手にするたびに、氏のエネルギーを感じると共に、一体どのような人格者なのだろうかと思議に思えてくる。

ところで、ストーリーの補足のような形で、ややこしいことになったが、連載六十回を突破し、毎回、実を添え花を咲かせて「有明帝国」の全貌が次第に明らかにされてきた。二葉のイラストも実に

わがスクラップ・ブック
雑誌記事から数近作

1週刊現代(8・30号)「いまアメリカで評判の本」Ⅱ「BAS IC・SEX」Ⅱ

金氏事件記事のため求めたところ、意外千万、思いがけぬ幸運にぶつかった。『ここに紹介する写真

は、いま米国で爆発的な評判を呼んでいる写真集、ブリジット・リリーズの一冊「セックスの基本」より転載したもの……』と説明してあり、カラー8頁、黒白4頁のグラビアがなんと傑作でユーモラスでエキセントリックで品もよく、楽しい。肥満体男女裸モデルの戯画的表情が傑作。全くうれしくなっちゃって、この号を何冊も買い求めて切り抜いたりした。それにしても、この超肥満体女性モデルは実に魅惑的な体躯と表情の持主というほかない。刀江書店刊「美と魅惑の歴史」―「豊満の美」でもそうだったが、こういうのを見ると、外人女性の肥満体の美しさ(勿論表情も)と、その伝統、

(?)には羨望の念を禁じ得ない。

2「現代の眼」(現代評論社)

という月刊誌9月号の、嵐山光三郎と鈴木いづみの対話「しらけた

ッ!」は、一寸愉快なおしゃべりだが、中でSM談義をしていて、とりわけ我が「奇ク」なんて活字を発見。これはこれは、と少しドキリとして注目すると、

嵐山「……いづみちゃんが今後SMをしていくうえに貴重な文献になるだろう『奇譚クラブ』とか『風俗奇譚』なんて、名雑誌がある。こういうのは、今は、表紙なんかもパーッと明るくなっちゃって、それに、これとよく似た雑誌がいっぱい出てきたから、雑誌そのものの、後ろめたさがなくなっちゃったね……ゼンゼン後ろめたさがない。それはそれでいいけど、昔はそうじゃなかったよ。第一、こういう雑誌はサ、本棚なんかへは入れなくて、押し入れにしまつともんだったよ。それで、親が寝しずつまてから、押し入れから出して、そーっと見るわけ。活字なんか、じつにエロっぽかった。ゾクゾクしてサ。その感じがそれはそれでいいわけね。そういうかんじのシビレかたつてのは、いづみちゃんなんかないわけですよ。こういう時代だから……」

効果的、目をみはらせられるものがある。小妻容子・喜多玲子の絵師に勝るとも劣らぬ表情、特にその目がいきっている。ストーリーとイラストがこれほど意気投合しているのも珍しい。第四回・同六・同三十九は、その結晶というべきか。同四十四も氏の手になるものならば執念を感じるし、同三十五・同五十六も素晴らしい。製図や各種文献考証の能力には敬服するし、全国普及誌とはいえ、発行部数の少ない「奇ク」に全能力を傾倒されるガッツにこれまた敬服脱帽。今や「家畜人ヤプー」に対抗できるSM文学の域に達したといえるだろう。一方、小説だからこれでもよからうが、力学的・生理的に疑問の残るところもある。まあこれは不問に付すことにしよう。

耽美文学で一世を風靡した谷崎潤一郎は一日に何回となくマスタベーションをしていたという。あの射精後の虚脱感の中で文学的遺産を残したのだろう。でなければあのじめじめした構図の中で、あの繊細に文が書けるものではないと思う。今、千葉青鬼氏に類推解釈が許されるならば、常軌を逸した構図の中で毎回手を替え品を替え女体に迫る筆者を思うと、ただ

の人ではない、特別の境遇にあつた人、つまり、「女性との愛に破れ、復讐を誓った人」だろうか。また、「『原因において自由な行為（改正刑法準備草案十六条）』に迄、自らの意思を、鼓舞できる人」だろうか。

さて、回は進んで六十回。ますます佳境に入らんとするの勢いなのだが、これから先、ストーリーはどのように展開していくのだろうか。「起」「承」ときて、そろそろ「転」をむかえるところか。そもそも筋あつての小説だし、ある程度の目安を定めて進めてもらいたい。

かといって、結論を急ぐ必要は全くなくて、現在が拔群だから、さらに幅を広げてもらいたいと思うのみである。あえて希望をいうなら、積極的に麻薬の世界を取扱ってほしいし、禁断の女の園に有明以外の男が登場して事件をひきおこすのもいいのではないか。また、舞台を次第に日本国内に移行してはどうだろう。

最後に、じっくり読めば読むほど、味わいのある「大噴火」に対する評価が、まだ低調なのは意外だが、頃あいをみて是非、単行本として出版してほしいものだ。

とか、

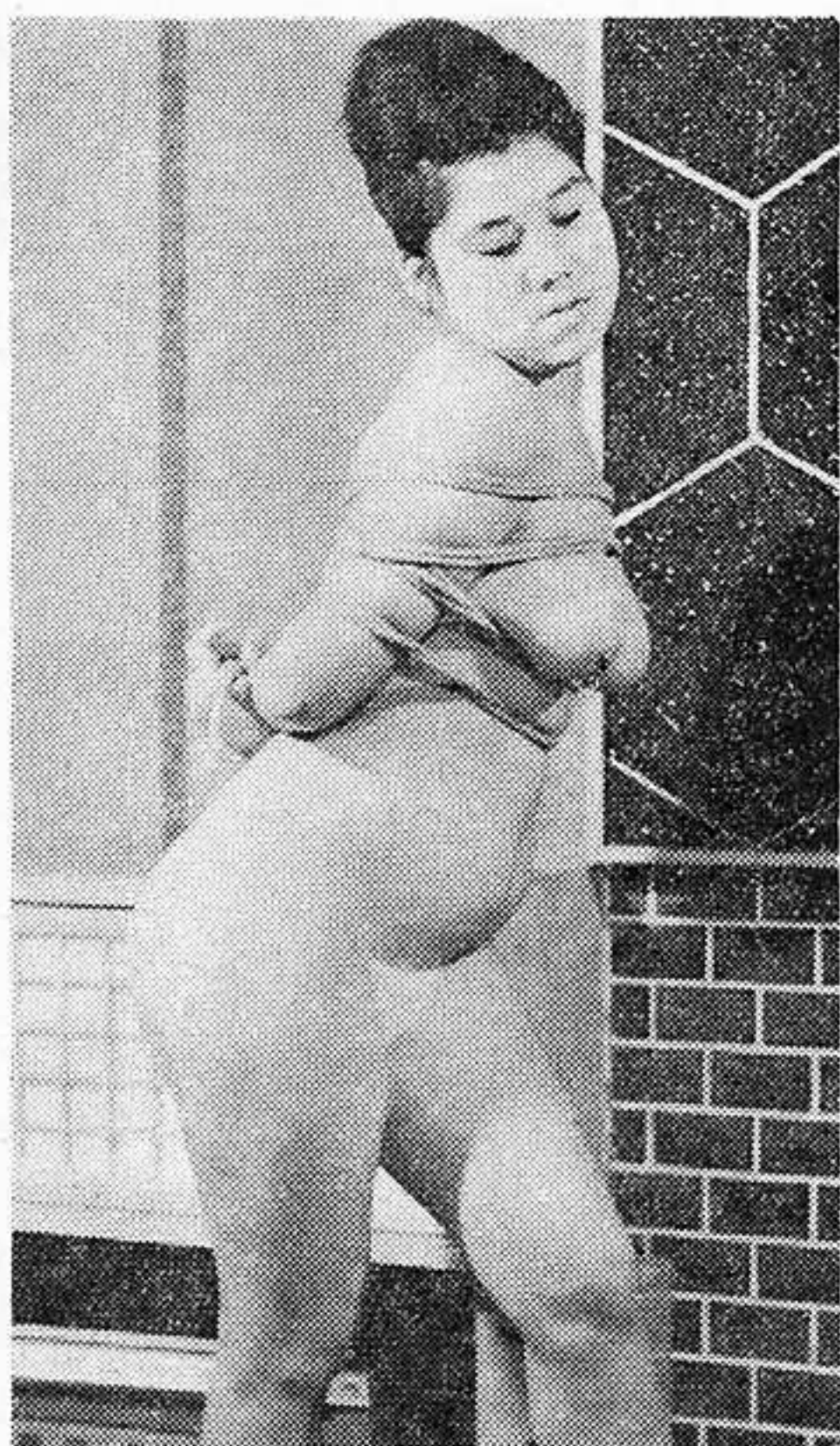
鈴木「……たとえばマゾヒストがいるとサディストになってもいいなと思うし、サディストがいるとマゾヒストになってもいいなと思うし」……とか、

嵐山「嵐山四原則っていうのはサ、縛りに、つるしに、たたきにカンチョウなわけ。（笑）」
鈴木「でも、つるしちゃうたつて、カモイのいないところどうするのよ」

嵐山「滑車、買ってくるってわけよ（笑）。安いものだからカモイにひっかけるわけ。あとはたたきに、カンチョウでしょう」

なんて調子で、これは、反体制

的（？）左翼的雑誌のはずと、いささか奇異で滑稽だったが、Sマニア嵐山氏が楽しいことを言っている。とりわけ「奇ク」などのアブ誌への考察は、まとを射ていてうれしくなったりする。それにしても十五年前、十年前と随分、世の中は変わったものと思わざるを得ない。こうした風潮のなかで「奇ク」が「新しい風俗文献誌」というタイトルでもって、一貫した足どりを続ける苦労など多いことと察せられるし、三百号突破という活字を見て、改めて敬意を覚えすにはいられない。



独身の理由はオムツ

岩 手 信 夫

十年ばかり前に結婚話が持ち上ったのを機会に、少年時代から私につきまとうオムツの魔手を絶ち切ろうと思い立ち、持っていた品々を断乎として捨ててしまった。ところが急に激しい夜尿に見舞われて寝具にも事欠く事態となり、取敢ず病人用のカバーを買い求めて次の日から着用するという破目になった。今日、ゴムカバーやゴムブルマーで包まれる私のオムツと、その内部で行なわれる夜尿はこの時の続きである。

やめようとして夜尿に見舞われた原因は明らかで、幼年期から少年期にかけて、夜尿症でオムツをする子を見て口惜しいまでの羨望を感じていたからである。もし母親がほんの少しでも甘さを持っていたら当時、夜尿症になっただろう。その時ならないうで済んだのは、母のこわさのおかげであった。

今日の私が重症の夜尿児になったのはオムツに気を許したからであるが、この「気を許す」ということは私の生活史のなかで画期的なできごとである。この年になっ

て夜、本気でぐっすり眠ることの快感を知ったが、これも気を許す姿勢のおかげであろう。そのほか健康上の改善も見られるので、オムツに気を許して夜尿症になったことは後悔していない。

私が独身でいたがるのは、結婚によってオムツが奪われるからである。奪われないという約束が仮に成立したとしても、おしめを必要としない女の人に自分のおしめを委ねる気にはなれない。私が期待するのは重症の夜尿で婚期を逸した女の人である。私はその人に夜尿を気にしないよう教えるとともに、オムツの醍醐味を教えて手離せないようにするであろう。そして頃合いを見て実はボクもそうだったのだと告げるであろう。

オムツなしでは寝られないという現象は普通の人には理解できない。いざというときはなくても寝られることを私は体験している。

また、外泊のときは当てても濡れないことがわかっていて、同行者のあるときなど持参したオムツを着ける機会を得なかった場合も平気である。しかし持参しない場合

は危険である計画された不持参にはオムツをやめるという含みが感じられるからである。

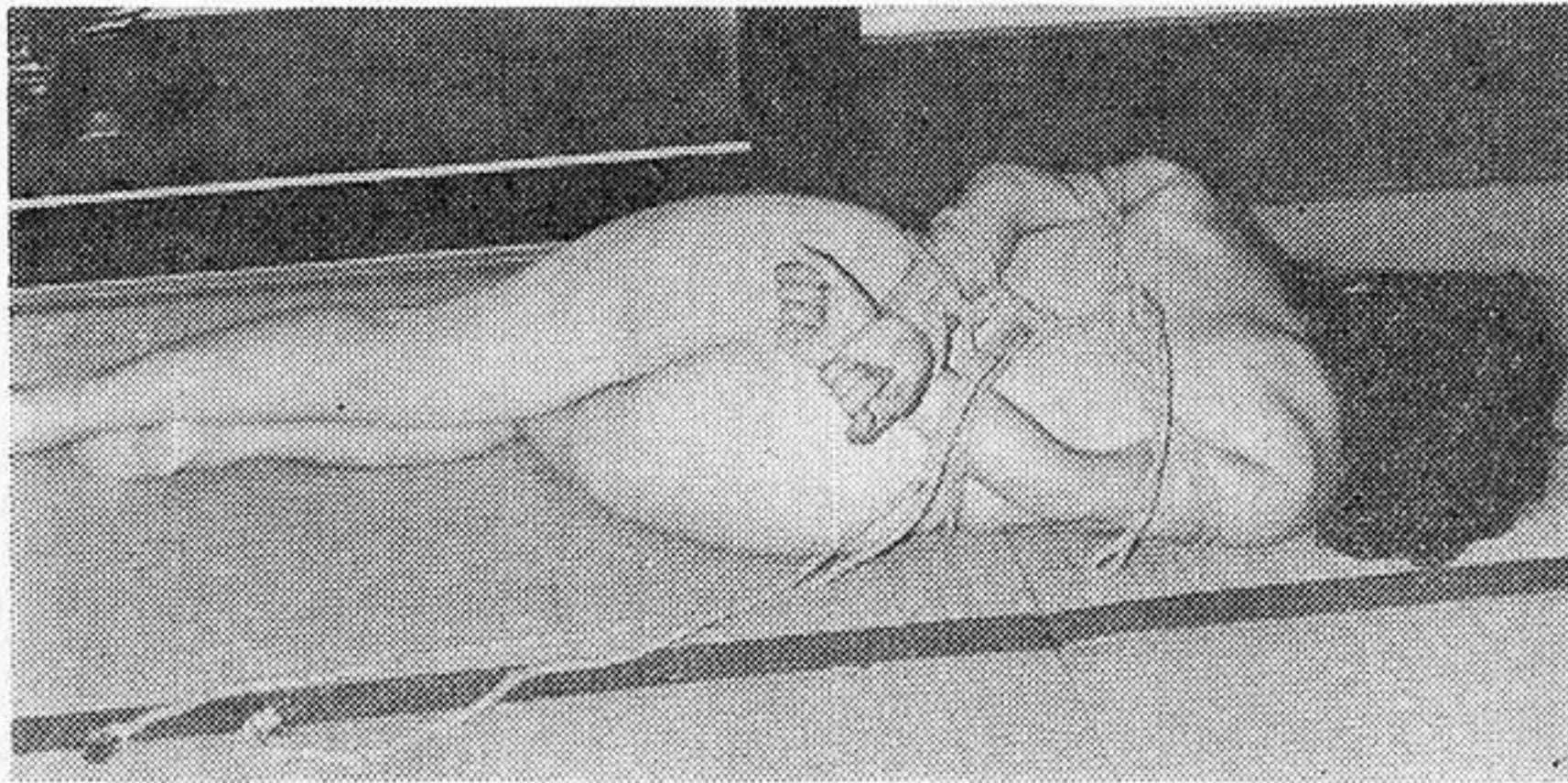
オムツマニアで夜尿症になった人が、普通の人の人にオムツを委ねたときは、やめさせられるという危惧を常に感じる

ので夜尿の自律性が崩れてTPOをわきまえない無差別の夜尿がおこるだろう。竹野ひろ子さんの例（昭和45年5月号筆者）が正にそれに違いない。



私のイメージ『眠ったふりして』 原 由貴子

のときに夜尿するのは困る。もし普通の女の人に委ねていたら私は日頃オムツをやめさせられる危惧を感じて、夜尿症の女を望む。（お心当りのむきは、よろしく）



“宇津木清子”
なんと可愛い、そして清

「アゲラタムの花」の君と共に

秋村恭一

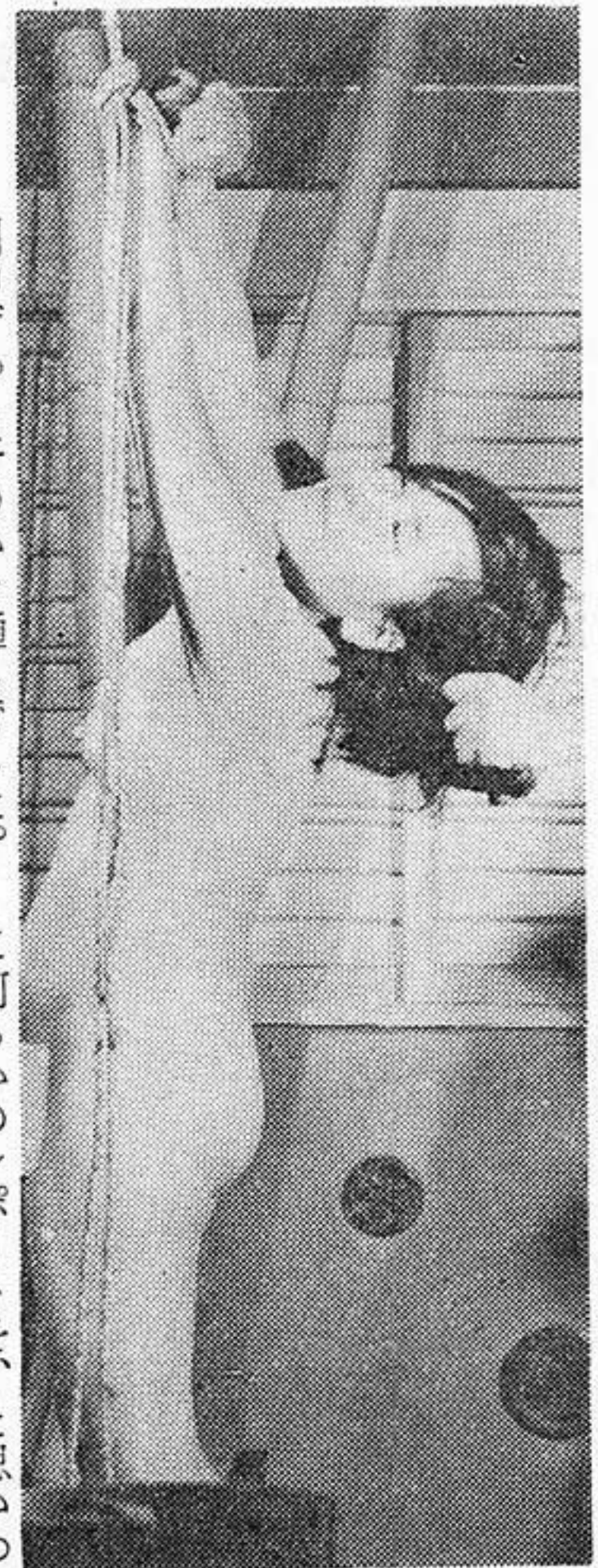
楚な名前でしょうか。

『花を愛する人に悪人はいない』と言いますが、貴女は、本当に天使のように天真爛漫な方でしたね。

編集長にお手紙して、貴女と文通することが出来、そして、花にうずまっている貴女のお店を訪ねたとき、私はこの世の夢かとばかり感激してしまいました。

文通では、あれほど、いろんなことを書き送っていたつもりなのに、いざお会いしてみると、何を話したとか、さっぱり要領を得なかったように思います。

ただただ、あまりにも美しい、予想していたよりも数段と女らしい貴女に、私の目が戸まどっていったのかもしれない。そのためかSMに関しては何一つ喋ることは出来ませんでした。土曜日の午後という一番混雑している喫茶店です。やっと席を見つけて向かい合った二人でしたが、私は貴女と逢っている



間中ずっと汗のかき通しでした。

折角、編集長の好意で、貴女という美しい女性と知り合いになれたのに、なんという不甲斐ない自分なんだろうと、残念でなりません。可憐な女性に羞恥責めを施すことが大好きな私ですが、“宇津木清子”というあまりにも美しい女性にお会いしてしまっただけ、とても、そんなことを考えられなくなりました。

それなのに、今、家に帰って、じっと一人になっていますと、もう心の中は、貴女のこと一杯なのです。M女性に憧れている私なのに、何故、もう少し、いろんなことを話さなかったのだろうと悔んでいます。女の人に接することの少ない、私の、失敗なのでしょう。

編集長の、ご好意に報ゆるため

に何らかのレポートを、と思いつつも、あまりにも内容のなさに自分ながら、あきれ果てています。あのとき、貴女は別れ際に、黙って私に一本の花を、下さいましたね。花に知識のない私はそれが何という名の花なのか、存じませんが、それを押花にして今でも大切に保存しております。

可愛い“花売り娘”としての貴女の姿からは、SMの片鱗さえも窺うことが出来ませんでした。この人が、あの宇津木清子さんなのだろうか、私は一瞬、自分の目を疑ったものでした。大都会の雑踏とエキゾチックな街並。私は貴女と別れてからも、貴女の住む街をなつかしく歩いて、それから車中の人となったのです。

次にお逢い出来る日、私はそれを心待ちにしています。

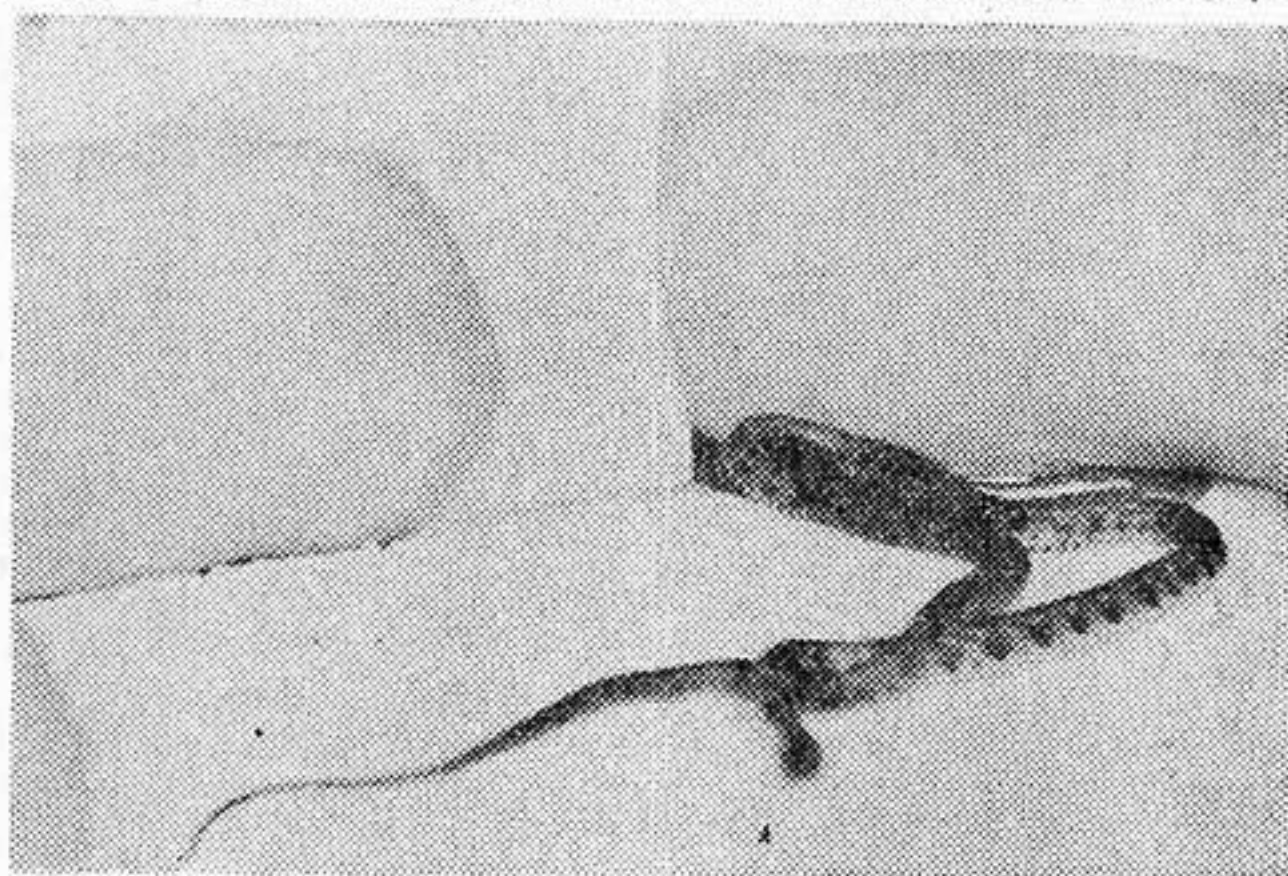
—しあわせの譜—

腋香とひとみと私

南原 赤秋

小学校五年生の夏、プールサイドで友人が、ささやいたっけ。キミは大人のにおいがするネって。私は自分の腋が恥ずかしかった。中学校三年の夏のことだった。クラス一の美人のひとみちゃんがすり寄ってきて言ったっけ。あなただの匂い、だーい好きって。私はビックリした。天地がひっくり返った。とても信じられなかった。だが、からかわれたのではなかった。私は自信が出来た。うれしかった。それから、ランニング一枚でも平気でおれた。高校二年の春だった。私のワキガを好きだと言ってくれたひとみちゃんと歩いていたら、私は、彼女もまた同じような香りを発散させていることを知った。びっくりした。うれしかった。そして、うっとりとなってしまう。大学生になってからだった。ひとみちゃんとホントのデートをしたのは……。

彼女と私は、お互いのワキガに



蛇と棲む私

——永田 嬰子——

私は△蛇△を使うショーダンサーです。御誌のことは、お友達の鈴木千鶴子さんから聞いて知ったのです。

私はここ三年ばかり主に△蛇△を使った踊りでステージに立っています。最初のうちは、目新しい

趣向から考えてやり始めたのですが、今では十数匹の蛇と共に一緒に棲むという生活をしております。

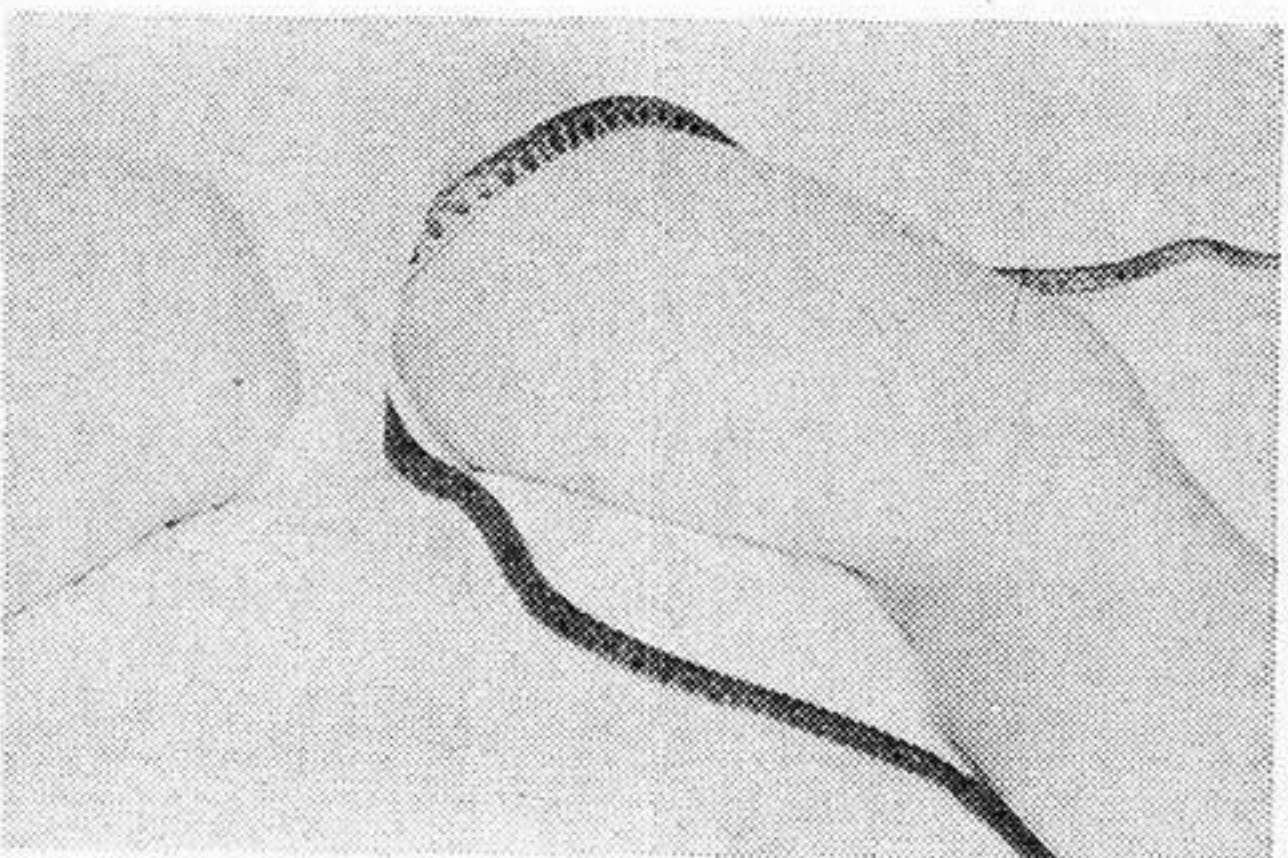
冷血動物だといわれている蛇ですが、私にしては、やはり商売道具の一つですから、大切に取り扱い扱っているうち、いつの間にか、あるいは、私の体臭を聞き分けるようになってしまったのか、すっかり私になついてしまっている、私のペットになってしまいました。

夜なども、素裸になった私のまわりを、何匹もの蛇がニョロニョロと這いまわっています。時には、頭を私の大切なところ

へ潜らせたりします。これは、私が好きなので、どの蛇にもやってやりましたら、本当に私と情を交わしたように、うっとりとなつて心からなついてしまいます。

嘘だと思われるの方がおありと思いますが、ここに同封しました十数枚の写真をごらん下されば、おわかりの通り、実際に、私はこんなことをしているのです。蛇も飼いなからしますと、本当に可愛いものです。

私が外出するときなどは、室外



へ勝手に出ていったら、いけませんで、籠の中へ入れておきますが、私が部屋におりますときは、いつも放し飼いにしております。

あの冷たい蛇の体が私の肌を這いまわるときは、それは、何とも言えない快感です。そして、私の大切なところを伺うときは、何んと言っても最高です。

私のスネークダンスが、これほどまでに迫力に満ち満ちて、観客の方の圧倒的な支持を受けるといいうのも、私の蛇と一緒に棲む日常

酔っぱらった。その酔いが、遂に一夜を共にさせてくれた。

私は夢中だった。彼女のワキガは、柔肌の添加物と共に、私をますます酔わしめた。

彼女も乱れた。白い体が、天使の乱舞のようにうねった。そして喘ぐように告白した。A 感覚に憧れていることを……。カンチヨウに強く惹かれるという……。私

私は走った。彼女の秘密を知ったよろこびに胸ふくらませて。その願望を満たしてやるのが最大の義務と感じて。薬局へだ。浣腸を買いに……。だ。

社会人二年生の秋だった。ひとみは私の妻となった。

二人は酔い痴れている。ワキガの香りと浣腸のある幸福に……。

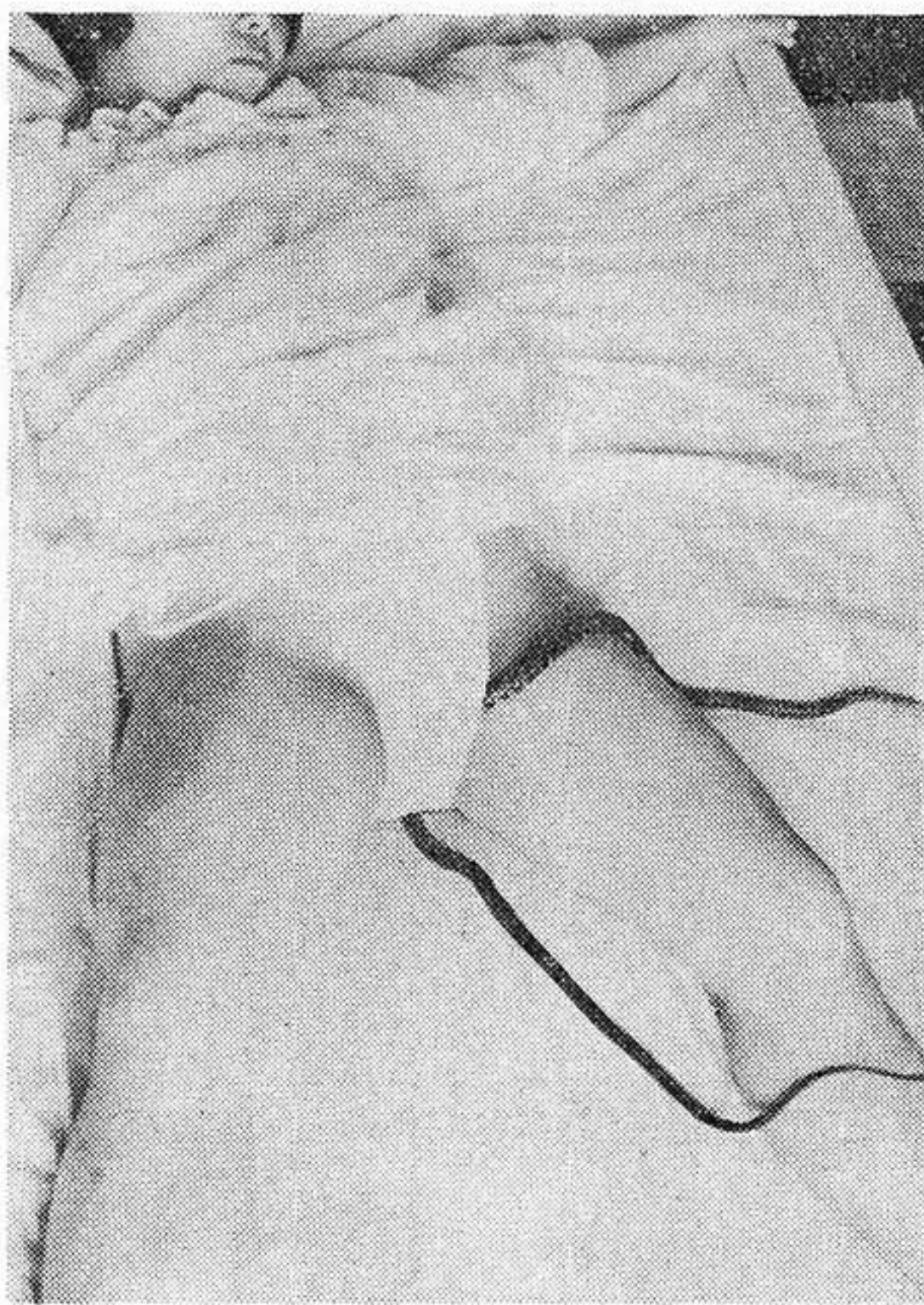
S M 都々逸

須田寛美

小生、SMに大変興味を持つと同時に、二十才という若さに似あわず、都々逸の持つ艶っぽさや、粹な言い回しに相当、惚れこんでいます。そこで「SM 都々逸」なるものを試作してみ

の生活が、影響していると思えます。蛇こそ、今では、私の身体の一

部のようになっていくのです。鈴木千鶴子さんの話では、一度



ました。大変に下手なものです。ひと節、聞いて、いや読んでみてください。

○ 奴隷の身、どうせ涙を流すならうれしナミダを流したい

じらして言わせるその言葉はやくお縄をかけやんせ別れたヒトには未練はないがわすれられないムチの味

どうなとしゃんせと投げ出す胸の

可愛いや乳首のこの慄え

首縄に変わるを承知でシゴキの帯を

締める手つきのいじらしさ

大工だますに四苦八苦

まさか牢屋と言えもせず

子に見られ泥棒ゴッコの言い訳に

ぼくも入れてと家族プレイ

鞭も縛りもやめちゃうぞと

いじめてやりたい奴隷妻

奇クのモデルになつてみては、と言われませんが、私は彼女のように縛りとか浣腸には、少しも興味を持っていません。ただ、蛇にだけ興味を持っています。ですから、とても、モデルになれるような値うちはないと思います。

今、机に向つて、この手紙を書いて私の膝の上では一匹の蛇が気持よさそうに、とぐろを巻いています。四六時中、私のまわりには、少なくとも数匹の蛇が、まといつています。夜の私は、蛇を愛玩し、蛇と情を通じて楽しんでいるのです。

こんな私は、「蛇娘」といってよいでしょう。写真がご入用でしたら、まだアップにした方がいいのがありますから、お送りします。

団地住いで犬飼えぬのに

赤い首輪のショッピング

かんになしてと一粒涙

よけいに燃え出すサド心

やれば泣き出しやらなきや涙

咲いて散りたいマゾ心

いやよいやよも三度となれば

うれし涙のさるぐつわ

うしろ手縛りの身をくねらせて

すねて甘えてねだるムチ

益原俊夫

ワクワクしながら私は迫りました
が、ぐずぐずすると縛り上げられ
るでも思ったのか、妹は案外素
直に耳たぶを任せてくれました。
結果は上々で、極く短時間で、
楽々と完了。苦痛は殆んど感じな
かったらしいのが私にとっては何
足りないような気もしないではあ
りませんが、ともかく予想以上に
ウマクいつてしまったのでした。

あけた孔には純度の高い金製のピアスイヤリング（近頃は、百貨店、宝石店で売っています）を通しておいたのですが、一週間ほどで自由に抜き差し出来るように皮膚が形成されて、妹は一万二千元タスカッタと言って喜んでおりま

タスカッタと言って喜んでおります。私のSM感覚が思わぬお金儲けをした第一号というわけです。

夏目清吉

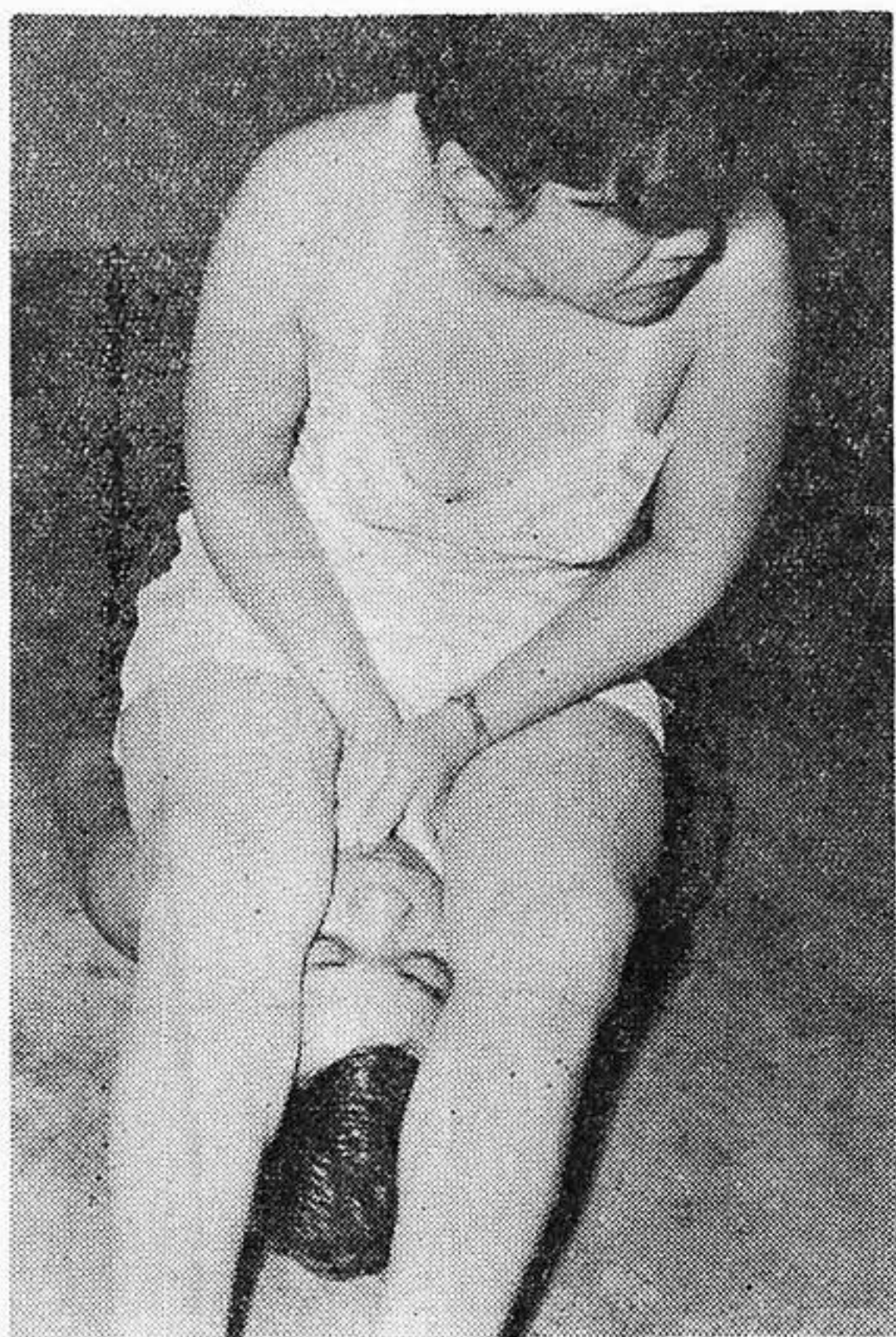
の官能を揺さぶるのです。
時と場合によつて、理性は儚ない抵抗を試みますが、しかし、なんとその微力なことよ。一度、火のついた被虐本能は、ひたすら屈辱を求めて燃えさかります。冷酷に虐待されればされるほど、より一層、女性への思慕の情が高まるのです。小生は、ひれ伏してでも見捨てられないことを懇願せずにはいられません。また、そのため

には、どのような命令にも服従し
どのような汚辱にまみれることも
いけません。

申し上げるまでもなく、それら
が、M男性にとって甘美な最高の
報酬でもあるのです。しかし、現
実の日常生活には、さまざまな制
約があります。脳裡に如何に狂気
の嵐が吹き荒んでいようと、表
面は、あくまで温厚篤実な平常人
を粧っていなければなりません。
その意味においても、奇クの存在
はSM人間にとって、大きな悦び
であり、救いであると思います。
事実、貴女のような、数少ない

S女性に、このような手紙を書け
るのも、奇クの愛読者なればこそ
です。平常、とうてい、明白に出
来ない心の真底を、今、興奮に打
ちふるえながら書き綴っているの
です。

犬の首輪と鎖が、殊のほか、小
生の劣情を煽ります。それは、た
とえ、手足が自由であっても、自
らの意志を消失した者を連想させ
るからです。犬はご主人様の一挙
手一投足はおろか、瞬き一つにも
競々として操られます。人間失格
こそ、マゾヒズムの極致とも言う
べきでしょう。



小生の場合、先ず劣情を感じる
ことによって火がつけられます。
それから順次、被虐体として血を
たぎらせていくわけですが、貴女
の仰有るような精神的虐待に飼
馴らされたら最後、容易に逃れる
ことは出来ません。

そのように考えるのは、小生の
甚だ精神的な人間性にも由来しま
す。しかし、なおかつ、そうされ
ることを望んでいるのです。

順子様！ 貴女は、いつも、冷
淡で尊大であって欲しいと思いま
す。小生は最初、貴女の便りを読
んでから、日毎夜毎、貴女に虐め
られることを夢見ています。しか

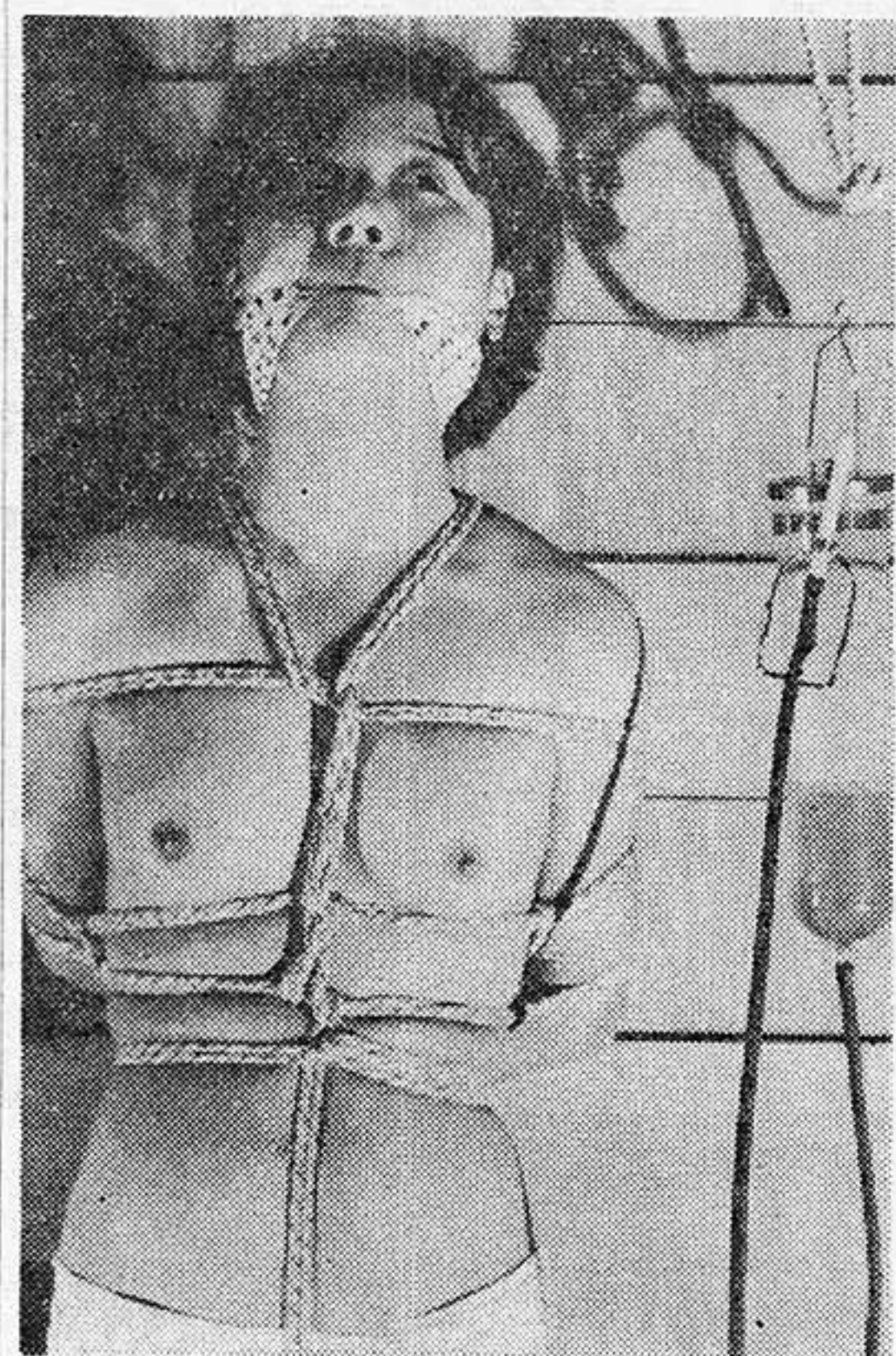


し、現実には叶えられぬ焦燥感、
小生の被虐情欲を、ますます燃え
上らせるのです。お預けを食った
犬さながらです。堪えられなくな
って、お便りを書きました。

自己紹介が後になって申し訳あり
ません。小生三十七才の会社員で
過去に一度、離婚経験あり、現在
独身です。他に家族は誰もなく、
その意味においても、やはり独身
です。

神戸、宝塚等に、よくドライブ
に出かけますが、一度、お逢い出
来たらと思います。また、秋の京
都も一興かと存じます。

(京都市・夏目清吉)



西村真の雑文「帰国記」

西村 真

私の雑文「M女26」玉木章子
を、こうして責めてほしいVを奇
ク4月号に掲載していただいたの
に、お礼の方が、のびのびになっ
てしまい、すみませんでした。

と言うのも、あの手紙をポスト
に入れて、すぐに機上の人となり
一路フランスへと海外出張。フラ
ンスでも、あまり大々的ではあり
ませんが、現地のP氏（私の、よ
き助手であった）のグループが開
いているクラブに招かれました。

このクラブ、週一、二回という
回数でSMプレーをしているとの
こと。まだ日本では、あまり流行
していないようですが、このグル
ープでは（私の会った）すべてと
言ってもよいほどのM女性が、乳首
花びら、鼻等リングをはめさせ
られ、それにつながっているロー
プあるいは鎖は、言うまでもなく
主人の手に握られておりました。
その一人、J嬢は、鼻がちぎれ
んばかりに主人に鎖を引っばられ

て、悲鳴とも呻きともつかぬ声を
はりあげながら、口のまわりは泡
だらけ、鼻孔はと見れば、だらし
なく鼻汁がたれていました。

これがパーティの始まる前の彼
女とは思えぬ変身ぶりでしたが、
他の二、三の女性に会っただけで
このクラブに、どれくらい男性
女性が会員として参加しているか
は、個室にわかれていている部分もあ
ることや、私のフランス語が、あ
まり上手でない（私は英・独
しか解さない）のでP氏は通訳も兼
ねていました）全体のプレーが、
つかめませんでした。

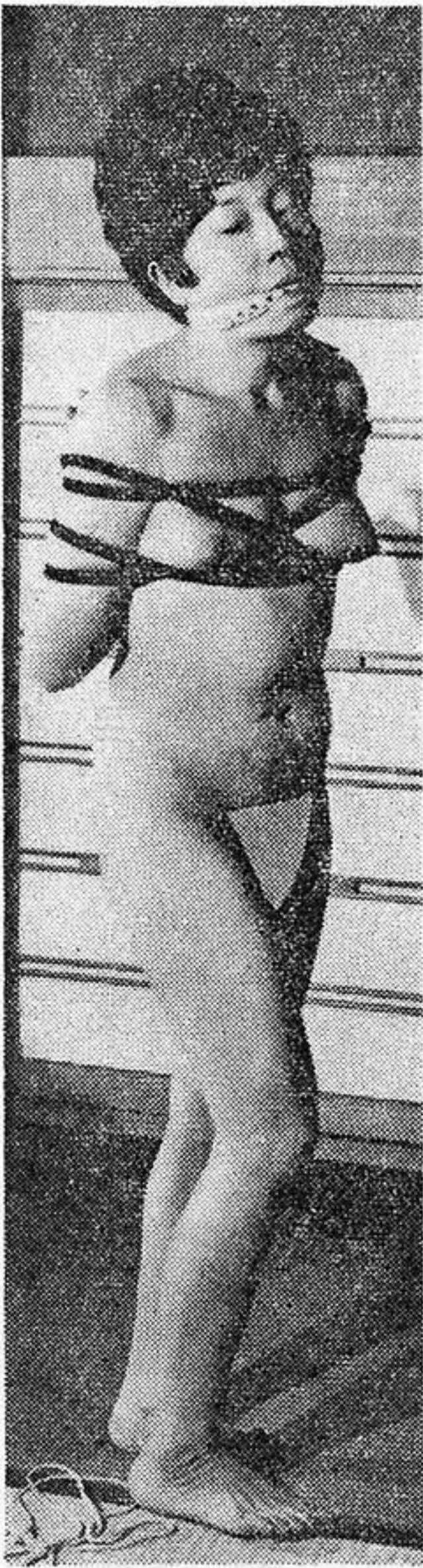
短期の出張だったため妻を一緒
につれてゆくことが出来なかった
のが残念です。P氏も話していま
したが、M女性があこがれる動物
は犬（鎖に首輪）、牛（鼻のリン
グ）豚（人間以下の畜生の世界）
の三種類だそうです。

奇クのモデルのうち、何名かは
毛をそられたり抜かれたりして、
童女同然の方がいますが、こちら
はと言うより、私のこの目で見た
限りにおいては、ただの一人もお
りませんでした。

楽しかった、このグループとの
ウィークエンドのパーティとも別
れをつけ、九月五日、再びなつか

編集部だより

○11月号のこの欄で、ちょっと言
及しておきました苗木陽子さん。
北九州の博多から、わざわざ大阪
まで出向いて来られました。詳細
は塚本鉄三氏のカメラルポ八畜化
願望の女Vとして今月号に発表し
ましたが、彼女はなかなか筆マメ
の女性らしく、すでに三回にわた
って告白の原稿を寄せてきていま
す。目下、その三篇を一つに纏め
て貰うよう依頼していますので次
号あたりには掲載出来そうです。
○本誌の女性愛読者で五年のプレ
イ歴を持つという藤村靖子さんか
ら編集部宛の通信を頂きましたの
で、早速お逢いしましたところ、
淑やかで大人しい性格のなかにも
内に秘めたSMへの情熱が窺える
といったベテランのように見受け
られました。SMプレイに耽溺し
たいがためにモデルを志願して、
自分の虐められていた姿で誌上を
飾ってみようかという希望だそう
です。幸いにしてカメラルポのヒ
ロインとして登場することが出来
ましたら、有志同好者の方々に品
定めして貰って、彼女を責めてや



モデル

<松本たえ>

しの祖国の土を踏んだわけです。

最後に、奇ク10月号で特に目についた写真、よかった写真は、P二八の右下の写真、P二〇八のデパート店員（二葉とも顔が写っていないのが、とても残念）、P二

一の森川美沙のトイレットペーパーを口にくわえているポーズは何とも言えぬ感じであった。P二〇六の三浦純子にほどこした猿轡や森川美沙の写真にあるような首

女は、こうすると美しくなる 前田 実

女は縛ると可憐になり、猿ぐつわをすると断然美しくなる。浣腸された時の、あの恥じらいは、ふるいつきたくなる程いじらしい。

排便を我慢している時の表情は、この世のものと思えぬくらい凄絶なものである。男女二人の間柄で

ロープは今後是非、行ってほしい。排泄の中に後手に縛り上げていないものが多数見られたが、奇クファンの一人として理解できない気持である。せめて、口がさけるほどの猿轡はぜひほしい。

追信――

柴利好氏の「命預けます」は、一応終ったようであるが、柴氏の作品は、やはり奇ク宛もしくは柴氏に直接送られてくる奴隷妻の通

そんなことの出来ない通り一遍の関係では、本当の夫婦とか恋人とか愛人とか言えないだろう。

柳眉を逆立てて怒った女の顔もまことに美しいものである。女の足で踏んだり蹴られたりしたら、その楽しさは忘れられない。経験

信を、その時々の場合に応じた生きたナマの意見がのべられている作品に（私だけかもしれないが）面白く、何か引きつけるものがあるように思われてならない。他の奇クファンの奴隷妻記事についての意見を聞いてみたい気持である。

みんなが愛している奇ク、M女を燃えさせる、奇ク。奇クの今後一層の発展を願い、乱筆ながら、西村真の雑文「帰国記」でした。

者だけの知る永遠の謎といっていだらう。試みに纖手でもって頬を叩かれてみるとよい。

女の美しさは極めて流動性を帯びている。一時も一処に止まることなく、つねに微妙に揺れ動きながら進んでいるものだ。女の美のあるところに男の幸福と生甲斐があるということ肝に銘じよう。

って頂きたいものです。

〇二月号のカメラルポで誌上に姿を見せた玉木章子さん。四月号で「日蔭の女から日向の女に」という告白を書かれたのですが、その

八日蔭の女Vという文句がご主人の藤坂氏の忌避に触れ、しばらく本誌とは遠ざかっていました。秋風と共に再びプレイの味が忘れられず濃厚な羞恥責めを希望してきています。夢よ再び、果して皆様

のお目を楽しませることが出来るかどうか、彼女の悦虐にのたうつ麗姿を、大いに期待しましょう。

〇材料不足というのかSM雑誌の中には本誌にて撮影した緊縛写真を無断にて堂々とグラビア掲載している向きがあります。著作権云々と、固苦しいことは言いたくありませんが、他人の権で相撲をとるようなことはしたくないものです。やはりオリジナリティを尊重してこそ、新時代の雑誌と言えるのではないのでしょうか。

〇山光純氏の「パロディ花と蛇」の原稿、すでに三回分入手していますが、そのまま発表し難い内容なので苦慮しています。何とか描写とか表現を手直しして貰って、何れ誌上を飾りたいと考えていますので何卒ご諒承下さい。

「浣腸とオムツ」プレイ雑感

押 目 好 夫

私が奇クの愛読者になってから約半年になりました。その間、奇クを見るにつけて感じますが、最近の傾向として、いわゆるSMというのでしょうか、縛りとか浣腸プレイ等の記事が盛沢山に掲載されております。

私が読者になってから、まだ日も浅いことですので、本当のSMとは何であるかと言うことの実態は、いまだに掴むことが出来ません。とにかく、奇クを愛読してからの人生と申しましょうか、日常生活においても、今迄とは違った形態が、私に見られるようになったことは事実であります。

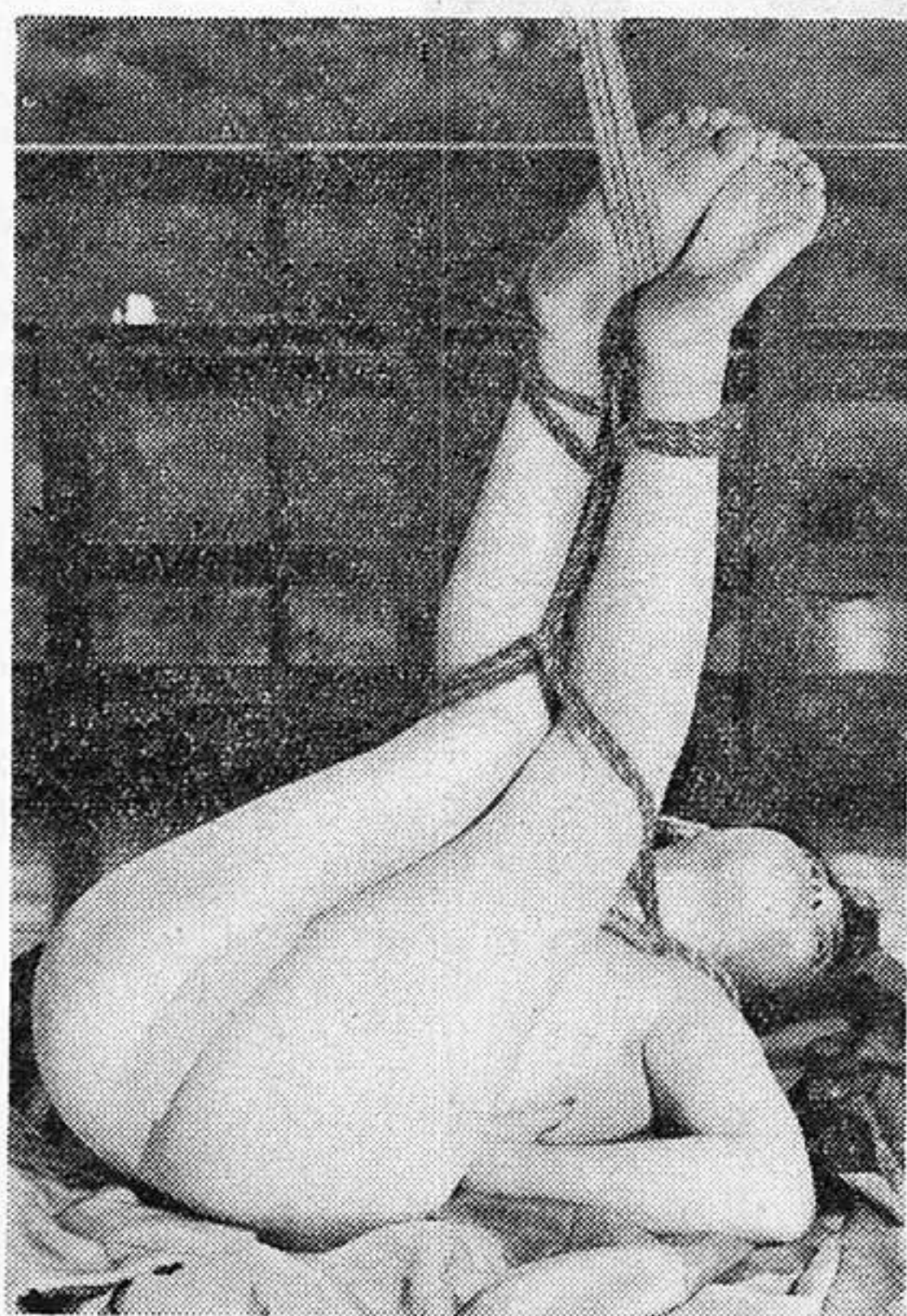
奇クに刺戟された訳ではありませんが、多少の影響の避けられない昨今、毎月の発刊が待ち遠しく思っております。自分の性癖からして、当然そうなり得る可能性がある訳ですが、最近、特に浣腸プレイに興味を覚え始め、秘かに実験を試みてみました。

幼児や少年期の時なら笑っても過ごせますが、飛行中の空からのあの素晴らしい放尿感や、トイレへ行っても戸が開かず漏れてしま

って布団に地図を描くといった、大の男の失態は、最早、笑いごとでは済まされません。

一時は病氣と思ひ、随分と医者にもかかりましたし、また人生相談も受けましたが、私の潜在的意識の頑強さには、現代の医学も通じませんでした。母親の手に抱かれて優しい笑いをたたえ、清潔なオムツを当てて貰った、その時の感激感が未だに忘れることが出来なかったのです。私の腹に灼きついて離れない清潔なオムツの上に排尿する時の快感。それが私に對してオムツに執拗なまでの魅力を感じさせるのです。これは私のような精神的に赤チャンから脱しきれない者にだけ味わうことの出来る特権といってよいでしょう。

こうしたことから私は最近、浣腸プレイなるものを始めました。用いたのはイチジク浣腸で、最初に恐る恐る一本を注入して、二本目を注入しようとした時は、もうすでに、お腹はゴロゴロ、ググツと鳴りはじめ、とても我慢が出来ず、あわててトイレに飛び込んで排泄してしまいました。とてもオ



ムツなんか当てている暇もない忙しさで、そこには、ただ空しさがあっただけでした。

次は充分用意してやろうと、薬局からイチジク浣腸液を五箱購入し、厚目のビニールマットを敷きその上にビニールシートを重ね、さらにオシメカバーとオムツを用意しました。手近にバケツ、液は三本、口を切って手の届くところに置きました。もう、その頃は頭に血が昇り、心臓は早鐘を打ち、汗は全身にビッシヨリかいていました。足もとには鏡台を置いて自

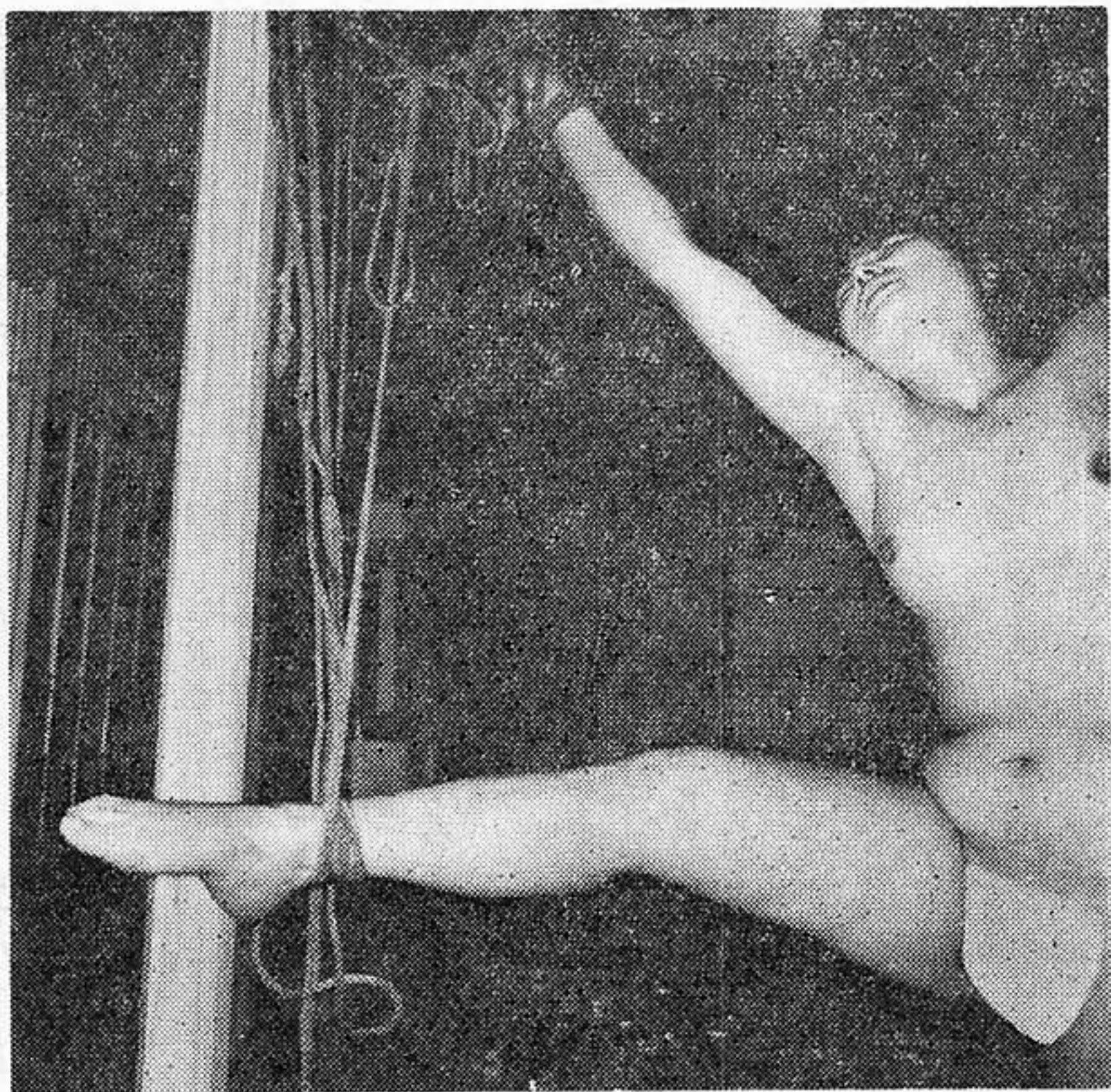
分自身のプレイの姿を写してみようと思ひました。こんな時の気持は他の人には解るでしょうか。

グリセリン軟膏とオロナインを混合して作った油薬を、たっぷり菊花にすり込んで、オムツの上に腰を下して最初の一本を注入しました。すでにキャップをとって、手早く注入出来るよう用意してあったので、次の二本目、続いて三本目と、順調に注入し、オムツを装着しました。そして生ゴムのブルマー、オシメカバーと着け、鏡にうつる自分の姿態を十分脳裏に

刻み込みました。そして自分は今、ムツをして貰っているんだよ、と赤チャンになって、お母さんにオ、自分に言い聞かせて嬰兒の世界へ

惑溺する遊び (プレイ)

瀬沼八郎



と没入してゆきました。一分、二分と経つうち、その苦

SMプレイというものは、本当に面白いものだ。それはサディズムでもなくマゾヒズムでもなく、真に余裕のある遊び(アソビ)であるところに、楽しさと共に休息感がある。

私は同好の女性とSMプレイに熱中している間は、仕事のことも政治のことも、何もかも忘れてレクリエーション出来る。それはゴルフをやったり、釣りをしたり、旅をしている時には感じられない内部から盛り上がってくるような生命の充実感を味わうことが出来る。

縛りとか鞭打ちに熱中していた私も、いつしか奇クの誌友の記事に啓発されて、剃毛とか浣腸を試みて、新しい感激を味わっている。毎月誌面を飾る塚本鉄三氏のハカメラルポは、私にとって、いつも新鮮な責めのアイデアの供給源でもある。

より複雑に、より繊細に、私の責めの手は進歩と向上を続けパートナーの女性を歓喜にむせび泣きさせている昨今である。

しみは断腸の思いで、全身は汗まみれで咽喉は渴き、とても我慢出来ない状態でしたが、ここで排出してしまつてはと歯を喰いしばつてこらえ、苦しさのため、思わず呻き声すら立ててしまいました。もし人に聞かれたらと考え、そばに置いてあったオムツを口に押し込み、さらに四肢に力をこめて耐えました。

やがて一段と激しい苦痛が襲ってきて、もう限界に達しました。普通なれば一気に排出して、その快感もまた味があるとか奇クにも書いてありましたが、私の股間にはオムツ六枚と腰と腿に喰い込む生ゴムのブルマー、オシメカバーと何重にも掩っていますので辛抱出来るだけ辛抱しました。遂に終末がきて、苦しみもまた連続して私を夢中にさせました。畳の上を転げまわり、汚物が腰部を掩う頃は、七転八倒の苦しみでした。

私は心で、「オムツ、オムツ」と叫び続けながら夢の中をさまよひ続けておりました。こんな姿は決して人には見せられない最も恥かしいことだと知りながら、そんな愚かしさが、また私のM性をかきたてるのです。これが私の本性なのでしょう。

菱縄マニアの呟き

静かな縛り

早木夢二

どんな絶世の美女の糸纏わな裸身であっても、緊縛を伴わないものなんて、私にとっては何の値打ちもない。

この頃、若い女優さんがヌード公開などと銘打って、得意気に売らんかなの商魂に便乗しているのを見るが、なぜ縄を纏わないのだろう？ と、とんでもない見当違いな思いで私は見ている。あなたは縄を纏ったら、もっともっと綺麗なんですよと、言ってみようという心境なのである。それで、ついペンで、そのフォートの上をなぞって菱縄を書き加え、股間縄まで施してあげることになる。

昔、ひとり悶々と菱縄に憧れていた時、よくこんなことをして僅かに憂さを晴らしたものだ、曲りなりにも慶子を縛り、存分に菱縄を楽しめる今の心境とは雲泥の差だが、どうやら、一生を菱縄マニアで過ごしてきたワイと、思わず、ひとり微笑を覚える。

「よく出来ました」
そんな悪戯者を慶子はひやかす

のだが、たとえ美女でなくとも、菱縄を纏ってくれる女が一番の私にとって、彼女自身の存在をはっきり裏づけるような誇りを感じているに違いない。

そんな夜、全裸に菱縄股間縛りを受けた慶子が、拷問プレイに入るとき、

「あんな美人でなくて悪いわね」と、ちよっと嫌味っぽく言うのも、時にとっての一興というものである。

「オレにとって美人というのは、こんな女をいうのさ」

私は鏡の中に映っている慶子の全裸菱縄姿をしげしげと眺めながら、両手で抱きこむようにして縄目をなぞる。

そういえば彼女が一番喜ぶことを知っており、彼女もまた、そんな私の気持は十分察して、こんな菱縄縛りの世界にどっぷり浸っている自分自身への言い訳とも考えているようだ。

私たちのささやかな縛りの世界の周囲に、騒がしく吹き荒れていた大風もだいぶ治まったようだ。あまりの暴風に、時々は何か気押されたように縮んでいた私たちの縛りにも、また静かにひとり楽しむ境地が戻ってきた。



週刊ポストのグラビアに「ふんどしが女を飾る時代」とあった。ふんどしの美を追求していた奇クは、今さらのこんな風潮の予言に、どんな顔をしているだろうと思ひ、縄ふんどしと称して股間縄を楽しんできた私たちの世界へ、また、一荒れ来そうな兆しも覚えないうではない気持である。

しかし私にとって、どんなさまざまな色彩や形態のふんどしを飾ろうと、白い縄ふんどし以上の美しさは得られない。今後、どんな風潮になろうとも、この築き上げた私達だけの領分を守り続けて行くこうという思いを新にして、私は慶子の肌を締め上げている菱縄股間縛りの縄目をなぞるのである。

ズロースマニアの夢

欲しいフォト

博多 弘

ズロース・フェチの私は、これまで、買ってきたもの、自分で作ったものなど、いろいろな種類のブルマーを穿いて楽しんできました。木綿、絹、サージ、皮、ビニール、ゴム、ナイロン、レザー、ジャージ、メリヤス等々、各種の材質による肌触りの違い。それにその裾口につけたフリル、レースによる変化などを味わい、色とりどりのズロースやブルマーを穿いた自分の姿を、セルフタイマーを利用してフォトにしたりしてきました。

また、それだけでは物足りず、オシメカバーやメンスバンド、コルセットなどにも手をのびし、さらにはスリップ、スカート、ストッキングなどと組合わせて変化を求めたりもしました。

そのうえ、私のフェチはオシッコやウンチにもひろがり、当然のことでしょうが、スペルマや、女性のメンスにも拡大され、それらで汚されたズロースやブルマー、オシメ、バンドなどに憧れるよう

になったのでした。

もちろん出来る限り、それらのフォトも撮りました。フォトといえるかどうかは凝わしいようなもののばかりですが、それはそれである程度、自分だけの慰めにはなるのです。しかし、私の欲はエスカレートする一方で、いろいろと空想する状態を、奇巧の編集部でフォトにしてみたいものかと熱望するようになっていきます。

その空想というのを少し書いてみますので、どうかフォトにして奇巧に載せるか、譲って下さるかをご一考願えませんでしょうか。

1、毛ズネの男が、白木綿のズロースを穿いて、立ったままでオシッコを洩らしているシーン。できれば、柱に縛られている男の、その状態が望ましい。

2、ホテルのベッドで、若い女性がピンクのズロース姿で、オネショウをしているところ。真白いシートとピンクのズロースは、もちろん、ぐしょぐしょ。

3、運動場でバレーボールをしているうち、一人が転んでオシッコを洩らしたところ。地面に大きくオシッコの跡があり、それを囲りの友達が見ている。

4、組写真で、若い女性が病院

南加津子の……

……妊婦礼讃

菅原 通夫

今年は特に街を行く妊婦の姿が多く目につく。戦後のベビーブームの時の子供が、すでに結婚して妊娠適齢期になっているからだろう。しかし、そうした太鼓腹をかかえて街を歩いている若き女性を見るにつけても、私は南加津子さんの妊婦姿を開陳された勇氣には、ただただ敬

意と賞讃と感謝の念を強く持つのだった。

若き日は二度とないと言われるが、まことに南加津子さんの美しくも気高い崇高なばかりの妊孕美体は、今を措いては得られないと思う。私は愚妻の初産から第三回目の妊娠までカメラにしてきたが、なんと言っても二十代の初産妊婦の姿が初々しく恥じらいを見せて最高であった。南加津子さんの妊婦緊縛は十一月号のルポにて、絶妙の雰囲気だったのを喜ぶ。

じめられている中学生。

7、トルコ風呂で、トルコ嬢からオシメをあててもらっている中年の男の姿。

8、バスガイドが階段の上で説明をしているのを下から見上げたところ。制服のスカートから、花模様のオシメカバーが覗ける。

9、女子高校の休憩室で、運動着姿の女学生が、ブルマーの中に手を入れているところ。

10、男子高校生が、ピンクのサテンで裾飾りも美しいズロースを穿かされて、他の生徒にいじめられていているところ。ズロースは、すでに汚れている。

開股高手小手縛り逆吊り

大手札二枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△つほ▽

高手小手縛り逆さ吊り正面

大手札二枚一組 四〇〇円
木村 洋子 略号△つふ▽

髪を引き廻される豊満美女

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△ほむ▽

縄目に悶える妖艶な肉体

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△ほく▽

股間縛りに喘ぐ刺青女性

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△ほき▽

立縛り髪責めの哀歓

大手札四枚一組 六〇〇円
安井喜久子 略号△おけ▽

片足吊り上げ羞恥責め

大手札四枚一組 六〇〇円
安井喜久子 略号△おて▽

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号△ちつ▽

後手吊りにもかく裸女

大手札三枚一組 五〇〇円
川越美佐子 略号△むた▽

芋虫コロコロ責めの女

大手札四枚一組 六〇〇円
川越美佐子 略号△むせ▽

ムチ打ちの陶醉境に遊ぶ

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△へさ▽

両手吊りで痛めつける肌

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△へし▽

後手縛り竹棒開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△へす▽

股間縛りに苦悶する乙女

大手札五枚一組 七〇〇円
一宮百合子 略号△るり▽

膨満臀部責めの魅力

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△なに▽

ゴムカバーの猿ぐつわ責め

大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△せな▽

遅ましき臀部の無茶責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△せね▽

首枷手枷責めに泣く女

大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△みき▽

豊麗全裸の女体を縛る

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△ゆり▽

両手吊り全裸の晒しもの

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆひ▽

煙草責めに喘ぐホステス

大手札二枚一組 四〇〇円
佐々木真弓 略号△こぬ▽

海老責めに苦悶する女体

大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号△こお▽

禪の前袋をさらす羞恥

大手札五枚一組 七〇〇円
横尾 峯子 略号△ふか▽

強烈縛りに悶悦する裸女

大手札三枚一組 五〇〇円
刑部 典子 略号△けそ▽

強烈エビ責めの美しき女

大手札三枚一組 五〇〇円
松本アサ子 略号△まと▽

緊縛写真に埋れた緊縛裸女

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号△けお▽

柱の前に晒す全裸緊縛麗姿

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

羞恥責め寸前の妖艶姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
愛知 葉子 略号△つお▽

逆さ吊りと足吊り責め

大手札四枚一組 六〇〇円
愛知 葉子 略号△つよ▽

強烈エビ責め地獄

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田美佐子 略号△ねむ▽

羞恥のアクラ縛りで責める

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△えめ▽

海老縛りで悶える全裸

大手札三枚一組 五〇〇円
水本 茂美 略号△えひ▽

菱縄縛りの美と愛の表情

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△その▽

コードで柔肌を喰いちぎる

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△しく▽

狙われた和服の娘襲わる

大手札十二枚一組 一五〇〇円
愛川 悦子 略号△ねい▽

美しき臀部を晒して泣く

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号△つや▽

全裸の刺青女後手強烈縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号△けの▽

羞恥の足挙げ御開帳責め

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△これ▽

柔肌にムチは弾けて喘ぐ女

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△こな▽

ホステスの爛熟した女体責め

大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号△こち▽

悦虐責めの終着駅

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△こた▽

全裸の強制開股責め

大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆみ▽

陽光に映える裸身の縄目

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号△せい▽

菱縄雁字搦目ヤケクソ縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号△せえ▽

瑞々しい裸身に本縄を許す

大手札四枚一組 六〇〇円
左近麻里子 略号△せゆ▽

大の字に磔けムチ打つ

大手札四枚一組 六〇〇円
関谷富佐子 略号△わま▽

淫らな開股羞恥縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△やす▽

妊婦資料を蒐集しておられる方にとつて、それこそ垂涎の出産予定日を旬日に控えた初産婦の生々しいフォトをカラーにて提供する。ことにしました。どうか貴重なコレクションの一端にお加え下さるよう自信を以ておすすめます。

カラ―三枚一組
南加津子
出産を間際に控えた、はちきれ
そうな臨月腹を抱えた妊婦の全裸
を正面から大胆に捉えた写真。

カラ一三枚一組
南加津子 略号△やほ
もうこれ以上大きくならないと
いうところまで膨らんだ妊婦の妊
娠線も鮮かな全裸の肢体を開陳。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
南加津子 略号△やへ▽
出産予定日十日前まで待つて、
特に撮影を果した見事な太鼓腹の
持主のいろいろな姿態を披露す。

カラ一三枚一組
南加津子 略号△やとV
今まさに破裂せんばかりに膨ら
んだ巨腹を、このようにカラ一カ
メラの前に晒す異常な美しさ。

南加津子 略号△やぬ▽

メロン腹ばかりが乳汁の迸る豊
饒な乳房にも縄を掛けて、臨月の
異常美を更に被虐美で熱く彩る。

強烈な縛りに出産直前の妊婦は太鼓腹をゆすって悶えるのに対して更に嗜虐の念がいや増すのだ。

巨腹の中で胎児が盛んに動いて
いる妊婦を厳しく縛れば泣くよう
な呻き声を洩しながら転がる。

全裸にされるだけでも初産婦の身としては恥かしいのに身動きできぬように縛られて検身される。

緊縛によって乳房と腹部とが、
むくむくと盛り上って次に迫りく
る悦虐責めを期待して喘ぐのだ。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△ふろ▽

極度のマゾ君が彼女をして吊り下げられながらも尚も見世物になりたいと動物的に願うのだ。

羞恥の臨月腹開陳

カラー三枚一組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つけ▽
臨月妊婦の美しさと羞かしさと
を余すところなくヌードになって
さらけ出した稀有なチャンス。

カラゝ三枚一組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つむ▽

まんまるく膨らんだ美しい蛙腹を中心にして初めての妊娠に恥かしがる一糸まとわぬ裸身を写す。

カラー三枚一組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つろ▽

今まさに乳汁を洩らしそうな豊かな乳房と便々たる臨月の太鼓腹との見事なコントラストを描く。

カラー三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△ふほ▽

男の手で無茶苦茶に凌辱してほ
しいと願うマゾ女に對しては、こ
のように晒すのが一番効果的だ。
◎お申し込みは前金にて大阪市阿倍
野郵便局私書箱第14号天星社宛へ
略号記入の上御注文下さい。送料
当方負担にて急送申上げます。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つは▽

十か月の便々たる妊娠腹の異色美を適確に奇麗なカラーにて把握した妊婦マニア垂涎のフォト。

カラー三枚組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つへ▽

はち切れそうなた鼓腹の妊婦が、高手小手に縛られた上で思い切った強制開股させられている場面。

カラー三枚組 一〇〇〇円
南加津子 略号△つと▽

脚を高々と頭上に挙げさせられたの羞恥責に臨月の妊婦は大きな乳房をゆすって悶えるのだった。

浣腸責め地獄の妊産婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほな▽

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とか▽

浣腸液注入直後の状況

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とま▽

強制浣腸の各美姿態

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とみ▽

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とめ▽

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とも▽

エネマと縛りの恐怖

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よて▽

エネマ責めの恐怖

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よる▽

浣腸器を弄び愛撫する女

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よる▽

イルリガートルの浣腸責め

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よた▽

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△つゆ▽

身動き出来ぬ浣腸地獄

大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△つえ▽

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号△ひそ▽

強制浣腸責めの序曲

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よか▽

襲いくる浣腸器嘴管の先

大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△より▽

鼻孔の奥を探る魔手

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はむ▽

開孔器にてひらく鼻孔

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はら▽

なぶられる拘束裸身の鼻

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はれ▽

仰臥した緊縛女体の鼻なぶり

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はに▽

美女の鼻をもてあそぶ

大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちる▽

美女の鼻孔を觀賞する

大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちれ▽

開孔器で検査する鼻孔

大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちき▽

鼻孔に煙草挿し込み責め

大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬと▽

可愛い鼻責めのアップ

大手札五枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号△ぬは▽

強烈縛りで顔面翻弄

大手札八枚一組 一二〇〇円
美木乃々子 略号△ぬほ▽

可憐乙女の鼻をいたぶる

大手札四枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽

鼻責めと鼻孔のアップ

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△ねけ▽

鼻責めの陶醉境

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△なは▽

淫虐鼻なぶりの形相

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△ない▽

鼻の穴を責める

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△なく▽

夫婦連縛にて鼻責め

大手札十枚一組 一五〇〇円
増田みゆき 略号△らか▽

鼻責めに悶える女

大手札七枚一組 九〇〇円
木村 洋子 略号△むる▽

顔面を凌辱される女

大手札四枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号△むよ▽

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△うい▽

鼻責めによる悦楽

大手札二枚一組 四〇〇円
東浦・大塚 略号△きな▽

美しき鼻をいたぶる

大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号△ゆは▽

乳房いじめの責め

大手札二枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号△とお▽

豊かな乳房を責める

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△とき▽

逆エビ吊り責め

大手札六枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号△りつ1▽

逆胴吊り責め

大手札六枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号△りつ2▽

大の字逆さ吊り

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△むの▽

豊満乳房しばり責め

大手札三枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号△うは▽

吊り打ち責め

大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△やり▽

腰元の吊り責め

大手札二枚一組 四〇〇円
村井知可子 略号△こり▽

乳房強調膨隆責め

大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号△こわ▽

エネマシリンジ挿入責め

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△えね▽

ワシづかみ責めの乳房

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△えう▽

強烈乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号△てら▽

妊婦資料と妊婦責資料

妊婦のヌードと妊婦の責め写真

膨満双胎の腹部強調縛り

蛙腹に腹帯をする妊婦

柔軟肢体二つ折り緊縛

未婚の妊婦の両手吊り

妊婦の豊かな乳房と腹部

臨月妊婦を革具で責める

全裸正面の縄掛け艶姿

突き出た若妻妊孕美の腹部

羞らしい妊婦媚態をさらす

全裸の見事な臨月腹を鑑賞

柔肌の高手小手縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△わさ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にま△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りむ△大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れる△

麗わしの妊婦責めの魅力

便々たる腹を突き出す妊婦

出産間際の垂れた太鼓腹

後手首を縛られた全裸体

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おひ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほこ△大手札三枚一組 五〇〇円
安原さゆり 略号△りみ△大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れ△

身籠った美しき裸身縛り

双胎臨月腹の威容を誇る

臨月妊婦腹のヌードフォト

飼育された可憐な美少女

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おも△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りて△大手札二枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りく△大手札三枚一組 五〇〇円
小池 美喜 略号△れと△

裸身縛り恵子の妊孕美

見事に垂れた太鼓腹開陳

臨月腹の背面ヌードフォト

猿ぐつわ着用全裸縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おす△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りな△大手札二枚一組 三〇〇円
安原さゆり 略号△りも△大手札五枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号△ぬへ△

初妊娠の裸身を羞らう

臨月の蛙腹のアップ写真

膨隆七カ月妊娠腹を見る

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△おぬ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りに△大手札五枚一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にひ△大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬち△

妊婦全裸の羞恥フォト

仰臥する臨月の蛙腹

妊娠七カ月の妊娠線

可憐な表情の全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やま△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りね△大手札五枚一組 七〇〇円
増田みゆき 略号△にほ△大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆめ△

妊婦全裸縛りフォト

双胎の臨月の剣玉子腹

七カ月の妊娠腹大写真

股間縛りの柔肌いじめ

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△やむ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りふ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にも△大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆも△

妊婦の九カ月腹フォト

堂々と誇示する双生児腹

孕んだ若妻裸身に羞らう

雁字搦目の後手縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にみ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りま△大手札四枚一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬね△大手札四枚一組 六〇〇円
金原奈加子 略号△ゆあ△

妊娠六カ月のヌード

素晴しく巨大な臨月の蛙腹

孕んだ美女の妊婦腹観賞

浴室での全裸刺青さらし

大手札三枚一組 四〇〇円
安原さゆり 略号△にそ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りは△大手札四枚一組 二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬめ△大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号△よな△

双胎妊婦腹全裸の鑑賞

豆絞り猿轡をされた妊婦

羞恥を晒す女体棒縛り

全裸の高手小手童女縛り

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△にえ△大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△りの△カラ一三枚一組 一〇〇円
前田真知子 略号△すそ△大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よの△

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚	八〇〇円
十組十枚	一五〇〇円
二十組二十枚	二八〇〇円
五十組五十枚	五〇〇〇円
百組百枚	八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天屋社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲りします。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さるようお願いします。

☆

- 1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)
2 引回し股間縛り(深田 菊子)
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)
4 M女なればこそ(高村 浩子)
5 柔肌にむぎき縄(深田 菊子)
6 後手足首後吊り(高村 浩子)
7 縄で開股を強要(深田 菊子)
8 臀部と後手縛り(前田真知子)
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

- 10 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)
11 屋上のいたぶり(前田真知子)
12 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)
13 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)
14 首縄に泣く屋上(前田真知子)
15 美女両脚柱縛り(深田 菊子)
16 豊満な尻部責め(深田 菊子)
17 惨美貌の羞らい(深田 菊子)
18 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)
19 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)
20 美へ与える汚辱(前田真知子)
21 縦縄に呻く女体(深田 菊子)
22 白き裸身の縄目(笠井奈保子)
23 両足吊浣腸姿態(鈴木千鶴子)
24 閨での羞恥責め(深田 菊子)
25 正座しての懇願(前田真知子)
26 仕置と折檻の果(高村 浩子)
27 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)
28 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)
29 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)
30 総てをさらして(前田真知子)
31 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)
32 全身に喰込む縄(高村 浩子)
33 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)
34 もっと股を開け(笠井奈保子)
35 転がされた女体(笠井奈保子)
36 形よきお脐悦情(深田 菊子)

- 37 そんなのはイヤ(前田真知子)
38 喰込む股間縛り(高村 浩子)
39 菱縄正面髪掘み(鈴木千鶴子)
40 両足吊り逆エビ(高村 浩子)
41 縄束の中の折檻(深田 菊子)
42 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)
43 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)
44 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)
45 階段に呻く女体(深田 菊子)
46 後手縛りの模範(深田 菊子)
47 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)
48 階段で逆立縛り(深田 菊子)
49 責めに反る指(前田真知子)
50 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)
51 プロポーズ(鈴木千鶴子)
52 羞恥を晒す女体(深田 菊子)
53 海老責二つ折り(高村 浩子)
54 正面開股菱縄縛(深田 菊子)
55 白肌に喰入る縄(前田真知子)
56 尻立てアヌス責(深田 菊子)
57 竹と棒責め地獄(前田真知子)
58 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)
59 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)
60 羞恥股裂き責め(前田真知子)
61 高々棒吊り両足(深田 菊子)
62 正面片足引上げ(前田真知子)
63 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)
64 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)
65 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)
66 逆片足エビ責め(前田真知子)
67 嚴重な後手縛り(笠井奈保子)
68 反り返った女体(鈴木千鶴子)

- 69 縛りに放心状態(笠井奈保子)
70 美を汚辱する時(前田真知子)
71 片足吊りの正面(深田 菊子)
72 乳房強調の縛り(深田 菊子)
73 片足吊りの序曲(笠井奈保子)
74 縄で攻める開股(深田 菊子)
75 縄痕むごし柔肌(前田真知子)
76 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)
77 開股を攻める縄(高村 浩子)
78 放置された縛体(笠井奈保子)
79 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)
80 足挙げ開股責め(深田 菊子)
81 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)
82 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)
83 責められた悦楽(鈴木千鶴子)
84 屋上の引き回し(前田真知子)
85 写真マニアの顔(笠井奈保子)
86 臀部突出足縛り(深田 菊子)
87 気懶るき責の宴(鈴木千鶴子)
88 さあ立たないか(前田真知子)
89 棒縛り開脚責め(深田 菊子)
90 人身御供の裸身(笠井奈保子)
91 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)
92 痛いから許して(前田真知子)
93 乳房責と股間縛(高村 浩子)
94 諦観の晒しもの(笠井奈保子)
95 階段で開く両脚(深田 菊子)
96 強制された開股(笠井奈保子)
97 顔を向けないか(前田真知子)
98 大の字開股責め(深田 菊子)
99 美しき縛り表情(深田 菊子)
100 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)

血紅女体切腹絶命ポーズ 大手札四枚一組 略号八せん 梨花悠紀子 略号八せん 女体切腹シリーズ 大手札12枚一組 一八〇〇円 大塚 啓子 略号八せい12 血紅切腹祭壇に果てる女体 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八せぬ 首桶に落ちる女の首 大手札三枚一組 五〇〇円 水野加代子 略号八せへ 愛妻の切腹を介添えする 大手札三枚一組 五〇〇円 水野加代子 略号八せほ 切腹する女体を介錯する 大手札三枚一組 五〇〇円 水野加代子 略号八せは 血紅使用介添え切腹 大手札五枚一組 八〇〇円 大塚・東浦 略号八きつ 介添え切腹の女 大手札四枚一組 六〇〇円 甘木 春子 略号八あか 自刃した血まみれ屍体 大手札10枚一組 一五〇〇円 山原 清子 略号八えし 自らの腹を切り裂く女 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八やい 自ら柔肌を切り裂く場面 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八やえ 自らの下腹に突き刺す刃 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八やお	血紅女体切腹苦悶悦楽表情 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号八くえ 哀婉美女の血紅切腹 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号八るな 絞首刑に果てる女体 大手札二枚一組 四〇〇円 新宮夫人 略号八るく 引回しと晒の処刑 大手札二枚一組 四〇〇円 新宮夫人 略号八るに 血紅使用血まみれ切腹 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号八わい 殿中の自決女体切腹 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八わこ 切腹美態から絶命ポーズへ 大手札五枚一組 七〇〇円 大塚 啓子 略号八わは 女体自刃の美態 大手札三枚一組 五〇〇円 細川アヤ子 略号八ねに 女体切腹媚態 大手札二枚一組 四〇〇円 細川アヤ子 略号八ねは 肉体美少女全裸切腹 大手札五枚一組 七〇〇円 長野 良子 略号八なせ 禪裸女血斗凄惨場面 大手札五枚一組 七〇〇円 絹川・大塚 略号八らは 和洋争斗場面展開 大手札六枚一組 八〇〇円 田中・愛川 略号八らり	血紅使用斬られる美女 大手札七枚一組 一〇〇〇円 絹川 文代 略号八らふ 鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 四〇〇円 愛川・田中 略号八らく 咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 四〇〇円 愛川・田中 略号八らみ 斬首の瞬間 大手札三枚一組 五〇〇円 新宮夫人 略号八のき 晒台の女の生首 大手札三枚一組 五〇〇円 新宮夫人 略号八のく 全裸正面切腹姿態 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八のみ 切腹に悶える悦虐裸身 大手札三枚一組 五〇〇円 大塚 啓子 略号八のそ 切腹した裸女の屍体 大手札12枚一組 二〇〇〇円 大塚 啓子 略号八のい 美しき裸女の屍体 大手札12枚一組 二〇〇〇円 大塚 啓子 略号八のり 屠腹される女体 大手札12枚一組 二〇〇〇円 大塚 啓子 略号八のる 立腹切腹に悶える女体 大手札10枚一組 一八〇〇円 大塚 啓子 略号八のさ 切腹に苦悶する裸女 大手札10枚一組 一八〇〇円 大塚 啓子 略号八のむ	絞首された女体 大手札六枚一組 一二〇〇円 大塚 啓子 略号八のひ 斬首処刑場面 大手札二枚一組 四〇〇円 新宮夫人 略号八くし 絞首刑にされる女 大手札三枚一組 五〇〇円 新宮夫人 略号八こけ 血まみれ血斗場面 大手札12枚一組 二〇〇〇円 山原清子外 略号八えみ ゴムフェチの美体 大手札四枚一組 六〇〇円 梨花悠紀子 略号八こま ゴム包みの束縛女体 大手札四枚一組 六〇〇円 東浦ひかる 略号八こは メンスバンド只今着用 大手札三枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号八もか 白禪刺青女体脇差切腹 大手札10枚一組 一八〇〇円 山原 清子 略号八ひに 白禪刺青女体短刀切腹 大手札10枚一組 一八〇〇円 山原 清子 略号八ひぬ ゴム衣着用緊縛 大手札三枚一組 五〇〇円 水本 茂美 略号八みす メンスバンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 五〇〇円 遠藤百合子 略号八ゆお 月経帯を着けた緊縛 大手札三枚一組 五〇〇円 遠藤百合子 略号八ゆす
---	--	---	---

両足首括り逆さ吊り 大手札五枚一組 略号八〇〇円 梨花悠紀子 略号八〇〇円 手 足 逆さ宙吊り 大手札五枚一組 略号八〇〇円 梨花悠紀子 略号八〇〇円 逆さ吊りの女体を析檻 大手札五枚一組 略号八〇〇円 梨花悠紀子 略号八〇〇円 メンスバンド着用替ゴム見せ 大手札五枚一組 略号七〇〇円 東浦ひかる 略号八〇〇円 股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 股を開いた黒フンドシ姿 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 開股逆さ吊り姿 大手札三枚一組 略号五〇〇円 左近麻里子 略号五〇〇円 禪美・表と裏の二態 大手札二枚一組 略号四〇〇円 左近麻里子 略号四〇〇円 強烈責め被虐の果て 大手札五枚一組 略号八〇〇円 梨花悠紀子 略号八〇〇円 踊り子の美しき緊縛 大手札三枚一組 略号五〇〇円 絹川 文代 略号五〇〇円 股間縛りの法悦境 大手札三枚一組 略号五〇〇円 絹川 文代 略号五〇〇円 相撲 禪 着用の艶姿 大手札三枚一組 略号五〇〇円 美木乃々子 略号五〇〇円	六尺 禪 着用の艶姿 大手札七枚一組 略号一〇〇〇円 美木乃々子 略号一〇〇〇円 パリスSSバンド着用 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 サカエメンスバンド着用 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 サカエ軽便型バンド着用 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 パリスメンスバンド前開き 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 携帯用白色メンスバンド着用 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 パリスバンド着用縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 パリアメンスバンド着用 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 相撲 禪 を締めた女 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 メンスバンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 略号五〇〇円 東浦ひかる 略号五〇〇円 黒ゴム衣後手縛り 大手札三枚一組 略号五〇〇円 木村 洋子 略号五〇〇円 ゴム衣緊縛悶悦姿 大手札三枚一組 略号七〇〇円 木村 洋子 略号七〇〇円	ゴム衣とゴムの猿ぐつわ 大手札三枚一組 略号五〇〇円 木村 洋子 略号五〇〇円 甘美なる椅子プレイ 大手札四枚一組 略号六〇〇円 中河 恵子 略号六〇〇円 開股拷問椅子の正面責め 大手札四枚一組 略号六〇〇円 中河 恵子 略号六〇〇円 オムツ着用の股間縛り 大手札四枚一組 略号六〇〇円 東浦ひかる 略号六〇〇円 オムツ着用フェチフォト 大手札七枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号一〇〇〇円 オシメをつける二人プレイ 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円 山原・東浦 略号一〇〇〇円 ゴムのオムツカパー強制着用 大手札六枚一組 略号一〇〇〇円 山原・東浦 略号一〇〇〇円 生ゴムの猿ぐつわ責め 大手札四枚一組 略号五〇〇円 木村 洋子 略号五〇〇円 オシメ着用と女学生 大手札七枚一組 略号一〇〇〇円 大塚 啓子 略号一〇〇〇円 六尺フンドシの女性像 大手札四枚一組 略号六〇〇円 関谷富佐子 略号六〇〇円 黒フンドシを着用した女 大手札四枚一組 略号六〇〇円 大塚 啓子 略号六〇〇円 黒フンドシの女(背面) 大手札三枚一組 略号五〇〇円 遠藤百合子 略号五〇〇円	黒フンドシの女(正面) 大手札三枚一組 略号五〇〇円 遠藤百合子 略号五〇〇円 黒フンドシを誇る姿 大手札三枚一組 略号五〇〇円 遠藤百合子 略号五〇〇円 黒フンドシ背面刺青模様 大手札三枚一組 略号五〇〇円 山原 清子 略号五〇〇円 黒フンドシ入墨姿 大手札三枚一組 略号五〇〇円 山原 清子 略号五〇〇円 黒ふんどし媚態の魅力 大手札五枚一組 略号七〇〇円 山原 清子 略号七〇〇円 白晒六尺フンドシの姿 大手札五枚一組 略号七〇〇円 刑部 典子 略号七〇〇円 黒六尺フンドシを締めた女 大手札五枚一組 略号七〇〇円 刑部 典子 略号七〇〇円 フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号五〇〇円 栗本 ミチ 略号五〇〇円 フンドシ姿の女の魅力 大手札三枚一組 略号五〇〇円 栗本 ミチ 略号五〇〇円 六尺 禪 の羞らい 大手札五枚一組 略号七〇〇円 横尾 峯子 略号七〇〇円 双臀に喰い込む禪 大手札五枚一組 略号七〇〇円 横尾 峯子 略号七〇〇円 禪 美に羞じらう女 大手札六枚一組 略号八〇〇円 玉田美佐子 略号八〇〇円
---	---	--	--

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

SM組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円

十組十枚 一五〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇円

百組全部百枚 八〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新し
いマゾ女性の方が、清纯に或は妖
艶に、それぞれその個性にマツチ
した縛られ方責められ方をされて
甘い吐息を洩しています。マニア
の方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な
資料を加えて頂きたく、ここにS
Mの香ぐわしい魅力に溢れるニ
ュ
ー
フ
ォ
ト
を
提
供
い
た
し
ま
す。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 章子)
2 柱に晒す全裸女(玉木 章子)
3 猿轡に呻く縛女(玉木 章子)
4 開股縛りの片足(玉木 章子)
5 菱縄縛りに泣く(玉木 章子)
6 右足挙げ柱縛り(玉木 章子)
7 日陰の女の羞恥(玉木 章子)
8 開股責めの正面(玉木 章子)
9 八の字開脚責め(玉木 章子)

10 乳房縛り真正面(玉木 章子)
11 開股縛りの強要(玉木 章子)
12 正座正面晒縛り(玉木 章子)
13 バイブ責め姿態(玉木 章子)
14 絶叫！開脚責め(玉木 章子)
15 手吊り足吊り責(玉木 章子)
16 臀部からの苛虐(玉木 章子)
17 正面で足を開く(玉木 章子)
18 卓上の開股痴態(玉木 章子)
19 縄は女を泣かす(玉木 章子)
20 強烈縛りに開脚(玉木 章子)
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)
23 強制する開股責(江口 淑子)
24 辱恥をさらける(江口 淑子)
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)
27 耐久力ガシ責め(江口 淑子)
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)
41 足の裏の温い女(深田 菊子)
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)
44 強制開股椅子責(深田 菊子)
45 交叉した手首結(深田 菊子)
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)
47 のけぞる両の足(深田 菊子)
48 開股で見ないで(深田 菊子)
49 縄轡海老責め(三浦 純子)
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)
51 引回された裸女(福井 桃子)
52 色気発散の脚線(福井 桃子)
53 さあどうするの(福井 桃子)
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)
56 高小手臀部晒(福井 桃子)
57 長髪的美女緊縛(福井 桃子)
58 縛られてお喋り(福井 桃子)
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)
60 高々と上る手首(福井 桃子)
61 ボリウムを括る(笠井奈保子)
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)
67 首縄高小手縛(笠井奈保子)
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)
71 美少女逆エビ責(前田真知子)
72 足吊りくの字指(前田真知子)
73 股間縛りで開脚(前田真知子)
74 交差した後手首(前田真知子)
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)
77 高々と後手縛り(松本 たえ)
78 強烈海老開股責(松本 たえ)
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)
81 責められた乱髪(大塚 啓子)
82 後手縛り足吊り(大塚 啓子)
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)
84 太ロープ首縄責(大塚 啓子)
85 麻縄亀甲綾縛り(荒尾 慶子)
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)
96 半減した浣腸液(長井葉津子)
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)

〔秘蔵版写真一掃分譲品〕

昭和四十年頃より四十二年頃にかけて天星社に於て分譲して、おまかせしたSM資料写真は、その後に譲り止になつておりました。最近になって再開を強く要望され、増をいたします。御注文の方には五日間位の予定で、作成の上、早速御送付申し上げます。

△Mフォト▽

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号△〇〇〇円
花田沙登子 略号△わふ▽

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わむ▽

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わら▽

女王様の臀臭をかかす

大手札二枚一組 略号△六〇〇円
花田沙登子 略号△わけ▽

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号△八〇〇円
花田沙登子 略号△わな▽

女王様の牡犬調教

大手札八枚一組 略号△一五〇〇円
花田沙登子 略号△わね▽

△入墨女賊拷問刑罰集▽

女賊仰向け木馬責め 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よひ▽

全裸の入墨女賊折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

入墨女答打ち白洲糾問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よゆ▽

ハリツケ女賊拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よめ▽

凄絶エビ責め拷問

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よす▽

全裸の四つ這い木馬責

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よも▽

逆さ吊りのお仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よき▽

大の字磔女賊処刑

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よさ▽

△日本女性拷問刑罰集▽

三角木馬責め 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もと▽

石抱き算盤責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もへ▽

凄惨女囚海老責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もに▽

女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もち▽

白洲答打ち折檻

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽

非情の囚女開股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

美木乃々子 略号△もぬ▽

土壇で胴斬りの仕置

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もり▽

白洲調べに悶える囚女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
美木乃々子 略号△もは▽

△M写真M場面決定版▽

裸女二人の尻の下にうごめく 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まふ▽

二女にいじめられるM男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まも▽

美女二人から縛られる男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まね▽

男馬を乗り潰す裸女二人

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まめ▽

痛烈、ムチ打ちの馳走

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まれ▽

首絞めでM男に止どめを刺す

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まむ▽

汚臭と足舐めの強要

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
大塚・山原 略号△まり▽

二女の臀臭にむせび泣く男

大手札十二枚一組 略号△三〇〇〇円
山原・大塚 略号△まみ▽

パンプスの下に喘ぐM男

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△わそ▽

豊満な太股で首を股責め

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円

大塚 啓子 略号△わよ▽

男奴隷緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△わた▽

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号△一〇〇〇円
大塚 啓子 略号△らも▽

△女体切腹フォト▽

腸露出無念腹切腹 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△せ10▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子 略号△ひた▽

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号△七〇〇円
大塚 啓子 略号△ひと▽

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
甘木 春子 略号△まに▽

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△れは▽

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号△一五〇〇円
大塚 啓子 略号△れみ▽

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号△二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△のせ▽

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
絹川 文代 略号△ちた▽

絹川 文代 略号△ちた▽

豊満腹を切り裂く女

大手札三枚一組 略号△五〇〇円
長野 良子 略号△ほふ▽

明瞭な臨月腹の妊娠線

大手札四枚一組 略号△りき 六〇〇円

双胎の臨月腹を鑑賞する

大手札四枚一組 略号△りけ 六〇〇円

妊婦の乳房を縛り弄ぶ

大手札四枚一組 略号△りさ 六〇〇円

妊婦後手縛り引き回し

大手札四枚一組 略号△りし 六〇〇円

亀甲縛りの臨月妊孕美

大手札四枚一組 略号△りた 六〇〇円

乳房緊縛の双胎臨月腹

大手札四枚一組 略号△りち 六〇〇円

臨月双胎蛙腹の股間縛り

大手札四枚一組 略号△りぬ 六〇〇円

浣腸される妊産婦

大手札三枚一組 略号△りひ 五〇〇円

臨月妊婦の全身像

大手札二枚一組 略号△りせ 四〇〇円

臨月妊婦腹の側面

大手札三枚一組 略号△りそ 五〇〇円

妊婦臨月腹のアップ

大手札二枚一組 略号△りと 四〇〇円

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号△おに 六〇〇円

膨満の妊娠腹の緊縛

大手札四枚一組 略号△おみ 六〇〇円

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号△わう 六〇〇円

八力月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号△わの 六〇〇円

妊婦腹誇張の開股縛り

大手札四枚一組 略号△わえ 六〇〇円

妊孕美人の媚態立像

大手札四枚一組 略号△わお 六〇〇円

妊孕美人の媚態坐像

大手札四枚一組 略号△わき 六〇〇円

両手吊り片足挙げの妊婦

大手札四枚一組 略号△わく 六〇〇円

両手吊り妊婦の正面

大手札四枚一組 略号△わす 六〇〇円

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号△わせ 六〇〇円

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号△わち 六〇〇円

臨月の妊婦三態

大手札三枚一組 略号△よむ 五〇〇円

動物的な臨月妊婦の腹

大手札三枚一組 略号△よみ 五〇〇円

産み月の膨大な腹

大手札三枚一組 略号△よま 五〇〇円

安原さゆりの妊婦腹

大手札四枚一組 略号△よは 六〇〇円

ころがされた緊縛の妊婦

大手札四枚一組 略号△よほ 六〇〇円

臨月妊婦の革紐縛り

大手札四枚一組 略号△よに 六〇〇円

見事に美しい臨月腹妊婦

大手札四枚一組 略号△よち 六〇〇円

臨月の妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 略号△よら 六〇〇円

臨月の妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 略号△よへ 六〇〇円

九力月妊婦全裸正面立像

大手札三枚一組 略号△のま 五〇〇円

羞うつ妊婦の裸身前向立像

大手札三枚一組 略号△のめ 五〇〇円

九力月の妊婦腹を晒す

大手札三枚一組 略号△のや 五〇〇円

九力月の妊娠腹を縛る

大手札三枚一組 略号△のこ 五〇〇円

便々たる太鼓腹に縄掛け

大手札三枚一組 略号△のし 五〇〇円

膨満腹も露わな両手挙げ縛り

大手札三枚一組 略号△のろ 五〇〇円

竹棒責めに喘ぐ九力月妊婦

大手札三枚一組 略号△のは 五〇〇円

十文字縛りの妊婦腹

大手札三枚一組 略号△のに 五〇〇円

柱縛りに苦しむ九力月の妊婦

大手札三枚一組 略号△のほ 五〇〇円

開股責めと椅子縛りの妊婦

大手札三枚一組 略号△のへ 五〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 略号△こふ 五〇〇円

猿轡につめく臨月妊婦腹

大手札三枚一組 略号△この 五〇〇円

革紐による臨月腹股間縛り

大手札三枚一組 略号△こや 五〇〇円

逆さ吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さめ 五〇〇円

両手吊りの臨月妊婦

大手札三枚一組 略号△さも 五〇〇円

強烈縛り妊婦責め

大手札三枚一組 略号△さる 五〇〇円

妊婦全裸縛りの全身

大手札三枚一組 略号△さに 五〇〇円



○ 私は結婚歴が過去にあります但未だに女の喜びを味わったことがありません。原因はわからないまま、奇クを読むことが唯一の喜びとなっていました。こんな私でよかったですら、どなたか私をおもいきり恥ずかしめて下さい。編集部の方にお願いしようかとも思いましたが、遠くの読者はお相手くだらないようなので、こうして皆様にお願ひするのです。いろんな写真もみたいし、変なお話も聞きたいと思っている二十四才のOLです。よろしくお願ひします。

(千葉県松戸市・花井美恵子)

○ 私はサラリーマンで25才の男性

です。数年前からSMに魅せられその後、自分のそういう性癖を恥かしく思い、消そう消そうと努め、女性との正常な交際とか、スポーツとか、車とかに集中しようとしたが何故か虚しく白々しい思いが心の底に残りました。それはSMプレイに一番興味があるのに、それを抑圧し続けて来たからです。昼間は会社で真面目に働きます。常識的で理性的な方ですが、夜になると昼の自分が如何に偽善的であるか、いかにでたらめで嘘つきかと情なく思います。今は自分の性癖を消す努力をやめ、もう少し良くなるには、もう少し悪くなれと言われる様に、自分の最も興味ある事を実践し、真の自分を、じっくり見つめ直したいと思っています。先輩諸氏の御指導をお願いします。

(大阪府四条畷市・村川久三)

○ 実を言いますと私、貴誌を始めて眼にした頃の新鮮な衝撃が現在では薄れつつあります。どうも近頃では、おざなりでしか読めない

でいます。刺戟の慣れからくる一種のマンネリだと思っています。だったら読むのを止めると、つっぱねられると、優柔不断で、それもできかねています。言ってみれば岐路に立っている私ですが、今さら引き返す気にもなれません。なにか動物の衝動を抑えようもありませんもの。本を読むだけのマニアが、より強い刺戟を求めて進む道は、貴誌を指南番としながら、本能のおもむくまま、そこで地獄に極楽か知らぬが、体験的SMFにつかかってゆくしかないのでしょうか。大海に船出する小舟を前にして思案投げ首のM的フェチストのつぶやき……。私がM的フェチストと書いたのは、やむを得ません。孤独の私にはM的行為(例えば自縛)やF的行為(例えば異性の下着拾集)は自分で満足できませんが、S的行為は、おおむね相手が必要ですから、そうもいきません。孤独の欲求不満がついつい余計なことを書いてしまいました。

(岡山市・出石高)

○ 京都の山村園子様。貴女の読通拝見しました。私は京都には未だに日本の情緒があり、しおらしい女性がいるのではないかと思って

います。貴女を目も眩む様な官能的な羞恥の世界へ案内したいと思えます。貴女の羞恥に染まった肌を眺め、そして白い肌の体を、貴女の口から一つずつ説明してもらうのです。貴女の一番恥かしい部分は、特に詳細に説明してもらおうことになるでしょう。貴女の空想と私の夢とを、交換してみませんか。貴女は、「こんな恥かしい目に合ってみたい。こんな恥かしい恰好で浣腸をされてみたい」と手紙に書いて、そして二人のプレイを試してみませんか。貴女を机の上に乗せて左手と左足、右手と右足を縛り、そして大筆で貴女を喜ばした後、その恰好で浣腸をしてみたいと思っています。私は貴女に自分の体のバスガイドをさせたいと思っています。貴女の恥かしい手紙を待っています。

(吹田市・A・O生)

○ はじめてお便りします。僕は20才でMに関心をもっています。どなたか年上の方でSMを指導して下さい方は、いらっしゃらないでしょうか。僕は一六五cmで、人からは太田博之に似ているといわれています。SMについての知識はほとんどありませんが、そんな僕

でも、やさしく、そしてきびしく指導してペットにしてみたい。でしようか。(神戸市・野田宏)

○ 数年前の海外旅行の時、米国である男と親しくなり、バーで酔いつぶれる程、酒を飲み、そのまま近所だという、その男のアパートへ、ところが込みました。その男は親切に酔った私の上衣を脱がしてくれ、ズボンをとってくれ、下着までも、いつの間にか脱がせてしまいました。酔った頭の中で気がついた時は遅く、男が後から抱きついてきました。抵抗している間に男は出してしまい、私は危うく強姦？を逃れました。ある時は共同シャワー室で尻を撫でられどなってやった事もあります。そしてホモの意外に多い事を身をもって知りました。ホモに興味を持

● 御送金についてのお願い ●
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もあり、普通小為替の利用が便利です。切手代用にも結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

ちませんでした。いつの間にかアヌスへの興味を持ってしまいました。さて10月号の山村園子様。私は27才の男性で未婚。一六六cm六〇kg。京都へは車で一時間半の所に住んでいます。SMプレイの経験はありませんが、奇くで見るような浣腸プレイ、縄責め、羞恥責め等が好きです。又、京都の神社仏閣を見て回るのも好きです。是非、お友達になりたいと思います。(兵庫県多紀郡・高杉竜之助)

○ 私は三十三才になる妻帯者で、貴誌のここ数年来の愛読者です。いつも奇クサロンとか読者通信を読み、こうした欄に登場する方とお友達になりたいと思っています。妻は二十八才で子供が一人あります。私は自分の妻が自分の目の前で素裸にされて犯されるのを見て最高の悦楽を感じる者です。どなたか二十才から四十代までの方で私の妻を責めて下さる方はおられませんか。私はそうした方と御交際いたしたいと思っています。(広島市・中田加左夫)

○ 私は今年三十五才の結婚歴のある女性です。五年前より奇クを愛読しております。最初の頃は余り

関心がなかったのですがSMプレイを経験してからは非常に興味を持ちはじめ、最近では欠かさず求めております。子供がいないままの一人暮らしなので、この頃は一層SMプレイがしたくてなりません。前夫と協議離婚して数年になりましたが、離婚の原因は私に子供が来ず夫が他の女に子供を作ったからです。それ以後、十数人の男性と交際しましたが、その中の一人が大の奇クファンで、私も生れて始めてSMプレイというものを経験しました。その人とは、ある事情で長続きしなかったのですが、今では欲求不満のかたまりになっている私です。縛り、浣腸、剃毛、アナルセックスなどを特にされたいと思っています。くすぐり責めやムチ打ちも相手の方が望むのなら、されてもいいです。それから一対一のSMプレイばかりでなく三人プレイとか四人プレイにも憧れを持っています。経験は一度もありません。雑誌を読んでいる時は空想だけ盛んになります。実際には、どの程度、出来るものか自信がありません。でも、女の盛りも、そういう迄、続くわけでもありませんので、今のうちに素晴らしいSMプレイを思いきり楽しんでみたいと思っています。九月号から連載されはじめた鈴鹿晶子さんの「ソ連兵の餌食になる日本女性」興味を持って読みました。十月号では「汚辱にまみれた身体検査」で、この後がどのようなものか楽しみです。奇クモデルになれたらと願っていますが無理でしようね。(滋賀県・横田良子)

○ 私が編集長あてにお出した手紙が、はからずも九月号の奇クサロンに載せていただいていた。たくさん読者の方々からお便りをいただき、有りがとうございました。それから東京都品川区の小山勝さまからは四冊の御本をお送り下さいまして本当にうれしく存じます。二十年前に始めて奇クを手に入れたことですが、その頃の私は、まだよちよち歩きの幼児だったかもしれせん。御厚意うれしく、楽しみに拝見させていただきます。

○ (神戸市・宇津木清子)
私の目標は、男を実力で抑えつけることのできる女になることである。私を女性としては特異なSに傾けさせた要因は、一口に先天的とは言えぬものがある。高一の

夏より武道をたしなんでいるが、この護身術によってSMへの興をそそられたのである。高二のとき生れて始めて痴漢というものに出会った。若い女の子は必ず一度は経験するというが、私の場合は、むしろこのショッキングな体験が大きく私の命運を左右したのである。性癖というものが、たとえ先天的なものであっても、それ自身が埋没している場合には全く意味をなさない。むしろ強烈な起爆剤に出合うことがパースナリティ形成の重大なファクターになってくることから後天的とすら言える程である。SMは、このように明確に成育状況を探査し分類するものではないし、S性M性という定義も矛盾を露呈するものにしか値しないであろう。考えるべきは昨今のSMブームであろう。全くお話にならないエログロに「SM」という肩書きを与えているライヤ・ライターに、まどわされてはならない。SMを、いかに評価するか、いかにエンジョイするかは全て自分の自由な嗜好である。私のS人生では、股間を覆って苦悶する若い暴漢の醜惡な姿が、凝縮された象徴として、指針になるだろう。その意味では機先を制して

突き上げた私の太腿が、小さな、しかも最も情熱的な運命のドアを開いたといえるのである。週刊誌で初のスタント・ウーマンが誕生したとあり、男を蹴上げるグラビアに思わず興奮したが、やはりSMの究極的な理想は例えばジャンヌ・ダルクの文献を読みながらオナニーにふけるような優れた直感的マゾヒストとの重厚なプレイによってのみ醸成されると、確信している。

（大阪市旭区・高橋千寿代）

私は21才になる男子。今年の八月に偶然、本屋で奇譚クラブを初めて手にして、内容の良さにびっくりしました。今までSM関係の本は本屋で立ち読みしていましたが、従来のヌード雑誌等に只、縄をかけてSM何とか言っているだけの底の浅いもので、買う気がしませんでした。奇譚クラブは充実したりアル感があり、非常に感激しました。10月号の京都市東山区の山村園子さんのようなM傾向の女をアグラ縛りにして、浣腸責、排泄責にしたいと思います。出来るだけ我慢させて、その場に排泄させるといふことは、考えただけでも胸が、わくわくします。

（三重県・稻生弘）

十月号で宮田信正氏の書かれた「女と犬の性について」は興味深く拝見しました。私は、こうした経験については何もないのですが氏が妻女に対して、こうした性の解決方法を行っておられることに非常に興奮し、いろいろと想像を逞しくしています。未亡人などでそうしたペット的な小犬を飼っている話を、よく聞きますが、宮田氏の告白は、夫婦間の秘事なので大いに関心を持ちました。その後の体験について、引続いてお書き願えれば、うれしいです。

（千葉県・川本克己）

関冬子さん。貴女は御主人にかかれて奇クを読んでいられるようですが、私はそんな人妻の方が大好きです。私は貴方より二つ下の二十六才のS男性。独身、プレイ経験はありません。奇クは愛読し始めて七年になりますが、最近SM雑誌が輩出しているにつけても奇クの偉大さが、つくづくと感じられます。奇クのことやSMについて話し合えたら、楽しいだろうと思います。是非、私とお友達になつて下さい。

（東京都品川区・朝田津根夫）

昨日、東京の小山勝様と申されます方から、編集部経由にて小包拝受。なかには、私が集め出す以前の奇クの古い記事がございました、大変興味深く読ませて頂きました。小包をお送り下さいましたことにつきましては、大変うれしかったですのですが、小包など私宛には送って頂きたくないのです。と申しますのは、小さなアパートの入口の前に小包がおかれて、それが他人の目にふれたら、私は困るのです。以前にも申しました様に私が奇クの読者であることを他の人には知られたくないのです。ましてや、アパートの人々に知られてしましましたら、私はもうここには居られないかも知れません。封書は玄関の扉にあります郵便受口から入れられますので、人目につくことは先ずございませんが、小包は、やはり困ります。私は小山様の御厚志を、ないがしろにする気持は毛頭ございません。それどころか、この様な私に同じ読者として始めてお便り下さいました方としまして、いつまでも心の内に小山様のお名前をしまっておきたいと思ひます。小山様の御好意

○

私は今回、初めてお便りを出しました。今まで一人で貴誌を読んできましたが、やはり話相手がな
いということ、さみしいことで

(愛知・熱田次郎)

○

東京の関冬子様、京都の山村園子様。毎朝の浣腸洗滌、習慣とはおそれ入ります。失礼ですが女性は大便秘症ですから、そうそうの浣腸は大変なことですね。この種のもので、イチジクよりもっと、よいものをおえらびなさった方がよいと思います。種々あります。浣腸プレイ程すばらしい羞恥心に満ちたプレイは他にないでしょう。浣腸は他人にやってもらってもよいものであり、個人プレイほど、味気ないものはありません。イチジクだけの願望は、つまらないプレイです。また、縛りを入れての浣腸プレイは、一人ではできません。やはり奇ク誌より考えられることは、はずかしめにたえてこそ、プレイ後の楽しみと安楽が求められるのです。関様には年令的にSM的願望は殆ど関係なく何才になっても、この道のよいことは

す。本誌ご発表の河本光三先生の貞操帯など、いかがですか。ご遠慮なく、お二人様、お呼びかけ下さいませ。
(榊幹男)

〔榭幹男〕

○ 小生は三十八才、妻三十二才。

毎週日曜日の夜は妻とSMPプレイを行っております。妻をロープで後手高手小手、首から亀甲股割り、十分につまみかけ、小生のおもちやとして、筆によるクスグリ、口による急所責め等を約一時間は、たっぷり責め続け、緊縛のまま今度は口による、おしゃぶりをさせます。また次週は小形のバイブ（小生改造）を体に入れさせ、皮の責め具をつけさせて夕涼みに散歩に出かけますが、体の中のバイブが妻を、よれよれにしてしまいますので家に帰ると妻は歩きもならず玄関にへたりこんでしまいます。そんな妻を抱き上げベッドに行き十分なマッサージを致します。私どものSMPプレイにつきましてお気づきになりましたことがありましたら、諸兄のご意見をお寄せ下さい。
(名古屋・責大造)

○ 京都のバスガイドの山村園子様
十月号の貴女の通信を拝見いたしました。貴女は浣腸が好きでSMにも興味があるとのことですね。ぼくも数年前からSMに興味を持ち、いままでにも女性を縛ったこともあります。ところで園子さん

総天然色カラー新作女体緊縛資料

カラートリプルに依るM女の美しくも可憐な姿態を皆様のコレクションの一端にお加え下さい。いずれも各組極鮮明な大手札判プリント三枚一組一〇〇〇円です。

アグラ縛りに悶える美女

前田真知子 略号／まへ

襟り責めに呻く美女

前田真知子 略号／まほ

悦虐の裸身を大胆に晒す

前田真知子 略号／まよ

成熟した女体のマゾの謎

前田真知子 略号／まぢ

明眸を汚すむこい縄目

前田真知子 略号／まお

全裸の開股開脚開陳縛り

深田 菊子 略号／ある

白肌と赤白まだら紐の変態

深田 菊子 略号／あり

浣腸と緊縛の弄戯

福井 桃子 略号／あや

縛りの羞恥に喘ぐ乙女

笠井奈保子 略号／あむ

羞らいのルツボの中で呻く

笠井奈保子 略号／あも

衆人に晒された緊縛女体

笠井奈保子 略号／あめ

猿ぐつわに悶えるマゾ女

笠井奈保子 略号／あみ

(奈良市・東町一郎)

全裸で見せる挑発の狂態

松本 たえ 略号／あき

強烈な後手縛り展開

松本 たえ 略号／あい

臨月腹緊縛の発端

福井 桃子 略号／あろ

便々たる太鼓腹を縛る

福井 桃子 略号／あね

拘束された臨月の蛙腹

福井 桃子 略号／あれ

蛙腹に強烈な縄目を掛ける

福井 桃子 略号／あよ

海老責めの後手吊り

江口 淑子 略号／あお

苦痛と喜悅の不思議な交錯

江口 淑子 略号／あわ

○ 突然、沢田路夫様にお呼びかけ失礼かと思いますが、実は小生も貴方様と同じ気持を持っていますのです。というのは、若い独身の娘さんよりも主婦の方（三十才―四十五才ぐらい）の豊満な女性が好きです。特に、お尻に関心を持っており、街などへ出て、豊満なお尻を見かけると、思わず豊満なヒップにかぶりつきたくなります。その点、沢田様は立派な大柄の奥様をもたれて羨ましい限りです。貴方様が自慢なされる通

り美人で、特に私が好むお尻など写真で拝見すると、弾力も艶もあり、生つばが出る思いです。ああこんな奥様のお尻へ顔を埋めてみたら、いい気持だろうなあと一人空想する毎日です。でも、小生みたいな考えを持っているのは異常かなあと思っていました。小生と同じ思いの方が誌上に名乗りを上げて下さったことは、大変、嬉しく感謝しています。どうか今後奥様のお尻を誌上にのせて下さるようお願いいたします。

(東京都・八木茂雄)

辻村隆センセの排泄戯考は近頃の快作。なつかしい人々が続々、登場し、自家製資料と対照して楽しんだのは私一人ではないでしょう。さて、奇ク永遠の恋人は梨花悠紀子さん。彼女が欠けたのは、ちと残念です。夢魔なる伊吹真砂子さんとのプレイ記録が未だ発表されず、最近の氏とのそれも公開をはばかるとあっては、せつないことです。悠紀子さん、どうぞ戻って下さい、誌上に。顔は隠れても仕方ないでしょう。ところで、渡辺好美さんと森川美紗子さんのWプレイは初耳。改めて発表するというが、できるだけ早く願いたいものです。辻村センセが、ぐずついているのだったら、何度か書かれた渡部さんに再び登場されるように希望します。読者の三木令子さん、望月百合子さんの素てきな浣腸プレイが今月中に本誌をうずめつくすよう、奇ク神にお祈りします。(横浜市・東町九郎)

○ 全国の愛読者の中にも数々のS Mファンが多いことと思います。小生は結婚二十年、子供も大きくなり巣立ち、新婚の当時の如く夫婦二人で暮している会社員です。最近、オムツ愛好者が割合、多い

のに驚いています。実は私達夫婦は毎日、二人とも使用しているのですが、なかなかよいものです。時々浣腸プレイのあと、オムツをあててその上へ排泄する感じは、四十数年前のベビー時代にかえったようです。オムツは大人用に大きく作っています。現在、家内はオムツを洗って乾燥させるのに困っているらしいですが、一部屋あいているので乾燥室に使って、大人用オムツが常に二十枚から三十枚、オムツカバーも大型のビニール製、生ゴム製など四、五枚など網に干して満艦飾のようです。オムツも大人用に大きく作り、何枚も重ねてぞうきん状に厚く縫ったものは夜間用に使っています。昼間用は薄いのを二枚位、重ねて使っています。親類の老人が時に来泊したとき、一式を出して使ってもらうこともあります。そのためかどうかしりませんが、喜んで安心して泊って行きます。また、家内とお互いに浣腸し合って、どちらが我慢強いかに競走していますが、そのために家内の膣筋の訓練ができて一石二鳥です。日本国内には交通事故の後遺症患者やスモン病その他、半身不随の人がふえて、いずれ一億総オムツ時代がやがて

来ると思います。どこの家でも平気で大人用のオムツが干される日も、そう遠くないと思います。薬局の話ですが、現在でも大人用のオムツカバーの売れ行がよいそうです。大人用のオシメ及びオシメカバーも更に良いものが改良される日が将来、来ると思います。奈良の福田様、長野の押目好夫様などの大先輩に続くファンが多くなると思います。また、就寝のとき夫婦でオシメ当てごっこをするのも、なかなか楽しみなものです。大きな赤ちゃんが、オシメをかえられている光景を御想像して下さい。きっとフエチでなくても誰でも多少の感懐を覚えることでしょう。そして、きつと夫婦円満になることでしょう。メーカーは大いに量産体制を作り、各種色々派手なもの、セックスアピールする柄のものを製作することが良いと思います。(新潟・陸月ノ夫)

○ 小杉千恵様、お返事ありがとうございます。ごさいます。実の処、お返事いただけるとは思ってもいませんでした。私は、まだ緊縛をした経験はありませんが、一度でいいから女性を縛ってみたいと思っております。

す。そして、その女性の表情を色々の角度から写真に撮りたいと願っております。特に浣腸をして悶える時の表情が撮りたいのです。私は思うのですが、女性は羞恥責めをするのが一番だと思います。それは羞恥責めをして悶えるところなどは女性の中の女というものではないでしょうか。女性が羞恥感というものを取り去れば何が残るでしょうか。女性が恥かしがるから責める値打ちがあるのです。千恵様一度、私の手で羞恥責めにあってみませんか。私は貴女の知らないもう一人の貴女を引き出してみたいのです。ぜひ、私の夢を実現させて下さい。千恵様なら、必ず実現させて下さることを信じて、お返事お待ちしております。

(尼崎・坂田展明)

○ 小生は結婚して十六年、妻も私も三十八才です。奇クを読みはじめて十数年になります。妻は時々見ては「こんな縛りはいいな」なんて言っております。が、未だ縛りは一度も行なったことはありません。というのには、縛ってどうするのか、さっぱり分りません。でも最終的には、やはりSEXになるの

うら若き初産婦出産間際の裸身を晒す

臨月の妊孕美鑑賞

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つあV
妊娠という生理現象によって起った女性の美しさを、とことんまで追究して、その裸身をあばく。

ベッドの上の妊婦

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つあV
巨大なお腹をほうり出してベッドの上にて、いろんなポーズをとって見せる露出症気味の妊婦。

鮮明な蛙腹妊娠線

大手札三枚一組 五〇〇円

ではないですか。ですから最近では、小生の友人を交えてプレイを行っています。妻はその友人の前で立ションができるようになり、たのしくなりました。妻が他の男の前で立ションをやり、また目の前で弄られているのを見てると最高です。これで縛りがあると、なおよいのですが……。現在、妻のAが使えるように飼育中です。そして前後からサンドイッチでと考えるだけで楽しくなります。どなたか私ども夫婦と色々プレイを

南加津子 略号 八つわV
妊娠線も鮮やかに蛙腹は日を追う毎に、お臍を中心にして次第に下にさがって出産も間近だ。

突き出した太鼓腹

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つそV
息を吸い込み腰を引いて精一杯太鼓腹を前に突き出して誇張した巨腹をバッチリと狙ったフォト。

臨月の妖しき裸像

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つこV
たおやかな女体の腹部と乳房が異様なまでに膨隆して裸身に醸しだす妖しいムードをおさめた。

やってあそんでみようと思われる方、お便り下さい。妻は四十才近くとなり、体重も四十五キロそこそこで肉体的には駄目ですが、アレは最高です。九月号奇クサロンの名古屋、田中様。犬と家内の写真を書いて下さい。東京の内山好雄様、初心者どうし、色々やってみませんか。名古屋の縛好雄様。岡崎の美加輪様、東京の山本正夫様。どうでしょうか、妻を調教して見て下されば、面白いと思います。それから、写真のDPEの出

開股する若き妊婦

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つちV
便々たる妊娠腹をさらしながら左右の足を八の字に自ら開いて、妊娠した女性の悦楽に酔うのだ。

臨月太鼓腹の神秘

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つてV
妊娠した若き女性の神秘を、これほど間近に、しげしげと眺めることが出来るのは今だ。

羞らう全裸の妊婦

大手札三枚一組 略号 五〇〇円
南加津子 略号 八つらV
只でさえ裸になるのは恥かしい若き女性が、異様なまでに膨らんだ腹部をさらして恥かしがった。

来る方、お便り下さい。できたら色々、写してみたいと思います。色々、アイデアもありますから。
(一宮市・尾張好雄)

○
山村園子様、関冬子様。ぜひ、貴女たちを責めたいと思っています。す。剃毛、浣腸、バイブ責めなど色々羞恥責めにして上げることがきりがないほど、たくさんあります。しかし、ぼくは本当のところまだプレイをしたことがないのです。こんなプレイに素人のぼくで

もよかつたらぜひお便り下さい。ぼくは今まで京都市内に住んでいましたが、現在は宇治市の方へ引っ越してきました。
(宇治・サド男)

○

東大阪市の小田幸子様。サド・レディス・クラブを結成された由私たちがマゾどもにとっては、まことにありがたいニュースだと思えます。あなた様方、勇敢な方々が導火栓となり、全国のサドレディスクラブの支部ができることになれば本当にたのしいであろうと思います。二十二才のリーダーの女性、すでに六人の男を人間便器にされたとか。私は人間便器志望者の一人として、七人目、いや今頃は、もっと増えているかもしれない。でも、使用していませんが、ぜひ一度、使用してみたい。ただきいたものと思えます。以前、美しい女王様の便器としてお仕えたことがございますが、たとえ、部屋の中であらうと一滴も洩らしたりはしませんでした。今は嫁いでしまわれた女王様をお慰びして淋しい思いをしておられます。仰臥してヤカンのぬるま湯を連続して滴らせても外にもさらさないトレーニングを続けながら、新しい女王様の御出現をお待ちして

いる日常であります。クラブの女王様方で、ぜひ日頃のトレーニングの成果をお試しになっていただ

☆白豚豊満美緊縛

剃毛の白丘を晒す

大手札三枚一組 五〇〇円
略号八むぼ
苗木陽子 略号八むぼ
剃毛責めによって、あれ程の狂態を示した陽子が、豊かな膨丘をあらさまに露呈して縛られた気持良さを全身で満喫している。

股間縛りのコブ玉

大手札三枚一組 五〇〇円
略号八むへ
苗木陽子 略号八むへ
ゴワゴワとした白ロープに固結び目を作った股間縛りに依って、縄と縛られることの大好きな陽子の喘ぎようは、すさまじい。

羞恥剃毛責め失神

大手札三枚一組 五〇〇円
略号八むり
苗木陽子 略号八むり
身動き出来ず縛られて剃毛されるといふ羞恥責めを受けた陽子が、真白いすべすべした肌を晒して「気持ちいい」を連発していた。

淫らな白豚を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円
略号八むぬ
苗木陽子 略号八むぬ
脂ぎった女盛りの豊かに肥えた女体を思うさまに縛り上げて、その淫らな尻、太股などを、情容赦なく、さんざんに虐め抜く。

けませんか。大阪と北陸の間は、わずか四、五時間の道程であります。お召しがあれば、すぐにでもお膝下に馳せ参じます。また、全国各地の女王様方、ぜひとも小田幸子女王様のお呼びかけにお応じになり、サド・レディス・クラブを、より大きな組織になるよう、お力添え下さい。女王様に幾倍するドレイ志願者、便器志望者が、お召しの声のかかるのをお待ちしているはずでございます。

(高岡六夫)

○ 関冬子様。私は東京の城北地区に住む三十才のS男性です。奇ク誌は、もう十年以上も愛読しておりますが、知識ばかりで実践の方は、まねごとぐらいにしかありません。私は責具を工夫して作るのが好きで、キセルの吸口を嘴管にしたエネマシンジや球形のさるぐつわ等々を考えてたのしんでおります。私は商売をやっております故、時間的にも自由がきますので、どんな方面へでも行くことができます。一度ゆっくりお話をしましょう。(東京・遊二郎)

○ SM誌を読むのは中年のM男が多いように思われますが、これは

どういうわけでしょうか。S女性の皆様方は私のような年少者はお好みでないのでしょうか。私は美しい女性の方にイジメラタイ、あるいはカワイガラレタイという願望を持っています。それは幼い頃から年上の女の子と妙な遊びをしたことが、大きく今の私に影響しているのでしょうか。妙な遊びというのは、いわゆるお医者さんごっこというもので、手っ取り早く申しますと、二、三人の近所の女の子の前で裸になって、お尻に石をはさまれて歩かされたり、おしっこを引っかけられたり、されたことです。(S女性の方からの要望がございましたら、私のこの恥かしい経験を残らず告白してその方に読んでもらえる光栄と恥辱に浸りたいとも思っているのです)

○ そういう性向を持った私が、最近この奇クを知ってから、M男として美しいお姉様に隷属したいと思っても不思議ではないでしょう。私は身長一七八、体重六八で体は大きい方ですが、顔には、まだあどけなさが残っていて、近所の奥さま方に可愛いと言われるぐらいです。こんな私を思いきりイジメたり、その後でカワイイ、カワイイと、やさしく頭を撫でてくだ

さる方は、いらっしやらないでしょうか。お願いです。この私に、お便りください。すぐにでもとんで行きます。

(姫路市・小山田明)

○ 八、九、十月号の雄松比良彦さんの「女相撲書誌拾遺」を興味深く拝見しました。綿密な調査、考証には脱帽します。ところで、江戸川乱歩の大正十五年頃の作、長編「闇に蠢く」の第八章と第十三章に、当時の浅草の風景と見世物女相撲を描写した文章があります。が、御存知でしょうか。この作は講談社版、江戸川乱歩全集。第一巻にも収録されていますが、角川文庫の乱歩作品集「一寸法師」の中にも収録されました。ほかに春陽文庫にも入っています。上記の講談社版全集・第七巻に入っている随筆「浅草趣味」の中にも、わずかですが女相撲に言及があります。八月号の須渾朔さんのエッセーも面白く読みました。谷崎作品では、大正二年作の「捨てられる迄」という作品は、地位逆転の典型的なものだと思います。

(東京・路地進介)

○ 苗木陽子さん。十一月号の貴女

次号(一月号)は十一月二十二日に発売いたします

の文章、ショックを持って読みました。私は三十五才の奇クの愛読者、貴女より数年古く十年來のファンです。貴女の様な理解ある女性とプレイ出来たら、どんなに幸せかと思ひます。妻はSMについては少しも関心がなく、むしろ嫌味さえ示します。いやいやながら従っている女を責めても一向に興味ありません。アヌス責め、ムチ打ちには共に私の最大の魅力です。責めというのは不思議な魅力を持つもので、一度この味を知ったら忘れることが出来ないものです。貴女の様な女性が、この世に存在するということだけで嬉しくなります。

(東京都千代田区・君原時夫)

初めてお便り致します。私は今年の四月に結婚しておりますが、妻はあまりSMが好きではありません。無理に行おうとすれば、極度に嫌がるので可哀そうになってプレイはしておりません。ですから私は欲求不満なのです。奇クを讀んでいると、どうしてもマゾ女性と楽しいプレイを行いたくてな

りません。私の好みとしては女性を縛り上げてから、いろいろの愛撫をしたいのです。奇ク誌上に載っている女性なんかは最高です。こんな女性と結婚したら、どんなに幸せだろうかと、今の妻との結婚を悔んでいます。11月号の巻頭口絵の山原清子さんのむくむくとふとった女体が手で吊られているのを見ると、思わず、ぞくぞくします。くすぐりでもムチ打ちでもどんな責めでも思ひのままに出来るこのポーズは、とても素晴らしいです。東京都の木崎妙子さん、このようなポーズで私に一度、責めさせて下さいませんか。

(東京都・足立靖雄)

私は某官庁に勤めるOLです。知り合った上役の彼が奇クの読者だったので、早くからSMのことを知り、プレイも経験しましたが最近になって、彼との関係も次第にうとくなり、交渉もとだえる様になりました。その淋しさから他の方とデートをしました。が、やはり一度覚えたSMの味を忘れかねています。最初の彼には口に出来

ないような羞かしいことを強要されましたが、今になって、それが懐かしくてたまりません。その時は、いやでいやで仕方なかったのですが不思議なものです。モデルになるような勇氣はございませんが写真にとってほしい気持は強くなります。今まで経験しました責めは、くすぐり責め、バイブ責め、縛り、剃毛責め、アナル責めなどです。奇クでカメラルポなんかを見ていますと、変った責め方をしたいと心のうちでは考えます。10月号の「天神祭に來た女」の木村洋子さんには大変興奮いたしました。私もあのようにしてほしいと強く思います。土曜日の午後から日曜にかけて、私をいじめ下さる男性の方、いらっしゃらないでしょうか。

(大阪市・片桐久子)

塚本鉄三氏へ。私達は結婚して三年になります。奇クファンであるとともに、貴男の大ファンでもあります。妻は二十二才ですが徐々にM化されております。無理なお願いかもしれませんが、妻を一度責めてやって下さい。妻はM性が強いのですが、私ではうまく責めぬことが出来ないのです。

アブセックスに二人とも興味を抱きつつ、いつも不完全燃焼で終わってしまいます。どうか貴男の手で十分にいじめ抜いてやってほしいのです。それから、女性の責められてゐる写真も一度、二人で見たいと思っています。また、妻を責めるときは私に助手をさせて下さい。写真にとられて、誌上に発表下さってもかまいません。勝手なお便りですが、もしお氣に召したら、いつなりと、お願いいたします。

(千葉県松戸市・村井 弘)

十一月号拝見致しました。最近数号にわたってグラビヤにMフォトのあるのを楽しく拝見しています。十一月号の「腎臭を嗅がす」は、すばらしい。男の顔の口と鼻がほとんど、お尻の下にふさがれ女性の勝ち誇ったような顔。「さあ、どうだ。どんなに臭いか、思い知ったか」と言わんばかりの顔つきが大変、魅力的です。今までのMフォトでは逆騎乗が多く、このような形での騎乗は殆どないだけに価値のあるものと思ひます。今後このような形の顔面騎乗の絵やフォトをどしどしおして下さい。次に春日ルミ女史の文、これも楽しく読ませて頂いています。

十一月号では下穿きをつけず男の顔の上に跨がられる記事が出ていますが、ルミ嬢の征服感にみちた気持と対照的に男の気持は、どんなだったろうと想像するだけで胸がおどります。ルミ嬢のお尻の臭気を直接に嗅がされる男が、うらやましい限りです。次号に予定されていると思われるネクタール拝受の光景を今から楽しみにしています。そして、これも毎期待している「グラマーな猛女」(植座たき子)の猛烈なあばれぶりは全くすばらしい。六十八キロという

巨臀の下に敷きつぶされる哀れな男たち、滝のようなすさまじい排尿を浴びせかけられる男たちに限りなき羨望の念を禁じえませんか。
(京都市・上田光一)

まるい臨月の巨腹、なんと見事ではないか。南加津子さんの天使のような協力があつたればこそ、このような後世にまで残る快挙が遂げられたのだ。この記録こそは、後々までマニアの間できつと、いつまでも語りつがれることだろう。南加津子さんが自らの性向に忠実に、それこそ一糸まとわぬ全裸の姿を提供されたことが私達マニアを天国へまで導いてくれたことになるとは、それこそまた加津子さんにとっては被虐の極致とい

のことながら、塚本氏の流れるような巧みな文章が、私達をさながらその場にあらしめるように錯覚させる。適確で豊富なフォトが、何よりも具体性を以て私達ファンの胸に迫ってくる。今や塚本氏のルポは奇クの大きな柱といっても過言ではないだろう。他誌には絶対になく、それは奇クのカメラマンのマゾをさらけだした責め記録のカメラルポを期待するのは、あながち私ばかりではないだろう。塚本氏の御一考を、お願いする次第である。(東京都・綾川 実)

☆奇譚クラブ既刊号在庫一覧表☆

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り
○在庫してありますので、お申し込みは、送料は折返し急送致します。
○送料は、総代のみ前金にてお送りします。
○ご希望は、誌代多数まとめて御注文して、送金一括して上げます。
○送金一括して上げます。

☆既刊雑誌在庫案内☆

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
和	和	和	和	和	和	和
43	43	42	42	41	41	41
年	年	年	年	年	年	年
3	2	11	6	11	10	8
月	月	月	月	月	月	月
号	号	号	号	号	号	号
(送	(送	(送	(送	(送	(送	(送
共	共	共	共	共	共	共
三	三	三	三	三	三	三
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
円	円	円	円	円	円	円
(((((((

編集後記

◎本号は昭和四十八年度師走号。毎年このことながら、セツカチな号数の先走りではカラシユウテシヤナイ思い。時代の先駆者に従いて行くのはアタマがコンガラガルものらしいワイとボヤキながらも、その気になって眺め直すと思議なもので、本号巻頭のフォト美女群が、「十二月バツテン、燃えさせてくんなきゃあ、カゼひきそうどすえ」とかなんとか口々に訴えているような気がする……のは、やはりコンガラガリ症状でしょう、きつと。

◎新しいものは正月までとって置きたいのがミミツチイ族。時に構わずパツパと使いたがるのがセツカチ族。一月号を目前にして、新顔M女八苗木陽子Vを発表してしまつてケロ

リとしてゐる塚本鉄三氏……カチぶりに、チのケチ女房の気持が分つたような気になつた私。同時にミミツチイ族の血筋は争えないものらしいことも改めて知つた次第。

◎ともあれ、本年度もまた、ホンマかいなと疑わざるを得ないほどセカラシク経過した十二カ月です。が、既刊分十一冊が目の前に並んでゐるのは紛れもない現実でして、今十二冊目の号数と八通刊第三一〇号Vの数字を書きながら、本誌の年輪が又一輪殖えたことを実感しています。この小誌が三百十冊を積み上げたのも愛読者の御支持があつたればこそ。投稿、執筆、執筆者各位の熱烈な御支援のおかげ。その御期待に副うべく今後も益々……とまあ「オレ社長の代理」

(T)

読者原稿募集

告白、手記、体験

読者の皆さまが御自分で親しく体験されたことや秘められた性癖や性向について語つてみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には五千円以上の謝礼を贈ります。

小説、読物、創作

本誌の編集内容に適した異色ある力作を大いに期待いたします。すべて自作の未発表

の作品に限ります。これはと
思う作品は、必ず誌上で取り
上げます。腕だめしの意味で
ふるつて御寄せ下さい。採用
篇には五万円迄の稿料贈呈。

奇クサロン向原稿

小品、写真、挿絵、通信、
短信往来、感想、批評、読後
感、モデル編集者執筆者への
通信、夫婦プレイの報告、S
Mニュース、映画雑誌新聞か
らの見聞記など、本誌独特の
奇クサロンに適した投稿を求
めます。記念品、写真資料又
は二千元以上の謝礼を採用篇
に対して、お贈りします。

イラスト、カット

本誌の内容に適したSM画
を求めます。大きさは自由で
すが必ず白い紙に黒色で描い
て下さい。優秀な作品は誌上
に継続的に掲載の上、当方か
らテーマを与えて制作して頂
きたいと思ひます。腕に自信
のある方は、どうか、習作を
お見せ下さるようお願いす。
画料については、作品に応じ
て御相談申し上げます。

◎御応募下さいました原稿は
原則として返却の求めに応じ
ないことになつております。故
悪しからず御諒承願います。

☆本誌御購読の葉☆

予約に限り
一月分(1冊) 四〇〇円(送共)
三月分(3冊) 一二〇〇円(送共)
半年分(6冊) 二四〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

十二月号 (第二十七卷第十二号)
昭和四十八年十一月二十日 印刷
昭和四十八年十二月一日 発行

郵便番号558
大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されております。本誌は充分に注意して編集いたしております。本誌は充分に注意して編集いたしております。本誌は充分に注意して編集いたしております。